岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（7）

中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査

4

1975・3

岡山県教育委員会

序

岡山県教育委員会では，昭和44年以来中国縦貫自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査を実施していますが，これに係る調査報告書については，これまですでに第１分冊（押入西・下市瀬等７遺跡を収録），第２分冊（宮尾・久米廃寺等５遺跡を収録），第３分冊（美作国府等３遺跡）を発刊しました。

このたび，これにひき続き，第４分冊として狼谷・小中・天神原の３遺跡の調査報告書を発刊する運びとなりました。

本報告書は，かぎられた整理期間その他幾多の困難のなかで執筆，集録されたものであり，内容的には不十分な面もあるかと思いますが今後の学術研究，文化財保護の資料として活用していただければ幸と存じます。

なお，調査にあたって，日本道路公団津山工事事務所ならびに中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会をはじめ地元教育委員会，岡山県遺跡保護調査団，その他関係各位のあたたかいご協力とご指導をいただいたことに対し厚くお礼申しあげます。

昭和50年３月

岡山県教育庁文化課

課長　小　林　孝　男

例　　言

1．本調査報告書は，日本道路公団の委託により，岡山県教育委員会が実施した中国縦貫自動車道建設用地にかかる埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要である。

2．調査は，第一次整備区間（英田郡作東町から真庭郡落合町までの52.3*km*）内の25地点で，昭和44年3月久米郡久米町久米廃寺に着手して以来，昭和48年6月30日英田郡作東町高本遺跡の調査終了まで，じつに4年3ヶ月を要した。この間，整理期間がとれなかつたため膨大な資料の整理ができなかった。そこで便法として報告書は5分冊に分けて逐次刊行してゆくことにした。本調査報告書はその第4分冊である。なお第二次整備区間（真庭郡落合町から阿哲郡哲西町まで62.4*km*）は現在発掘調査中である。

3．中国縦貫自動車道埋蔵文化財保護対策委員会の設置については，昭和42年5月，岡山県考古学研究者の会からの申し入れに基づいて，対策委員に下記の諸氏を委嘱した。

勝央中学校教諭	浅野克己	（昭和47年11月～）
津山市教育委員会主事	今井　堯	（昭和44年4月～昭和46年5月）
旭第三小学校教諭	神原英朗	（昭和44年4月～昭和44年9月）
岡山大学教授	近藤義郎	（昭和47年11月～）
津山みのり学園	植月壮介	（昭和44年4月～）
院庄小学校教諭	土居　徹	（昭和44年4月～）
津山高等学校教諭	宗森英之	（昭和47年11月～）
美作考古学研究会会長	渡辺健治	（昭和44年4月～）

4．調査は，岡山県教育委員会が，埋蔵文化財保護対策委員会の助言をうけて実施した。

以下，年次ごとに構成員と，調査遺跡名をあげる，なお，担当調査員は48年度まで津山教育事務所兼務であつたため，諸般にわたり，津山教育事務所の多大のご支援ご協力を得た。

昭和44年度

			調査遺跡名
社会教育課長	富張　昇		
主幹	神野　力		
課長補佐	花房芳忠		
〃	谷口　伶		
管理係長	光嶋尚之		
文化係長	桐野嘉雄		
文化財保護主事	（故）森　忠彦	高橋　護	
指導主事	神原英朗		美作国府（第一次）
主事	河本　清		

主　事	葛原克人	枝川　陽	久米廃寺（第一次）
	泉本知秀	栗野克己	西原遺跡
津山教育事務所			
所　長	福島祐一		
庶務課長	西口秀俊		
庶務係長	小西一成		
主　事	山本　剛		
昭和45年度			
教育次長（文化課長事務取扱い）			
	三村克一		
主　幹	萩原一郎		天神原遺跡（第一次）
〃	神野　力		押入飯綱神社古墳
文化係長	光嶋尚之		押入西遺跡（第一次）
文化財係長（故）	森　忠彦		野介代遺跡
文化財保護主事	高橋　護		美作国府跡（第二次）
主　事	河本　清	中力　昭	二宮大東遺跡（第一次）
〃	橋本惣司	伊藤　晃	久米廃寺跡（第二次）
〃	泉本知秀	栗野克己	穴塚古墳
〃	柳瀬昭彦		西原遺跡
津山教育事務所			
所　長	福島祐一		
次　長	平井克己		
庶務係長	本郷恵津夫		
主　事	山本　剛		
昭和46年度			
文化課長	神野　力		
参　事	萩原一郎		
文化主幹	光嶋尚之		
文化財係長（故）	森　忠彦		
主　任	渡辺武彦		
文化財保護主査	高橋　護		天神原遺跡
主　任	大山行正		押入西遺跡
文化財保護主事	河本　清		沼古墳

主　事	橋本惣司	伊藤　晃	美作国府
〃	栗野克己	泉本知秀	二宮大東遺跡
〃	柳瀬昭彦	下沢公明	宮尾遺跡（第一次）
〃	山磨康平	井上　弘	領家遺跡
〃	岡田　博	池畑耕一	赤野遺跡（第一次）

津山教育事務所

所　長	福島祐一	
次　長	平井克己	
係　長	田中篤周	
主　事	春名　勝	難波友広

昭和47年度

教育次長（文化課長事務取扱い）

	大原利貞		
参　事	萩原一郎		
文化財主幹	富岡敬之		高本遺跡
文化主幹	原田道明		狼谷遺跡
主　任	渡辺武彦		北山古墳群
文化財二係長	岡本明郎		上相遺跡
主　任	大山行正		小中古墳群
文化財保護主事	河本　清		小中遺跡
〃	橋本惣司		平遺跡
主　事	田仲満雄	栗野克己	梶原遺跡
〃	泉本知秀	井上　弘	宮尾遺跡
〃	松本和男	山磨康平	下市瀬遺跡
〃	岡田　博	高畑知功	赤野遺跡
〃	二宮治夫		

岡山県開発公社

技師補	太田　整	戸川孝二
	大賀秋秀	林　徹也
	小林泰利	小倉辰之
	森安広之	寺坂伸生

津山教育事務所

所　長	福島祐一

次　長	赤木　茂		
庶務係長	田中篤周		
主　事	春名　勝	難波友広	

昭和48年度

教育次長（文化課長事務取扱い）

	岡田政敏		
参　事	富岡敬之		
課長補佐	水川富貴男		
文化財主幹	浅原　健		
文化係長	守屋　明		
主　任	渡辺武彦		
文化財二係長	岡本明郎		
主　任	大山行正		
文化財保護主事	河本　清	（津山市教育委員会へ出向7月1日～）	
〃	栗野克己	橋本惣司	
主　事	新東晃一	（鹿児島県教育委員会へ6月16日付）	小中遺跡
〃	田仲満男	松本和男	高本遺跡
	井上　弘	岡田　博	下市瀬遺跡
	山磨康平	高畑知功	且原遺跡
	二宮治夫	浅倉秀昭	須内遺跡（第一次）

津山教育事務所

			宮の前遺跡（第一次）
所　長	宮島久夫		備中平遺跡
次　長	赤木　茂		谷尻遺跡（第一次）
庶務係長	田中篤周		桃山遺跡（第一次）
主　事	清輔修身		植木遺跡
	難波友広		空古墳

昭和49年度

本年度は，中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を，津山教育事務所が担当することになり，調査員は文化課から津山教育事務所へ配置換となった。

文化課長	小林孝男	
参　事	富岡敬之	須内遺跡（第二次）
課長補佐	西口秀俊	宮の前遺跡（第二次）

（文化財二係長事務取扱）

主　幹	浅原　健	
主　任	光吉勝彦	
文化財保護主事	葛原克人	
〃	伊藤　晃	
主　事	枝川　陽	
〃	下沢公明	
	樋口啓子	

津山教育事務所

所　長	菱川　豪	
次　長	赤木　茂	
庶務係長	田中篤周	
主　任	大山行正	
主　事	難波友広	山本政昭
文化財保護主事	栗野克己	
主　事	田仲満雄	井上　弘
	山磨康平	高畑知功
	二宮治夫	浅倉秀昭

社会教育課

文化財保護主事	橋本惣司	

谷尻遺跡（第二次）
桃山遺跡（第二次）
戸谷遺跡
塔の畝遺跡
青地遺跡

協　力　者

各遺跡調査地周辺の地元の方々，また，津山市，作東町，美作町　勝央町，久米町，落合町，北房町,大佐町，新見市の各教育委員会には，有形無形の協力を得た。

久米廃寺，美作国府，宮尾遺跡については文化庁田中琢氏，奈良国立文化財研究所，沢村仁，町田章，横田拓美，佐藤興治の各氏，下市瀬遺跡の銅鐸については，三木文雄氏，その他の遺跡から出土した鍛冶炉，鉱滓については，広島大学助教授，潮見浩，住田正男，芹沢正雄の各氏から有益なご教示と，ご助言を得た。石器の材質鑑定は，岡山県教育センター上野等氏，宮尾遺跡の種子分析は，岡山大学農学部教授，笠原安夫氏，木器の材質鑑定は岡山大学農学部教授，畔柳鎮氏をわずらわした。記して感謝の意を表したい。

5．本書に用いたレベル値は，海抜高である。

6．本書に用いた地形図は，国土地理院承認済である。$\frac{1}{1000}$の地形図は，日本道路公団の **Expresspian** をトレースしたものである。

7．本報告書で用いる時代区分は一般的な政治的区分に準拠し，それを補うために文化史区分と世紀を併用する。

埋蔵文化財発掘調査契約書

1　委託事務の名称

2　委　託　期　間　昭和　年　月　日から　昭和　年　月　日まで

3　委　託　金　額　金　　円

4　委託金支払場所　日 本 道 路 公 団

日本道路公団大阪支社長　山川尚典（以下「甲」という。）は，岡山県知事　加藤武徳（以下「乙」という。）に頭書の発掘調査の実施を次の条項により委託する。

第1条　甲は，別紙発掘調査計画書に基づき頭書の委託金額の範囲内で，頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第2条　甲又は乙の都合により，委託期間を延長し，若しくは発掘調査計画を変更し，又は発掘調査を中止するときは，事前に協議して書面により定めるものとする。

第3条　乙は，委託契約締結後，遅滞なく作業予定表及び資金使用計画書を作成し，甲に提出しなければならない。

第4条　乙は，第3条の資金使用計画書に基づき，頭書発掘調査を実施するために必要な経費の概算払を甲に請求することができる。

2　甲は，前項の請求のあったときは，頭書の発掘調査の進捗状況を勘案して，請求書を受理した日から15日以内に乙に所要の額を支払うものとする。

第5条　甲は，必要と認めるときは，頭書の発掘調査の処理状況について調査し，又は報告書及び作業調査日誌の提出を求めることができる。

2　乙は，甲が期限を指定して中間報告を求めたときは，これに応じなければならない。

3　乙は，発掘調査の実施にあたり，作業箇所に作業表示旗をかかげ，発掘調査関係者には腕章等を着用させなければならない。

4　乙は，頭書の発掘調査が完了したときは，すみやかに頭書の発掘調査の実施結果に基づく報告書（B5版30部）を作成し，委託期間内に甲に提出しなければならない。

5　乙は，費用精算調書を作成し，委託期間満了1ヵ月以内に甲に提出しなければならない。

第6条　この契約に基づく報告書，費用精算調書その他の関係書類の作成事務の取扱は，甲が特に指定しない限り乙の本来の事務取扱に準じて処理するものとする。

第7条　乙がこの委託契約に基づき甲の費用をもって取得した購入物件等は，すべて甲に帰属するものとする。ただし，甲は，発掘され又は発見された埋蔵文化財に関する甲の権限を放棄するものとする。

第8条　発掘調査に関する文化財保護法及び遺失物法等に関する諸手続については，乙が代行するものとする。

2　甲及び乙は，相互に協力して土地使用承諾書の取付けにあたるものとする。

第9条　乙の責めに帰する事由により頭書の期限内に第5条第4項に規定する報告書を提出しないときは，甲は，遅滞損害金として期限満了日の翌日から起算し提出当日までの遅滞日数につき，頭書の委託金額に対して日歩2銭7厘の割合で計算した金額を徴収することができる。

2　甲の責めに帰する事由により第4条の規定による委託料の支払いが遅れた場合には，乙は，甲に対し日歩2銭7厘の割合で遅延利息の支払を請求することができる。

第10条　乙の責めに帰すべき事由により甲が契約を解除したときは，乙は，頭書の委託金額の10分の1を違約金として，甲の定める期限までに甲に納付しなければならない。

第11条　この契約を変更する必要が生じたときは，乙甲協議して定めるものとする。

上記契約の証として本書2通を作成し，当事者記名押印のうえ，各自1通を保有する。

昭和　年　月　日

委託者　日本道路公団大阪支社
支社長

受託者　岡　山　県
知　事

文化財発掘調査報告書

分　　冊	番号	遺　跡　名	所　在　地	備　考
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1	22	赤　野　遺　跡	真庭郡落合町赤　野	既　刊 49年3月
	25	下　市　瀬　遺　跡	真庭郡落合町下市瀬	
	13	志　戸　部　調　査　区	津山市志戸部	
	12	野　介　代　遺　跡	津山市野介代	
	11	押　入　西　遺　跡	津山市押　入	
	8	梶　原　遺　跡	津山市梶　原	
	4	上　相　遺　跡	英田郡美作町上　相	
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査2	3	北　山　古　墳　群	英田郡美作町北　山	既　刊 49年3月
	10	押入飯綱神社古墳群	津山市押　入	
	17	日　南　遺　跡	久米郡久米町日　南	
	18	宮　尾　遺　跡	久米郡久米町宮　尾	
	19	久　米　廃　寺	久米郡久米町領　家	
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査(3)	15	美　作　国　府	津山市総　社	既　刊 49年3月
	16	二　宮　大　成　遺　跡	津山市二　宮	
	24	西　原　遺　跡	真庭郡落合町西　原	
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書(7) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査4	2	狼　谷　遺　跡	英田郡美作町楢原上	50年3月 発　刊
	5	小　中　古　墳　群	勝田郡勝央町岡	
	6	小　中　遺　跡	勝田郡勝央町岡	
	9	天　神　原　遺　跡	津山市河　辺	
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書(8) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査5	1	高　本　遺　跡	英田郡作東町川　北	50年3月 発刊予定
	7	平　遺　跡	勝田郡勝央町平	
	14	沼　古　墳　群	津山市沼	
	20	領　家　遺　跡	久米郡久米町領　家	
	21	下　河　内　調　査　区	真庭郡落合町下河内	
	23	穴　塚　古　墳	真庭郡落合町西　原	
	26 ～ 62	旦　原　遺　跡 ～ 岸　本　城　址	真庭郡落合町旦　原 ～ 阿哲郡啓西町大　竹	50年度以降

資料　中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実施遺跡一覧表①（昭和44年２月～48年６月）　（作成栗野）

	遺跡名	所在地	契約調査期間 開始年月日 終了年月日	月数	契約面積	主な調査員	概要
1	高本遺跡	作東町川北	47.4.1 48.6.30	8	m² 4,000	井上・松本 泉本・岡田 山磨	①弥生時代中期中葉～後期，住居址３・貯蔵穴状ピット・土器・太型蛤刃石斧扁平片刃石斧・石鏃・石庖丁・磨製石剣・サヌカイト製砥石・分銅形土製品 ②古墳時代終末期，須恵器　③奈良～平安時代，掘立柱建物８・鍛治炉・炉壁鉄滓・焼土・木炭片・須恵器・土師器・円面硯２・墨書土器１（郡）④中世～近世，備前焼・青磁・陶器
2	狼谷遺跡	美作町楢原	47.4.1 48.3.31	6	2,500	松本・二宮 泉本	①弥生時代中期～後期包含層・住居址６・土器・土器片紡錘・太型蛤刃石斧・台石　②古墳時代後期，掘立柱建物６・土壙墓？28・古墳６・溝４・須恵器・土師器　③平安時代以降，土壙墓１・土師器・備前焼
3	北山古墳群	美作町北山	47.4.1 47.11.30	4	800	松本・二宮 泉本	①弥生時代中期中葉，住居址２・土器・石斧・石鏃・石錐・石庖丁・サヌカイト破片　②古墳時代後期，円墳４・木棺直葬・須恵器（装飾付壺）・土師器・埴輪（土師質・須恵質・円筒・ヒレ付・朝顔・人物）・勾玉・管玉・ガス玉・土玉・直刀・刀子・鎌・鋸・馬具（轡・辻金具・鉸具）・鏡　③鎌倉山地区※弥生時代終末期～古墳時代前期，住居址42・袋状ピット・土器・石庖丁石錘・砥石・磨石・たたき石・鉈・勾玉※古墳時代後期，住居址・須恵器・土師器※鉄滓
4	上相（かみや）遺跡	美作町上相	47.7.1 47.8.31	2	500	松本・二宮 泉本	①古墳時代後期，住居址2（竈付）・掘立柱建物３・須恵器・土師器・砥石・鉄滓・炉壁・砥石
5	小中古墳群	勝央町岡	〃 47.4.1 48.6.30 〃	3	1,300	栗野・高畑	①弥生時代終末期，住居址８～10・土器・石皿・たたき石・石庖丁・砥石・鉈 ②古墳時代後期，円墳４（木棺直葬？）土壙墓３・須恵器・土師器・金環・刀子・馬具（轡）鉸具・鉄鏃　③奈良～平安時代，古道・須恵器・土師器
6	小中遺跡	勝央町岡		12	4,500	栗野・高畑 松本	①弥生時代中期中葉～後期終末期～古墳時代前期？，住居址30・掘立柱建物・柵列・掘・土壙墓14・壺棺１・土器・土器片紡錘・土師器・管玉・石庖丁・太型蛤刃石斧・石鏃・石槍・砥石・たたき石台石　②古墳時代後期，土壙１・鎌　③奈良～平安時代，古道・掘立柱建物・須恵器・土師器・瓦質土器・鉱滓 ④中世後半～近世，墓・土製品（人形・魚・鈴）・古銭・鎌・包丁・釘・キセル・火打鎌・カンザシ
7	平（たいら）遺跡	勝央町平	47.4.1 48.3.31	10	3,000	田仲・井上	①勝田郡の郡家の一部？，奈良・平安時代，礎石建物１・掘立柱建物８・柵列１・溝・井戸・鍛治炉７・須恵器・土師器・瓦器・緑釉（土師質・須恵質）・灰釉・青磁・文字土器（印・ヘラ書き・墨書）・硯（蹄脚硯・円面硯・風字硯風字二面硯・坏蓋硯）・瓦（軒丸瓦２種・軒平瓦２種　・平瓦・丸瓦）・管状土錘・鉄滓・ふいごの羽口・刀・刀子・釘・木の葉　②中世，建物６・墳墓・備前焼骨壺・人骨・土師器近世陶磁器

8	梶原遺跡	勝央町福吉 津山市梶原	47.7.18 47.8.11	2	1,000	田仲・井上	①弥生時代後期，包含層・柱穴・土器 ②中世，墳墓・備前焼骨壺・人骨 ③近世墓・陶磁器・古銭・硯・キセル
9	天神原遺跡	津山市河辺	45.11.24 47.6.10	20	4,908	河本・橋本 柳瀬・下沢 新東	①先土器時代，切出状ナイフ形石器1　①弥生時代前期末・後期・終末期・住居址25・掘立柱建物7・溝・土壙5・貯蔵穴・土器・石斧・石鏃・たたき石・石皿・砥石・鉈・刀子・鉄鏃炭化材　③古墳時代後期，円墳7（木棺直葬・箱式石棺）・土壙墓・住居址2・（鍛冶炉付？）・須恵器・土師器・陶棺・鏡・鉄滓　④奈良時代・須恵器・円面硯
10	押入飯綱神社古墳	津山市押入	45.4.1 45.9.10	2	693	橋本・柳瀬	①古墳時代後期，方墳1（葺石・箱式石棺）・円墳1・土壙1・配石遺構・須恵器・土師器・刀子
11	押入西遺跡	津山市押入	45.9.5 45.11.30 47.1.7 47.3.31	8	1,470	河本・橋本 柳瀬・下沢 井上	①弥生時代中期後半，住居址9・掘立柱建物3・段状遺構・土器・太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・石包丁（未製品も）・石鏃・砥石・炭火米・　②古墳時代後期，円墳2（木棺直葬）・鹿角装刀子・素環頭太刀・鉸具・鈎板・帯先金具鉄斧・鎌・鑿・釘・須恵器・土師器　③奈良時代，墳墓・須恵器骨壺2・人骨
12	野介代（のけだい）遺跡	津山市 野介代	46.2.26 46.3.31	8	270	河本・橋本 柳瀬・下沢	①弥生時代中期後半，住居址3・土器・扁平片刃石斧・石鏃・炭化材
13	志戸部調査区	津山市 志戸部	46.12.1 46.12.10	1	446	井上・伊藤	遺構なし
14	沼古墳群	津山市沼	46.12.1 46.12.9			伊藤・井上	①古墳時代，箱式石棺4？・人骨
15	美作国府址	津山市総社	45.3.5 45.3.31 46.3.9 47.3.31	14	8,167	高橋・河本 橋本・伊藤 泉本・井上 柳瀬・岡田 池畑	①弥生時代中期～後期，土壙・集石土壙・溝・土器・太型蛤刃石斧・石包丁・石鏃・砥石・織具・ヒョウタンの皮種子・桃の種子・カヤ・　②古墳時代後期土師器・須恵器・　③美作国府（西北部）・建物6・築地跡・溝・井戸5・井戸状ピット5・瓦・（軒丸瓦3種・軒平瓦3種・平瓦3種・丸瓦）・　（蹄脚硯・円面硯・風字硯（坏蓋硯）・緑釉（土師質・須恵質）・灰釉・青白磁・須恵器・土師器・馬形土製品・墨書土器・竈形土器・瓦器・斎串状木簡・斎串・曲物・つるべ桶・籠・桃・栗・櫛・銅製刀子・刀・子釘・鉄滓・炉壁・ふいごの羽口・牛の鼻輪
16	二宮大成（おおなる）（二宮大東）遺跡	津山市二宮	46.2.4 47.2.20	1	600	栗野・泉本 山磨	①弥生時代中期・後期・終末期，住居址3・溝・ピット・炉址・土器・鉈・たたき石・石包丁・炭火材・　②古墳時代後期，住居址・円墳（横穴式石室）・陶棺3・須恵器・土師器・刀子・鉄鏃・金銅透彫鍔・馬具（鞍・杏葉）・勾玉切子玉・ガラス玉・土玉・　③飛鳥様式単弁軒丸瓦　④平安末～中世，ピット3，建物2・須恵器・土師器・備前焼・古銭・鉄滓
17	日南（ひな）古墳群	久米町宮尾	47.11.1 47.11.30	1	230	橋本・山磨 岡田	①古墳時代，箱式石棺1 ②平安時代，古道・土師器・須恵器

18	宮尾遺跡	久米町宮尾	46.9.20) 46.12.11) 47.4.1) 48.1.31)	12	7,922	橋本・岡田 山磨・井上	①縄文時代晩期，土器・石鏃，　②弥生時代中期初頭～中葉・後期，水路・土器・扁平片刃石斧・石包丁・石鏃・炭化米・管玉・　③古墳時代後期，須恵器　④久米郡の郡家跡，白鳳時代～奈良・平安時代，掘立柱建物20・柵列・門・溝・井戸1・土壙・瓦少量・須恵器・土師器・瓦器・硯　円面硯・坏転用硯）・竈形土器・緑釉・青白磁・鉄滓・ふいごの羽口・古銭・漆膜付須恵器・植物種子・藁・板材　⑤野辺地区，白鳳～奈良時代，竪穴状遺構3・鍛冶炉3・井戸状ピット・溝状遺構・須恵器・土師器・釘・鎹・円板状鉄器・釘・鉄滓・砥石・平瓦
19	久米廃寺	久米町宮尾	44.2.1) 44.3.31) 44.4.1) 45.1.31) 45.4.1) 46.3.31)	24	5,232	河本・葛原 枝川・栗野 泉本・山磨	①弥生時代中期・後期，土器・環状石斧・サヌカイト原石　②古墳時代後期，住居址？・須恵器・土師器・鉱滓　③白鳳時代創建寺院跡・奈良～平安時代，塔・金堂・講堂・僧坊？等（礎石建物5・掘立柱建物3），回廊・築地・溝・円形ピット・瓦（軒丸瓦4種・軒平瓦5種・丸瓦2種・平瓦6種・隅切瓦・熨斗瓦）・須恵器・土師器・緑釉・仏像（塑像仏は如来・菩薩・天部など・塼仏3）・円面硯・墨書土器・文字瓦・水晶・金箔・相論・鉄鏃・釘・鎹・刀子・鉄滓・掘立柱根・流木・壁土・種子（くるみ・もも・とち）・石製銙帯
20	領家遺跡	久米町領家	46.4.1 47.3.31	12	2,900	栗野・山磨	①先土器時代，丸のみ片刃石斧　②弥生時代中期，後期，住居址13・土壙2・集石遺構1・土器・石包丁・太型蛤刃石斧・扁平片斧・石鏃・敲石・凹石・紡錘車・ガラス玉・炭化米・炭化材・カヤ　③古墳時代前期～後期，住居址19（竈付4）・時期未決住居址9・鍛冶炉1・土壙1・合口甕棺1・土師器・須恵器・土製支脚・竈形土器・金環・鉄滓・ふいごの羽口・鉄斧・砥石・ガラス玉・桃の種子・炭化材・　④奈良～平安時代，掘立柱建物16・礎石建物1・井戸1（曲物の井戸枠）・溝・土師器・須恵器・花文壺・緑釉・灰釉・青磁・刀子・鉄鏃・釘・鉄製紡錘・クサビ・鉄滓・石錘・管状土錘・瓦（軒丸瓦・軒平瓦）・石製銙帯
21	下河内（しもこうち）調査区	落合町 下河内	47.1.20 47.2.7	1	120	河本・橋本 柳瀬	①遺構なし，弥生式土器・須恵器・土師器・古銭
22	赤野遺跡	落合町赤野	47.1.20) 47.2.19) 47.4.1) 47.6.21)	3	960	河本・橋本 柳瀬・岡田 山磨	①縄文時代早期・後期・晩期，土器片・サヌカイト石鏃・すり石・黒曜石片　②古墳時代前期・後期，住居址2・土師器・須恵器　③中世（鎌倉～室町時代），館跡・建物3・L字状掘によって区画・ピット・土師器・瓦器・灯明皿・灰釉・備前焼（擂鉢・壺）・青磁碗・中世陶器・漆器片・鉄鏃・釘
23	穴塚古墳	落合町西原	45.7.27 45.9.25	2	157	中力・伊藤	①古墳時代後期，円墳1（横穴式石室）須恵器・馬具（鞍）・刀子・鉄鏃・鉄斧
24	西原遺跡	落合町西原	44.10.1 45.3.31	6	1,530	神原・河本 枝川・栗野 橋本・中力 伊藤・新東 松本・柳瀬	①縄文時代中期・後期・晩期，土器片・御物石器　②弥生時代中期・後期～終末期，住居址12・土壙10・すり鉢状ピット1・土器・石包丁・太型蛤刃石斧・両刃石斧・石鏃・砥石・鉈・分銅形土製品　③古墳時代，奈良時代以降，須恵器・土師器・管状土錘・紡錘状土製品
25	下市瀬遺跡	落合町 下市瀬	47.8.20 48.5.31	9	4,000	岡本・河本 田仲・新東	①弥生時代中期末・後期～終末期・住居址1・壺棺1・井戸1・水路・土器（特殊壺・絵画土器・スタンプ施文土器）・石包丁・石皿・たたき石・石錘・太

25	下市瀬遺跡	落合町 下市瀬	47.8.20 48.5.31	9	4,000	岡本・河本 田仲・新東	型蛤刃石斧・土玉・銅鐸・フォーク状木器・櫂状木器・槽・田下駄？・スプーン状木器・建築材・種子（桃・どんぐり・かんぴょう）　②古墳時代後期，水路・須恵器　③奈良～平安時代，礎石建物１・掘立柱建物５・井戸３・須恵器（多首壺・蓮弁付高坏）・土師器・瓦器・墨書土器・緑釉（須恵質）・青磁・管状土錘・瓦（軒丸瓦２種・軒平瓦５種）・坏転用硯（朱墨あり）・舟形木器・人形・斎串・木皿・櫛状木器・ヘラ状木製品・種子（桃）・鉄滓　④中世～近世，建物３・備前焼・近世陶磁器

中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実施遺跡一覧表②　（昭和48年７月～昭和49年11月現在）

	遺跡名	所在地	契約調査期間 開始年月日 終了年月日	月教	契約面積	主な調査員	概要
26	丹原（だんのはら）遺跡	落合町 西河内	48.7.17 48.12.31	5.5	m² 2,000	高畑・山磨	①弥生時代中期後半～後期・住居址７，袋状土壙８，柱穴土器溜り　②古墳時代後期古墳３，土壙墓２，土玉刀子　③奈良～平安時代，火葬土壙１・骨蔵器２（壺，坏）・建物１・柱穴　④その他土壙，溝
27	須内（すのうち）遺跡	落合町鹿田	49.1.8 49.6.30	6	1,200	橋本・松本 浅倉・井上 栗野	①縄文時代後期，晩期土器片，黒曜石片　②弥生時代中期末～後期の住居跡２弥生式土器多数太型蛤刃石斧２・扁平片刃石斧２，石鏃５（サヌカイト）・サヌカイト片・ドリル１（サヌカイト）・石匙１　③中世・建物４・柱穴・土壙７・溝・墳墓（骨壺10・五輪塔40以上・宝篋印塔３以上）須恵器・土師器・青磁片・緑釉陶器片２・灯明皿・平瓦片・鉄滓・鉄釘・銅製印（財）・刀子・骨片・炭・砂利敷
28	宮の前遺跡	落合町一色	48.4.23 49.9.30	17	7,500	橋本・二宮 浅倉	①縄文中期・晩期・土器片・貯蔵穴40・ドングリ・クルミ・木の葉　②弥生時代前期・中期・後期住居址16・炉址1・周溝墓8(円形，方形・土坑墓・棺蓋土坑墓6・箱式石棺５・土器・石鏃数十・黒曜石製石鏃１・石包丁７・石皿・たたき石・スリ石・打製石斧・磨製石斧１・太型蛤刃１・石錐10数本・石匙11・石槍２・管玉３・曲玉１・土錘・土器片紡錘　③古墳時代６世紀頃の溝・須恵器・土師器・鉄滓・炉跡　④平安時代～中世・土壙・須恵器・古銭・白磁・柱穴列３
29	備中平（びらい）遺跡	北房町五名	48.7.17 49.3.31	9	2,500	栗野・井上 岡田	①縄文時代円形土壙１・早期土器片，乳棒状石斧２・石鏃　②弥生時代，方形土壙・土器片・石鏃　③古墳時代前期の住居址，方形土壙・古墳（横穴式石室のこわれたもの）須恵器坏・土師器・　④奈良～平安時代，建物16，溝状遺構７・井戸３・須恵器，土師器・墨書土器「吉祥」緑釉陶器片１・鉄鏃状鉄器１・鉄製円盤１　⑤中世，窯跡・鍛冶炉状遺構３・ピット・溝・炭・鉄滓・須恵器・土師器・青磁
30	谷尻（たんじり）遺跡	北房町 上水田	48.10.20 48.12.27	15	4,500	高畑・山磨	①縄文時代早期・後期・晩期包含層・石鏃・石斧・サヌカイト片　②弥生時代土壙墓29以上住居址４・柱穴溝・紡錘車・ニワトリ形土製品・太形蛤刃石斧・

30	谷尻遺跡（たんじり）	北房町 上水田	49.4.1 50.3.31	15	4,500	栗野・井上 高畑・山磨	石鏃 ③古墳時代・住居址３・包含層・須恵器・土師器 ④奈良～平安建物・柱穴・溝，土器溜り ⑤中世～近世土壙墓・井戸・建物・古銭・青磁・須恵器土師器・備前焼・瓦器・鉱滓・土錘・陶器・水晶片
31	桃山遺跡	北房町 下呰部	48.7.17 48.9.26 49.4.1 50.3.31	15	2,800	田仲・二宮	①縄文時代，後期・土器片・黒曜石 ②弥生時代，中期・後期，住居址・建物袋状ピット・太型蛤刃石斧・石鏃・石包丁（打製・磨製）・砥石・分銅形土製品 ③古墳時代，古墳１（横穴式石室）・土壙墓？・須恵器・土師器 ④平安時代，土壙墓・鍛冶炉・建物・溝・須恵器・土師器・鉱滓 ⑤中世～近世，墳墓
32	植木遺跡（えき）	北房町植木	48.10.20 49.3.28	6	1,280	田仲	①弥生時代末～古墳時代初頭，水路 ②室町時代～鎌倉時代，館跡・建物11・池？・井戸１・鉄鏃15本・たがね５本・短刀１・刀子１・火打鎌・備前焼・須恵器・宗銭28枚（永楽１枚・北宗19枚）・青白磁・砥石４・硯１・鉄滓・炉壁・ふいごの羽口・漆椀５・曲物２・井戸枠
33	空（そら）古墳	北房町 下呰部	48.9.22 48.9.25	1	20	田仲・松本	①古墳時代，円墳，横穴式石室，古墳の墳端が一部かかる，地形測量を行なった
34	戸谷遺跡	大佐町 田治部	49.7.1 49.7.31	1	300	橋本・井上 浅倉	①縄文時代，前期，土器片 ②奈良末～平安時代，住居址１・須恵器・土師器・鉄器２点
35	塔の畝遺跡	新見市 上熊谷	49.10.1 49.10.31	1	100	井上	①平安末～中世，石積遺構（方形），須恵器・瓦質土器・五輪塔
36	青地遺跡（あおち） (旧史跡七人塚)	新見市 下熊谷	49.7.1 49.12.30	6	1,400	井上・浅倉	①縄文時代，早期・前期，土壙・土器片・サヌカイト片・黒曜石片・チャート片 ②弥生時代，中期・後期，土壙墓・住居址２・柱穴・土器片・提砥・ ③古墳時代，前期・後期，円墳（周溝のみ）・住居址１・須恵器・土師器
37	岩倉（いわぐら）古墳群	新見市高尾	49.11.14 50			浅倉・岡田	①弥生時代中期，土器・住居址 ②古墳時代，前方後円墳１（箱式石棺）・横穴式石室・須恵器・土師器・鉄鏃
38	宗金遺跡	新見市西方	49.7.1 50.3.31		(800)	井上	平地よりより一段高い平坦部に土師器の散布がみられる。未調査
39	新見庄跡	新見市西方 ～高尾	49.4.1 50.3.31			井上	平安～室町時代の遺跡で，荘園を治めた当時の資料が東寺に保存されている。調査中
40	横見古墳	新見市西方					尾根の斜面に横穴式石室が残存する未調査
41	追塚古墳群	神郷町 下神代					山麓に横穴式石室墳が残存しまた周辺に径10m前後の円墳状のものが認められる。未調査
42	新市谷遺跡	神郷町 下神代					丘陵斜面上に須恵器・土師器の散布がみられまた数本の段が等高線に平行して認められる 未調査

43	岩屋城跡	神郷町下神代					丘陵上に中世の山城が知られている。未調査
44	門前中屋遺跡	神郷町下神代					緩斜面上に土器片の散布がみられトレンチ調査が必要である。未調査
45	塚谷古墳群	神郷町下神代					山麓に2基の横穴式石室墳の存在が予想される。 未調査
46	佐藤遺跡	哲西町上神代					山根屋遺跡の東方平坦地に弥生土器の散布がみられる。 未調査
47	山根屋遺跡	哲西町上神代					緩斜面を削って作られた町道の崖に住居址の断面やピットがみられる。 未調査
48	中林遺跡	哲西町上神代					山腹に人工的な構築物があるが性格不明，岩倉へ通じる参道かも知れない。 未調査
49	野田畝遺跡	哲西町上神代					長光寺裏山の緩斜面でサヌカイト打製石包丁が採取されたことより弥生時代の遺構が考えられる。未調査
50	西江遺跡	哲西町矢田～西江					神代川の西半台地に弥生式土器，須恵器が散布し，弥生～古墳時代の集落址が予想される。未調査
51	二野古墳	哲西町矢田					畑に破壊された横穴式石室が残存する。尾根上にも2基の円墳が所在する。 未調査
52	土井遺跡	哲生町土井					舌状に延びる台地上で須恵器を採集したが遺跡の存在は明らかでない。トレンチ調査必必要である。
53	土井城跡	哲西町矢田					丘陵の尾根を4本の溝で切断し独立をさせた中世の山城である。 未調査
54	横田遺跡	哲西町矢田横田					丘陵の谷部分より平坦面にかけて弥生式土器，須恵器が散布し柱穴もみられ弥生時代の集落址が予想される。未調査
55	荒神畝遺跡	哲西町畑木					尾根上に長方形の平坦面があり，周囲は斜面になっていることから中世の出城が予想される。未調査
56	大倉遺跡	哲西町畑木					低丘陵の平坦部に須恵器，土師器の散布がみられる。 未調査
57	忠田山遺跡	哲生町畑木四日市					丘陵末端の緩斜面に青磁・須恵器・鉄滓の散布がみられ，中世の集落址が予想される。 未調査

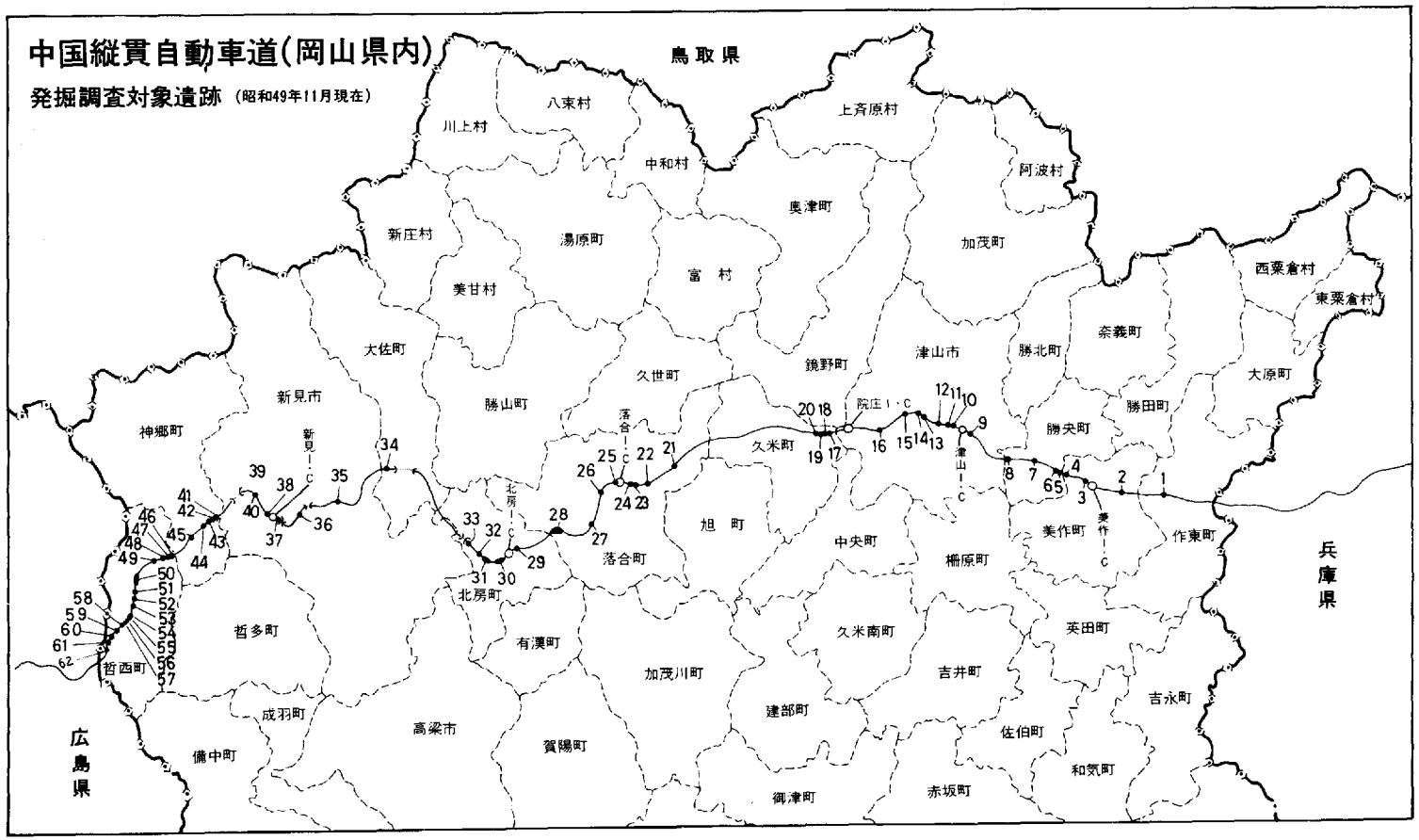
58	御供川遺跡	哲西町 畑木四日市					丘陵頂上に墳丘状のものが認められ周辺で，弥生式土器片を採集していることより，弥生時代の墓地の存在が予想される。未調査。
59	四日市古墳	哲西町畑木					尾根上に徐約10 m の円墳が存在する。未調査。
60	清水谷遺跡	哲西町住吉					神代川の左岸緩斜面に弥生式土器・サヌカイノ・チャート片が採集され弥生時代の集落址が予想される。未調査。
61	塚の峯古墳群	哲西町大竹					尾根上に２基の円墳が存在する。未調査。
62	岸本城址	哲西町大竹					尾根上に中世の山域が存在し，用地内に土るいの一部かかる。未調査

○このうち久米廃寺の一部の建物と，宮尾遺跡，農業用水路を，高架橋にて保存。宮尾遺跡は建物，溝などの遺構の一部は盛土下に戻し。宮の前遺跡の縄文時代袋状ピット群は盛土下に埋戻して残す。他は調査後破壊。

○資料整理中などで今後も追加補正されるものもあります。

○遺跡の番号は以後の報告書に共通する。

○新見以西では49年７月に再度分布調査が実施され大巾に追加補正されたので注意されたい。



62 岸本城址
61 塚の峯古墳群
60 清水谷遺跡
59 四日市古墳
58 御供川遺跡
57 忠田山遺跡
56 大倉遺跡
55 荒神畝遺跡
54 横田遺跡
53 土井城跡
52 土井遺跡
51 三野古墳群
50 西江遺跡
49 野田畝遺跡
48 中林遺跡
47 山根屋遺跡
46 佐藤遺跡
45 塚谷古墳群
44 門前中尾遺跡
43 岩屋城跡
42 新市谷遺跡
41 道塚古墳群
40 横見古墳
39 新見庄跡
38 宗金遺跡
37 岩倉古墳群
36 青地遺跡
35 塔の畝遺跡
34 戸谷遺跡
33 空古墳
32 植木遺跡
31 桃山遺跡
30 谷尻遺跡
29 備中平遺跡
28 宮の前遺跡
27 須内遺跡
26 且原遺跡
25 下市瀬遺跡
24 西原遺跡
23 穴塚古墳
22 赤野遺跡
21 下河内遺跡
20 領家遺跡
19 久米廃寺
18 宮尾遺跡
17 日南遺跡
16 二宮大成遺跡
15 美作国府跡
14 沼古墳群
13 志戸部調査区
12 野介代遺跡
11 押入西遺跡
10 古墳群 押入飯綱神社
9 天神原遺跡
8 梶原遺跡
7 平遺跡
6 小中遺跡
5 小中古墳群
4 上相遺跡
3 北山古墳群
2 狼谷遺跡
1 高本遺跡

目　　次

1．狼　谷　遺　跡（2）…… 1

2．小　中　古　墳　群（5）

　小　中　遺　跡（6）…… 64

3．天　神　原　遺　跡（9）…… 329

狼　谷　遺　跡（2）

目　　次

Ⅰ　調査の経過 …… 7
Ⅱ　調査日誌抄 …… 8
Ⅲ　遺跡の位置と歴史的環境 …… 10
Ⅳ　第1次発掘調査の概要 …… 12
Ⅴ　遺跡の概要 …… 12
(a)　1号住居址 …… 12
(b)　2号住居址 …… 13
(c)　3号住居址 …… 13
(d)　4号住居址 …… 13
(e)　5号住居址 …… 13
(f)　6号住居址 …… 19
(g)　周溝（1号～6号） …… 19
(h)　土 壙 墓 …… 19
(i)　ピ ッ ト …… 22
(j)　建 物 址 …… 23
Ⅵ　ま と め …… 23

図　　目　　次

第1図　狼谷遺跡周辺図（1/25,000）（作成：松本） …… 5
第2図　狼谷遺跡地形図およびトレンチ配置図（1/2,000）（作成・製図：二宮） …… 11
第3図　遺構配置図（1/200）（実測：小林，寺坂，二宮，製図：田仲） …… 14
第4図　2号住居址平面・断面実測図（1/50）（実測・製図：松本） …… 15
第5図　3号住居址平面・断面実測図（1/50）（実測：小林，寺坂，二宮，製図：二宮） … 16
第6図　4号住居址平面・断面実測図（1/50）（実測・製図：二宮） …… 17
第7図　5号住居址平面・断面実測図（1/50）（実測：二宮，松本，製図：二宮） …… 18
第8図　1号周溝平面・断面実測図（1/100）（実測・製図：二宮） …… 20
第9図　2号周溝平面・断面実測図（1/100）（実測・製図：二宮） …… 21
第10図　3号，4号周溝平面・断面実測図（1/100）（実測・製図：二宮） …… 24
第11図　5号周溝平面・断面実測図（1/100）（実測・製図：二宮） …… 25
第12図　6号周溝平面・断面実測図（1/100）（実測・製図：二宮） …… 27

第13図　土壙墓およびピット平面・断面実測図（1/40）（実測：松本，製図：田仲）…… 30
第14図　土壙墓およびピット平面・断面実測図（1/40）（実測：小林，寺坂，二宮，製図：田仲）
…… 31
第15図　土壙墓およびピット平面・断面実測図（1/40）（実測：小林，寺坂，二宮，製図：田仲）
…… 32
第16図　建物Ⅰ平面・断面実測図（1/40）（実測・製図：二宮）　…… 33
第17図　建物Ⅱ平面・断面実測図（1/40）（実測・製図：二宮）　…… 34
第18図　建物Ⅲ平面・断面実測図（1/40）（実測・製図：二宮）　…… 35
第19図　土層断面図（1/40）（実測：小林，寺坂，二宮，製図：田仲）　…… 36
第20図　6号周湟内大甕散布状況（1/20）（実測・製図：二宮）　…… 21
第21図　6号周湟内出土遺物（大甕）（1/5）(実測・製図：二宮）　…… 37
第22図　6号周湟内出土遺物（1/3）（実測・製図：二宮）　…… 38
第23図　6号周湟内出土遺物（1/3）（実測・製図：二宮）　…… 39
第24図　遺構内出土遺物（1/3）（実測・製図：二宮）　…… 40
第25図　遺構内出土遺物（1/3）（実測・製図：二宮）　…… 41
第26図　2号住居址出土遺物（1/4）（実測・製図：二宮）　…… 41
第27図　遺構内出土遺物（1/3）（実測・製図：二宮）　…… 42

表　目　次

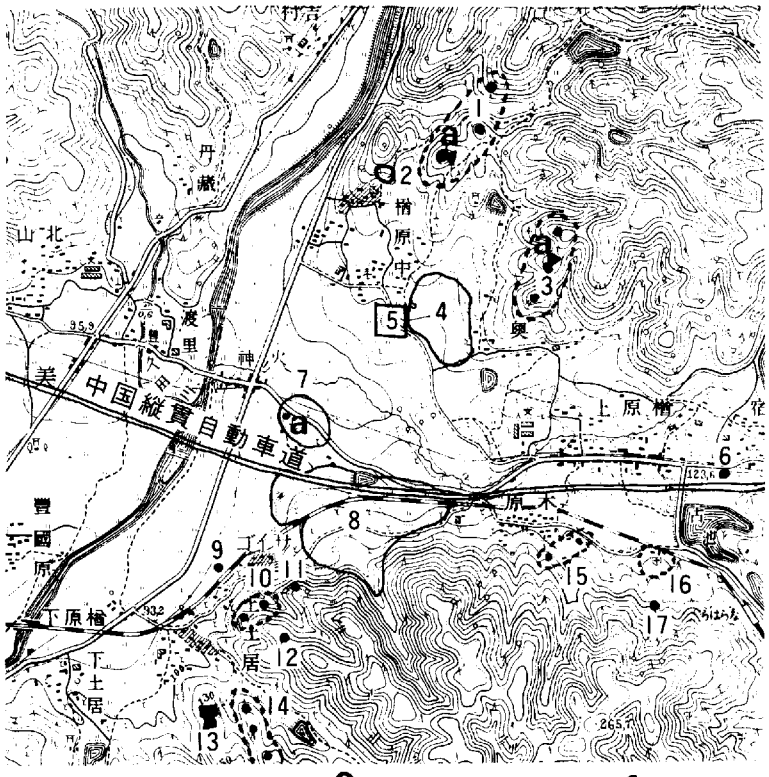
表－1　分布図対照表（作成：松本）　…… 5
表－2　昭和47年度・Cパーティーの発掘調査実績表（作成：松本）　…… 6
表－3　周湟計測表（作成：二宮）　…… 33
表－4　狼谷遺跡出土遺物一覧表（作成：二宮）　…… 28
表－5　狼谷遺跡出土遺物一覧表（作成：二宮）　…… 29

図　版　目　次

図版1　狼谷遺跡遠景と周辺（西上空より）（撮影：仁木）　…… 44
図版2　狼谷遺跡全景（上空より）（撮影：仁木）　…… 45
図版3－1　遠景（西側北山古墳群より）（撮影：二宮）　…… 46

図版３－２　Ａ－１，２区住居址，柱穴群（東より）（撮影：二宮）…… 46
図版４－１　１号周濠，溝２・３，ピット１，etc ，（南より）（撮影：二宮）…… 47
２　１号～４号周濠，溝２・３，etc ，（南より）（撮影：二宮）…… 47
図版５－１　１号，２号，３号，４号周濠全景，（西より）（撮影：二宮）…… 48
２　１号周濠全景（西より）（撮影：二宮）…… 48
図版６－１　２号周濠全景（西より）（撮影：二宮）…… 49
２　１号，３号，４号周濠全景（西より）（撮影：二宮）…… 49
図版７－１　遺跡全景（西より）（撮影：二宮）…… 50
２　遺跡全景（東より）（撮影：二宮）…… 50
図版８－１　６号周濠全景（東より）（撮影：二宮）…… 51
２　６号周濠内出土大甕散布状況（南東より）（撮影：二宮）…… 51
図版９－１　ピット－１全景（南東より）（撮影：二宮）…… 52
２　ピット－１内石組近景（南東より）（撮影：二宮）…… 52
図版10－１　土壙墓－２（南より）（撮影：松本）…… 53
２　土壙墓－３（北東より）（撮影：松本）…… 53
図版11－１　土壙墓－５（東より）（撮影：松本）…… 54
２　ピット－２（南より）（撮影：松本）…… 54
図版12－１　２号住居址（南東より）（撮影：松本）…… 55
２　２号住居址中央ピット内遺物出土状況（東より）（撮影：松本）…… 55
図版13　１　４号住居址（南より）（撮影：二宮）…… 56
２　５号住居址（南西より）（撮影：二宮）…… 56
図版14－１　６号住居址（東より）（撮影：二宮）…… 57
２　土壙墓－１内遺物出土状況（南より）（撮影：松本）…… 57
図版15－１　建物－Ｉ柱穴内遺物出土状況（北より）（撮影：松本）…… 58
２　Ａ－２区，柱穴内遺物出土状況（東より）（撮影：二宮）…… 58
図版16　６号周濠内出土遺物（撮影：二宮）…… 59
図版17　６号周濠内出土遺物（撮影：二宮）…… 60
図版18－17，18　２号住居址出土遺物（撮影：二宮）…… 61
19，20　土壙墓－１出土遺物（撮影：二宮）…… 61
21　溝－１出土遺物（撮影：二宮）…… 61
図版19－22　Ａ－１区柱穴内出土遺物（撮影：二宮）…… 62
23　建物－１柱穴内出土遺物（撮影：二宮）…… 62
24　６号周濠内出土遺物（撮影：二宮）…… 62

25，26　5号周濠内出土遺物（撮影：二宮）　……　62



第1図　狼谷遺跡周辺図

表－1　分布図対照表

番　号	遺　跡　名	備　考
1	金焼山古墳群	a……金焼山古墳
2	散布地	
3	経塚古墳群	a……上経塚古墳
4	散布地	
5	栖原廃寺跡	
6	古　墳	
7	散布地	a……栖原大塚
8	狼谷遺跡	
9	古　墳	
10	坂本塚古墳群	
11	古　墳	
12	古　墳	
13	寺山古墳	
14	寺山東北古墳群	
15	栖原上古墳群	
16	古墳群	
17	上向山古墳	

表－2　昭和４７年度Ｃパーティーの発掘調査実績表

	昭和47年4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	昭和48年1月	2月	3月
狼谷遺跡	第1次発掘調査								第2次発掘調査			
北山古墳群	第1次	第2次発掘調査				第3次発掘調査						
上相遺跡		第1次発掘調査		第2次発掘調査								
高本遺跡	第1次発掘調査									第2次発掘調査		
鎌倉山遺跡							第1次発掘調査				第2次発掘調査	
備考	跡はC調査員が担当する。古墳群の第一次発掘調査を担当し、高本遺A・B調査員は狼谷遺跡、上相遺跡、北山	北山古墳群の第二次発掘調査をA・B調査員が狼谷遺跡、上相遺跡とかけもちで実施する。	六月よりC調査員の参加	梅雨のため、遺物整理 A・B・C調査員で上相遺跡の第二次発掘調査の実施。	ティーの調査員は二名となる。C調査員の県外転出する。その結果Cパー	査。A・B調査員で北山古墳群の第二次発掘調	北山古墳群の南側土取場で集落址を発見	査員が緊急調査を実施。北山古墳群の発掘調査と併行してA・B調	で実施。狼谷遺跡の第二次発掘調査をA・B調査員	高本遺跡の第二次発掘調査をA調査員で実施。	あらたにD調査員が加って実施した。鎌倉山遺跡の第二次発掘調査をA調査員と狼谷遺跡をB調査員が中心となって実施し	

I 調 査 の 経 過

狼谷遺跡は岡山県教育委員会が日本道路公団の昭和47年度分の委託契約事業として発掘調査した遺跡の１つである。

狼谷遺跡はすでに全国遺跡地図（岡山県）に№２４０６番として登録されている遺跡であり，発掘調査前の分布調査においても北に広がる河岸段丘の末端にまで弥生式土器片，須恵器の散布がみられた。そして，この遺跡の北端に中国縦貫自動車道が建設されることが決定したことによって，昭和47年４月10日から５月31日までと昭和47年11月21日から昭和48年３月31日までの２回にわけて発掘調査を実施した。

昭和47年度は10名の調査員で11遺跡を発掘調査する計画のもとに調査員をＡ，Ｂ，Ｃの３パーティーによる調査体制ができた。狼谷遺跡を担当したＣパーティーは３名の調査員と２名の調査補助員で構成し，英田郡作東町所在の高本遺跡，英田郡美作町所在の狼谷遺跡，北山古墳群（4基の円墳），上相遺跡の４遺跡の発掘調査を実施することとし昭和47年４月10日から狼谷遺跡，北山古墳群，高本遺跡の第１次発掘調査を開始した。

表　２はＣパーティーの昭和47年度の発掘調査実績である。発掘調査は当初１遺跡３名で担当していたが，予算，調査期間等の制約があり，当初の計画変更を余儀なくされ，ある時期には１調査員が２遺跡を担当した。

この表でみるかぎり年度中途において調査員１名の県外転出，10月には土取現場において，新規遺跡（以下鎌倉山遺跡と呼ぶ）の発見，さらに工事用道路敷の早期調査の必要性など不測の事態が重なったため当初計画の変更を余儀なくされた。本遺跡で昭和48年１月以後，調査が終るまで最も重要な時期に１名の調査員しか調査にあたれなかった。そのためＡ地点と称した台地の延長１１０ｍでは工事用道路敷の明け渡しのため分断調査をせざるを得なかった。また，Ｂ地点については，確認調査にとどめた。

なお発掘調査にあたって，対策委員会をはじめ美作町教育委員会，美作郷土史跡研究会，その他関係各位より多大のご支援とご指導を得た。記して深く感謝の意を表したい。

調査担当者・及び補助員

松　本　和　男	（岡山県教育庁文化課主事）	
	（現真庭郡久世町教育委員会社会教育主事）	
二　宮　治　夫	（岡山県教育庁文化課主事）	
太　田　　整	（岡山県開発公社技師補）	（１次，２次調査）
戸　川　孝　二	（岡山県開発公社技師補）	（１次調査）

小 林 泰 利　（岡山県開発公社技師補）　（２次調査）
寺 坂 伸 生　（岡山県開発公社技師補）　（２次調査）

註

(1) 文化財保護委員会「全国遺跡地図」（岡山県）１９６７年

Ⅱ 調 査 日 誌 抄

本遺跡の発掘調査は，昭和47年４月10日から48年３月31日まで行われたものである。

昭和47年４月10日～４月16日

仮設小屋の建設。トレンチの設定。遺跡の遠景写真撮影。トレンチ発掘作業。

４月17日～23日

トレンチ発掘作業。グリッドの設定。

４月24日～30日

トレンチ発掘作業。グリッドの設定。

５月１日～７日

トレンチ土層断面実測。トレンチ発掘，ならびに拡張区の表土排除作業。

５月８日～14日

トレンチの拡張区表土排除作業。トレンチ内の排水作業。発掘中の風景写真撮影。

５月15日～17日

トレンチ内の排水作業。拡張区の表土排除，ならびにトレンチ発掘作業。

５月26日

トレンチ－８，９の間に10ｍ×10ｍのグリッドの設定，表土排除作業。

５月29日～30日

トレンチ－８，９間のグリッド表土排除作業。作業工程表の作成。

６月30日～７月16日

遺物整理

11月29日～12月５日

仮設小屋の建設ならびに器材運搬。

12月６日～12日

Ａ地点の表土排除作業，ならびに遺構検出作業。

12月13日～19日

表土排除，遺構検出作業。柱穴掘り下げ。溝，土壙墓掘り上げおよび写真撮影ならびに平面，断面実測。

12月20日～26日

表土排除，遺構検出作業。柱穴掘り上げならびに写真撮影。住居址の平板実測。

12月27日～28日

表土排除，遺構検出作業。

昭和48年1月5日～11日

遺構検出作業。建物柱穴実測ならびに写真撮影。

1月12日～18日

表土排除，遺構検出作業。遺構平板実測。

1月19日～25日

表土排除，遺構検出作業。遺構掘り上げおよび平板実測。

1月26日～2月1日

遺構検出，ならびに掘り下げ。工事用道路盛土にて進入（西より）。

2月2日～8日

遺構検出作業。遺構断面写真撮影ならびに実測。建物柱穴断面実測。

2月9日～15日

遺構掘り下げ。遺構平板実測。建物柱穴断面実測。

2月16日～22日

遺構掘り下げならびに実測。A地点東側写真撮影。

2月23日～3月1日

遺構検出ならびに掘り下げ。全景写真撮影。

3月2日～8日

遺構掘り上げおよび断面写真撮影ならびに実測。

3月9日～15日

遺構掘り下げならびに5号，6号周湟断面実測。平板実測。全景写真撮影。6号周湟内の石の平面実測。土壙平面，断面実測。

3月16日～22日

2号住居址掘り下げ，写真撮影ならびに平面，断面実測。土壙平面，断面実測。6号周湟平板実測北山古墳群出土遺物展示会（17，18日）。

3月23日～29日

工事用道路の付け換え。遺構検出ならびに掘り下げ。遺物，その他の搬出準備。

3月30日～31日

遺物，その他の搬出。遺構補足調査完了。

Ⅲ　遺跡の位置と歴史的環境

狼谷遺跡は岡山県英田郡美作町大字楢原上（ならばらかみ）に所在する（第1図，No－8）。

津山盆地の東部，吉井川，吉野川水系の上流にある梶並川は何回かの大きな蛇行をして「林野」で合流するが，この合流点のわずか1.8km程の上流では「豊国原」という広大な沖積平野を形成している。

この豊国原を縦断する梶並川の左岸には比高約10mの河岸段丘が東に広がっており，狼谷遺跡はこの豊国原の平野を西に臨む河岸段丘上に位置する。遺跡の多くはこれらの河岸段丘や低丘陵に立地するが，本地方でもまた同様である。

美作町はまだ充分な分布調査が実施されていないが，この地方の概略を記してみたい。

本地方での最古の遺跡は現在のところ弥生時代中期（前半）の遺物を出土する狼谷遺跡である。その後に続くものとして豊国原をはさんだ西の低丘陵に立地する北山古墳群2号墳下の住居址[註①]や鎌倉山遺跡[註②]など弥生時代から古墳時代の集落遺跡である。

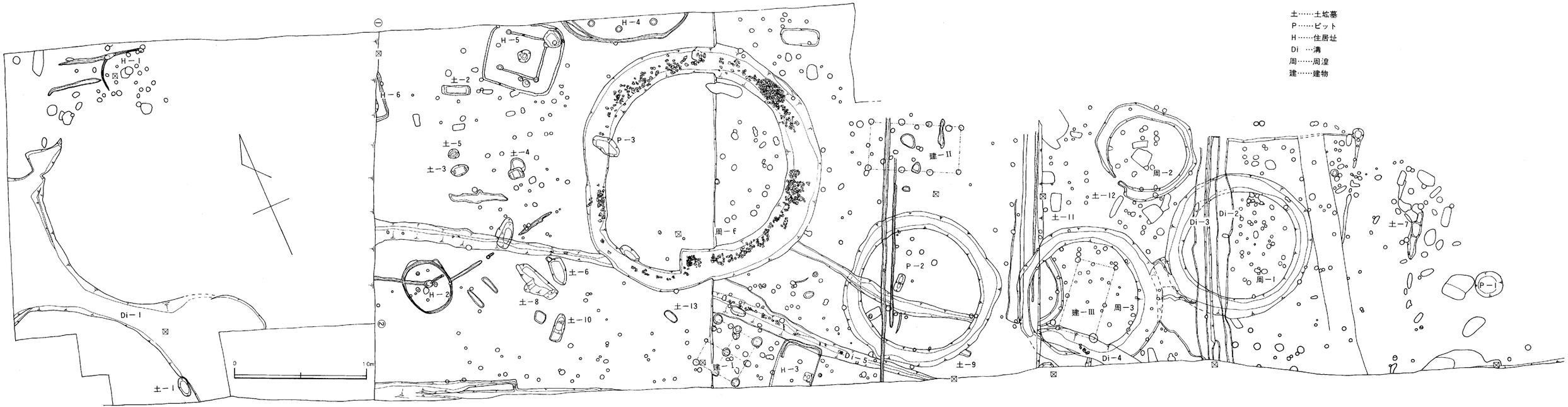
古墳[註③]については，まだ内容が明らかではないが，楢原地区には前半期の古墳（金焼山古墳，上経塚古墳，寺山古墳）が豊国原や楢原の平野を一望に見渡すことができる丘陵上に築造されており，古代における英田郡の有力者の墳墓と想像される。後期の古墳も楢原をはさんで南と北の丘陵に数基の古墳がまとまった形でみとめられる。

歴史時代の遺跡には方1町四方と推定される楢原廃寺（No－5）が所在する。現在は水田や畑になっているが，かって礎石や直径1.5mの心礎が発見されている。そして，この寺域内からは多量の軒丸瓦や軒平瓦をはじめ布目のある平瓦，丸瓦が出土しており，おそらく白鳳時代から平安時代の終わり頃にかけて存在した寺院と推定される。

また，楢原廃寺の東に隣接する台地にも須恵器の散布が広範囲にみられ，楢原廃寺と同時期の遺跡も予想される所である。近年この楢原地区一帯は農業構造改善事業として水田の区画整備事業が計画されており，楢原廃寺もその対象地域内にはいっている。

このように，豊国原，楢原地区は弥生時代から歴史時代にかけての英田郡における主要な遺跡が所在する地域である。

（松　本）


土……土坑墓
P……ピット
H……住居址
Di …溝
周……周湟
建……建物
H－1
H－2
H－3
H－4
H－5
H－6
土－1
土－2
土－3
土－4
土－5
土－6
土－7
土－8
土－9
土－10
土－11
土－12
土－13
P－1
P－2
P－3
Di－1
Di－2
Di－3
Di－4
Di－5
周－1
周－2
周－3
周－E
建－I
建－II
建－III
0
10m

註

(1) 今回の発掘調査は狼谷遺跡の一部で本遺跡の中心は鉄道の南側にある低丘陵上に位置し弥生時代を中心とした集落址と思われる。

(2) 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(4)「中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査(2)」の北山古墳群の発掘調査報告に収録している。

(3) 岡山県教育委員会が昭和47年度に発掘調査している（弥生時代，古墳時代の複合集落）。

Ⅳ　第１次発掘調査の概要

第１次発掘調査は昭和47年４月10日から５月31日まで実施した。第１次発掘調査は第２図のごとく，延長８００ｍにわたって合計26本のトレンチ，もしくはグリッドを設定して遺跡の規模，時期を明らかにするとともに調査期間，調査方法などの基礎資料を得る目的で実施した。

当初予定されていた契約面積は約4,８００㎡，延長５００ｍと推定されていたが，第１次発掘調査の結果，遺跡面積約4,９００㎡，延長２００ｍと判明した。

特にＡ地点と称する「ナガタニ池」より西側にある台地（面積約3,３００㎡，延長１１０ｍ）では上面がかなり削平されてはいるが，弥生時代，歴史時代の遺構が広がっている。

またＢ地点と称する発掘調査事務所の周辺（面積約1,６００㎡，延長80ｍ）においては弥生時代，歴史時代の遺物がかなり出土した。

以上第１次調査の結果，Ａ地点，Ｂ地点ともに全面発掘調査が必要であることを確認した。

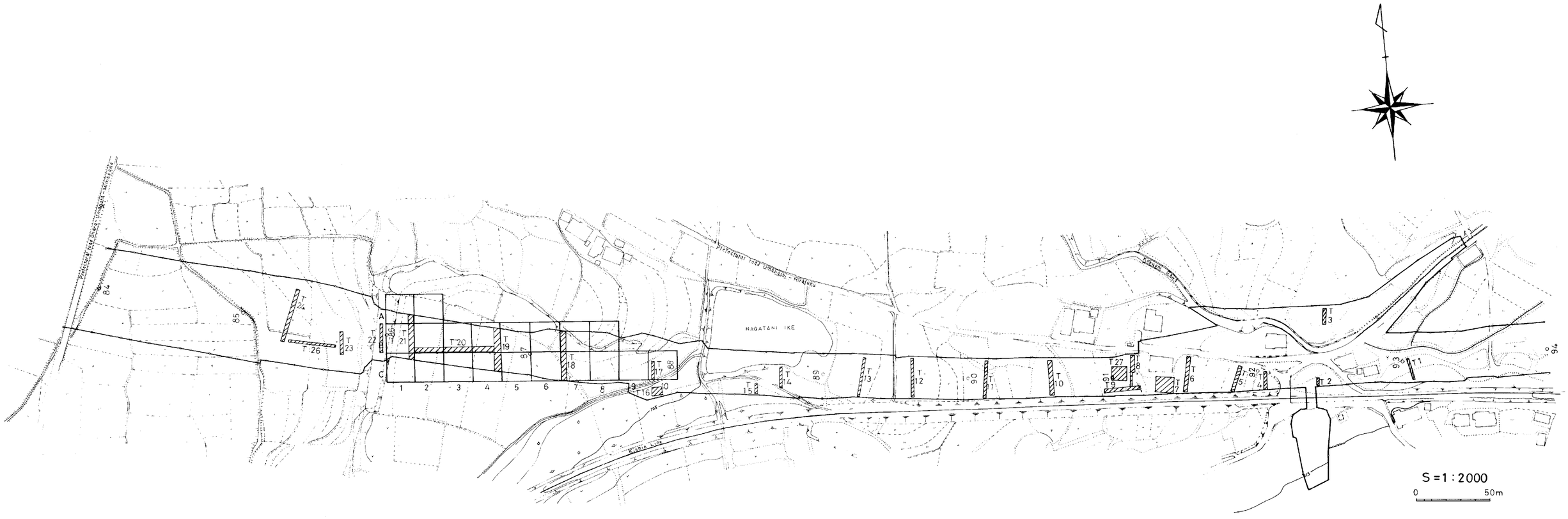
（松　本）

Ⅴ　遺　跡　の　概　要

(a)　１号住居址（図版３－２）

１号住居址は段丘上の西端に近い部分に位置し，地山層を掘り込んで４本柱をもつ円形の竪穴住居址である。なお，この住居址は削平が極めてひどく，柱穴４本と，中央ピット，ならびに周溝の一部分が検出されたのみであった。出土遺物はみられなかったが，他の住居址（３号，４号，５号）と同様で弥生時代後期のものであろう。

（二　宮）



第２図　狼谷遺跡地形図およびトレンチ配置図

(b) 2号住居址（第4図），（図版12－1）

2号住居跡はA地点で検出された長径4.2m，短径3mの楕円形（小判形）のプランを呈する住居址である。狼谷遺跡のすべての遺構に共通しているように，掘り込みの上部がかなり削平をうけており，床面より15cm～20cmの残存がみられる。周溝は幅10cm，深さ3cm～5cmのものがめぐっている。住居址内には柱穴が11個検出されたが，この住居址に伴う柱穴はC－1，C－2，C－3しかないため3本柱の住居址であろう。不自然な柱穴の配置ゆえに，さらに入念に検出を試みたが黄褐色の地山土には4本目の柱穴は確認できなかった。また住居址の中央部にはピット（長径60cm，短径50cm，深さ約50cm）があり，底部より完形の壺が灰に埋もれた状態で出土した。そして中央ピットより北々西のコーナーに向けて幅20cm，深さ5cm～10cmの溝が外に出た状態で検出された。この溝は周溝との接点において暗渠の形をとらず，周溝を切るような状態で検出された。 遺物は甑（表－⑤，59），中央ピット内の壺（表－⑤，60）がある。これらの遺物から見て，住居址は弥生時代後期のものと思われる。

（松　本）

(c) 3号住居址（第5図）

3号住居址は削平を受けてはいるが，保存は良く南側が用地外に出ており，東西が3.15mの長方形のものである。中央東壁下に長径80cm，短径65cm，深さ30cmのピットが検出され，また住居址床面の北側は一段と高く他の床面と異なる。

本住居址に伴う柱は2本であり，柱間は1.55mである。遺物は表－⑤の61～65，69，71等であり，弥生時代中期～後期の遺物が混入しており床面付着のものは何もなかったが，おそらく弥生時代後期のものと思われる。

（二　宮）

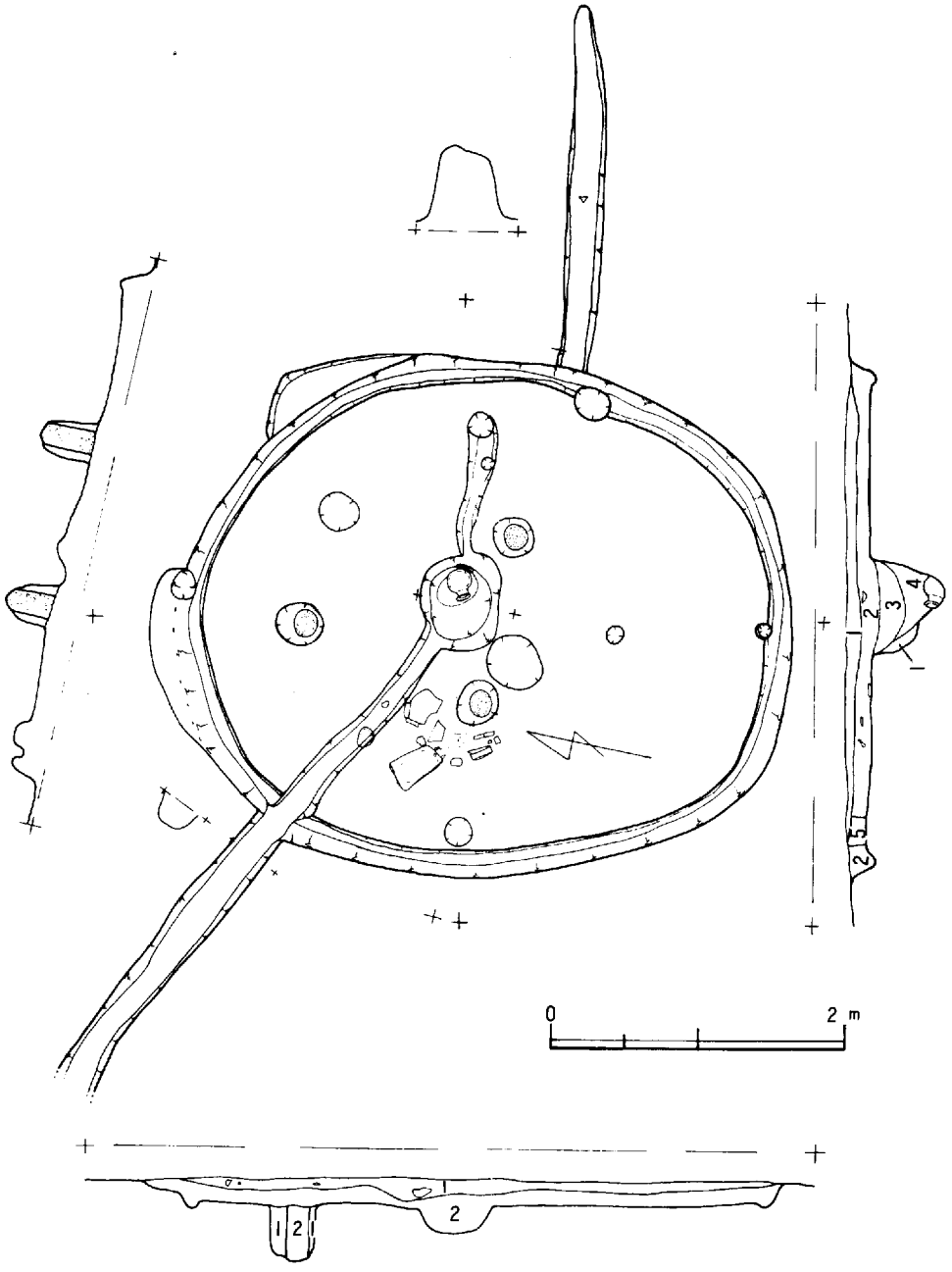
(d) 4号住居址（第6図）（図版13－1）

4号住居址はA地点で検出されたものであるが，削平を受けているのと，大部分が用地外であるために規模は測定できなかった。しかし，周溝が西側で二重になっていることから，この住居址は建て直しが行われている。おそらく，住居址の形は多角形のように思われるが大部分が用地外のために確定はできない。さらに住居址内の出土遺物は，高杯片があり，これから見て，住居址は弥生時代後期のものと思われる。

（二　宮）

(e) 5号住居址（第7図）（図版13－2）

5号住居址はA地点で検出された一辺5.5mの隅丸方形住居址である。A地点全体は削平が著る

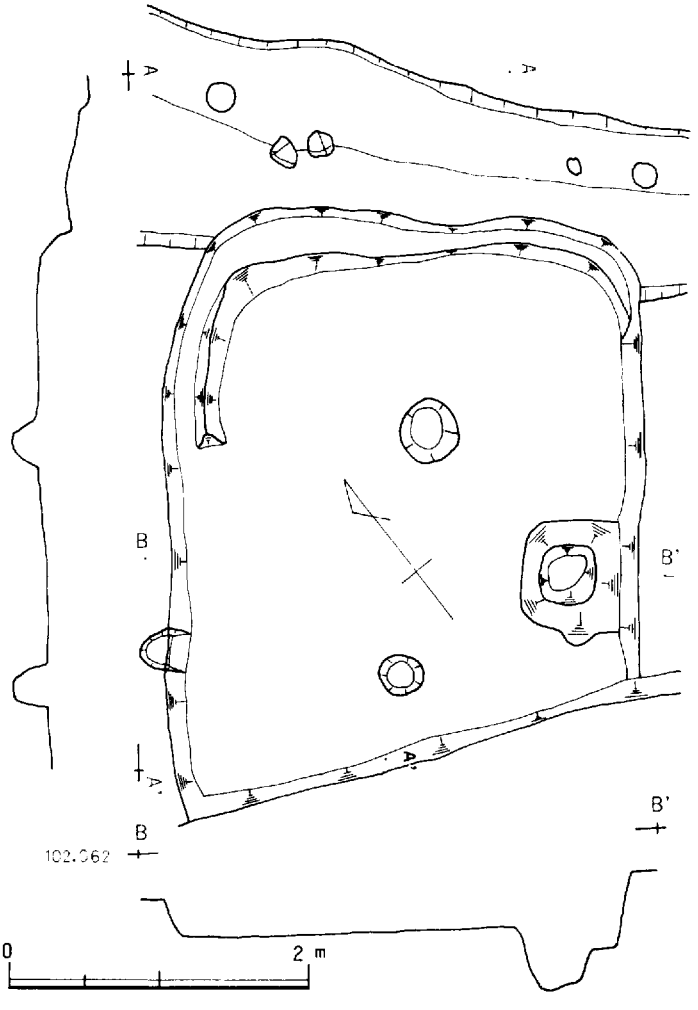


1．黄黒色土　3．灰黒色土　5．暗黒色土
2．黒　色　土　4．暗灰色土

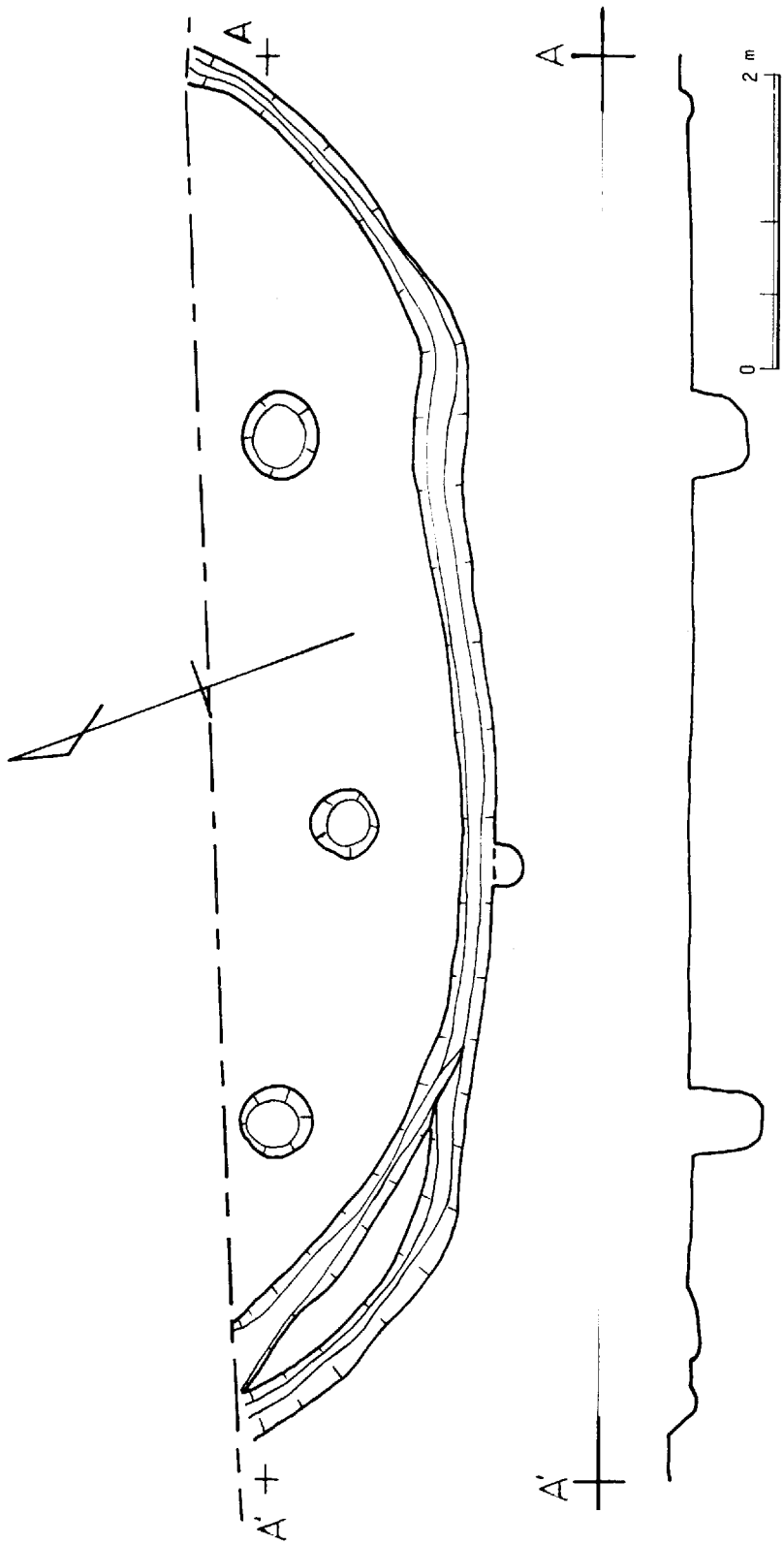
第4図　2号住居址平面・断面実測図

しいため，表土層を除去すると直ちに黄色もしくは黄褐色の地山土に住居址が検出された。5号住居址も他の住居址と同様に，上部の削平が著るしく，その保存は極めて悪く，掘り込みは床面からわずか5cm程である。住居址には幅10cm～20cmの周溝がめぐっているが，北コーナー部分においては，周溝は消失していた。そして，北東コーナーにはこの住居址より後出のピットで柱穴が切断されていた。また，住居址内にはベッド状施設が3方向にあったようで，柱と柱を結んだ側板の痕跡が認められた。ベッドの内側の床は方形を呈し，中央部に長径105 cm，短径80 cm，深さ約40cmの炉があり，内部には灰が含まれていた。

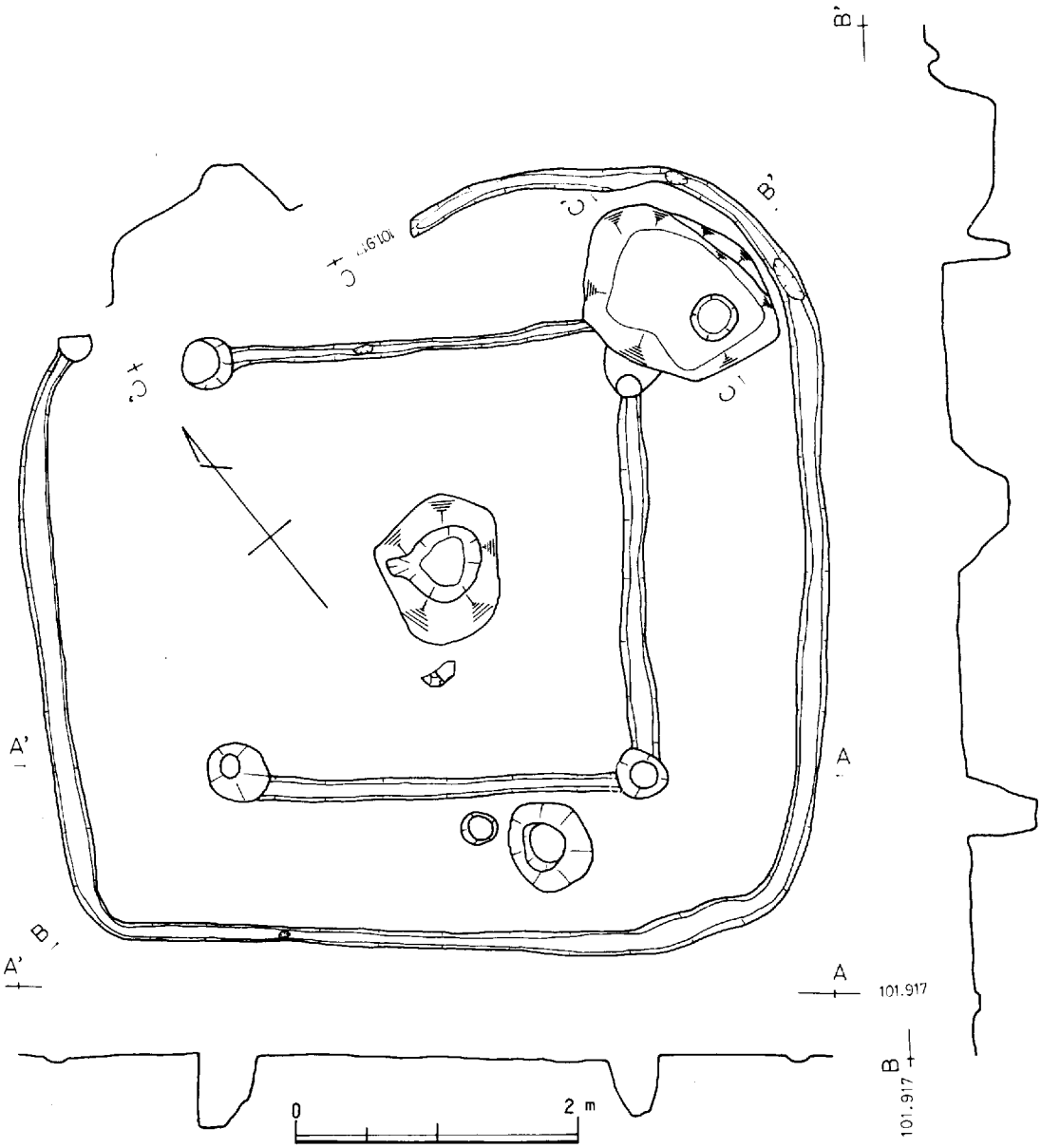
本住居址に伴う柱は4本である。4本の柱痕跡は15cm～20cmの大きさで，深さは床面より40cm～



第5図　3号住居址平面・断面実測図



第6図　4号住居址平面・断面実測図



第７図　５号住居址平面・断面実測図

50cmを測る。遺物は住居址内からは小形壷(表－⑤，67)が出土している。この遺物からみて，住居址は弥生時代後期のものと思われる。

（松　本）

(f)　6号住居址（図版14－1）

6号住居址は水田の畦の下に位置し，南東コーナーと東壁の一部，それに周溝が存在しているにすぎなかった。これは水田を拡げる時期に削り取られてしまったものである。なお，遺物の出土がなかったので時代は不明であるが，ほぼ他の住居址（2号住居址を除く）と同時代のものであろう。

（二　宮）

(g)　周湟（第8，9，10，11，12図，図版5－2，6－1・2，7－2，8－1）

周湟はいずれも古墳の盛り土，あるいは主体部が削平された残りの部分でしかない。特に周湟内の出土遺物は6号周湟内に多量に出土しており，周湟内には山石が落ち込んでいた。更に，第20図，21図（同一遺物）に示すように，須恵器の大甕片が多量に散在していた。これはあたかも埋葬が終った時点において意識的にこわしたものと推定される。なお，出土遺物からみて6世紀代に築造されたものであろう。

その他の周湟もほぼ同時代に造られたものと想定してよいであろう。なお，4号周湟はわずかに一部が存在するのみであった。

（二　宮）

(h)　土　壙　墓

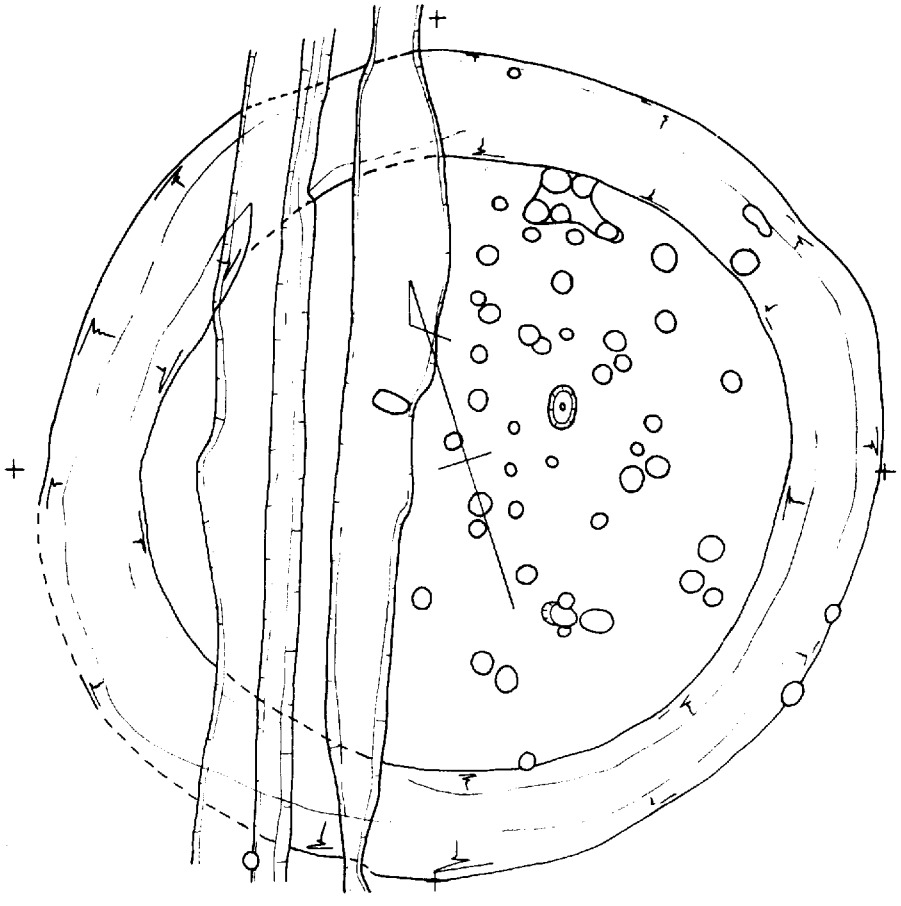
①　1号墓（土壙墓）（第13図，土－1）

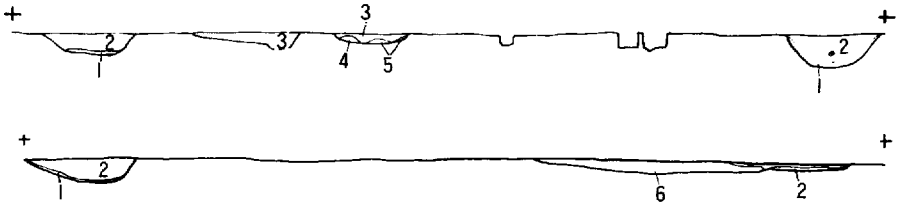
1号墓は長径142cm，短径63cm，深さ24cmを測る長楕円形の土壙墓である。掘り込みはやゝ袋状を呈した形で掘り込まれていた。床面は平らな状態になっていた。この土壙墓内からは，灯明皿杯（第24図，52，53），朱ウルシの出土があった。この遺物からみて土壙墓は平安時代後半のものと思われる。

（二　宮）

②　2号墓（木棺墓）（第13図，土－2）（図版10－1）

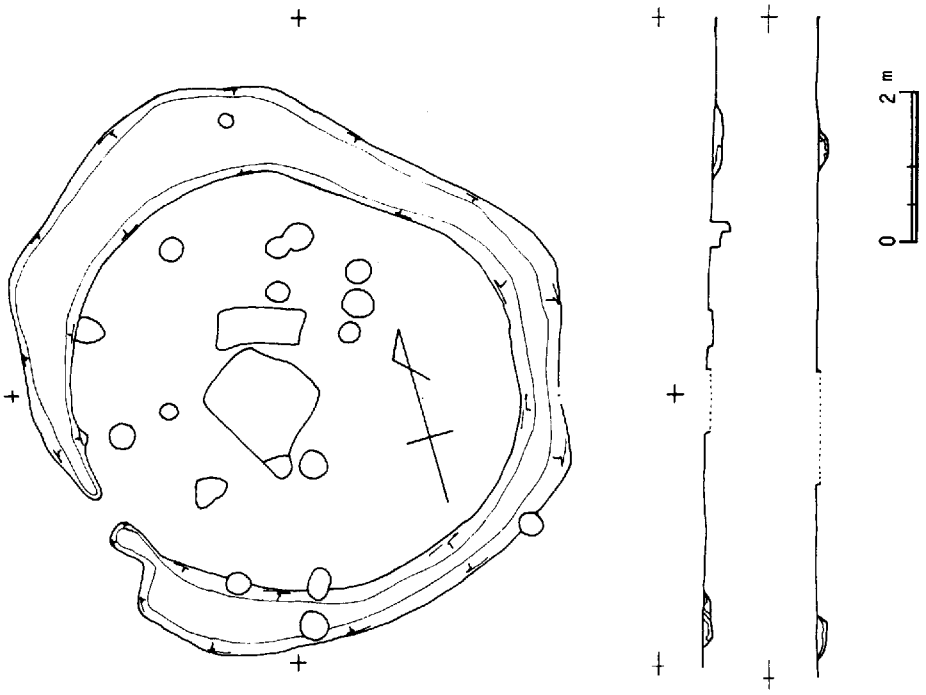
2号墓は長径205cm，短径75cm，深さ40cmを測る長方形の組み合せ木棺墓である。
床面は水平な面をもっており，側板，小口板の痕跡も確認できた。板状痕跡は小口板で幅が5～7cmあり，長さは西側小口板が50cm，東側で65cmあった。側板は幅が5～6cmあり，長さは南側板が



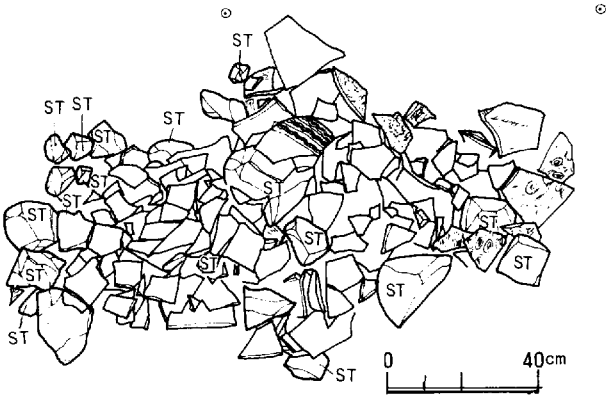


1．黒 灰 色（混ざり
　黄 褐 色）
2．黒茶褐色
3．暗茶褐色
4．黄 褐 色
5．黄 褐 色（混ざり
　茶 褐 色）
6．黒 褐 色（混ざり
　黄 褐 色）

第8図　Ⅰ号周湟平面・断面実測図



第９図　２号周湟平面・断面実測図



第20図　６号周湟内大甕散布状況

１５５cm，北側板が１７０cmあった。そして東小口板は床面から12cm，西小口板は５cm，両側板は２～５cmの深さに埋められ，木棺が組み立てられていたようである。床面での棺の内法長の幅は西側が狭くて45cm，東側は60cm，長さ１５２cmを測り，大人用の組み合せ木棺墓である。なお，この木棺墓からは遺物は出土していない。

（松　本）

③　３号墓（第13図，土－３）（図版10－２）

３号墓は長径１３５cm，短径70cm，深さ35cmを測る長楕円形の土壙墓である。掘り込みは側壁が

両小口部より少し傾斜角度を強くもって掘られていた。床面は水平な面をもっており，両端には小口板痕跡が確認できた。小口板の掘り方は西側が若干広いが，板材痕跡は両方とも幅５～６cm，長さ30～32cmを測る。なお，小口板間の内側法長は70cmを測る。この土壙墓内からは遺物は出土しなかった。

（松　本）

④　４号墓（第13図，土－４）

４号墓は弥生時代の浅いピット状遺構を切って土壙墓を作っている。長径１１５cm強，短径75cm，深さ25cmを測る長方形の土壙墓である。掘り込みは両小口部，側壁ともにゆるやかな傾斜をもって掘られていた。床面の両端では小口板痕跡が確認された。小口板の掘り方は幅が約20cm，板材痕跡は幅10cm，長さ54～58cmを測る。なお，この土壙墓内からは遺物は出土しなかった。

（松　本）

⑤　５号墓（木棺墓）（第13図，土－５）（図版11－１）

５号墓は長径85cm，短径70cm，深さ約40cmを測る楕円形の木棺墓である。掘り込みは側壁がほぼ垂直に，小口部はゆるやかな傾斜で掘り込まれていた。床面は水平な面をもっており，側板，小口板の痕跡も確認できた。板材痕跡は側板が幅３～５cm，長さは南側板で45cm，北側板で55cmあり，小口板は幅５cm，長さ25cmを測る。そして床面より小口板は約10cm，側板は約３cmの深さに埋められ，小口板が側板を倒れないように支えていることがわかる。床面での棺の内法長は幅が20cm，長さ45cmを測り子供用の組み合せ木棺墓と推定される。

なお，この木棺墓からは遺物は出土していない。

（松　本）

(i)　①ピット－１（第14図，Ｐ－１）（図版９－1.　２）

このピットは直径１８７cmのほぼ円形で，深さは約１３０cm位いのものであり，内部の堆積は，上層に約10cm程度の土をかぶり，下層は山石によって埋められていたものである。さらに底には用途不明の石組らしきものが確認され，壁には法曽焼の甕片が付いていた。これからみて，このピットは江戸時代以後のものと思われる。

（二　宮）

②ピット－２，３（第13図Ｐ－２，第15図Ｐ－３）

ピット－２，３共に土壙墓と同じ掘り方をしているものであるが，床面にわずかに柱穴が存在しているため，土壙墓と同種のものとは考えられない。これらは貯蔵穴と考えた方が良いものである。

なお出土遺物がないため時代は不明である。

（二　宮）

(j) ①建物－Ⅰ（第16図，図版15－1）

6号周溝の南側で検出された，2間×2間（1間約160cm）の建物である。柱穴の掘り方はほぼ円形で，北西の2本が削平をうけてかなり削り取られて，わずかに存在していたにすぎなかった。出土遺物（第25図57）より考察すると6世紀以後のものであろう。

（二　宮）

②建物－Ⅱ（第17図，図版8－1）

5号周溝のほぼ北側で検出された，2間×3間（1間約南北180cm，東西220cm）の建物で，柱穴掘り方はほぼ円形で東西に延びている。伴出遺物がないため時期は不明である。

（二　宮）

③建物－Ⅲ（第18図，図版6－2）

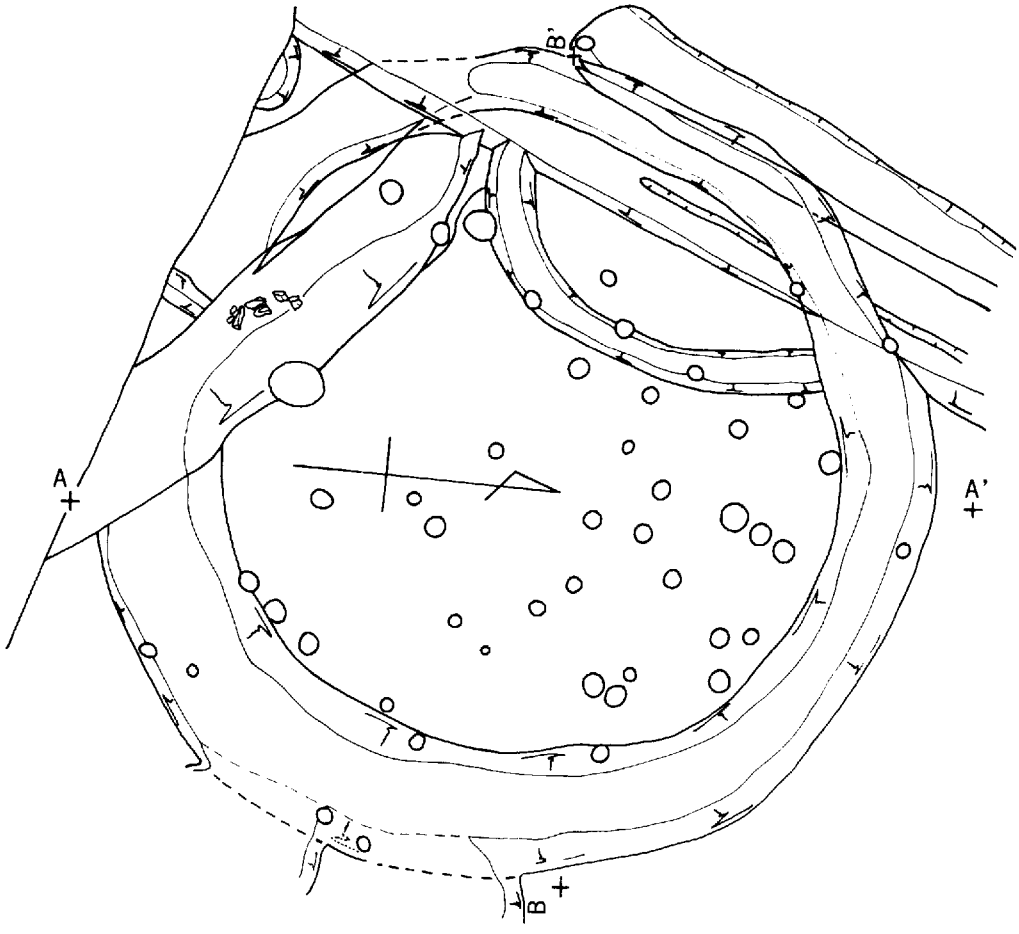
3号周溝内に検出されたもので，1間×2間（1間約280cm）の北東－南西向きの建物であり，北東側では柱間はやや広くなっている。柱穴掘り方はほぼ円形である。なお伴出遺物はなく時期は不明である。

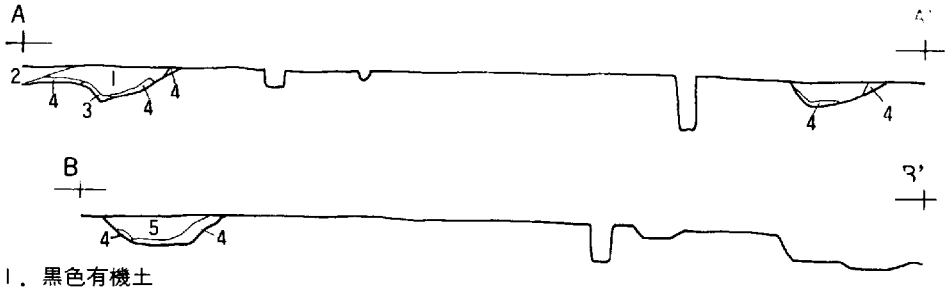
（二　宮）

Ⅵ　ま　と　め

狼谷遺跡は，中国縦貫道建設によってその一部は消え去ることとなり，岡山県教育委員会は緊急発掘調査を実施した。その結果A地点において住居址，周溝，土壙墓，ピット，建物址が確認されたが，B地点においては新規遺跡（鎌倉山遺跡）の発見によって全面調査にいたらずトレンチによる確認調査で終ることとなった。その結果弥生時代中期の遺物と，同時期と考えられる遺構が数カ所で確認された。よって全面発掘調査をするとかなりの遺構，遺物が出る可能性もある地点である。

住居址においては，2号住居址は弥生時代後期後葉のものであろう。他の1号，3号，6号住居址は出土遺物の無いものもあったがおそらく他のものと同様に弥生時代後期のものであろう。さらに3号住居址をのぞいて他の住居址には周溝を有していた。3号住居址には，北側壁帯に床面より一段高くなって周溝らしきものが作られていた。

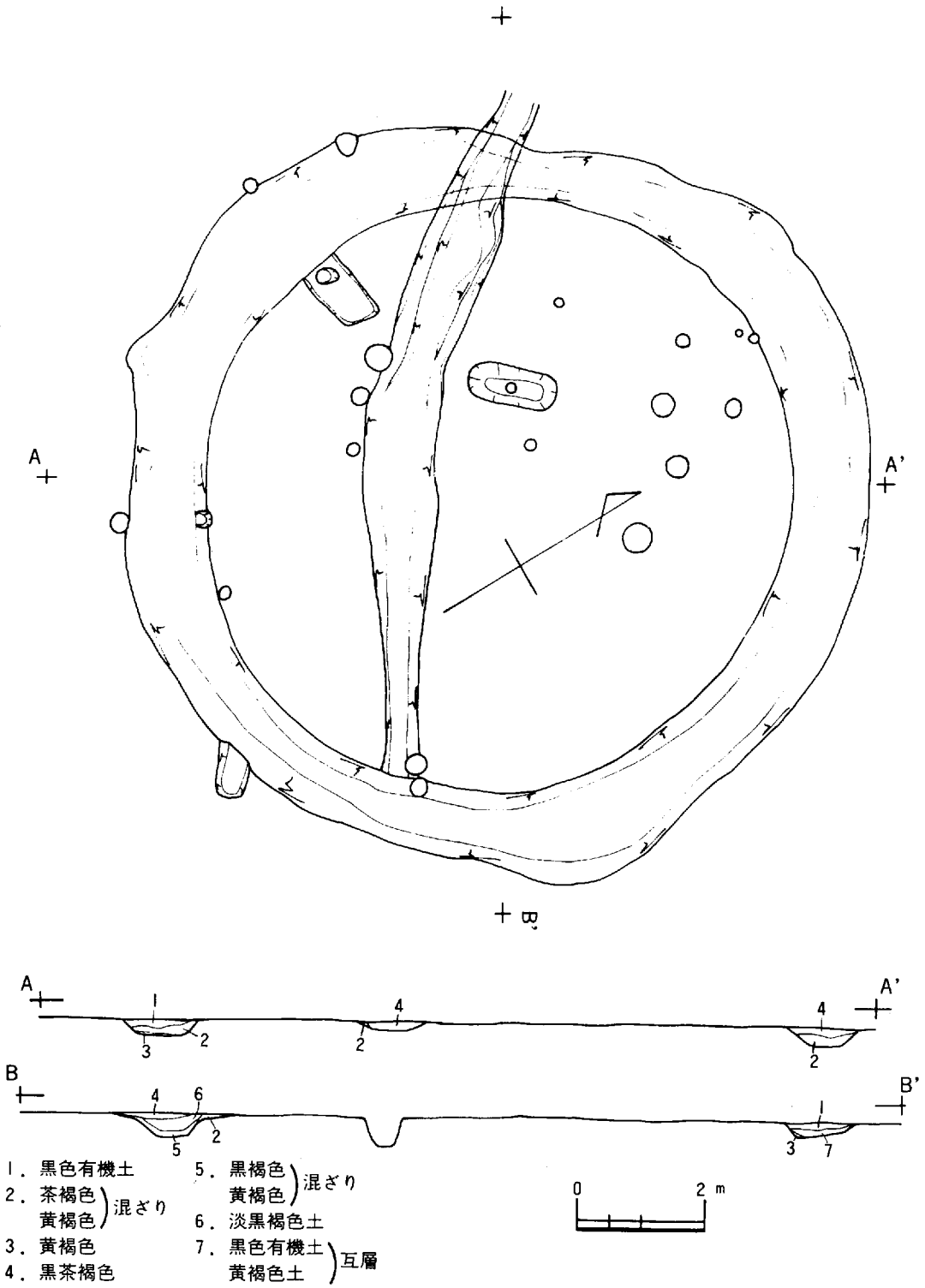




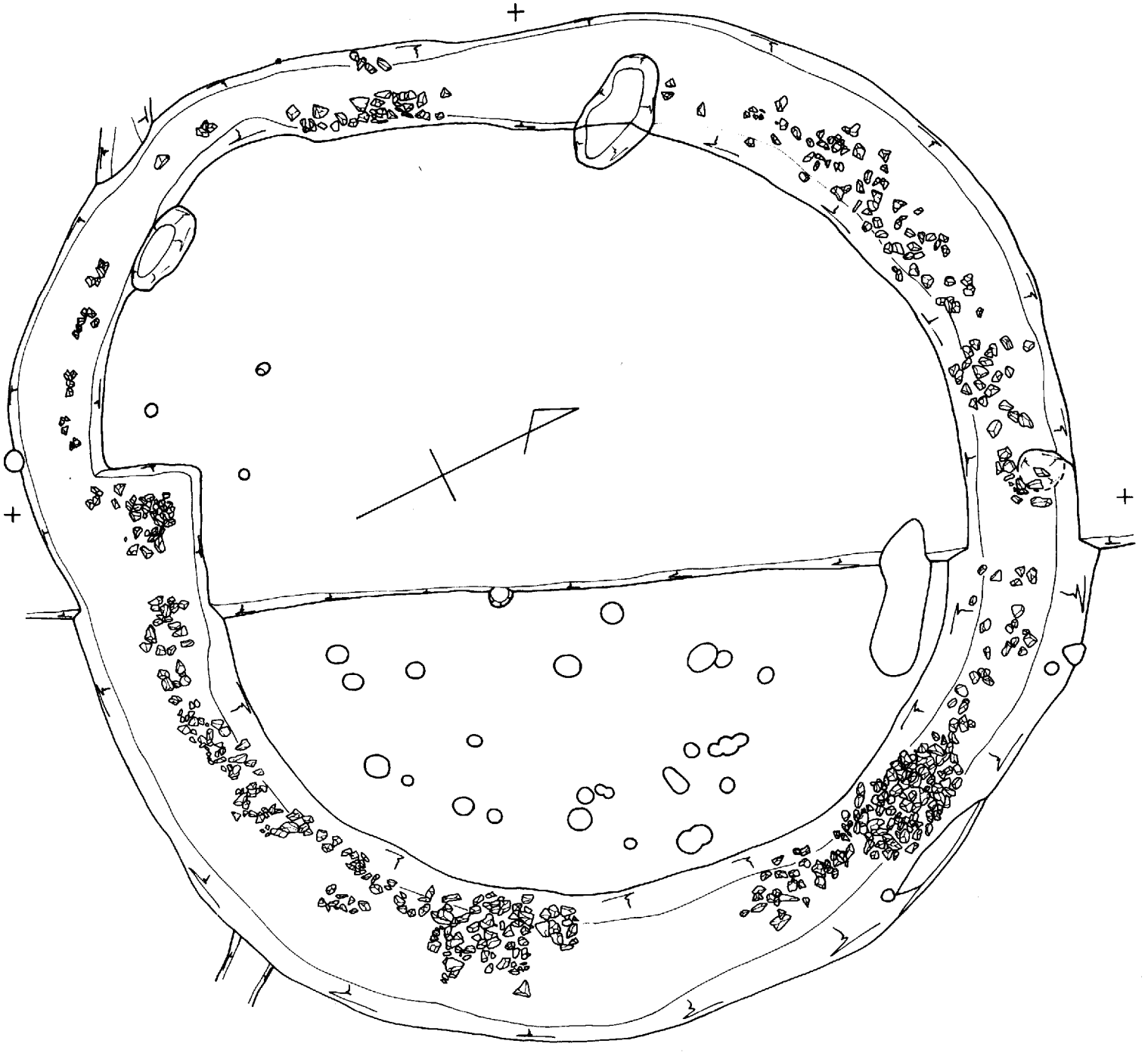
1．黒色有機土
2．淡黒茶褐色
3．黄褐色
4．淡黒茶褐色．黄褐色の互層
5．淡黒色有機土

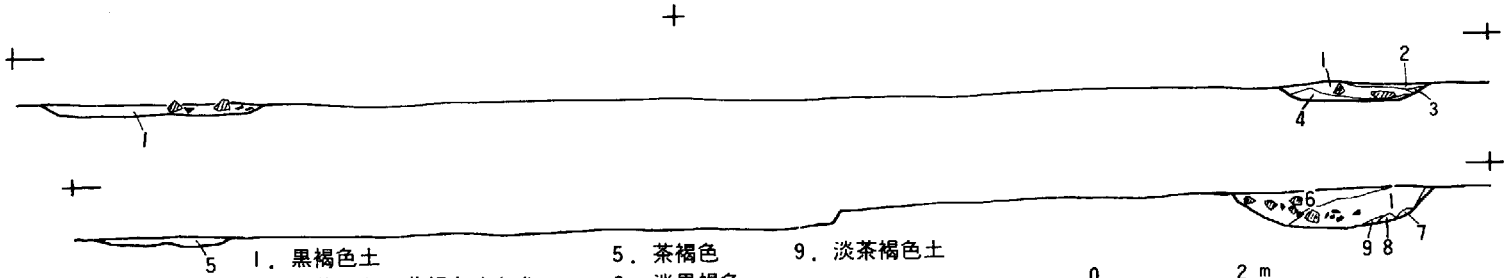
0　2 m

第10図　3号・4号周湟平面・断面実測図



第11図　5号周湟平面・断面実測図





1．黒褐色土
2．淡茶褐色．黄褐色まじり
3．淡黒灰色．黄褐色まじり
4．淡黒色土．黄茶褐色土まじり
5．茶褐色
6．淡黒褐色
7．黄色土
8．黄褐色土．黒茶褐色土まじり
9．淡茶褐色土

0　2 m

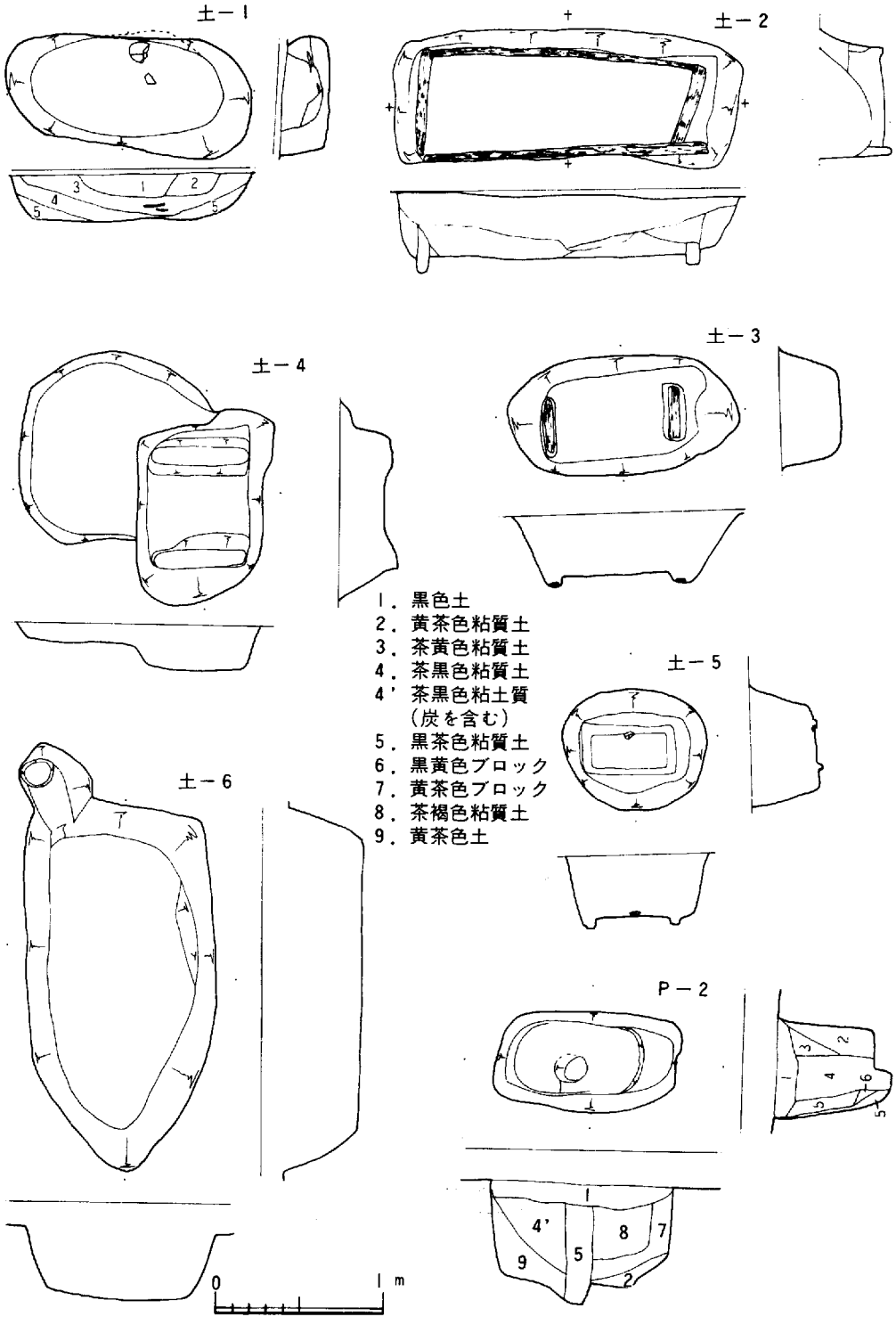
第12図　6号周湟平面・断面実測図

表－4　狼谷遺跡出土遺物一覧表

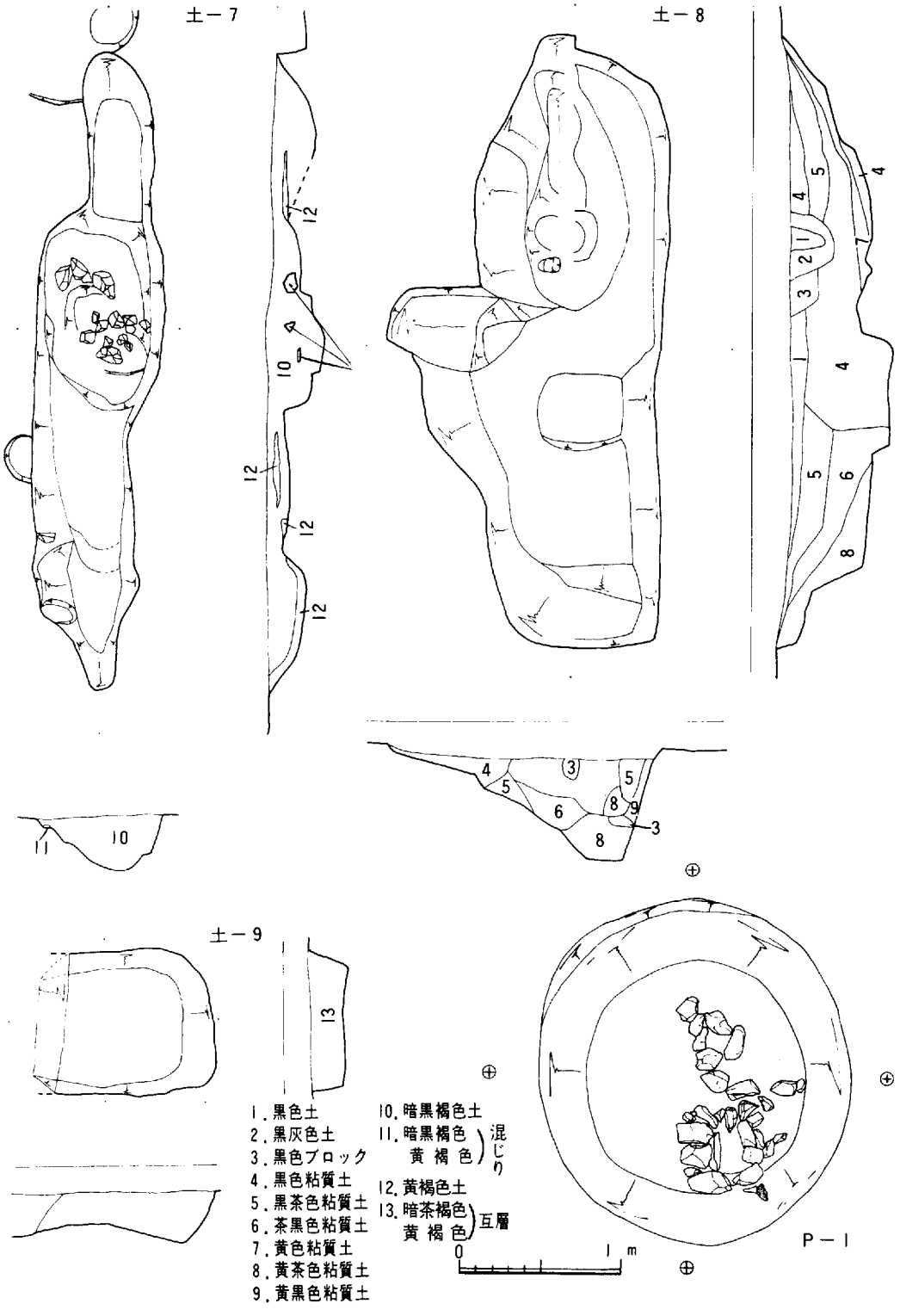
器形	土器番号	器高	口縁径	最大径	底形	色調	質	備考
大甕	1	97.2cm	37.9cm	75.6cm		外面…茶褐色、青灰色、底部は赤紫褐色 内面…青灰色	胎土…良好 焼成…良好、底部には良く火が入ってない	内面底部の青海波文は消されている。 6号周湟内
杯蓋	2	3.7cm	12.0cm	12.2cm		外面…灰色 内面…灰白色	胎土…良好 焼成…やや軟質	6号周湟内
〃	3	3.5cm前後	12.9cm			外面…灰色・黒色のまだら 内面…灰白色	胎土…良好 焼成…良好	6号周湟内
〃	4	3.5cm前後	15.2cm			外面…黒灰色 内面…灰色	胎土…良好 焼成…良好	6号周湟内
〃	5	3.7cm前後	14.8cm			外面…灰色 内面…灰色	胎土…(細砂を含む) 普通 焼成…軟質	部分で残存するのみ 6号周湟内
〃	6	不明	12.4cm			外面…灰黒色 内面…灰色	胎土…良好 焼成…良好	6号周湟内
〃	7	不明	12.0cm			外面…灰青色 内面…灰青色	胎土…普通 焼成…普通	6号周湟内
杯身	8	4.3cm	10.2cm	12.7cm		外面…灰黒色 内面…白灰色	胎土…良好 焼成…やや軟質	6号周湟内
〃	9	3.9cm	11.7cm	14.3cm		外面…黒灰色 内面…灰白色	胎土…良好 焼成…良好	約1/4残存 6号周湟内
〃	10	3.9cm	11.2cm	13.2cm		外面…黒青灰色 内面…黒青灰色	胎土…良好 焼成…良好	約1/4欠損 6号周湟内
〃	11	3.5cm	11.5cm	13.8cm		外面…黒青灰色 内面…黒青灰色	胎土…良好 焼成…良好	6号周湟内
〃	12	3.7cm	12.4cm	15.0cm		外面…青灰色 内面…灰白色	胎土…(1mm前後の小石を含む) 普通 焼成…普通	6号周湟内
〃	13	不明	15.8cm	17.9cm		外面…灰色 内面…灰色	胎土…(細砂を含む) 普通 焼成…普通	6号周湟内
〃	14	3.3cm前後	13.6cm	15.2cm		外面…青灰色 内面…灰色	胎土…良好 焼成…普通	6号周湟内
〃	15	不明	12.2cm	14.2cm		外面…灰色 内面…灰色	胎土…(少量の細砂を含む) 普通 焼成…普通	6号周湟内
高杯	16	不明	11.7cm	13.6cm		外面…灰黒色 内面…黒青灰色	胎土…良好 焼成…良好	6号周湟内
〃	17	不明	不明	不明	10.0cm	外面…黒青色・灰褐色のまだら 内面…灰褐色	胎土…(細砂を含む) 普通 焼成…普通	6号周湟内
〃	18	不明	不明	不明	10.8cm	外面…灰白色 内面…灰白色	〃	6号周湟内
〃	19	不明	不明	不明	10.0cm	外面…黒灰色 内面…黒青灰色	〃	脚部がしぼられたようにみられる 6号周湟内
〃	20	不明	不明	不明	9.6cm	外面…1/4は青灰色・その他は灰白色 内面…灰色	〃	〃 6号周湟内
〃	21	14.9cm	11.4cm	13.8cm	13.6cm	外面…灰色 内面…青灰色	胎土…良好 焼成…良好	6号周湟内
〃	22	14.8cm	11.4cm	13.8cm	13.6cm	外面…灰色 内面…青灰色	胎土…良好 焼成…良好	6号周湟内
〃	23	14.2cm	11.3cm	13.8cm	12.9cm	外面…灰色 内面…青灰色・灰色	胎土…良好 焼成…良好	6号周湟内
灯明皿	24	2.9cm	8.2cm			外面…赤茶褐色 内面…赤茶褐色	胎土…良好 焼成…良好	口縁の一部分が黒くなっている 後に混入したもの 6号周湟上層
高台杯	25	不明	不明		7.2cm	外面…灰青色 内面…灰青色	胎土…良好 焼成…良好	6号周湟内
杯	26	不明	15.6cm			外面…灰色 内面…黒青灰色	胎土…良好 焼成…良好	6号周湟内
ワン	27	不明	14.3cm			外面…赤褐色 内面…黄褐色	胎土…(1mm前後の小石を含む) 悪い 焼成…普通	(土師器) 6号周湟内
瓶	28	不明	10.4cm	10.6cm		外面…黒灰色 内面…黒灰色・灰白色	胎土…良好 焼成…良好	外面の一部と口縁内部には灰釉がかかっている 6号周湟内
壺	29	不明	16.3cm	不明		外面…灰白色 内面…灰白色	胎土…普通 焼成…軟質	外面にはタタキ、内面には青海波文がついている 6号周湟内
〃	30	不明	17.8cm	不明		外面…赤褐色 内面…白黄褐色	胎土…(小石・細砂を含む) 普通 焼成…普通	外面にはクシ目、内面はヘラで整形している (土師器)
こしき	31					黄淡褐色を呈している	胎土…(1mm以下の小石を含む) 普通 焼成…普通	6号周湟内 (土師器)
〃	32					赤黄褐色を呈している	〃	6号周湟内 (土師器)
〃	33					淡赤褐色を呈している	〃	クシ目のような跡がついている 6号周湟内 (土師器)
壺	34	不明	16.9cm	不明		外面…淡赤黄褐色 内面…淡赤黄褐色	胎土…(1mm前後の小石を含む) 普通 焼成…普通	6号周湟内 (土師器)
〃	35	不明	15.2cm	不明		外面…淡赤褐色 内面…黒褐色	〃	外面にタテのクシ目がみられる 6号周湟内 (土師器)
手捏ね土器	36	6.2cm前後	10.0cm			外面…白黄褐色 内面…白黄色	〃	外面のほぼ全体に鉄分が付着している 6号周湟内 (土師器)

表－5　狼谷遺跡出土遺物一覧表

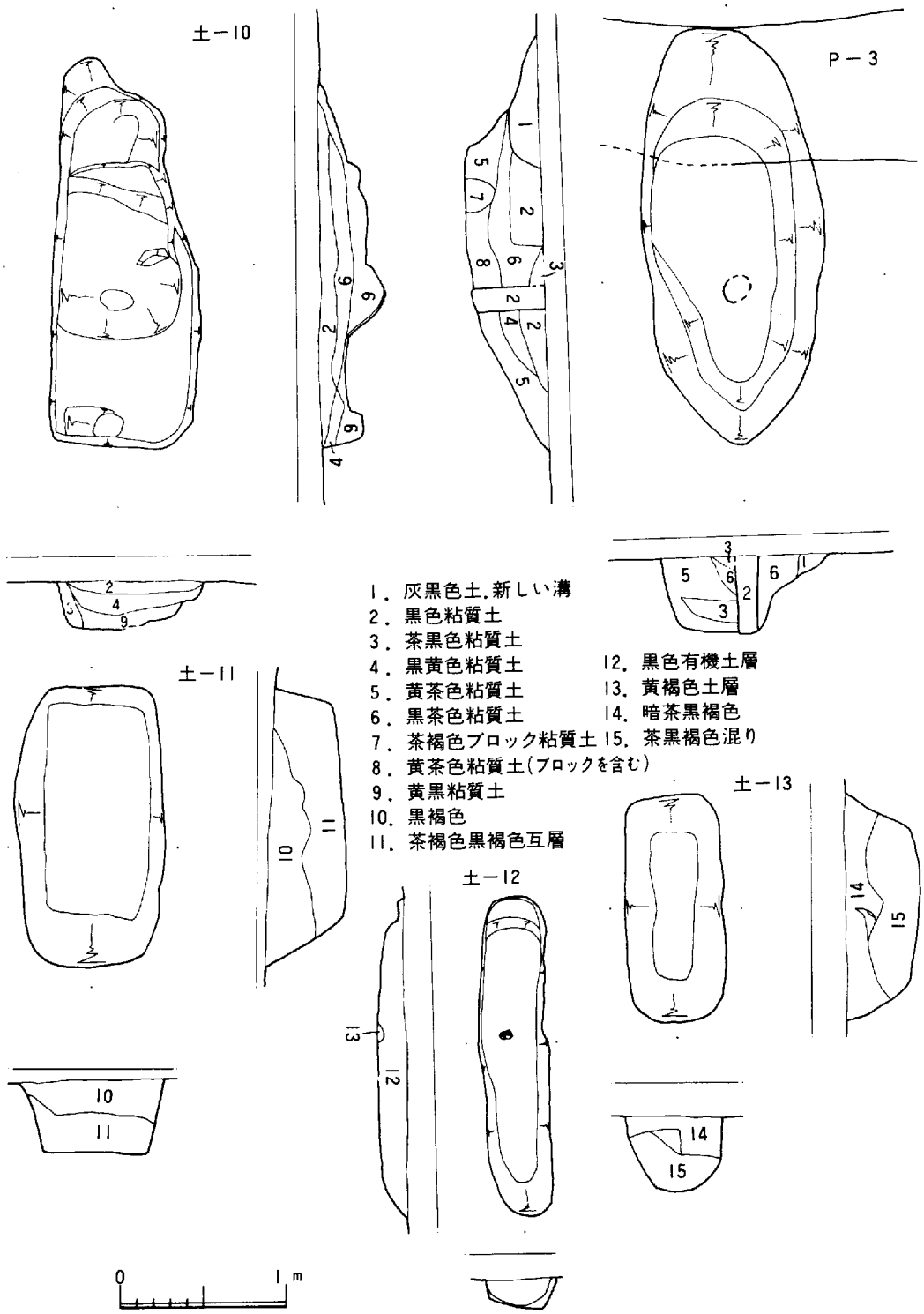
器形	土器番号	器高	口縁径	最大径	底径	色調	質	備考
壺	37	不明	15.1cm	不明		外面…黒色・赤褐色 内面…黄褐色	胎土(1mm前後の小石・細砂を含む) 焼成…やや悪い　…	6号周溝内（弥生）
壺	38	不明	14.0cm	不明		外面…黒黄褐色 内面…黒褐色	〃	6号周溝内（弥生）
壺	39	不明	20.6cm	不明		外面…褐色 内面…褐色	〃	6号周溝内（弥生）
こしき	40	23.5cm	25.2cm		12.7cm	外面…灰色・黒灰色・灰白色 内面…灰色	胎土…普通 焼成…普通（下部は悪い）	作られた時は4ケ所に穴が開いていたのであろう。1号周溝内
杯蓋	41	3.9cm	11.9cm			外面…黒灰色・灰色 内面…灰色	胎土…(1mm以下の小石を含む）普通 焼成…やや軟質	約1/4欠損 3号周溝内
杯身	42	不明	10.8cm	13.7cm		外面…灰色（やや淡い） 内面…灰色	胎土…良好 焼成…良好	3号周溝内
杯身	43	3.3cm前後	13.5cm	15.9cm		外面…灰色 内面…灰色（やや淡い）	胎土…普通 焼成…普通	ヘラおしされている 3号周溝内
ワン	44	不明	14.4cm			外面…黒灰色 内面…黒灰色	〃	3号周溝内
高杯	45	不明	不明		8.9cm	外面…灰黒色 内面…灰黒色	〃	3号周溝内
瓶	46	不明	不明	10.5cm		外面…灰色・下部は黒青灰色 内面…灰色	（わずかに細砂を含む） 〃	5号周溝内
台付ワン	47	7.2cm	15.0cm		8.5cm	外面…黒灰色・灰白色 内面…青灰色・白灰色	〃	脚部にはクシ目がある 5号周溝内
高台杯	48	不明	不明		10.6cm	外面…黒灰色 内面…灰色	〃	転用硯にされている T－23
壺	49	不明	不明	不明	8.9cm	外面…暗黄褐色 内面…明黄褐色	胎土…(細砂の混入多し）悪い 焼成…悪い	T－7（土師器）
平瓶	50	不明	不明	11.4cm		外面…灰黒色・灰白色 内面…灰色	胎土…良好 焼成…良好	口縁内と上部には灰釉がかかっている。 胴部より下はヘラ整形(溝－1)
磨製磬片	51	断面は6.8cm×4.2cm						先端をたたきに使用している （A－2区柱穴より出土）
灯明皿	52	1.6cm	8.5cm			外面…赤褐色 内面…赤褐色	胎土…普通 焼成…普通	土坑墓－1出土 （土師器）
杯	53	2.8cm	14.8cm		7.1cm	外面…白黄淡褐色 内面…白黄淡褐色	胎土…普通 焼成…軟質	〃 （土師器）
壺	54	不明	不明	不明	4.7cm	外面…赤褐色 内面…茶褐色	胎土…普通 焼成…普通	（A－2区柱穴より出土） （土師器）
壺	55	不明	29.9cm	不明	不明	外面…黄白色 内面…暗灰白色	〃	T－7拡張区出土 （土師器）
こしき	56	不明	28.3cm	不明	不明	外面…黄白色・赤褐色 内面…明黄褐色	胎土…普通 焼成…普通	柱穴内出土 （土師器）
杯身	57	4.8cm	11.2cm	13.6cm		外面…白黄淡褐色 内面…青灰淡褐色	胎土…普通 焼成…軟質	建物－I柱穴内出土
壺	58					外面…灰赤褐色 内面…灰褐色	胎土…良好 焼成…良好	3号周溝内
こしき	59	26.2cm	15.9cm	19.5cm	6.1cm	外面…黄褐色・黒茶褐色 内面…黄灰色	胎土…普通 焼成…悪い	外面上部はクシ状、下部はヘラ整形 内面はクシ状整形（弥生中期）
壺	60	22.3cm	9.8cm	17.7cm	3.1cm	外面…黄褐色 内面…黒色	胎土…(細砂の混入多し）悪い 焼成…悪い	中央ピット底部出土 （弥生中期）
壺	61	不明	33.7cm	不明		外面…暗赤褐色 内面…明赤褐色	胎土…(細砂をかなり含んでいる）普通 焼成…普通	H－3号（弥生中期）
壺	62	不明	14.6cm	不明		外面…赤黄褐色 内面…赤黄褐色	胎土…(1mm前後の小石を多く含む）普通 焼成…普通	H－3号（弥生中期）
壺	63	不明	17.2cm	不明		外面…赤黄褐色 内面…赤黄褐色	〃	H－3号（弥生）
壺	64	不明	不明	不明	5.7cm	外面…赤褐色 内面…赤褐色	胎土…(細砂を含む）普通 焼成…普通	H－3号（弥生）
壺	65	不明	15.7cm	不明		外面…白黄褐色 内面…淡赤褐色	胎土…普通 焼成…普通	H－3号（弥生）
鉢	66	8.1cm	14.9cm		3.7cm	外面…黄茶色 内面…暗黄茶褐色	胎土…(細砂を含む）普通 焼成…普通	H－4号（弥生）後
小形壺	67	6.2cm前後	8.7cm			外面…淡黒色 内面…黒灰色	胎土…普通 焼成…普通	H－5号（弥生）後
壺	68					外面…黄白色 内面…黒色	胎土…(細砂混入多し）普通 焼成…普通	内面はクシ目ヨコナデ T－7（弥生中期）
壺	69					外面…黒色 内面…赤黄褐色	胎土…(細砂混入多し）普通 焼成…普通	H－3号（弥生中期）
壺	70					外面…暗赤褐色 内面…赤黄褐色	胎土…(細砂を含む)普通 焼成…普通	T－11（弥生中期）
壺	71					外面…黒色・黄淡褐色 内面…黒色・黄淡褐色	胎土…((小石1mm以下・細砂含む）普通 焼成…普通	H－3号（弥生中期）
壺	72					外面…白灰色 内面…白灰色	胎土…普通 焼成…普通	T－11（弥生中期）
壺	73					外面… 内面…	胎土…(細、粗砂混入多し）普通 焼成…やや悪い	6号周溝内（弥生中期）



第13図　土坑墓およびピット平面・断面図



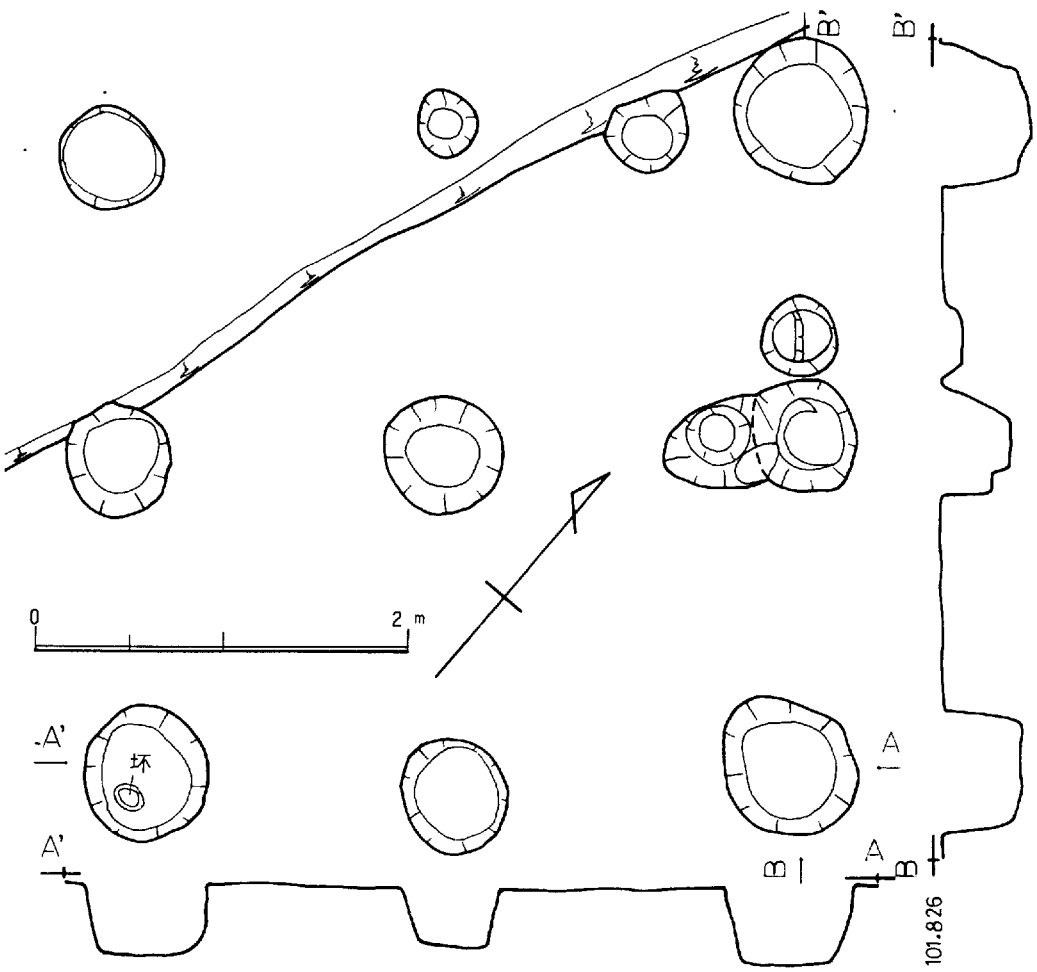
第14図　土坑墓およびピット平面・断面図



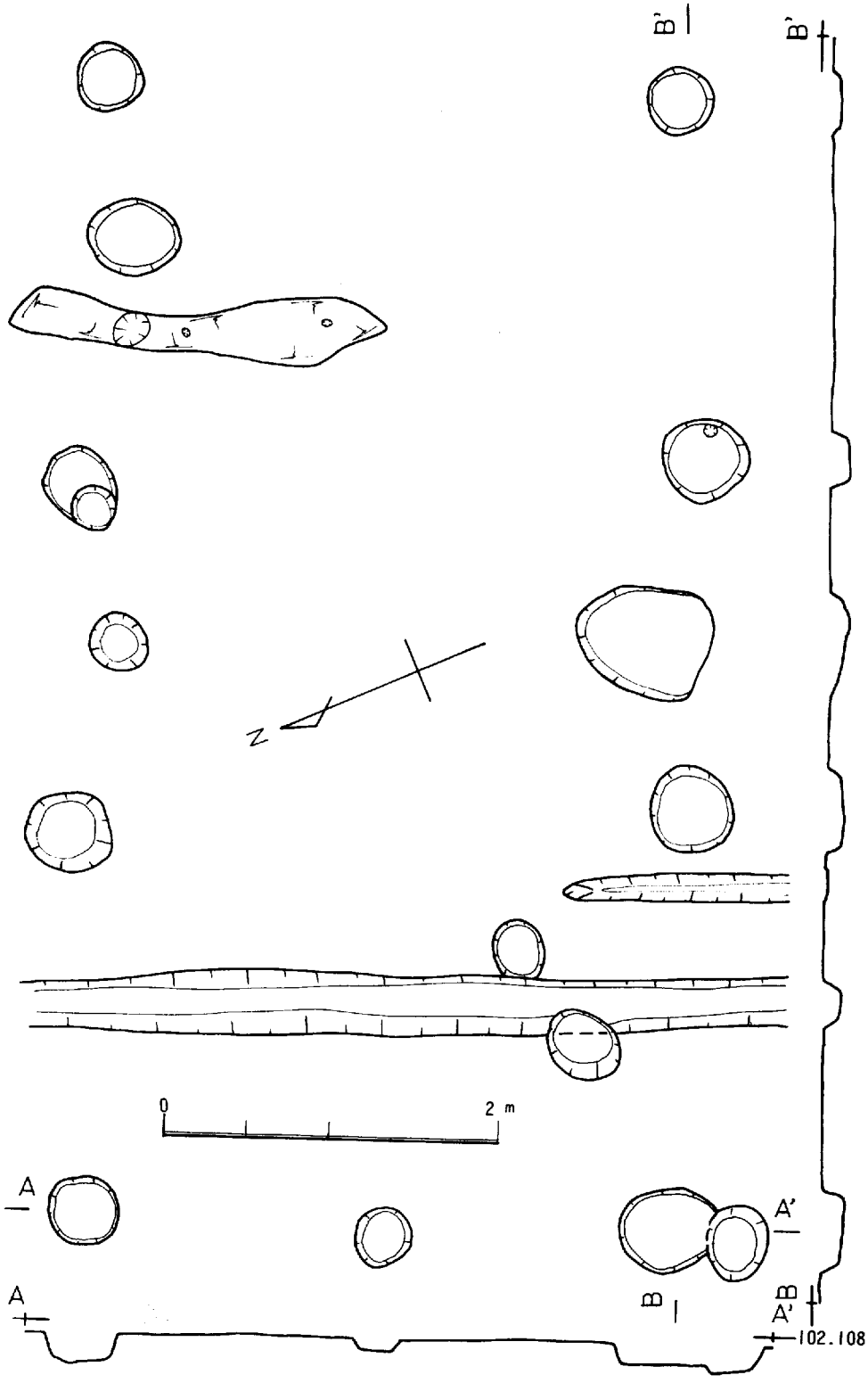
第15図　土坑墓およびピット平面・断面図

表－3　周湟計測値

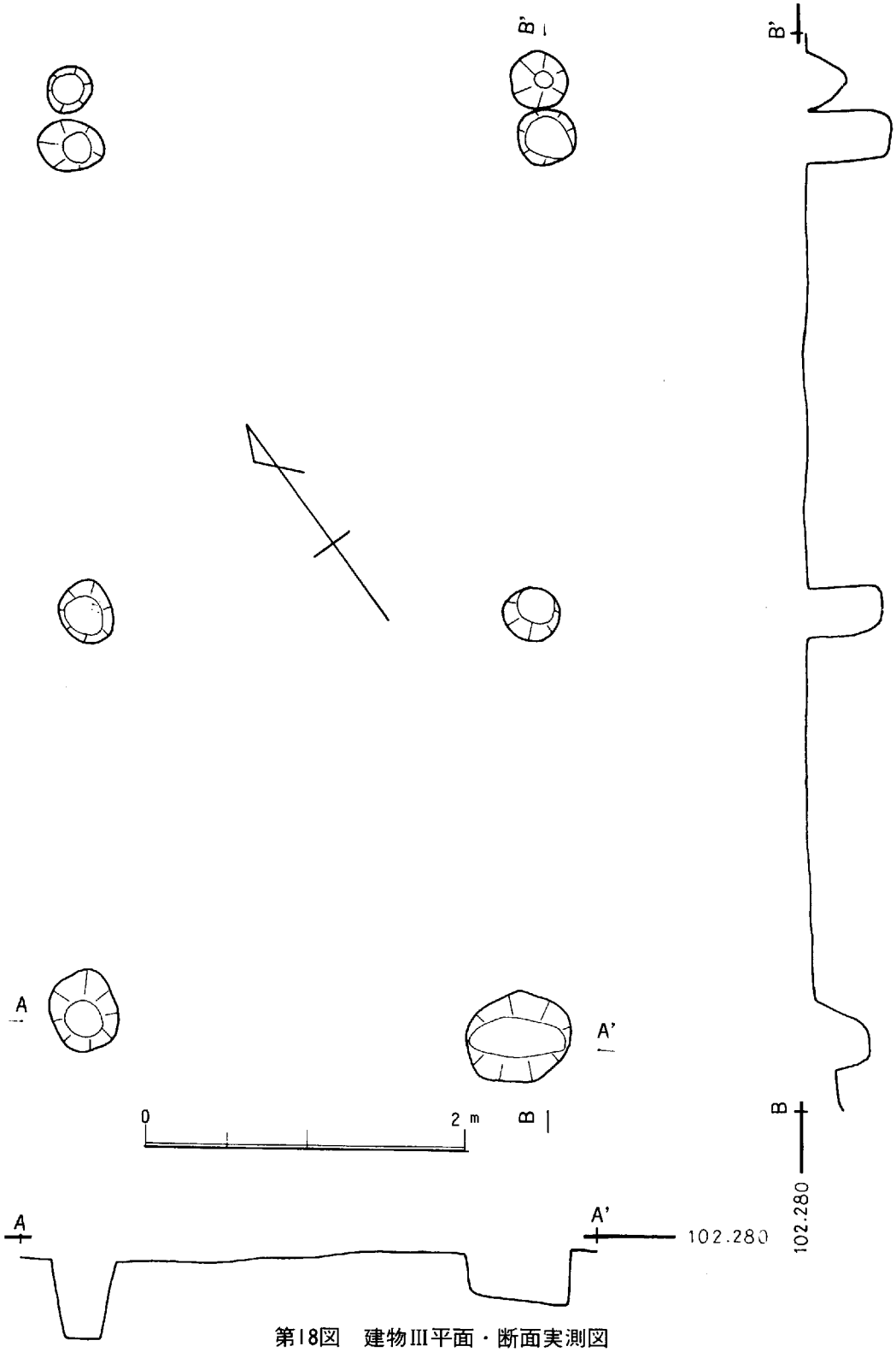
	直　　径	周　湟　幅	深　　さ	出土遺物番号
1号周湟	EW－11.20m SN－11.10m	E－1.25m．W－1.30m S－1.45m．N－1.35m	E－0.4.m．W－0.30m S－0.30m．N－0.10m	40
2号周湟	EW－ 7.10m SN－ 7.30m	E－0.55m．W－0.60m S－0.75m．N－1.05m	E－0.15m．W－0.15m S－0.10m．N－0.15m	
3号周湟	EW－10.80m SN－不明	E－1.60m．W－0.90m S－不明　．N－1.25m	E－0.40m．W－0.15m S－不明．　N－0.30m	41～45．48
4号周湟	不　明	E－0.50m．W－不明 S－不明．　N－不明	E－0.15m．W－不明 S－不明．　N－不明	
5号周湟	EW－11.30m SN－11.60m	E－1.15m．W－1.0m S－1.15m．N1.20m	E－0.20m．W－0.40m S－0.25m．N－0.30m	46．47
6号周湟	EW－17.75m SN－18.5m	E－2.65m．W－1.7m S－2.95m．N－1.95m	E－0.50m．W－0.10m S－0.15m．N－0.25m	1～39．73



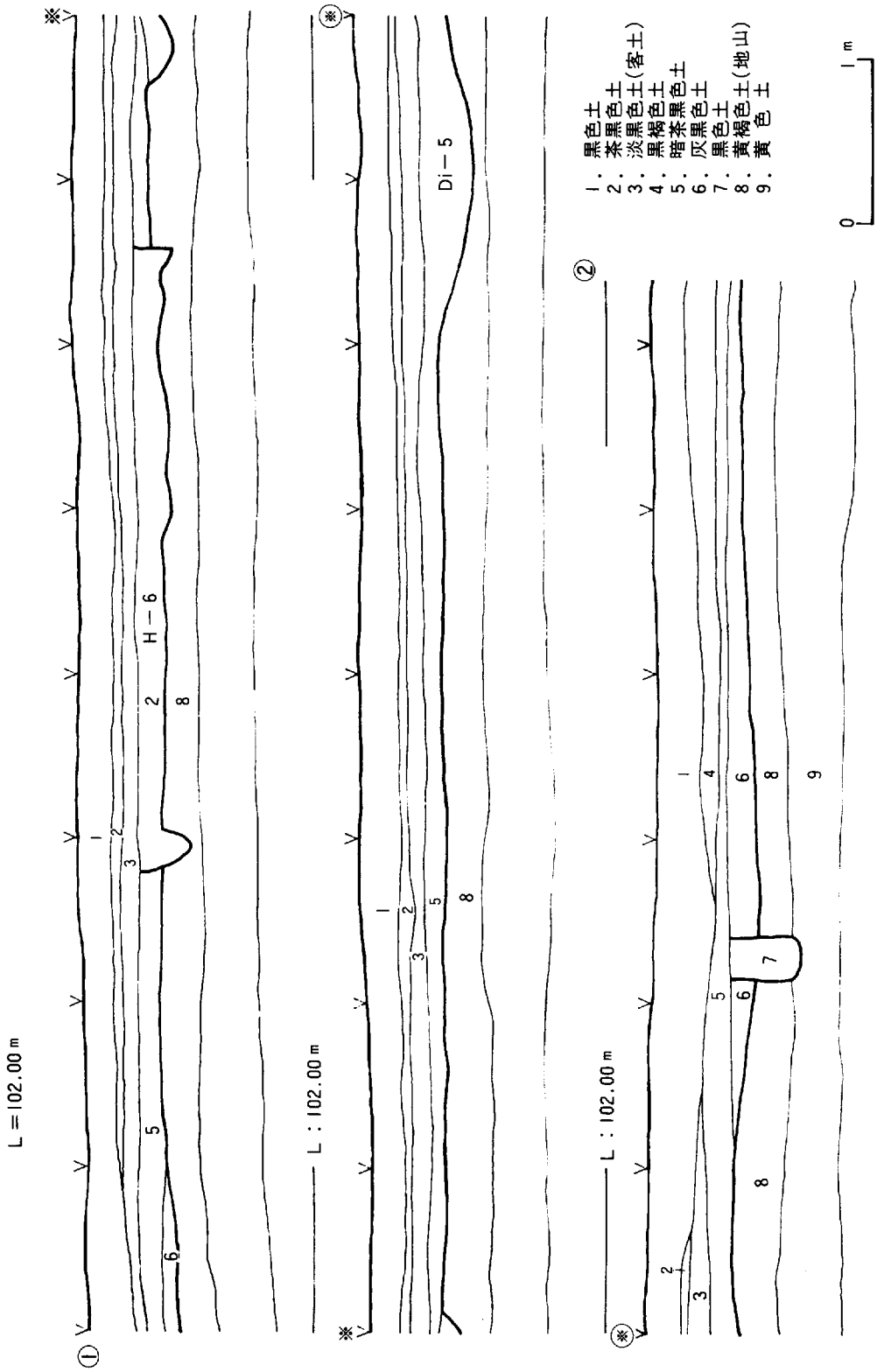
第16図　建物Ⅰ平面・断面実測図



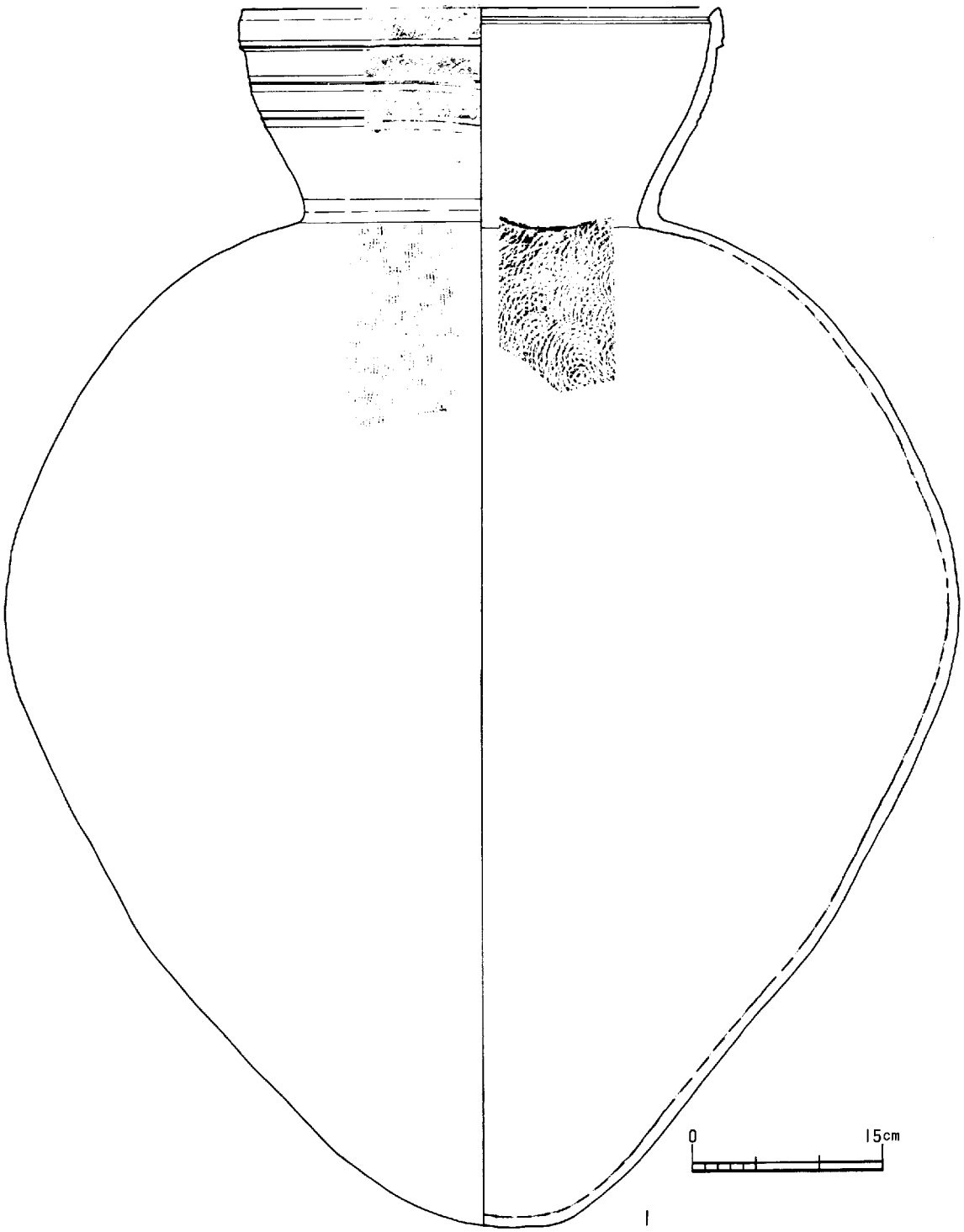
第17図　建物II平面・断面実測図



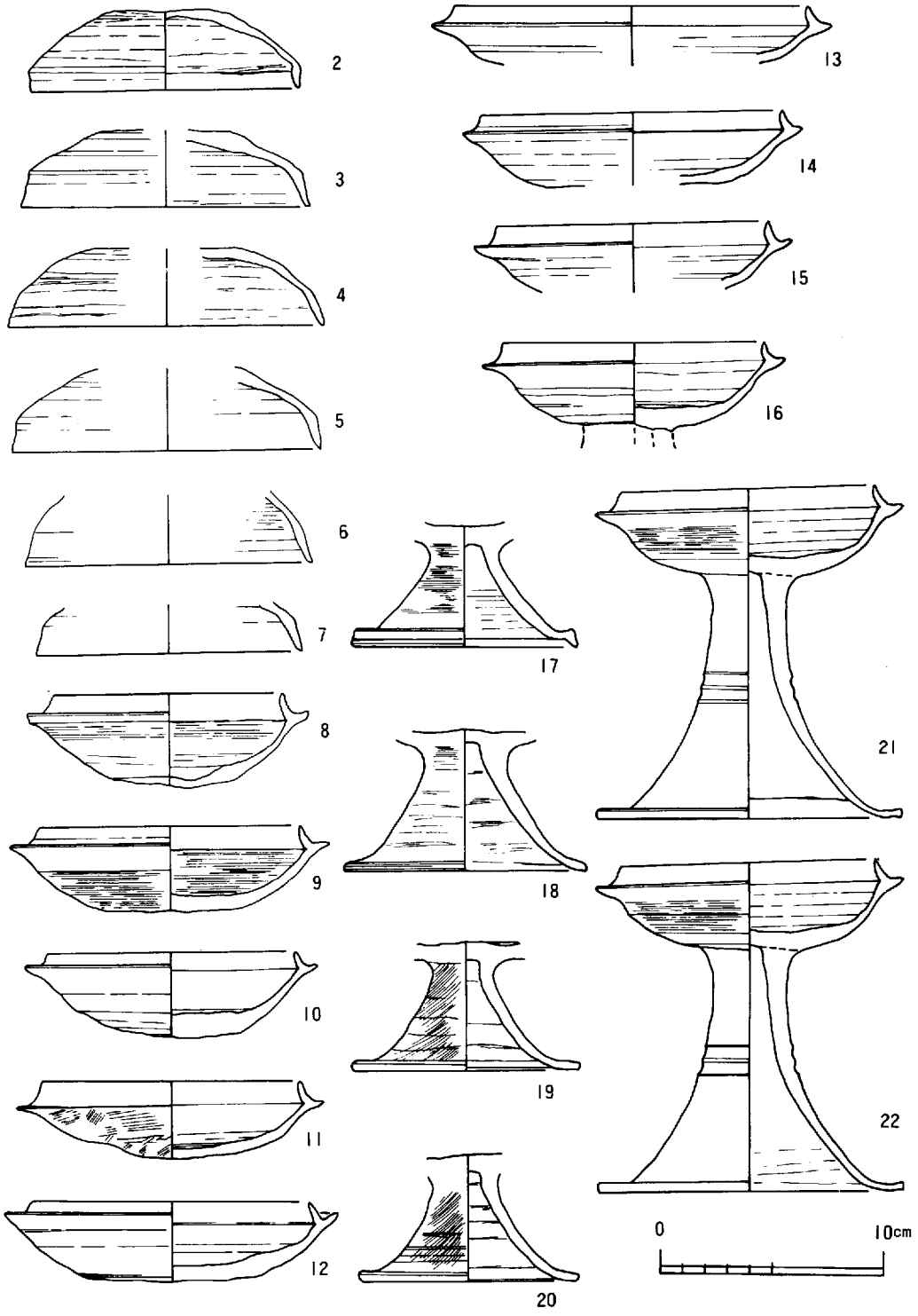
第18図　建物Ⅲ平面・断面実測図


L＝102.00m
L：102.00m
L：102.00m
H－6
Di－5
1．黒色土
2．茶黒色土
3．淡黒色土(客土)
4．黒褐色土
5．暗茶黒色土
6．灰黒色土
7．黒色土
8．黄褐色土(地山)
9．黄色土
0
1m

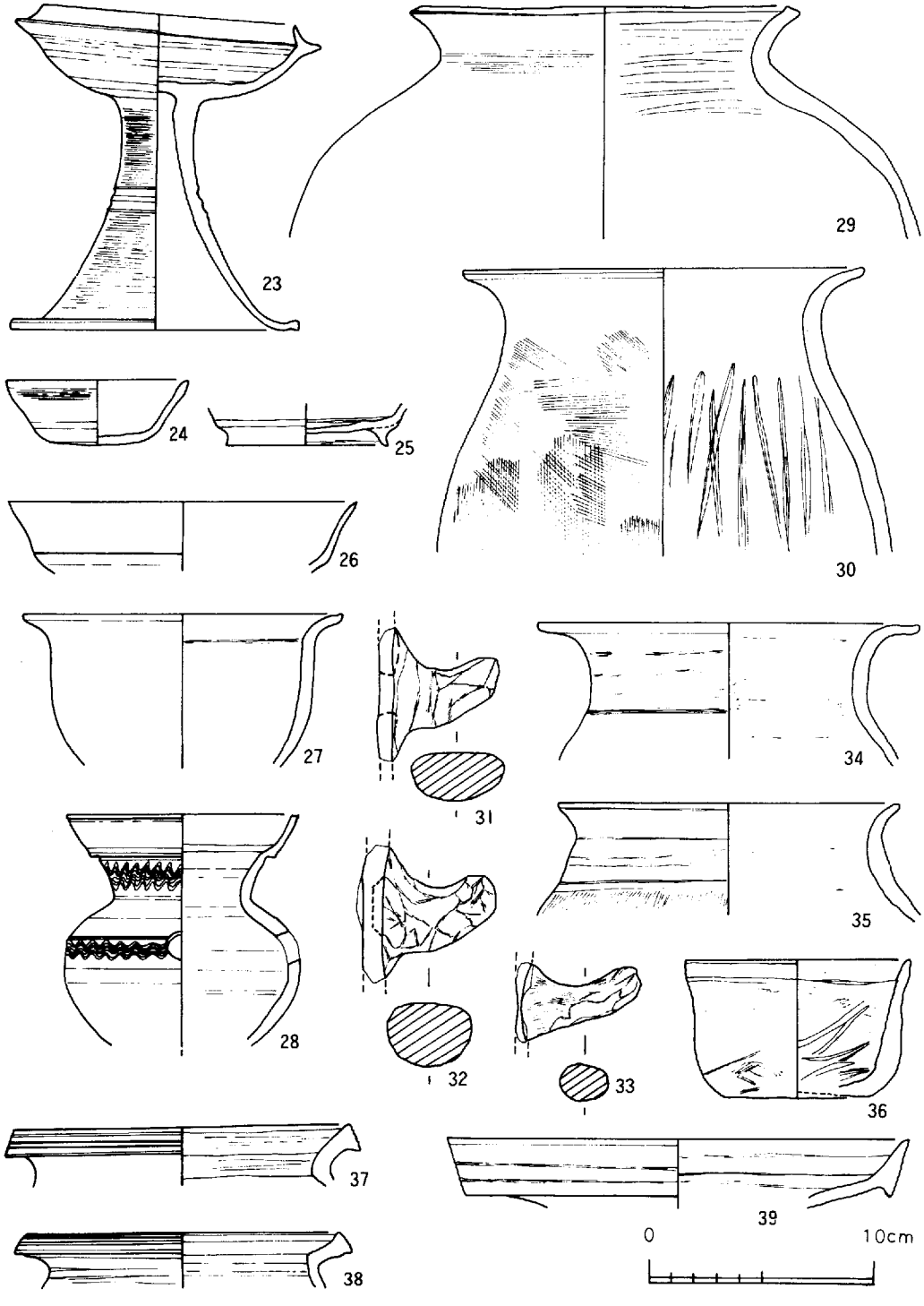
第19図 土 層 断 面 図



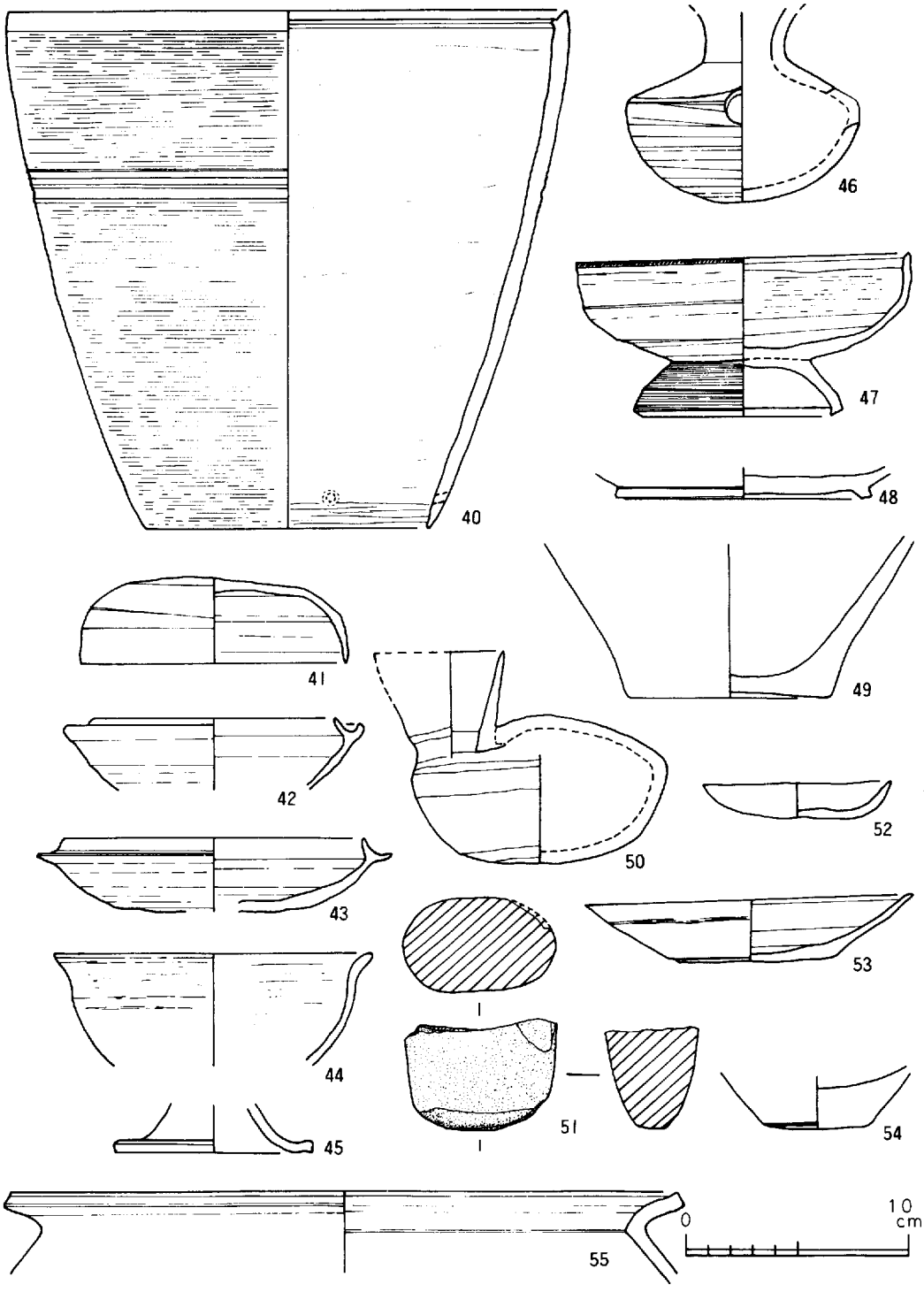
第21図　6号周湟内出土遺物（大甕）



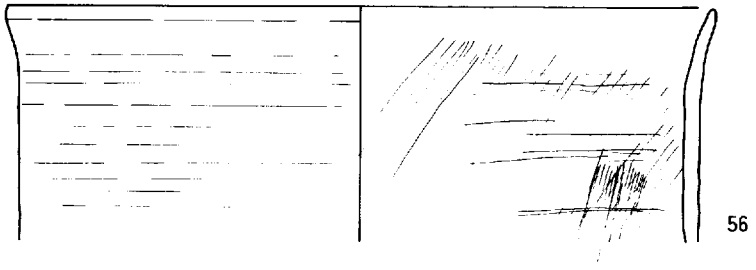
第22図　6号周湟内出土遺物

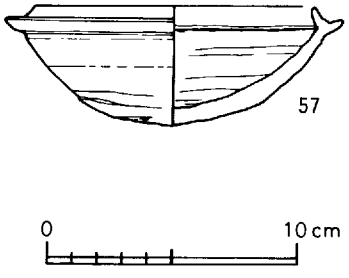


第23図　6号周湟内出土遺物

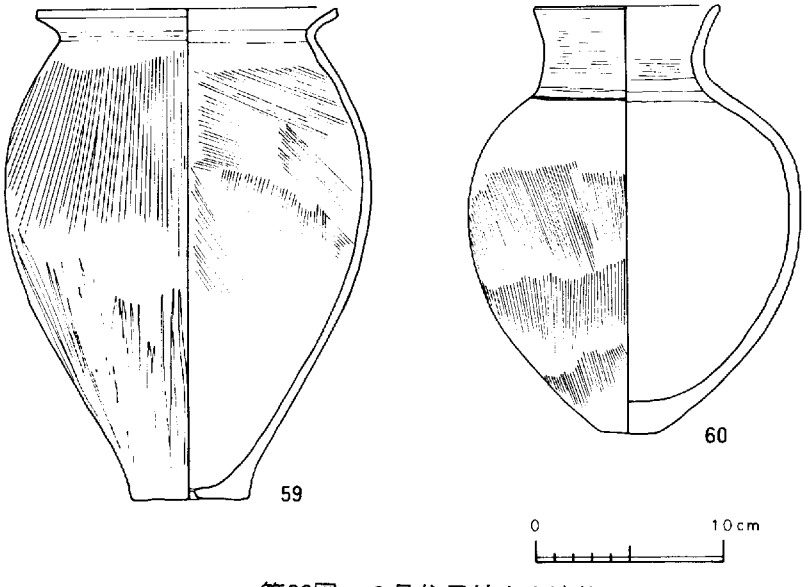


第24図　遺構内出土遺物

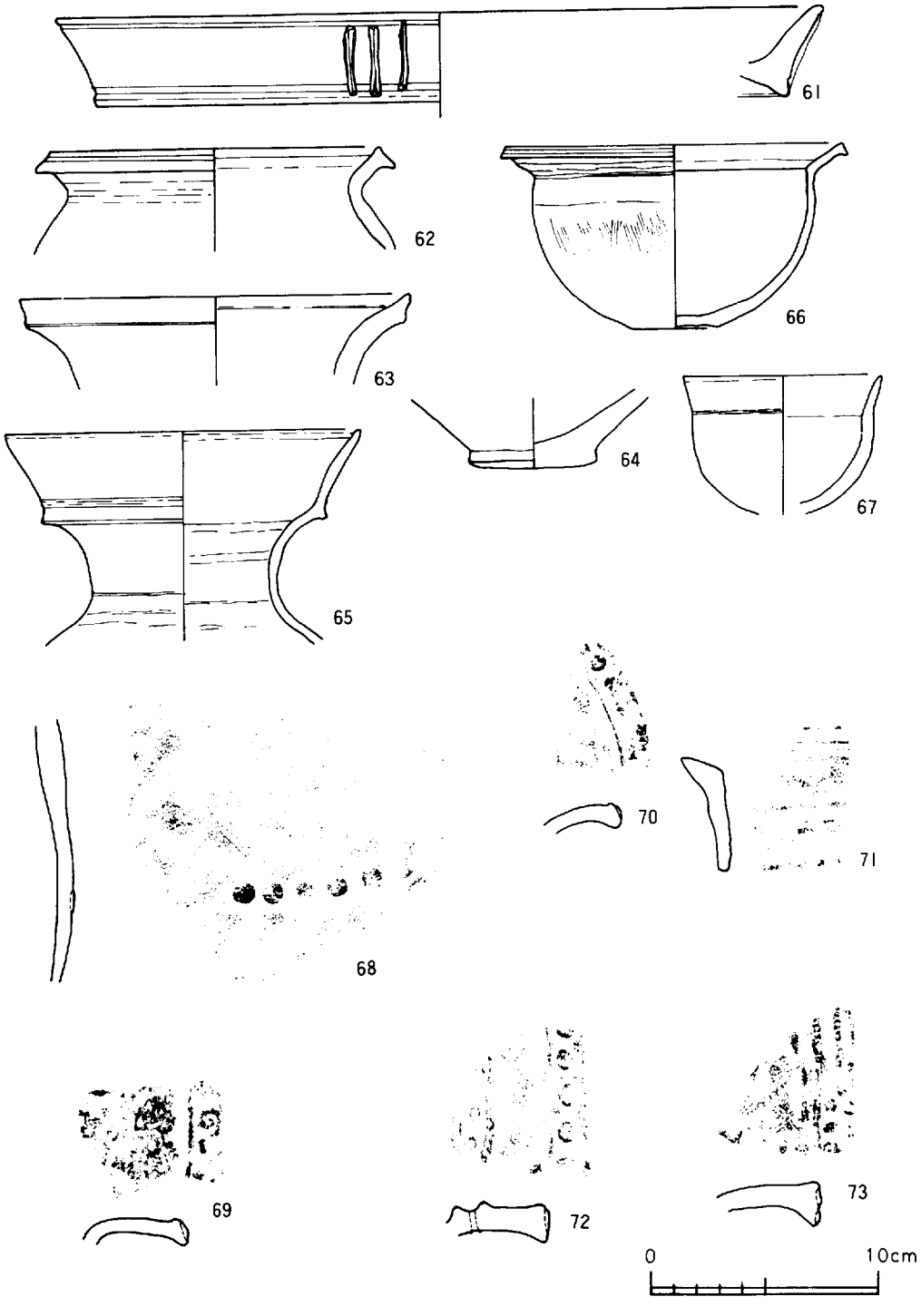




第25図　遺構内出土遺物



第26図　2号住居址出土遺物



第27図　遺構内出土遺物

周湟（古墳の墳丘が削平されたもの）は1号～6号周湟が検出されたが1号～5号周湟までの周湟内の出土遺物はまれで，6号周湟内において多量の出土があった。そのうち大甕が散乱した状況で出土したのは，被葬者を埋葬した後に意識的に打ちこわされたものと考えられる。そして周湟内に多量の山石が入っていたのは，おそらく古墳の墳丘に使われていた葺き石が落ち込んだものと考えられる。なお古墳は出土遺物からみて6世紀代に築造されたものであろう（後期古墳）。

土壙墓は十数基検出されたが土－2～土－13までは小口板，側板が確認され，その他の土壙墓では，このようなものは確認されなかった。なお，土－1からのみ遺物の出土があった。時代は平安時代後半頃のものと思われる。他の土壙墓からの出土遺物はいずれも認められなかった。よって時代は不明であるが，周湟に切られているものもあるので古墳築造以前である。

ピット－1は江戸時代の頃に作られたものであろう。ピット－2，3は土壙の床面中央部に柱穴が存在するもので，おそらく貯蔵穴として使用されたものであろう。なお出土遺物がないため時代は不明である。

建物Ⅰ～Ⅲは古墳が削平を受けた後に造られたものであって，Ⅰは正方形，Ⅱ，Ⅲは長方形の形態を呈している。なお時代はⅠ，Ⅱ，Ⅲ共に同時代のものと考えられる。

（二　宮）

狼谷遺跡遠景と周辺　（西上空より）

図版 2

狼谷遺跡全景　（上空より）

1．遠　　景　（西側，北山古墳群より）

2．　A－1・2区住居址，柱穴群　（東より）

図版 4

1．　I号周湟，溝2・3，ピットI etc　　（南より）

2．　I号ー4号周湟，溝2・3　etc　　（南より）

1．　1号2号3号4号周溝全景　　（西より）

2．　1号周溝全景　　（西より）

図版 6

1．　2号周湟全景　　（西より）

2．　1号・3号・4号周湟全景　　（西より）

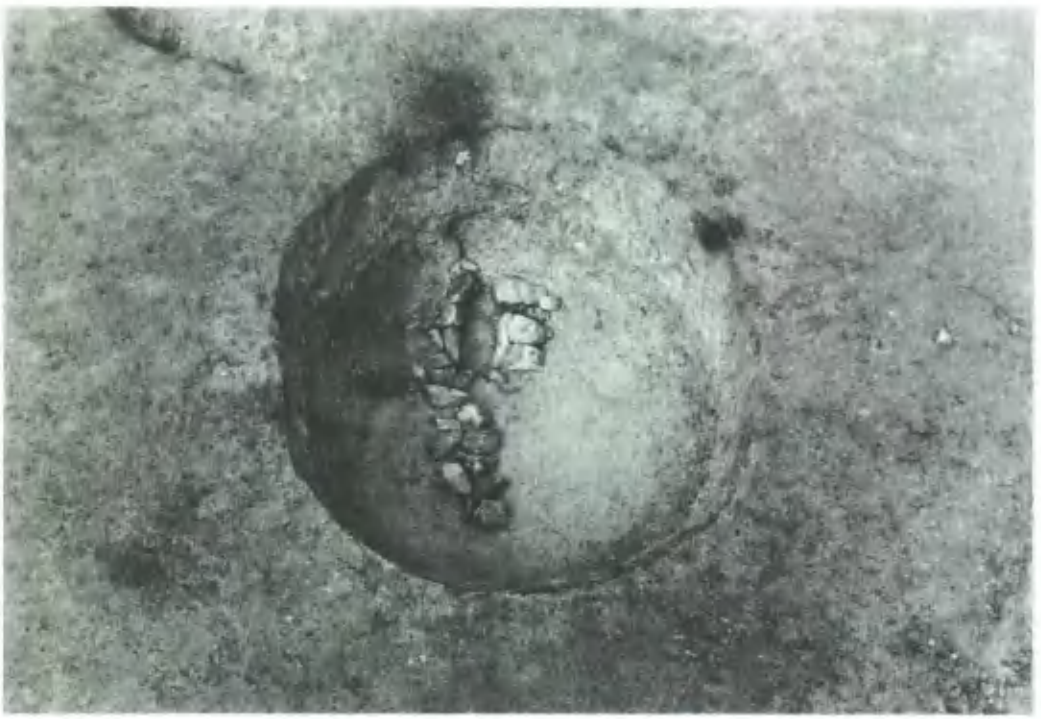
1．　遺跡全景　　（西より）

2．　遺跡全景(3号・4号・5号・6号周溝etc)　　（東より）

図版 8

1．　6号周溝全景　　（東より）

2．　6号周溝内出土大甕散布状況　　（南東より）

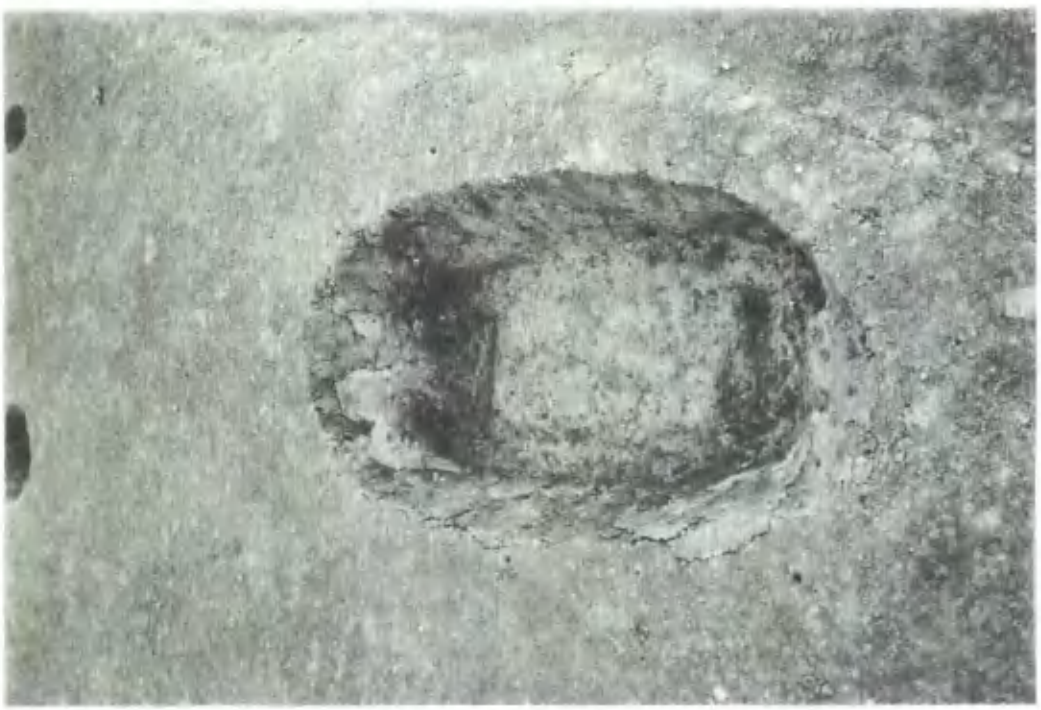


1．　ピット－1全景　　（南東より）

2．　ピット－1内石組近影　　（南東より）

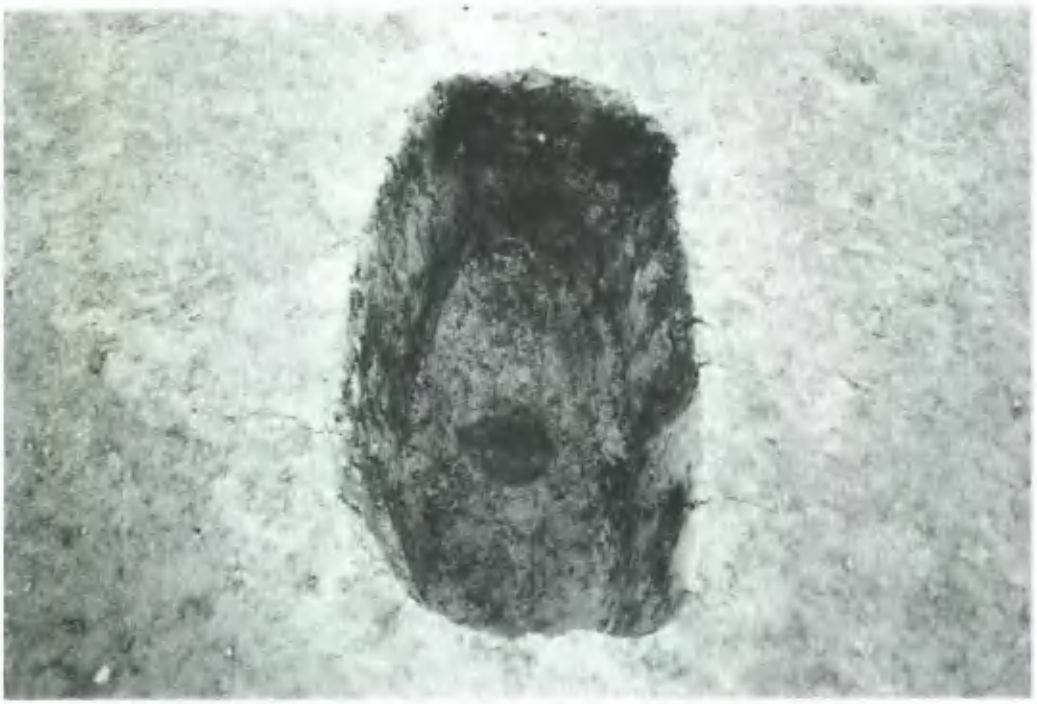
図版10

1．　土坑墓－2　（南より）



2．　土坑墓－3　（北東より）

1．　土坑墓－5　　（東より）



2．　ピット－2　　（南より）

図版12

1．　2号住居址　　（南東より）

2．　2号住居址　中央ピット内遺物出土状況　　（東より）

1．　4号住居址　（南より）

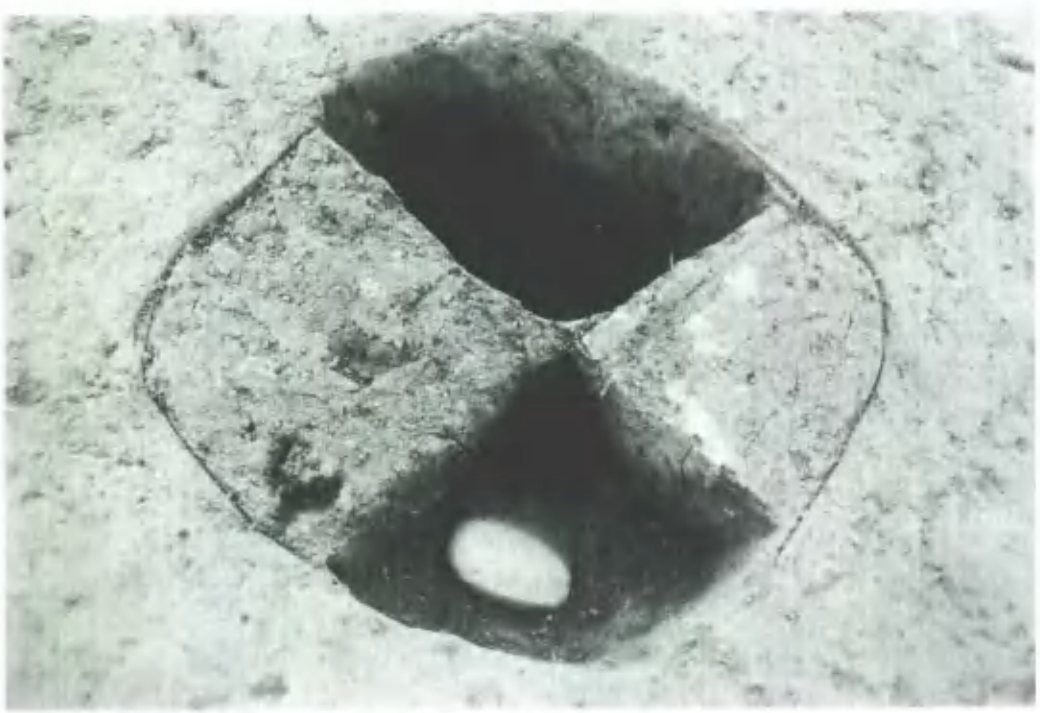
2．　5号住居址　（南西より）

図版14

1．　6号住居址　（東より）

2．　土壙墓－1内遺物出土状況　（南より）

1．　建物－1柱穴内遺物出土状況　（北より）



2．　A－2区　柱穴内遺物出土状況　（東より）

図版16

6号周溝内出土遺物

6号周溝内出土遺物

図版18

2号住居址出土遺物

土坑墓－1出土遺物

溝－1出土遺物

A－Ⅰ区　柱穴内出土遺物

建物－Ⅰ　柱穴内出土遺物

6号周溝内出土遺物

5号周溝内出土遺物

小中古墳群(5)

小中遺跡(6)

目　　次

1. 例　　言 …… 65
2. 調査の経過 …… 68
① 調査の経過 …… 68
② 日誌抄 …… 69
3. 遺構一覧表 …… 73
① 遺構一覧表について …… 73
② 小中古墳群遺構一覧表 …… 74
③ 小中遺跡遺構一覧表 …… 75
④ 小中遺跡近世墓一覧表 …… 78
4. 各調査区の概要 …… 79
① 小中遺跡の概要 …… 79
＜はじめに＞ …… 79
＜1　区＞ …… 79
＜2　区＞ …… 80
＜3　区＞ …… 81
＜4　区＞ …… 82
＜出土遺物＞ …… 83
② 小中古墳群の概要 …… 83
＜はじめに＞ …… 83
＜調査の方法＞ …… 84
＜1　区＞ …… 84
＜2　区＞ …… 84
＜3　区＞ …… 85
＜4　区＞ …… 85
＜出土遺物＞ …… 85
＜古墳出土遺物一覧表＞ …… 86
＜古墳出土土器計測表＞ …… 87
5. おわりに …… 88

1 例　　言

遺　　跡	小中遺跡（国，No.2198）	小中古墳群（国，No.2204）	合　計	備　　考
発　掘　期　間	昭和47年4月より　昭和48年6月30日まで 15ヶ月間（実働日数　367日） 1ヶ月平均　23日		15ヶ月 （367日）	1.昭和47年10月末工事用道路着工予定で調査に入る。 2.6月梅雨期は一ヶ月間整理作業。 3.11月15日小中古墳群北側半分工事用道路あけわたし。 4.12月8日小中遺跡に工事用道路あけわたし。 5.昭和48年5月末日小中遺跡1区あけわたし
発　掘　作　業　員	男　3.833人　　1ヶ月間　418人 女　2.443人　　1日平均　18名		6.276人	○勝央町内の農家の人々が主体。 ○6月，10月は農繁期で休みが多い。
調　査　担　当　者	文化課　主事　栗野克己(47.4～48.6) 〃　高畑知功(47.4～48.6) 〃　松本和男(48.5～48.6)	開発公社　技師補　大賀秋秀 〃　林　徹也 〃　森安広之 〃　小倉辰之		
実　質　発　掘　面　積	全体　6.829㎡ 1区　1,792㎡ 2区　1,444㎡ 3区　855㎡ 4区　2,738㎡	全体　3.164㎡ 1区　1,567㎡ 2区　369㎡ 3区　1,228㎡	9,993㎡	○遺跡2区ブルトーザー使用（表土除去） ○古墳群の古道部分はトレンチ主体調査
遺　　構	116遺構　古道(4)　近世墓105基	19遺構，古墳4基，古道(7)	135遺構 古墳　4 古道 近世墓105	○古道は遺跡，古墳群の路線内を縦断している ○遺構一覧表参照
遺　物 （40×70×15の箱）	140箱	20箱	160箱	津山収蔵庫（津山市田邑）にて保管
定　測　図（㌢） 55×80　ケント紙 40×55　方眼紙	190枚 平面図　77 断面図　100 etc　13	129枚 平面図　42 断面図　87	319枚	○測量のレベルは日本道路公団のものをそのまま利用する。（海抜高） ○方位は磁北を基準としたが，真北方向の方眼が入っているものがある。真北と磁北の偏位差は国土地理院5万分の1によればN6°35′W(昭和45年)である。
写　真 4×5トヨウィユー 小型ミノルタ2台	白　黒4×5判――1,452枚（12枚×122本） 白　黒　35㎜――2,188枚（36枚×83本） スライド　〃　3,860枚（遺跡 2,103，古墳1,757）		7500枚	○このうち報告書には各遺構の発掘状態が理解できるように撰別した。 小中古墳群62図版　小中遺跡 127図版　であった。ところが報告書のページ割予算の関係から両遺跡合せて93図版　撰別しなおした。
報告書作成期間	49年1月～3月（高畑） 49年7月～9月（栗野） 2人×3ヶ月＝6		1人で約6ヶ月間	1.報告書作成は担当者が同時に作成にかかれなかった。 2.遺跡面積，遺構数等には関係なく，1人3ヶ月という方法で行なわれた。 3.調査既報にとどまりがちである。
トレース遺構	終　了	終　了	完　了	
トレース遺物	鉄器3点のみ	古墳出土品のみ	一　部	
遺　物　実　測	鉄器3点のみ	古墳出土品のみ	一　部	
遺構 遺物　文章化			一　部	
遺跡の遺物 検出の考察			無	

小中古墳群小中遺跡調査要員

○は本遺跡　　（　）は他の遺跡応援

	栗野	高畑	松本	大賀	林	森安	小倉	高畑富子
47年4月	○	○		○	○			○
5月	○(天神原)	○(天神原)		○	○			○（天神原）
6月	○	○		○	○			○
7月	○	○		○（平）	○（平）			○
8月	○	○		○	○			○
9月	○	○		○（平）	○（平）			○
10月	○	○		○		○		○
11月	○	○				○（平）	○（平）	○
12月	○	○				平遺跡	平遺跡	○
48年1月	○（宮尾）	○				〃	〃	○
2月	○	○				〃	〃	○
3月	○	○				下市瀬 △（一週間）	下市瀬 △（一週間）	○
4月	○	○						○
5月	○	○	○					○
6月	○	○	○					○
7月	備中平	且原						○ 整理
8月	〃	〃						△ 〃
9月	〃	〃						
10月	(報)久米廃寺	谷尻						
11月	〃	〃						
12月	〃	〃						
49年1月	〃	○ 報告書						
2月	〃	○ 〃						
3月	〃	○ 〃						
4月	(報)西原 二宮大成	谷尻						
5月	〃	〃						
6月	〃	〃						
7月	○ 報告書	〃						
8月	○ 〃	〃						
9月	○ 〃	〃						

調査区と調査員工程表

（K栗野，T高畑，M松本，Ⓣ高畑富）

年月	小中古墳群 全体	小中古墳群 1区	小中古墳群 2区	小中古墳群 3区	小中遺跡 全体	小中遺跡 1区	小中遺跡 2区	小中遺跡 3区	小中遺跡 4区	総計
47年4月	K T				K T					2人
5月						T				2
6月										2
7月		K		K T Ⓣ						2
8月										2
9月					K		K	K		2
10月						K				2
11月		K			T	T Ⓣ	T			2
12月	K T		K	K T						2
48年1月					K T	T Ⓣ				2
2月									K	2
3月										2
4月										2
5月					M				T M	3
6月									Ⓣ	3

	小中古墳群 全体	1区	2区	3区	小中遺跡 全体	1区	2区	3区	4区	総計
実質発掘面積	3,164㎡	1,228㎡	369㎡	1,228㎡	6,829㎡	1,792㎡	1,444㎡	855㎡	2,738㎡	9,913㎡
遺構数	30	11		19	120(105)	42 (94)	5	3	70(11)	250
遺物量	20				140					160箱
図面枚数	129	41	3	85	190	60	21	7	102	319
延調査員(月)	11	2	1	7	21	8	2	1	9	32人
延作業員										6276人

- 遺構数は登録されたものによるので，一つの番号で分類されたもの（A・B・C）などは数えていない。（　）は近世墓。
- 遺物量は整理箱（70×40×15cm）による。
- 図面は登録された番号によるので一枚の用紙の中に複数の図が書かれても一枚とする。
- 延調査員，かけもち調査をした場合は配分して計算した。一人で一カ月の仕事＝1とした。
- 延作業員は一人一日仕事を1として概算した。

2. 調 査 の 経 過

①調査経過

小中古墳群および小中遺跡は，すでに全国遺跡地図に登録された周知の遺跡である。中国縦貫自動車道路線決定にあたり，本遺跡は「記録保存」を前提として発掘調査を実施した。（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告３，中総第１分冊，Ｐ10－５・６）

発掘調査は岡山県教育委員会と日本道路公団との昭和47年度分の委託契約事業の一部として開始した。当年度はトレンチ調査などにより遺跡の規模・範囲を確認のうえ正式契約をすることになっていた。また調査員不足を補うため，県開発公社から常時４名が出向，そのうち２名がＢパーティー（梶原遺跡・平遺跡・小中遺跡・小中古墳群）に配置された。（前掲書，Ｉ調査の経過，参照，Ｐ４付近），第１次の確認調査は，４月10日～６月17日まで実施し，小中古墳群は，用地外に隣接して三基の円墳が存在し，用地内には四基の円墳が確認され，合計七基の古墳によって構成されていることが判明した。さらに古道の存在や，弥生式土器を検出したことから古墳以外にも遺構が存在することを確認した。一方小中遺跡では地形の状況により当初から全面発掘調査を前提とし20m方眼を設定。これを軸にトレンチ調査を実施した。その結果北側南側共に台地上部平坦面には全面的に遺構が広がること。北西谷部分（２区）には包含層と共に住居址，柱穴が存在し，W80ｍN40ｍ付近から西北方向は遺物も少なくなり，遺構は検出できなかった。東北谷部分（３区）から２区にかけて古道を確認した。以上の結果に基づき全面発掘調査を計画し，小中古墳群では4,２５８㎡，小中遺跡では8,３３７㎡を発掘調査対象面積として算出した。

両遺跡とも昭和47年10月末に工事用道路着工が予定されていたため，調査地点の移動がはげしく調査員の負担が大きかった。12月に工事用道路が貫通すると閑静な山の中は一転して騒音とほこりに悩まされた。

47年６月～７月にかけ約一ケ月間は梅雨と農繁期のため現場作業は休み，室内作業を行なった。７月から10月末までは小中古墳群北半部を工事用道路予定地として調査開始した。併行して９月から小中遺跡の工事用道路予定地の２区・３区の調査を開始，ブルドーザーで包含層までの堆積土を除去したのち弥生時代の遺構だけをとらえるような調査をし11月末で終了した。

その間，１区の一部も工事用道路にかかるという話がでてきた。工事用道路勾配が急になることと，せまいとダンプカーのすれちがいができないため坂の頂上である１区と４区の間を広げたいという話であった。当初工事用道路は巾４ｍ，法面を入れて８ｍと聞いていたがやむを得ず14ｍに広げることにした。南側はプレハブが建っているため，１区をけずることにし，９月末～12月末までで調査を終えた。

小中古墳群の調査を先に済ませる予定もあり，業者も土砂が欲しいとの話で，小中遺跡の工事用道路敷の調査が終了してから，小中古墳群南半部の調査を実施，２月中旬に終了した。

小中遺跡では1月から表土はぎなどの作業を進め，2月から本格的に調査を開始した。1区と4区を併行して進めたが，1区は業者から採土させて欲しいとのことで5月末で明渡し4区は6月末までに調査を終えることになった。また，他遺跡の調査を終えた松本主事も5月〜6月まで調査に従事した。

7月は次の発掘現場に入るまではその準備と併行して小中遺跡の図面の通し番号などの整理をした。

報告書作成のための整理期間は昭和49年1月〜3月まで高畑が，昭和49年7月〜9月までは栗野が予定された。その間，中国縦貫道関係の遺跡では今までに最多量の遺構と図面をかかえ，遺構のトレースは１００％，遺物はせめて古墳出土のものだけでも実測・トレースすることを目標に努力した。その結果１７８枚トレースし，遺構の図はすべて完了した。遺物は古墳出土のものと鉄器の一部だけであるので今後の整理が望まれる。

②日誌抄

47年4月　中国縦貫自動車道本年度発掘調査遺跡の調査員決まる。小中古墳群と小中遺跡は，栗野克己・高畑知功と決まる。本年度は岡山県開発公社から技師補が出向し，測量などをしてもらうことになった。小中へは大賀秋秀・林徹也の2名が応援に入る。

10日　作業開始，勝央町教育委員会の協力により地元勝央町内から20名雇用した。小中遺跡4区の伐採作業開始。

・小中遺跡1区〜4区まで伐採をすませる。ＳＴＡ45＋80基点にして磁北方向に基準線とし20ｍ方眼の杭打作業をする。これにそって，巾1〜3ｍのトレンチを設定し発掘開始，住居址・柱穴をつぎつぎ検出する。トレンチ調査に併行して3号住居址発掘開始。器材小屋作成。

・小中遺跡調査開始後，栗野は前年度調査遺跡である「領家遺跡」へ4日程行き，補足調査，器材徹収作業を実施した。

5月・天神原遺跡へ応援，3日（水）〜7日（水）

・小中遺跡1区3号住居址発掘中，床面より土器3個出土，4区トレンチ断面実測，3区の古道地形測量。

・小中古墳群，伐採・地形測量，7号・8号・9号は墳丘状のものが低いので，確認のためトレンチ，7号墳は須恵器出土，盛土が存在し古墳として確認できたが，8・9号はすぐ地山になり盛土が存在しない。しかし下から溝（No.1住居址周溝）や大きな凹み（後にNo.14遺構とする）が検出された。古墳発掘に先だち慰霊祭を実施した。

・プレハブ事務所が建つ。

6月・トレンチ調査の結果をまとめ，発掘調査計画をたてる。

・小中遺跡，トレンチ調査続行。3区で古道の砂利敷検出。1区3号住居址調査。2区地形測量。

・小中古墳群1区地形測量。

・6月15日～7月14日まで現場の作業は梅雨（田植）休みとする。遺物整理。図面整理。発掘用具整備。

7月15日（土）雨があがり調査再開。

・工事用道路あけ渡しのため，両遺跡とも半々の調査を強いられる。とりあえず小中古墳群北半部より開始する。器材小屋を建て，4号墳・7号墳・No.2住居址・古道①のトレンチなどの調査開始。2区谷の部分K断面トレンチ，古道A・B・C・D・E・F断面トレンチ。3区4・7号墳などの地域，全面表土はぎ，No.3遺構検出石包丁出土。

8月・小中古墳群のみ調査。1区古道砂利敷まで掘り下げ。北半部の表土はぎ開始。凹みがあるところに東西トレンチを入れてみる。その結果住居址を発見，No.7住居址とする。

3区，4号墳主体部検出中。7号墳掘り下げ。No.2住居址十字に土手を残して掘り下げ，断面図作成。土手はずし平面図作成，床面にある凹みの下に土壙が存在する。No.3遺構掘り下げ実測完了。No.4土壙から須恵器・馬具出土，実測・写真撮影完了。

9月・小中古墳群，4号墳主体部発掘中，7号墳は旧表土（黒色土）まで発掘，さらに掘り下げる。No.2住居址の土壙12個発掘，実測し完了する。

・小中遺跡2区・3区の夏草を刈る。

2区A地点の黒色土上面まで掘り下げ遺構検出作業，ブルドーザーにより包含層上面まで排土作業をする。3区古道砂利敷検出作業。

10月・小中古墳群，2区谷K断面実測。3区4号主体部終了。墳丘盛土はがしにより方形住居址検出（No.11住居址）。7号墳墳丘下弥生遺構，No.8・9など平板測量。1区では古道①②③を掘り上げ，西方から全景写真など。No.1住居址壁溝掘り上げ実測終了。No.7住居址は土手残し床面まで掘り下げ断面図作成。さらに土手はずし平板測量し完了させる。No.14遺構掘り下げ実測完了。No.15遺構掘り上げ実測完了。

・小中遺跡，〔1区〕，2区のブルドーザーが早く済んだので雑木林の所を表土はぎしてもらう。また南端部の工事用道路部分（実際にはかからなかった）の表土はぎによりNo.9住居址と柱穴や近世墓12・13・14・15・16・17などを検出。

11月・小中古墳群No.11・12・13遺構掘り上げ調査終了。No.8・9・17遺構も調査終了。7日工事用道路部分発掘調査終了。工事用道路と未調査部分の境に有刺鉄線をはる。（請負業者による）　15日，工事用道路敷部分に大型スクレイパー入る。21日吹雪・強風，27日小中遺跡2区調査終了したので南半部の調査再開する。表土はぎ。

・小中遺跡〔1区〕No.12，13住居址表土はぎ開始掘り下げ，No.13住居址西方発掘しNo.15遺構

とする。〔2区〕A地点残りの包含層もはがし終りNo.8遺構検出実測完了，B地点トレンチ発掘実測しそれにもとずき分層発掘を試みる。D地点No.10住居址炭化材実測し，全体掘り上げ平板測量ののち完了。No.11住居址は以前トレンチにかかったもので再検出し掘り上げ実測完了。E地点は下層まで発掘，F地点谷の横断セクションはブルドーザーで掘ったあとをさらに人力で掘り下げ。けずり出し実測完了。27日A・B・C地点レベリングして2区の調査不充分ながらも終了する。勝央町文化祭（11月25日(土)・26日(日)に小中遺跡・古墳群の出土遺物や写真パネルなどを展示する。

12月・小中古墳群は南半部の調査。〔1区〕表土はぎののち古道③の掘り下げ。No.18遺構掘り下げ測量も完了。〔2区〕表土はぎ開始，遺構検出中。〔3区〕5号墳表土はぎ周溝掘り上げ。西側に住居址検出No.19とする。6号墳表土はぎ周溝掘り上げ，主体部検出。

・小中遺跡〔1区〕No.12・13住居址の調査中，No.15遺構は調査終了した。

・2区に工事用道路造成のためブルドーザーが入る。12月8日，2～3日で小中古墳群ともつながりやっと工事用道路が開通する。

1月・小中古墳群〔1区〕古道③の東端部などあと始末をして終了，〔2区〕遺構掘り下げ，〔3区〕5号墳周溝内遺物分布図作成取り上げる。提瓶一個体分だった。第Ⅱ主体部検出実測。古墳の調査完了し地山まで掘り下げる。No.21住居址検出発掘。6号墳は断面図補足，第Ⅱ主体検出し実測，遺物取り上げ，古墳は終了し掘り下げる。旧表土取り除き遺構検出。No.19住居址ほぼ掘り上げる。No.20土壙掘り上げ実測完了。

・小中遺跡〔1区〕B地点表土はぎ開始遺構検出。No.14住居址検出掘り下げる。〔4区〕草刈り，表土はぎ開始。

2月・小中古墳群，6号墳墳丘下の柱穴実測，No.19住居址実測完了，No.18・21住居址掘り下げ実測完了，2区谷底の柱穴状のもの平板測量を終了させ，以上で小中古墳群の発掘調査をすべて終了した。

・小中遺跡〔1区〕No.14住居址発掘中，〔4区〕測量用ポイント設定，A地点遺構検出作業，No.25遺構掘り上げる。No.21住居址は西側にもう一軒切り合っておりNo.26住居址とする。B地点柱穴一段下げ，No.2住居址発掘開始，No.29建物が柱穴6本でまとまった。C地点遺構検出作業，No.27住居址検出する。

3月・小中遺跡〔1区〕No.1住居址・No.19住居址調査，〔4区〕A地点柱穴半断面掘り下げたがまとまらないので残り半分の掘りあげる。No.7遺構墳丘掘り下げ。B地点，全体の平板測量，柱穴半分掘り，レベリング，No.29建物断面図作成，柱穴は残り半分も掘り下げる。C地点，No.27住居址断面実測し土手はずし，掘り上げて平板測量。ベット状遺構の下に古い住居址の周溝あり掘り上げる。D地点遺構検出し始める。柱穴一段下げ，平板測量を実施，No.51土壙実測遺物取り上げ終了。F地点北側包含層掘り下げNo.30遺構とし掘り上げる。G

地点遺構検出No.30遺構のつづきも発掘。H地点表土はぎ開始。

・今月は強風，みぞれ・雪・雨などが8日間程あった。作業がやりにくい。

4月・小中遺跡〔1区〕調査続行中，〔4区〕A地点No.7遺構断面実測，No.21・26住居址発掘開始。No.22・23住居址も発掘開始。B地点No.24住居址掘り始める。C地点No.27住居址補足測量し完了，No.28住居址も実測し完了。D地点全体の平板測量，G地点表土はぎ続けて遺構検出，土壙・溝・柱穴など検出。H地点表土はぎ終了遺構検出，I地点（4区の西南方向にある取合道部分である。）器材小屋を移転して表土はぎ開始。

5月・小中遺跡〔1区〕近世墓などの実測処理し全景写真撮影。調査終了〔4区〕A地点No.7遺構の中心土壙掘り上げ土手はずし，旧表土下の柱穴掘り上げ，No.22・23住居址実測完了。B地点No.2住居址断面図補足，No.24住居址実測完了。C地点No.47・48土壙掘り下げ断面図作成終了。No.79建物実測，No.5・6住居址発掘開始，D地点平板測量しレベリングも終了。G地点No.60・61・62・63・95土壙墓群発掘開始。I地点ではNo.66・67・68・69住居址を発掘実測する。古道③発掘敷石検出，No.80・82建物実測，全域の平板測量済ませる。

・工事請負業者などより工事行程上早期調査を終了するよう重なる要望により，1区5月末で明渡すこととした。

6月・小中遺跡，（11日）請負業者により1区へブルドーザーなどの重機が入る。〔4区〕A・B・C地点の柱穴すべて掘り上げる。No.23住居址，貼床下の周溝掘り上げ，No.85・86建物実測，E・F・G・H地点など全体の平板測量，レベリングをする。4区の柱穴検討し，建物としてまとまるもの約17棟確認し断面図作成する。土壙16個も掘り上げ実測，No.96壺棺が検出される。I地点ではNo.69住居址が道路下に残る可能性があるため埋戻しをする。古道の断面図作成。（21日）出土遺物を田邑収蔵庫へ運搬。（28日）発掘用器材を田邑収蔵庫へ運ぶ。

7月1日No.5住居址，平板とレベリング補足，No.105土壙断面清掃写真撮影，実測，これで小中遺跡の発掘調査を終る。一年三ケ月間削り続けた土地とも今日で別れ次の発掘調査へ。

7月～8月，津山市田邑収蔵庫において，出土遺物を地点別，遺構別に積みあげる。図面・写真などの記録を分類整理する。

49年1月～3月，高畑の整理期間，遺構のトレース，全体図作成，写真整理など。

49年7月～9月，栗野の整理期間。写真整理，各遺構のトレース，調査経過の文章化，高畑は発掘調査に従事しながら遺構一覧表の作成，遺物の整理など。報告書作成作業を行なう。

3. 遺 構 一 覧 表

①遺構一覧表について

一覧表は，発掘調査中に作成したものに，若干の補足訂正を加えたものである。特に遺構の時期については出土遺物の整理・実測をしていないものが大半なので，今後の検討が必要と思われる。

個々の遺構の位置は，遺構配置図を参照されたい。小中遺跡では，各調査区のなかを中地区設定している。それは，20mの方眠を基本グリッドとして，それぞれ1区A地点，1区D地点などとしている（第5・49図）。

小中古墳群を南北に区分しているのは，調査中途において，北側を工事用道路敷として明渡した後，期間をおいて南半分の調査を実施したことによるものである。

小中古墳群の古道は，1区西半部では①〜③まで明確に検出することができたが，1区東半部では，No.5・6・16・17と番号を付した溝状の遺構について，番号を付した後に古道の遺構と一連のものであることが判明した。そのため古道の番号のつけ方が，変則的になってしまった，しかしあえて修正していない。

小中遺跡では，近世墓が多いため独自の番号を附した。また「土壙O状」としたものは弥生時代の住居址によって切られたものがあり，弥生時代よりさかのぼる時期のものであり，他の遺跡で，縄文式土器が出土した例がある。

② 小中古墳群遺構一覧表

番号	種類	地区	発掘担当者 ○印は報告書担当	図番号	図版番号	時期・備考
1号墳	古墳	用地外				古墳時代　未調査17m×4m
2号墳	古墳	用地外				古墳時代　未調査16m×1.5m
3号墳	古墳	用地外				古墳時代　未調査13m×1m
4号墳	古墳	3区北	○高畑	14～19	6～20	古墳時代後期　6世紀後半 12.4m×1m
5号墳	古墳	3区南	○高畑	21～23・30	6・21～30	古墳時代後期　6世紀後半13.8m×1.4m
6号墳	古墳	3区南	○栗野	24～28	6・30～37	古墳時代後期　6世紀後半 12m×0.9m
7号墳	古墳	3区北	○高畑(富)	29・30	6・38～42	古墳時代後期　6世紀後半 9.9m×0.9m
	古道 ①		○栗野	1・5～12	2～5	平安時代末～鎌倉時代
	古道 ②		○栗野			〃　〃
	古道 ③		○栗野，高畑(富)			〃　〃
No.1A	住居址	1区北	○栗野，高畑(富)	31・34		弥生時代
1B		1区北	○栗野	31・34		弥生時代
2	住居址	3区北	○栗野	35～37・48	49・50	弥生時代　終末期
3A	土壙	3区北	○栗野	38		弥生時代？
3B	土壙	3区北	○栗野	38		弥生時代？
3C	土壙	3区北	○栗野	38		古墳時代
4	土壙墓	3区北	○栗野	39・41	44	古墳時代後期　6世紀後半
5	古道	1区南	○栗野，高畑(富)	5・11		平安時代末～鎌倉時代
6	古道	1区南	○栗野，高畑(富)	5・11		平安時代末～鎌倉時代
7	住居址	1区北	○栗野	42	51～53	弥生時代後期
8	住居址？	3区北	○高畑(富)	44	43－2	弥生時代
9	住居址？	3区北	○高畑(富)	4		弥生時代
10	土壙墓	3区北	○栗野	38	45－2	古墳時代
11	住居址	3区北	○高畑	43	54・56	弥生時代　後期
12	住居址？	3区北	○高畑	43	55・56	弥生時代　後期
13	住居址？	3区北	○高畑	43	55・56	弥生時代　後期
14	粘土採掘穴	1区北	○栗野，高畑(富)	32・34	48－1	弥生時代？
15	土壙	1区北	○栗野	13	45－1	弥生時代
16	古道	1区北	○栗野	5・11		平安時代末～鎌倉時代
17	古道	3区北	○高畑(富)	2・4	43－1	平安時代末～鎌倉時代
18	土壙	1区南	○高畑(富)	45	48－2	弥生時代
19	住居址	3区南	○栗野	46	57～59	弥生時代　後期
20	土壙	3区南	○栗野	40		平安時代末～鎌倉時代
21	住居址	3区南	○高畑	47	60～61	弥生時代　後期
22	土壙	3区南	○高畑	2・4	60・61－1	古墳以降
23	柱穴	3区南	○高畑	2・4	60	弥生時代？

③小中遺跡遺構一覧表

遺構No.	種類	地区	地点	発掘担当者 ○印は報告書担当	図番号	図版番号	時期・備考
No.1	住居址	1	E	○高畑	8	7	弥生時代　後期
2	住居址	4	B	○栗野	67	74・112	弥生時代　中期中葉
3	住居址	1	A	○高畑	9	8・9・26	弥生時代　後期
4	住居址	1	E	○高畑	10	10	弥生時代　中期
5	住居址	4	G	松本　○高畑	69	75・76	弥生時代　後期終末
6	住居址	4	E	○高畑	70	77～82	弥生時代　後期終末
7	塚	4	A	○栗野	126～128	123・124	鎌倉時代　以降？
8	溝と柱穴	2	A	○栗野	67・112	60－2	弥生時代　中期
9	住居址	1	B	栗野	11	11・12	弥生時代　後期
10	住居址	2	D	○栗野	60・61	54～58	弥生時代　中期中葉
11	住居址	2	D	○栗野	62	54・59	古墳時代　前期
12A	住居址	1	F	○高畑	12	13・14・15	弥生時代　後期
B	住居址	1	F	○高畑	12	13・14・15	〃
C	住居址	1	F	○高畑	12	13・14・15	〃　終末期
13	住居址	1	F	○高畑	12	14～16	弥生時代　中期
14	住居址	1	B	○高畑(富)	13	18～20	弥生時代　後期
15	溝状土壙	1	F	○高畑(富)	14	21・22	弥生時代終末期（住居址か？）
16	住居址？	2	C	○栗野	51	61－2	弥生時代　中期中葉
17	土壙O状	1	B	○高畑	23		
18	住居址	1	B	○高畑(富)	15	23	弥生時代　中期
19	住居址	1	E	○高畑(富)	16	24・25	弥生時代　後期
20	土壙	1	F	○高畑	22	30	弥生時代
21	住居址	4	A	○栗野	68	83	弥生時代　中期
22	住居址	4	A	○栗野	71	84－1	弥生時代　中期
23	住居址	4	A	○栗野，松本	73	85～87	弥生時代　後期
24	住居址	4	B	○栗野	72	84－2	弥生時代　後期
25	階段状遺構	4	A	○栗野	129	125・126	平安時代～鎌倉時代
26	住居址	4	A	○栗野	68	83	弥生時代　後期？
27	住居址	4	C	○栗野	74・75	88～90	弥生時代　後期
28	土壙	4	C	○栗野	130	88－2	弥生時代　後期
29	建物	4	B	○栗野	104	112－1・113	弥生時代　後期
30	堀	4	CFG	○栗野	131	120－1・121	弥生時代　後期
31	土壙O状	1	F	○高畑	24	31－1	
32	土壙O状	1	F	○高畑	27	32－1	
33	土壙O状	1	B	○高畑	26	32－1	
34	土壙O状	1	E	○高畑	25	33・35	
35	土壙O状	1	E	○高畑	28	33・34－1	
36	土壙O状	1	E	○高畑	29	32－2・33	
37	土壙O状	1	F	○高畑		31－2・35	
38	土壙O状	1	D	○高畑	30	35	
39	土壙O状	1	D	○高畑	31	34－2・35	
40	土壙O状	1	E	○高畑	32		

遺構No.	種　類	地区	地点	発掘担当者 ○印は報告書担当	図番号	図版番号	時　期・備　考
No.41	土壙O状	1	H	○高畑	33	28－2	
42	土壙墓	1	G	○高畑	36	36	平安？中世
43	建物跡	1	E	○高畑	17	27	弥生時代
44	柱穴列	1	E	○高畑	18	27	弥生時代
45	土壙墓	1	E	○高畑	37	37	弥生時代　後期
46	溝	1	E	○高畑		28－2	弥生時代？
47	土壙O状	4	C	○栗野	80	98	
48	土壙墓	4	C	○栗野	80	98・99－1	弥生時代
49	土　壙	4	D	○栗野	81	99－2・114-2	
50	土　壙	4	B	○栗野	82	100－1	
51	土壙墓	4	D	○栗野	83	100－2	弥生時代　後期
52	土壙O状	4	C	○栗野	84	101－1	
53	土　壙	4	C	○栗野	85	101-2・119-1	
54	土壙O状	4	D	○栗野	86	102－1	
55	土壙O状	4	C	○栗野	87	102－2	
56	土　壙	4	D	○栗野	88	103－1	
57	土　壙	4	G	○栗野	89	103－2	
58	土　壙	4	G	○栗野	90	104－1	
59	溝	4	G	○栗野	105	114－1	平安時代末～鎌倉時代頃
60	土壙墓	4	G	松本　○栗野	91	104-2・114-1	弥生時代　後期
61	土壙墓	4	G	松本（○栗野）	92	105・106・114-1	弥生時代　後期
62	土壙墓	4	G	松本（○栗野）	93	107・114-1	弥生時代　後期
63A	土壙墓	4	G	松本（○栗野）	94	108-1・114-1	弥生時代　後期
B	土壙O状	4	G	松本（○栗野）	94	108-1・114-1	
64	土　壙	4	H	○栗野	95	108－2	
65	土　壙	4	H	○栗野	96		
66	住居址	4	I	松本（○栗野）	76	91	弥生時代
67	住居址	4	I	○栗野	77・78	92・94－1	弥生時代　中期
68	住居址	4	I	○栗野	77・78	93－1・94	弥生時代　中期
69	住居址	4	I	○栗野	79	95～97	弥生時代　後期
70	土壙墓	4	A	○栗野	97	109－1	弥生時代
71	土　壙	1	H	○高畑		28－2	
72	土　壙	1	H	○高畑	34	28－2	
73	土　壙	1	H	○高畑	34	28－2	
74	溝	1	H	○高畑	19	28－2	
75	土　壙	1	H	○高畑		28－2	現　代？
76	土　壙	1	H	○高畑		28－2	現　代？
77	土　壙	1	H	○高畑	34	28－2	
78	土　壙	1	G	○高畑	35	28－2	
79	建　物	4	D	○栗野	106	114－2	弥生時代
80	建　物	4	I	○栗野	107	115－1	弥生時代
81	土壙墓	3		○栗野	64	70	古墳時代？
82	柱穴列と溝	4	I	○栗野	108	115－2	弥生時代

遺構No.	種　類	地区	地点	発掘担当者 ◦印は報告書担当	図番号	図版番号	時期・備考
No.83	土壙O状	4	I	◦栗野	98	109−2	
84	土壙O状	4	I	◦栗野	99	110	
85	建　物	4	A	◦栗野	109		弥生時代
86	建　物	4	A	◦栗野	110		弥生時代
87	建　物	4	A	◦栗野	111	116−1	弥生時代
88	建　物	4	AB	◦栗野	112	112	弥生時代
89	建　物	4	C	◦栗野	114	116−2・117	平安時代末〜鎌倉時代
90	建　物	4	D	松本（◦栗野）	113	118−1	弥生時代
91	建　物	4	D	松本（◦栗野）	115	118−2	弥生時代
92	建　物	4	D	◦栗野	116	118−2	弥生時代
93	建　物	4	C	◦栗野	118	101−2・119−1	弥生時代
94	建　物	4	C	◦栗野	117	119−1	弥生時代
95	土壙墓	4	G	松本（◦栗野）	91	104−2・114	弥生時代
96	壷　棺	4	G	松本（◦栗野）	100	111−1	古墳時代
97	建　物	4	G	松本（◦栗野）	119	119−2・119	弥生時代
98	建　物	4	G	松本（◦栗野）	119	119−2・119−1	弥生時代
99	土　壙	4	H	◦栗野	101	111−2	弥生時代
100	土壙O状	4	H	◦栗野	102		
101	建　物	4	B	◦栗野	120	118−1	平安時代末〜鎌倉時代
102	建　物	4	B	◦栗野	121	112	弥生時代
103	建　物	4	C	◦栗野	122		弥生時代
104	建　物	4	D	◦栗野	123		弥生時代
105	土壙O状	4	E	◦栗野・高畑	103		
106	住居址	1	A	◦高畑	7・9	17	弥生時代
107	土　壙	1	F	◦高畑	35		
108	柱穴列	1	G	◦高畑	20		弥生時代？
109	建　物	1	F	◦高畑	21	29−2	弥生時代？
110	柱穴列	1	F	◦高畑			弥生時代？
111	柱穴列	4	E	◦栗野	124		弥生時代
112	柱穴列	4	I	◦栗野	125		弥生時代
113	柱穴列	1	F	◦高畑	18	29−1・28−1	
114	柱穴列	4	G	◦栗野	105		弥生時代
115	土　壙	4	I	◦栗野	78		
116	炉　址	4	E	◦栗野	124		
117	古道①	3		◦栗野	} 58・59	} 64〜69	平安時代末〜鎌倉時代
118	古道②	3		◦栗野			〃　〃
119	古道③	4	I	◦栗野	66	93−2	〃　〃
120	古道④	2	A・B・D	◦栗野	48・49	60−1	〃　〃
	柱　穴	1		} 1040個			
		2					
		3					
		4					

④ 小中遺跡近世墓一覧表

番号	規模（cm）	形	遺物	石	備考
1	148× 60×38	長方形	無	無	2を切り作られている
2	× 50×38	〃	〃	〃	
3	113× 58×36	〃	〃	〃	
4	118× 52×10	〃	〃	〃	No.3住居址を切る
5	130× 56×22	〃	〃	〃	〃
6	150× 50×24	〃	〃	〃	〃
7	168× 48×28	〃	〃	〃	〃
8	143× 85×38	〃	〃	〃	〃
9	80× 72×36	円形	かんざし(1)	〃	曲物状の土層平面
10	140× 55×18	長方形	無	〃	南巾が北巾より10cm広い
11	40× 38×50	円形	〃	3石	No17遺構を切る
12	107× 36× 8	長方形		6石	No.9住居址を切る
13	42× 42×20	円形			No.9住居址を切る
14	83× 58×30	長方形	無	3石	蓋石か？
15	93× 58×32	〃	〃	3石	〃
16	58× 50×26	〃	〃	3石	
17	97× 65×26	〃	〃	無	
18	145× 90×38	〃	〃	10石	No12住居址を切る
19	113× 72×44	〃	〃	無	〃
20	112× 91×52	〃	キセル 銭	〃	No12住居址を切る
21	98× 56×60	〃	無	8石	
22	72× 52×16	楕円形	〃	無	No12住居址を切る
23	135× 98	長方形	〃	〃	
24	110 × 65×26	楕円形			
25	83× 65	長方形	無	無	
26	105× 60×32	〃	〃	有	No37を切る
27	73× 50×10	方形	〃	無	〃
28	120× 101×42	長方形	〃	〃	
29	135× 72×40	〃	銭（3枚） 鉄器未製品	〃	
30	74× 52×28	〃	〃 無	〃	
31	125× 92×62	〃	〃	10石	
32	96× 57×26	〃	〃	無	
33	64× 62	方形	〃	〃	
34	82× 51×20	長方形	〃	7石	
35	174× 50×40	〃	〃	無	
36	120× 86×60	〃	鉄製品	1石	No37を切る
37	55×35×18	〃	無	無	
38	128× 93×60	〃	〃	3石	No14住居址を切る
39	116× 82×40	〃	銭（1枚）	無	〃
40	137× 80×54	〃	鎌，木質部	〃	〃
41	91× 76×40	円形	無	2石	
42	108× 56×28	長方形	〃	無	
43	110× 59×46	〃	銭	〃	44を切る
44	98× 88×60	円形	無	〃	43以前
45	96× 71×50	長方形	〃	無	
46	85× 48×22	〃	〃	〃	
47	84× 64×40	〃	〃	4石	
48	111× 76×48	〃	鉄製品	無	
49	99× 73×48	〃	無	〃	
50	132× 59×50	長楕円	〃	〃	
51	102× 74×42	長方形	〃	〃	
52	135× 94×52	〃	〃	151石	土壙内に石が多量にある

番号	規模（cm）	形	遺物	石	備考
53	63× 62×38	円形	（十人形十銘、鯉）銭	5石	子供の墓か
54	95× 51×26	長方楕円	無	無	
55	101× 54×33	長方形	無	1石	
56	125× 51×34	〃	耳かき(1)キセル(2)人骨硯(1)皮ブクロ(1)		硯のうらに「丹之工」と刻字
57	118× 52×30	〃	無	無	No.32を切る
58	146× 80×34	〃	〃	〃	〃
59	127× 50×30	〃	〃	〃	〃
60	88× 52×16	〃	〃	〃	
61	97×61× 8	〃	〃	〃	
62	95×64×40	〃	〃	3石	
63	94× 45×30	〃	獣骨	無	
64	93× 66×10	楕円形	無	〃	
65	113× 45×30	長方形	鉄鎌	〃	
66	133× 60×42	〃	無	〃	
67	62× 60×40	円形	〃	〃	
68	75× 45×38	楕円	〃	2石	
69	146× 103 ×50	長方形	〃	無	
70	130× 64×20	〃	無	〃	
71	× 46×20	〃	〃	〃	半分のみ発掘
72	123× 85×30	〃	〃	3石	No18住居址を切る
73	170×26		〃	無	半部のみ発掘
74	115× 92×46	長方形	〃	〃	
75	137× 66×48	〃	〃	〃	
76	88× 50×44	〃	〃	〃	
77	70× 34×16	〃	〃	3石	
78	~~105×107×68~~	~~円形~~	~~〃~~	~~有~~	~~半分のみ発掘~~
79	70× 55×36	楕円形	〃	6石	
80	133× 70	〃	〃	8石	
81	70× 42×12	〃	〃	無	
82	59× 52×14	方形	〃	〃	
83	71× 59×14	長楕円	獣骨	〃	
84	44×20	長方形	〃	〃	No14住居址を切る
85	60× 48×26	円形	〃	2石	
86	26				
87	90×31	長方形	骨（動物）	無	
88	16				
89	75× 55×20	長方形	牛骨		
90	70× 35×16	〃	牛骨		
91	欠番				
92	104× 102×				掘らず
93	120× 110×				〃
94	112× 64×				〃
95	108× 105×				〃
96	114× 114×				〃
97	88× 68×		包丁，鎌	6石	下まで掘らず
98	83× 83×				掘らず
99	121× 111×				〃
100	127× 108×				〃
101	127× 117×				〃
102	140×(100)×113		銭・キセル・火打鎌	石有	半分のみ，用地外
103					
104					
105					

・規模の数字は縦、横、深さの順である。

4. 各調査区の概要

①小中遺跡の概要

＜はじめに＞　滝川の左岸に分布する第三紀丘陵は標高２７０ｍの間山(はしたやま)の南側に樹枝状に開析されている。丘陵の最高部は標高１３０ｍ前後で，南へゆるく傾斜して勝間田の低地と接している。この丘陵上は遺跡・古墳の分布が多く，本遺跡をはじめ集落址の存在が知られている。

本遺跡は東に鍵(かぎ)池の谷，西に轟(とどろき)池の谷によって開析された南へのびる丘陵のつけ根部に位置している。さらに支谷が東西から侵食して複雑な地形となっている。調査対象地域は畑地，山林である。道路用地が丘陵を横断しており，調査対象地域約8,０００㎡を便宜上４地区に区分した。

南北の農道を中心に北西丘陵部分を１区としその南側の西へ開く谷を２区，東へ開く谷を３区，その南側の丘陵部分を４区とした。

＜**１区**＞（北西の台地）　この丘陵部は，２区の西に向って開口する谷方向に，南北線Ｎ40Ｗ20附近よりなだらかな傾斜をもっており，発掘調査前までその全面が畑地として活用されていた。そのため，遺構は多分に削平をうけており，耕作土（20cm）を除去した段階にて黄褐色土（地山）に掘りこんだ遺構が検出された。特にＡ，Ｂ，Ｃ，Ｄ，Ｅ地点（平担地）にその傾向がみられ，又Ｆ，Ｇ，Ｈ地点の平担より傾斜に向う所では黒色土層の堆積がみられ，その下部より弥生期の遺構を確認した。１区南側では旧地形が古道により削平をうけ，No.９，No.15等の遺構が破壊された状態で検出された。No.１，３，４，８等の住居址も壁を半分位削平で失っている。

南北線Ｎ40Ｗ20より東側平担地に近世墓が，約90基みられる。この地を墓地として使用していた記憶は附近の人達にもなく，おそらく明治以前に墓地として使用していた可能性が強い。

これらは大半が長方形のプランをもち，おおよそ南北に長軸をとっている。中には円に近いプランをもつものもいくらかみられ，内部には古銭，かんざし，耳かき，硯，釘，木片，キセル，酒杯，鎌，焼物（人形，鯉，土鈴）（注）等が副葬されている。

土壙Ｏ状は，１，４区にみられ，１区には12基これは平面形で黒色土が輪のようになっており，その中に黄色土がみられ，すり鉢状の土拡となり，黒色土は壁面にそって土壙底まで広がっている。その上部に黄色土が入っている。

小中遺跡では，弥生時代中期の住居址より古いことが確認された。

他の遺跡については落合町西原遺跡，津山市天神原遺跡，美作町狼谷遺跡，北房町備中平遺跡などで検出されたものと同じ性格のものであろう。

（注）　近世土壙墓No.53内より検出された副葬玩具は，香川県高松市の福善寺，万日ケ原，西方寺等の改葬の際に出土したものと類似しており，これらの墓碑には，正徳元年（１７１１），享保，安永７年（１７７８），文明８年（１７８８），寛政６年（１７９４），寛政９年（１７９７），安政６年（１８５９）元治元年（１８６４）等の銘がみられる。「墓から出た土偶」加藤増夫

＜2区＞　谷といっても，浅い枝谷である。谷頭は1区と4区の境の方（東南）へ向うものと，4区F地点の方（西南）へ向うものとの二つに分れている。谷は北方へ低くなり，F断面付近がもっともくびれており，これを境に北に向うにしたがって広がり，大きい谷と接続する。このくびれた部分と谷頭を結ぶ，東西約80ｍ南北約60ｍの三角形の浅い谷の部分に遺構が存在する。すでに南半分は「美作台地開発」㊟によって台地上をけずった土によって埋め立てられ，さらに今回の調査中の排土によって埋められている。調査前の地表観察によると，黒色土が谷状凹地を示しており最も多くの土器を採集出来た地点であった。

谷の埋積状態はF断面で最もよく観察できた。また工事中にこの地点で農業用水路のサイフォン工事によって深く掘鑿した状況によると，F地点で発掘を停止し，谷底としたほぼ水平の線は，実は岩磐の堆積であり，F断面の左右に見える岩磐がそのまま傾斜したゆるやかなV字状の谷であったらしい。そこへまず，地山岩磐が崩れたものが堆積し，その上に黄褐色土，黒色土が順次堆積している。7，7′ とした黒色土層は無遺物で，これが黒色土の形成された時期であろう。その後に高い所から流れてきたと思われる6，6′ などの層が堆積している。この層に弥生時代中期の土器片がわずかながら入っていた。5淡黒色土層では土器片が多く，弥生時代後期の土器片はほとんどこの層に含まれていた。この包含層の細分や土器の細かい変化は充分把握していない。3淡黒色土層には，格子目のタタキ目（平安末～鎌倉時代）の須恵器などを含む包含層があり，4層によって分離されている。3′ 黒黄褐色土層としたものは，地山礫が硬められたものであり，3区から2区へかけて連続する古道敷の一部であろう。2褐色土層は，黄色気味のものと黒色気味のものが薄く層序を積み重ねており，古道の時期以降に順次堆積した土層である。（第50図）

以上で谷の堆積土の概略を説明したが，次にグライ化現像について若干のべてみたい。11赤褐色土は鉄分の集積層であり，西側に向って下降し，9層の部分に達している。

12層も鉄分の集積と考えられ，通常の土層堆積とは関係なしに西に向い下降している。7と7′層は同一堆積土層と考えられるものであるが，谷底の水分の影響を受けて変化したものだろう。これは6と6′ の関係。13と8，9の関係，10と10′ の関係においてもいえることである。このことは特に西側において顕著に現われていて，東側では漸移的である。東側において同一土層が東に向うにつれて，青味や粘質を帯びていたものが，だんだん変化していくが，線引しうるほど明瞭な変化ではない。

谷の堆積土をかなり細分したが，以下のように大別できる。

A，{ 1. 2. }黄褐色土層，　　中世以降～現代

B，{ 3. 4. 5. 6. }暗茶褐色土層あるいは黒褐色土層，　　弥生時代～中世

C，{7. 8. 9. 13？}黒色土層，　　縄文時代前後？

D，（10）黄褐色土層，　　縄文時代以前，1万年前以前？

E，　　地山礫堆積層

F，　　地山岩盤

年代観についても示したが，C以下は特に根拠があるわけではない。A・B・C・Dの基本的層序は，若干土質の違いはあっても，美作の各遺跡にほぼ共通性をもつ堆積土と考えられる。

中国縦貫自動車道建設工事による崖面の観察などによれば，台地上にはC・Dに対応するものが存在し，その下層はクサリ礫・赤褐色粘質土・青灰色粘土・その青灰色粘土が硬化した，〝なめら〟と呼ばれる石のできそこないみたいな粘土。その下に岩盤，というパターンが観察された。クサリ礫は薄く存在しない場所もあったが，赤褐色粘質土は丘陵の切断面をみると饅頭の皮状に，厚さ2mぐらいで表層をおおっており，青灰色粘質土の酸化したものだろう。

㊟ 「美作台地総合開発計画」と呼ばれる，特定農地開発事業である。1963年度から着工され埋蔵文化財保護の面から問題になった。（考古学研究，36・40・56など）

＜**3区**＞　西を現在の道路によって1区と区切られ，南は4区の台地から急斜面で区切られている。北側はさらに1m前後低くなって谷状凹地が存在する。当初3区も谷と見ていたが，発掘後の状況では4区と1区の台地上の部分が連続していた部分や，さらに北側に存在する谷の部分にむかう傾斜面が存在していたと復元できる。それが古道造成のため，掘開され現状のようになったのだろう。

3区北端部（第63図）は1区の平担面の続きであり，全体として東に傾斜している。柱穴はまとまらないが，柱穴内の土が黒色土であるところから弥生時代のものと推定できる。

東にある巾約70cmの溝は遺構とは考えられず，雨水などによって侵食されたものが地山の土（ここは黄色砂礫層）のやや，黒色を帯びたもので埋ったものと考えられる。中央部にNo.81土壙墓がある。これは黒色土と淡黒色土（やや黄色気味）で埋っており，北側の西壁より2cm離れて鎌が出土した。鎌の刃先は上向きに，切先は北向きで，断面図のようにやや傾斜していた。土壙は長さ155cm，幅33cm，深さ26cmを計る。南側は壁土が崩壊した土が埋り，巾が46cmにも広がっている。底部は長さ124cm，巾12〜16cmで，やや平担面である。壁は傾斜しており，土層の上からも木棺の痕跡はない。土壙墓とも考えられる。

古道，小中遺跡の調査に着手して，伐採作業が進む中で，古道の存在に最初に気がついた地点である。（図版64，65）そこでS＝$\frac{1}{100}$で地形測量を実施した。（第58図）二本の道路が交差しており切合の関係から，北側の古道①としたものが新しく，南側の古道②とした部分が古い。さらに古道①の西端部の南側に細かい砂利を敷いた平担面が存在する。これは切合関係で，古道①より先行

し，古道②より新しい。

古道①は延長約30ｍ確認できた。西端部は，現道路によって調査できなかったが，２区に連続するもので，東端部は北側の谷の部分で切断され用地外に向うので，延長は確認できなかった。法面の上端は４ｍから８ｍの巾をもっており，約65％～80％の急勾配である。掘鑿は一時に行なわれたのではなく，地表面から１～1.５ｍ程掘り下げた砂利敷部分だけをさらに巾1.５～２ｍ，深さ30cm程掘り凹め，５cm前後の砂利を敷いている。砂利敷はあまり均一ではなく，２cm前後のものや，８cm前後の大きさのものも混る。厚い所では15cmも敷いてある。

砂利敷の巾は西方から18ｍまでは巾0.３ｍ～１ｍと順次広がり，そこから東に向って幅２ｍ～25と急に広がって行く。古道①の砂利敷面の縦断勾配は約10％である。

古道①の西端部にはやや大きい石が集中しているが，道路敷埋没の過程で入ったものである。また西端部から東へ６ｍ～９ｍの間の南法面には列石があるが，石垣の役をしたものだろうか。また遺物は第３層，暗茶褐色土に最も多いが，上層にも若干入っていたり，砂利敷の間に須恵器の細片が混入したものもある。

古道①の西端部の南側に存在する砂利敷は２～３cm前後の砂美（じゃみ）とよばれる細かなものが敷かれている。この砂利敷は古道①より約40cm高く，上面は淡茶褐色土によって埋まり古道①によって切られている。この平担面は西方に向って広くなる。

古道③は延長約50ｍ確認された。西端部は，古道①によって斜めに切られ東端部は池に入込み追求できなかった。法面の上端は６ｍから12ｍの巾を持っている。東半部では，南側にだけ切土をして巾６～８ｍの路床を造り出している。法面の高さは最高約５ｍもあり，勾配は約70％～75％である。掘鑿方法は古道①と同じで，砂利敷部分は二次的に掘り込んでいる。この砂利敷部分は，ほぼ中央部分から西は細かくなり西端部では道路わきの側溝状のものになってしまう。

＜**４区**＞　４区は台地上の平担面で最高位は，標高１３１.７ｍである。１区とは狭い鞍部によってつながっており，のちにこの鞍部は古道によって切断されているが弥生時代は接続していた。現在でも，東北から西南方向へのびる道路がついている。この道路を境にして４区の西南は，谷部分（２区）が形成されている。

東北側はNo.27住居址，No.28遺構，No.30遺構などが３区の古道によって一部破壊を受けている。古道法面はかなりの急斜面となっているが，弥生時代には３区の北側に存在する谷に向ってゆるい斜面となっており，３区の部分には遺構が連続していた可能性がある。

東南側はＥ20ｍ付近から下降し始めＥ37ｍ付近まで柱穴が検出された。しかし，No.30遺構はＥ43ｍぐらいまで延長している。ここからさらに東側は急斜面であり，トレンチを入れた結果でも遺構は確認できなかった。またこの急斜面には窪みがあり縦貫道にもかかっている。池の提防補修用に採土したという話である。（小中遺跡作業員による）そういえば，提防とほぼ同じレベルから，３～４ｍ高い所までが集中的に採土されているようである。人力なので高い方から低い方へ運んだのだろう。

西南側はほぼ同じ平担面が続き，４区Ｉ地点とした，（縦貫道と交差する道路）部分でも遺構が存在，またＩ地点の西端部の三又路の西南の畑には直径４ｍ程の円形の黒色土や，円形周溝状のもの（古墳の周溝か？）が暗文として見えることから遺構が連続して存在することを示している。

４区の土層は中央の高い部分では，表土が黄色土であり遺構も浅いものが多くかなり土が流失していると思われる。No.７遺構およびその周辺には一部黒色土が残存した。

４区から検出される弥生時代の柱穴•住居址などの自然埋土には黒色土が多いことから，弥生時代にはほぼ全面に黒色土が広がっていたと考えられる。しかし格子目，たたき目のつく須恵器や瓦質土器の存在する時期（平安時代〜鎌倉時代？）には，No.25，No.30遺構にみられるように茶褐色土あるいは黒褐色土でも茶色気味の感じの土で，No.89，No.１０１建物などの柱穴も弥生時代のものと区別することができた。

４区の遺構はすべて地山黄色土の面で検出することができた。しかし埋土が同じ黄色土の場合など見落すこともあるので検出が容易ではなかった。

＜出土遺物＞

①弥生時代

土製品＝壷・甕・高坏・埦・器台・土器片紡錘車

石製品＝碧玉製管玉・石包丁・太型蛤刃石斧・石鏃・石槍・砥石・たたき石・石皿•扁平片刃石斧

鉄製品＝手斧・鉋・鎌

②古墳時代

鉄製品＝鎌

③平安末〜鎌倉時代

土製品＝須恵器（格子目叩き目を有する）・甕・坏・土鍋・灯明皿・平瓦・軒平瓦・鉱滓

④近世（中世末も含まれるか？）

土製品＝人形・鈴・魚

石製品＝硯

鉄製品＝鎌・釘・火打鎌・包丁

銅製品＝古銭・カンザシ・キセル・耳かき

②小中古墳群の概要

＜はじめに＞　小中古墳群は，岡山県遺跡地名表（追補１，１９６４）によれば，３基が知られていた。本古墳群は松林の中に存在しており，最近著るしい生活様式の変化に伴いこの地域でも人手のかかる下草刈りがなされない傾向にあり，雑木が多く，墳丘の低平な古墳の確認が困難であったと予測される。ところが，今回の発掘に先だった地形観察により４基の古墳を追加，合計７基の円墳によって構成される古墳群であることが明らかになった。また弥生時代終末期の遺構や，平安

時代末か鎌倉期に埋没した古道，なども発見され複合遺跡となったが，遺跡名はそのまま小中古墳群と呼称した。小中遺跡の地点とは谷をへだてて異なる丘陵に存在するが同一集落と考えても良いだろう。

発掘調査は工事用道路の関係で小中遺跡と交互に実施された。調査経過の項目を参照されたい。

＜調査の方法＞（第１・２・３図）

小中古墳群の西側は小中遺跡とは巾35ｍ程の狭い谷によって隔てられ，東の上相遺跡（美作町）までは200ｍ程の広い谷によって隔てられている。この南北に尾根すじのある丘陵は小中古墳群の西側からはじまる浅い谷によって二筋の尾根に分けられるので，西側の尾根を１区，浅い谷の部分を２区，東側の尾根を３区と呼称することにした。

測量用の杭は当初道路センター杭を利用するつもりであったが，腐朽しているものが多いためＳＴＡ47＋20より東約10ｍの地点に原点を求めＴＯとし，道路センター（カーブしているが）とほぼ併行に20ｍおきにＴ１～Ｔ５まで６本の杭を設定した。さらに用地巾の北，南にむけてセンターとは直角に任意の点に杭を設定，それぞれＴ２ＮとかＴ４Ｓと呼称する。

古墳は北から番号をつけていったが，７号墳はトレンチ調査の結果によっては欠番がでることをおそれてつけたものである。他の遺構の番号は検出順につけたが確認のしかたによって番号が前後したり，別途に番号をつけた古道の一部も含まれることもある。調査対象面積は約4258㎡であり,調査員の積算で２名によって８ケ月の調査期間がでていた。しかし，その後検討が加えられ，１３００㎡，３ケ月の契約がなされ調査員２名があてられた。その結果古道の一部がトレンチ調査だけで全面発掘調査を実施しなかったり，遺構の精査にあたれなかったこともある。地形測量は $\frac{1}{100}$ で実施した。各遺構のうち古墳などで$\frac{1}{10}$で実測したものもあるが遺構の平面，断面は$\frac{1}{20}$で実測した。

＜１区＞　丘陵の尾根状の部分で北から南へ向って低くなっている。北端部は用地巾と併行して古道が通って，尾根を東西に切断している。この古道は２区谷の方向へ南下する。この丘陵の尾根上はNo.15遺構付近および西・南側は削平を受けており，古道②も途切れている。No.１遺構付近でも流失土が多いので遺構は浅い。全体的に土は流失しているが遺構の部分などに堆積した土がある。

No.７住居址は発掘調査前に窪みが残っており，そこへトレンチを入れたところ発見されたような状態であった。弥生期の遺構はNo.１，No.７住居址，No.14土壙，　No.15土壙以外にも存在した可能性があるし，用地外に続く丘陵上に連続したものがあろう。

古道は，古道①②③の部分とNo.５，No.６，No.16とした部分も含められ数回の作り直しがあったと考えられる。北側の用地外にも古道状の窪みが存在するし，南側へ延長する部分も，用地外に認められる。

＜２区＞　古道①の南半部は調査工程の関係からトレンチだけで全掘するに至らなかった。谷底の部分には当初Ｋトレンチを入れたところ，旧水田耕土下に黒色土，黒褐色土（12・13層）に土師器～弥生式土器状の土器片が包含層を形成し，柱穴状のものも（16）存在したので全面的に広げて

みた。また，古道№5・№6・№16などの延長も存在，砂利敷や須恵器も存在したが下層の弥生期？の遺構を優先させ，とばした部分もある。Kトレンチ断面で言えば，8層中に古道があり，土器片も多かった。遺構の検出は本来なら14層上面でするべきだが，同じ黒色土でむずかしく，15層上面で実施した。遺構は柱穴状のもの，構状のものなどがあり土器片が入っている。しかし建物としてまとまるように確認できなかった。北端部にやや大きな土壙が二つある。これも性格不明であるが，小中遺跡でO状土壙としたものと同種のものかも知れない。

＜**3区**＞　南北にのびる巾20ｍ程の狭い丘陵上に四基の古墳が存在し，用地外北側に3基の古墳が所住する。4号墳，5号墳は地山が東に傾く部分に造られ，6号墳，7号墳は，西南向きの傾斜をもつ場所に造られている。この丘陵上には1区とちがい，古墳築造前に黒色土の堆積が認められ墳丘下にのみ存在する。各墳丘下には弥生時代の遺構が存在し，古墳の発掘調査終了後は必ず再調査を実施した。墳丘以外にも上面が削平された遺構が検出された。

＜**出土遺物**＞　古墳出土のものは一覧表を参照されたい。その他は壺・甕・高坏・椀・特殊器台？・石皿・たたき石・石包丁・砥石・鉈（第　図）など弥生時代後期～後末期のもの。

土壙から鈸具・馬具・須恵器など6世紀後半頃のもの。№7住居址上層から奈良末頃の須恵器。古道から平安末～鎌倉期の須恵器が出土している。古墳出土遺物以外は接合復元などの作業をしておらず一部のものしか図化できなかった。

津山収蔵庫内に保管されている出土遺物
整理箱に約１４０箱

古墳出土遺物一覧表

（遺物番号は実測図番号と一致する）

古墳名	墳形	径	盛土高	主体部	出土遺物
4号墳	円墳	12.4m	1m	Ⅰ（木棺直葬）	①高杯 ②高杯 ③杯身 ④高杯 ⑤鼎 ⑥破片 ⑦広口壺 ⑧破片 ⑨破片 ⑩杯身 ⑪鉄鏃 ⑫杯身 ⑬壺口辺 ⑭土器片 ⑮提瓶 ⑯提瓶 ⑰提瓶 ⑱提瓶 ⑲刀子 ⑳刀子 ㉑鉄鏃 ㉒高杯 ㉓高杯 ㉔高杯 ㉕鉄鏃 ㉖鉄製品 ㉗鉄鏃 ㉘鉄鏃 ㉙土器片 ㉚鉄鏃先か？ ㉛土器片 ㉜土器片 ㉝鉄鏃
				Ⅱ（木棺直葬）	①杯身 ②杯身 ③杯蓋 ④杯身 ⑤杯蓋 ⑥杯蓋 ⑦馬具（轡）
				Ⅲ（木棺直葬）	①杯身 ②杯身 ③提瓶 ④高杯 ⑤馬具 ⑥杯蓋 ⑦杯身 ⑧杯蓋 ⑨杯身 ⑩杯蓋 ⑪破片
				外表	①大壺 ③杯蓋 ④杯身 ⑤坩
				周溝	⑧高杯
5号墳	円墳	13.8m	1.4m	Ⅰ（土拡）	①須恵器片（多数）
				Ⅱ（木棺直葬）	①杯身 ②杯身 ③杯蓋 ④杯蓋 ⑤杯身 ⑥杯身 ⑦杯蓋 ⑧杯身 ⑨杯蓋 ⑩杯身
				外表	⑥大壺
				周溝	②須恵器提瓶（破壊），土師器破片
6号墳	円墳	12m	0.9m	Ⅰ（土拡）	須恵器片（21片）
				Ⅱ（木棺直葬）	①壺 ②杯蓋 ③杯身 ④杯蓋 ⑤杯身 ⑥鉄鏃 ⑦鉄鏃 ⑧鉄鏃 ⑨鉄鏃 ⑩鉄鏃
				Ⅲ（木棺直葬）	⑪杯身 ⑫杯蓋 ⑬金環 ⑮鉄製品 ⑯刀子
				外表	⑰杯身
				周溝	他の古墳の甕破片数点
7号墳	円墳	9.9m	0.9m	Ⅰ	①杯身 ②杯蓋
				外表	鉄鏃 ⑦大壺片
				周溝	無

（作成　高畑）

古 墳 出 土 土 器 計 測 表

（単位 cm）

古 墳	番号	種 類	器形	最大径	口 径	器 高	色 調	ヘラ削り（中心より）	備 考
4－Ⅰ	1	土師器	高 杯	16.3	13.8	9.1	茶褐色		非常にもろい
	2	〃	〃	16.35	13.9	9.6	〃		〃
	4	須恵器	〃	14.95	12.85	8.9	灰 色	左	硬 質
	7	〃	広口壺	16.3	13.5	16.5	青灰色		自然釉硬質
	15	〃	提 瓶	21.2		21＋α	〃		破損硬質
	15′	〃	坩	14.7	10＋α	9.5＋α	灰 色		破損硬質
	15″	〃	広口壺	18.3	13.1	16.85	灰 色		硬 質
	22	〃	高 杯	17	17	6.1＋α	青灰色	左	脚部破損硬質
	23	〃	〃	14.745	12.815	6.75＋α	こげ茶色	左 ・ 右	〃 軟質
4－Ⅱ	1	土師器	杯 身	16.4	14.3	4.6	茶褐色	左	非常にもろい
	2	〃	〃	16.2	14.25	4.6	〃	左	〃
	4	〃	〃	15.5	13.4	4.3	〃	左	〃
	5	〃	杯 蓋	14.8	14.8	5.15	〃	左	〃
4－Ⅲ	1	須恵器	杯 身	14.7	12.49	4.7	青灰色	左	歪
	2	〃	〃	14.8	12.8	5.2	黄褐色	左	軟 質
	3	〃	提 瓶	13.8	6.9	16	青灰色	左	硬 質
	4	〃	高 杯	11.2	11.2	12.25	〃	左	〃
	6	〃	杯 蓋	14.7	14.6	4.8	黄褐色	左	軟 質
	7	〃	杯 身	14.6	12.5	4.75	〃	左	〃
	8	〃	杯 蓋	14.6	14.45	4.7	〃	左	〃
	9	〃	杯 身	14.6	12.5	4.75	〃	左	〃
	10	〃	杯 蓋	14.5	14.4	4.5	〃	左	〃
4－外表周溝	3	須恵器	杯 蓋	14.8	14.6	4.75	青灰色	左	硬 質
	4	〃	杯 身	14.7	12.9	4.1	〃	左	〃
	5	〃	坩	13.05	8.45	6.85	灰 色	左	かさね焼き
	8	〃	高 杯	15.3	13.6	8.2＋α	青灰色	左	軟 質
5－Ⅱ	1	須恵器	杯 蓋	15.4	15.3	4.3	灰白色	左	軟 質
	2	〃	杯 身	15.8	13.6	4.4	〃	左	〃
	3	〃	杯 蓋	15.35	15.3	4.25	〃	左	〃
	4	〃	〃	14.9	14.8	4.1	〃	左	〃
	5	〃	杯 身	15.9	13.3	4.95	〃	左	〃（高杯）
	6	〃	〃	15.8	13.53	4.65	〃	左	〃
	8	〃	〃	16	13.27	4.75	〃	左	〃
	9	〃	〃	15.4	13.51	4.8	〃	左	〃
5－周溝	2	須恵器	提 瓶	17.8	4＋α	19.2＋α	灰 色	左	硬 質
6－Ⅱ	1	〃	壺	13	8.9	11.5	青灰色	左	〃
	2	〃	杯 蓋	14.4	14.3	4.05	〃	左	〃
	3	〃	杯 身	14.9	12.6	4.05	〃	左	〃
	4	〃	杯 蓋	14.65	14.5	4	〃	左	〃
	5	〃	杯 身	14.8	12.45	3.8	〃	左	〃
6－Ⅲ	11	〃	杯 身	16.6	14.3	5.2	灰白色		軟 質
	12	〃	杯 蓋	16.45	16.4	5.2	〃		〃
	17	〃	杯 身	16.9	14.45	4.55	〃		〃
7－Ⅰ	1	須恵器	杯 蓋	14.2	14.2	4.6	青灰色	左	硬 質
	2	〃	杯 身	14.7	12.3	4.2	青灰色	左	〃

（作成 高畑）

お　わ　り　に

報告書を作成し，発掘調査の成果を公開・発表する義務が調査者にあることはいうまでもない。発掘調査から報告書作成へは一貫した作業として実施されることが最も望ましいことである。現実には息つく間もなく発掘調査に追われ，限られた時間の中でする以外にはないが，必要最低限のことを実施する必要があろう。

発掘調査の成果とは何か，①掘り出された遺構や遺物が，どのように遺跡で確認されたか，その状況が説明されなければいけない。②遺物を整理・実測しまとめる。③このような遺構，遺物等の基礎的資料の整理がなされたうえで，遺構の性格なり歴史的位置づけがなされねば，机上の空論ととなる。たとえ一部の整理が行なわれたとしても，『調査成果のうちの一部をつまみ食い』しただけである。

報告書を目ざすものであるならば，基礎的資料の掲載が必要不可欠である。遺構図のトレース・遺物の整理・復元・実測・トレースなどの資料の作成作業ができる状態に持っていきたい。

今回の報告書で欠けている部分については，今後更に整理・検討を重ね補完を期したい。掘り出された遺構・遺物が再び埋没しないように一日も早く公開することは，失なわれた遺跡に対するせめてもの供養である。

協力者

勝央町教育委員会

岡山県開発公社　技師補　大賀秋秀

技師補　林　徹也

技師補　森安広之

技師補　小倉辰之

四国学院大学卒業生　高畑富子

調査参加者（五十音順）

青井竹代・浅田増代・浅田三千子・石原正治・井上楠一・井上五一・井上三平・井上多美子・井上春子・井上久栄・井上英子・井上松子・井上みつ子・井上保代・植月綾子・井上市郎・長船久夫・長船義昭・小原恭子・小原操・片田廣志・川井元実・神崎宝作・岸元光昌・河本恵子・河本基・小林寿・小林政枝・権田千鶴・佐桑富夫・下山明子・下山叡士・下山亮夫・下山孝夫・下山千里・下山正治・下山美智与・下山芳夫・高田行野・瀧上正之・長島つた・野上君野・浜田艶子・早瀬朝子・早瀬あや子・平田完之・福島逸美・福田槙一・藤本為一・古川千晶・松岡為代・室井賢一郎・山下綾子・山下孝・山下常子・山田豊作・山下義夫・龍門民太郎・龍門都

発掘調査にあたり以上の方々のご協力を得ました。記して謝意を表わしたい。

小 中 古 墳 群 図 目 次

第１図　小中古墳群地形測量図（実測：高畑・大賀・林，製図：栗野）…… 101
第２図　小中古墳群遺構配置図（製図：高畑）…… 102
第３図　小中古墳群遺構配置図（作成：高畑）…… 103
第４図　小中古墳群３区（作成：高畑）…… 104
第５図　小中古墳群１区（作成：高畑）…… 105
第６図　小中古墳群古道発掘状況（実測：大賀・森安，製図：栗野）…… 106
第７図　古道断面図　Ａ・Ｂ・Ｃ（実測：森安・小倉・栗野，製図：栗野）…… 107
第８図　古道断面図　Ｄ・Ｅ・Ｆ（実測：森安・小倉・栗野，製図：栗野）…… 108
第９図　古道断面図　Ｇ・Ｈ（実測：森安・小倉・栗野，製図：栗野）…… 109
第10図　古道断面　Ｉ・Ｊ（実測：森安・小倉・栗野，製図：栗野）…… 110
第11図　１区古道Ｍ断面（実測：高畑富子，製図：栗野）…… 111
第12図　２区Ｋ断面（実測：森安・小倉・栗野，製図：栗野）…… 111
第13図　１区No.15土壙（実測：大賀・森安，製図：栗野）…… 111
第14図　４号墳墳丘断面図（実測・製図：高畑）…… 112
第15図　４号墳周溝断面図（実測・製図：高畑）…… 112
第16図　４号墳第Ⅰ(右)Ⅱ(右)主体実測図（実測・製図：高畑）…… 113
第17図　４号墳第Ⅲ主体部実測図（実測・製図：高畑）…… 114
第18図　４号墳第Ⅰ主体部出土遺物実測図（実測・製図：高畑）…… 115
第19図　４号墳第Ⅰ，Ⅱ主体部出土遺物実測図（実測・製図：高畑）…… 116
第20図　４号墳第Ⅲ主体部出土遺物実測図（実測・製図：高畑）…… 117
第21図　４・５号墳周溝及び外表土出土遺物実測図（実測・製図：高畑）…… 118
第22図　小中古墳群配置図（実測：高畑・大賀・林，製図：高畑）…… 119
第23図　５号墳墳丘断面図（実測・製図：高畑）…… 120
第24図　５号墳第Ⅰ主体部実測図（実測・製図：高畑）…… 121
第25図　５号墳第Ⅱ主体部実測図（実測・製図：高畑）…… 122
第26図　６号墳墳丘断面図（実測・製図：栗野）…… 123
第27図　６号墳第Ⅰ主体（実測・製図：栗野）…… 124
第28図　６号墳第Ⅱ主体部（実測・製図：栗野）…… 125
第29図　６号墳墳丘下地山の平面図（実測・製図：栗野）…… 126
第30図　６号墳出土遺物実測図（実測・製図：栗野）…… 127
第31図　７号墳墳丘断面図（実測・製図：高畑）…… 128

第32図　5号墳（1～10）7号墳（11・12）出土須恵器（実測・製図：高畑）…… 129
第33図　1区墳丘状部分トレンチNo.1住居址，No.14遺構　（実測：高畑富子，製図：栗野）…… 130
第34図　1区No.14遺構断面（上図のG西壁，E東壁）（実測：高畑富子，製図：栗野）… 130
第35図　2区平面図（実測：森安・小倉，製図：栗野）…… 131
第36図　1区No.1住居址，No.14土壙（実測：大賀・森安）…… 132
第37図　3区No.2住居址の床面にて土壙四み検出状態（実測：栗野・大賀・林，製図：栗野）…… 133
第38図　3区No.2住居址②掘り上り状態（実測・製図：栗野）…… 134
第39図　3区No.2住居址③土壙・中央ピット・柱穴断面（実測：大賀・林・栗野，製図：栗野）…… 135
第40図　No.3遺構と土壙墓・No.10土壙墓（実測：大賀・林，製図：栗野）…… 136
第41図　3区No.4土壙墓（実測・製図：栗野）…… 137
第42図　3区No.20土壙（実測・製図：栗野）…… 137
第43図　3区No.4土壙墓出土遺物実測図（実測・製図：栗野）…… 138
第44図　1区No.7住居址（実測：栗野・大賀・森安，製図：栗野）…… 139
第45図　4号墳墳丘下No.11住居址，12・13遺構（実測・製図：高畑）…… 140
第46図　No.8遺構（実測・製図：高畑富子）…… 141
第47図　1区No.18遺構（実測：高畑富子，製図：栗野）…… 142
第48図　3区No.19住居址（実測・製図：栗野）…… 143
第49図　5号墳墳丘下No.21住居址（実測・製図：高畑）…… 144
第50図　小中遺跡・小中古墳群出土鉄器実測図（実測・製図：栗野）…… 145

小中古墳群図版目次

図版1－1　上相遺跡（小中古墳群より）（撮影：栗野）…… 146
図版1－2　小中古墳群遠景（上相遺跡より）（撮影：高畑富子）…… 146
図版2－1　古道①発掘前Fトレンチ付近より（北東より）（撮影：高畑）…… 147
図版2－2　古道①発掘前7号墳付近より（東南より）（撮影：高畑）…… 147
図版2－3　古道①②③全景（西北より）（撮影：栗野）…… 147
図版2－4　古道①発掘前No.14遺構の北側より（東南より）（撮影：高畑）…… 147
図版3－1　古道①発掘前西端より（西北より）（撮影：高畑）…… 148
図版3－2　古道①発掘状況（西北より）（撮影：栗野）…… 148
図版4－1　古道②（西北西より）（撮影：栗野）…… 149

図版４－２　古道③Ｇ断面（西北より）（撮影：栗野）…… 149
図版５－１　古道③砂利敷状況（西北より）（撮影：栗野）…… 150
図版５－２　古道③砂利敷状況近景（西北より）（撮影：栗野）…… 150
図版６－１　４・５・６号墳全景（北西より）（撮影：栗野）…… 151
図版６－２　４・５号墳全景（東より）（撮影：高畑富子）…… 151
図版７－１　４号墳（南より）（撮影：高畑）…… 152
図版７－２　４号墳墳丘表土剥ぎ（南より）（撮影：高畑）…… 152
図版８－１　４号墳周溝断面（東より）（撮影：高畑）…… 153
図版８－２　４号墳周溝内遺物（東より）（撮影：高畑）…… 153
図版９－１　４号墳周溝内須恵器片Ａ区（東より）（撮影：高畑）…… 154
図版９－２　４号墳外表の須恵器分布（北より）（撮影：高畑）…… 154
図版10－１　４号墳第Ⅰ，Ⅱ主体部全景（撮影：高畑）…… 155
図版10－２　４号墳第Ⅰ，Ⅱ主体部全景（西より）（撮影：高畑）…… 155
図版11－１　４号墳第Ⅰ，Ⅱ主体部（南より）（撮影：高畑）…… 156
図版11－２　４号墳北壁部断面，周溝と住居址（西より）（撮影：高畑）…… 156
図版12－１　４号墳Ⅰ(右)，Ⅱ(右)主体部（西より）（撮影：高畑）…… 157
図版12－２　４号墳第Ⅰ主体部全景（西より）（撮影：高畑）…… 157
図版13－１　４号墳第Ⅰ主体部頭部棺外遺物（撮影：高畑）…… 158
図版13－２　４号墳第Ⅰ主体部脚部棺外遺物（撮影：高畑）…… 158
図版14－１　４号墳第Ⅱ主体部（東より）（撮影：高畑）…… 159
図版14－２　４号墳第Ⅱ主体部杯の下より轡出土（西より）（撮影：高畑）…… 159
図版15－１　４号墳第Ⅲ主体部掘り方断面（東より）（撮影：高畑）…… 160
図版15－２　４号墳第Ⅲ主体部遺物出土状態（西より）（撮影：高畑）…… 160
図版16－１　４号墳第Ⅲ主体部掘り方（西より）（撮影：高畑）…… 161
図版16－２　４号墳第Ⅲ主体部遺物出土状態（西より）（撮影：高畑）…… 161
図版17－１　４号墳北壁排除の際出土（東より）（撮影：高畑）…… 162
図版17－２　４号墳Ｂ区遺物（短頸壺）出土状態（東より）（撮影：高畑）…… 162
図版18－１　４号墳北西壁とNo.11（北西より）（撮影：高畑）…… 163
図版18－２　４号墳東南壁と地山整形（南東より）（撮影：高畑）…… 163
図版19－１　４号墳南壁断面と地山整形（東より）（撮影：高畑）…… 164
図版19－２　４号墳東壁断面（南より）（撮影：高畑）…… 164
図版20－１　４号墳北南断面と地山整形（東より）（撮影：高畑）…… 165
図版20－２　４号墳掘りあげ全景（南東より)(撮影：高畑）…… 165

図版21－1　5号墳墳丘（東より）（撮影：栗野）　……　166
図版21－2　5号墳墳丘（北西より）（撮影：高畑）　……　166
図版22－1　5号墳表土剥ぎ（北北西より）（撮影：高畑）　……　167
図版22－2　5号墳第Ⅱ主体部出土状態（北より）　（撮影：高畑）　……　167
図版23－1　5号墳第Ⅰ主体部（南東より）（撮影：高畑）　……　168
図版23－2　5号墳第Ⅱ主体部（南東より）（撮影：高畑）　……　168
図版24－1　5号墳第Ⅰ主体部遺物出土状態（南東より）（撮影：高畑）　……　169
図版24－2　5号墳掘り方（南東より）（撮影：高畑）　……　169
図版25－1　5号墳第Ⅱ主体部（西より）（撮影：高畑）　……　170
図版25－2　5号墳第Ⅱ主体部遺物出土状態（西より）（撮影：高畑）　……　170
図版26－1　5号墳第Ⅱ主体部掘り方（西より）（撮影：高畑）　……　171
図版26－2　5号墳第Ⅱ主体部掘り方（西より）（撮影：高畑）　……　171
図版27－1　5号墳第Ⅱ主体部頭部遺物出土状態（東より）（撮影：高畑）　……　172
図版27－2　5号墳第Ⅱ主体部北西部周溝内遺物（北西より）（撮影：高畑）　……　172
図版28－1　5号墳丘断面（東より）（撮影：高畑）　……　173
図版28－2　5号墳丘断面（東より）（撮影：高畑）　……　173
図版29－1　5号墳付近全景（北東より）（撮影：高畑）　……　174
図版29－2　5号周辺完掘全景（北東より）（撮影：栗野）　……　174
図版30－1　5号墳墳丘(左)と6号墳墳丘(右)（北より）（撮影：栗野）　……　175
図版30－2　5号墳墳丘(左)と6号（北西より）（撮影：栗野）　……　175
図版30－3　6号墳墳丘（北より）（撮影：栗野）　……　175
図版31－1　6号墳発掘調査風景・向うは縦貫道工事（西北より）（撮影：栗野）
……　176
図版31－2　6号墳墳丘発掘状況，向うは5号墳（北北西より）（撮影：栗野）
……　176
図版32－1　6号墳墳丘と第Ⅱ主体部発掘状況（西北西より）（撮影：栗野）　……　177
図版32－2　6号墳墳丘南北断面北半部（西より）（撮影：栗野）　……　177
図版33－1　6号墳周溝北端部断面（西より）（撮影：栗野）　……　178
図版33－2　6号墳周溝北端部断面（東より）（撮影：栗野）　……　178
図版33－3　6号墳周溝東端部断面（南より）（撮影：栗野）　……　178
図版34－1　6号墳第Ⅰ主体部全景（北より）（撮影：栗野）　……　179
図版34－2　6号墳第Ⅰ主体部南北断面（西より）（撮影：栗野）　……　179
図版35－1　6号墳第Ⅰ主体部全景（東より）（撮影：栗野）　……　180

図版35－2　6号墳第Ⅱ主体部全景（西より）（撮影：栗野）…… 180
図版36－1　6号墳第Ⅱ主体部須恵器出土状況（西より）（撮影：栗野）…… 181
図版36－2　6号墳第Ⅱ主体部鉄鏃出土状況（撮影：栗野）…… 181
図版37－1　6号墳第Ⅱ主体部の西方土手より出土した須恵器（南より）（撮影：栗野）…… 182
図版37－2　6号墳第Ⅲ主体遺物出土状況（撮影：栗野）…… 182
図版38－1　7号墳墳丘（西南より）（撮影：栗野）…… 183
図版38－2　7号墳地山整形と壁（南東より）（撮影：高畑）…… 183
図版39－1　7号墳須恵器出土状態（撮影：高畑富子）…… 184
図版40－1　7号墳北壁断面（西より）（撮影：高畑）…… 185
図版40－2　7号墳南壁断面9遺構（西より）（撮影：高畑）…… 185
図版41－1　7号墳東西断面と周溝9遺構（南より）（撮影：高畑）…… 186
図版41－2　7号墳西壁断面9遺構（南より）（撮影：高畑）…… 186
図版42－1　7号墳付近全景（南東より）（撮影：高畑）…… 187
図版42－2　7号墳掘りあげ全景（南東より）（撮影：高畑）…… 187
図版43－1　No.17古道敷石状態（撮影：高畑）…… 188
図版43－2　No.8住居址遺物出土状態（撮影：高畑）…… 188
図版44－1　3区No.4土壙墓（北より）（撮影：栗野）…… 189
図版44－2　3区No.4土壙墓(右)とNo.2住居址(左)（南東より）（撮影：栗野）…… 189
図版45－1　1区No.15土壙（東南より）（撮影：栗野）…… 190
図版45－2　3区No.10土壙（東より）（撮影：栗野）…… 190
図版46－1　1区（向う）2区（手前）南半部全景（東南より）（撮影：栗野）…… 191
図版46－2　3区南半部全景・手前6号墳，向うは5号墳（西北より）（撮影：栗野）…… 191
図版47－1　2区K断面（南西より）（撮影：栗野）…… 192
図版47－2　2区全景（北西より）（撮影：栗野）…… 192
図版48－1　1区No.14土壙（西より）（撮影：栗野）…… 193
図版48－2　1区No.18遺構（東南より）（撮影：高畑富子）…… 193
図版49－1　3区No.2住居址床面状況（北西より）（撮影：栗野）…… 194
図版49－2　3区No.2住居址掘り上り（北西より）（撮影：栗野）…… 194
図版50－1　3区No.2住居址外溝（西南西より）（撮影：栗野）…… 195
図版50－2　3区No.2住居址柱穴2断面（北西より）（撮影：栗野）…… 195

図版51－1　1区No.7住居址（北西より）（撮影：栗野）…… 196
図版51－2　1区No.7住居址掘り上り状況（北西より）（撮影：栗野）…… 196
図版52－1　1区No.7住居址床溝と中央ピット（北北西より）（撮影：栗野）…… 197
図版52－2　1区No.7住居址小形甕出土状況（東より）（撮影：栗野）…… 197
図版53－1　1区No.7住居址A・B断面，西側（南より）（撮影：栗野）…… 198
図版53－2　1区No.7住居址AB断面東側（西南より）（撮影：栗野）…… 198
図版53－3　1区No.7住居址C・D断面南側（東南より）（撮影：栗野）…… 198
図版53－4　1区No.7住居址C・D断面北側（東南より）（撮影：栗野）…… 198
図版54－1　No.11住居址（北西より）（撮影：高畑）…… 199
図版54－2　No.11住居址（北西より）（撮影：高畑）…… 199
図版55－1　No.11住居址と4号墳（北西より）（撮影：高畑）…… 200
図版55－2　4号墳全景（南より）（撮影：高畑）…… 200
図版56－1　4号墳墳丘下No.11住居址外溝付近（北より）（撮影：高畑）…… 201
図版56－2　4号墳墳丘下No.11住居址外溝上面（南より）（撮影：高畑）…… 201
図版57－1　3区No.19住居址・5号墳発掘風景（北北西より）（撮影：栗野）
…… 202
図版57－2　3区No.19住居址掘り上り状況（北より）（撮影：栗野）…… 202
図版58－1　3区No.19住居址AB断面北端部（東北より）（撮影：栗野）…… 203
図版58－2　3区No.19住居址AB断面南端部（東北より）（撮影：栗野）…… 203
図版59－1　3区No.19住居址北半部（西より）（撮影：栗野）…… 204
図版59－2　3区No.19住居址柱穴12・13・14と高坏（北より）（撮影：栗野）
…… 204
図版60－1　No.21住居址（撮影：高畑）…… 205
図版60－2　No.21住居址手前はNo.22（東より）（撮影：高畑）…… 205
図版61－1　21遺構（南東より）（撮影：高畑）…… 206
図版61－2　No.21住居址貼り床断面（南より）（撮影：高畑）…… 206
図版62－1　鍬入式（撮影：高畑）…… 207
図版62－2　4号墳発掘風景（撮景：高畑）…… 207

小 中 遺 跡 図 目 次

第１図　小中遺跡，小中古墳群周辺の遺跡分布図（作成：高畑）…… 208
第１図－付表分布図対照表（作成：高畑）…… 209
第２図　小中遺跡，小中古墳群周辺地形図・路線図（作成：高畑）…… 210
第３図　小中遺跡，小中古墳群路線内遺構配置図（作成：高畑）…… 211
第４図　小中遺跡遺構配置図（作成：高畑）…… 212
第５図　小中遺跡グリッド配置図（作成：高畑）…… 213
第６図　小中遺跡遺構配置図（作成：高畑）…… 214
第７図　小中遺跡１区遺構配置図（作成：高畑）…… 215
第８図　１区No.１住居址　（実測・製図：高畑）…… 216
第９図　１区No.３住居址　（実測・製図：高畑）…… 217
第10図　１区No.４住居址　（実測・製図：高畑）…… 218
第11図　１区No.９住居址（実測：栗野，製図：高畑）…… 219
第12図　１区No.12Ａ・Ｂ・Ｃ・13住居址　（実測・製図：高畑）…… 220
第13図　１区No.14住居址　（実測：高畑富子，製図：高畑）…… 221
第14図　１区No.15溝状遺構（実測：高畑富子，製図：高畑）…… 222
第15図　１区No.18住居址　（実測：高畑富子，製図：高畑）…… 223
第16図　１区No.19住居址　（実測・製図：高畑）…… 224
第17図　１区No.43建物　（実測・製図：高畑）…… 225
第18図　１区No.113・44柱穴列（実測・製図：高畑）…… 226
第19図　１区No.74溝状遺構（実測・製図：高畑）…… 227
第20図　１区No.108柱穴列（実測・製図：高畑）…… 227
第21図　１区No.109建物（実測・製図：高畑）…… 228
第22図　１区No.20土壙（実測・製図：高畑）…… 228
第23図　１区No.17土壙（実測・製図：高畑）…… 229
第24図　１区No.31土壙（実測・製図：高畑）…… 230
第25図　１区No.34土壙（実測・製図：高畑）…… 230
第26図　１区No.33土壙（実測・製図：高畑）…… 231
第27図　１区No.32土壙（実測・製図：高畑）…… 231
第28図　１区No.35土壙（実測・製図：高畑）…… 232
第29図　１区No.36土壙（実測・製図：高畑）…… 232
第30図　１区No.38土壙（実測・製図：高畑）…… 233

第31図　1区No.39土壙（実測・製図：高畑）…… 233
第32図　1区No.40土壙（実測・製図：高畑）…… 234
第33図　1区No.41土壙（実測・製図：高畑）…… 234
第34図　1区No.72・73・77土壙（実測・製図：高畑）…… 235
第35図　1区No.78・107土壙（実測・製図：高畑）…… 236
第36図　1区No.42土壙墓（実測・製図：高畑）…… 237
第37図　1区No.45土壙墓（実測・製図：高畑）…… 238
第38図　1区近世墓①（実測：高畑富子，製図：高畑）…… 239
第39図　1区近世墓②（実測：高畑富子，製図：高畑）…… 240
第40図　1区近世墓③（実測：高畑富子，製図：高畑）…… 241
第41図　1区近世墓④（実測：高畑富子，製図：高畑）…… 242
第42図　1区近世墓⑤（実測：高畑富子，製図：高畑）…… 243
第43図　1区近世墓⑥（実測：高畑富子，製図：高畑）…… 244
第44図　1区近世墓⑦（実測：高畑富子，製図：高畑）…… 245
第45図　1区近世墓⑧（実測：高畑富子，製図：高畑）…… 246
第46図　1区近世墓⑨（実測：高畑富子，製図：高畑）…… 247
第47図　1区近世墓⑩（実測：高畑富子，製図：高畑）…… 248
第48図　2区古道平面図（実測：森安・小倉，製図：栗野）…… 249
第49図　2区地形測量図（実測：大賀・林，製図：栗野）…… 249
第50図　2区F断面（実測：高畑，製図：栗野）…… 250
第51図　2区遺構配置図（作成：高畑）…… 251
第52図　2区C断面（実測：大賀・森安，製図：栗野）…… 252
第53図　2区D断面（実測：大賀・森安，製図：栗野）…… 252
第54図　2区A断面（実測：大賀・森安，製図：栗野）…… 253
第55図　2区B断面（実測：大賀・森安，製図：栗野）…… 253
第56図　3区A断面（実測：大賀・森安，製図：栗野）…… 253
第57図　3区B断面（実測：大賀・森安，製図：栗野）…… 253
第58図　3区地形測量図（実測：大賀・林，製図：栗野）…… 254
第59図　3区古道平面図（実測：大賀・森安，製図：栗野）…… 254
第60図　2区No.10住居址炭化材（実測：大賀・林・栗野，製図：栗野）…… 255
第61図　2区No.10住居址掘り上り（実測・製図：栗野）…… 256
第62図　2区No.11住居址（実測：森安・小倉，製図：栗野）…… 257
第63図　3区北端部平面図（実測：森安・小倉，製図：栗野）…… 258

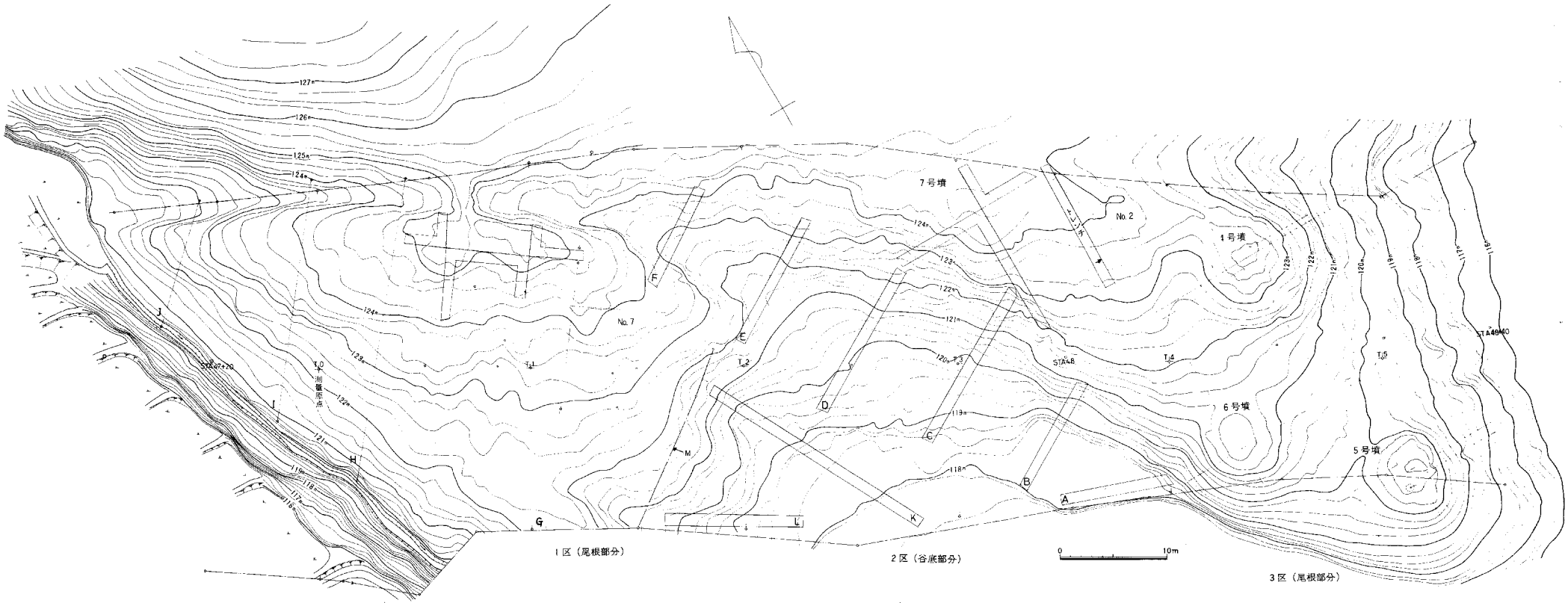
第64図　3区No.81遺構（実測・製図：栗野）…… 258
第65図　4区遺構配置図①（製図：高畑）…… 259
第66図　4区遺構配置図②Ⅰ地点（製図：高畑）…… 260
第67図　4区No.2住居址（実測・製図：栗野）…… 261
第68図　4区No.21・26住居址（実測・製図：栗野）…… 262
第69図　No.5住居址（実測：松本・高畑，製図：高畑）…… 263
第70図　No.6住居址（実測・製図：高畑）…… 264
第71図　4区No.22住居址（実測：松本，製図：栗野）…… 265
第72図　4区No.24住居址（実測・製図：栗野）…… 265
第73図　4区No.23住居址（実測：松本・栗野，製図：栗野）…… 266
第74図　4区No.27住居址①　平面図（実測：松本・栗野，製図：栗野）…… 267
第75図　4区No.27住居址②断面図（実測：松本，製図：栗野）…… 268
第76図　4区No.66住居址（実測：松本，製図：栗野）…… 269
第77図　No.67・68住居址②断面図（実測・製図：栗野）…… 269
第78図　4区No.67・68住居址①（No.115土壙）（実測・製図：栗野）…… 270
第79図　4区No.69住居址（実測・製図：栗野）…… 271
第80図　4区No.47・48土壙（実測・製図：栗野）…… 272
第81図　4区No.49土壙（実測・製図：栗野）…… 272
第82図　4区No.50土壙（実測・製図：栗野）…… 272
第83図　4区No.51土壙墓（実測・製図：栗野）…… 273
第84図　4区No.52土壙（実測・製図：栗野）…… 273
第85図　4区No.53土壙（実測・製図：栗野）…… 273
第86図　4区No.54土壙（実測・製図：栗野）…… 273
第87図　4区No.55土壙（実測・製図：栗野）…… 273
第88図　4区No.56土壙（実測・製図：栗野）…… 273
第89図　4区No.57土壙（実測・製図：栗野）…… 273
第90図　4区No.58土壙（実測・製図：栗野）…… 274
第91図　4区No.60・95土壙墓（実測：松本，製図：栗野）…… 274
第92図　4区No.61土壙墓（実測：松本，製図：栗野）…… 274
第93図　4区No.62土壙墓（実測：松本，製図：栗野）…… 274
第94図　4区No.63土壙（実測：松本，製図：栗野）…… 275
第95図　4区No.64土壙（実測・製図：栗野）…… 275
第96図　4区No.65土壙（実測・製図：栗野）…… 275

第 97 図　4区No.70土壙（実測・製図：栗野）…… 275
第 98 図　4区No.83土壙（実測・製図：栗野）…… 275
第 99 図　4区No.84土壙（実測・製図：栗野）…… 276
第100図　4区No.96土壙（実測：松本，製図：栗野）…… 276
第101図　4区No.99土壙（実測・製図：栗野）…… 276
第102図　4区No.100土壙（実測・製図：栗野）…… 276
第103図　4区No.105土壙（実測・製図：栗野）…… 276
第104図　4区No.29建物（実測・製図：栗野）…… 277
第105図　4区No.59遺構，No.114柱穴列，その周辺（実測・製図：栗野）…… 278
第106図　4区No.79建物（実測・製図：栗野）…… 279
第107図　4区No.80建物（実測・製図：栗野）…… 280
第108図　4区No.82建物（実測・製図：栗野）…… 280
第109図　4区No.85建物（実測・製図：栗野）…… 281
第110図　4区No.86建物（実測・製図：栗野）…… 281
第111図　4区No.87とNo.87－2建物（実測・製図：栗野）…… 282
第112図　4区No.88建物（実測・製図：栗野）…… 282
第113図　4区No.90建物（実測：松本，製図：栗野）…… 283
第114図　4区No.89建物（実測・製図：栗野）…… 284
第115図　4区No.91建物（実測：松本，製図：栗野）…… 285
第116図　4区No.92建物（実測：松本，製図：栗野）…… 285
第117図　4区No.94建物（実測・製図：栗野）…… 286
第118図　4区No.93建物（実測・製図：栗野）…… 286
第119図　4区No.97・98柱穴列（実測：栗野，C・D断面は松本，製図：栗野）…… 287
第120図　4区No.101建物（実測・製図：栗野）…… 288
第121図　4区No.102建物（実測・製図：栗野）…… 288
第122図　4区No.103建物（実測・製図：栗野）…… 289
第123図　4区No.104建物（実測・製図：栗野）…… 289
第124図　4区No.111柱穴列・No.116炉址（実測・製図：栗野）…… 290
第125図　4区No.112柱穴列（実測・製図：栗野）…… 290
第126図　4区No.7遺構①地形測量図（実測：高畑・大賀・林，製図：栗野）…… 291
第127図　4区No.7遺構②掘り上り平面図（実測・製図：栗野）…… 292
第128図　4区No.7遺構③断面図（実測・製図：栗野）…… 293
第129図　4区No.25遺構（実測・製図：栗野）…… 294

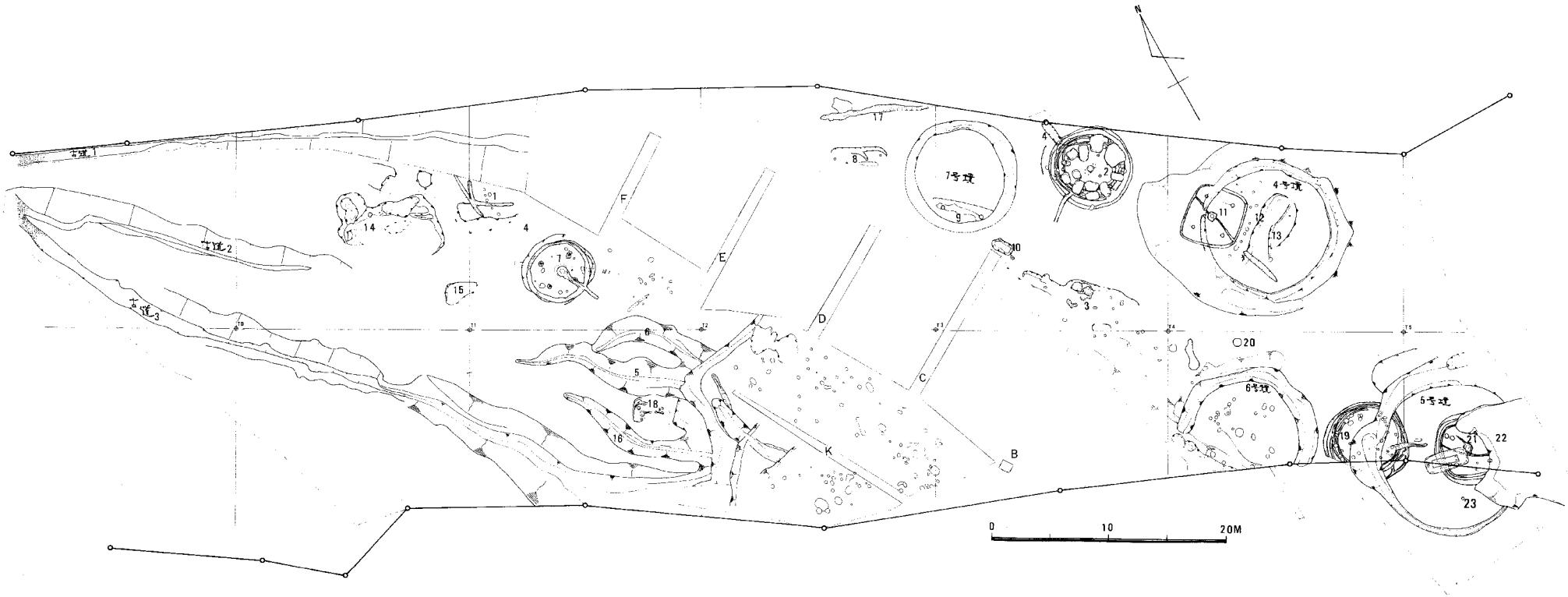
第130図　4区No.28遺構（実測・製図：栗野）…… 295
第131図　4区No.30遺構断面図（実測・製図：栗野）…… 296

図　版　目　次

図版1　小中遺跡航空写真（北より）（撮影：仁木英輔氏）…… 297
図版2－1　小中付近航空写真（西北上空より）（撮影：仁木英輔氏）…… 298
2　小中遺跡遠景（西北より）（撮影：栗野）…… 298
図版3－1　1区調査前全景（南より）（撮影：高畑）…… 299
2　1区調査前全景（南西より）（撮影：高畑）…… 299
図版4－1　1区全景（南々東より）（撮影：高畑）…… 300
2　1区手前は2区工事用道路によって消失（南西より）（撮影：高畑）…… 300
図版5－1　1区F・B地点（西南西より）（撮影・高畑）…… 301
2　1区E・F・B地点（西南西より）（撮影：高畑）…… 301
図版6－1　1区E・H・G地点表土剥ぎ終了後全景（東より）（撮影：高畑）…… 302
2　1区B・C・F地点（北より）（撮影：高畑富）…… 302
図版7－1　1区No.43（南より）（撮影：高畑）…… 303
2　1区No.43・44（南より）（撮影：高畑）…… 303
図版8－1　1区F地点31遺構（北西より）（撮影：高畑）…… 304
2　1区F地点37遺構（北西より）（撮影：高畑）…… 304
図版9－1　1区No.35土壙断面（西方より）（撮影：高畑）…… 305
2　1区No.39土壙（南より）（撮影：高畑）…… 305
図版10－1　1区近世墓56（北より）（撮影：高畑）…… 306
2　1区近世墓56遺物出土状態（東より）（撮影：高畑）…… 306
図版11－1　1区調査後あけ渡し（南より）（撮影：栗野）…… 307
2　1区調査後あけ渡し（南より）（撮影：栗野）…… 307
図版12－1　2区発掘前（北西より）（撮影：栗野）…… 308
2　2区トレンチ調査（東南東より）（撮影：栗野）…… 308
図版13－1　2区全景（西北より）（撮影：栗野）…… 309
図版14－1　2区古道全景（西北西より）（撮影：栗野）…… 310
2　2区No.8遺構（北より）（撮影：栗野）…… 310
図版15－1　2区F断面全景（北東より）（撮影：高畑）…… 311
2　2区F断面の一部（北西より）（撮影：高畑）…… 311
図版16－1　2区発掘調査風景（北東より）（撮影：栗野）…… 312

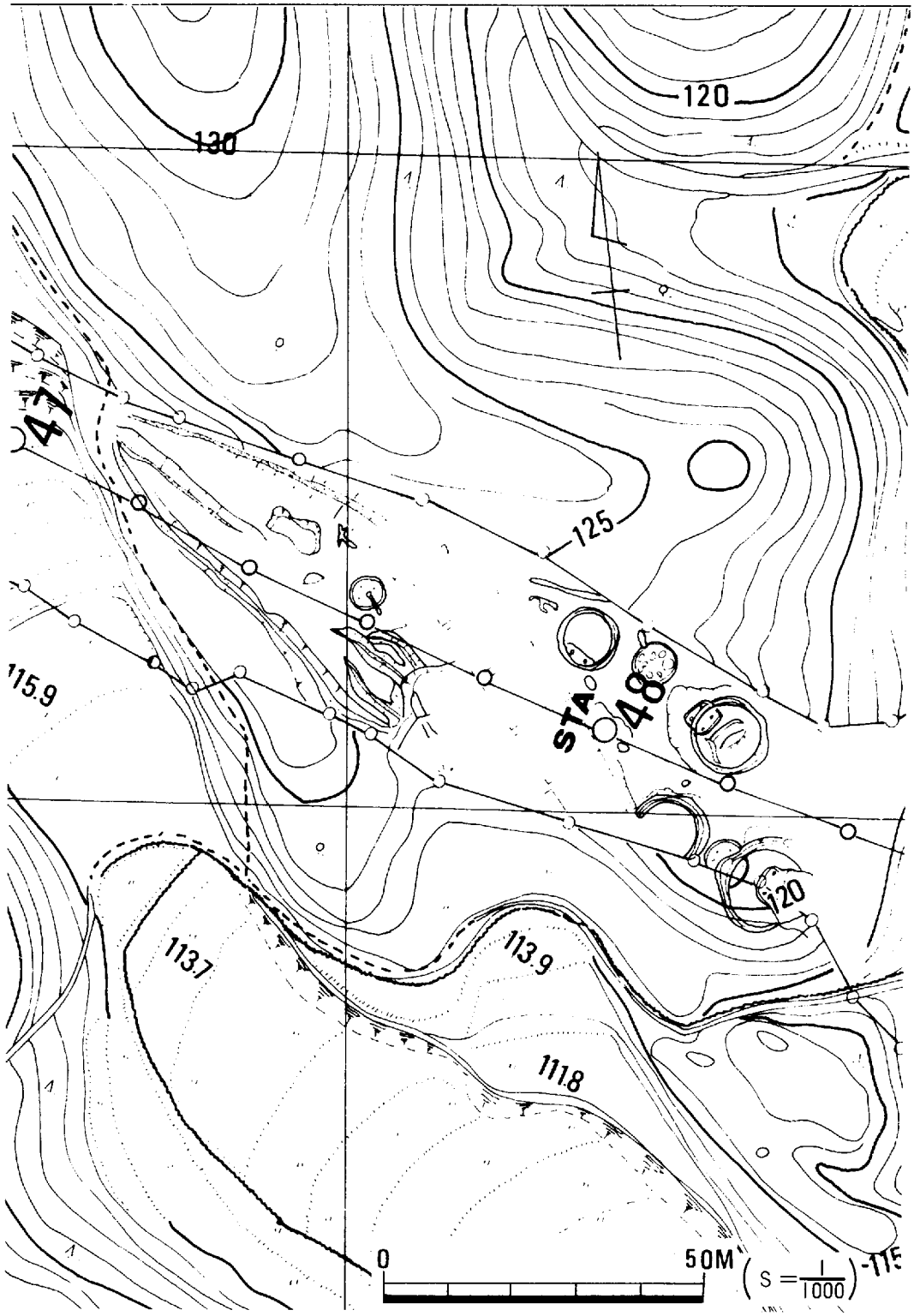


第 1 図　小中古墳群地形測量図（S＝$\frac{1}{300}$）

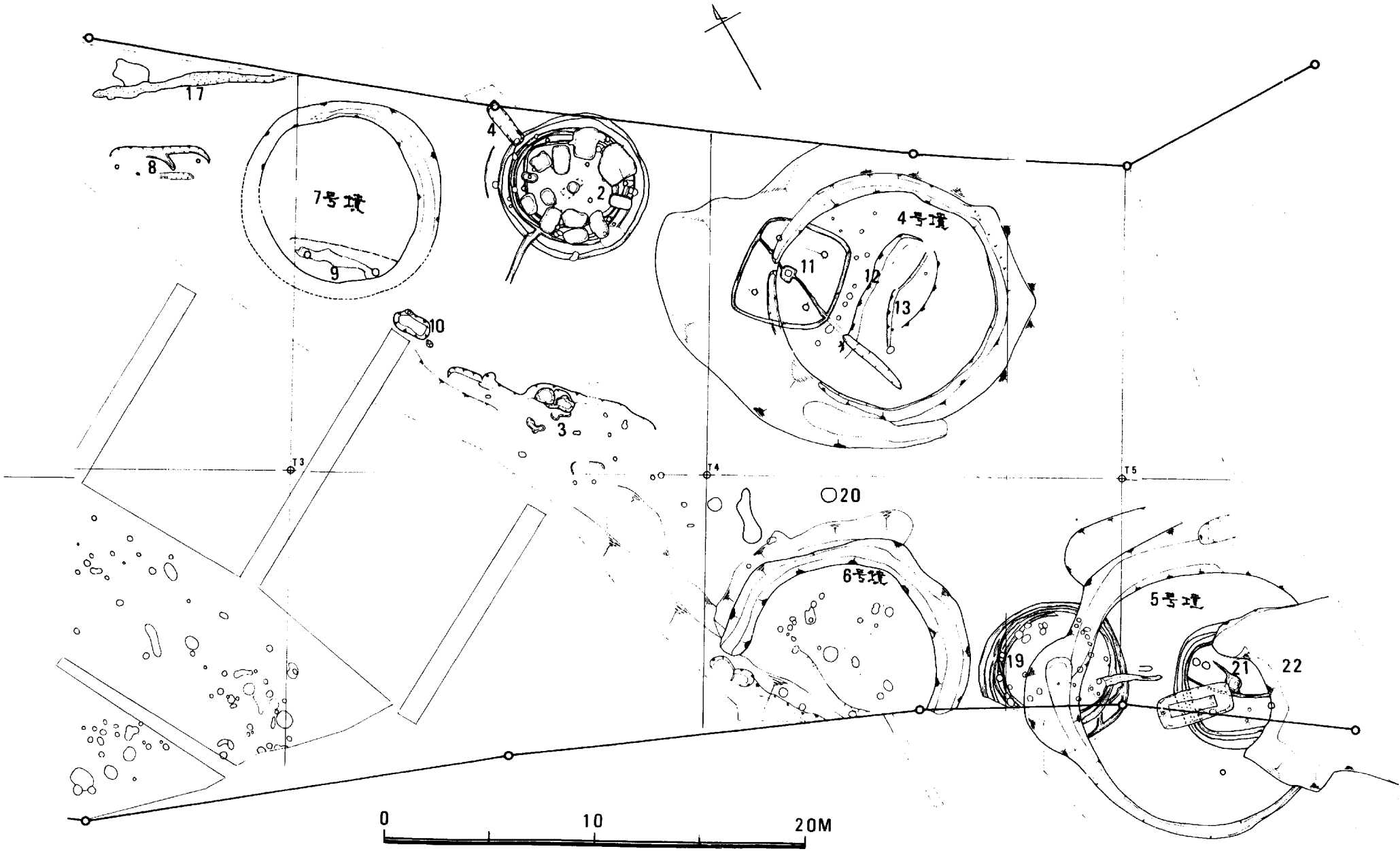


第２図　小中古墳群遺構配置図　$\left(S=\frac{1}{300}\right)$

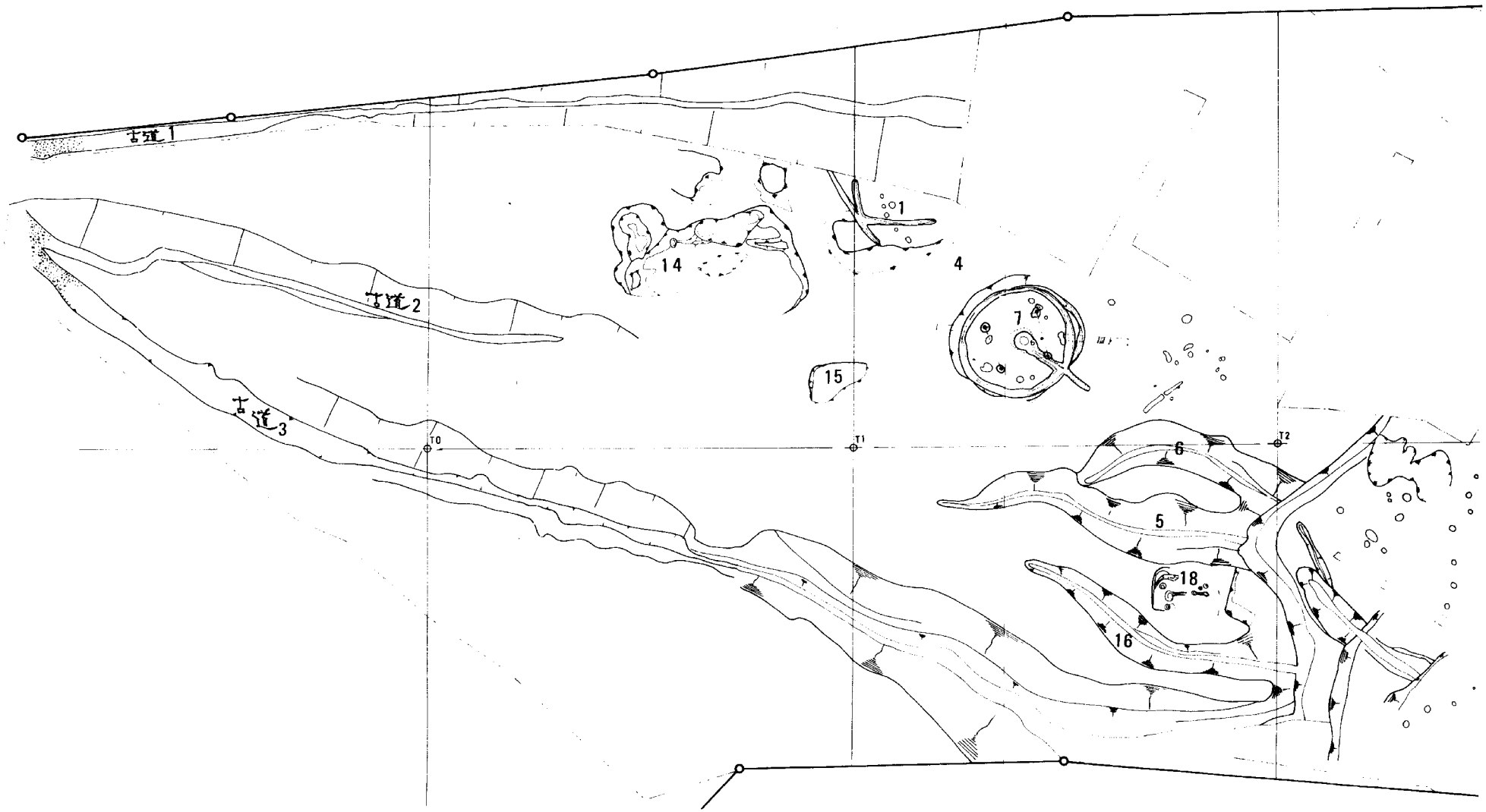
図版16－2　2区発掘後明渡し，工事用道路造成（北東より）（撮影：栗野）…… 312
図版17－1　3区古道発掘前（東より）（撮影：栗野）…… 313
2　3区古道（東より）（撮影：栗野）…… 313
図版18－1　3区古道①②発掘前状況（西より）（撮影）…… 314
2　3区古道①②全景（西より）（撮影：栗野）…… 314
図版19－1　3区全景（西より）（撮影：栗野）…… 315
2　3区古道②全景（西より）（撮影：栗野）…… 315
図版20－1　3区古道①全景（西より）（撮影：栗野）…… 316
2　3区古道①全景（東より）（撮影：栗野）…… 316
図版21－1　3区古道①全景（東より）（撮影：栗野）…… 317
2　3区古道①砂利敷状況（東より）（撮影：栗野）…… 317
図版22－1　3区古道断面B（東より）（撮影：栗野）…… 318
2　3区古道肩部分列石および土器出土状況（西より）（撮影：栗野）…… 318
図版23－1　3区北端部全景（北より）（撮影：栗野）…… 319
2　3区No.81遺構（南より）（撮影：栗野）…… 319
3　3区No.81遺構鎌出土状況（東より）（撮影：栗野）…… 319
図版24－1　4区発掘前全景（北より）（撮影：栗野）…… 320
2　4区トレンチ発掘全景（北より）（撮影：栗野）…… 320
3　4区全景（北西より）（撮影：栗野）…… 320
図版25－1　4区全景（北西より）（撮影：栗野）…… 321
2　4区全景（東南より）（撮影：栗野）…… 321
図版26－1　4区Ⅰ地点全景（北東より）（撮影：栗野）…… 322
2　4区Ⅰ地点全景（南西より）（撮影：栗野）…… 322
図版27－1　4区No.87建物（東より）（撮影：栗野）…… 323
2　4区No.89建物とその周辺（東南より）（撮影：栗野）…… 323
図版28－1　4区No.30遺構（西北西より）（撮影：栗野）…… 324
2　4区No.30遺構A断面（東より）（撮影：栗野）…… 324
図版29－1　4区No.25遺構①（南西より）（撮影：栗野）…… 325
2　4区No.25遺構①（北東より）（撮影：栗野）…… 325
図版30－1　4区No.25遺構①断面（北東より）（撮影：栗野）…… 326
2　4区No.25遺構②③（南西より）（撮影：栗野）…… 327
図版31－1　2区No.10住居址実測風景（撮影：栗野）…… 327
2　発掘調査員と作業員（撮影：栗野）…… 327
3　写真撮影用ヤグラ組立（撮影：高畑）…… 327



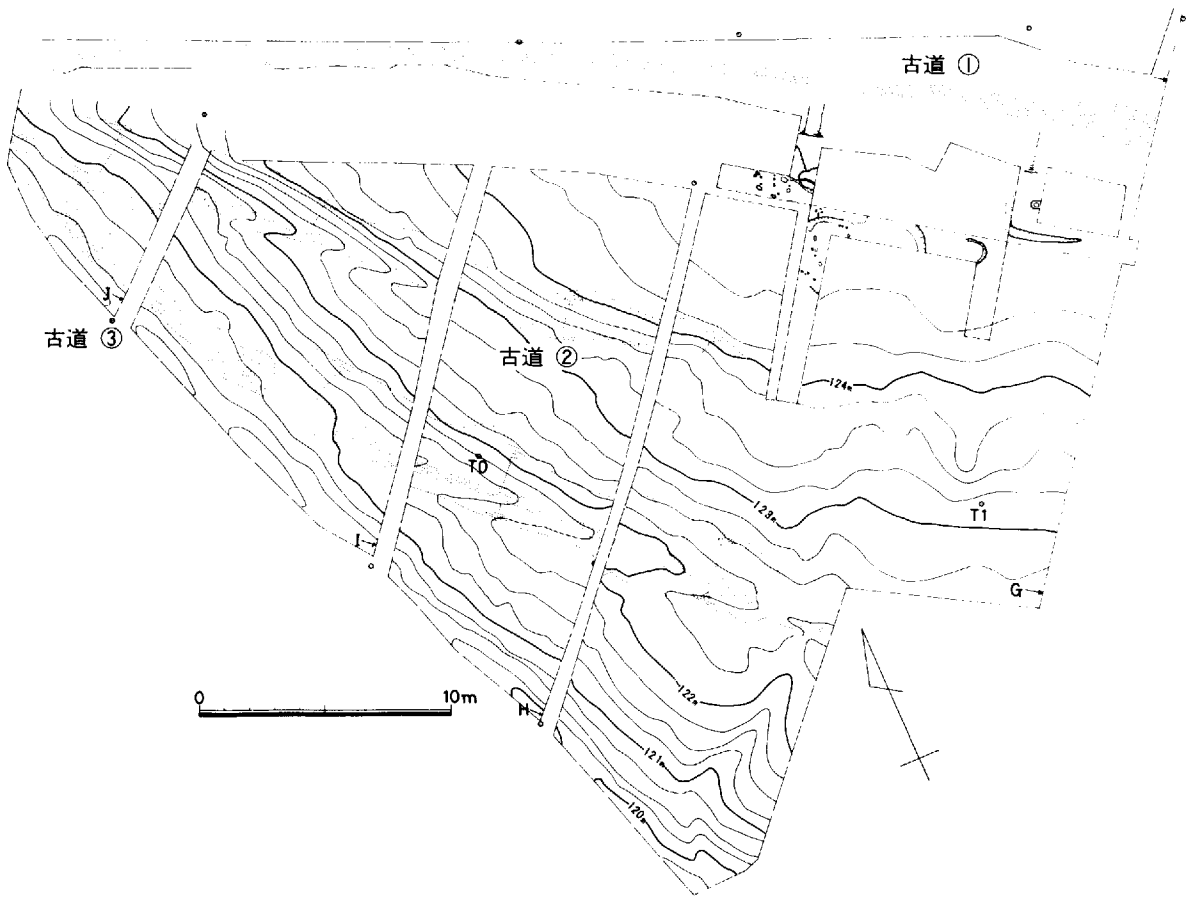
第３図　小中古墳群遺構配置図



第4図　小中古墳群3区 $\left(S=\frac{1}{200}\right)$



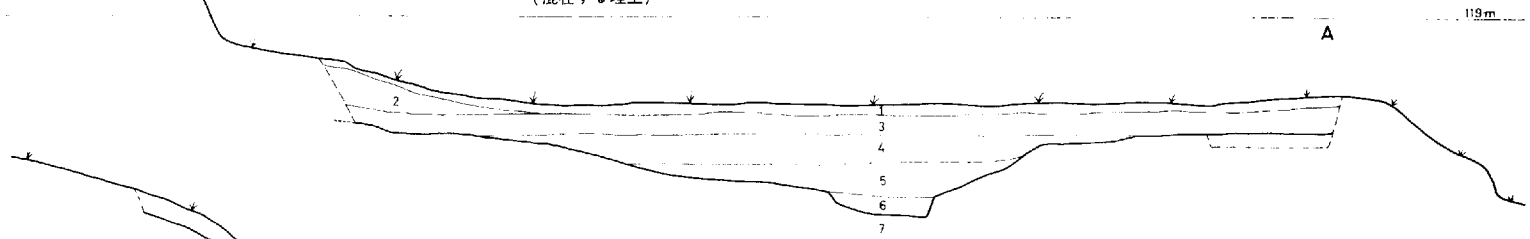
第5図　小中古墳群Ⅰ区　$\left(S=\frac{1}{200}\right)$



第６図　小中古墳群古道発掘状況（ドットは砂利敷を示す S＝$\frac{1}{300}$）

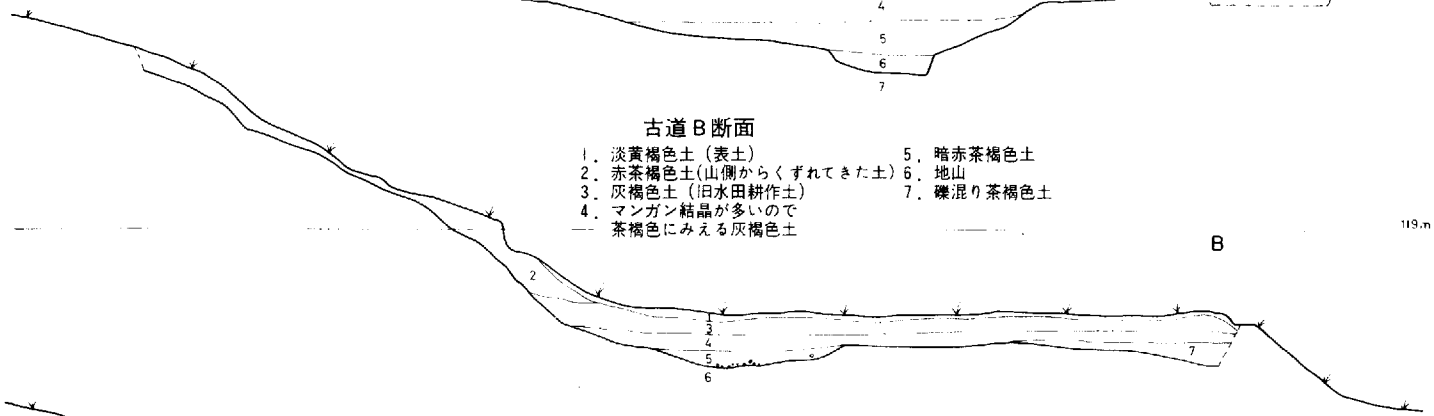
古道A断面

1．淡黄褐色土（表土）
2．明茶色土(軟らかい上からくずれた土)
3．灰褐色土（旧水田耕土）
4．黒褐色土.黄色土.青色砂利と粘土（混在する埋土）
5．灰褐色粘土層（砂礫混り少量）
6．赤茶褐色土
7．青灰色粘土



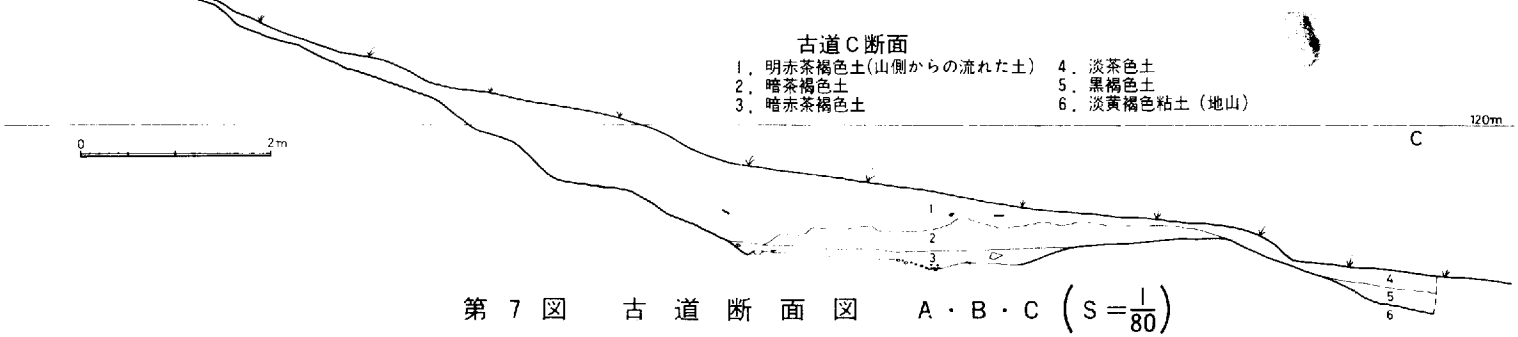
古道B断面

1．淡黄褐色土（表土）
2．赤茶褐色土(山側からくずれてきた土)
3．灰褐色土（旧水田耕作土）
4．マンガン結晶が多いので茶褐色にみえる灰褐色土
5．暗赤茶褐色土
6．地山
7．礫混り茶褐色土



古道C断面

1．明赤茶褐色土(山側からの流れた土)
2．暗茶褐色土
3．暗赤茶褐色土
4．淡茶色土
5．黒褐色土
6．淡黄褐色粘土（地山）



第７図　古道断面図　A・B・C $\left(S=\frac{1}{80}\right)$

古道D断面
1．淡黄褐色土（表土）
2．明赤茶褐色土
3．小砂礫混り茶褐色土
4．灰黒褐色土
5．黒褐色粘質土
6．地土

D 121m

E 122m

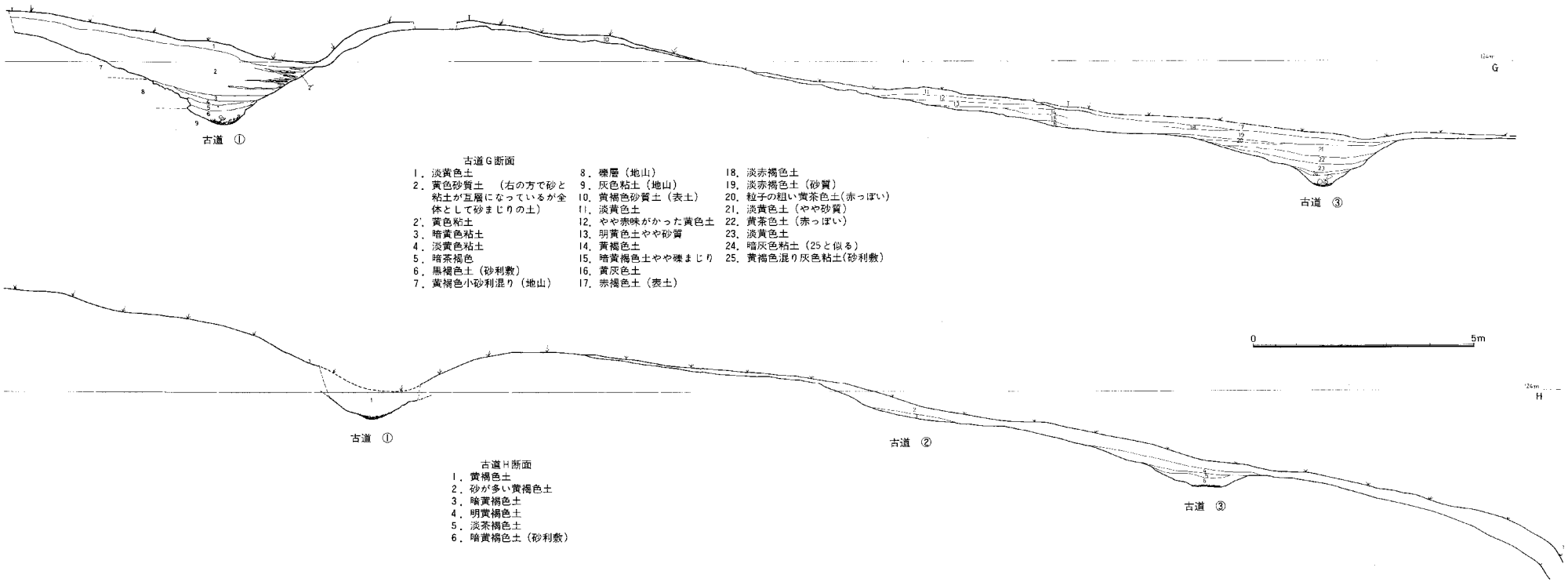
古道E断面
1．明淡黄褐色土
2．赤茶褐色土小砂礫混り
3．赤茶褐色土
4．灰褐色粘土
5．灰褐色砂礫
6．淡茶褐色土
7．灰色粘土
8．淡黒褐色土
9．黄褐色土（地山か？）
10．地山

F 123m

0 2m

古道F断面
1．淡黄褐色土
2．赤黄色土(少しづつ堆積したもので間に砂層をはさんで10数層に分れる)
3．暗黒茶褐色土

第8図　古道断面図　D・E・F　（S＝$\frac{1}{80}$）



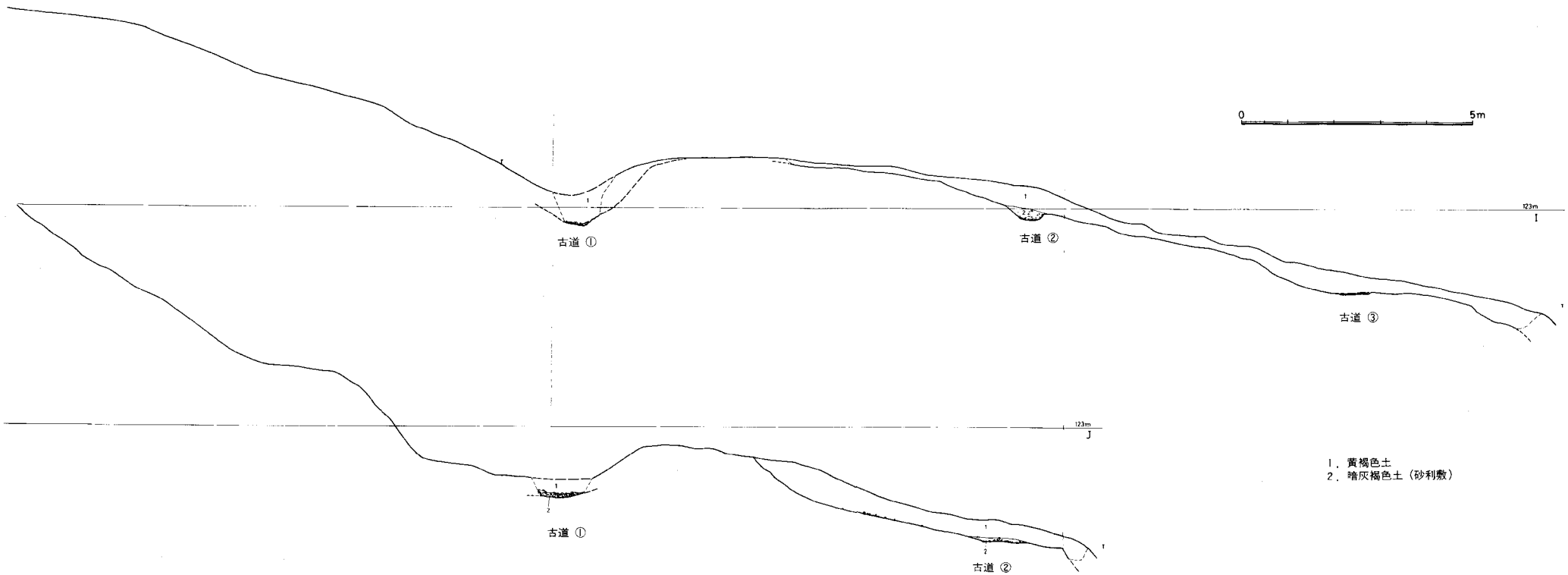
古道G断面

1．淡黄色土
2．黄色砂質土　（右の方で砂と粘土が互層になっているが全体として砂まじりの土）
2'．黄色粘土
3．暗黄色粘土
4．淡黄色粘土
5．暗茶褐色
6．黒褐色土（砂利敷）
7．黄褐色小砂利混り（地山）
8．礫層（地山）
9．灰色粘土（地山）
10．黄褐色砂質土（表土）
11．淡黄色土
12．やや赤味がかった黄色土
13．明黄色土やや砂質
14．黄褐色土
15．暗黄褐色土やや礫まじり
16．黄灰色土
17．赤褐色土（表土）
18．淡赤褐色土
19．淡赤褐色土（砂質）
20．粒子の粗い黄茶色土(赤っぽい)
21．淡黄色土（やや砂質）
22．黄茶色土（赤っぽい）
23．淡黄色土
24．暗灰色粘土（25と似る）
25．黄褐色混り灰色粘土(砂利敷)

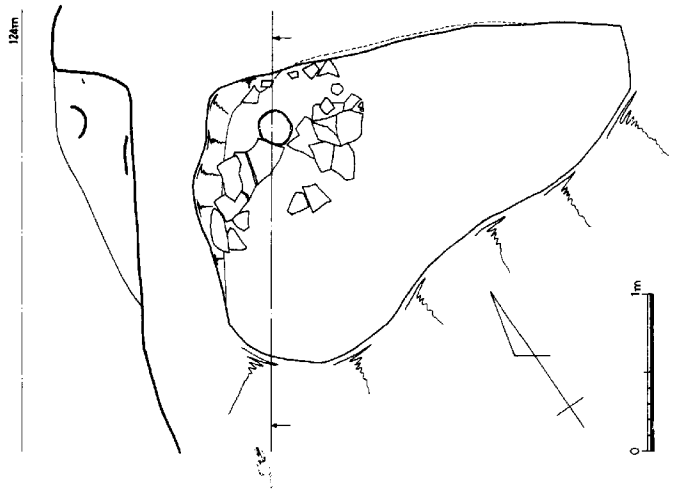
古道H断面

1．黄褐色土
2．砂が多い黄褐色土
3．暗黄褐色土
4．明黄褐色土
5．淡茶褐色土
6．暗黄褐色土（砂利敷）

第9図　古道断面図 G・H　$\left(S=\frac{1}{80}\right)$



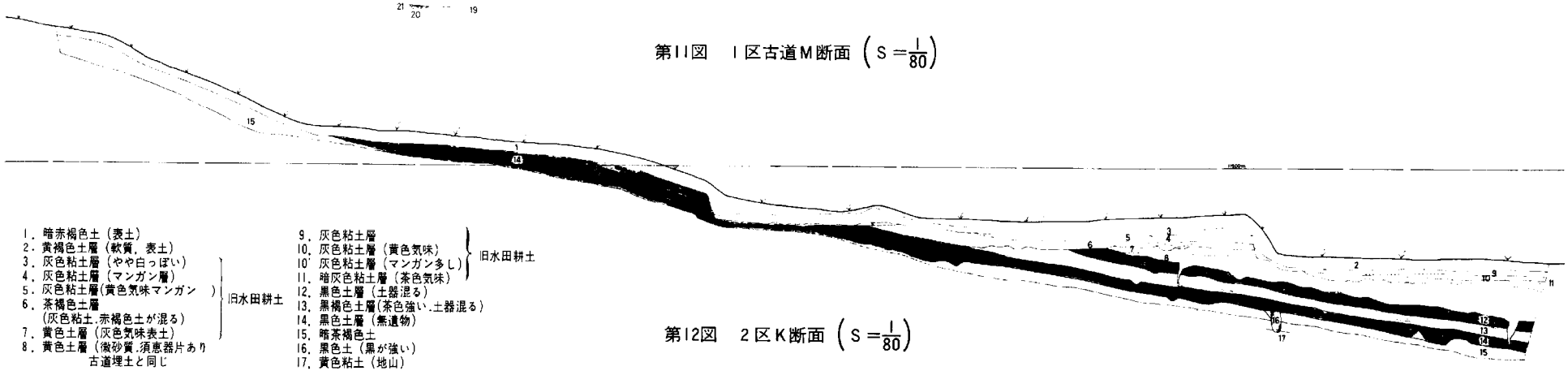
第10図 古 道 断 面 I・J $\left(S=\frac{1}{80}\right)$



第13図　I区No.15土坑 $\left(S=\frac{1}{40}\right)$

1. 赤褐色土（表土）
2. 淡々黒赤褐色土層
3. （地山に近い土）
4. 淡黒赤褐色土（木炭を含む）
5. 暗こげ茶色（木炭を含む）
6. 赤褐色土(地山礫を含む)
7. 淡赤褐色土(地山礫を含む)
8. 淡黒暗赤褐色土
9. 黒暗赤褐色土(木炭を含む)
10. 明赤褐色土(地山礫を少し含む)
11. 黒暗褐色土(木炭を含む土器片)
12. 柱穴I（見通し）
13. 柱穴II（見通し）
14. 表土
15. 赤褐色土(やわらかく純粋)
16. 淡黒赤褐色土(不純物無)
17. 淡々黒赤褐色土(地山礫を少し含む)
18. 黒褐色土
19. 粘土質の地山
20. ガリガリの地山
21. 粘土の間に石を敷きつめている

第11図　I区古道M断面 $\left(S=\frac{1}{80}\right)$



第12図　2区K断面 $\left(S=\frac{1}{80}\right)$

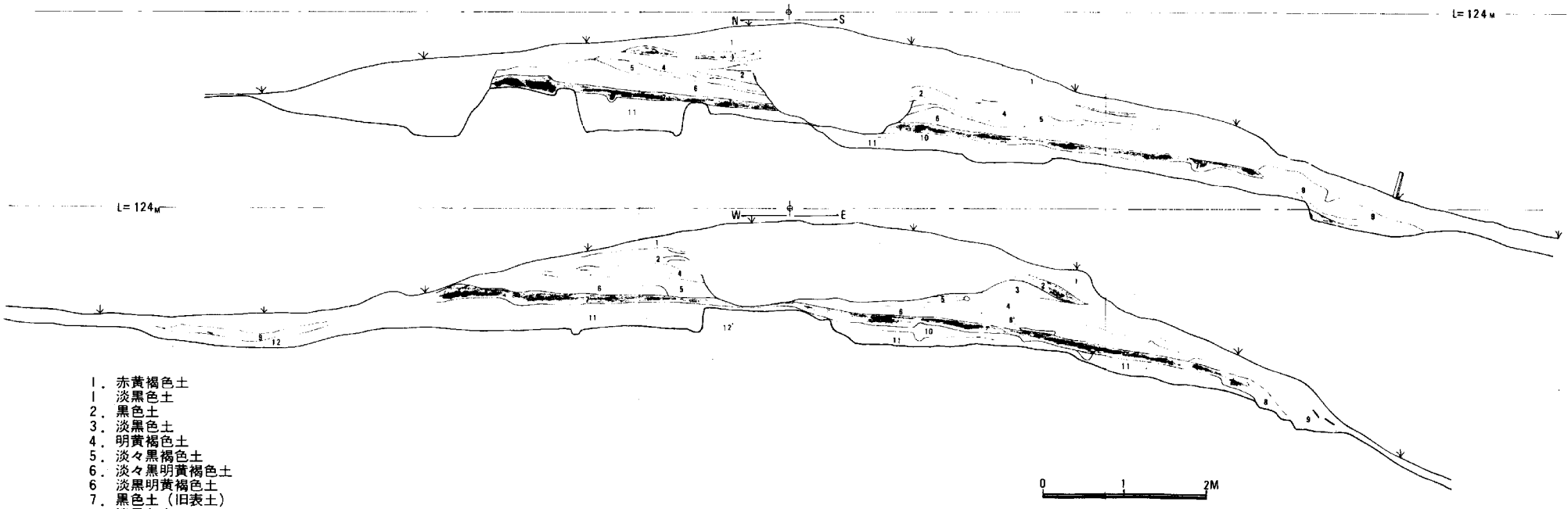
1. 暗赤褐色土（表土）
2. 黄褐色土層（軟質，表土）
3. 灰色粘土層（やや白っぽい）
4. 灰色粘土層（マンガン層）
5. 灰色粘土層(黄色気味マンガン　)
6. 茶褐色土層
（灰色粘土.赤褐色土が混る）
7. 黄色土層（灰色気味表土）
8. 黄色土層（微砂質.須恵器片あり
古道埋土と同じ

旧水田耕土

9. 灰色粘土層
10. 灰色粘土層（黄色気味）
10'. 灰色粘土層（マンガン多し）
11. 暗灰色粘土層（茶色気味）

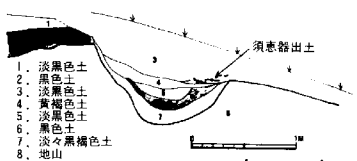
旧水田耕土

12. 黒色土層（土器混る）
13. 黒褐色土層(茶色強い.土器混る)
14. 黒色土層（無遺物）
15. 暗茶褐色土
16. 黒色土（黒が強い）
17. 黄色粘土（地山）

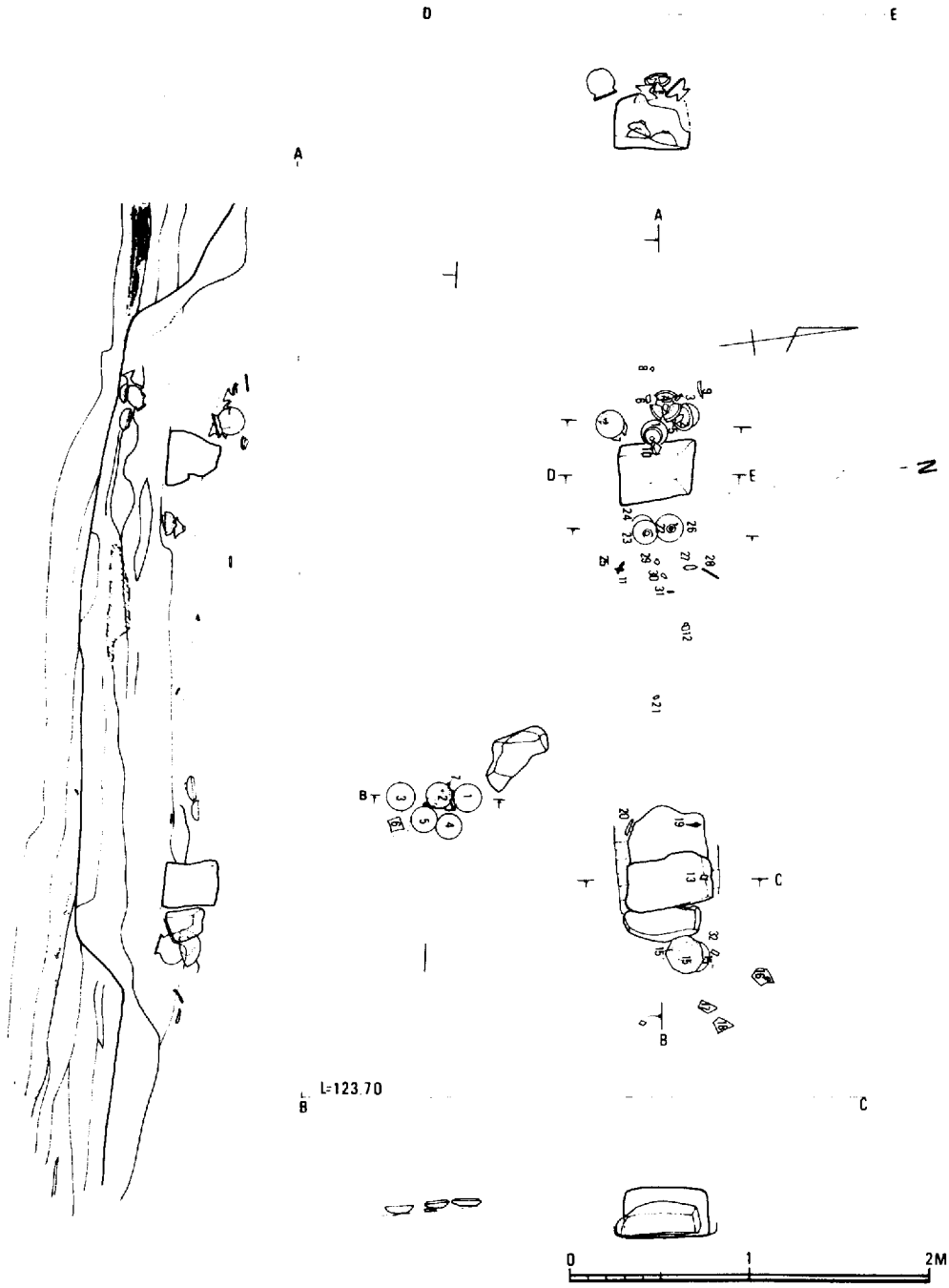


1．赤黄褐色土
1　淡黒色土
2．黒色土
3．淡黒色土
4．明黄褐色土
5．淡々黒褐色土
6．淡々黒明黄褐色土
6　淡黒明黄褐色土
7．黒色土（旧表土）
8．淡黒色土
9．淡々黒色土
10．黄褐色土
11．淡黒色土
12．淡黒色土
12'　地山

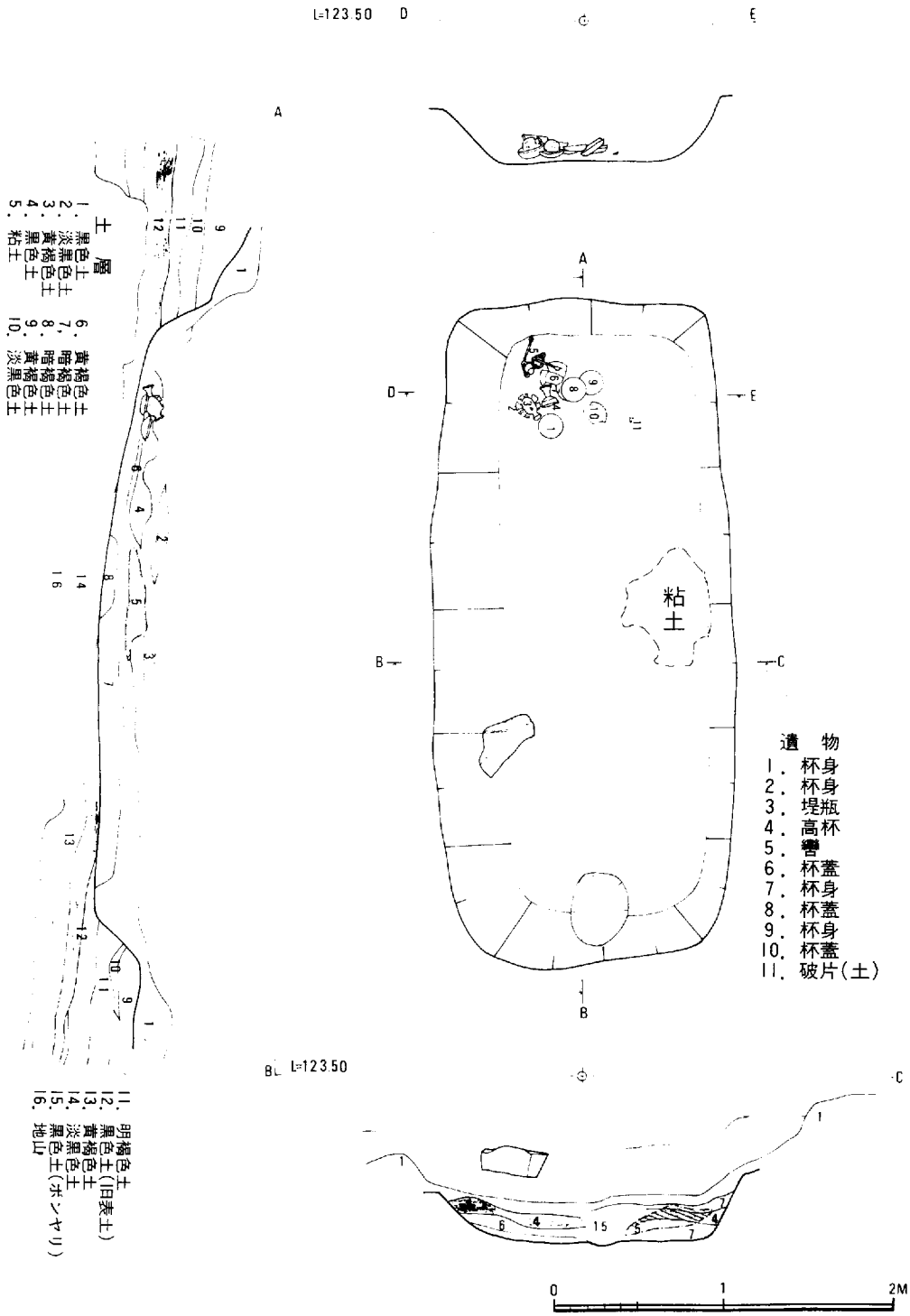
第14図　4号墳墳丘断面図 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



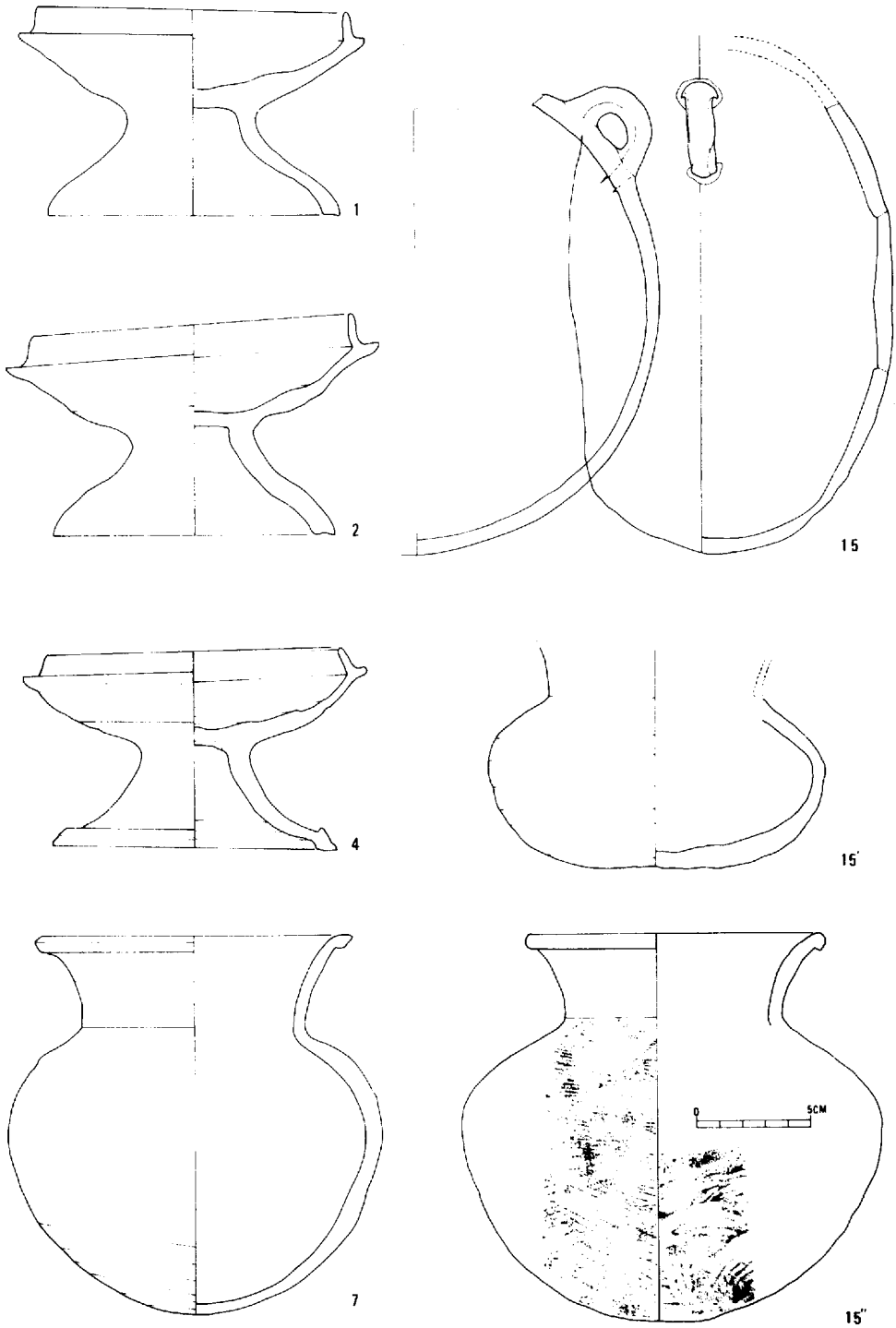
第15図　4号墳周溝断面図 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



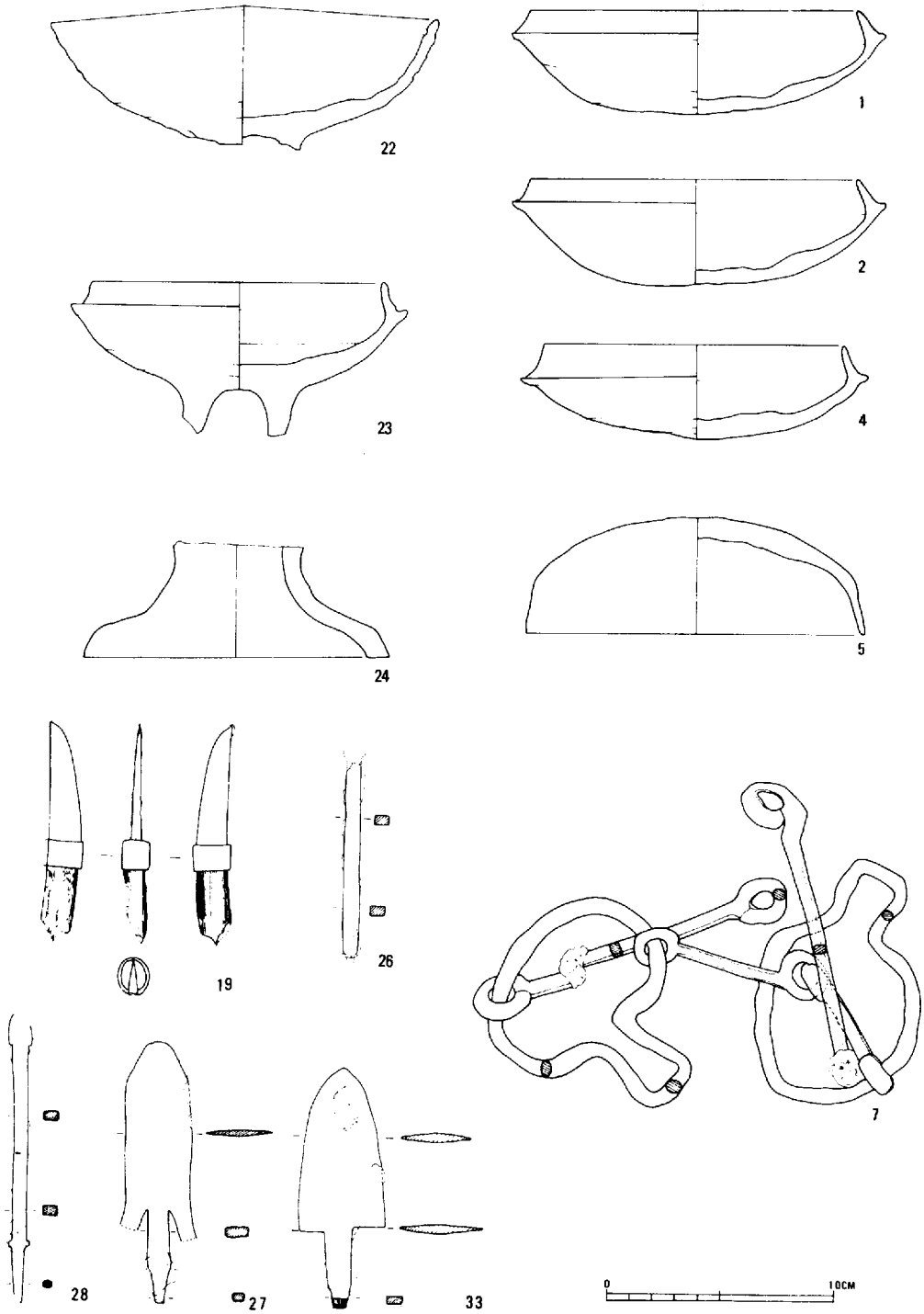
第16図　4号墳第Ⅰ（左）Ⅱ（右）主体部実測図 $\left(S=\frac{1}{40}\right)$



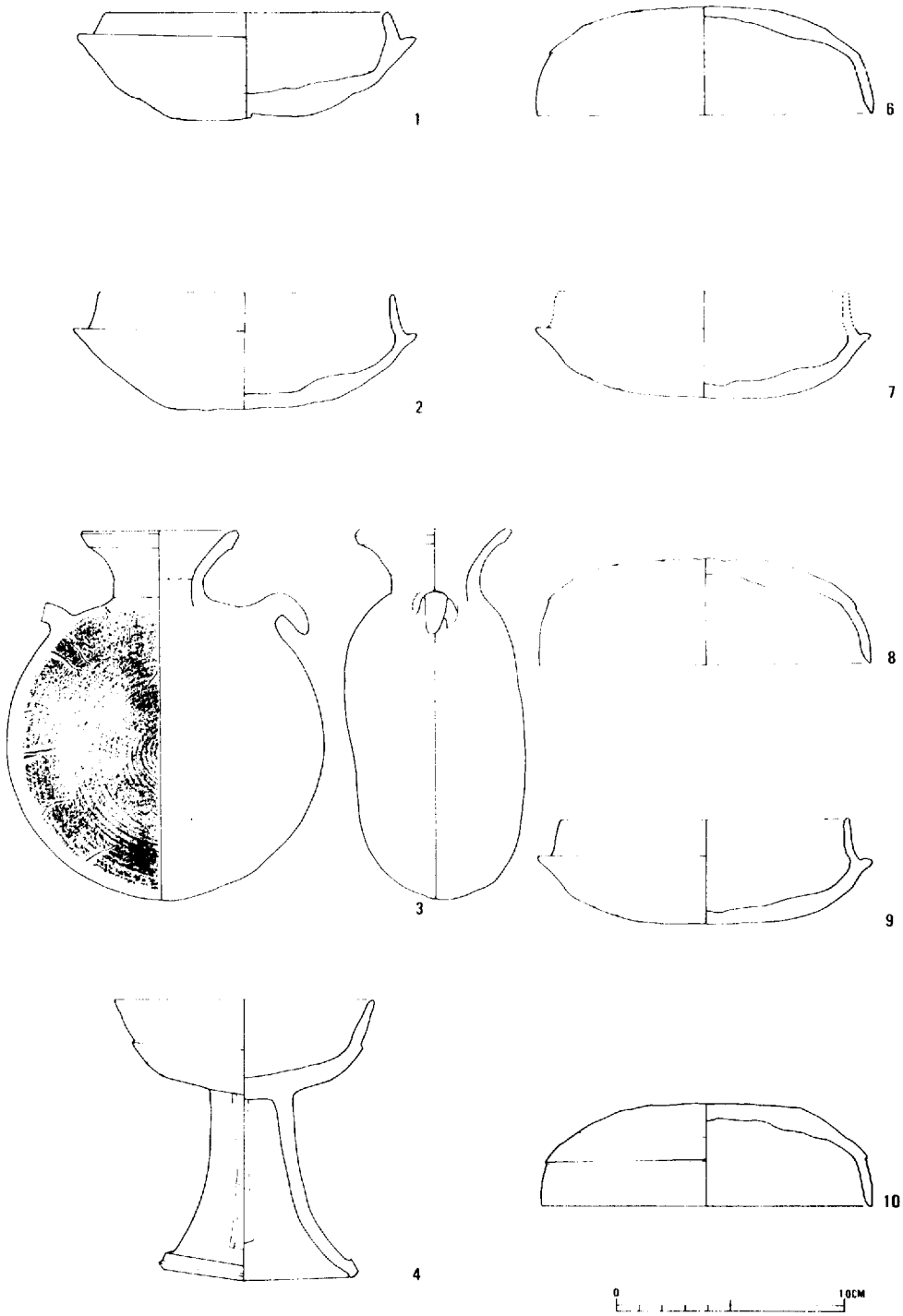
第17図　4号墳第Ⅲ主体部実測図 $\left(S=\frac{1}{40}\right)$



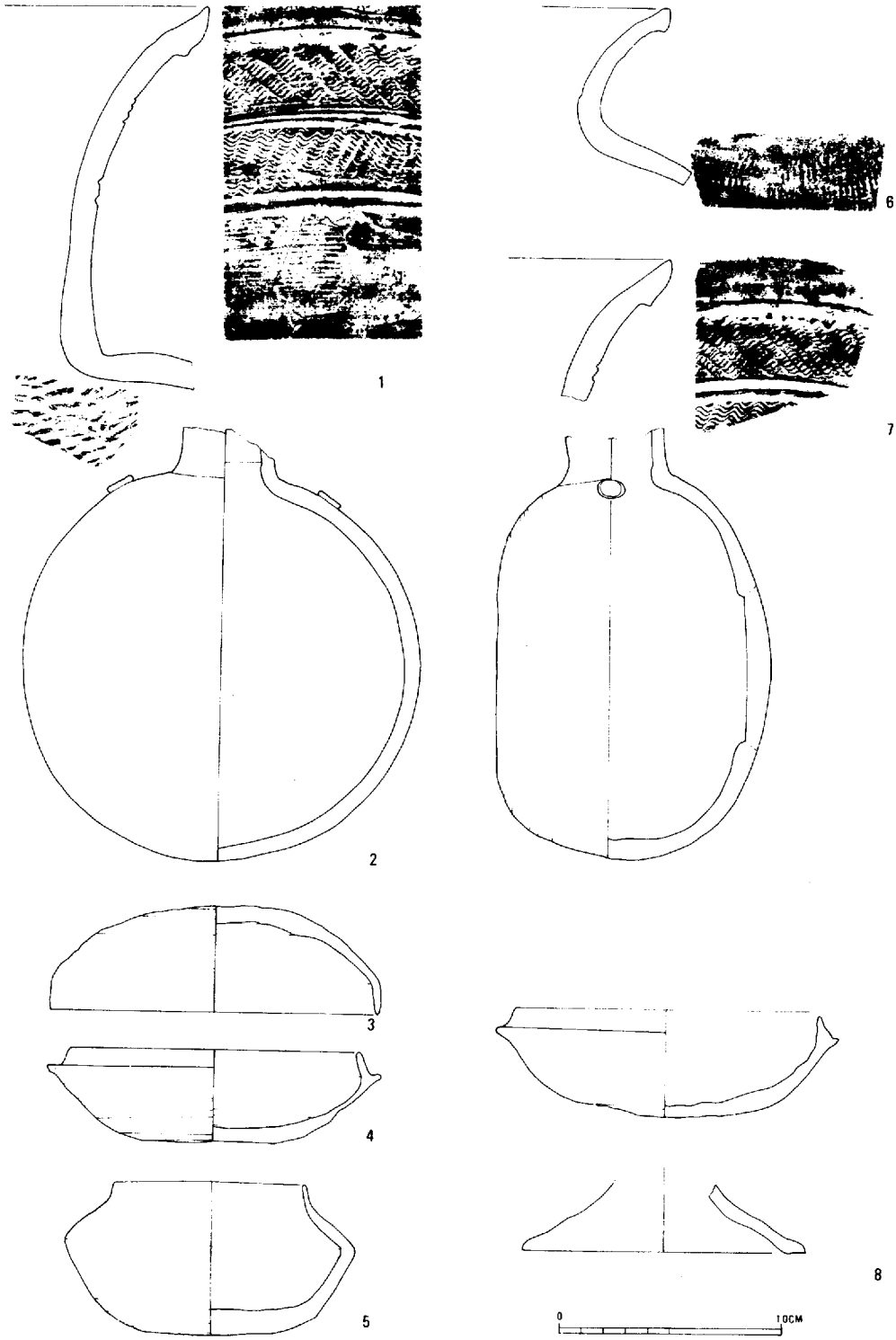
第18図　4号墳第Ⅰ主体部遺物 $\left(S=\frac{1}{3}\right)$



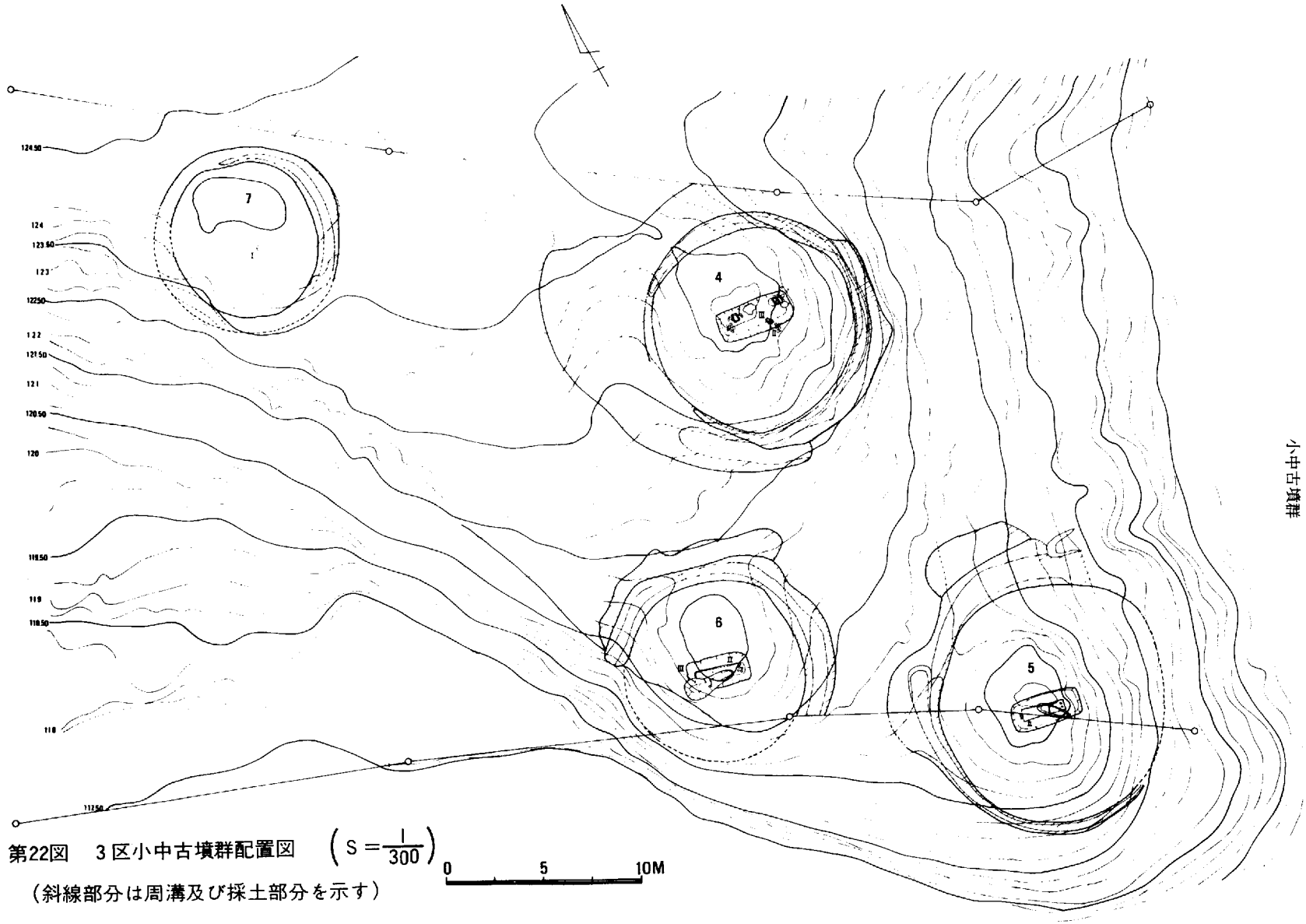
第19図　4号墳第Ⅰ主体部（22～33）第Ⅱ主体部（1～7）$\left(S=\frac{1}{3}\right)$



第20図　4号墳第Ⅲ主体部遺物 $\left(S=\frac{1}{3}\right)$

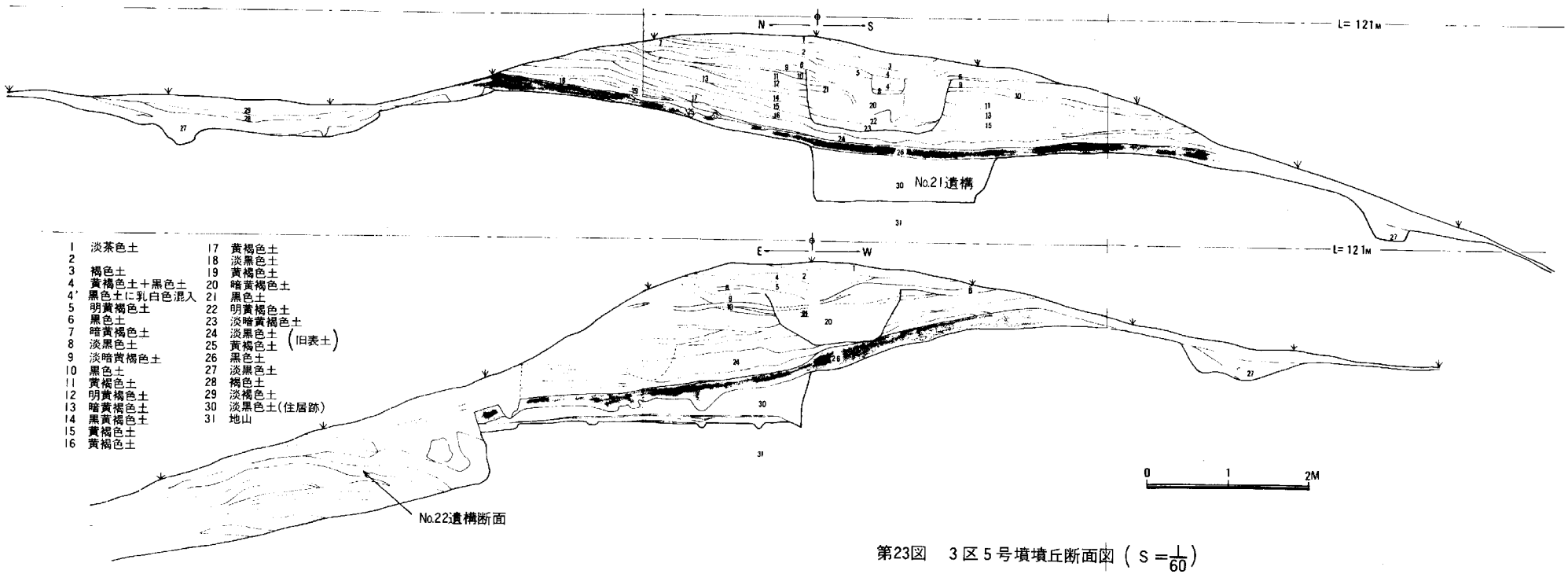


第21図　4号墳外表(3.4.5) 周溝(1.8) 5号墳外表(6) 周溝(2) 7号墳外表(7)



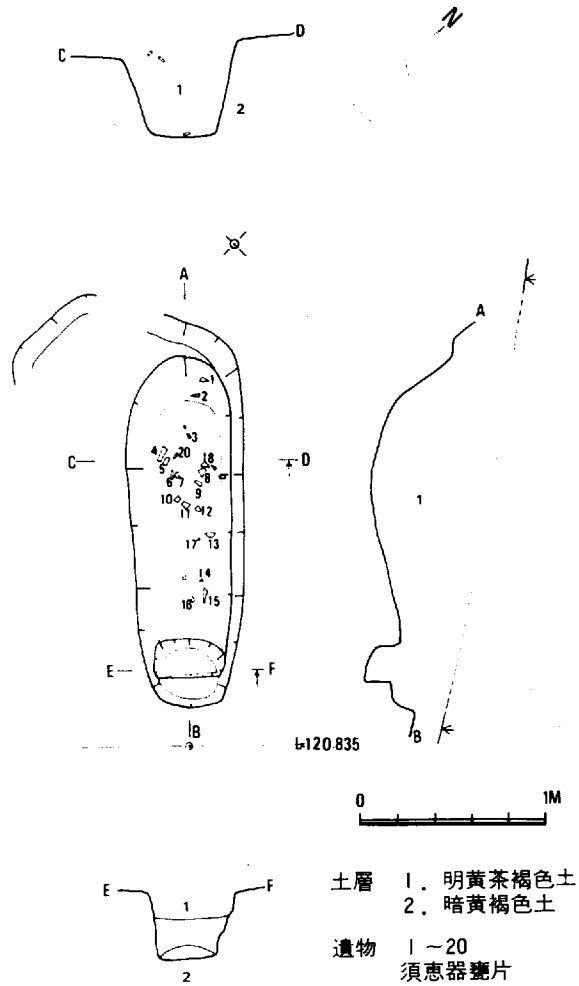
第22図　3区小中古墳群配置図　$\left(S=\frac{1}{300}\right)$

（斜線部分は周溝及び採土部分を示す）

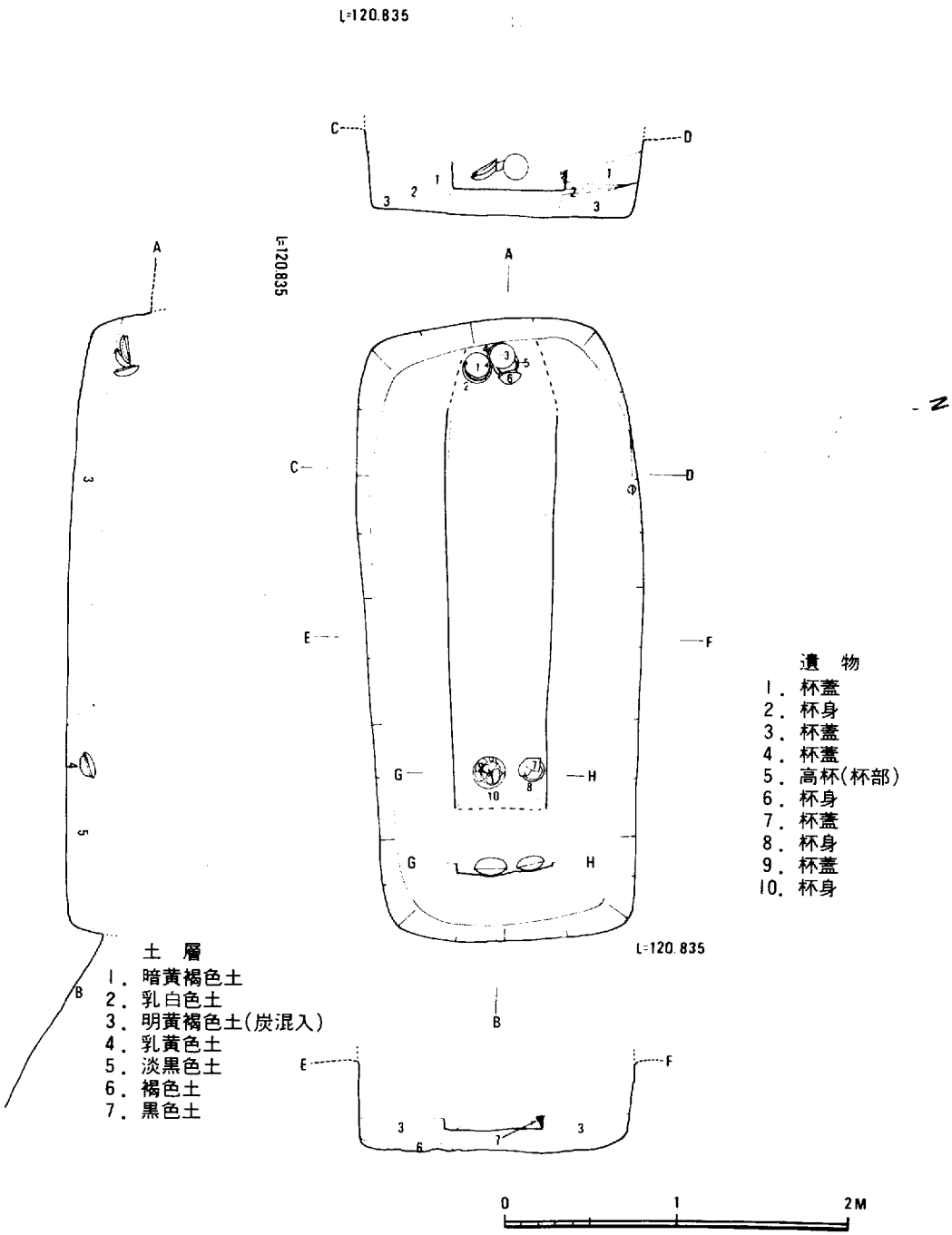


1 淡茶色土
2
3 褐色土
4 黄褐色土＋黒色土
4' 黒色土に乳白色混入
5 明黄褐色土
6 黒色土
7 暗黄褐色土
8 淡黒色土
9 淡暗黄褐色土
10 黒色土
11 黄褐色土
12 明黄褐色土
13 暗黄褐色土
14 黒黄褐色土
15 黄褐色土
16 黄褐色土
17 黄褐色土
18 淡黒色土
19 黄褐色土
20 暗黄褐色土
21 黒色土
22 明黄褐色土
23 淡暗黄褐色土
24 淡黒色土 (旧表土)
25 黄褐色土
26 黒色土
27 淡黒色土
28 褐色土
29 淡褐色土
30 淡黒色土(住居跡)
31 地山

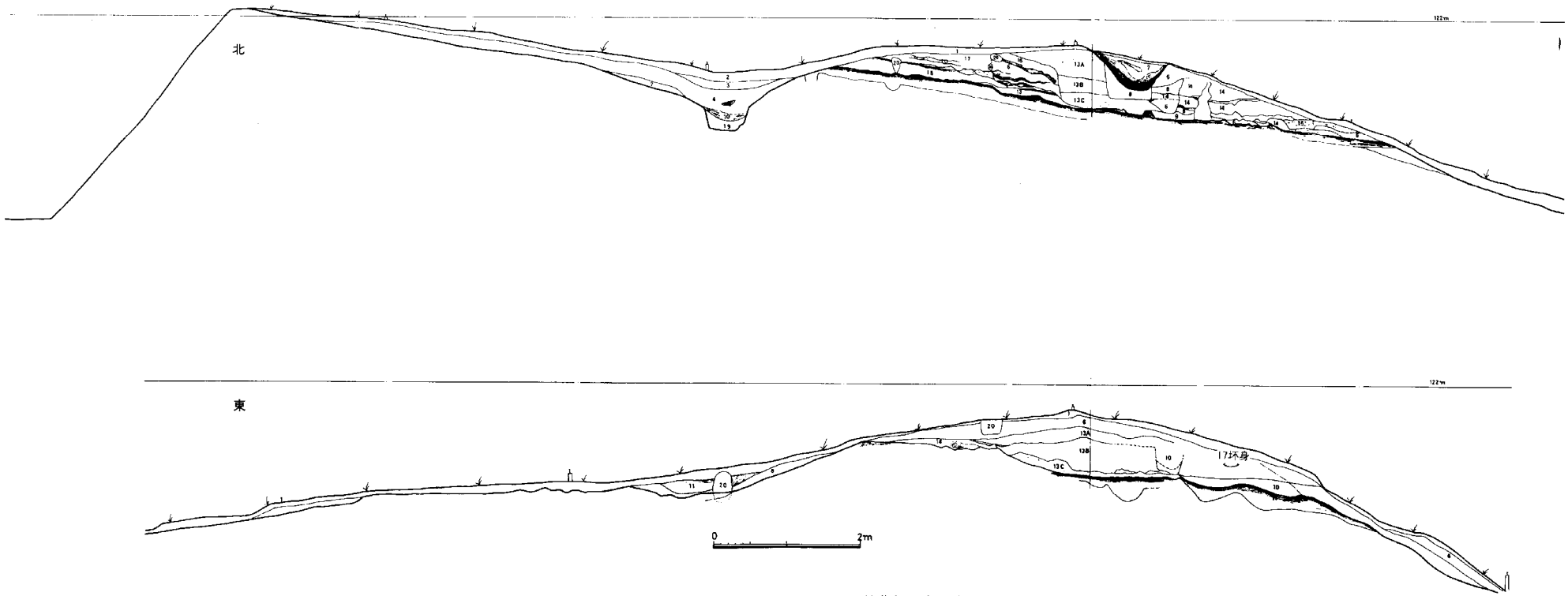
第23図　3区5号墳墳丘断面図（S＝$\frac{1}{60}$）



第24図　3区5号墳第Ⅰ主体部実測図（S＝$\frac{1}{40}$）

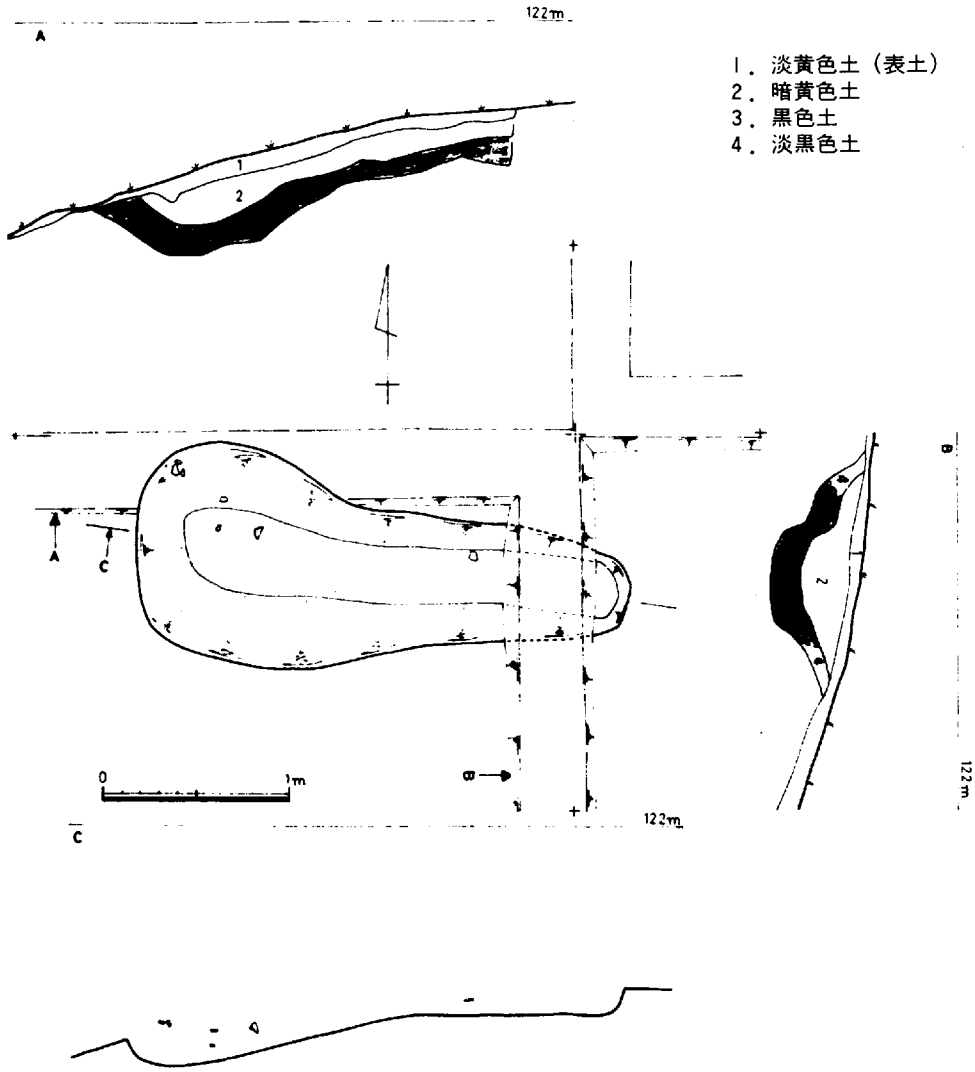


第25図　3区5号墳第II主体部実測図（S＝$\frac{1}{40}$）

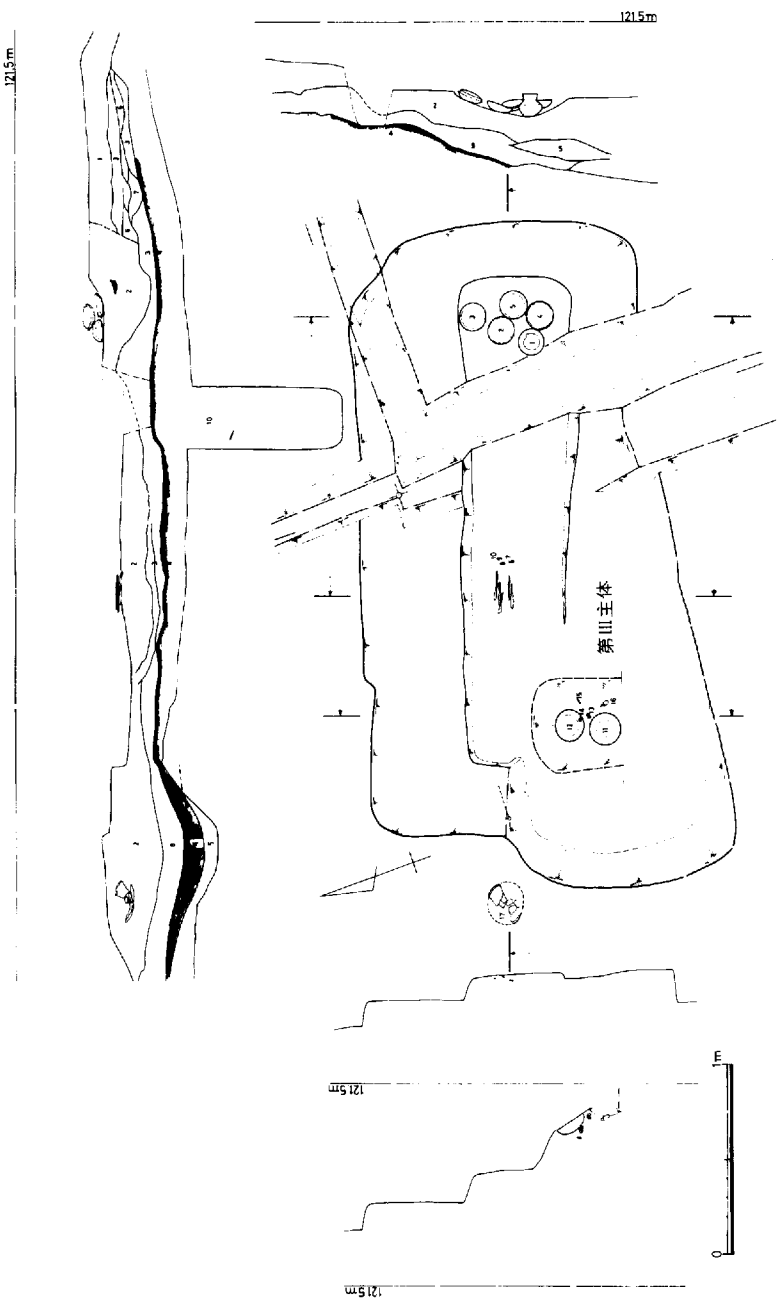


1．淡黄色土（表土）
2．淡茶色土（表土）
3．暗茶色土
4．茶褐色土
5．淡暗黄色土
6．黄色土
7．淡黄褐色土
8．黄褐色土
9．淡黒色土（黒色ブロック混り）
10．淡黒色土
11．黒色土
12．黒褐色土
13．黒色土と黄色土ボロボロを固めたもの　A 軟　B やや硬　C 硬
14．黒色混り黄色土
15．黄色混り黒色土
16．黄白色ブロック混り黄色土
17．地山褐鉄鉱混り暗黄色土
18．黒色土と茶褐色土
19．黄色．茶色．灰色土ブロック混在
20．木の根

第２６図　６号墳墳丘断面図 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

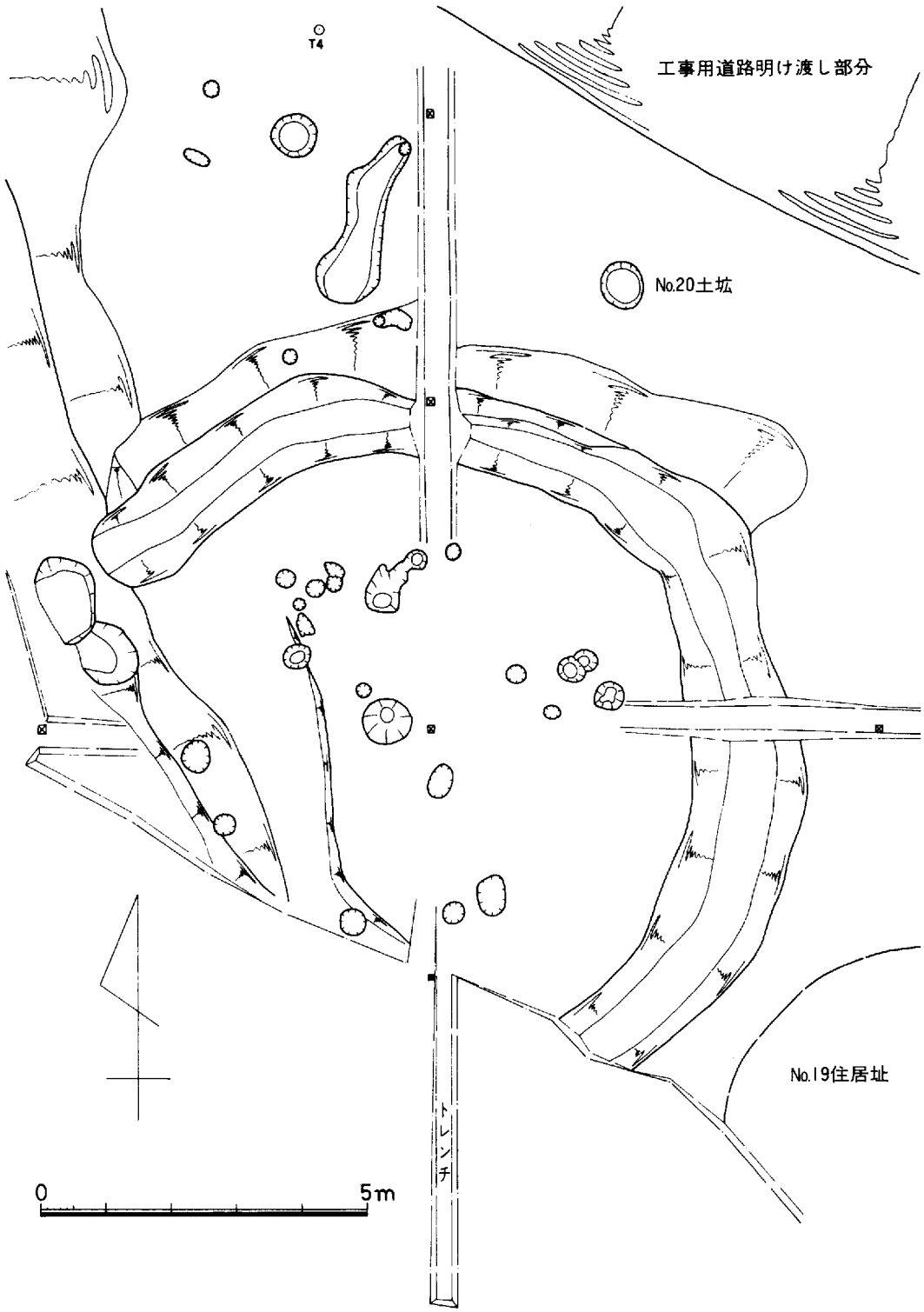


第２７図　６号墳第Ｉ主体？ $\left(S=\frac{1}{40}\right)$

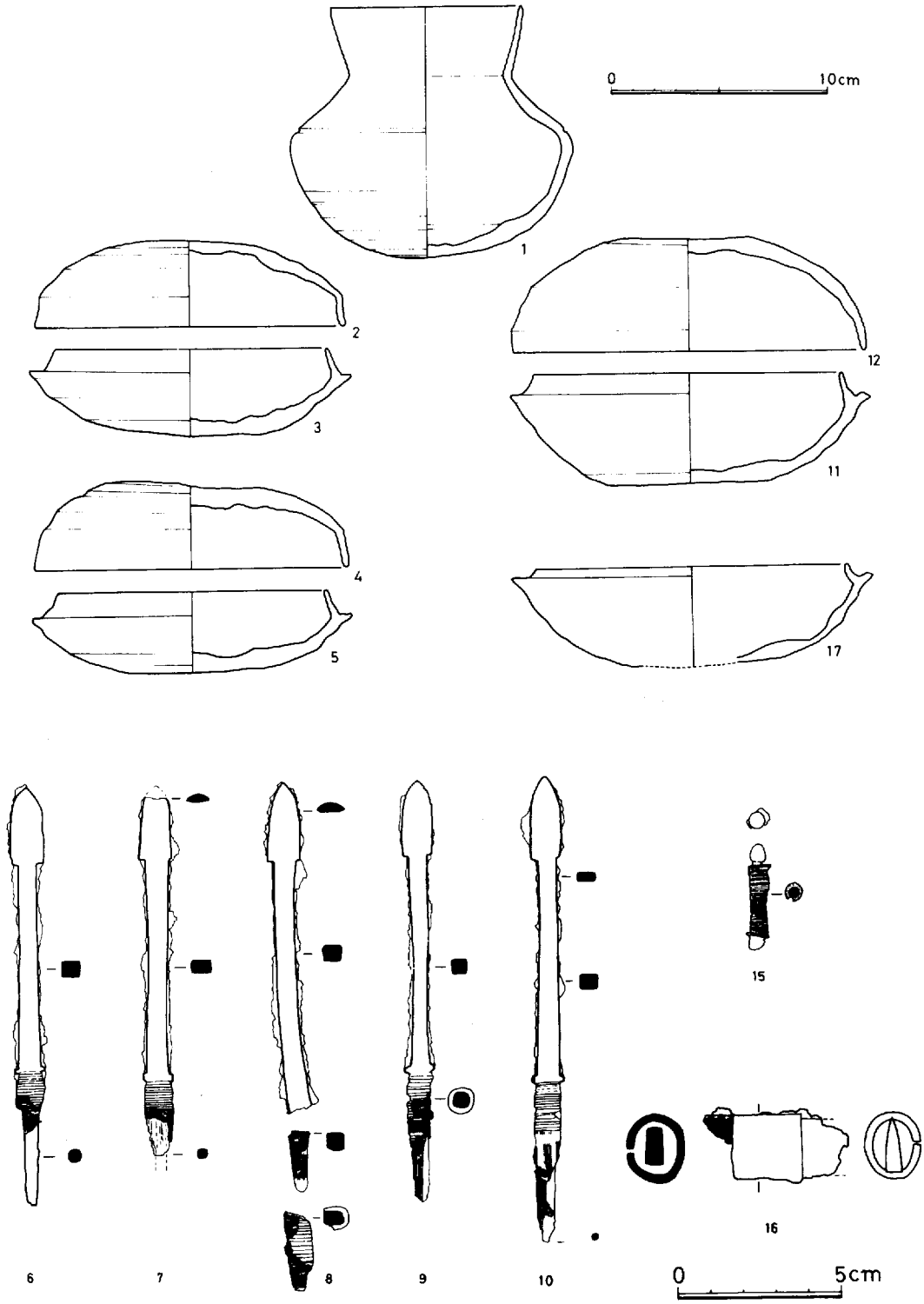


1．赤黄色土
2．黄褐色土
3．黒褐色土（黄色土混り）
4．黒色土（旧表土）
5．淡黒色土
6．暗黄色土
7．暗黄色土（黒土混り）
8．淡黒色土と黄褐色混り
9．淡黒色土と茶褐色土混ぜて固めた土
10．淡黒色土と黄色土ブロック混り柱穴？

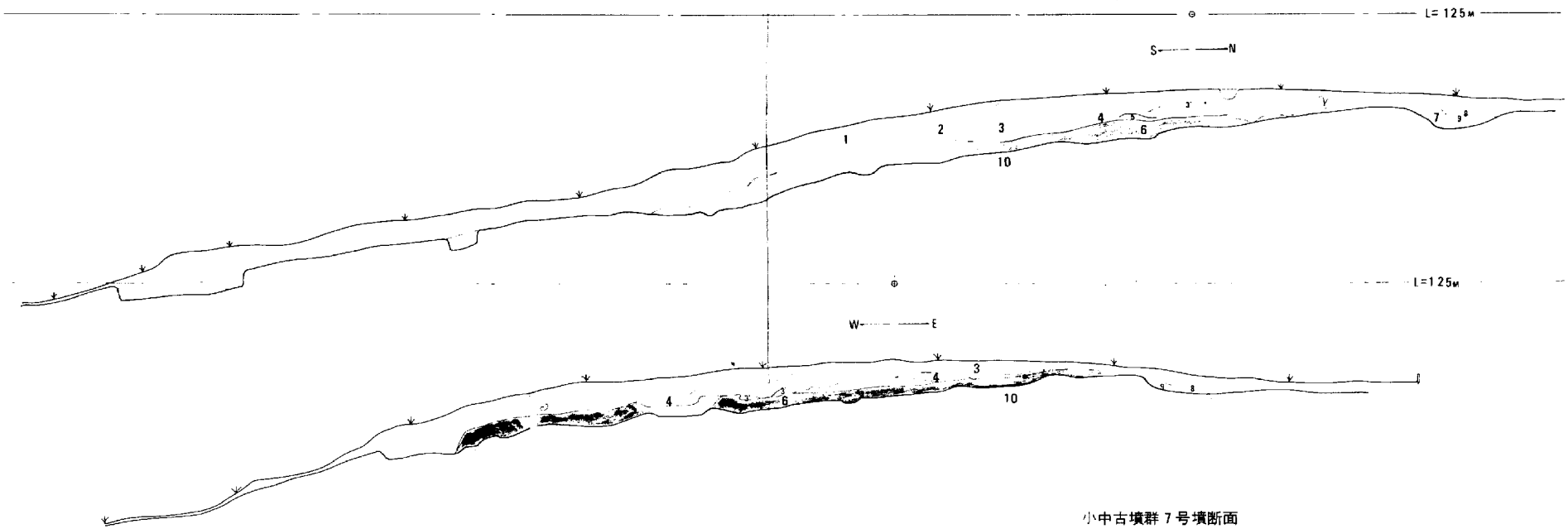
第２８図　６号墳第Ⅱ主体部



第２９図　６号墳墳丘下地山面の平面図 $\left(S=\frac{1}{100}\right)$



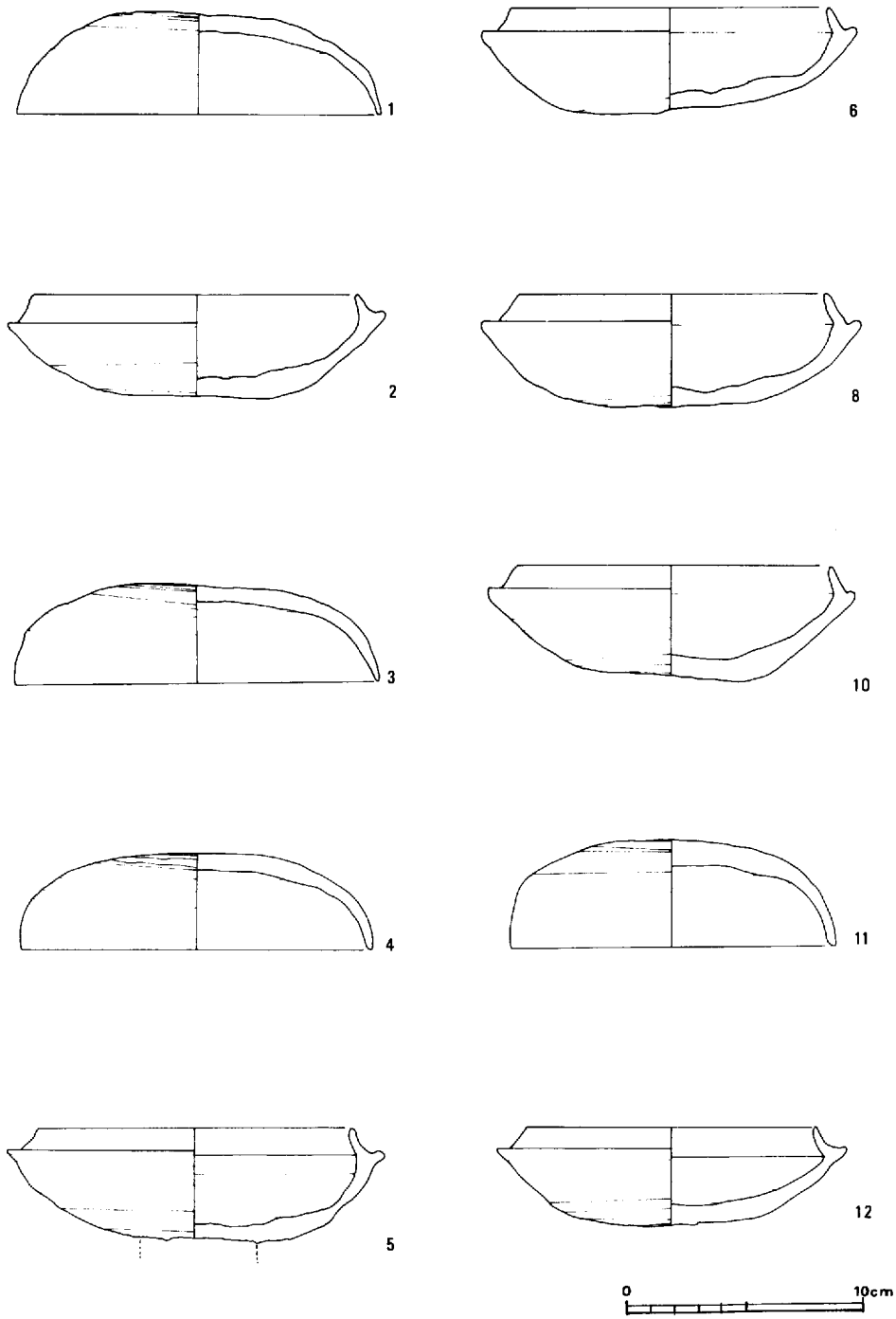
第３０図　６号墳出土遺物実測図（土器 S ＝$\frac{1}{3}$、鉄器 S ＝$\frac{1}{2}$）



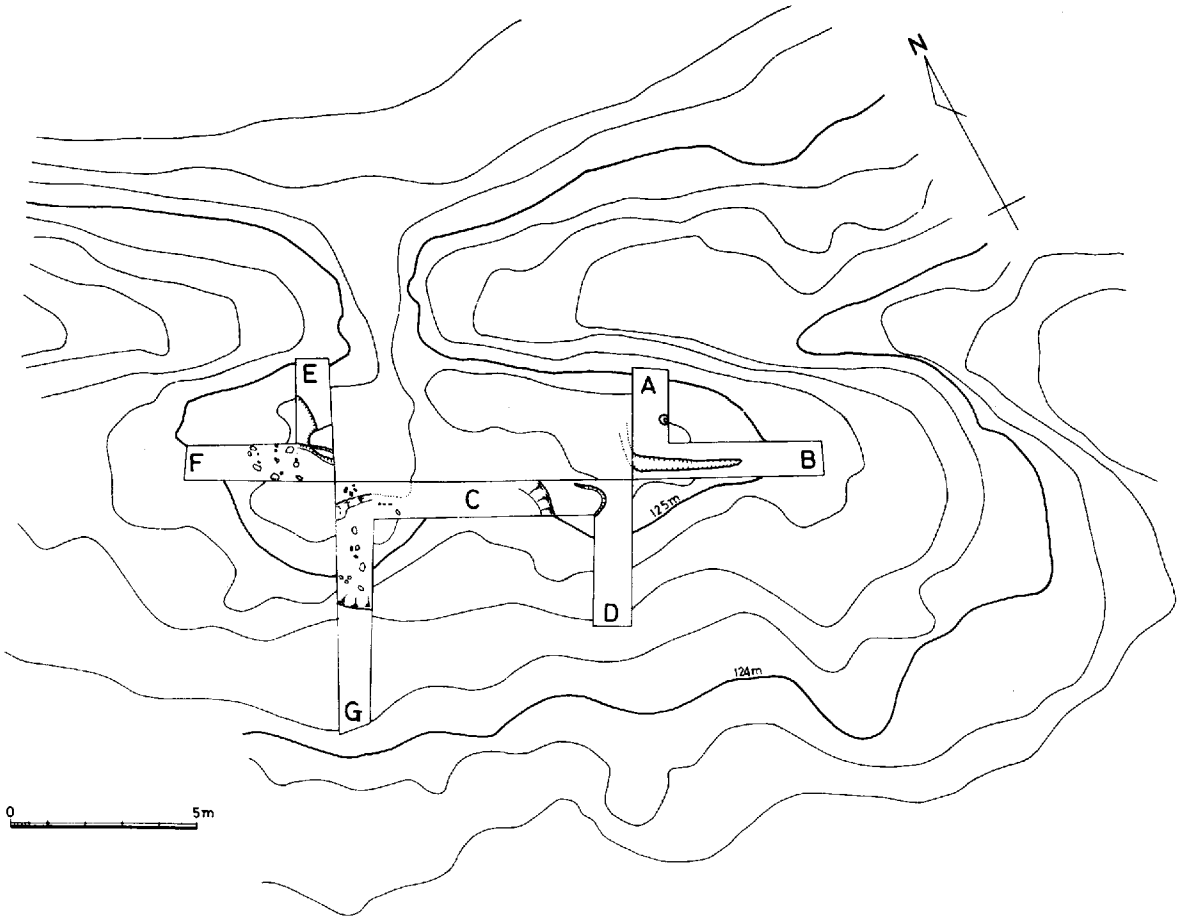
小中古墳群７号墳断面

1．黄褐色土層
2．淡々黒色土層（地山礫を含む）
3．赤黄褐色土層（地山礫を含む）
3′．暗黄褐色土層
4．淡黒色土層
5．黄淡黒褐色土層（地山礫・土器片含む）
6．黒色土
7．黄褐色土層（土器片を多く含む）
8．淡黒色土層
10．黄色土層
10．地山（黄褐色土）

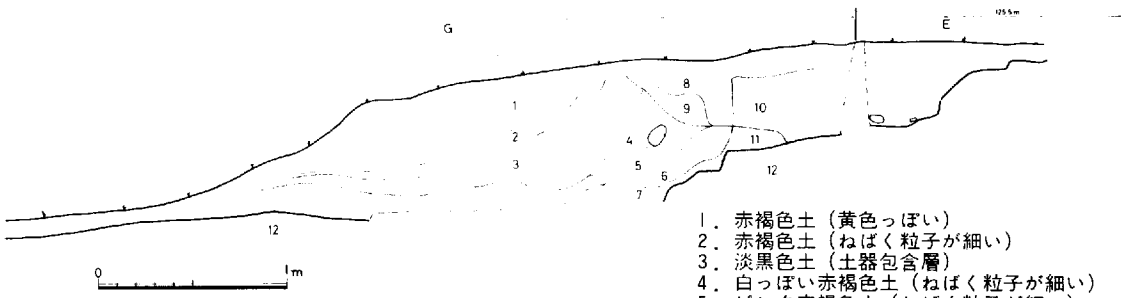
第３１図　３区７号墳墳丘断面図 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



第３２図　５号墳（１～10）７号墳（11,12）出土須恵器 $\left(S=\frac{1}{3}\right)$

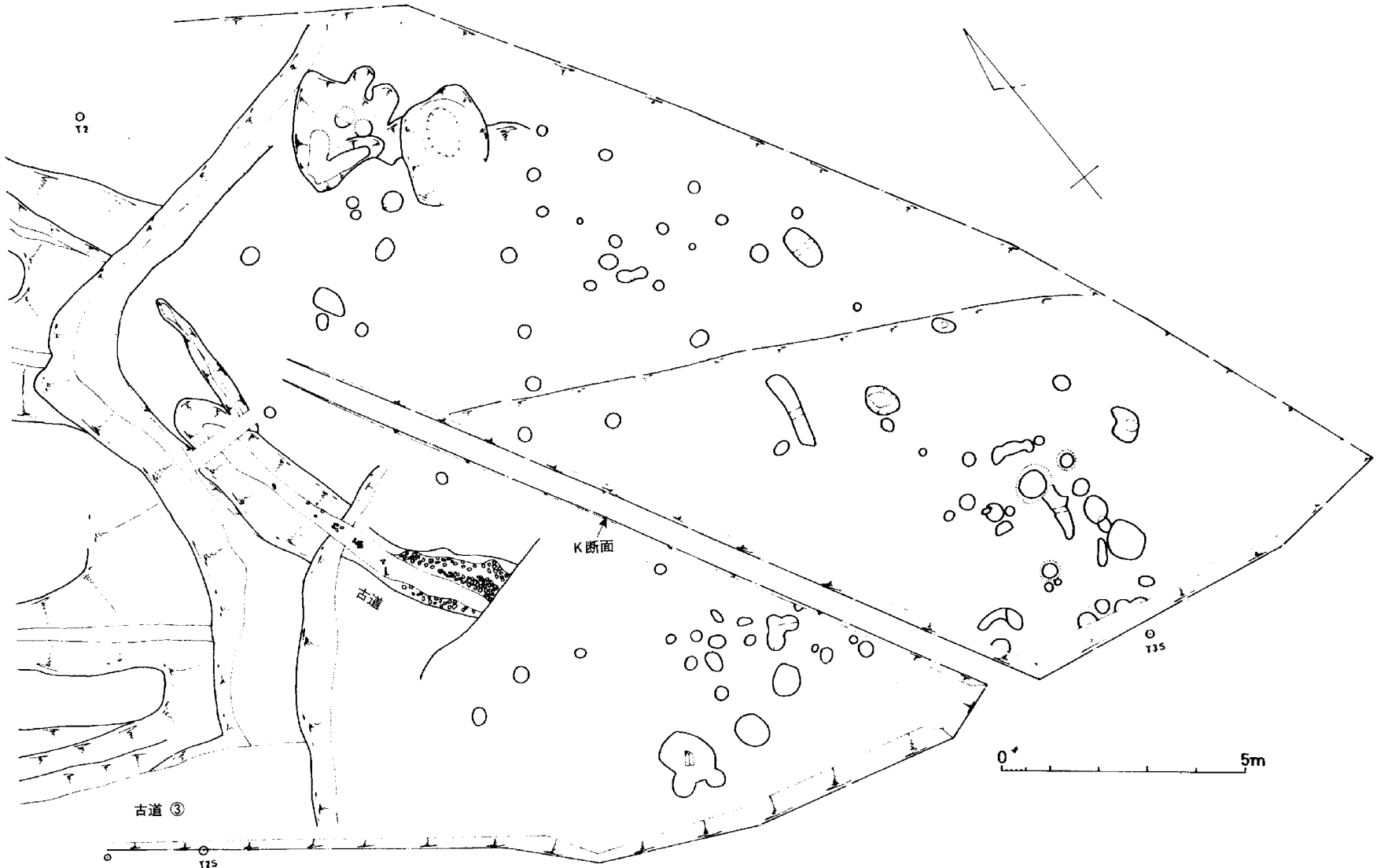


第３３図　Ⅰ区墳丘状部分トレンチNo.1 住居址No.14遺構発見 $\left(S=\frac{1}{200}\right)$

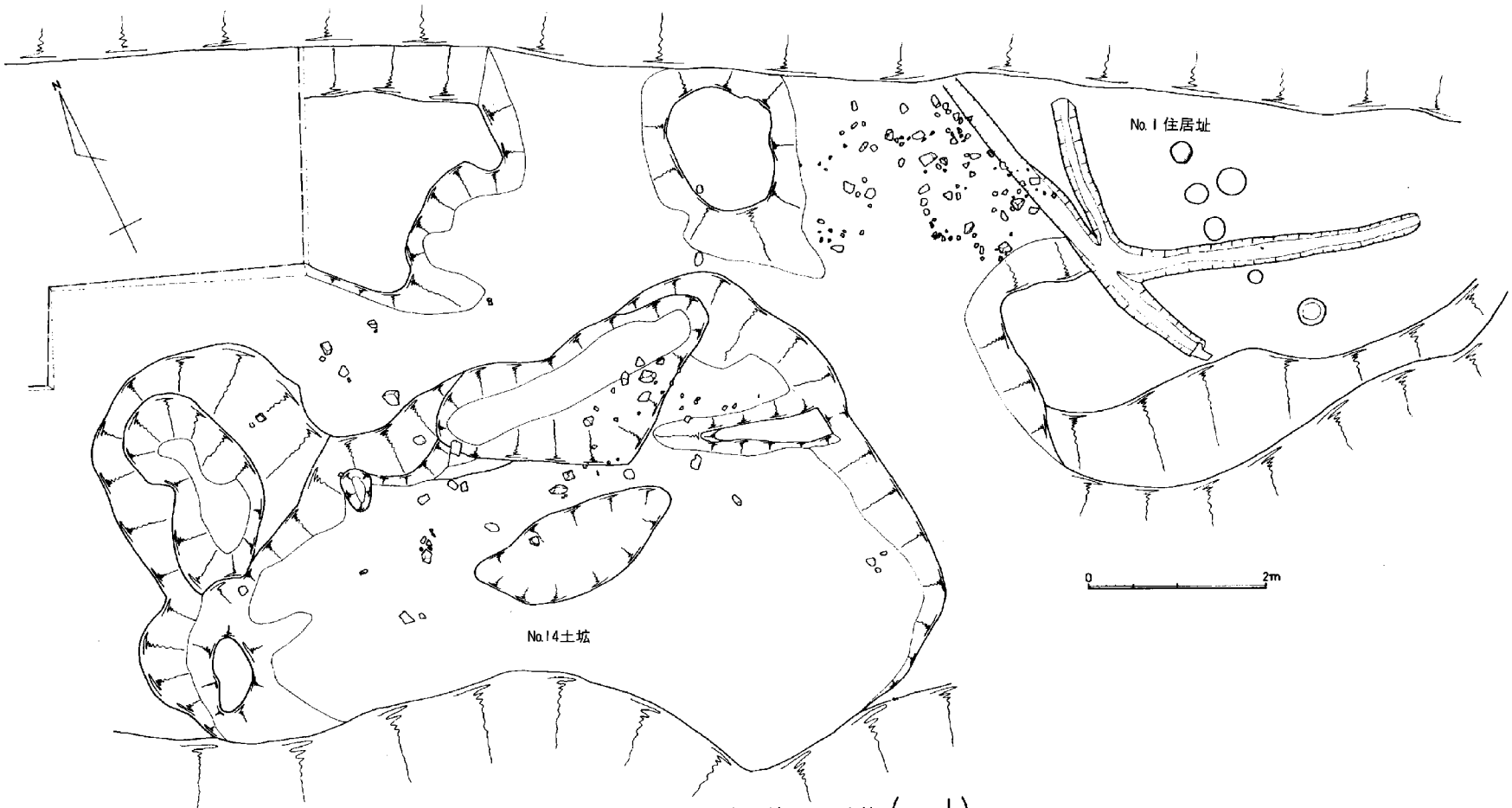


1．赤褐色土（黄色っぽい）
2．赤褐色土（ねばく粒子が細い）
3．淡黒色土（土器包含層）
4．白っぽい赤褐色土（ねばく粒子が細い）
5．ピンク赤褐色土（ねばく粒子が細い）
6．黄赤褐色土(色が比較的明確ねばく粒子が細い)
7．地山に近い土
8．やや黒色の赤褐色土（ピット状になっている）
9．ピットの黒色土を除いた赤褐色土
10．黄褐色土
11．粘質土（掘りすぎ）
12．地山

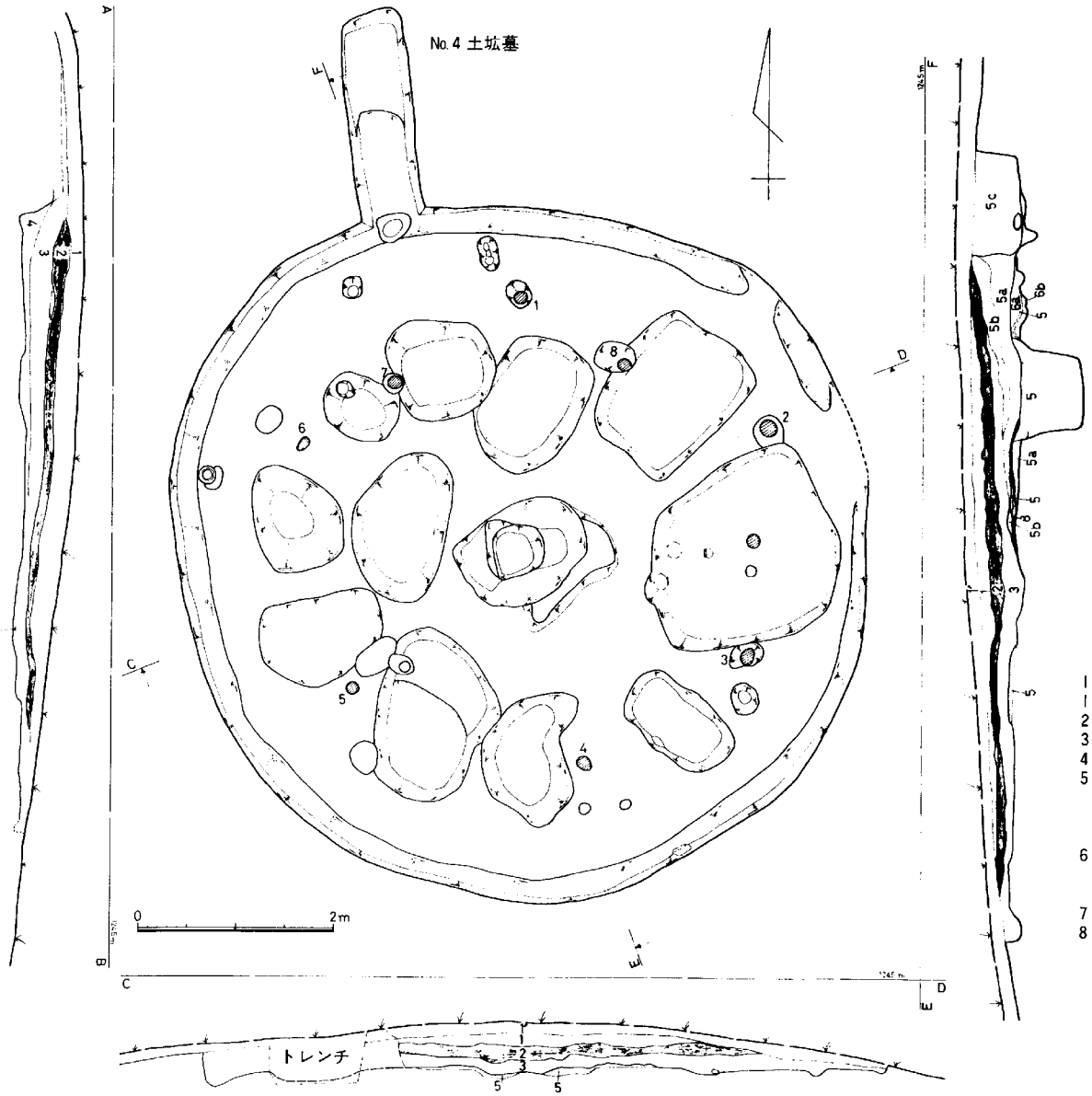
第３４図　Ⅰ区No.14遺構断面　（G西壁．E東壁）$\left(S=\frac{1}{40}\right)$



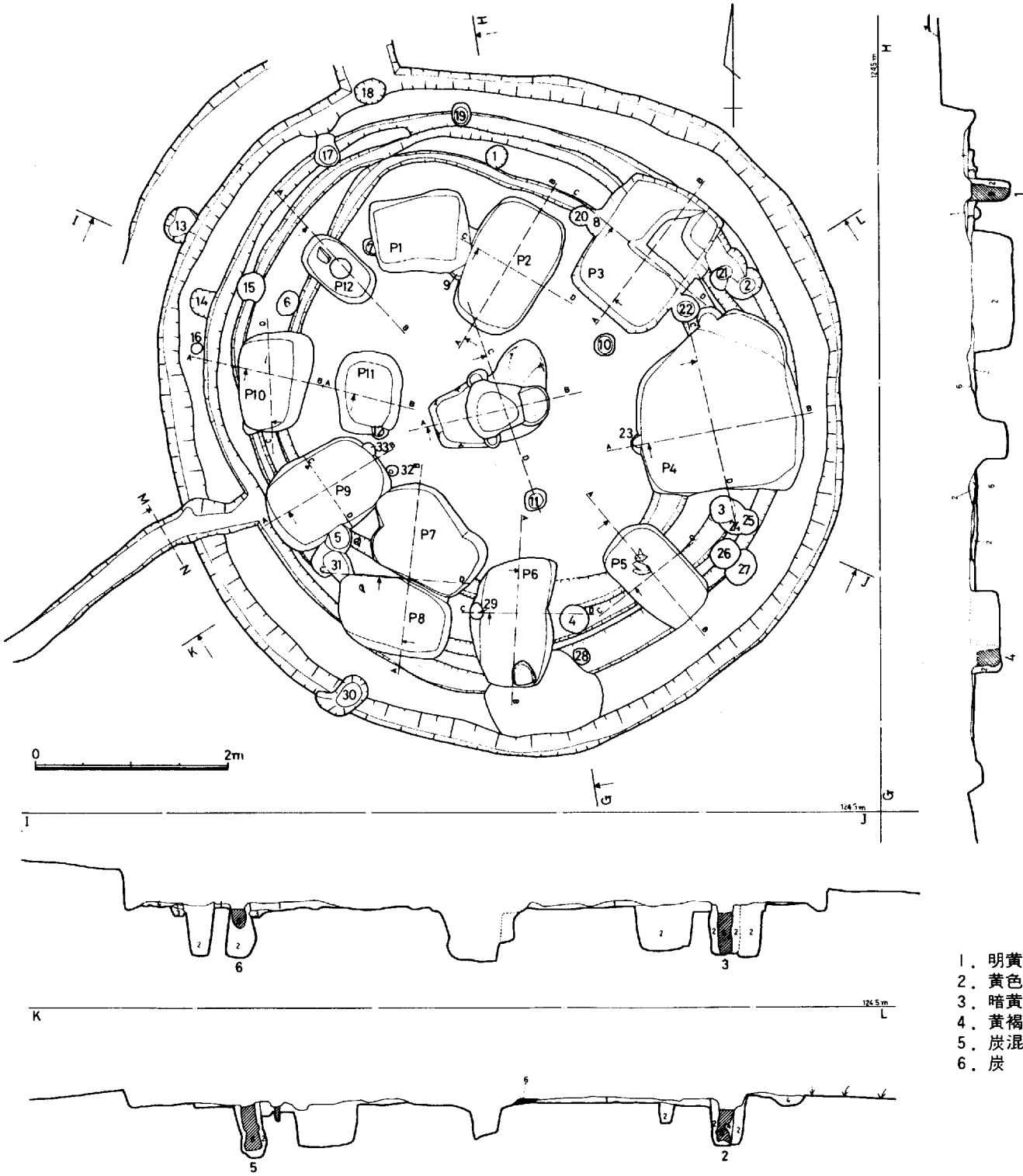
第３５図　２区平面図 $\left(S=\frac{1}{100}\right)$



第36図　I区No.1住居址・No.14土坑 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

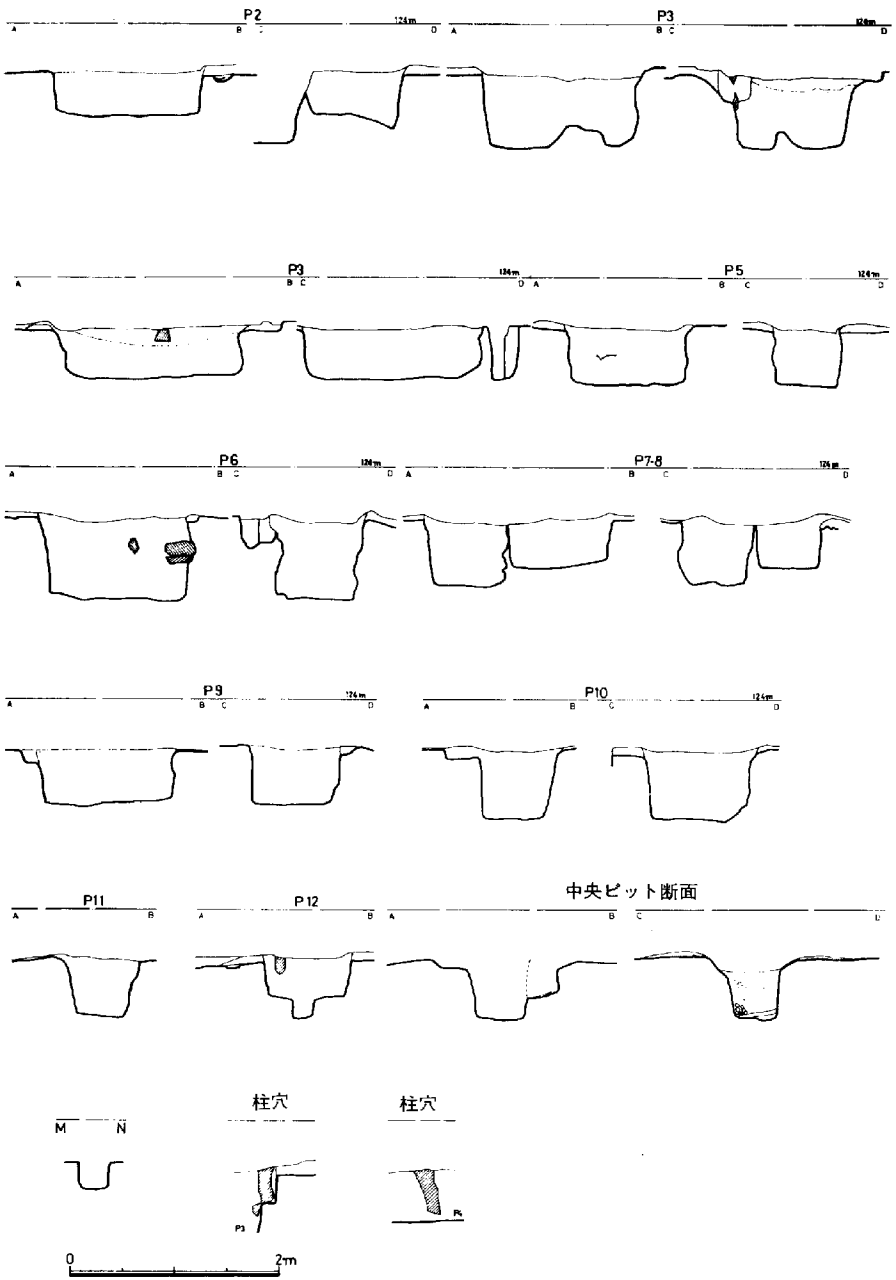


第３７図　３区No.２住居址①床面にて土坑凹み検出状態 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

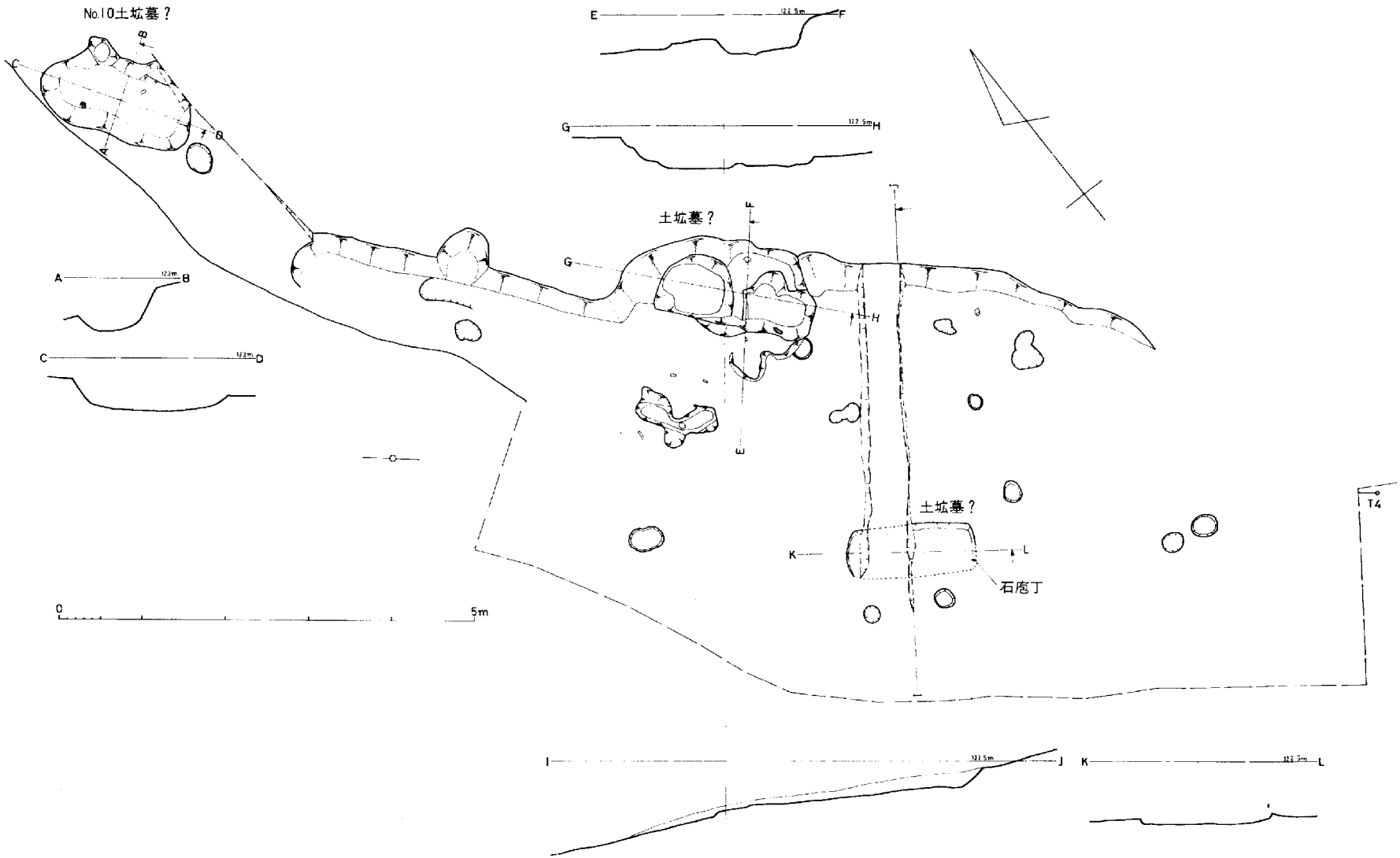


1．明黄色土
2．黄色土
3．暗黄色土
4．黄褐色土
5．炭混り赤黒色土
6．炭

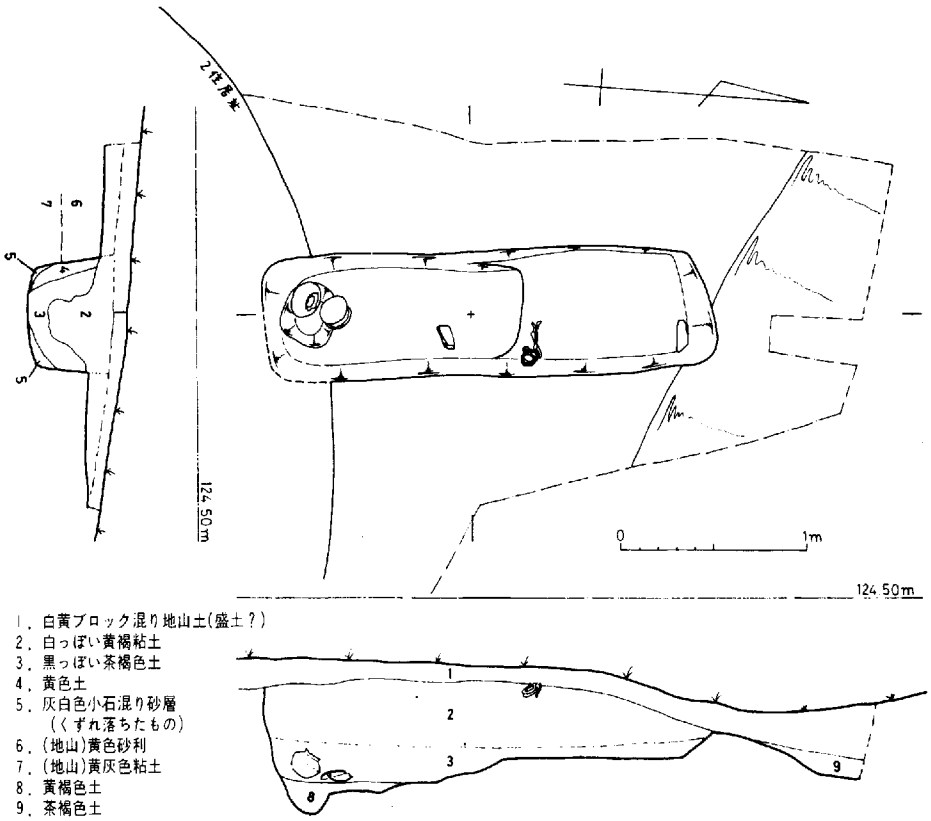
第３８図　３区No.２住居址②掘り上り状態 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



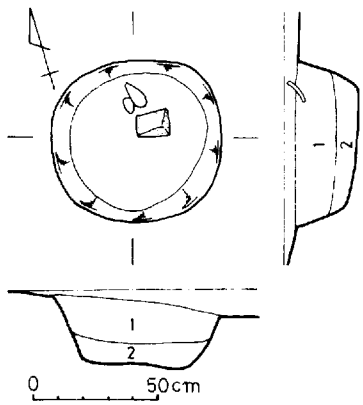
第３９図　３区No.２住居址③土坑・中央ピット・柱穴断面 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



第４０図　No.３遺構と土坑墓？・No.10土坑墓 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



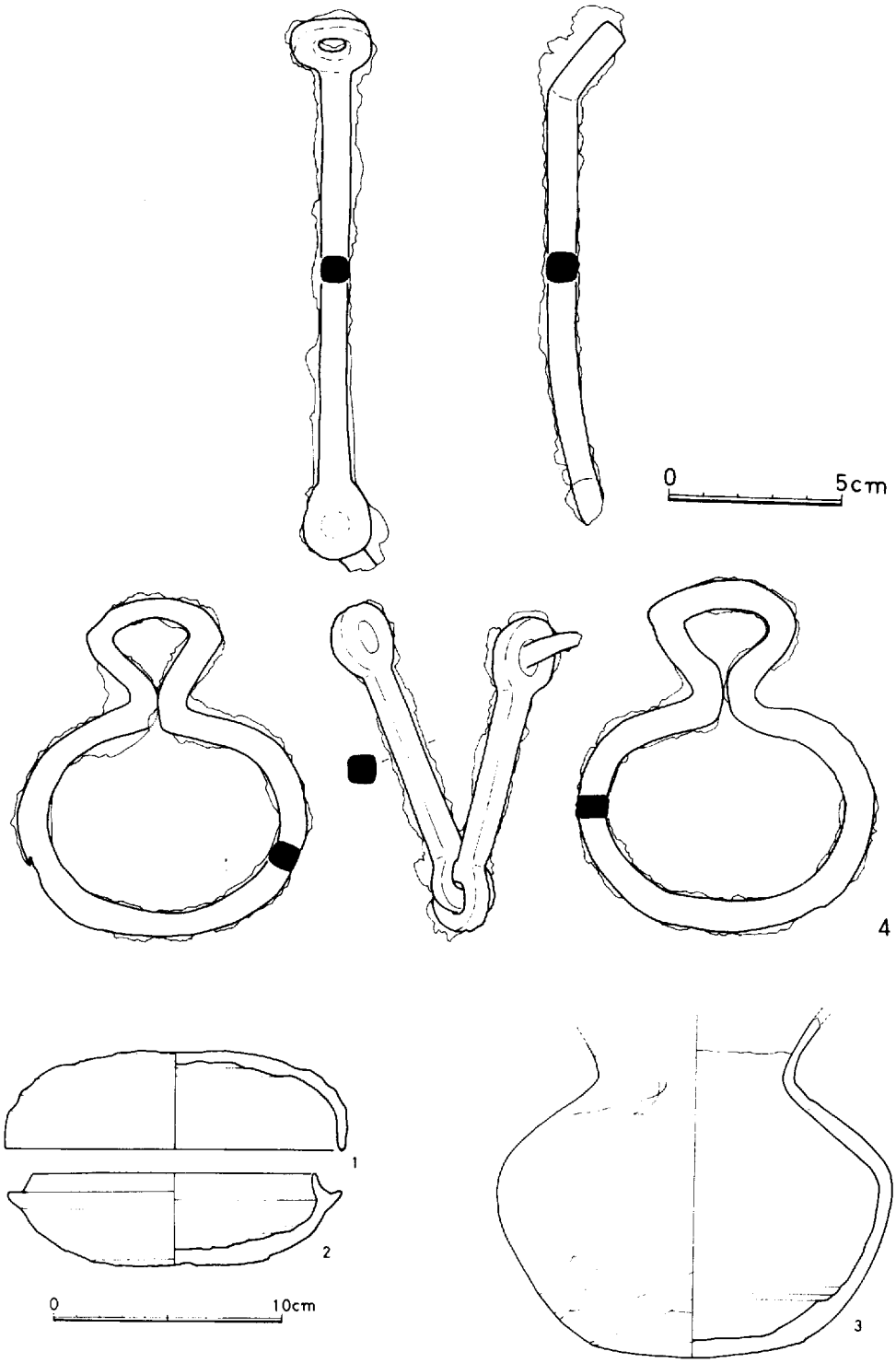
第４１図　３区No.４土坑墓 $\left(S=\frac{1}{40}\right)$



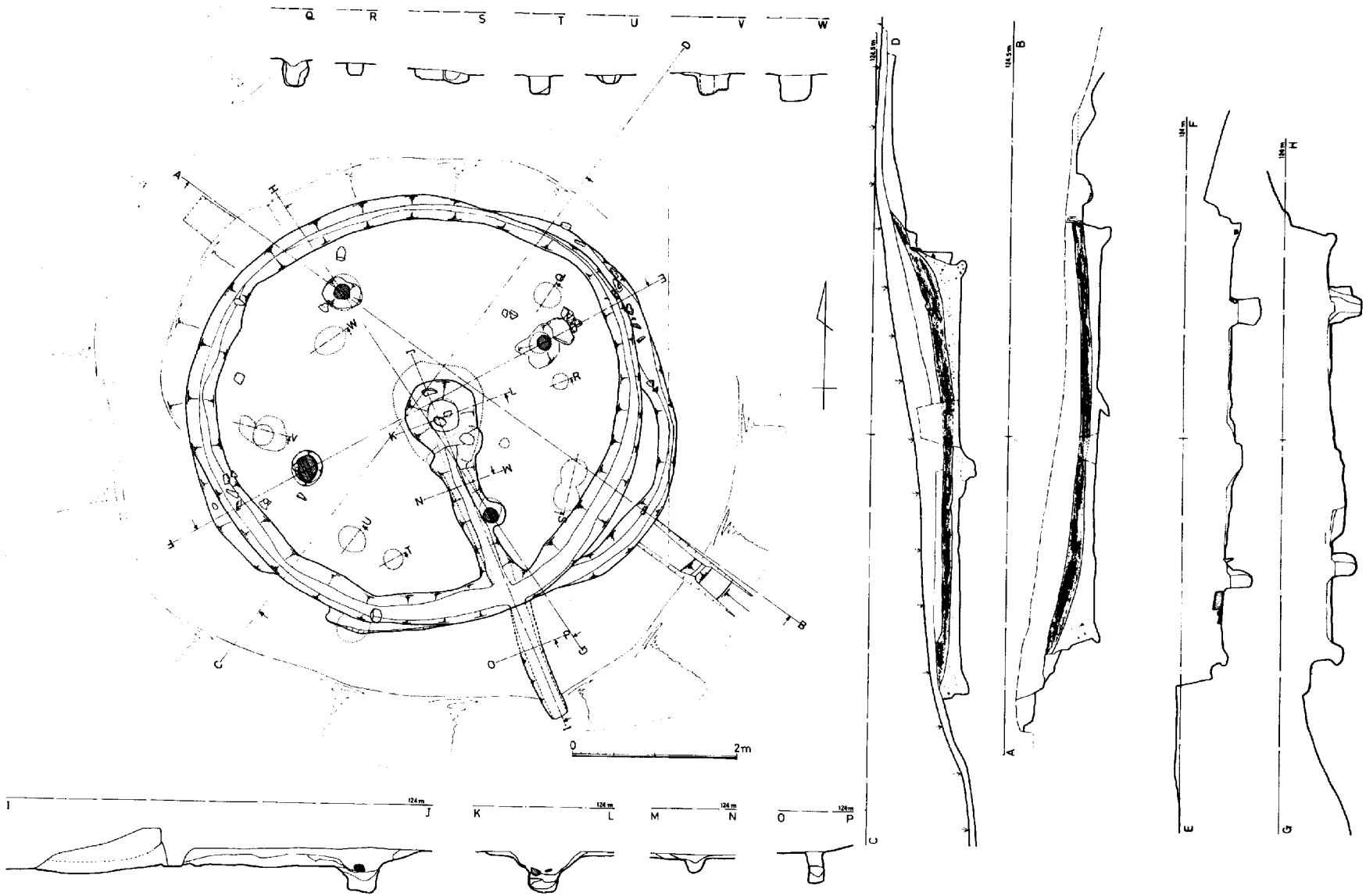
１．明茶褐色土（小さいマンガンあり）

２．明茶褐色土（黄褐色ブロックあり）

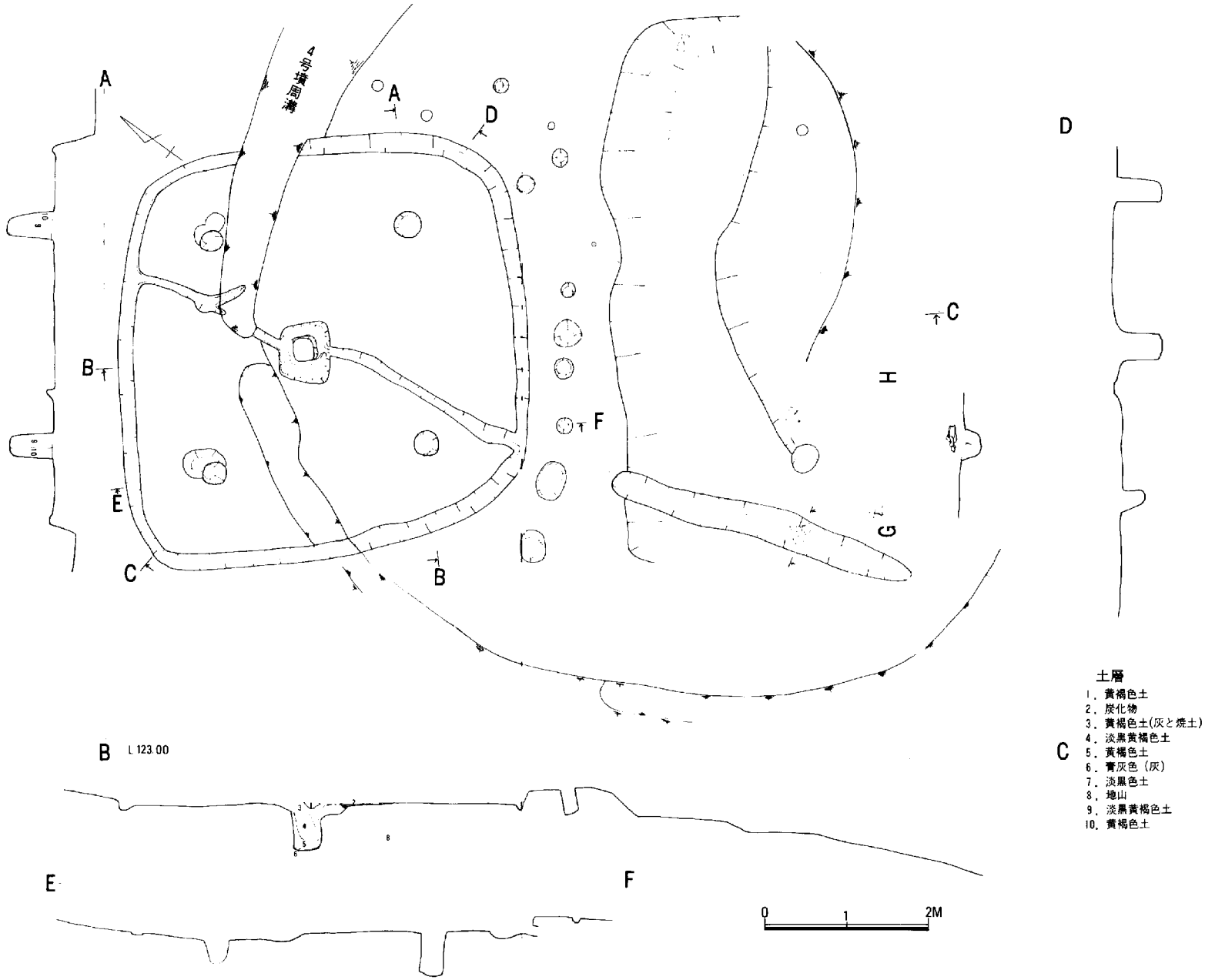
第４２図　３区No.20土坑 $\left(S=\frac{1}{30}\right)$



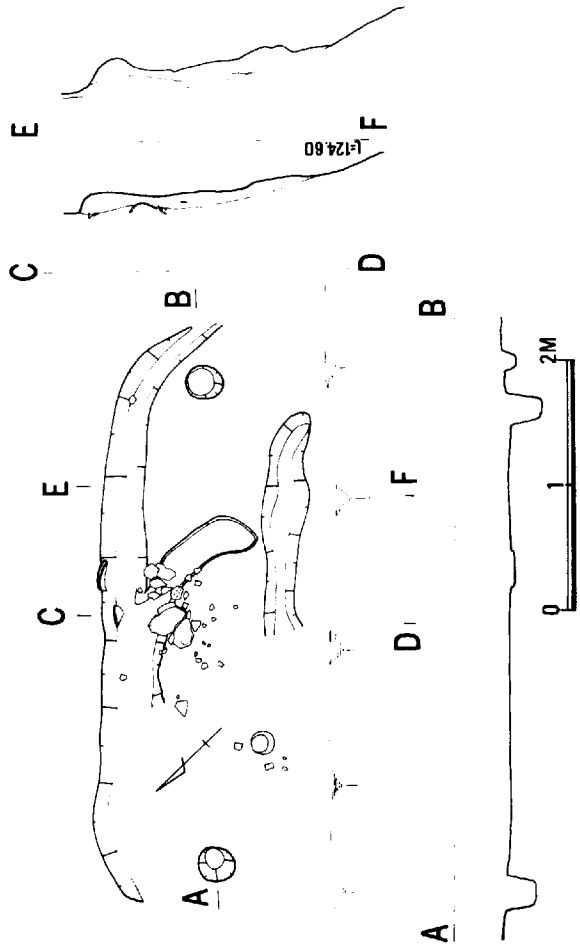
第43図　3区No.4土坑墓？出土遺物実測図（馬具S＝$\frac{1}{2}$，土器S＝$\frac{1}{3}$）



第４４図　Ⅰ区No.７住居址 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



第４５図　３区４号墳墳丘下No.11住居址　12，13遺構 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



第４６図　３区No.８遺構 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

C
①暗赤褐色土
やわらかく地山礫を含まないきれいな土。②③との区別はわずかにできるのみ。全体的に黒っぽい。

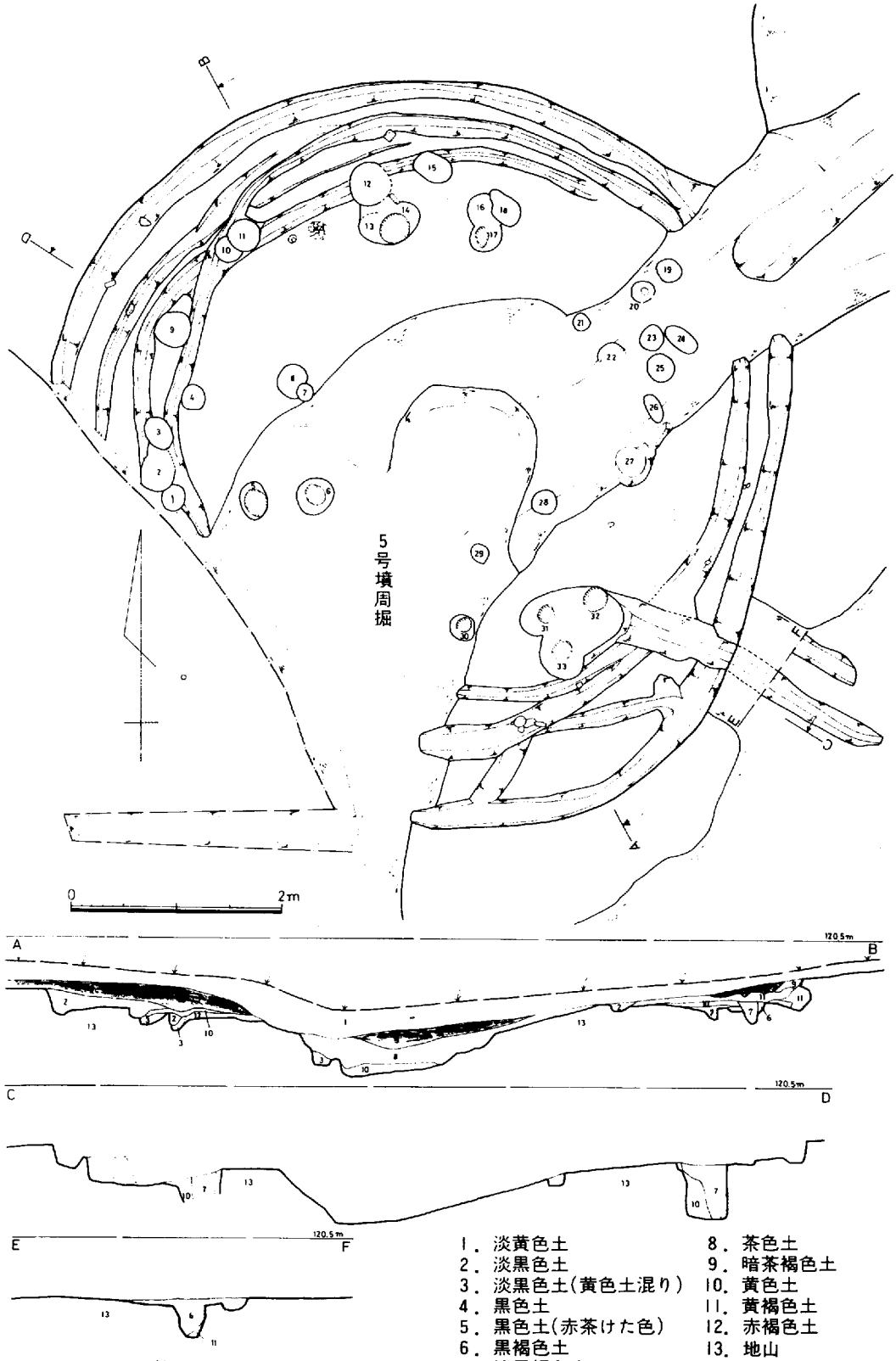
②赤褐色土
①ほど黒くはないがわずかに黒っぽい。地山礫を含み①より固い。

③赤褐色土
①②より黄色っぽい。地山礫を含む地山に非常に近いが地山との境は明確である。(固さより)

全体として不明瞭な土層である。地山との境が明確である以外は(土の色、固さ、地山礫混入度より)むつかしい。

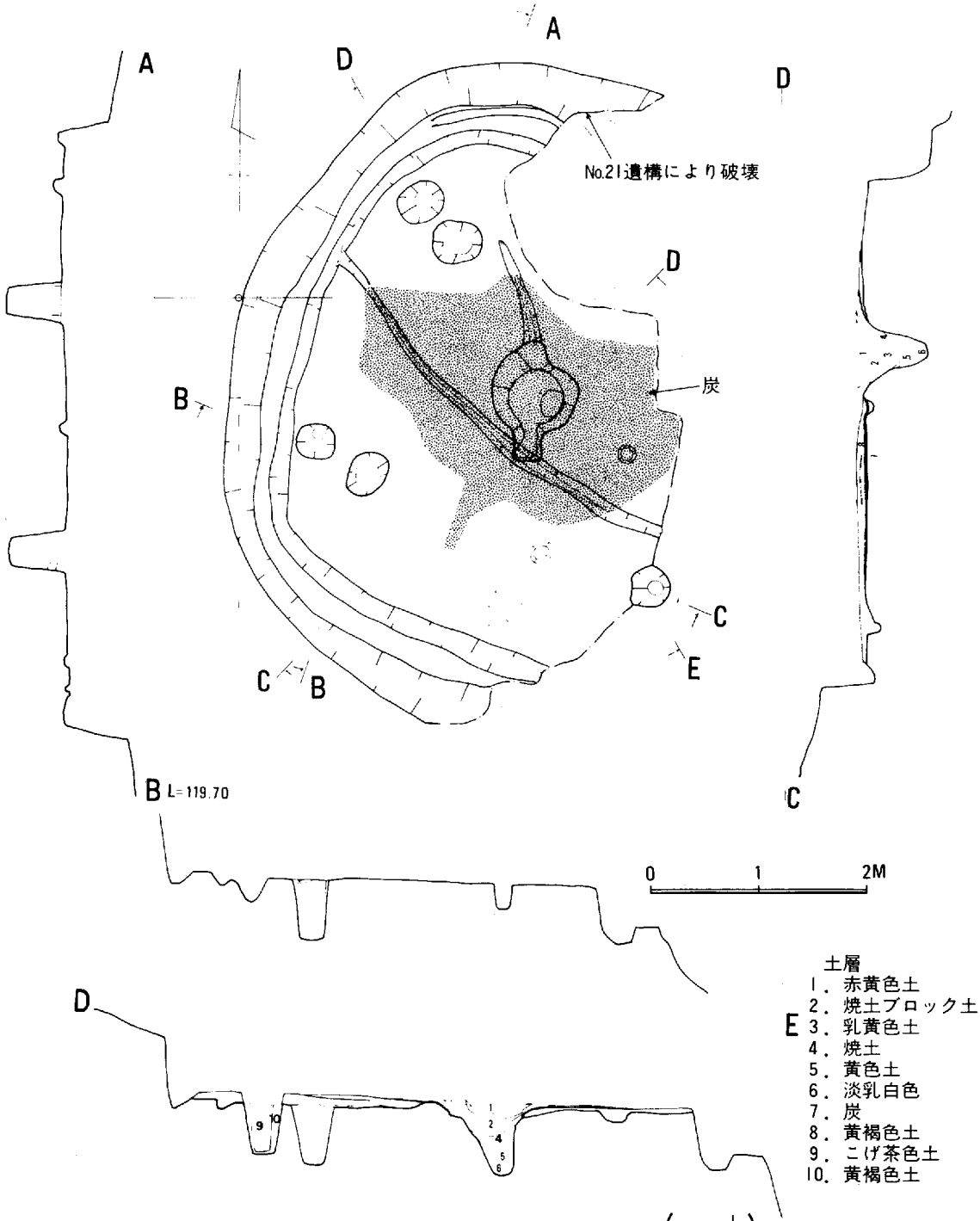
B　C断面同様全体として不明確である。地山との境もC断面の場合と同様である。全体的に上部にC断面①の暗黒赤褐色土がみられ、それより下は①②③をミックスしたような土層である。

第47図　I区No.18遺構　(S＝1/60)

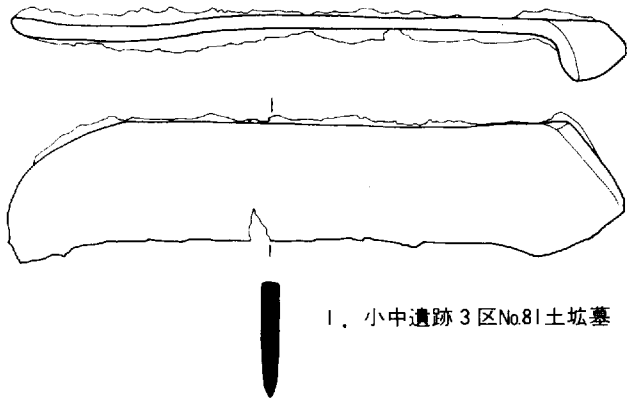


1．淡黄色土
2．淡黒色土
3．淡黒色土(黄色土混り)
4．黒色土
5．黒色土(赤茶けた色)
6．黒褐色土
7．淡黒褐色土
8．茶色土
9．暗茶褐色土
10．黄色土
11．黄褐色土
12．赤褐色土
13．地山

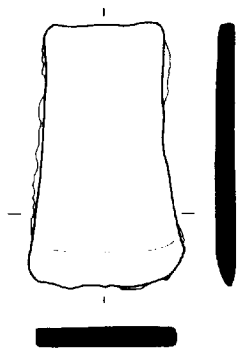
第48図　3区No.19住居址



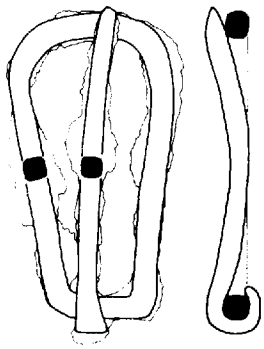
第49図　3区5号墳墳丘下No.21住居址 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



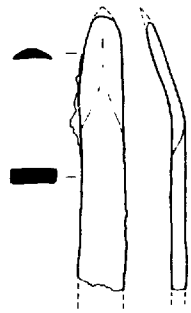
1．小中遺跡 3 区No.81土坑墓



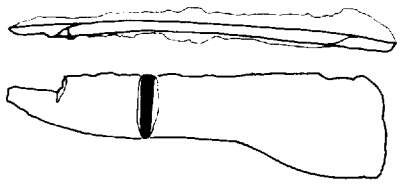
2．小中遺跡 4 区No.23住居址



5．小中古墳群 3 区No.10土坑墓



4．小中古墳群 3 区No. 2 住居址



0　5cm

第５０図　小中遺跡・小中古墳群出土鉄器実測図 $\left(S=\frac{1}{2}\right)$

1. 上相遺跡 （小中古墳群より）

2. 小中古墳群遠景 （上相遺跡より）

1．　古道①　発掘前　Fトレンチ付近より　（北東より）

2．　古道①　発掘前　7号墳付近より　（東南より）

3．　I区　古道①②③　全　景　（西北より）

4．　古道①　発掘前　No.14遺構の北側より　（東南より）

図版 3

◀1. 古道①発掘前　西端より　西北より

2. 古道①　発掘状況　西北より ▶

図版 4

1．　古道②　（西北西より）

2．　古道③　G断面　（西北より）

1． 古道③ 砂利敷状況 （西北より）

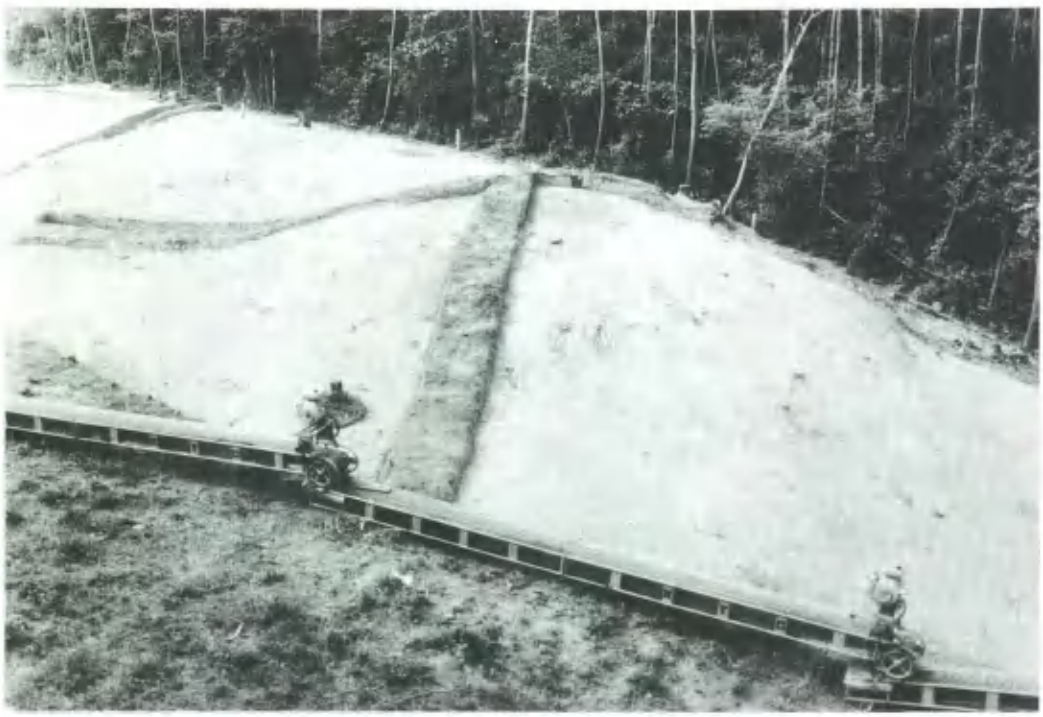
2． 古道③ 砂利敷状況近景 （西北より）

図版 6

1．　4・5・6号墳全景　　（北西より）

2．　4・5号墳全景　　（東より）

1．　4号墳　（南より）



2．　4号墳　墳丘表土剝ぎ　（南より）

図版 8

1．　4号墳　周溝断面　　（東より）

2．　4号墳　周溝内遺物　　（東より）

1. 4号墳 周溝内須恵器片A区 (東より)

2. 4号墳 外表の須恵器片分布 (北より)

図版10

1．　4号墳　第Ⅰ，Ⅱ主体部全景

2．　4号墳　第Ⅰ，Ⅱ主体部全景　（西より）

1. 4号墳 第I，II主体部 （南より）

2. 4号墳 北壁部断面，周溝と住居址 （西より）

図版12

1．　4号墳　Ⅰ，Ⅱ主体部　（西より）
　　㊤　㊦

2．　4号墳　第Ⅰ主体部全景　（西より）

1．　4号墳　第1主体部頭部棺外遺物

2．　4号墳　第1主体部脚部棺外遺物

図版14

1．　4号墳　第II主体部　　（東より）

2．　4号墳　第II主体部杯の下部より礫出土　　（西より）

1．　4号墳　第Ⅲ主体部土層断面　（東より）

2．　4号墳　第Ⅲ主体部遺物出土状態　（西より）

図版16

1．　4号墳　第Ⅲ主体部掘り方　（西より）

2．　4号墳　第Ⅲ主体部遺物出土状態　（西より）

1．　4号墳　北壁排除の際出土　　（東より）

2．　4号墳　B区遺物（短頸壺）出土状態　　（東より）

図版18

1．　4号墳　北西壁とNo.11住居址　　（北西より）

2．　4号墳　東南壁と地山整形　　（南東より）

1．　4号墳　南壁断面と地山整形　（東より）

2．　4号墳　東壁断面　（南より）

図版20

1．　4号墳　南北断面と地山整形　（東より）

2．　4号墳　掘りあげ全景　（南東より）

1．　5号墳　墳　丘　（東より）

2．　5号墳　墳　丘　（北西より）

図版22

1．　5号墳　表土剝ぎ　（北北西）

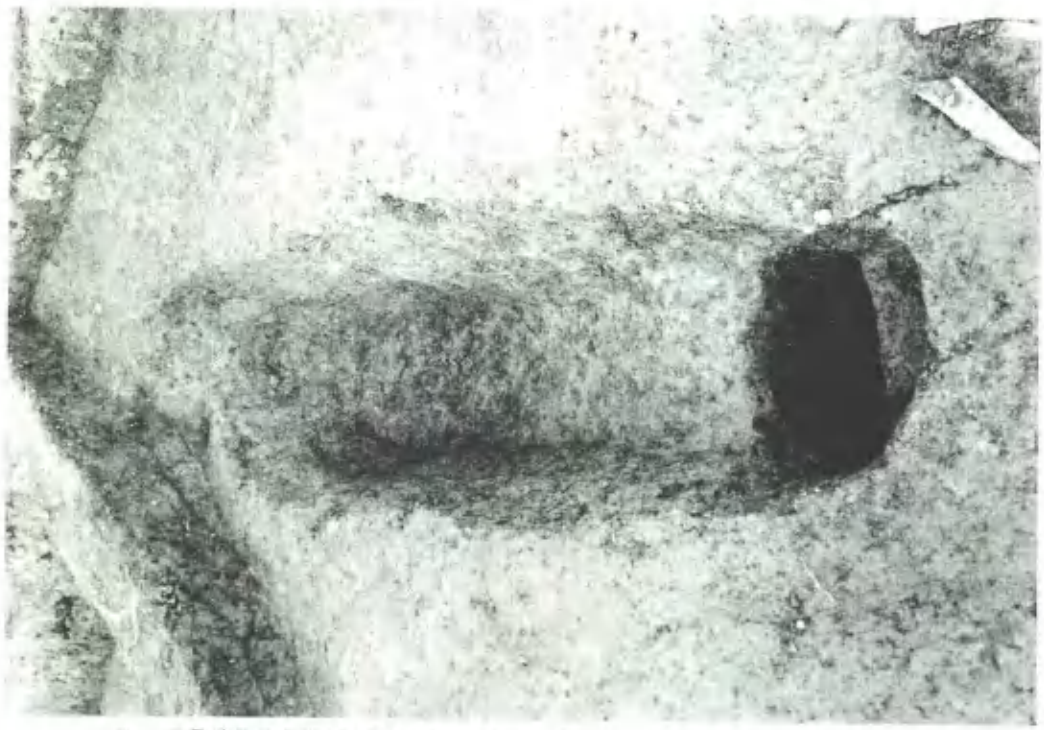
2．　5号墳　第II主体部出土状態　（北北西）

1．　5号墳　第Ⅰ主体部　（南東より）

2．　5号墳　第Ⅱ主体部　（南東より）

図版24

1、 5号墳 第Ⅰ主体部遺物出土状態 （南東より）



2、 5号墳第Ⅰ主体部墳掘り方 （南東より）

1．　5号墳　第II主体部　（西より）

2．　5号墳　第II主体部遺物出土状態　（西より）

図版26

1．　5号墳　第II主体部掘り方　（西より）

2．　5号墳　第II主体部掘り方　（西より）

1．　5号墳　第Ⅱ主体部頭部遺物出土状態　（東より）

2．　5号墳　第Ⅱ主体部北西部周溝内遺物　（北西より）

図版28

1．　5号墳丘断面　（東より）

2．　5号墳丘断面　（東より）

1．　5号墳付近全景　（北東より）

2．　5号墳周辺完掘全景　（北東）

図版30

1．　5号墳墳丘(左)と6号墳墳丘(右)　（北より）

2．　5号墳墳丘(左)と6号墳　（北西より）

3．　6号墳墳丘　（北より）

1. 6号墳 発掘調査風景・向うは縦貫道工事 (西北より)

2. 6号墳 墳丘発掘状況・向うは5号墳 (北北西より)

図版32

1.　6号墳　墳丘と第Ⅱ主体部発掘状況　（西北西より）

2.　6号墳　墳丘南北断面北半部　（西より）

1．　6号墳　周溝北端部断面　（西より）

2．　6号墳　周溝北端部断面　（東より）

3．　6号墳　周溝東端部断面　（南より）

図版34

1. 6号墳 第Ⅰ主体部全景 (北より)

2. 6号墳 第Ⅰ主体部南北断面 (西より)

1．　6号墳　第II主体部全景　（東より）

2．　6号墳　第II主体部全景　（西より）

図版36

1．　6号墳　第II主体部須恵器出土状況　（西より）

2．　6号墳　第II主体部　鉄鏃出土状況

1. 6号墳 第II主体部の西方土手より出土した須恵器 (南より)

2. 6号墳 第III主体7遺物出土状況 (南より)

図版38

1．　7号墳　墳　　丘　　（西南より）

2．　7号墳　地山整形と壁　　（南東より）

1．　7号墳　須恵器出土状態

図版40

1．　7号墳　北壁断面　（西より）

2．　7号墳　南壁断面　9遺構　（西より）

1．　7号墳　東西断面と周溝，9遺構　（南より）

2．　7号墳　西壁断面，9遺構　（南より）

図版42

1．　7号墳　付近全景　　（南東より）

2．　7号墳　掘りあげ全景　　（南東より）

1．　No.17　古道　敷石状態

2．　No.8　住居址？　遺物出土状態

図版44

1．3区　No.4土坑墓　（北より）

2．　3区，No.4土坑墓(右)とNo.2住居址(左)　（南東より）

1．　Ⅰ区　No.15土坑　（東南より）

2．　3区　No.10土坑　（東より）

図版46

1．　1区(向う)2区(手前)南半部全景　(東南より)

2．　3区南半部全景・手前6号墳，向うは5号墳　(西北より)

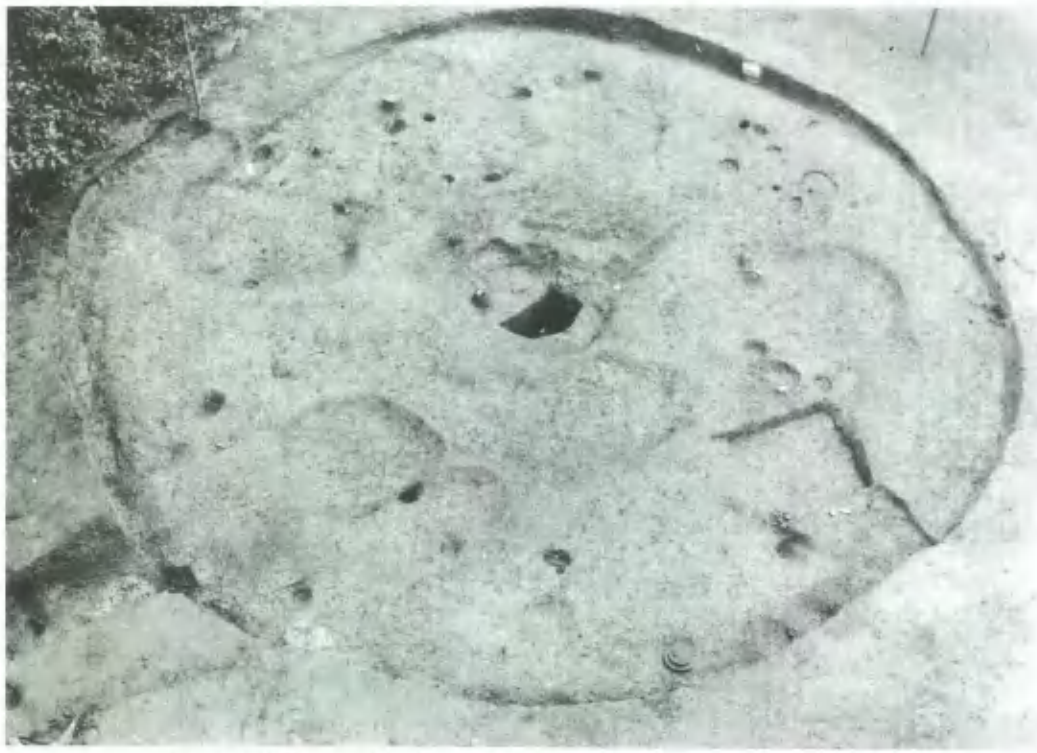
1. 2区 K断面 (南西より)

2. 2区 全 景 (北西より)

図版48

1．　Ⅰ区　No.14土坑　（西より）

2．　Ⅰ区　No.18遺構　（東南より）



1．　3区　No.2住居址　床面状況　（北西より）

2．　3区　No.2住居址　掘り上り　（北西より）

図版50

1. 3区No.2住居址　炉検　図版図46

2. 3区No.2住居址炉検2断面　写図46

1．　Ⅰ区　No.7住居址　（北西より）

2．　Ⅰ区　No.7住居址掘り上り状況　（北西より）

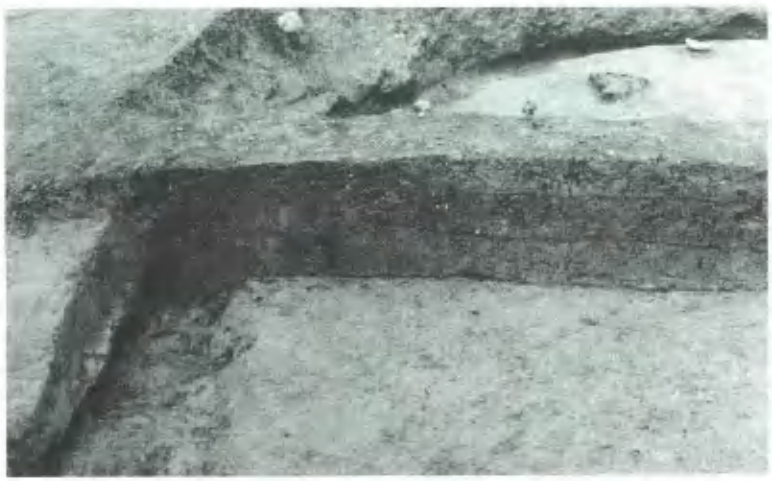
図版52

◀1.I区No.7住居址床溝と中央ピット　北北西より

2.I区No.7住居址小形甕出土状況　東より▶

1．　Ⅰ区No.7住居址　A，B断面，西側　（南より）

2．　Ⅰ区No.7住居址A・B断面　東側　（西南より）



3．　Ⅰ区　No.7住居址　C・D断面　南側　（東南より）

4．　Ⅰ区　No.7住居址　C・D断面　北側　（東南より）

図版53

図版54

1．　No.11住居址　　（北西より）

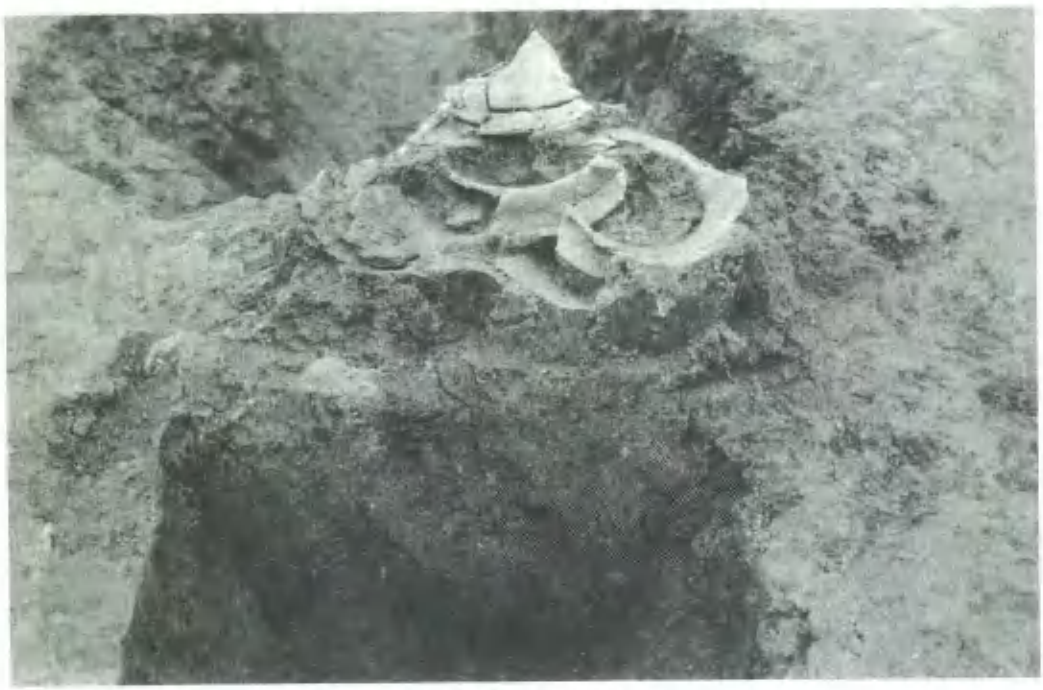
2．　No.11住居址　　（北西より）

1．　No.11住居址と4号墳　（北西より）

2．　4号墳　全　景　（南より）

図版56

1．　4号墳　墳丘下　No.11住居址外溝付近　（北より）



2．　4号墳　墳丘下No.11住居址外溝上面　（南より）

1．　3区　No.19住居址・5号墳　発掘風景　（北北西より）

2．　3区　No.19住居址掘り上り状況　（北より）

図版58

1．　3区　No.19住居址A・B断面北端部　（東北より）

2．　3区　No.19住居址A・B断面南端部　（東北より）

1．　3区　No.19住居址　北半部　（西より）

2．　3区　No.19住居址　柱穴12・13・14と高杯　（北より）

図版60

1．　No.21　住居址

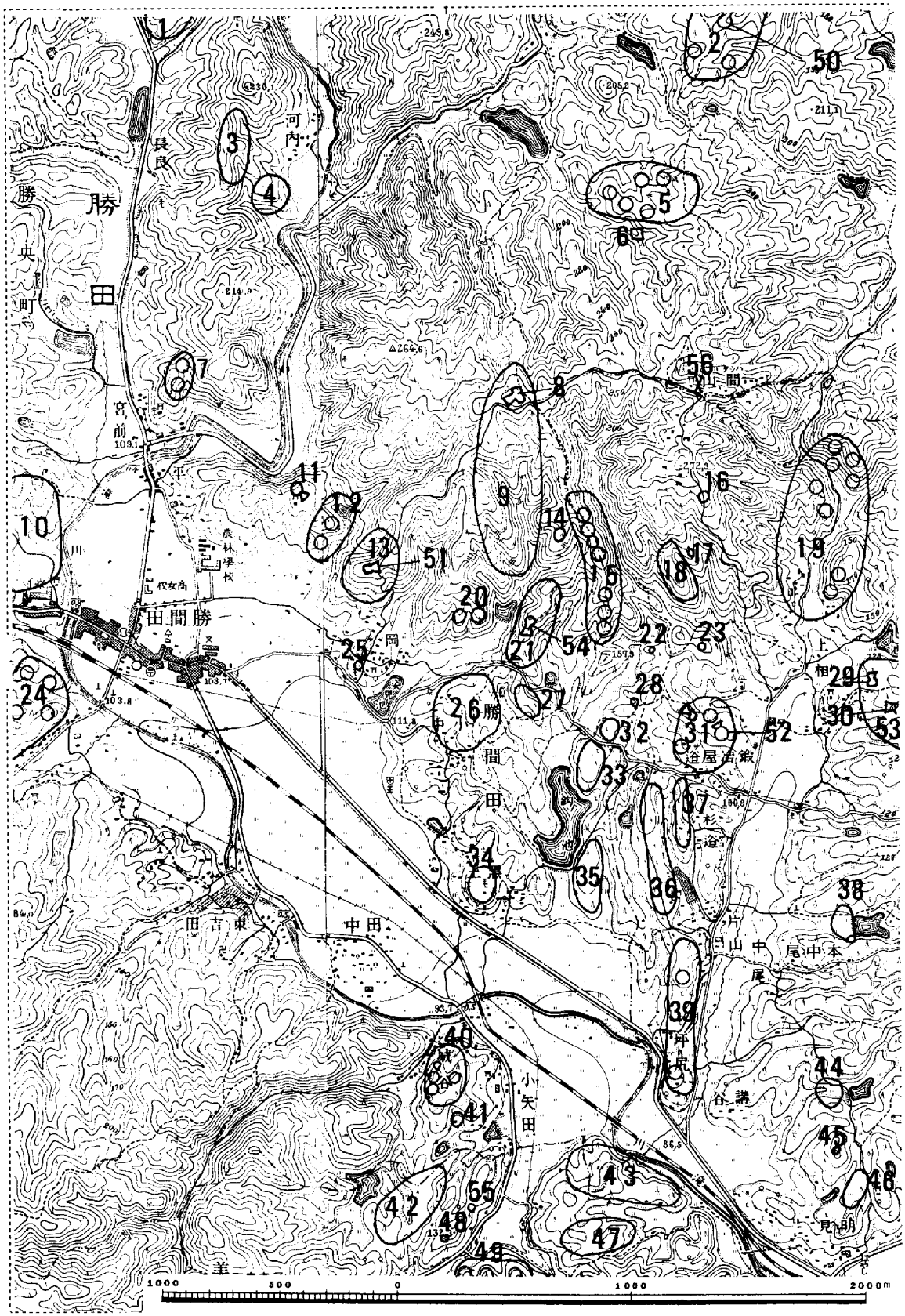
2．　No.21　住居址　手前はNo.22　（東より）

1．　22遺構　（南東より）

2．　No.21住居址　貼床断面　（南より）

1． 鍬入式

2． 4号墳 発掘風景

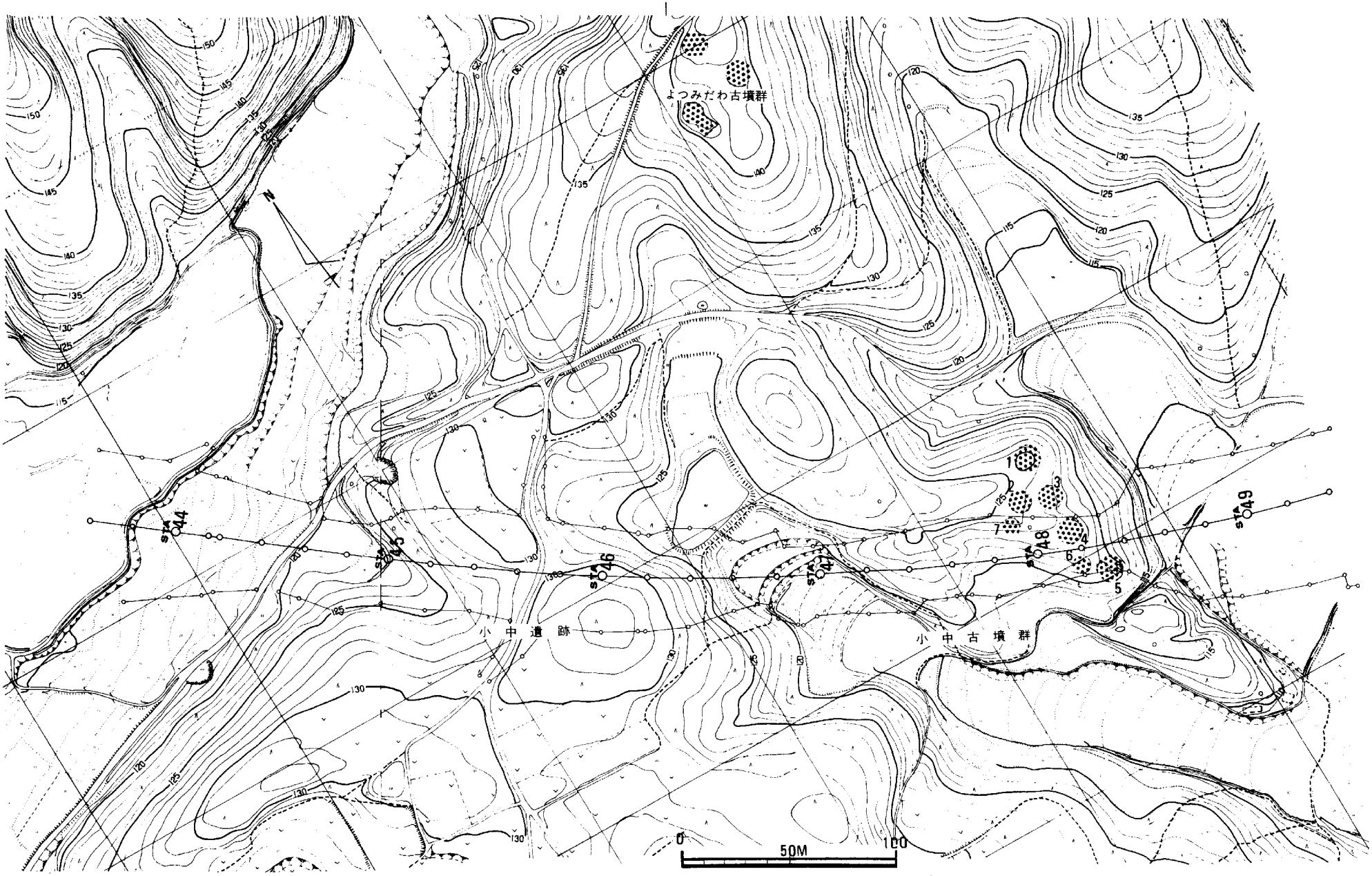


第1図　小中遺跡、小中古墳群周辺の遺跡分布図 $\left(S=\frac{1}{25000}\right)$

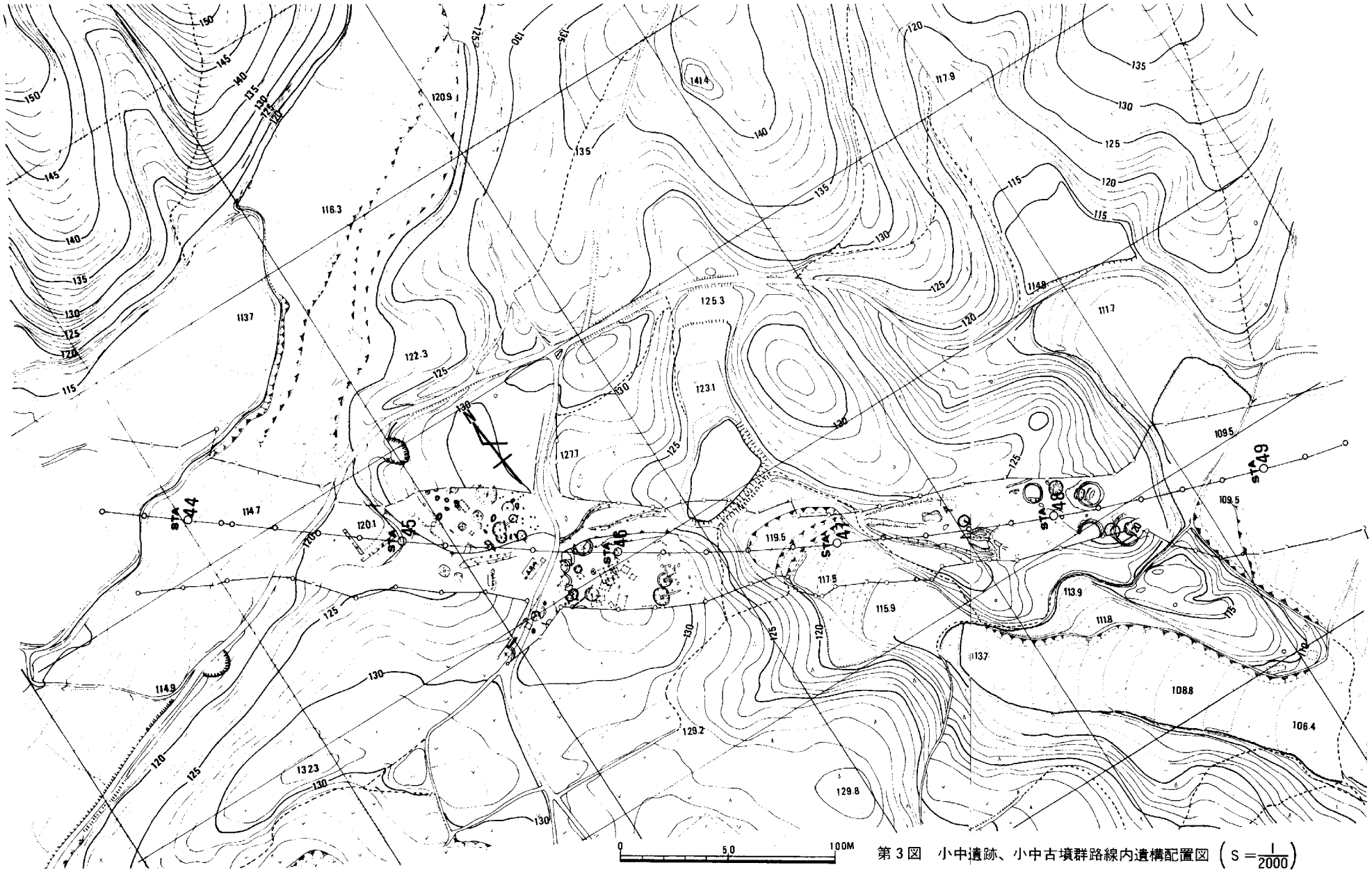
第1図　付表　分布図対照表　小中古墳群・小中遺跡

番号	遺跡名	所在地	備考
1	広高下古墳群	勝央町　植月中　広高下	18基
2	田井古墳群	〃　田井　田中	3基
3			
4			
5	釜ヶ谷古墳群	勝央町　田中　釜ヶ谷	5基
6	釜ヶ谷窯跡	〃　〃　〃	
7	平古墳群	〃　平　宮の前	2基
8	岡高塚古墳	〃　岡　高塚	前方後円墳
9	岡高塚古墳群	〃　〃　〃	18基
10	平遺跡	〃　平	勝田郡衙？
11	琴平山古墳	〃　岡　琴平山	前方後円墳
12	琴平山麓古墳群	〃　〃　琴平山	2基
13	殿塚古墳	〃　〃　堂山	前方後円墳
14	古王寺古墳	〃　〃　古王寺	
15	鳥ヶ風呂古墳群	〃　〃　鳥ヶ風呂	7基
16	古墳	美作町　上相	前方後円墳
17	古墳	美作町	
18	よぼしゃ古墳群	〃　上相　よぼしゃ	
19	金屎古墳群	〃　〃　金屎	8基
20		勝央町　岡	散布地
21	よつみだわ古墳群	〃〃　〃　よつみだわ	5基
22	古墳	美作町	
23		〃　上相	散布地
24	畑屋古墳群	勝央町　畑屋	5基
25	古墳	〃　岡　小中	陶棺露出
26	**小中遺跡**	〃　〃　〃	散布地
27	**小中古墳群**	〃　〃　〃	7基
28	古墳	美作町	
29	上相中塚古墳	〃　上相　金屎	
30	古墳	〃　〃　〃	前方後円墳
31	鍛冶屋迫古墳群	〃　〃　鍛冶屋迫	3基
32	上相遺跡	〃　〃	後期古墳住居址(2)建物(3)
33		〃　明見	散布地
34	丸山古墳群	勝央町　黒土	散布地
35		〃　〃　鍵池南	8基
36		美作町	散布地
37		〃	散布地
38	坪尻古墳群	〃　中尾　本中尾	散布地
39	古墳群	〃　〃　坪尻	2基
40	古墳	勝央町　小天田	4基
41	塚谷古墳群	美作町　中山	
42	古墳群	美作町　中山　塚峪	10基
43		〃	
44	明見城古墳山	〃　明見	散布地
45	宮谷古墳群	〃　〃　城山	
46	又ヶ池古墳群	〃　豊国原　宮谷	5基
47	古墳	〃　中山　又ヶ池	
48	田井高塚古墳	〃　〃	
49	堂山古墳群	勝央町　田井　田中	3基
50	古墳	〃　岡　堂山	前方後円墳
51	鮎池南古墳群	美作町　上相　鍛冶屋迫	5基
52	古墳	〃　〃　金屎	前方後円墳
53	古墳群	〃　〃　金屎	8基
54		勝央町　岡　よつみだわ	前方後円墳
55		美作町　中山	
56	瓦経塚	勝央町　岡	

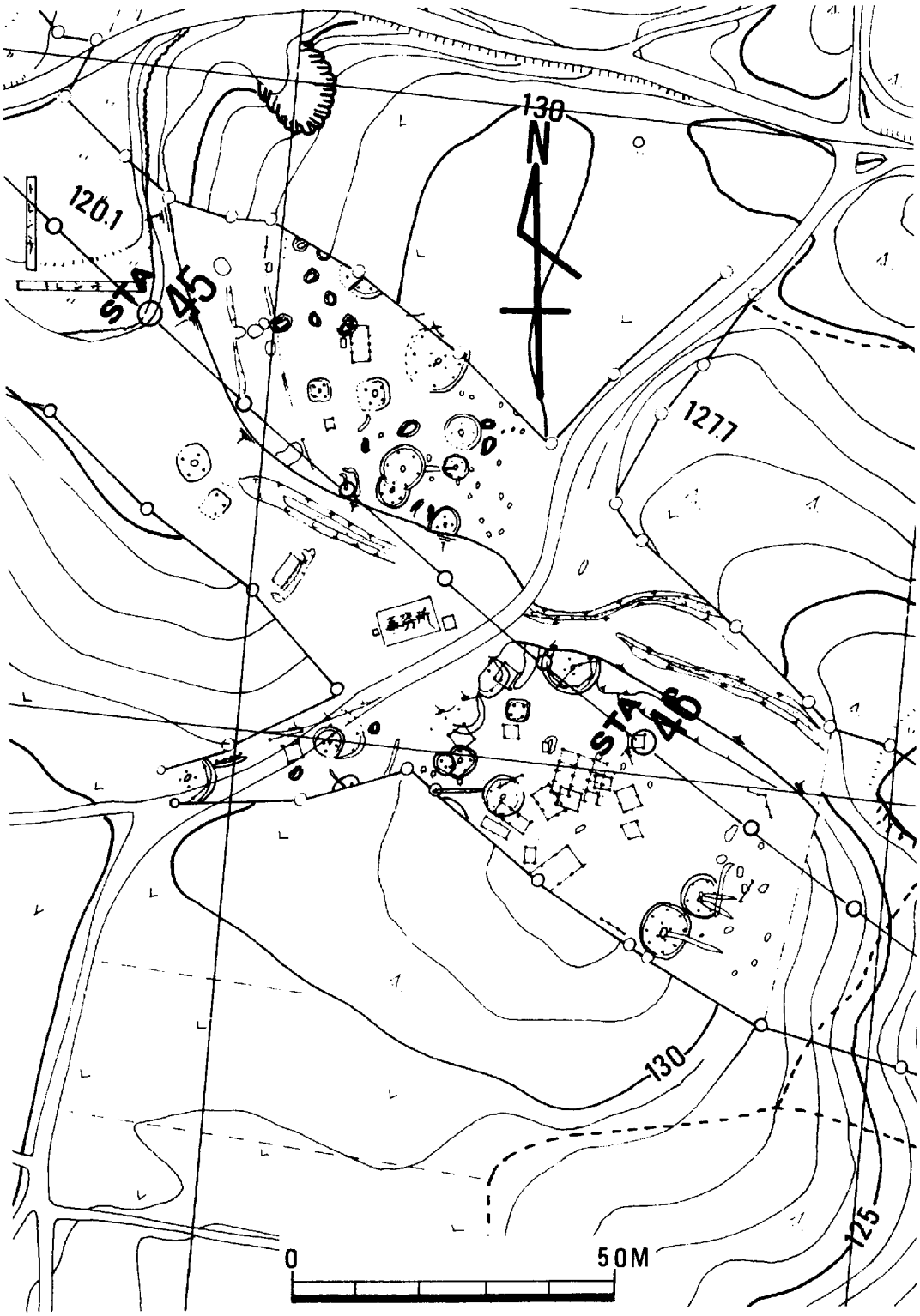
（作成　高畑）



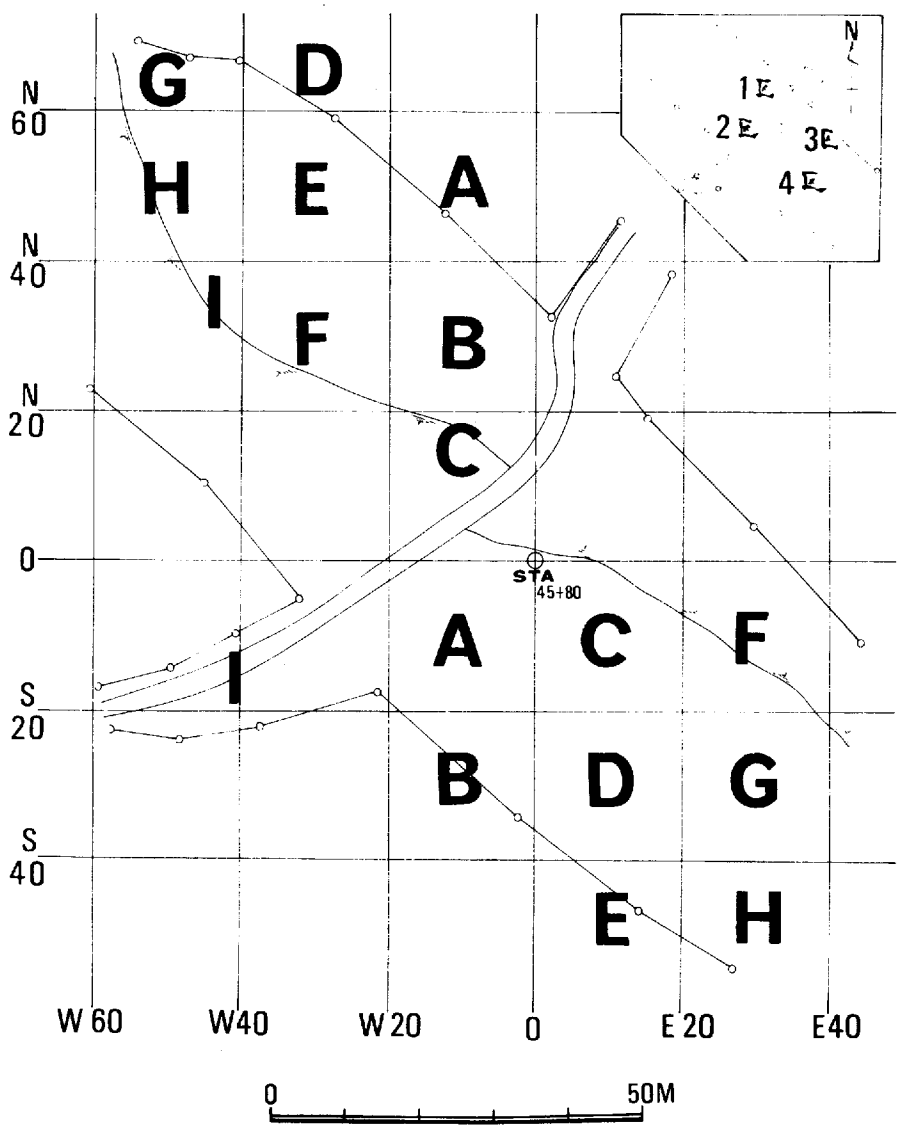
第２図　小中遺跡、小中古墳群周辺地形図、路線図 $\left(S=\frac{1}{2000}\right)$



第３図　小中遺跡、小中古墳群路線内遺構配置図 $\left(S=\frac{1}{2000}\right)$

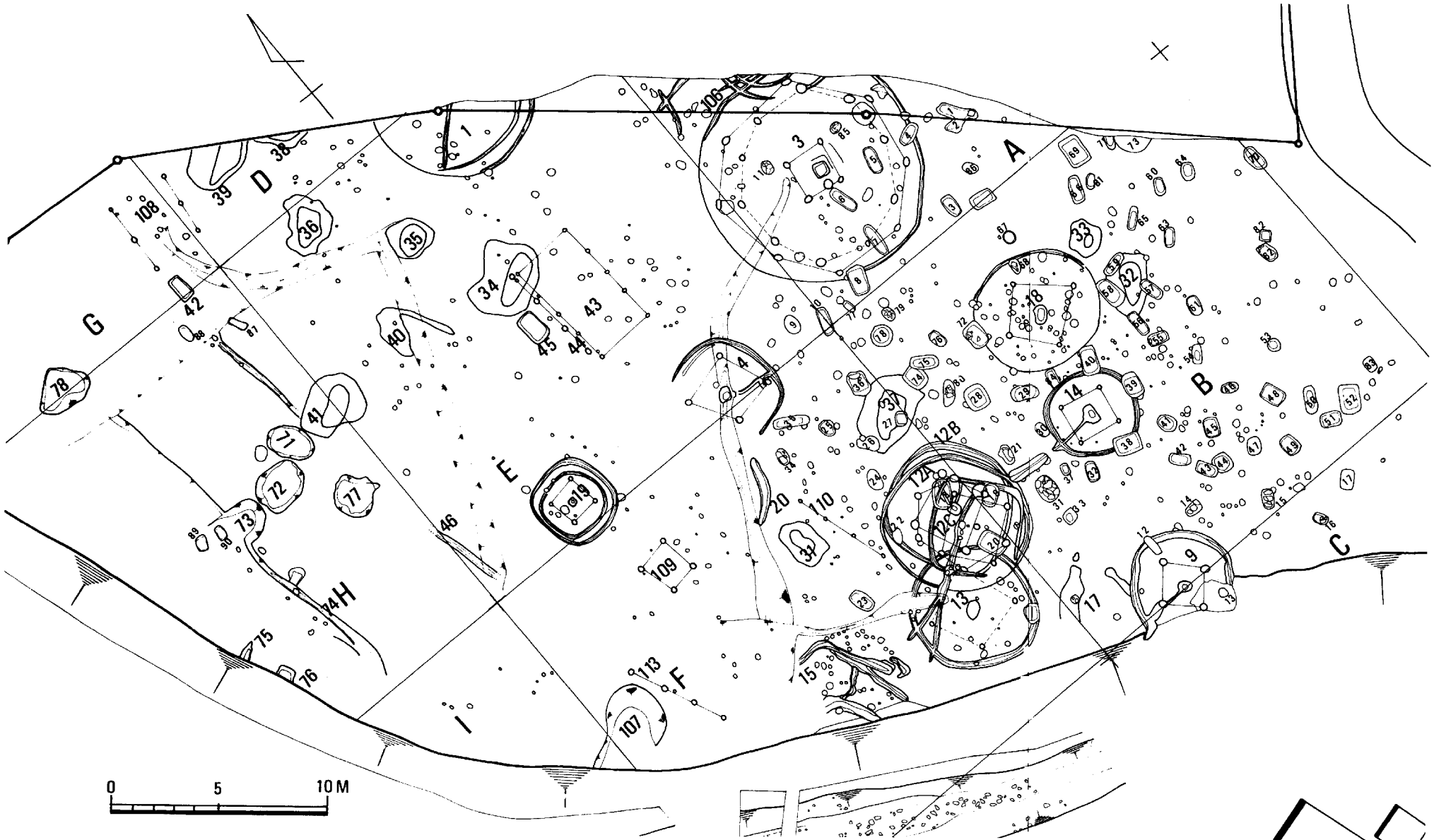


第4図　小中遺跡遺構配置図 $\left(S=\frac{1}{1000}\right)$

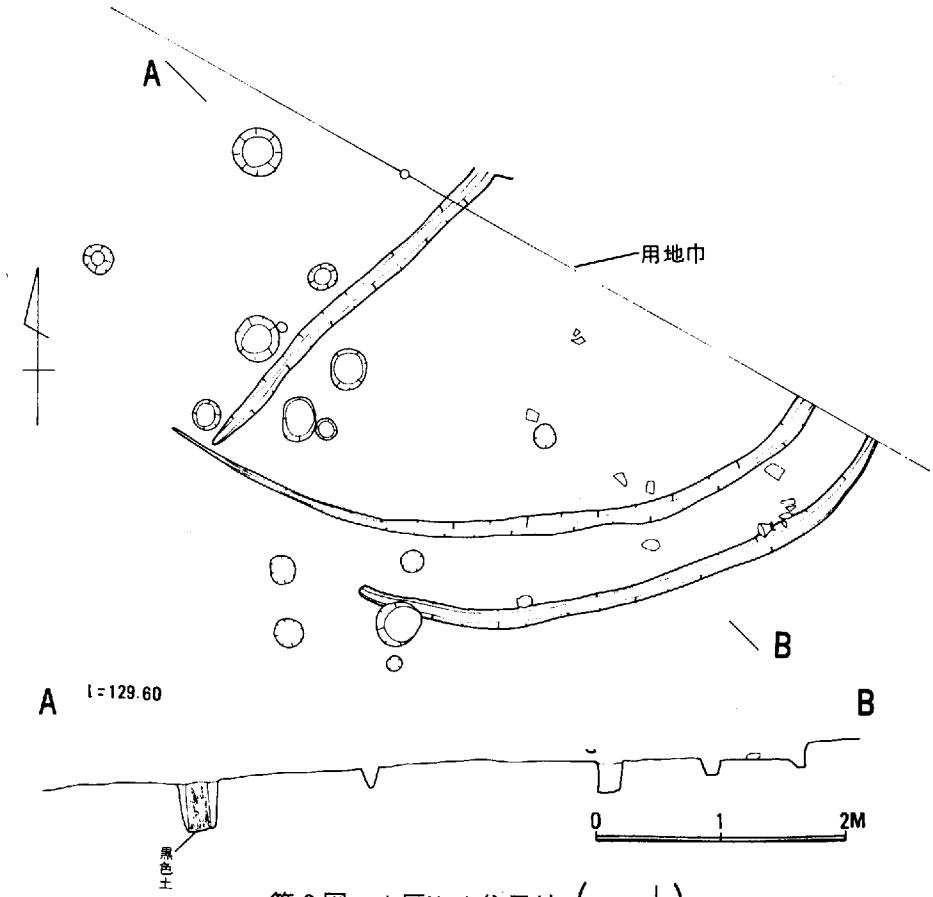


第５図　小中遺跡グリッド配置図 $\left(S=\frac{1}{1000}\right)$

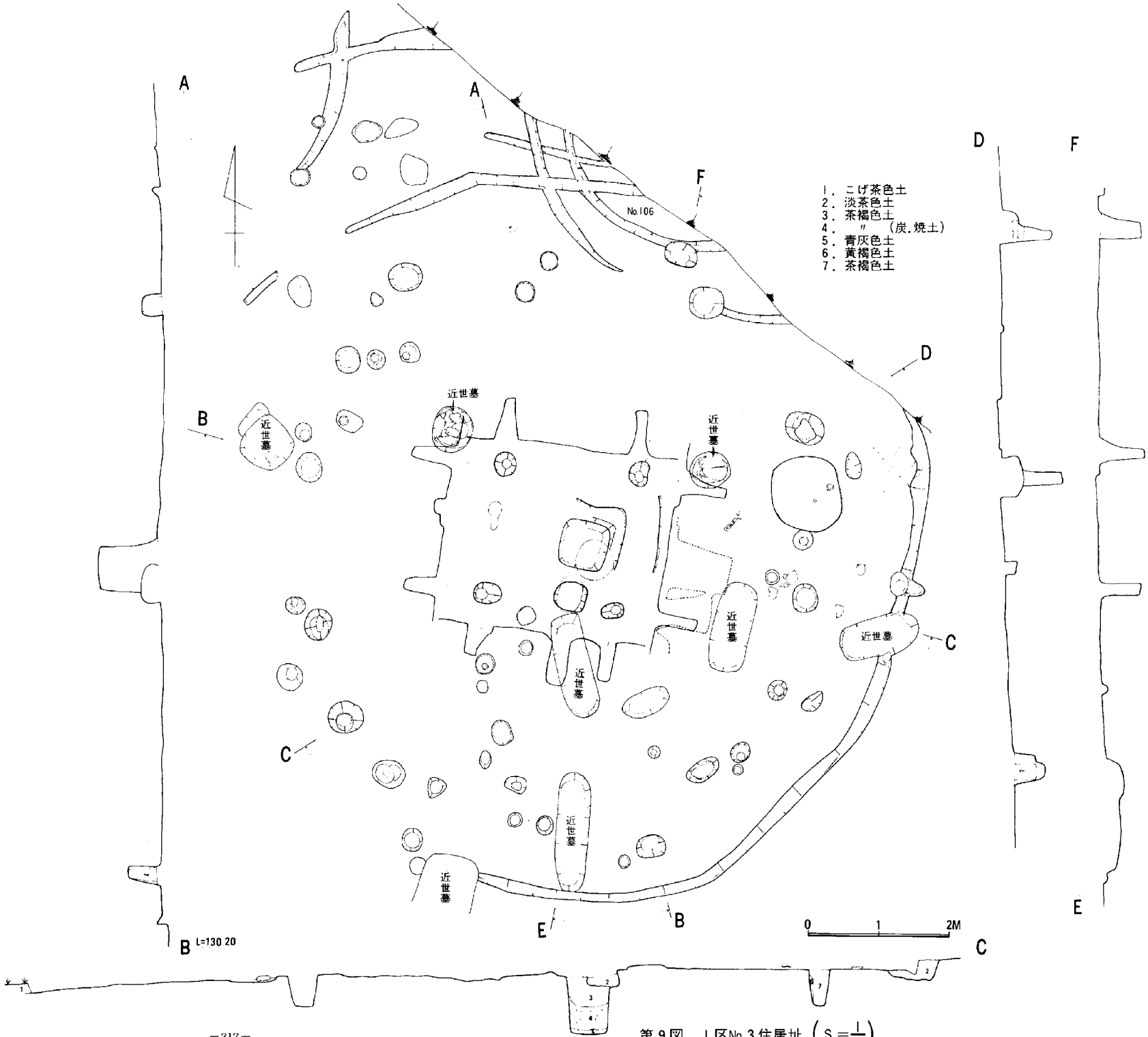
第6図小中遺跡遺構配置図（S $\frac{1}{300}$）



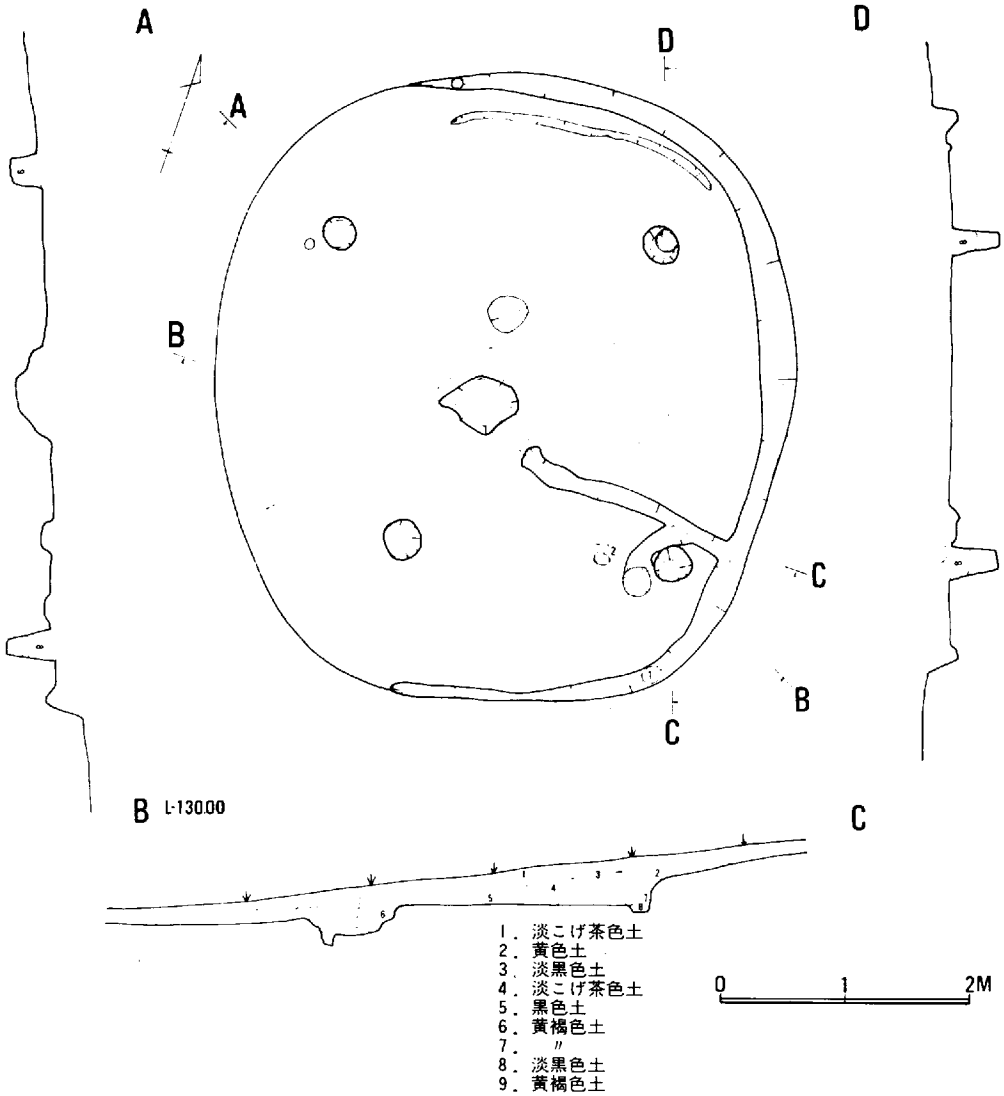
第７図　小中遺跡Ⅰ区遺構配置図（S＝$\frac{1}{200}$）



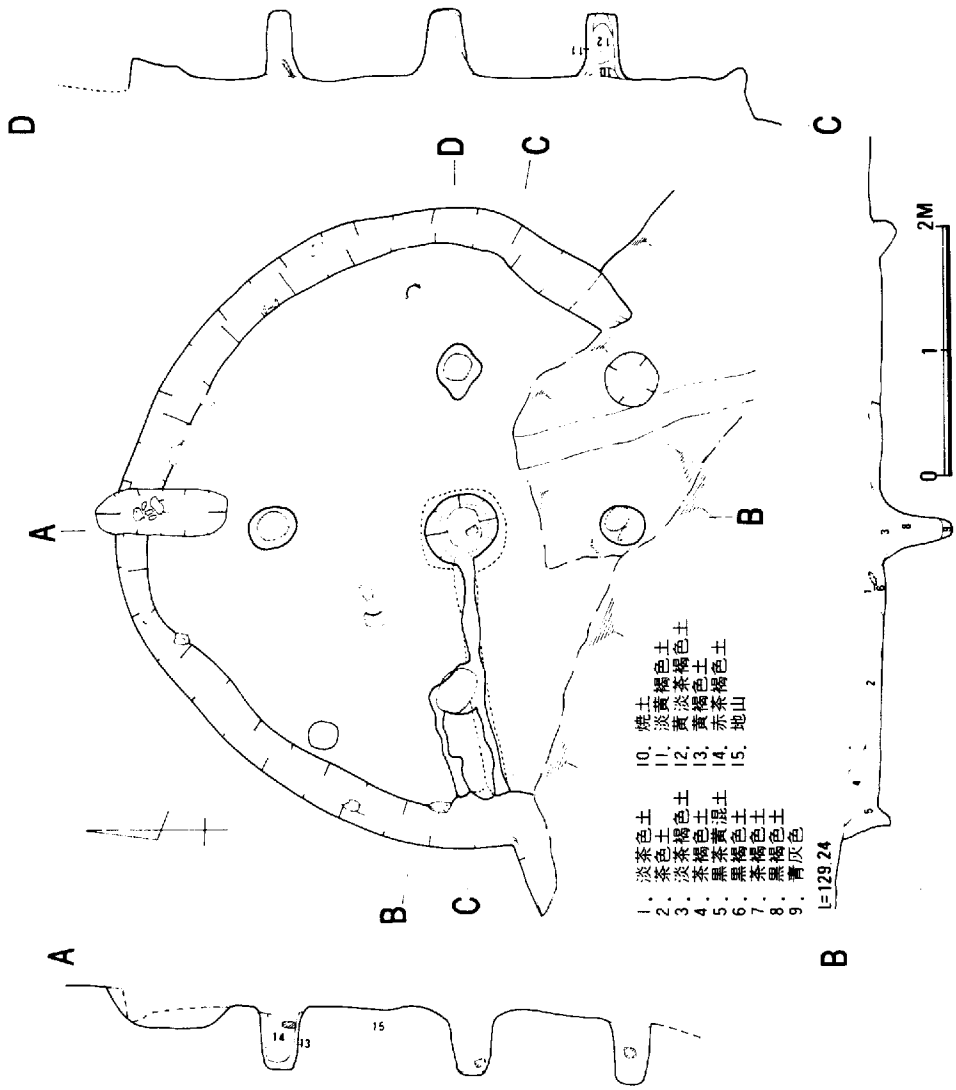
第8図　Ⅰ区No.Ⅰ住居址 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



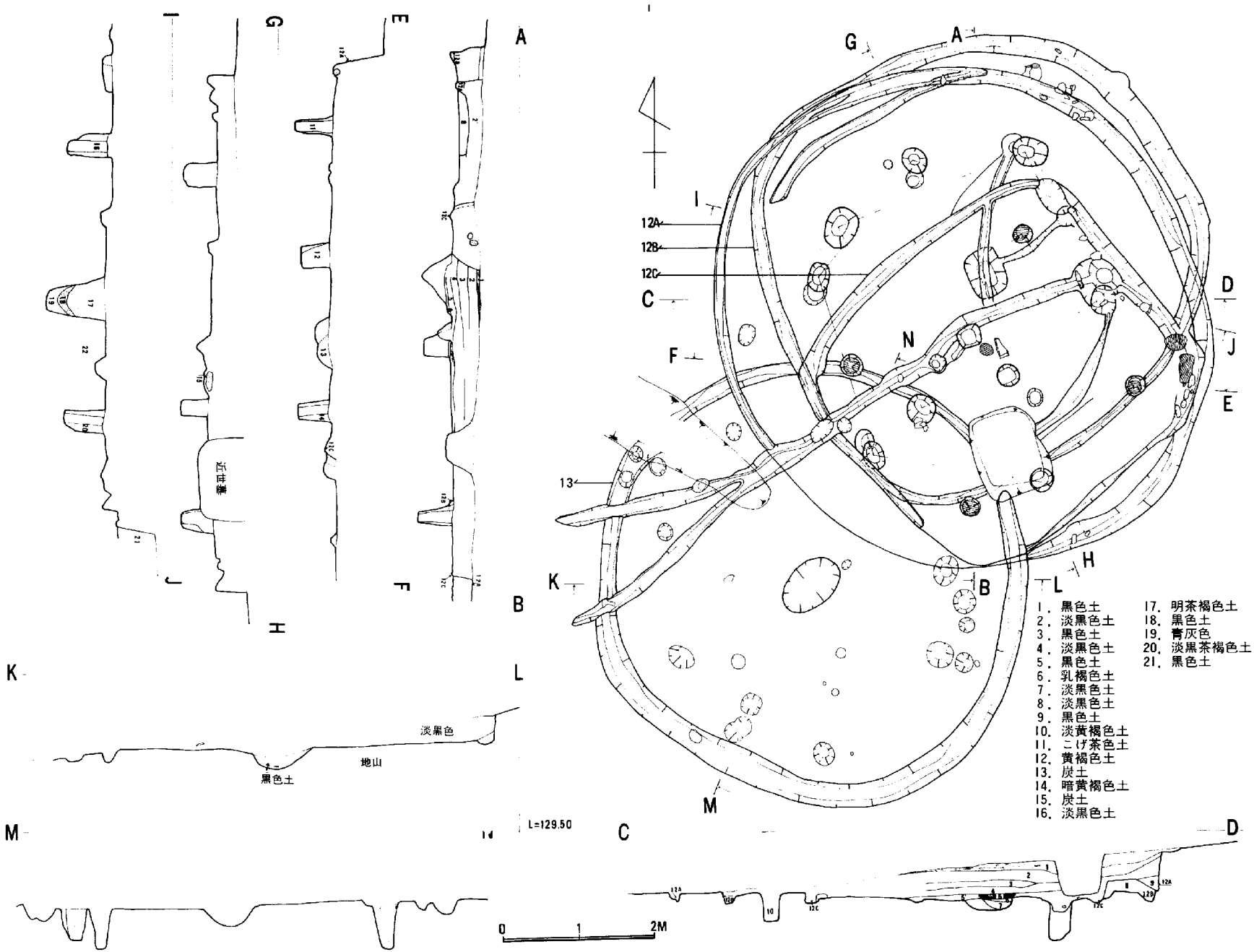
第９図　Ⅰ区No.３住居址（S＝1/60）



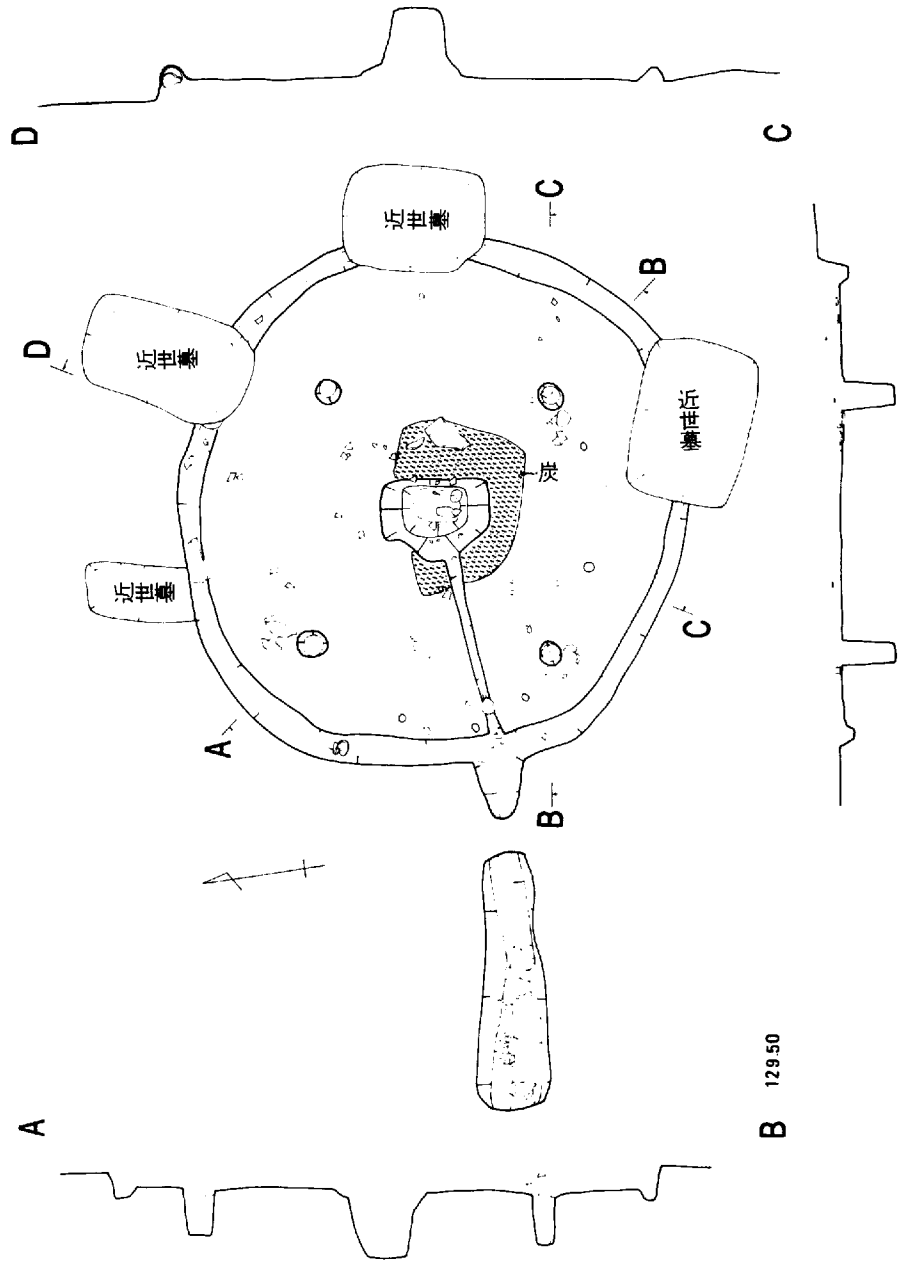
第１０図　１区No.4住居址 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



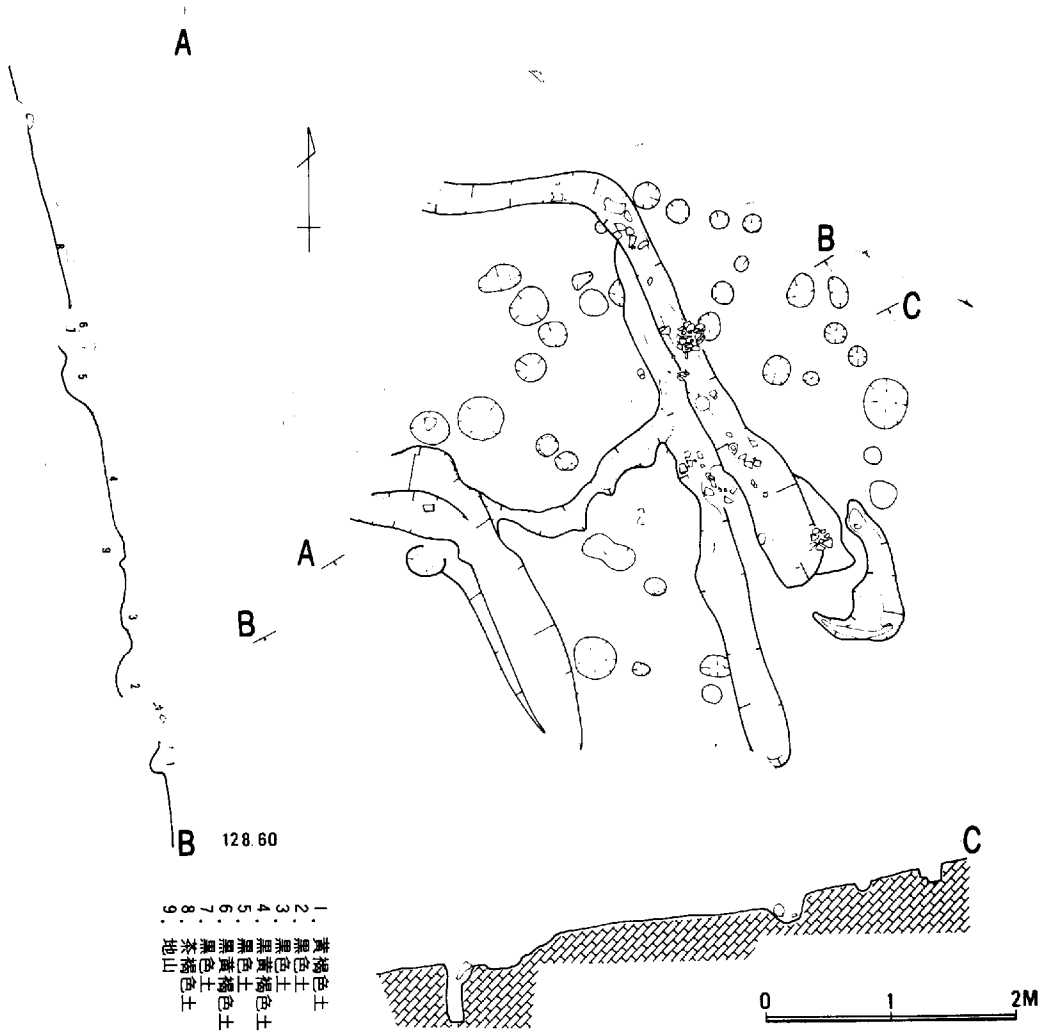
第１１図　１区No.９住居址 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



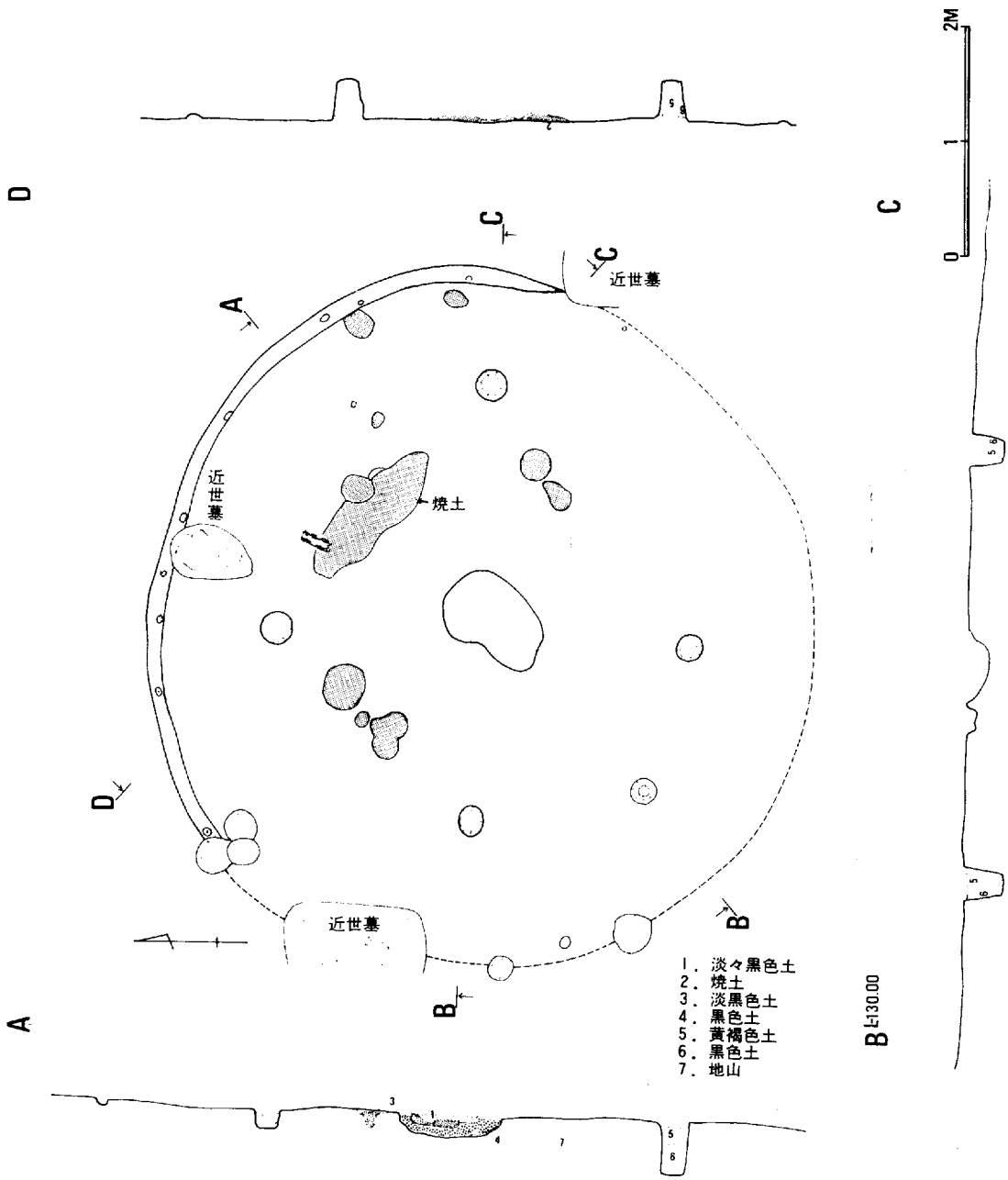
第12図　I区No.12ABC.13 住居址 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



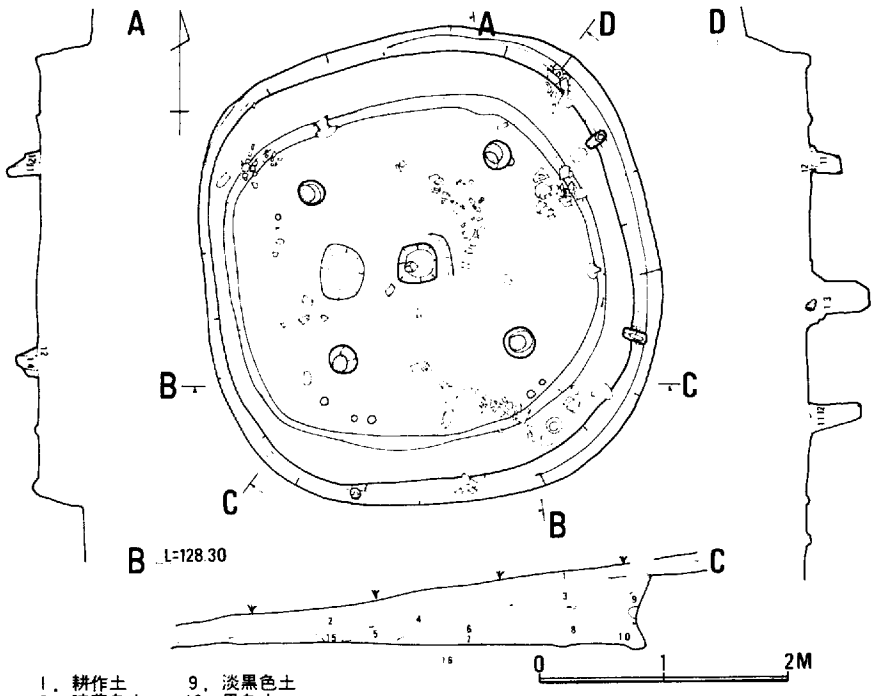
第13図　I区No.14住居址 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



第Ⅰ4図　Ⅰ区No.15溝状遺構 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

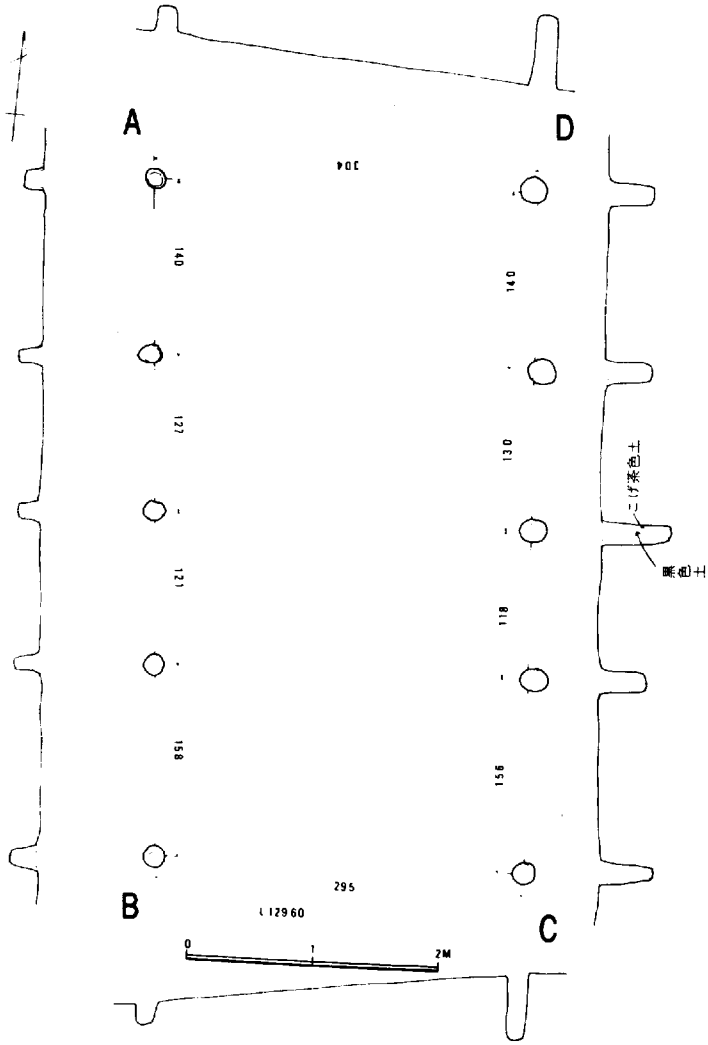


第15図　I区No.18住居址 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

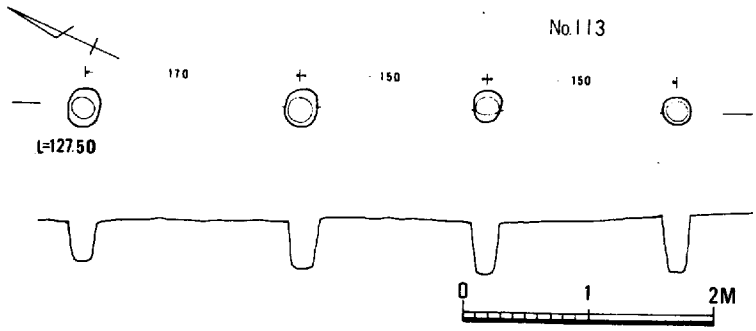


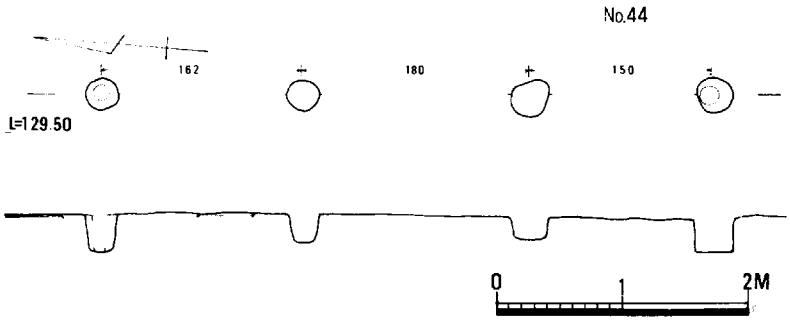
1．耕作土
2．暗黄色土
3．淡黒色土
4．暗黄色土
5．こげ茶色土
6．暗黄色土
7．こげ茶色土
8．暗黄色土
9．淡黒色土
10．黒色土
11．黒色土
12．茶褐色土
13．赤黄褐色土
14．淡黒色土
15．〃
16．地山

第16図　I区No.19住居址 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

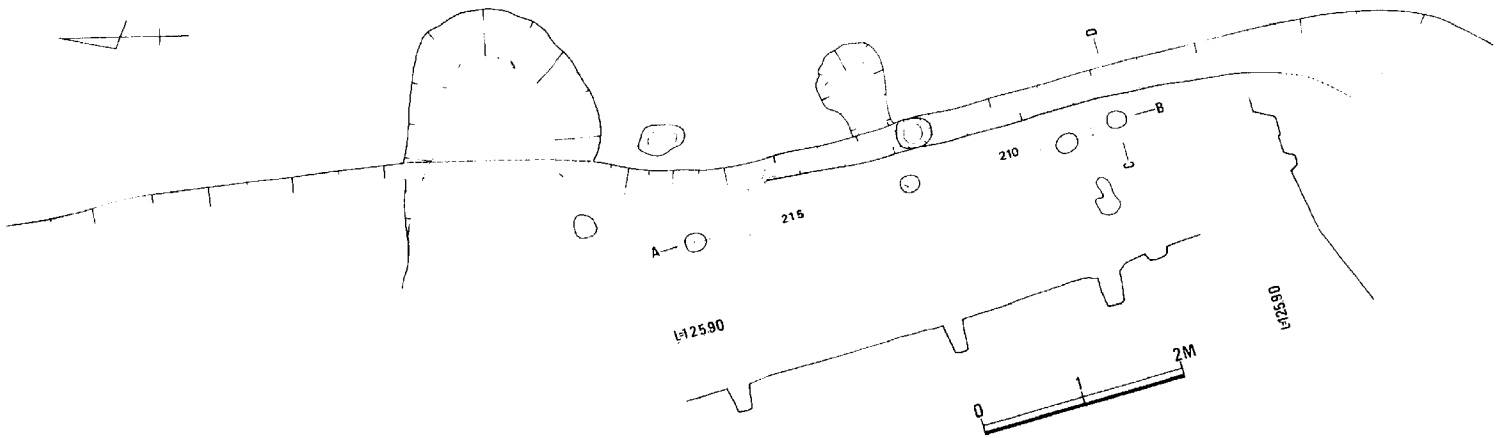


第１７図　Ⅰ区No.43建物 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

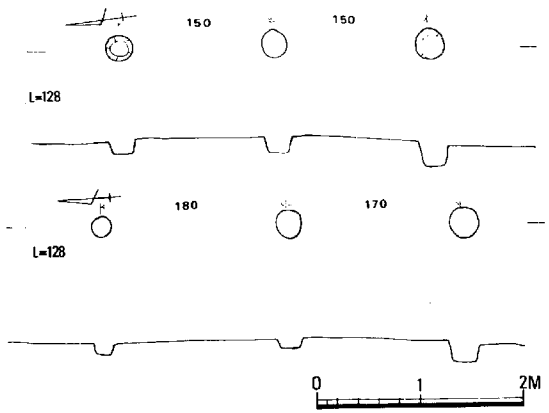




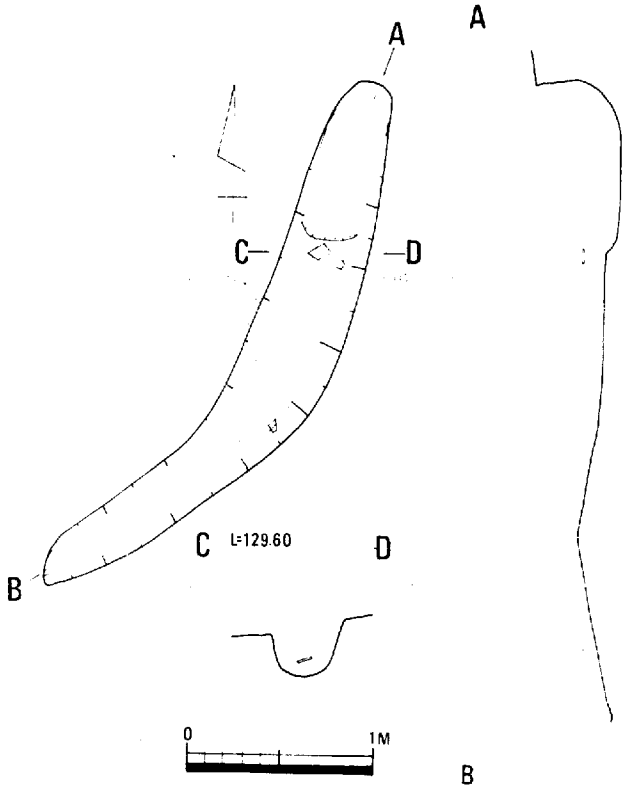
第１８図　１区No.113.44柱穴列 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



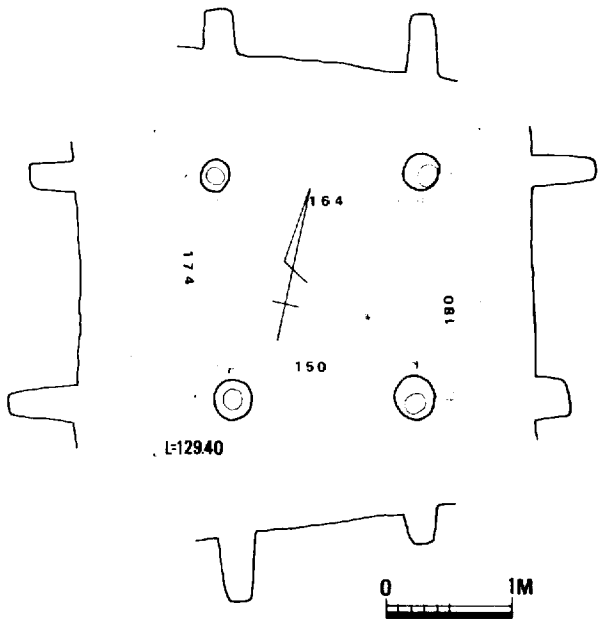
第１９図　Ⅰ区No.74溝状遺構 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



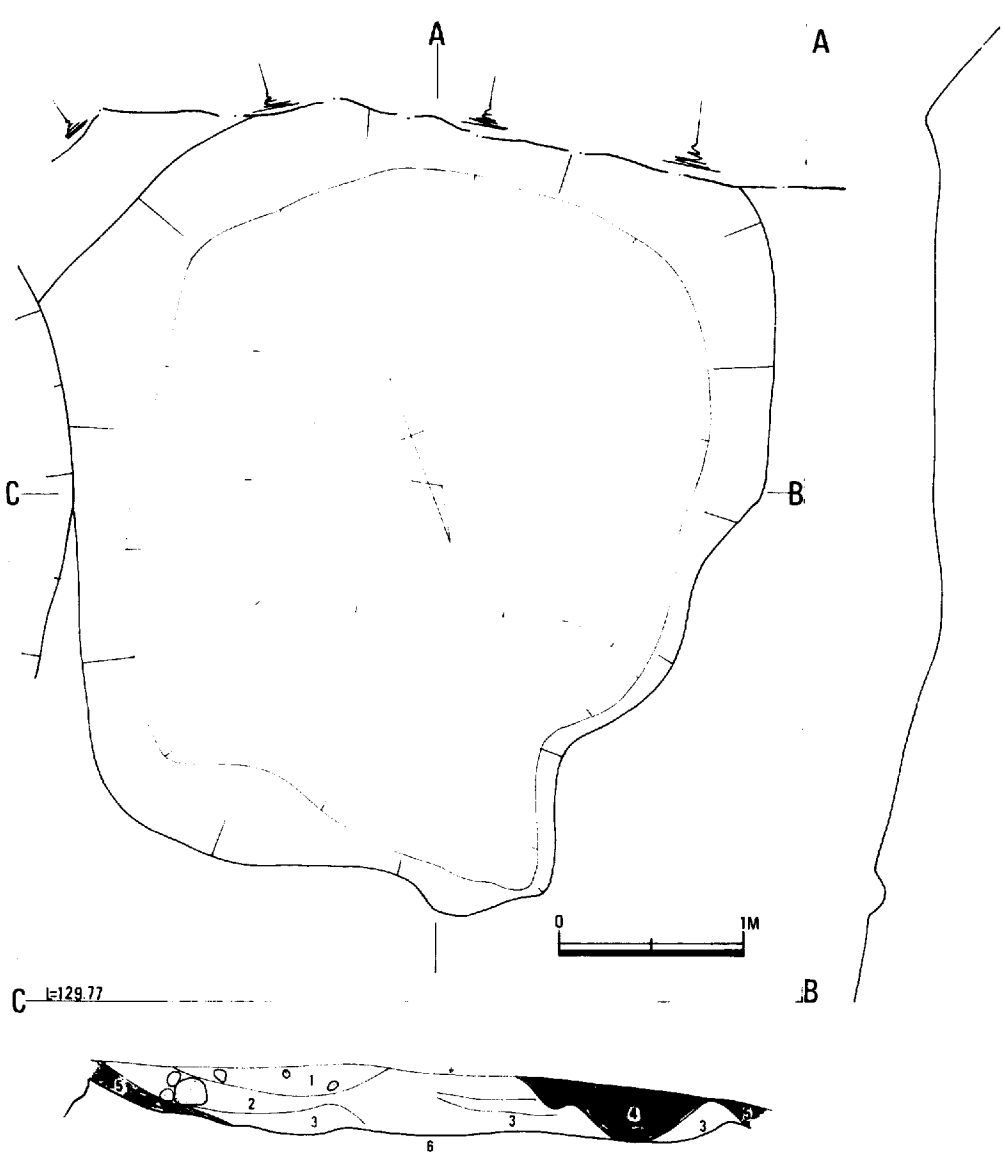
第２０図　Ⅰ区No.108 柱穴列 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



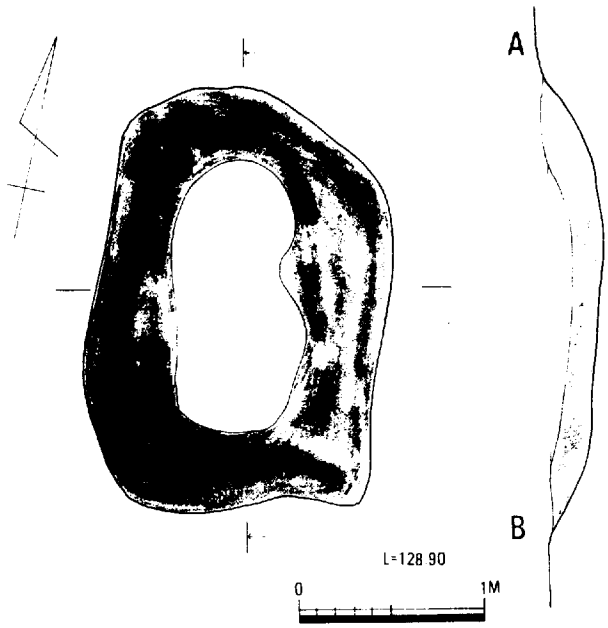
第２２図　Ⅰ区No.20土坑 $\left(S=\frac{1}{40}\right)$



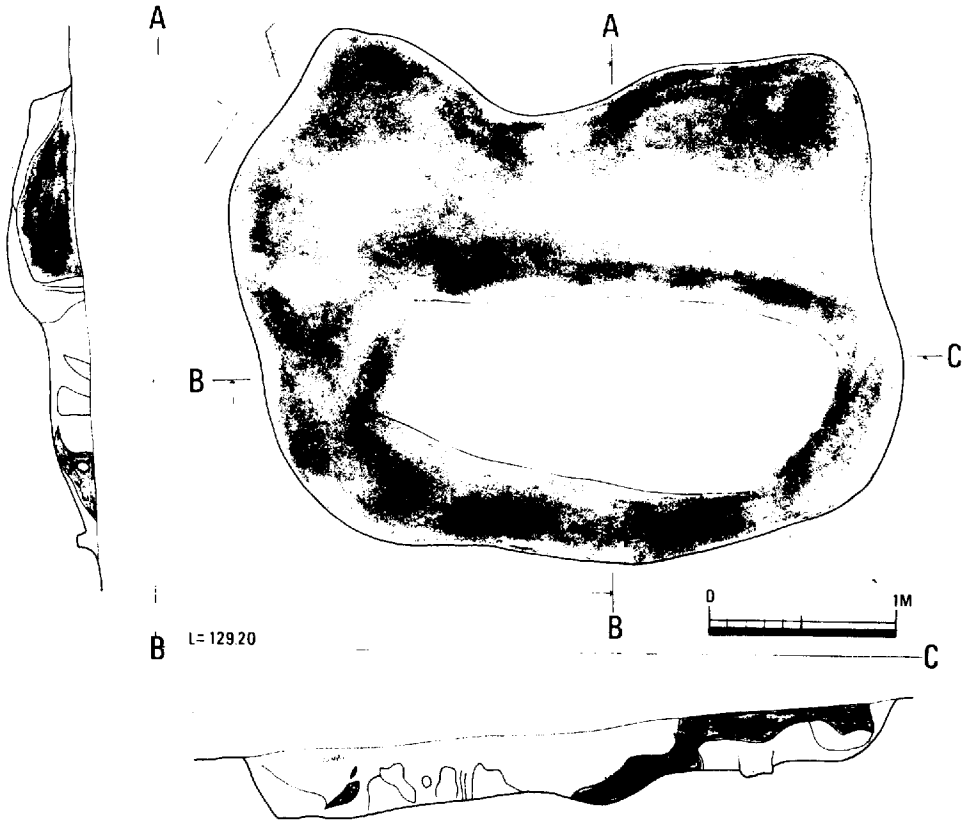
第２１図　Ⅰ区No.109 建物 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



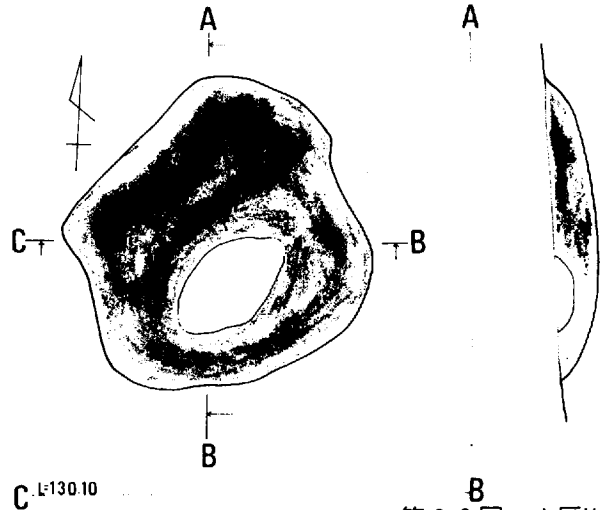
第２３図　Ⅰ区No.17土坑　$\left(S=\frac{1}{40}\right)$



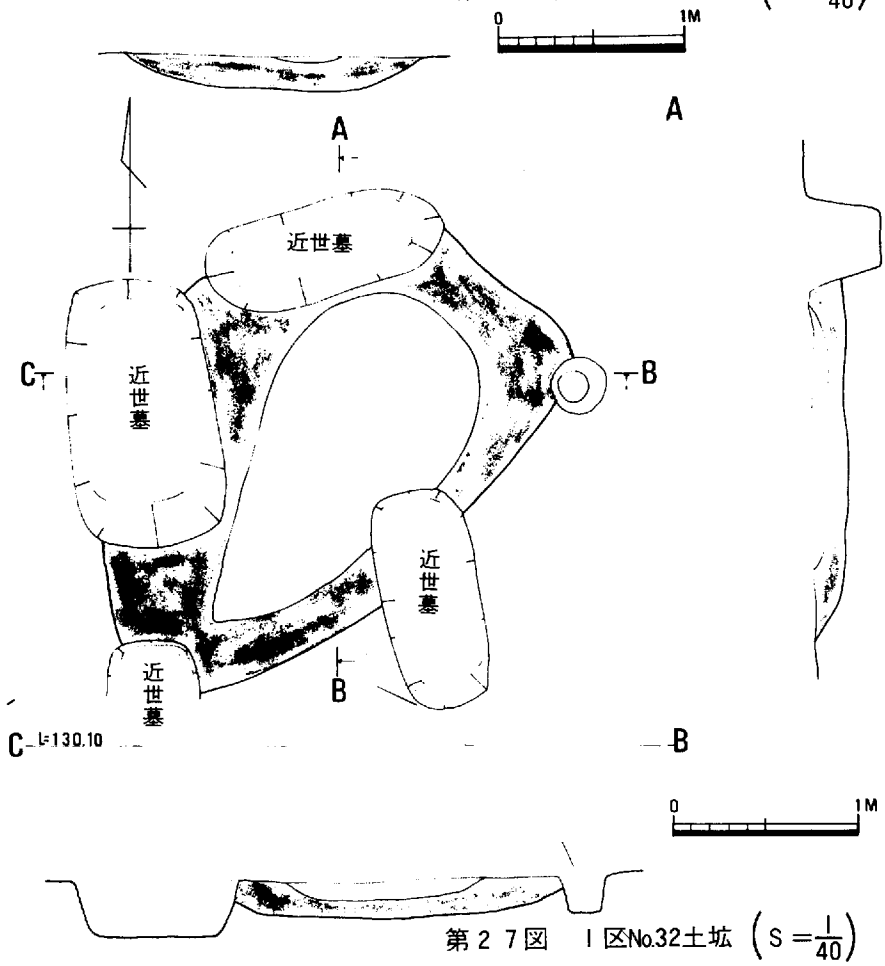
第２４図 Ｉ区No.31土坑 $\left(S=\frac{1}{40}\right)$



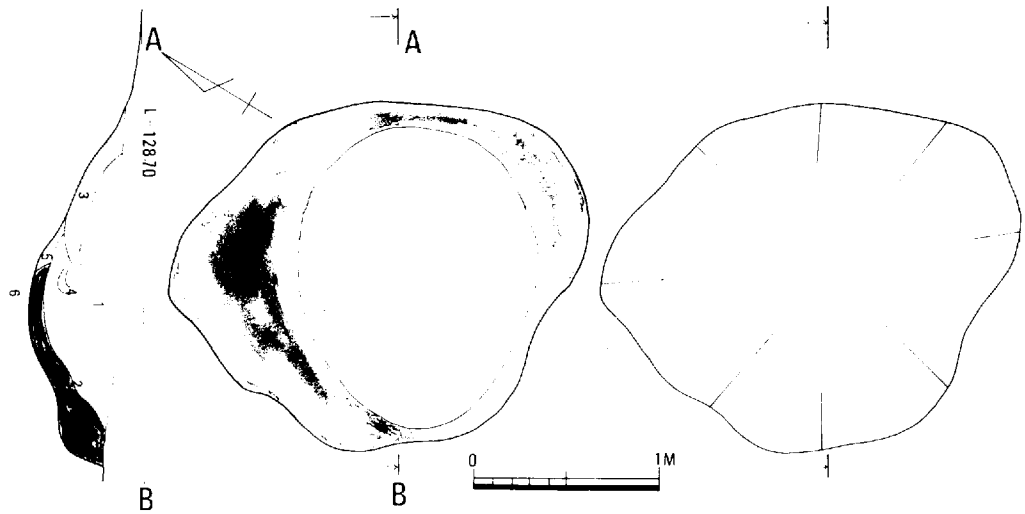
第２５図　Ｉ区No.34土坑 $\left(S=\frac{1}{40}\right)$



第２６図　Ⅰ区No.33土坑 (S＝1/40)

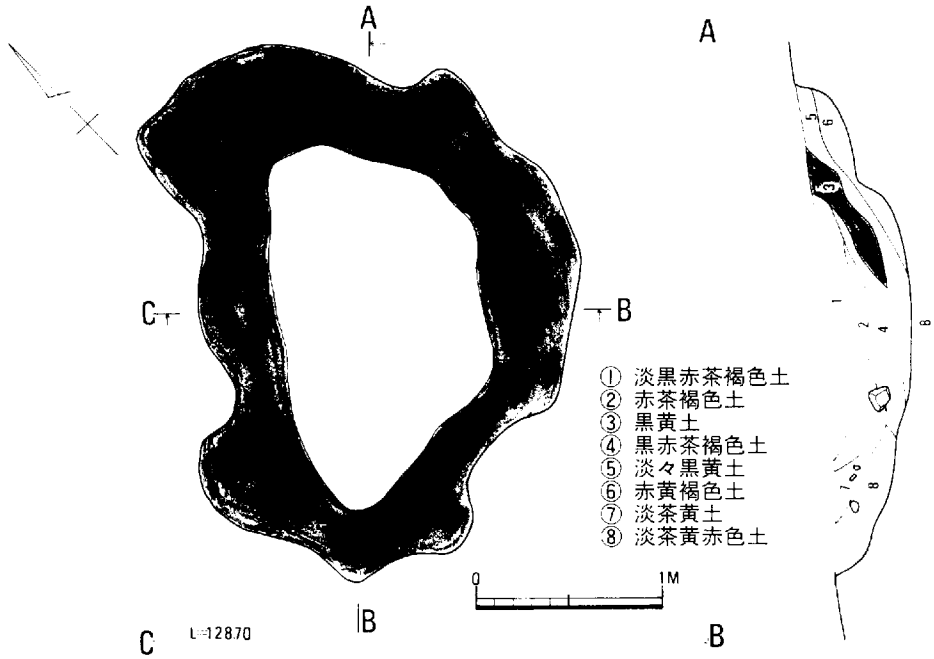


第２７図　Ⅰ区No.32土坑 (S＝1/40)



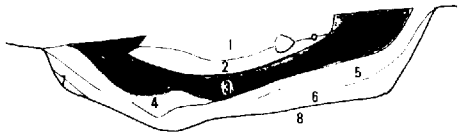
① 茶褐色土
② 黒茶土
③ 淡黒茶土
④ 淡々黒茶土
⑤ 淡々々黒茶褐色土

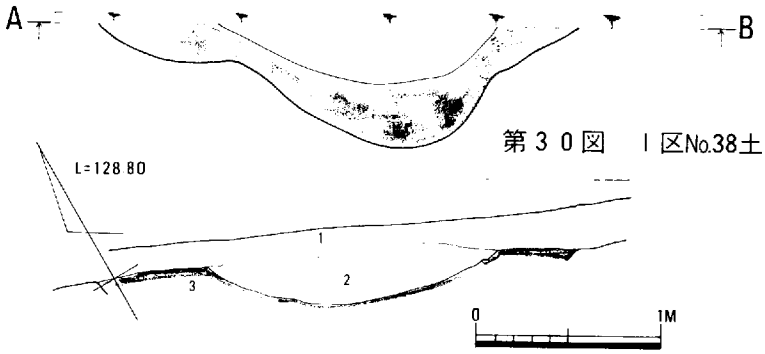
第２８図　Ⅰ区No.35土坑 $\left(S=\frac{1}{40}\right)$



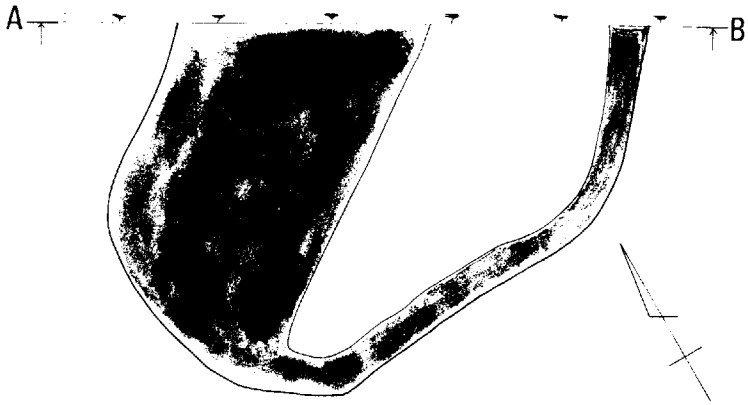
① 淡黒赤茶褐色土
② 赤茶褐色土
③ 黒黄土
④ 黒赤茶褐色土
⑤ 淡々黒黄土
⑥ 赤黄褐色土
⑦ 淡茶黄土
⑧ 淡茶黄赤色土

第２９図　Ⅰ区No.36土坑 $\left(S=\frac{1}{40}\right)$

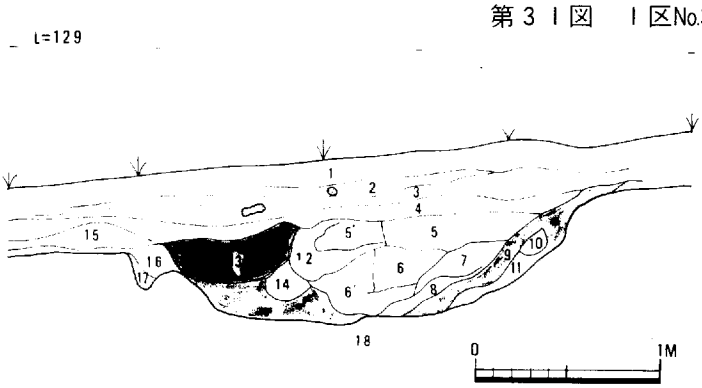




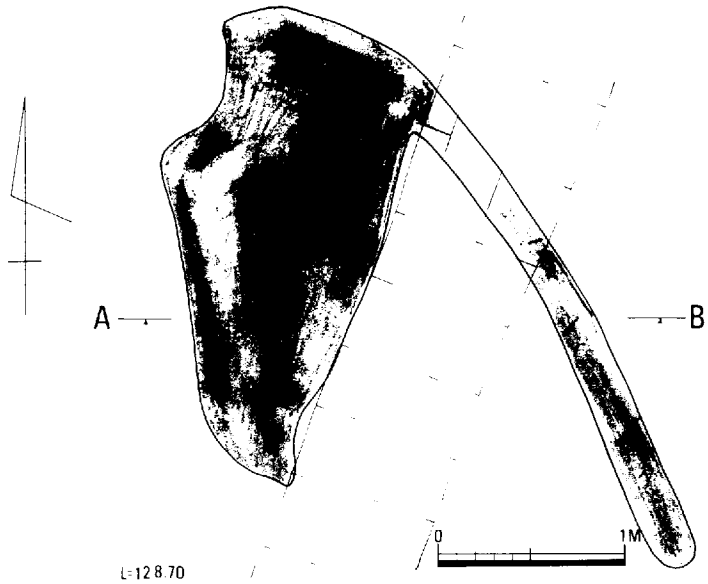
第３０図　Ⅰ区No.38土坑 $\left(S=\frac{1}{40}\right)$



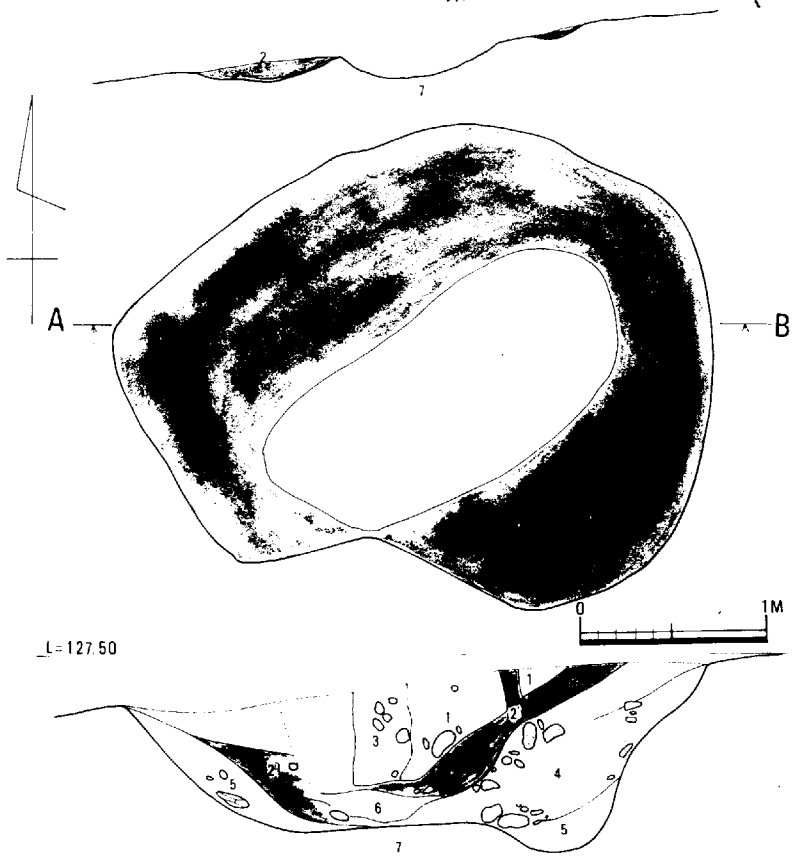
第３１図　Ⅰ区No.39土坑 $\left(S=\frac{1}{40}\right)$



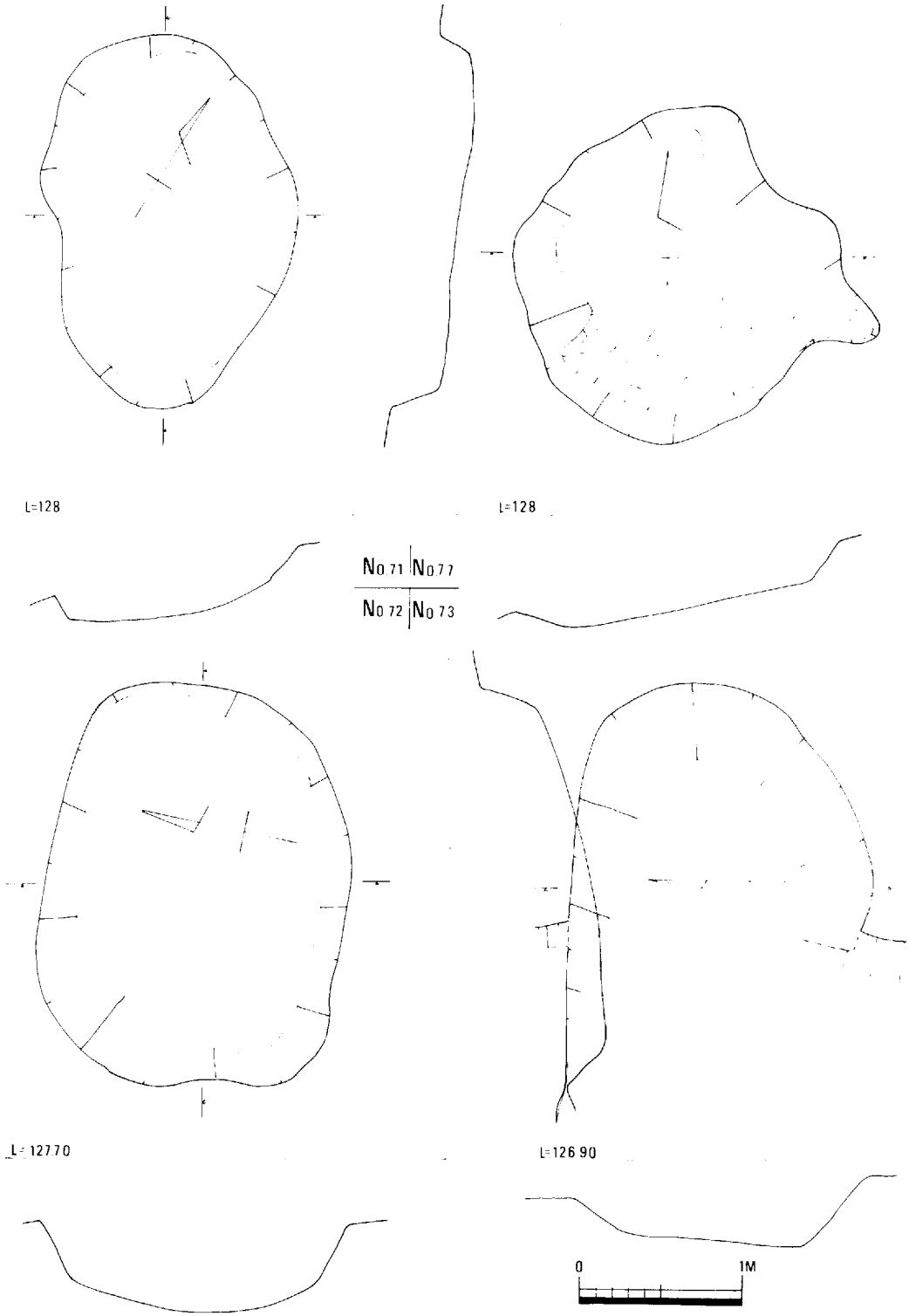
①表土
②灰淡暗色土
③灰暗こげ茶土
④こげ茶赤褐色土
⑤淡々黒赤褐色土
⑤淡々黒黄土
⑥淡々々黒赤褐色土
⑥淡々々黒黄土
⑦淡々黒赤褐色土
⑧赤褐色土
⑨淡黒褐色土
⑩黄土色土
⑪淡々黒赤褐色土
⑫淡黒黄土
⑬黒色土
⑭淡黒色土
⑮灰こげ茶土
⑯淡黒黄土
⑰黒黄土



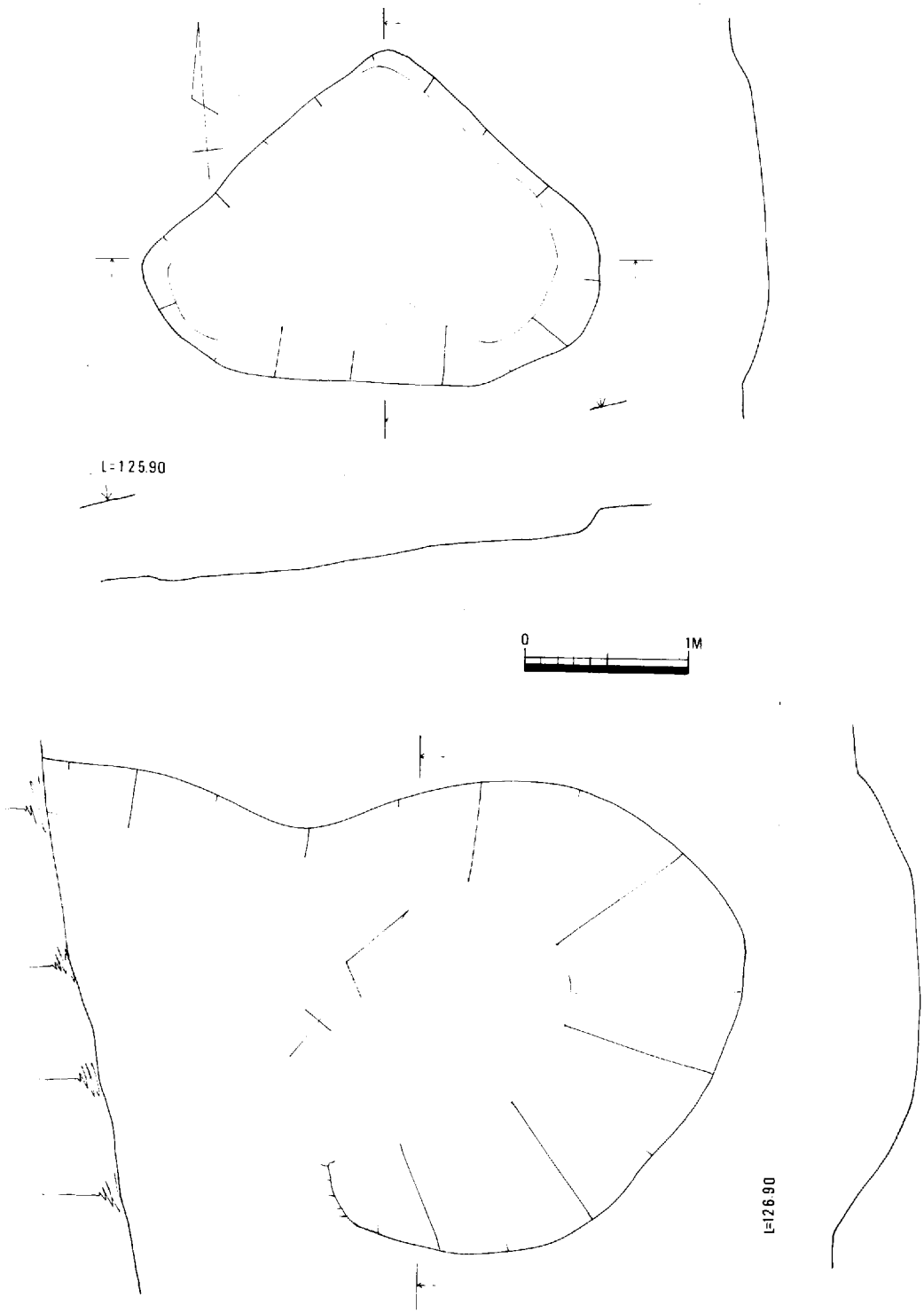
第３２図　Ⅰ区No.40土坑 $\left(S=\frac{1}{40}\right)$



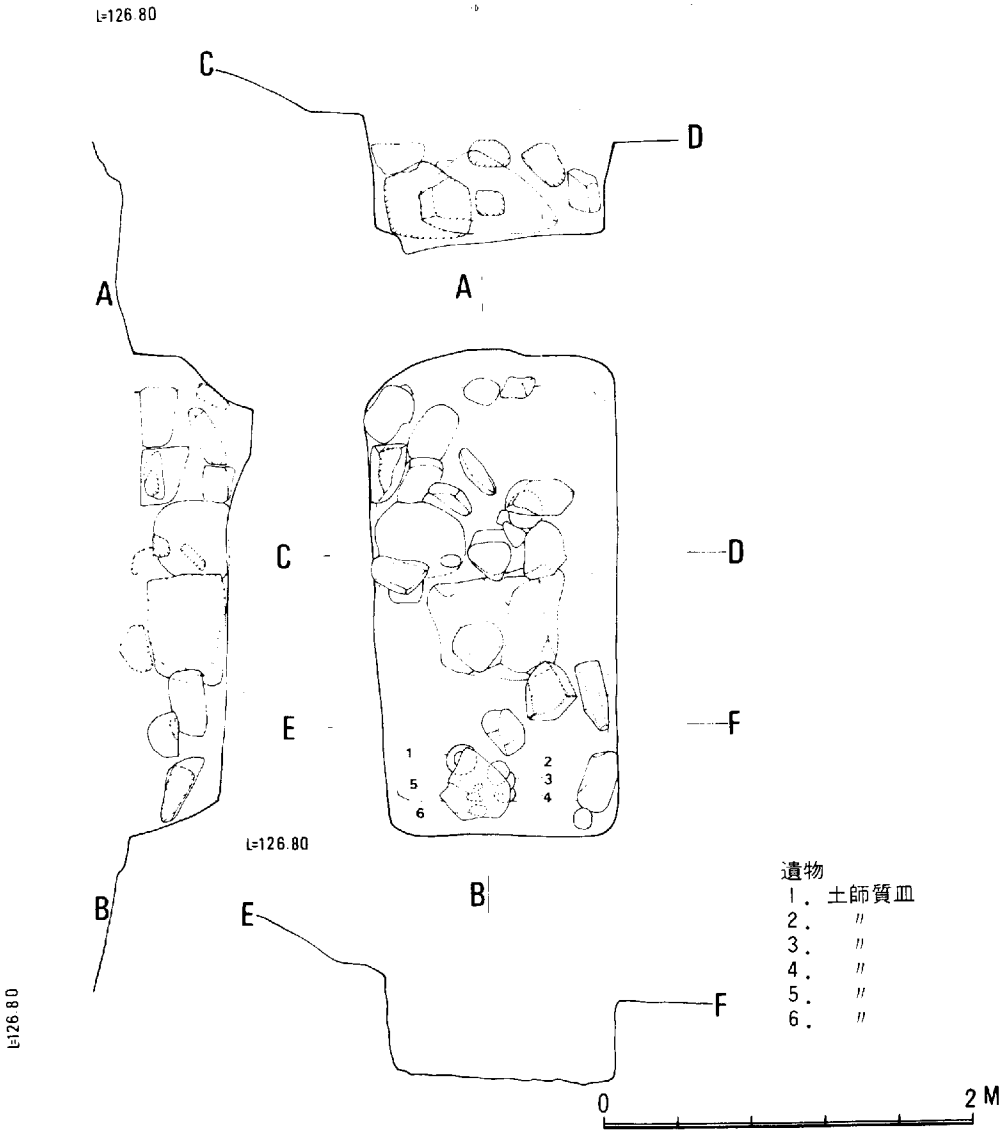
第３３図　Ⅰ区No.41土坑 $\left(S=\frac{1}{40}\right)$



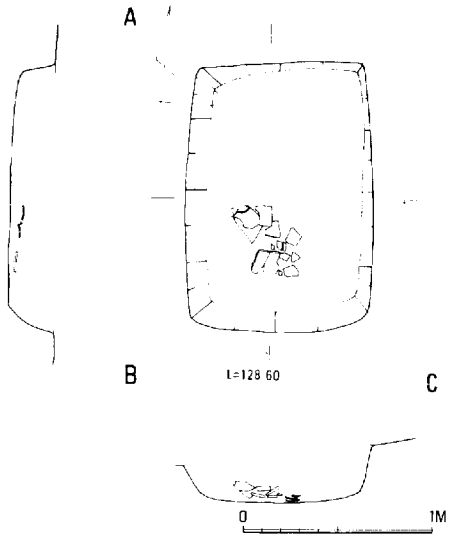
第３４図　Ⅰ区No.71．72．73．77土坑 $\left(S=\frac{1}{40}\right)$



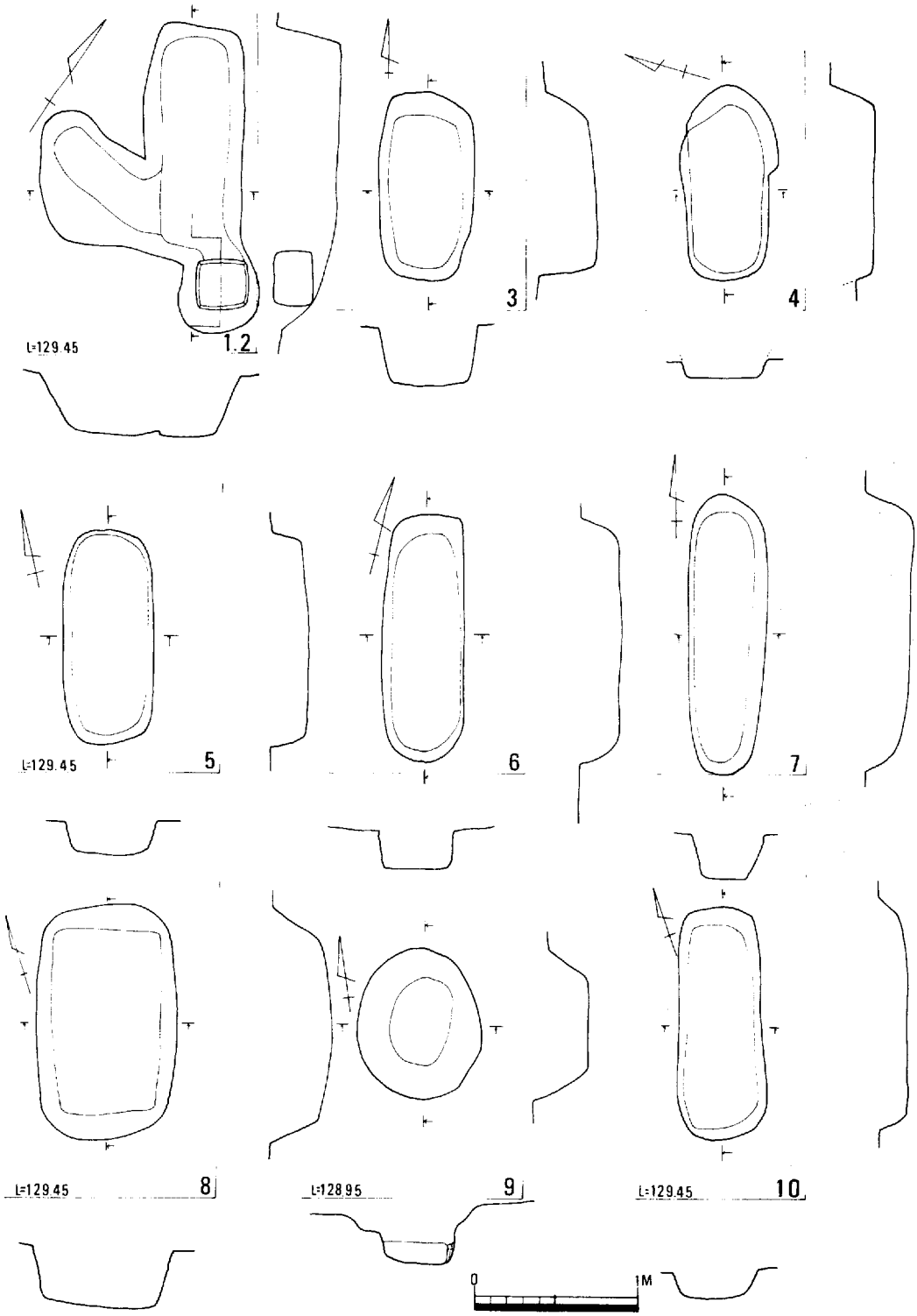
第３５図　Ⅰ区No.78　107 土坑 $\left(S=\frac{1}{40}\right)$



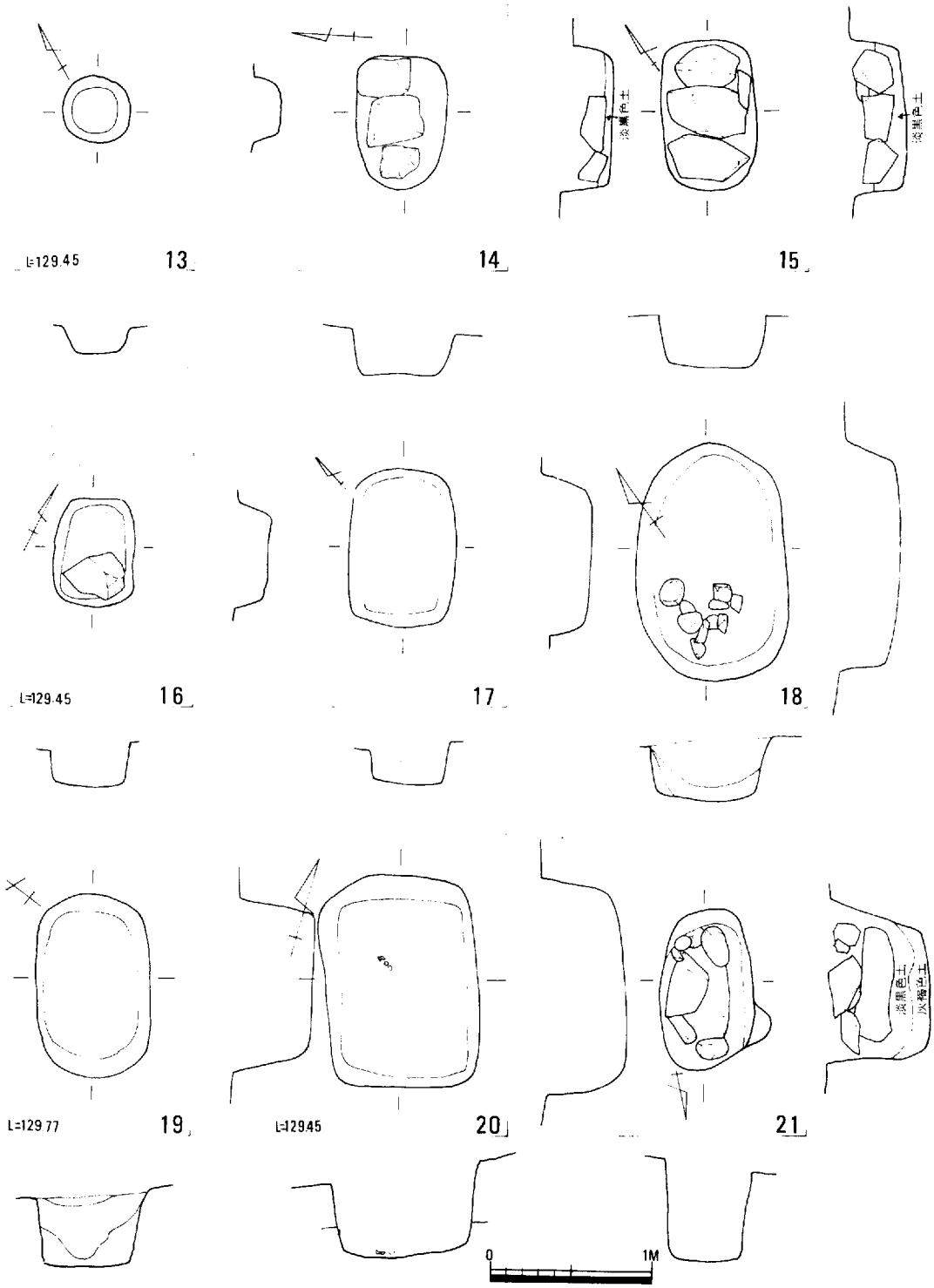
第36図　Ⅰ区No.42土坑墓 $\left(S=\frac{1}{40}\right)$



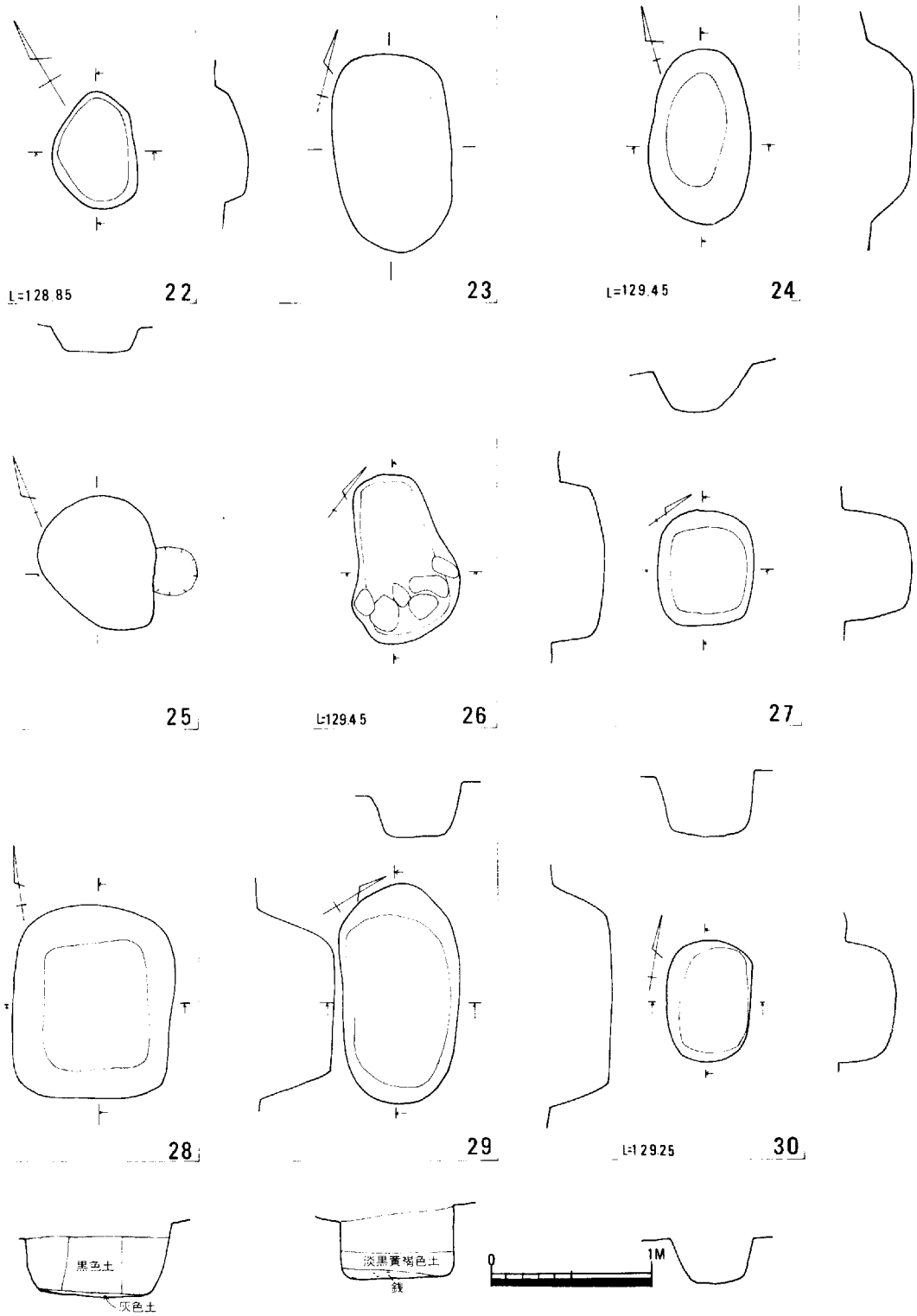
第３７図　Ⅰ区No.45土坑墓（S＝1/40）



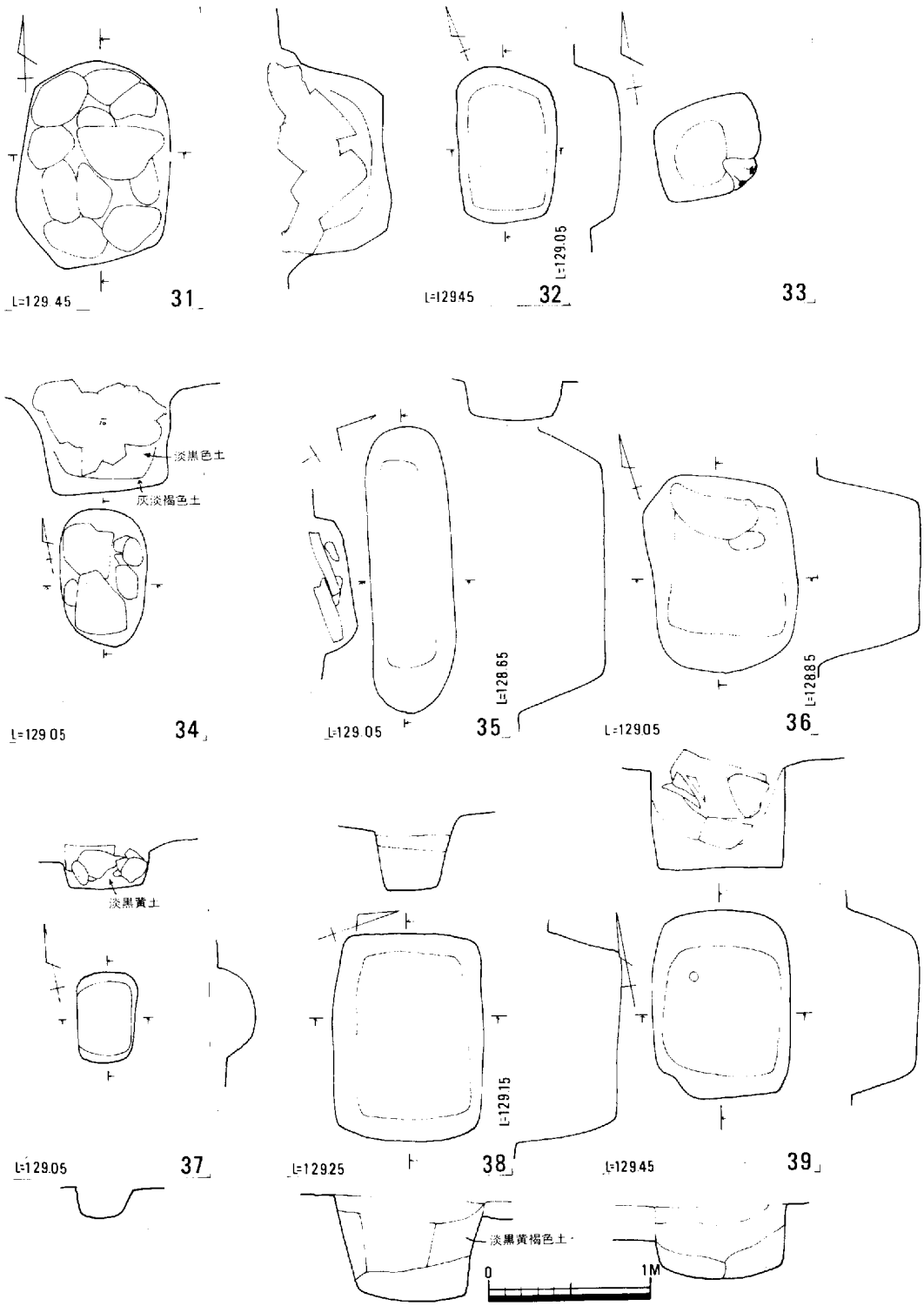
第３８図　Ⅰ区近世墓　①


L=129.45
13
14
15
淡黒色土
淡黒色土
L=129.45
16
17
18
L=129.77
19
L=129.45
20
21
淡黒色土
灰褐色土
0
1M

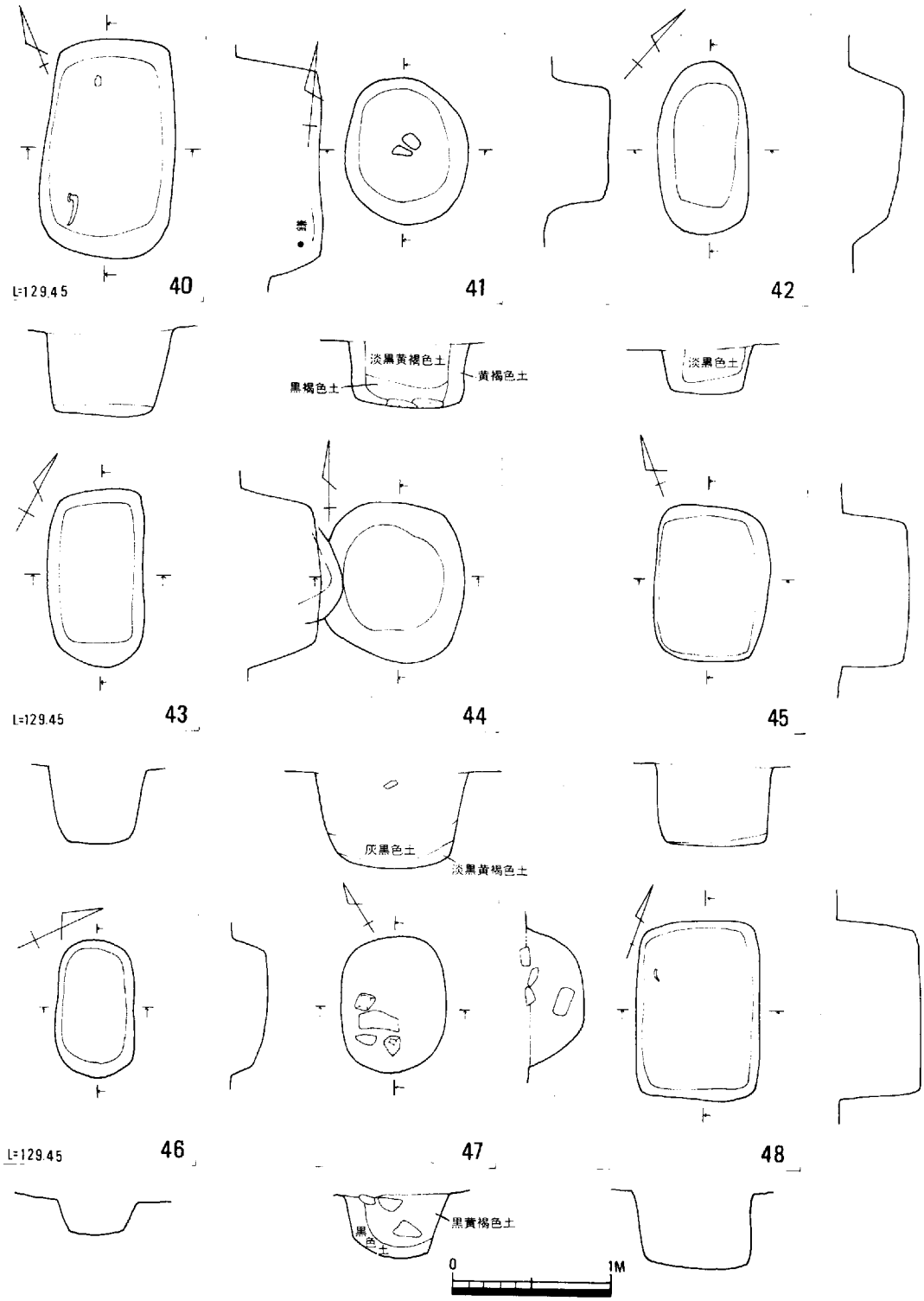
第３９図　Ⅰ区近世墓　②


L=128.85
22
23
L=129.45
24
25
L=129.45
26
27
28
29
L=129.25
30
黒色土
灰色土
淡黒黄褐色土
鐵
0
1M

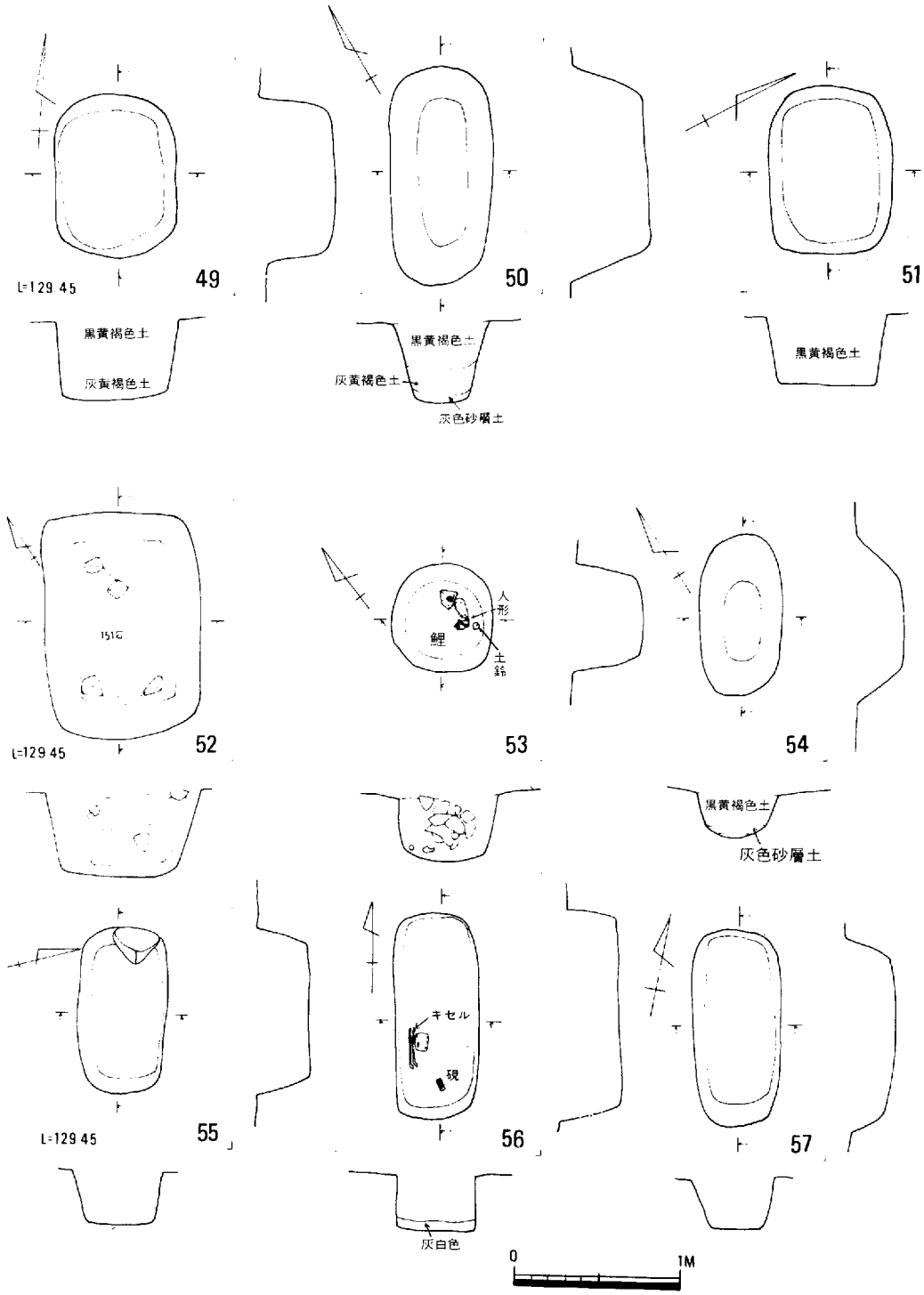
第４０図　Ⅰ区近世墓　③


L=129.45
31
L=129.45
32
L=129.05
33
淡黒色土
灰淡褐色土
L=129.05
34
L=129.05
35
L=128.65
L=129.05
36
L=128.85
淡黒黄土
L=129.05
37
L=129.25
38
L=129.15
L=129.45
39
淡黒黄褐色土
0
1M

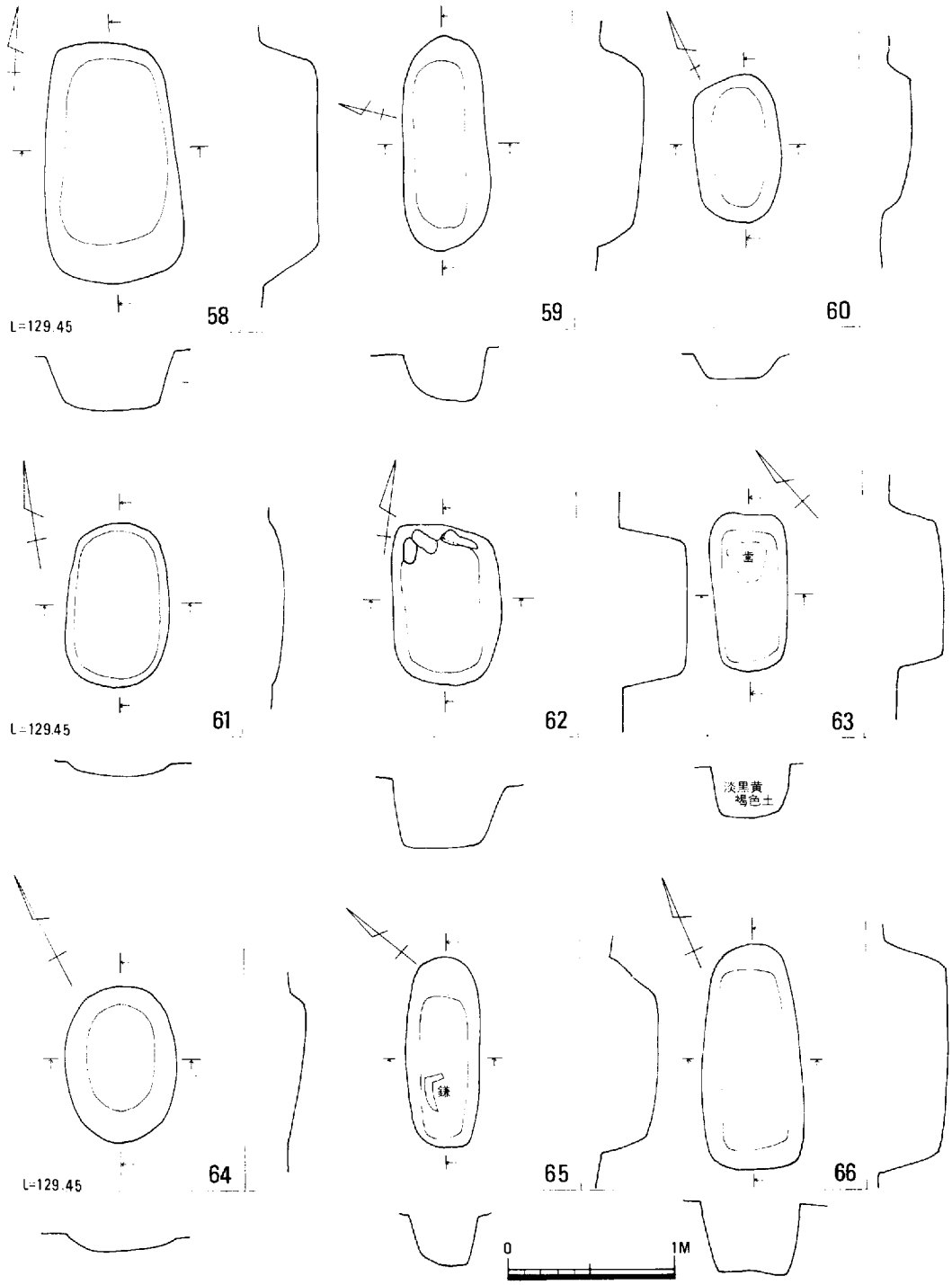
第４１図　Ⅰ区近世墓　④


L=129.45
40
41
42
淡黒黄褐色土
黒褐色土
黄褐色土
淡黒色土
43
44
45
灰黒色土
淡黒黄褐色土
46
47
48
黒黄褐色土
黒色土
0
1M

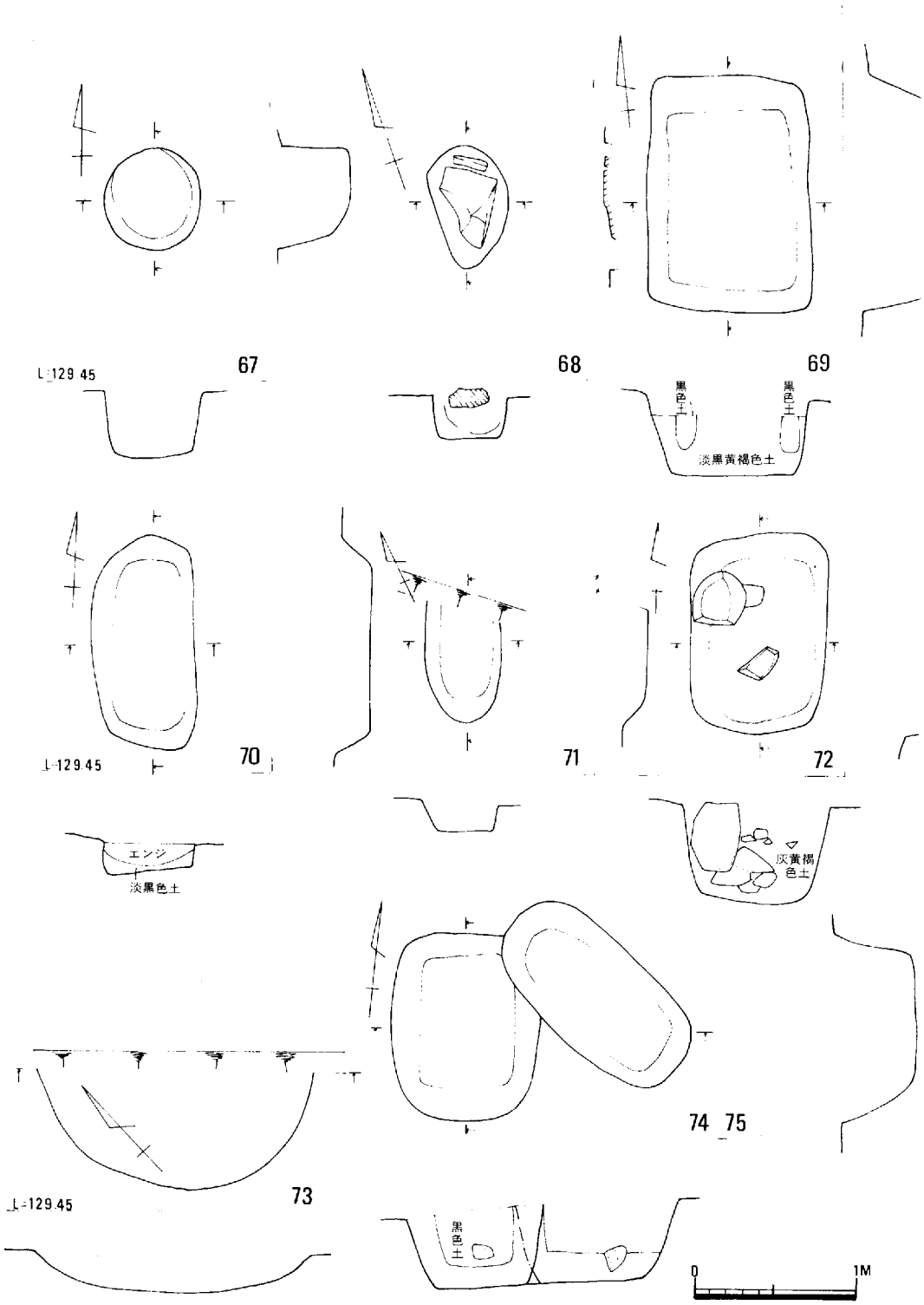
第４２図　Ⅰ区近世墓　⑤


L=129.45
49
黒黄褐色土
灰黄褐色土
50
黒黄褐色土
灰黄褐色土
灰色砂層土
51
黒黄褐色土
151石
L=129.45
52
人形
鯉
土鈴
53
54
黒黄褐色土
灰色砂層土
L=129.45
55
キセル
硯
56
灰白色
57
0
1M

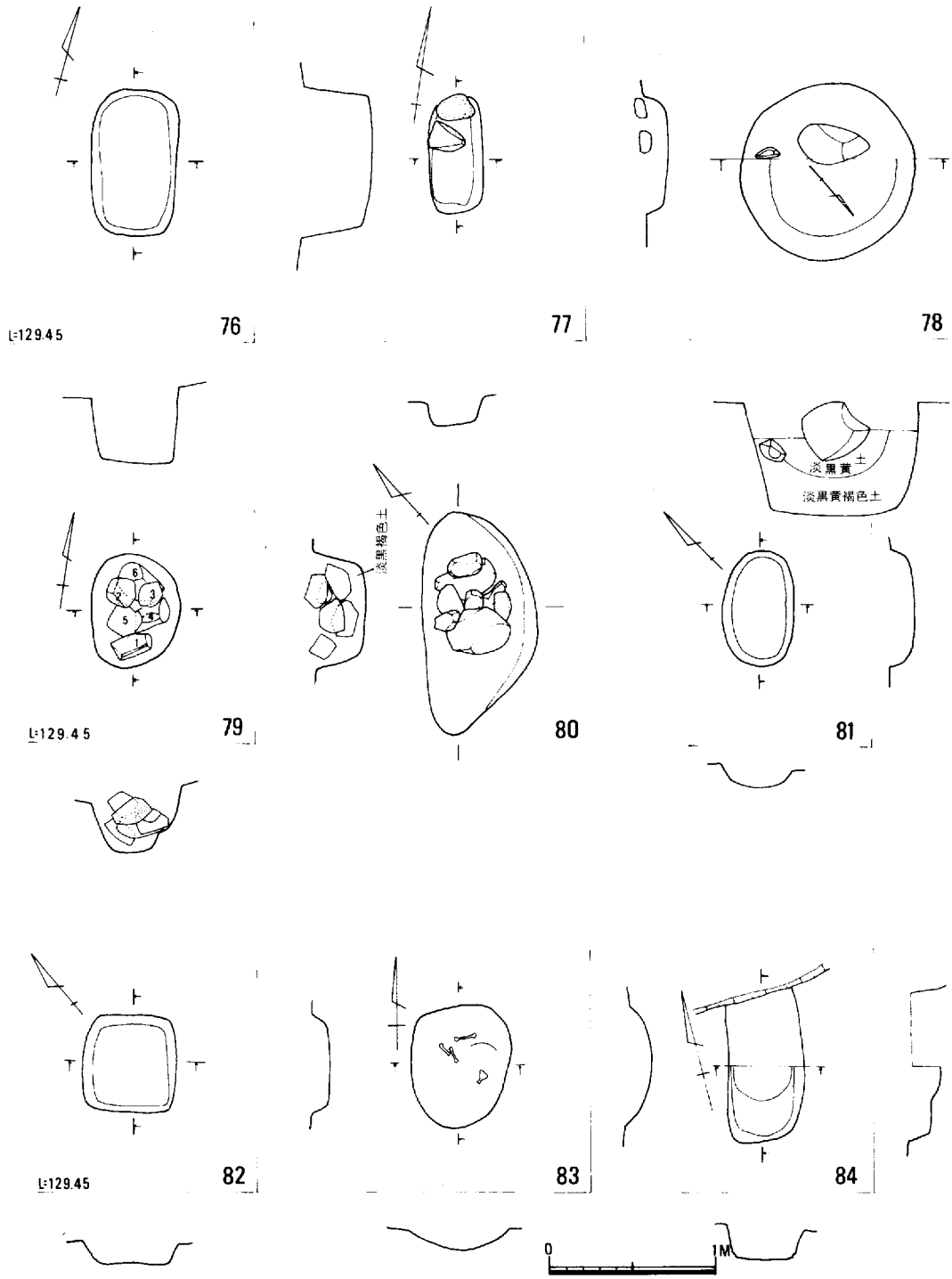
第43図　I区近世墓　⑥



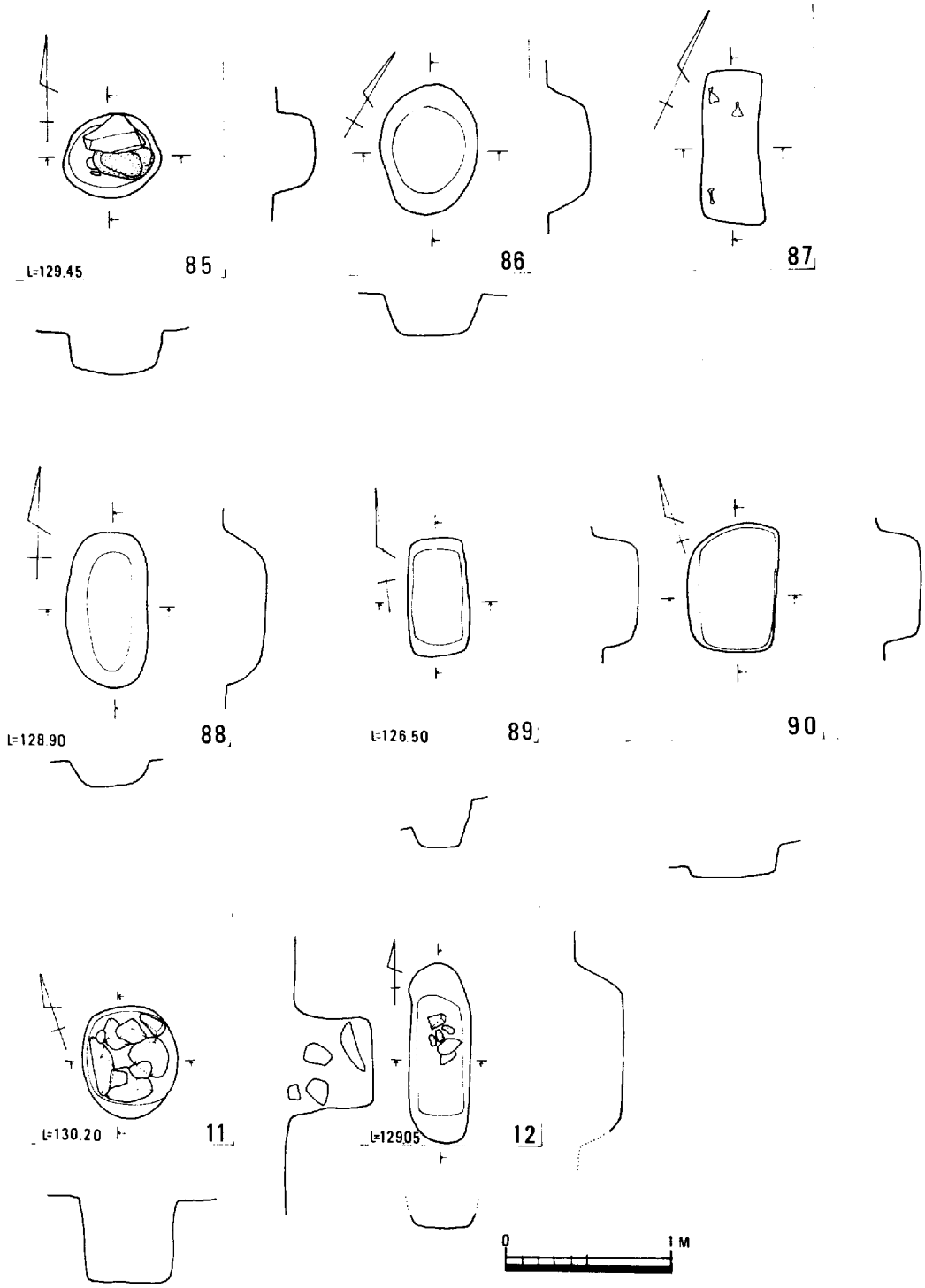
第４４図　Ⅰ区近世墓　⑦


67
68
69
L=129.45
黒色土
黒色土
淡黒黄褐色土
70
71
72
L=129.45
エンジ
淡黒色土
灰黄褐色土
74 75
73
L=129.45
黒色土
0
1M

第４５図　Ⅰ区近世墓　⑧

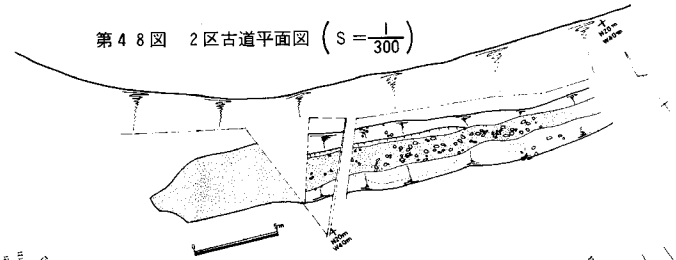

L=129.45
76
77
78
L=129.45
79
淡黒褐色土
80
淡黒黄土
淡黒黄褐色土
81
L=129.45
82
83
84
0
1M

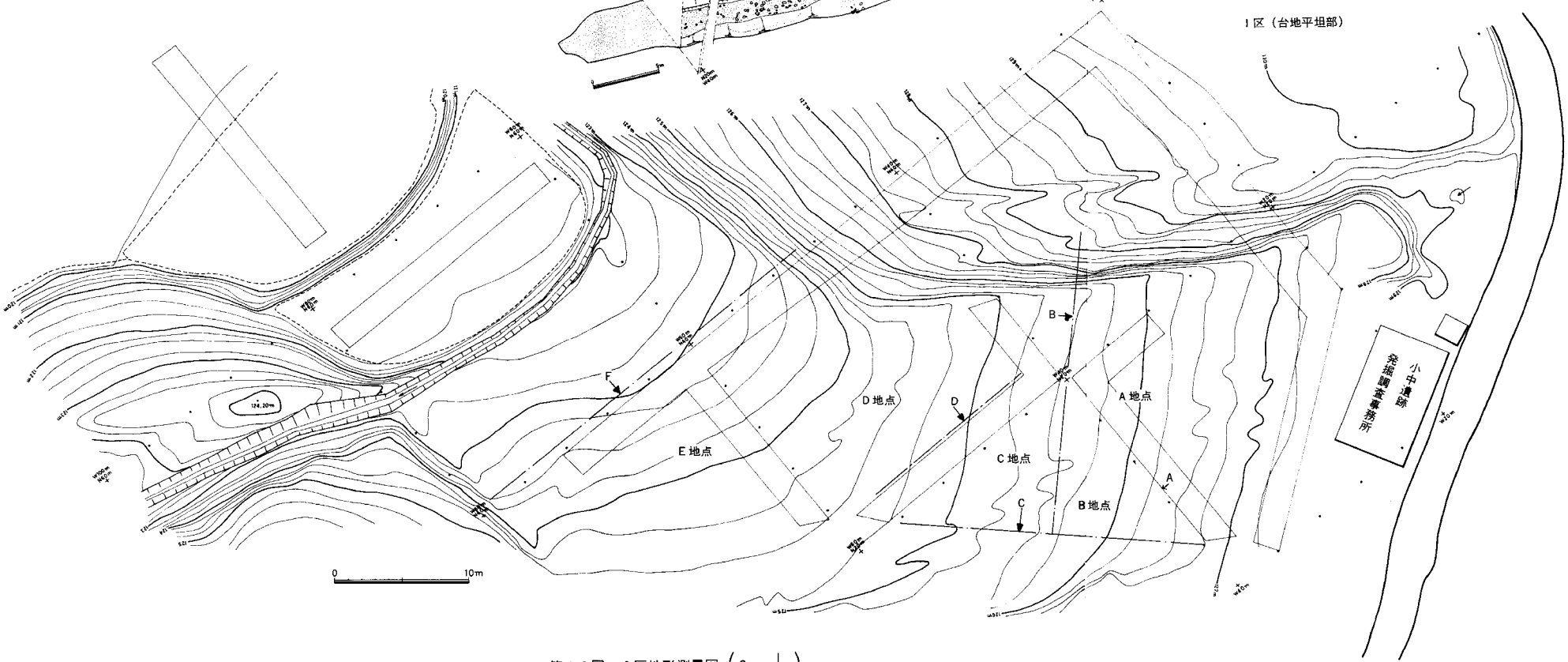
第４６図　Ⅰ区近世墓　⑨



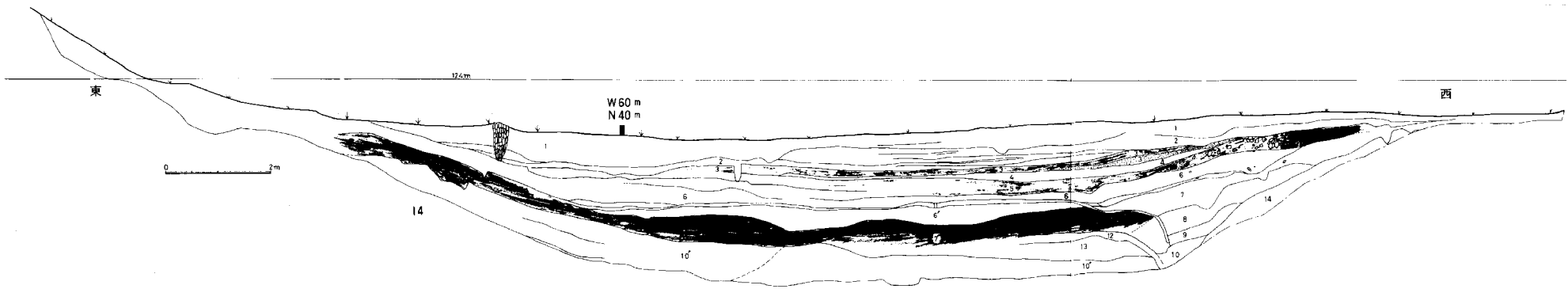
第４７図　Ⅰ区近世墓 ⑩

第４８図　２区古道平面図 $\left(S=\frac{1}{300}\right)$





第４９図　２区地形測量図 $\left(S=\frac{1}{300}\right)$



1．明褐色土層　砂質土が主体となり硬質の砂の層とバラバラの砂層が交互にみられるが完全にはバンドがのびない。

2．褐色土層　砂質土にやや粘土が混り、いくらか黒味を増す。東側においては明確に色別できうるが（ピットより）西側においては、はっきりした層は確認できない。

3．淡黒色土層（遺物含）　西側よりピット付近までは統一したほぼ水平の層が続くがピット以北においてはやや凹状を呈す。そしてやや淡くなる。

3′黒黄褐色土層（遺物含）　地山にみられる小礫を含み、硬質土層

4．こげ茶色土（コーヒーにクリープを少し）　3．5．間にあり遺物包含層をわけており、地山礫を少し含む。ピット手前で消える。

5．淡黒色土層　3．より西側部分では黒色が強いが東に向かうにしたがい弱くなっている。最も多く遺物（土器片）をもっており、そのうち西側付近では多くの河原石と伴に土器片が混って出土している。

6．こげ茶色土　4．よりやや黒色が増す土色

6′淡青黒

7．淡淡黒色土層　3．よりもさらに淡く混入物の目立たない11の層の下降しはじめたところでぶつかっているが通り抜けている感。

7′青黒色

8．こげ茶色　4．6．層よりさらに淡い土層にて4．6．に比べて軟かい土である。11の層が再び下降しはじめるところでぶつかっているがやはり通り抜けている感じ。

9．こげ茶色　8．より少し黒が強くなる。11の層が下降したところでぶつかっているが通り抜けて東へ向う感。

10．黄褐色土層　地上真上にみられ11，12，を通り抜けており12，を通り抜けた所で灰色の質感を同じくするような粘性土層が同LEVELで東へのびている。

10′粘性土質

11．赤褐色土　さびのついたような色で西谷底あたりより発し上に向かって昇り（120cm）そこより東側に向い、ほぼ同LEVELでのびている。東側においては下降するところがみられず。

12．やや

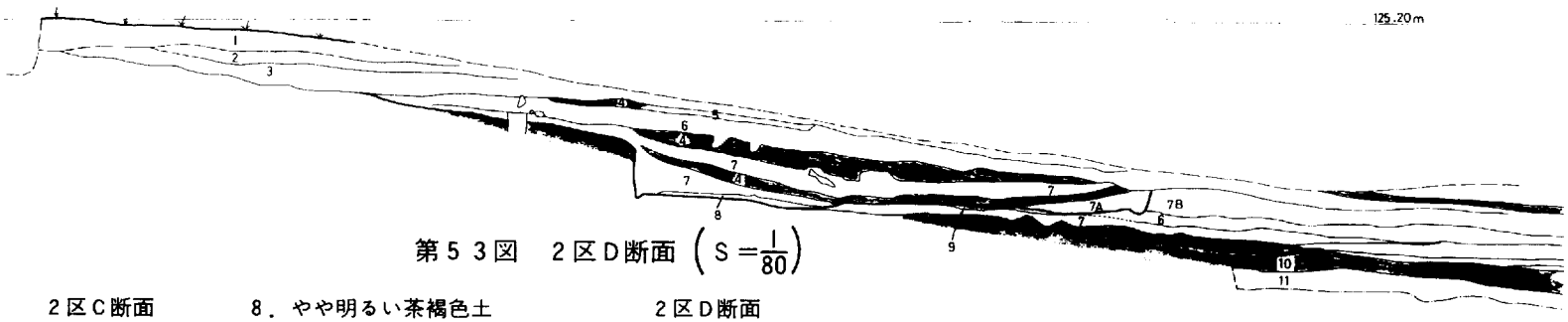
13．淡々青黒色

14．地山礫

第50図　2区F断面 $\left(S=\frac{1}{80}\right)$

第５１図　２区遺構配置図（S＝$\frac{1}{100}$）

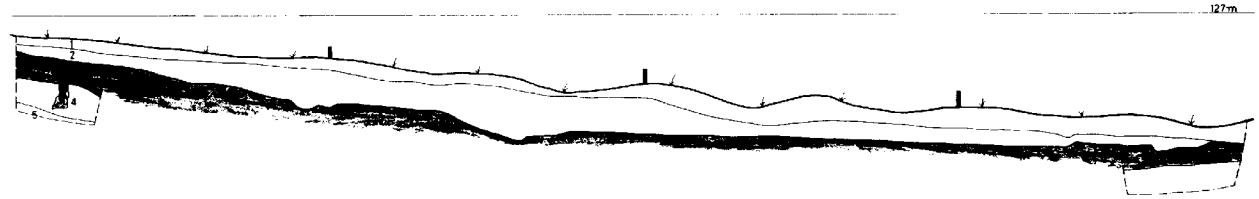
第５２図　２区Ｃ断面 $\left(S=\frac{1}{80}\right)$



第５３図　２区Ｄ断面 $\left(S=\frac{1}{80}\right)$

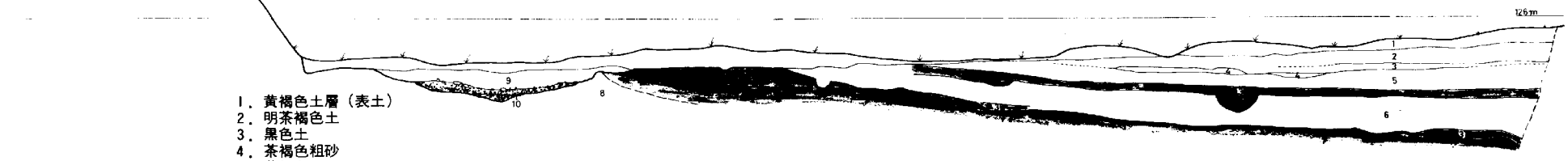
２区Ｃ断面
1．黄褐色土層
2．茶褐色土層
3．黄色土層
4．明茶色土層
5．茶褐色土層
6．黒色土層
7．黒褐色土層
8．やや明るい茶褐色土
9．黒褐色土層
10．明るい茶褐色土層
11．灰黒色土層(弥生中期包含層)
12．以下黒色土層中には土器片なし
13．焼土あり住居址だったのか？

２区Ｄ断面
1．砂利混り黄色土層
2．やや明るい茶褐色土層
3．茶褐色土層
4．黒色土層
5．黄色粗砂層
6．暗茶褐色土層
7．黒褐色土層
6A　黒褐色土層(やや黒っぽい)
7B　黒褐色土層(やや茶色が多い)
8．黒褐色貼床
9．茶褐色土層（はり床）
10．暗黒色粘土層
11．灰黒色粘土層



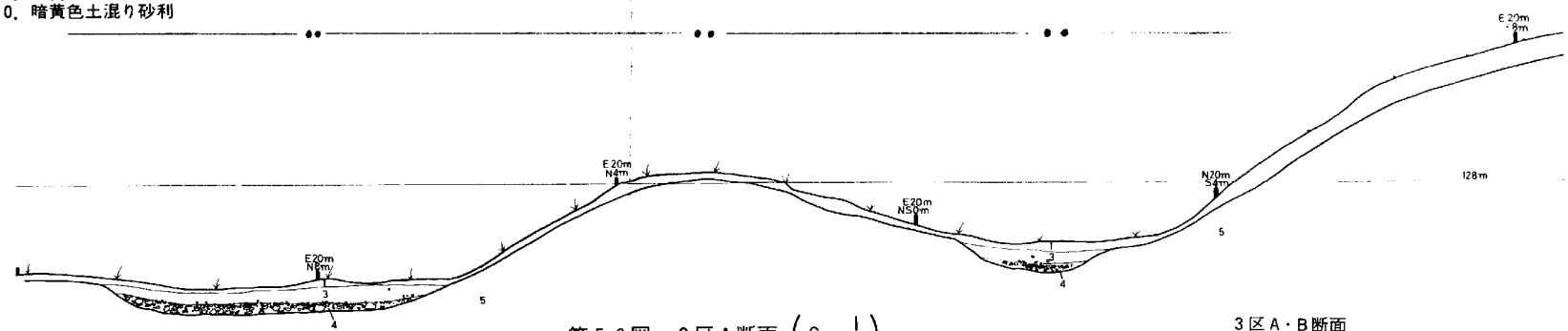
1．礫混り黄色土
2．黒茶色土(弥生式土器包含層)
3．黒色土（地山）
4．黒茶色土（地山）
5．黄色粘土(小さい石混り地山)

第５４図　２区Ａ断面 $\left(S=\frac{1}{80}\right)$

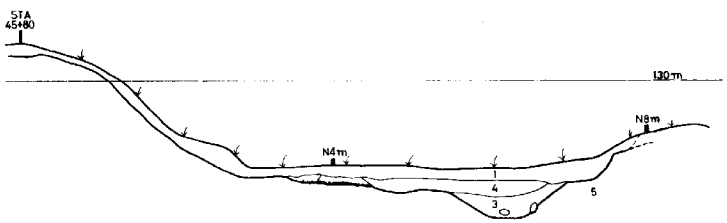


1．黄褐色土層（表土）
2．明茶褐色土
3．黒色土
4．茶褐色粗砂
5．茶褐色土
6．黒褐色土
7．黒色土（地山）
8．黄色砂礫（地山）
9．黄褐色土
10．暗黄色土混り砂利

第５５図　２区Ｂ断面 $\left(S=\frac{1}{80}\right)$



第５６図　３区Ａ断面 $\left(S=\frac{1}{80}\right)$

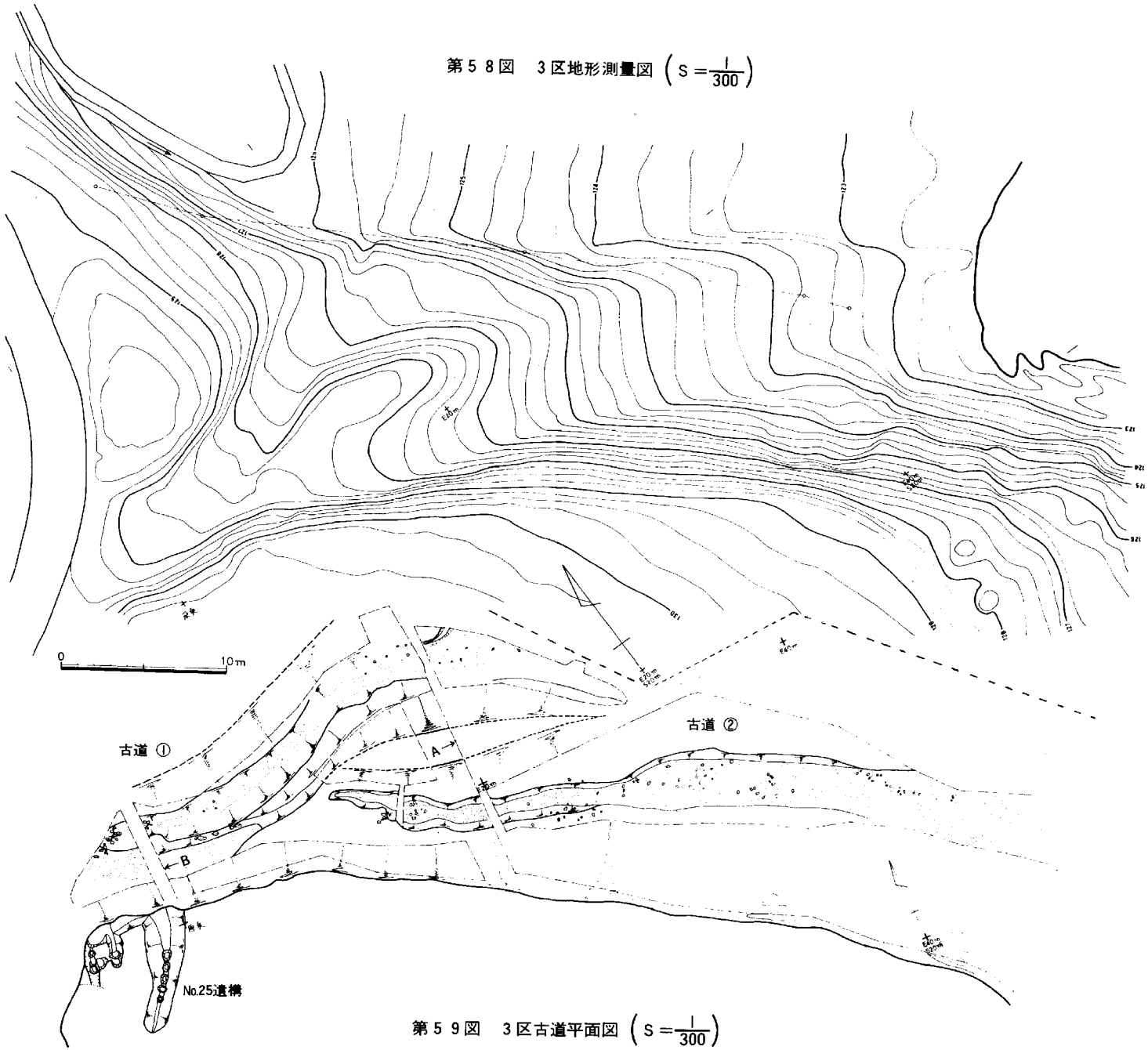


第５７図　３区Ｂ断面 $\left(S=\frac{1}{80}\right)$

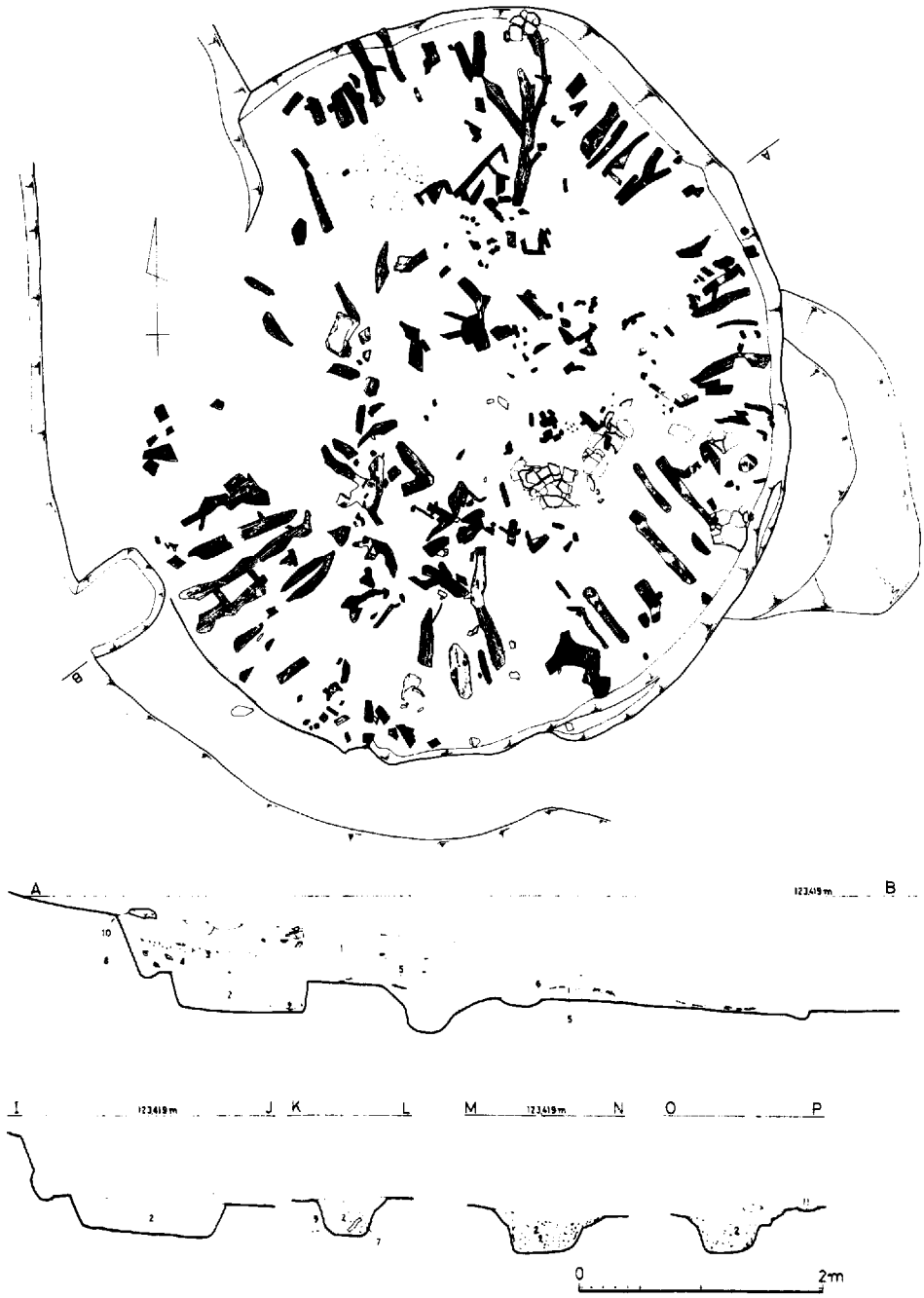
３区Ａ・Ｂ断面

1．黄褐色土層(表土)
2．淡茶褐色土
3．茶褐色土
4．暗茶褐色土
5．黄色砂礫、くされ石の地山

第５８図　３区地形測量図 $\left(S=\frac{1}{300}\right)$

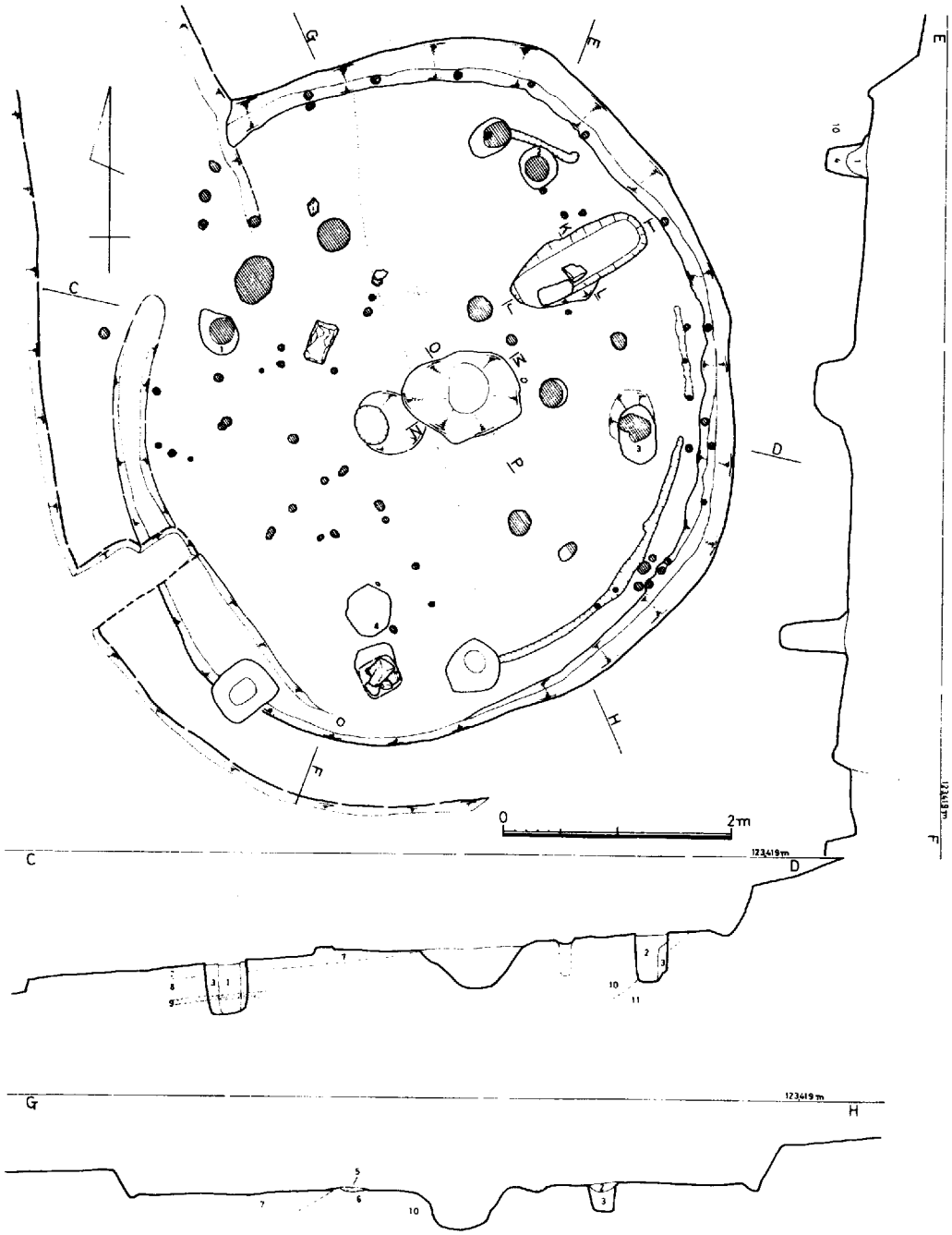


第５９図　３区古道平面図 $\left(S=\frac{1}{300}\right)$



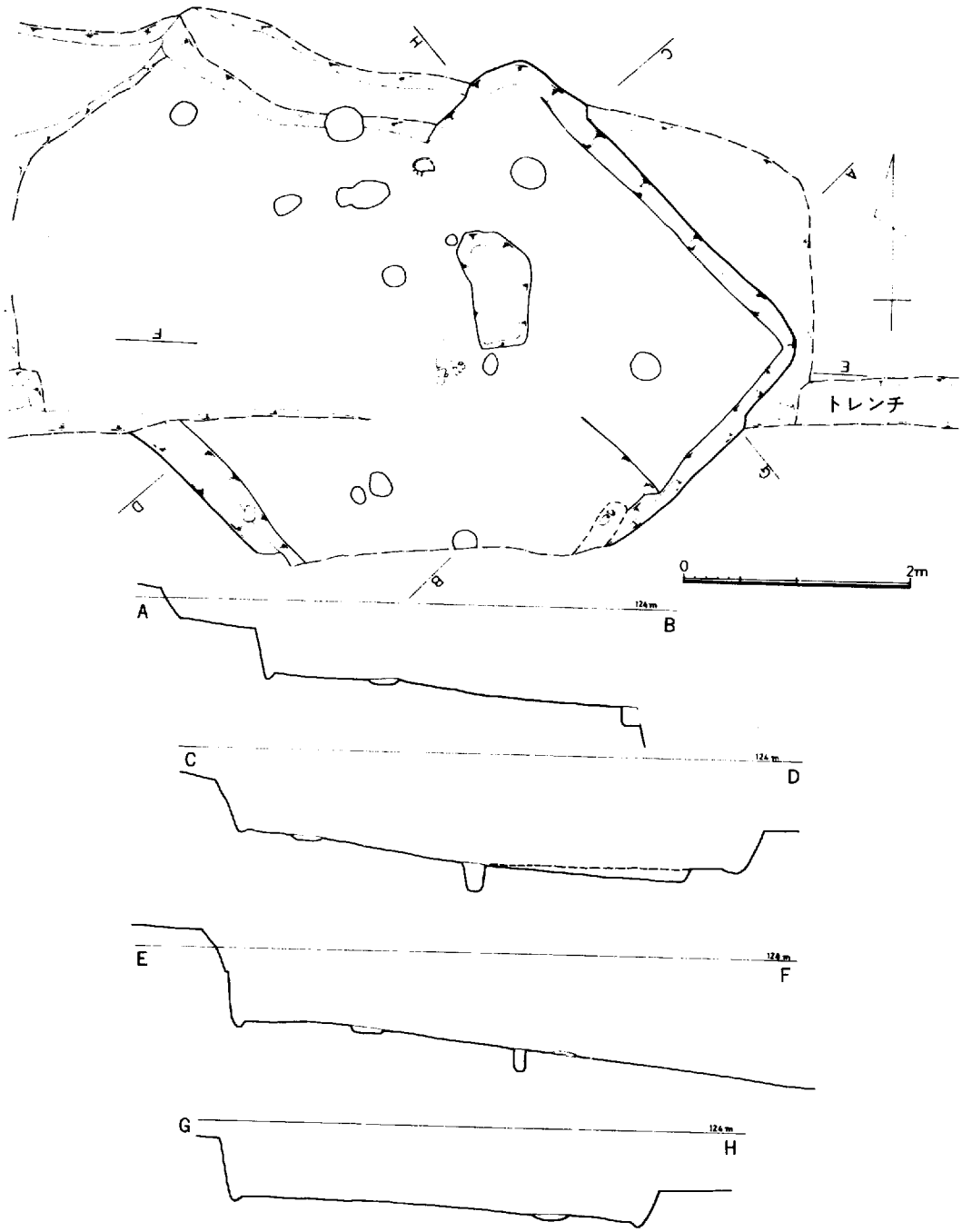
第６０図　２区No.10住居址炭化材 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

1．黒褐色粘土
2．炭混り黒褐色粘土
3．淡黄褐色土ブロックが多い
4．淡黄褐色土
5．炭化材
6．焼土．赤色
7．茶色粘土
8．淡黄褐色土（地山）
9．茶色粘土角礫混り（地山）
10．赤褐色に焼けた土
11．炉址

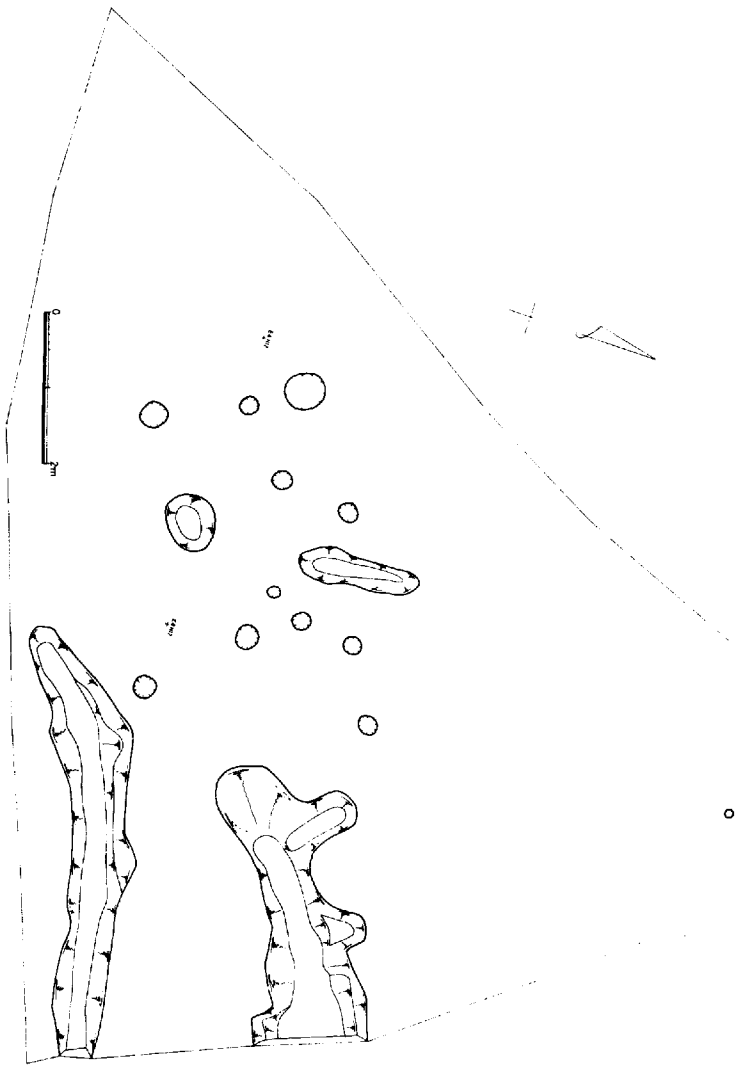


1．黒褐色土
2．炭混り黒褐色土
3．茶褐色土
4．黒色土混り茶色土
5．采色、やや暗褐色気味
6．ややうすい赤色
7．黒色土層
8．暗茶褐色土
9．鉄分集積層
10．茶色土
11．茶色粘土

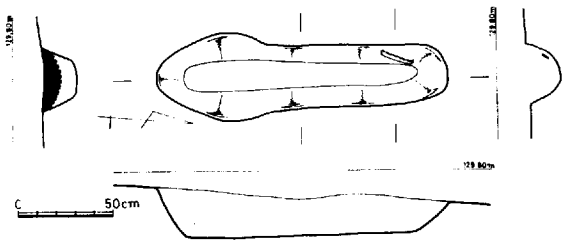
第61図　2区No.10住居址掘り上り $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



第６２図　２区No.11住居址（S＝1/60）

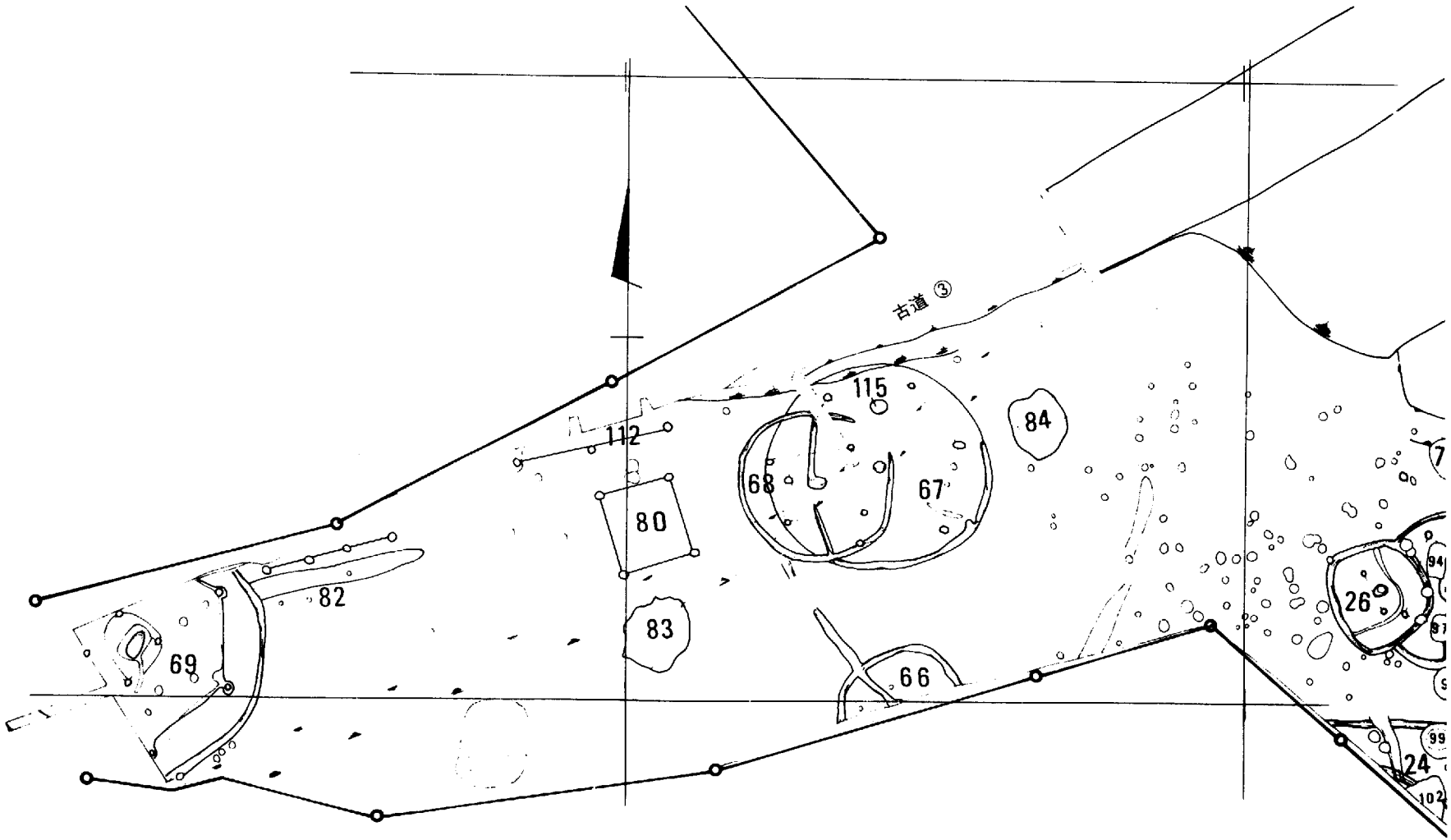


第６３図　３区北端部平面図 $\left(S=\frac{1}{100}\right)$

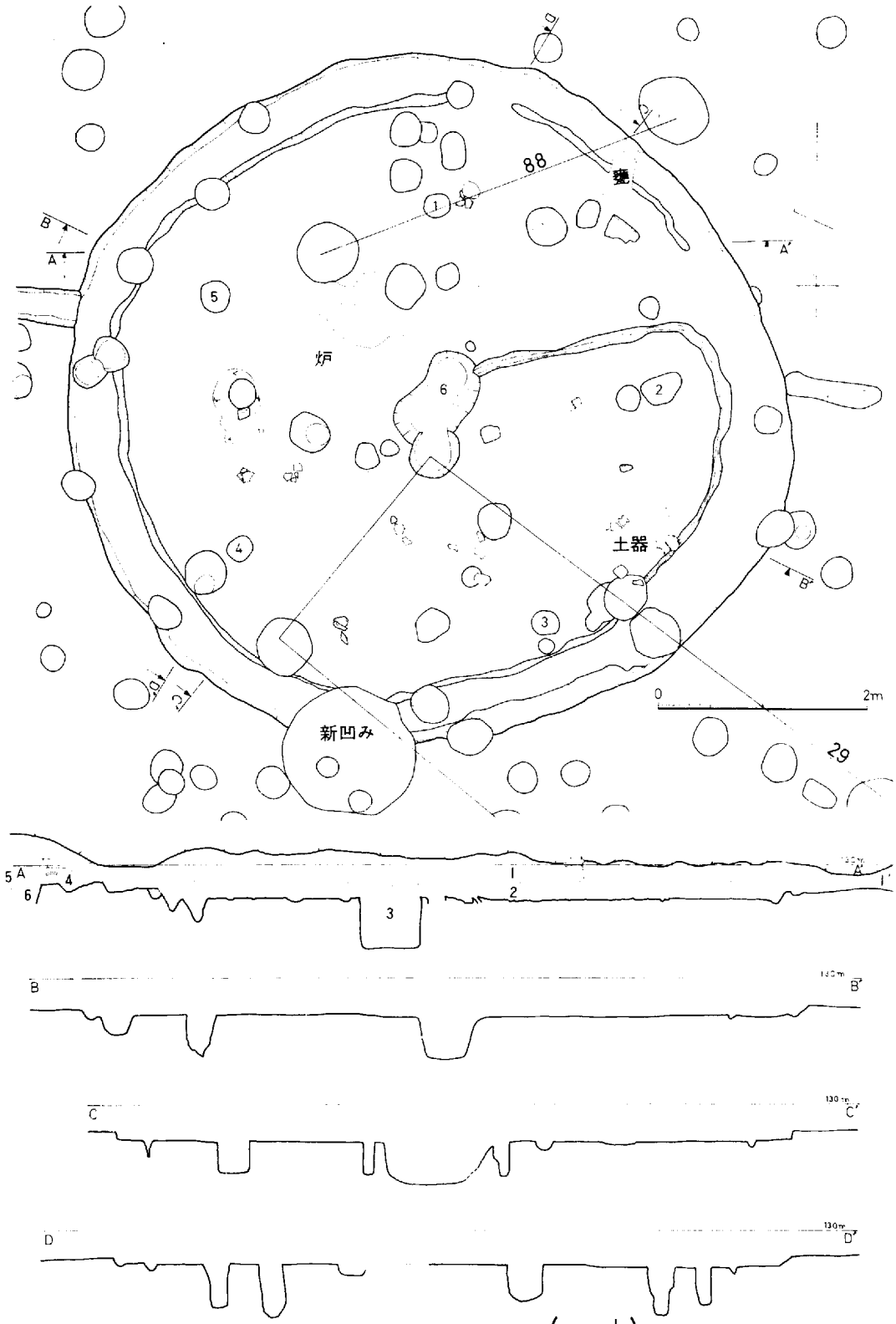


第６４図　３区No.81遺構 $\left(S=\frac{1}{40}\right)$

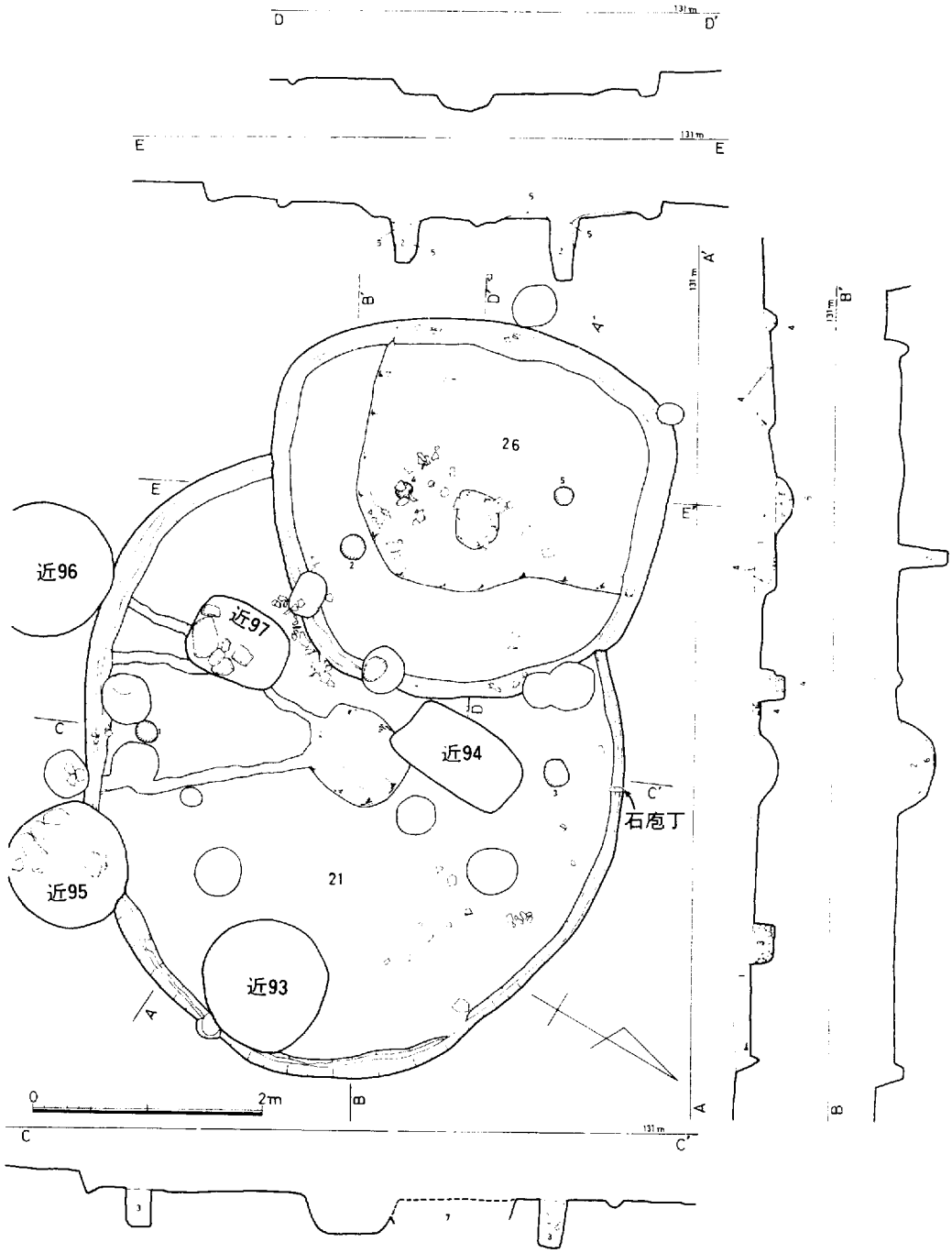
第65図　4区遺構配置図①



第６６図　４区遺構配置図 ②　Ⅰ地点 $\left(S=\frac{1}{200}\right)$

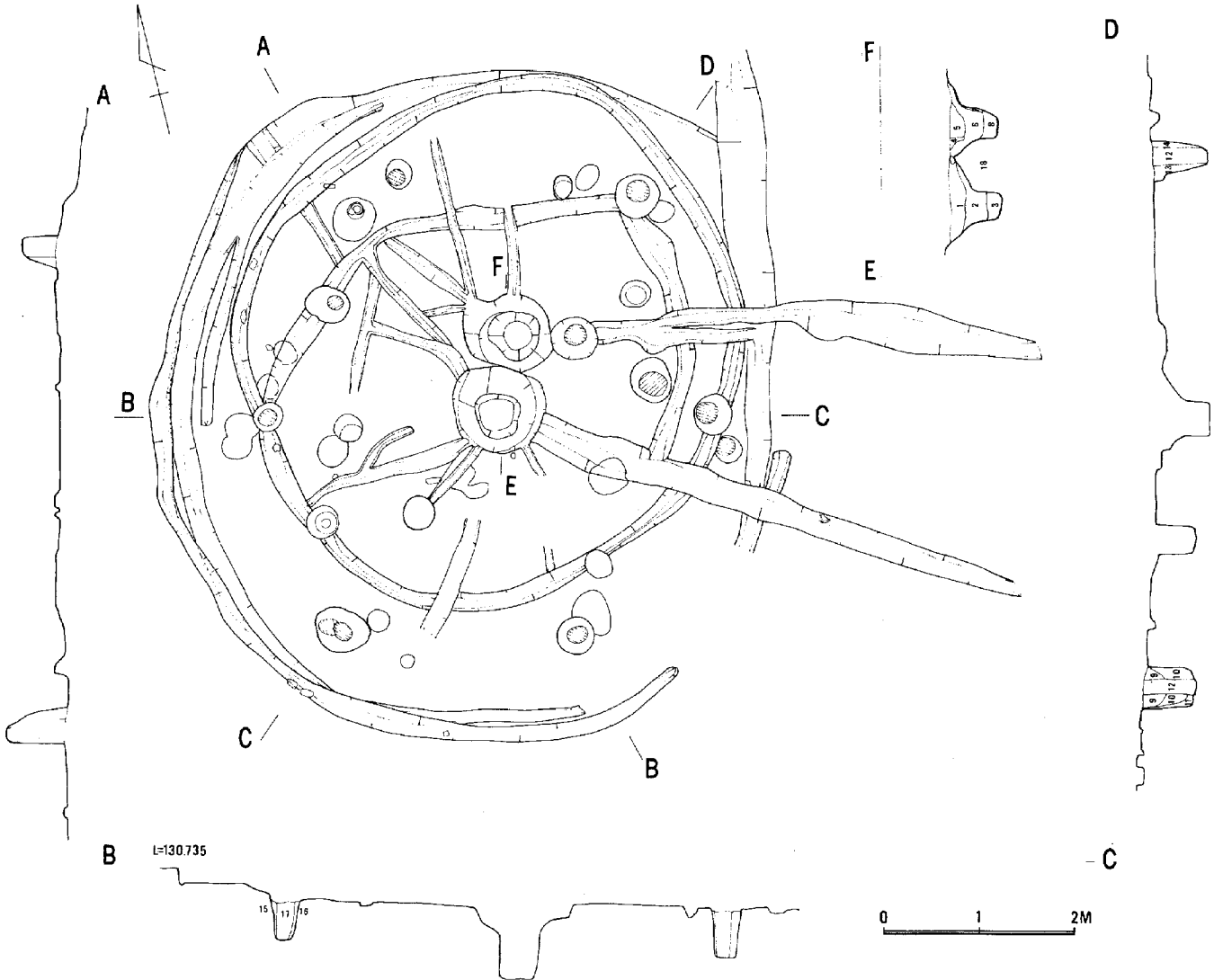


第６７図　４区No.２住居址（S＝$\frac{1}{60}$）

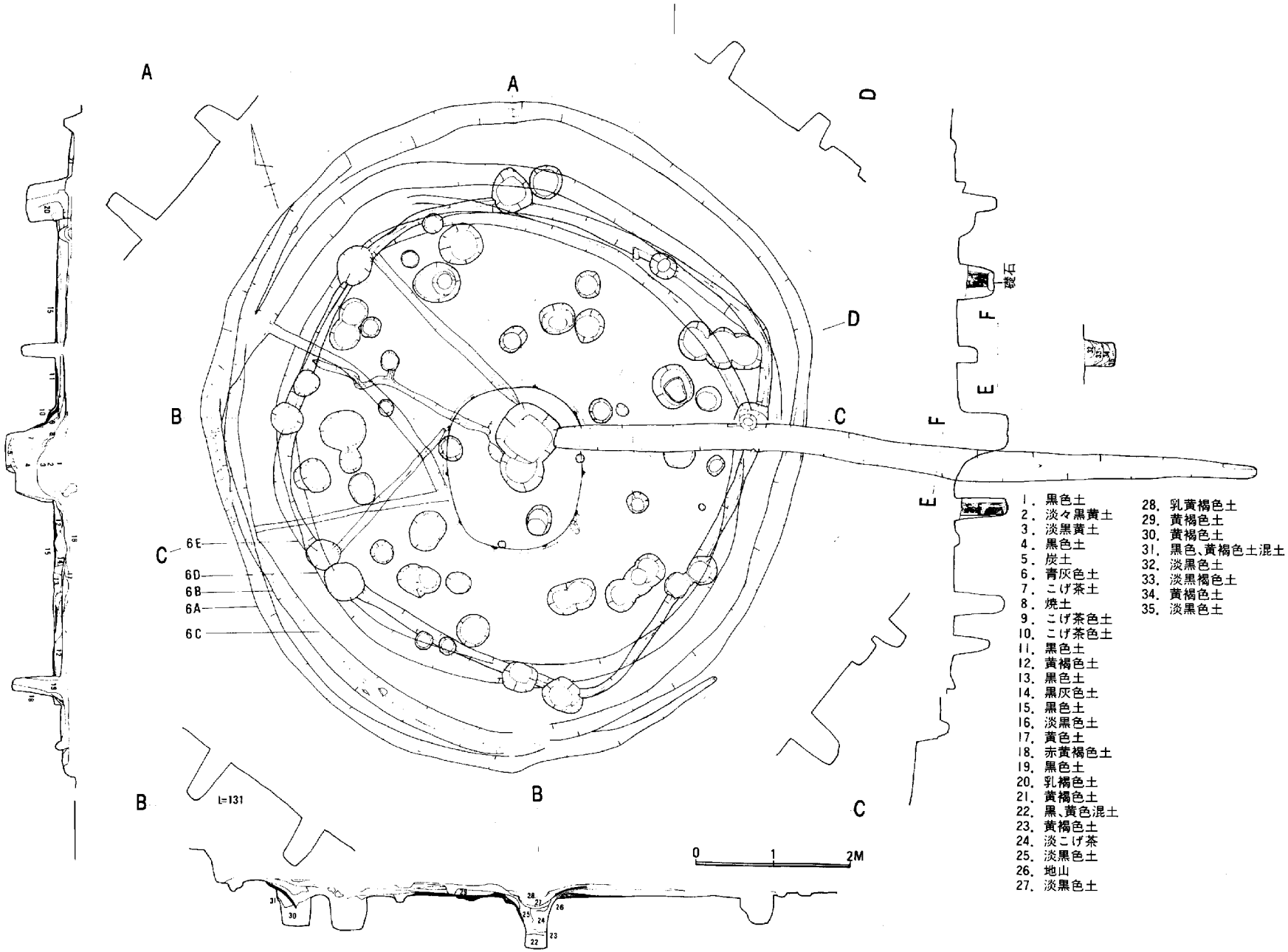


第６８図　４区No.21．26住居址 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

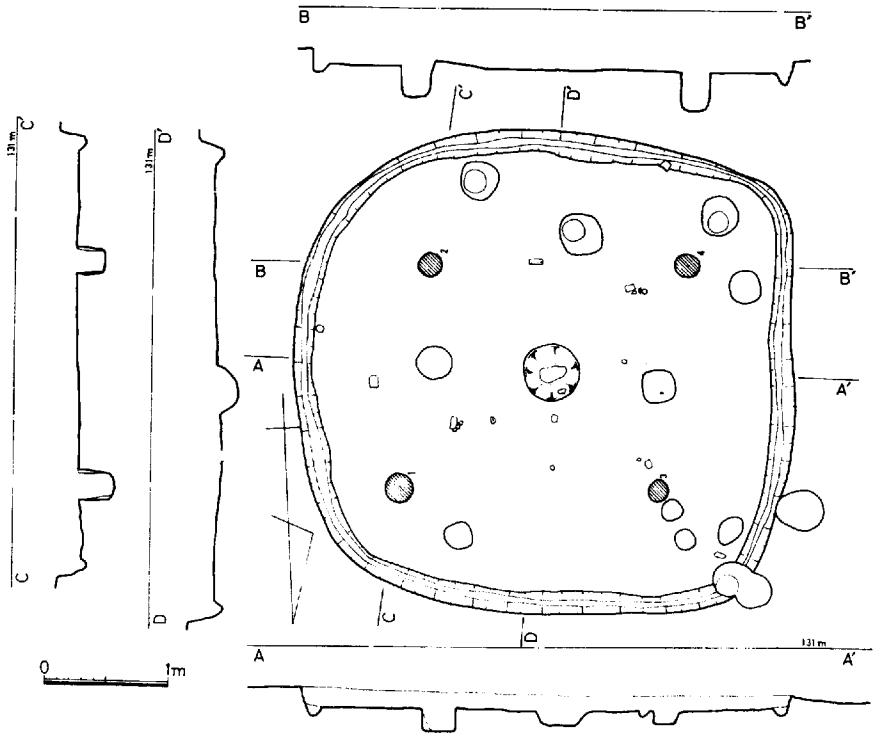
1．黒茶褐色土
2．黒色土
3．黒色土に黄色土細粒混り
4．黄色土
5．黄褐色土
6．暗灰褐色土（炭混り）
7．新しい墓穴



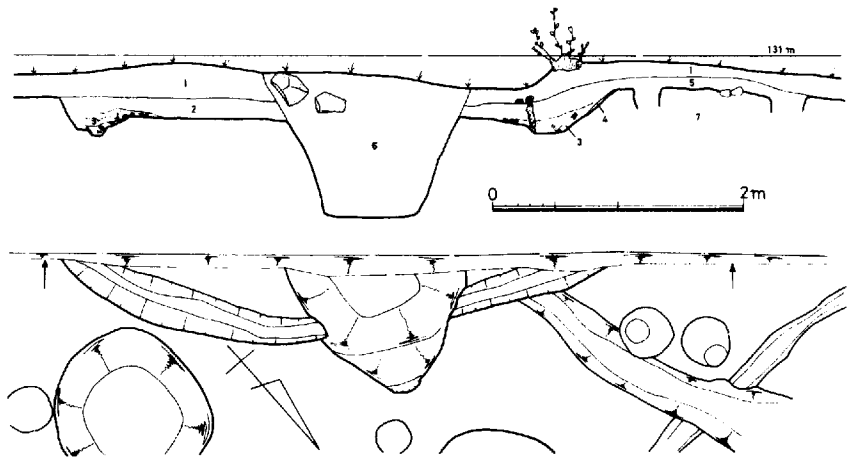
第６９図　No.５住居址（S＝$\frac{1}{60}$）



第７０図　No.６住居址 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

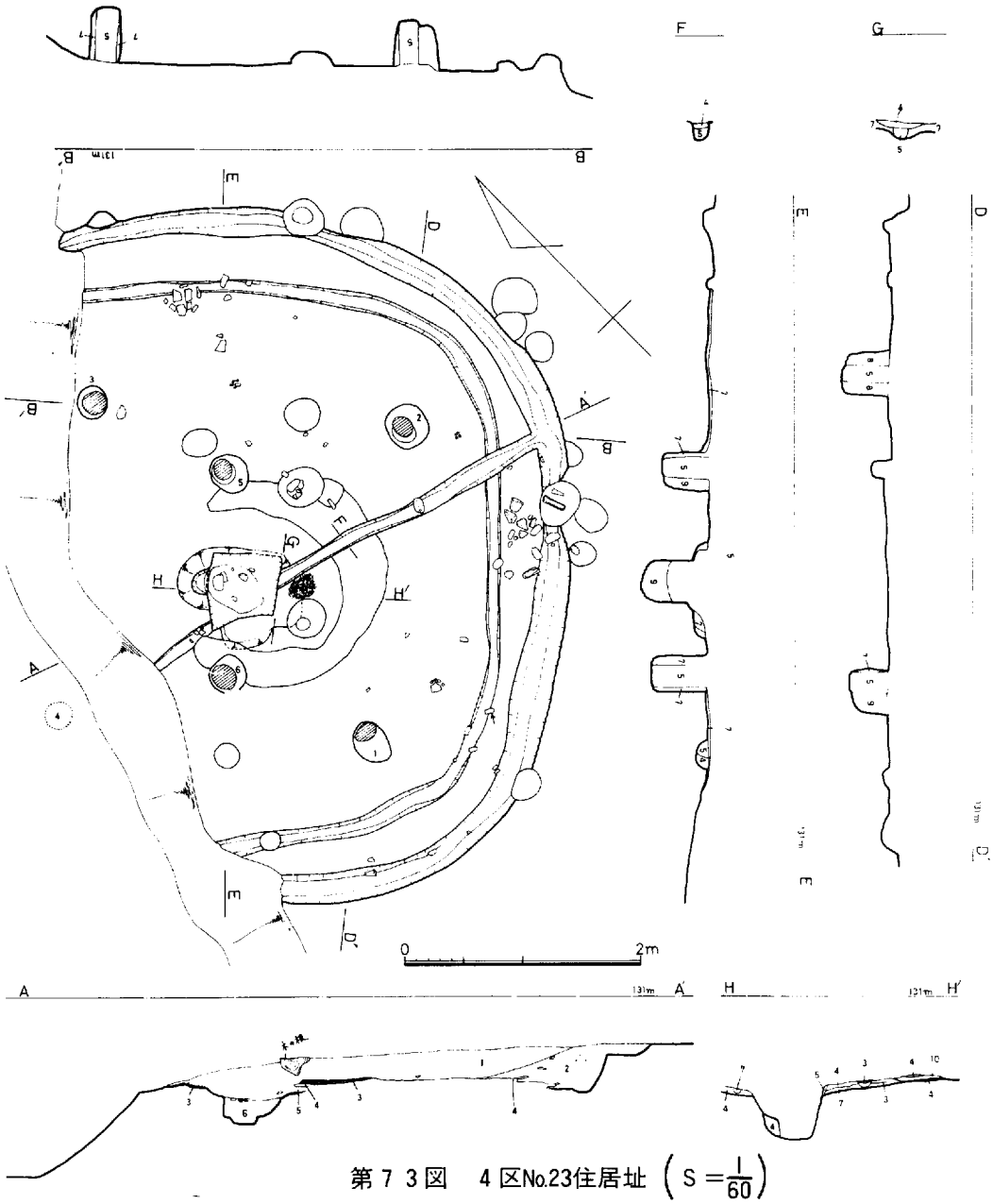


第７１図　４区No.22住居址 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



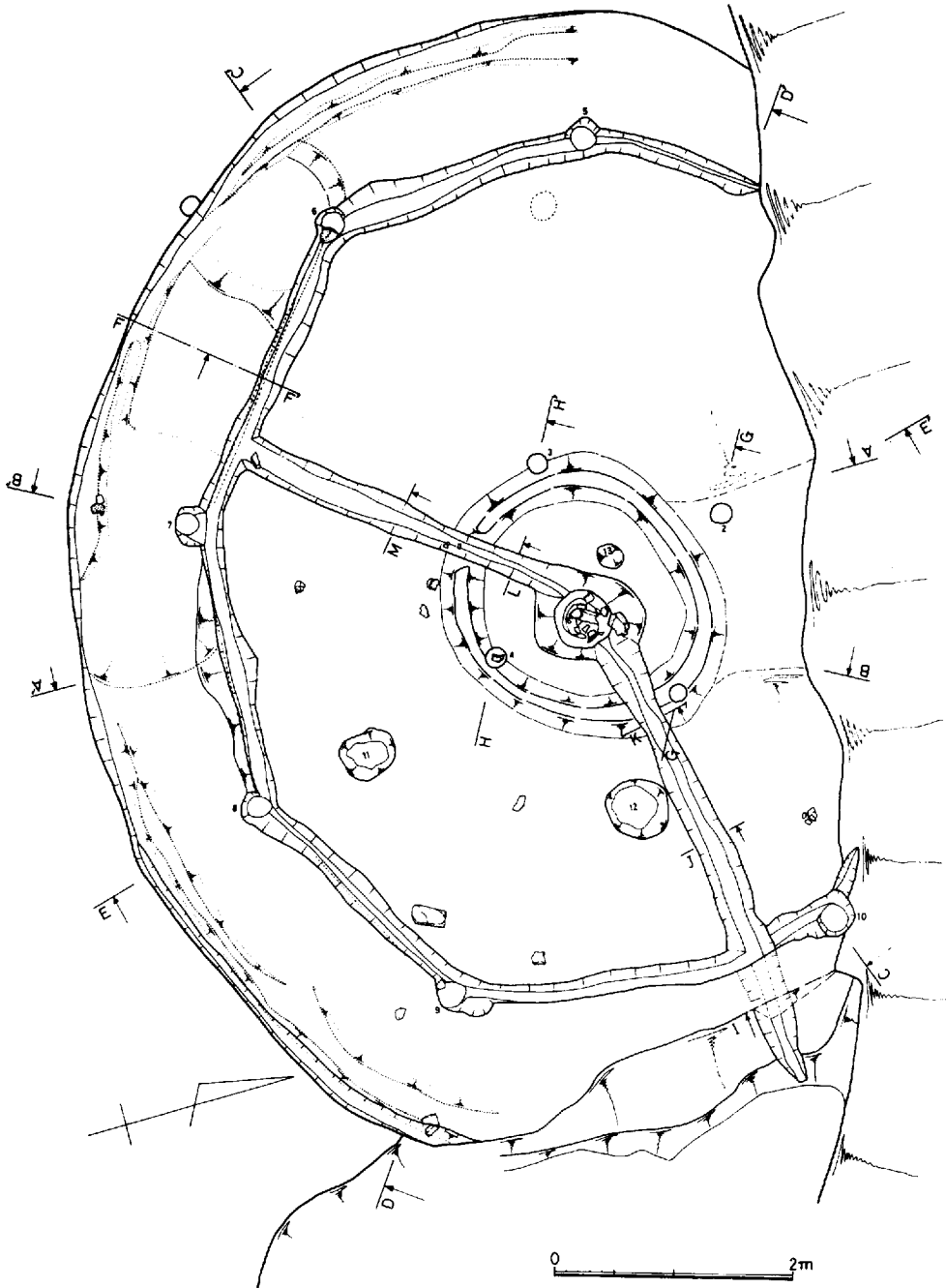
第７２図　４区No.24住居址　$\left(S=\frac{1}{60}\right)$

１．茶色土
２．黒褐色土
３．赤色の小粒子．焼土が多い．炭あり
４．赤色に焼けた壁
５．淡黒色土
６．新しい墓．黄色土粒と茶色土混り
７．黄色土（地山）



第７３図　４区No.23住居址 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

1．暗茶色土
2．暗茶色土(黄色土の小さい粒子混り)
3．炭
4．黄色土
5．黒褐色土
6．黒茶色粘土（小さい炭混り）
7．黄色黒色混り土
8．黄褐色土
9．黄灰色粘土(小さい炭混り)
10．赤褐色土（焼土）
↑印は鉄斧

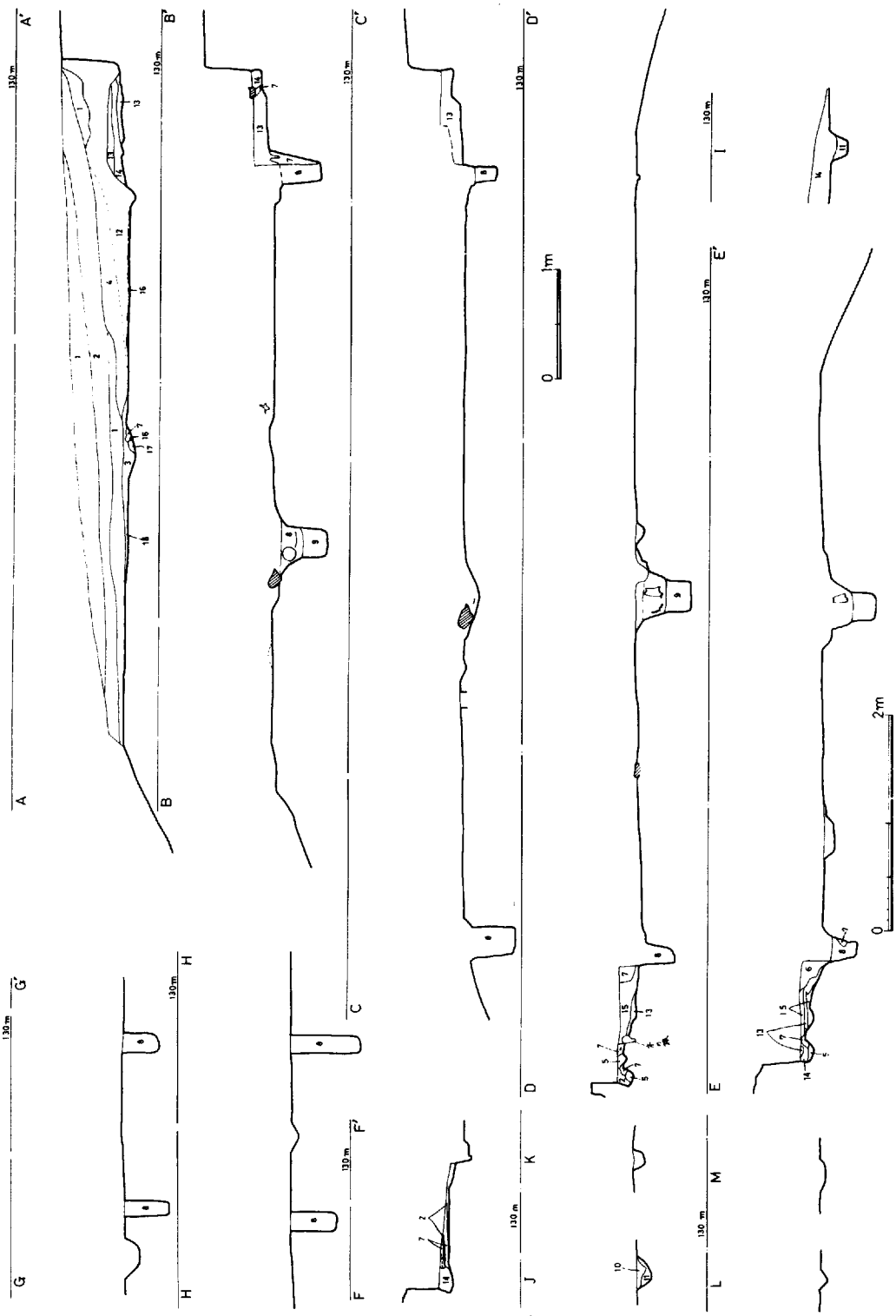


第７４図　４区No.27住居址 ① 平面図 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

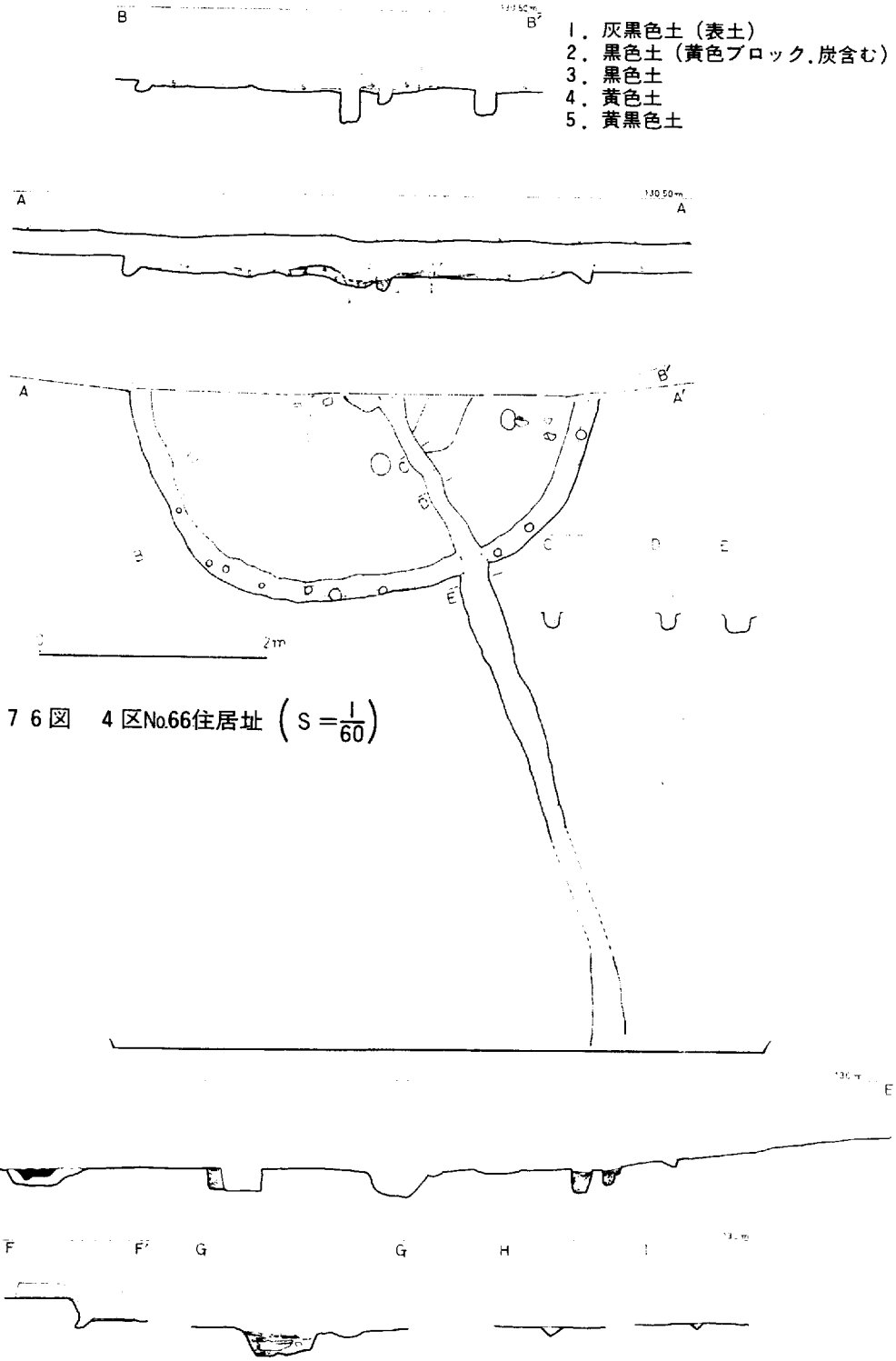
第75図　土層

1．黒茶色土
2．黒色土
3．黒色灰、墨層
4．茶色土
5．茶褐色土
6．茶褐色土に黒や黄色が少し混る
7．黄色土
8．灰褐色土（灰混り）
9．黄色粘土（灰混り）
10．暗灰色土（茶褐色土混り）
11．黄色土混り灰色粘土
12．黄色土3、茶色土6、5、黒色土0、5の割合でバラバラっとした感じで埋っている段の上には黄色が多い。
13．黄色土9、黒色土0、3茶色土0、7、混在全体は黄色
14．黄色土2、黒色土3、5、茶色土4、5、混在全体は黒褐色
15．黒色土に黄色土少し混る
16．炭
17．灰
18．砂利（２～５mm程度の大きさ）

たたきしめた土

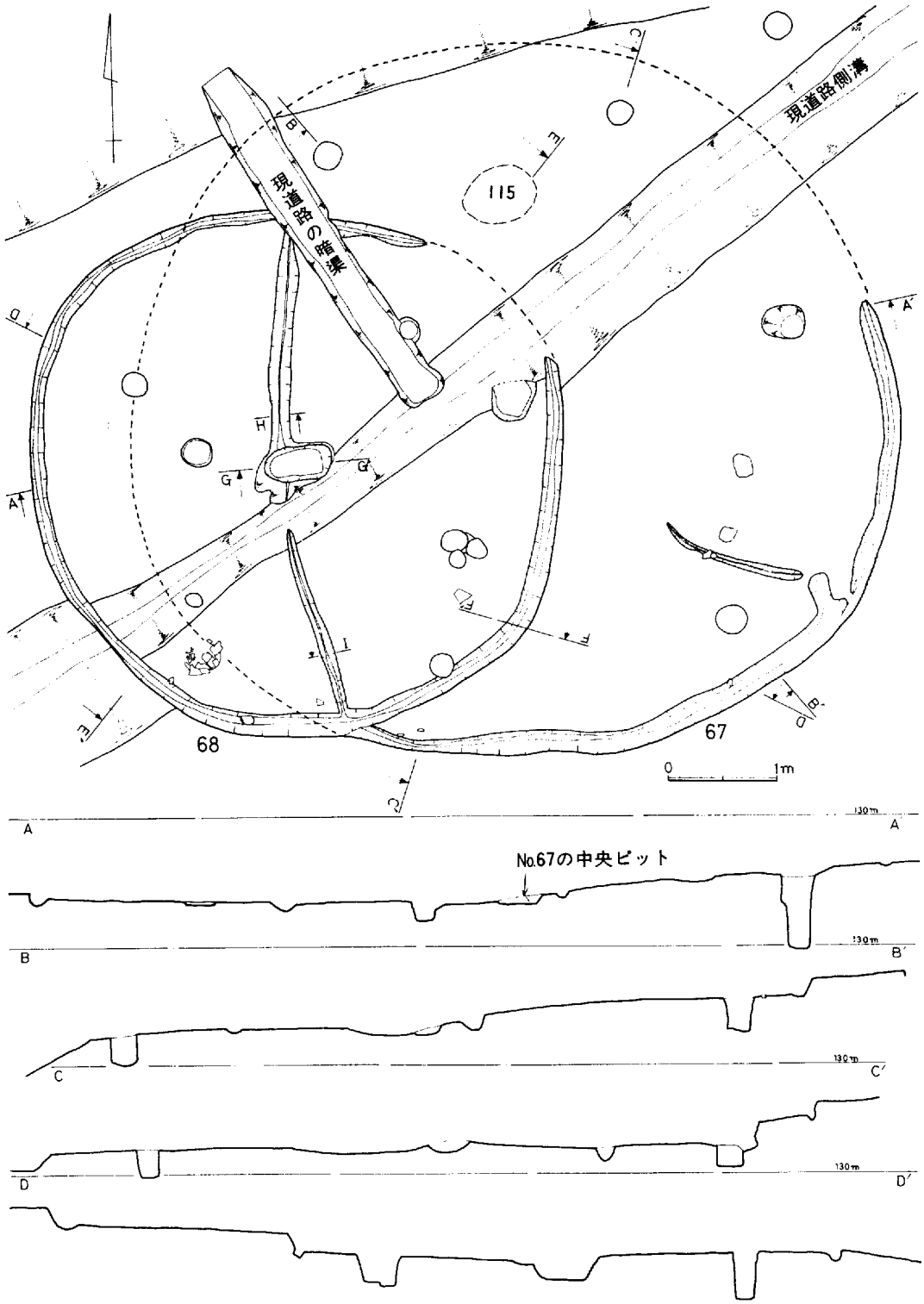


第75図　4区No.27住居址②断面図（S＝1/60）

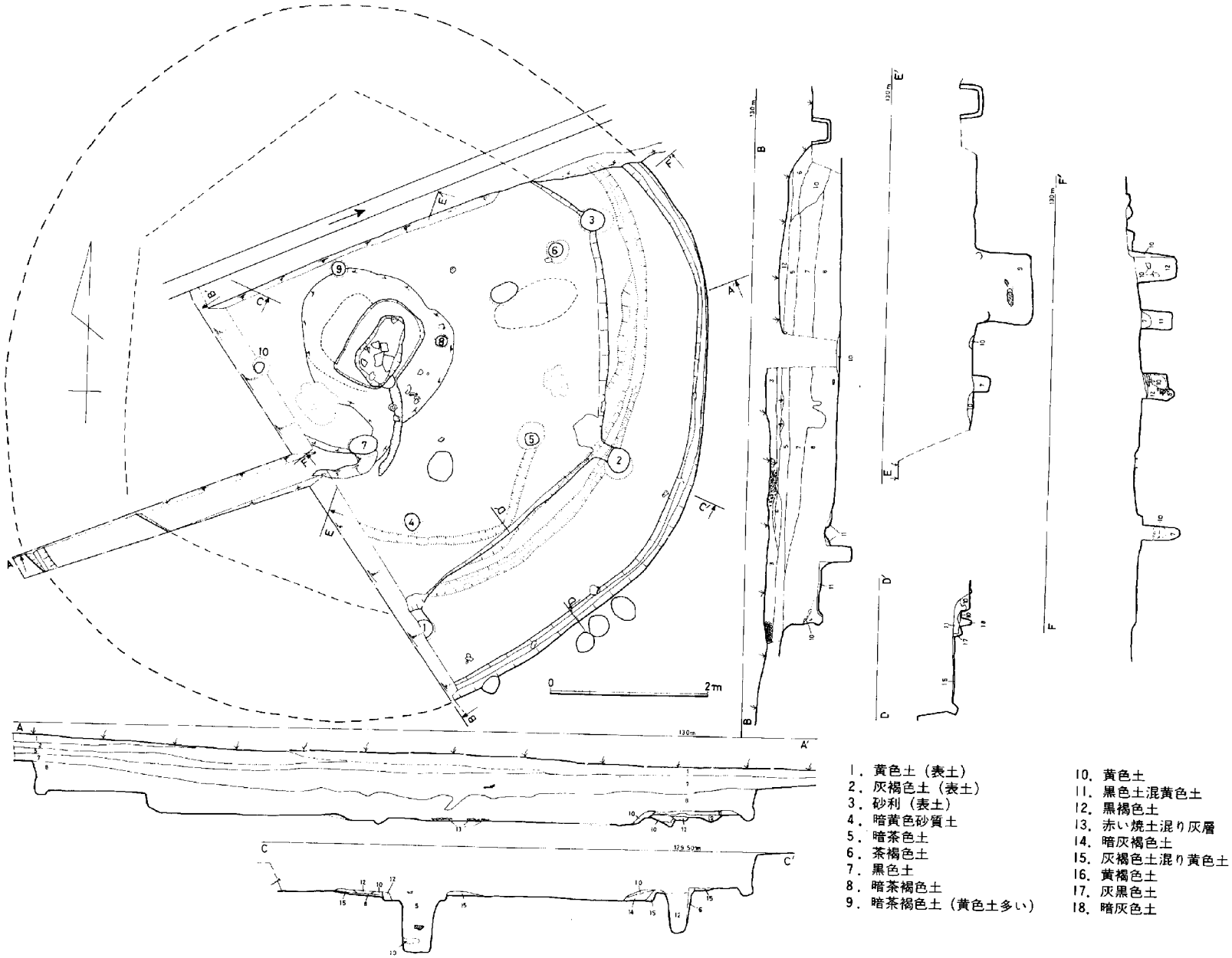


第７６図　４区No.66住居址 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

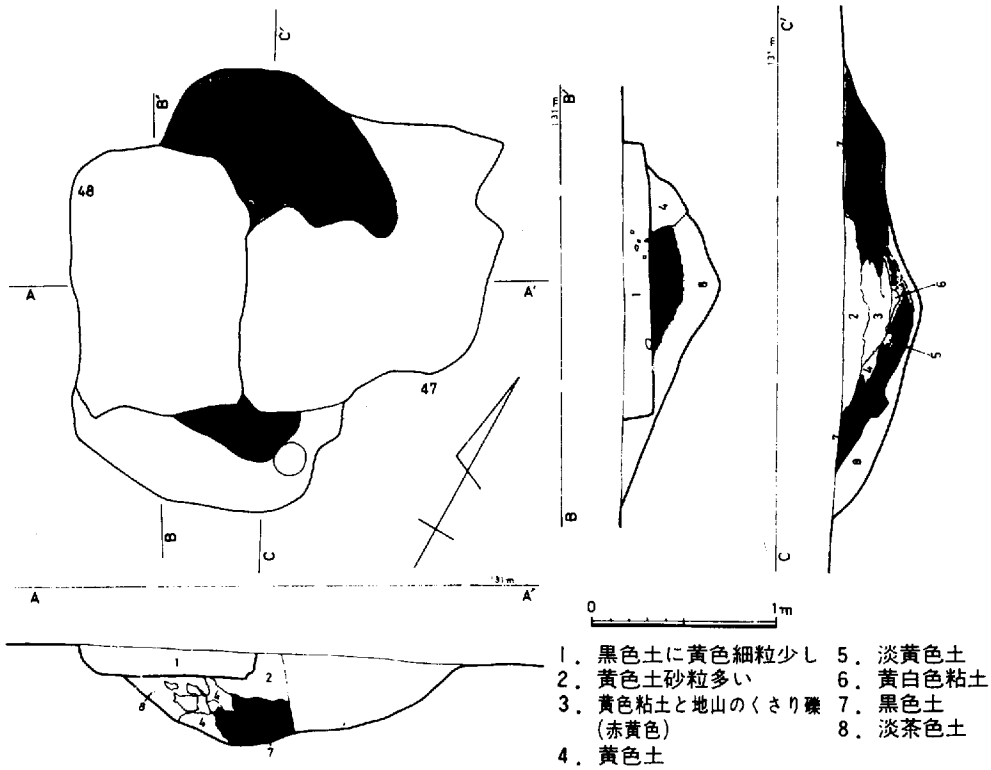
第７７図　４区No.67．68住居址 ② 断面図 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



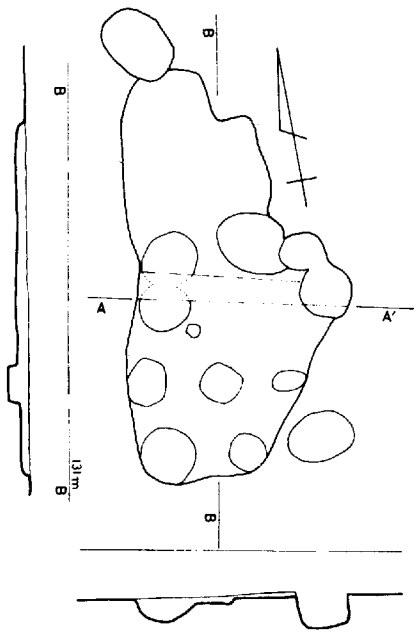
第７８図　４区No.67．68住居址 ①（No.115土坑）（S＝1/60）



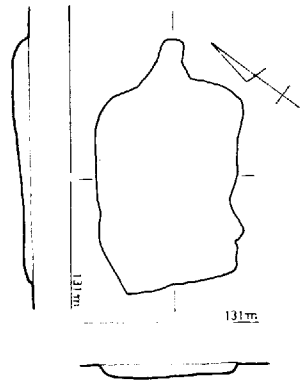
第７９図　４区No.69住居址



第８０図　４区No.47，48土坑

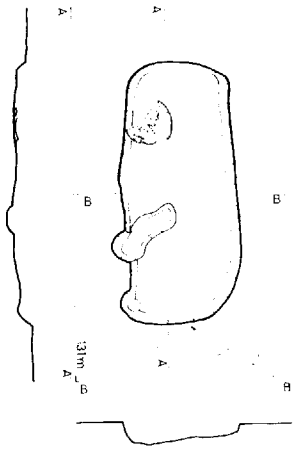


第81図　４区No.49土坑

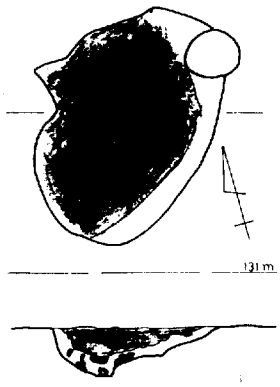


第８２図　４区No.50土坑

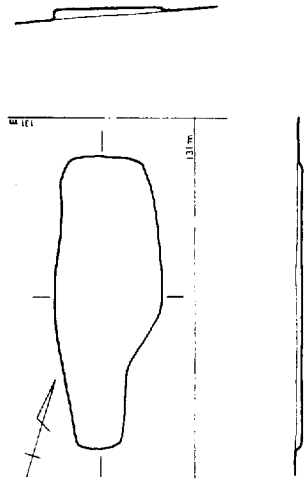
$\left(S=\frac{1}{40}\right)$



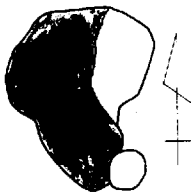
第８３図　４区No.51土坑墓



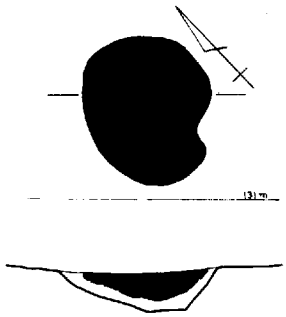
第８４図　４区No.52土坑



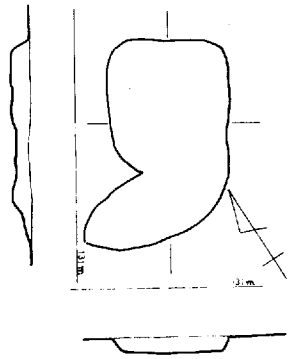
第８５図　４区No.53土坑



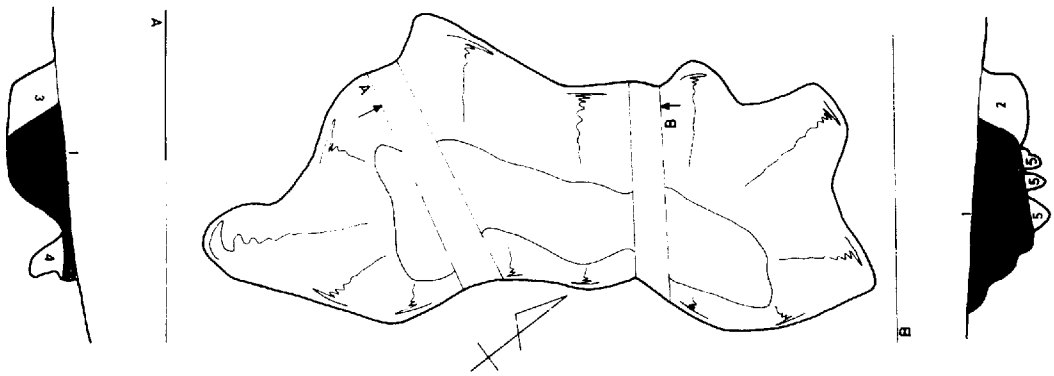
第８６図　４区No.54土坑



第８７図　４区No.55土坑



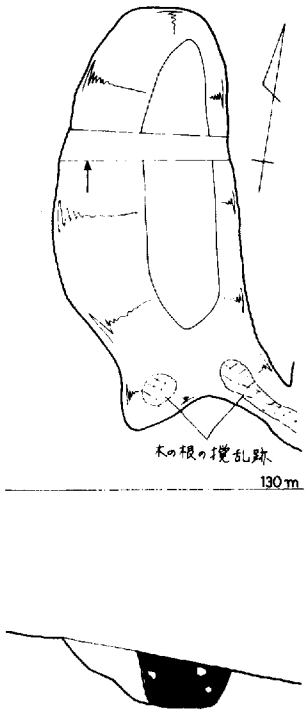
第８８図　４区No.56土坑



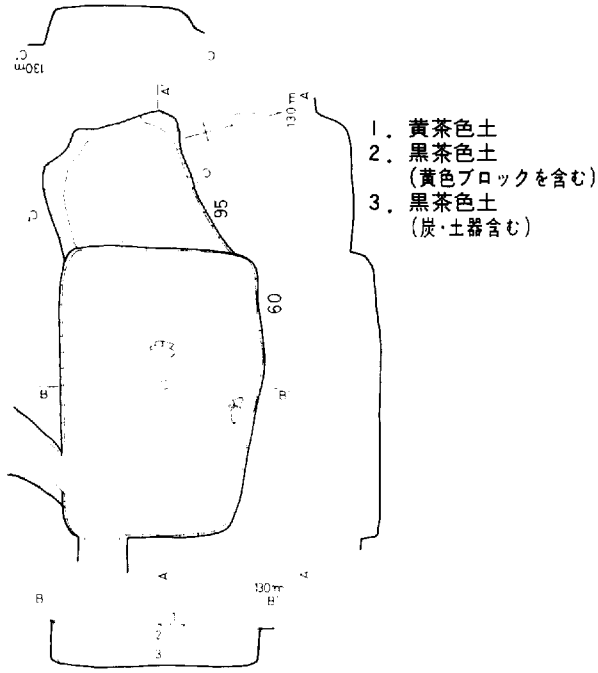
１．黒色土
２．暗茶色土
３．黄色土
４．木の根だろう黒色土と茶色土の粒が混在
５．灰黒色土
※地山は礫混り黄色土

(S＝1/40)

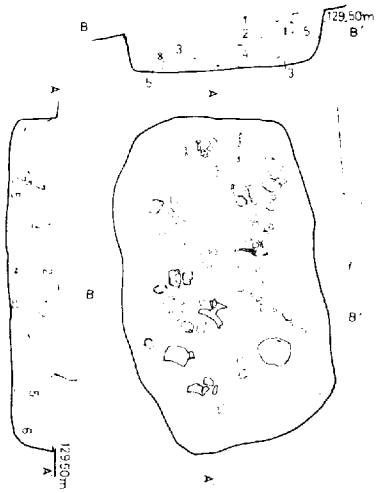
第８９図　４区No.57土坑



第９０図　４区No.58土坑

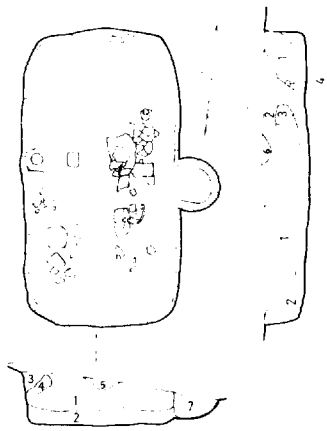


第９１図　４区No.60・95土坑墓



1．黒色土
2．赤褐色焼土
3．黒黄色（炭・土器あり）
4．黒色土（粘質・炭あり）
5．黒黄色土（炭黄色土含む）
6．黄黒色（流入ブロックあり）
7．灰黒色ブロック土
8．黄色ブロック

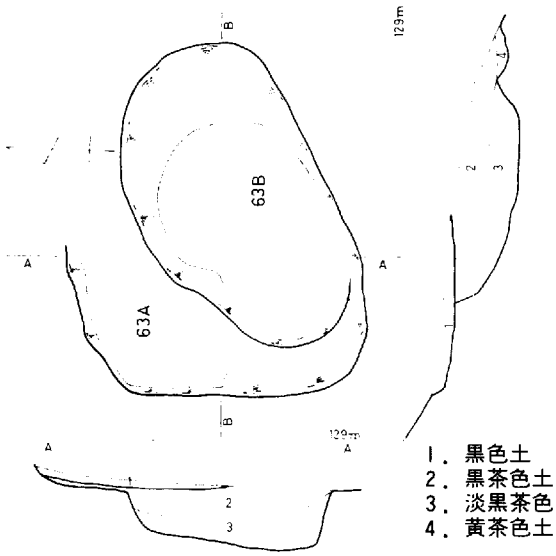
第９２図　４区No.61土坑墓



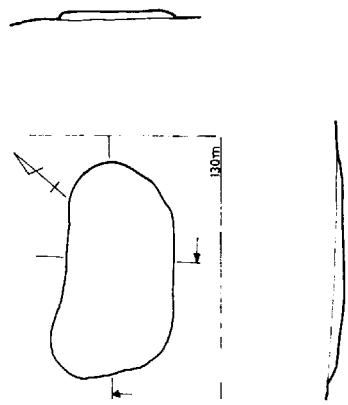
1．黒色土（焼土、土器、炭を含む）
2．淡黒茶色土（炭、黄色ブロックを含む）
3．茶黒色土
4．黄色ブロック
5．灰黒色土
6．灰茶色土
7．黒色土

第９３図　４区No.62土坑墓

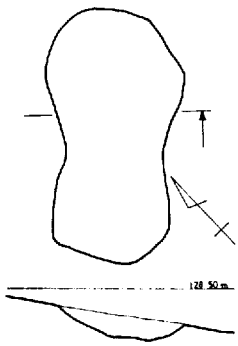
$S = \frac{1}{40}$



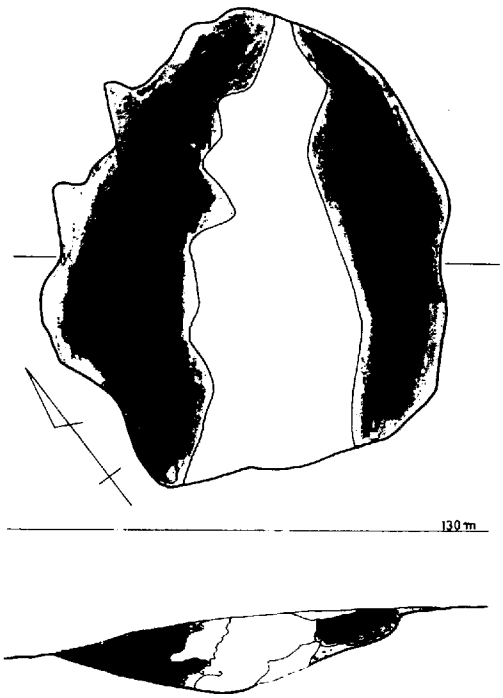
第９４図　４区No.63土坑



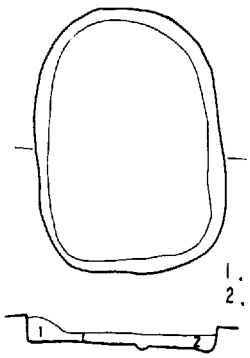
第９５図　４区No.64土坑



第９６図　４区No.65土坑

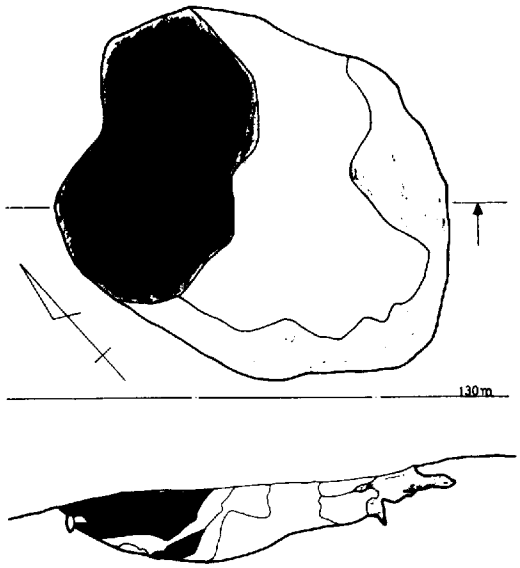


第９８図　４区No.83土坑

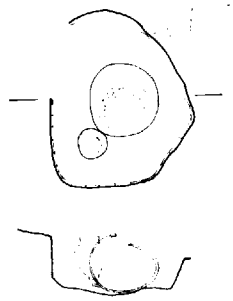


第９７図　４区No.70土坑

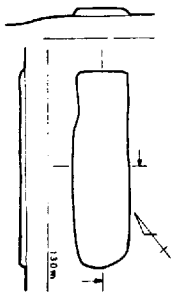
$\left(S=\frac{1}{40}\right)$



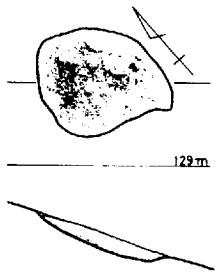
第９９図　４区No.84土坑



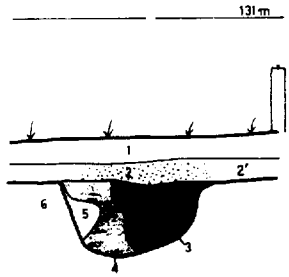
第１００図　４区No.96土坑



第１０１図　４区No.99土坑



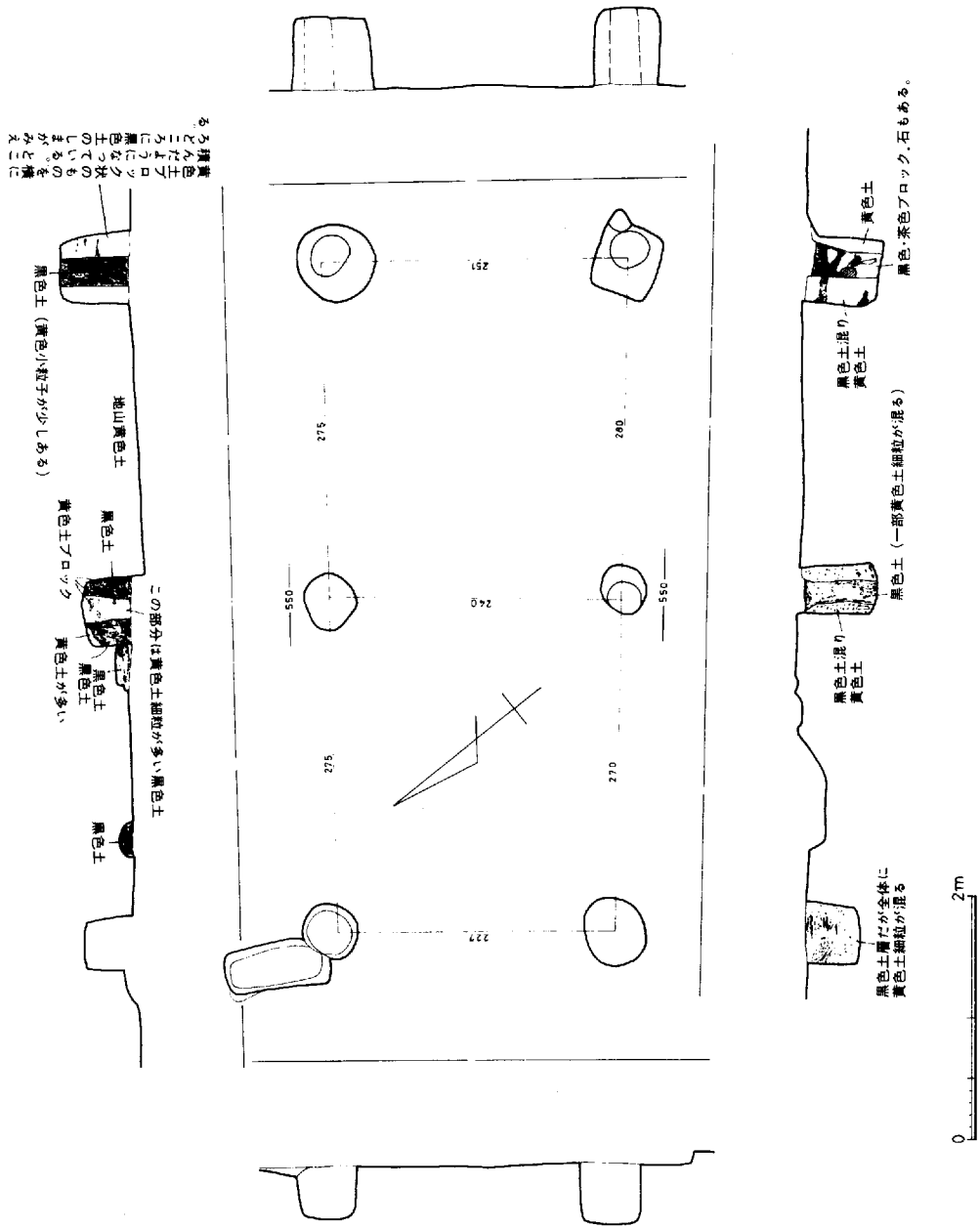
第１０２図　４区No.100 土坑



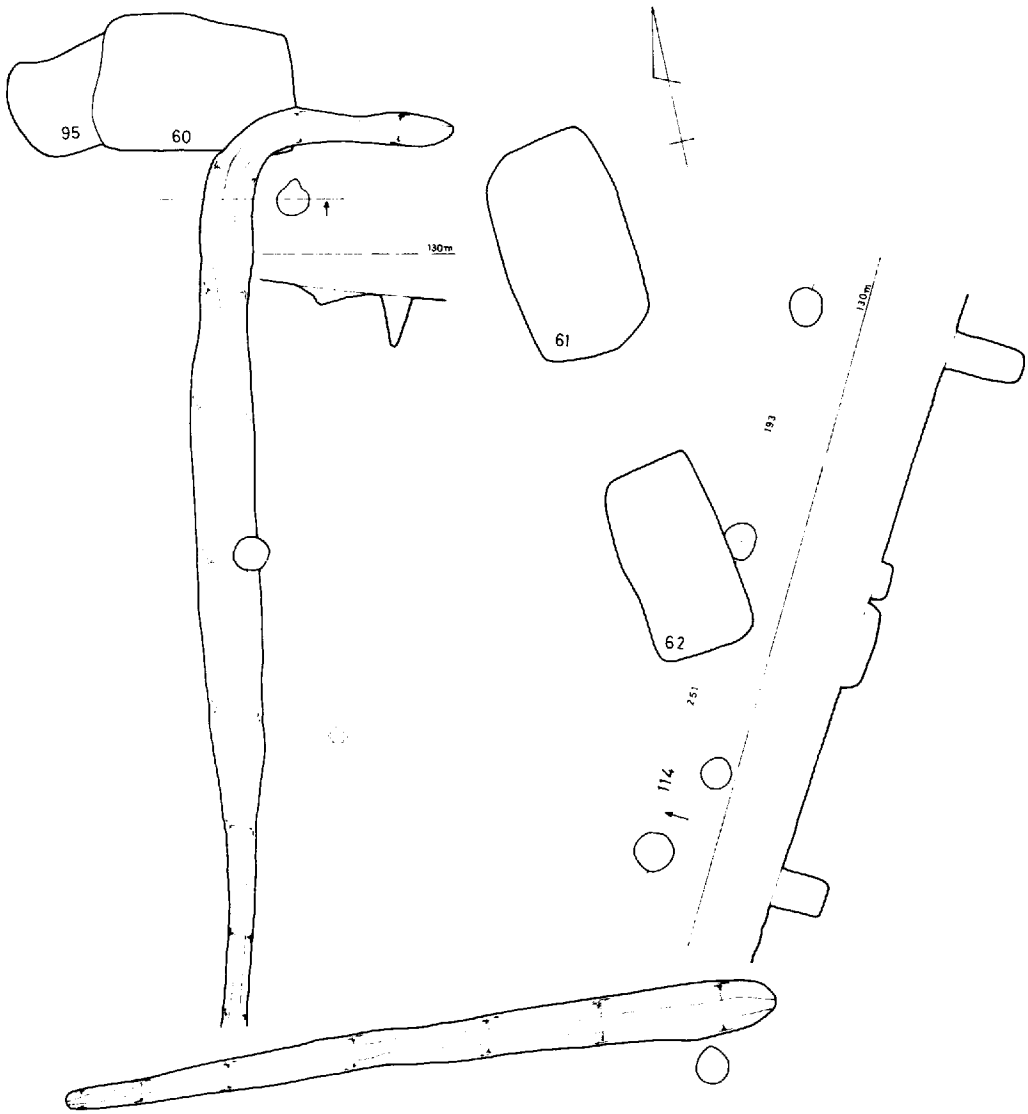
第１０３図　４区No.105 土坑

1．黄褐色土（表土）
2．黒色土混り黄褐色土
2′ 黄色粘土の小さいブロック混り黄褐色土
(2.2′とも上層の土が浮いて上の表土層に現われたもの)
3．黒色土
4．茶色土
5．明茶色土
6．黄色粘土，地山

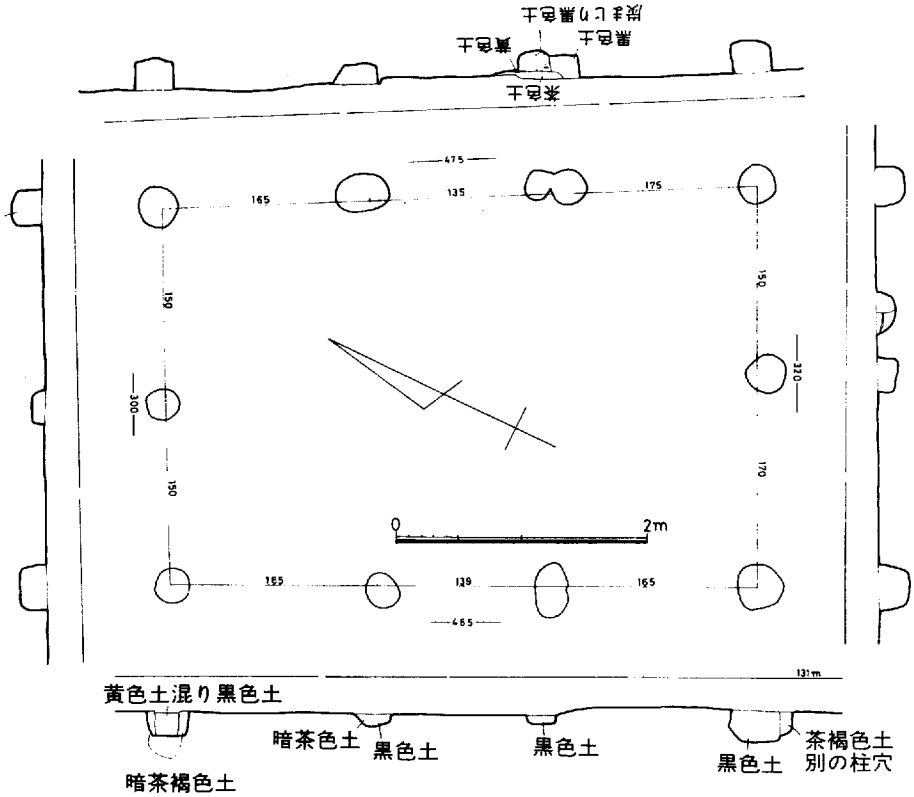
$\left(S = \frac{1}{40}\right)$



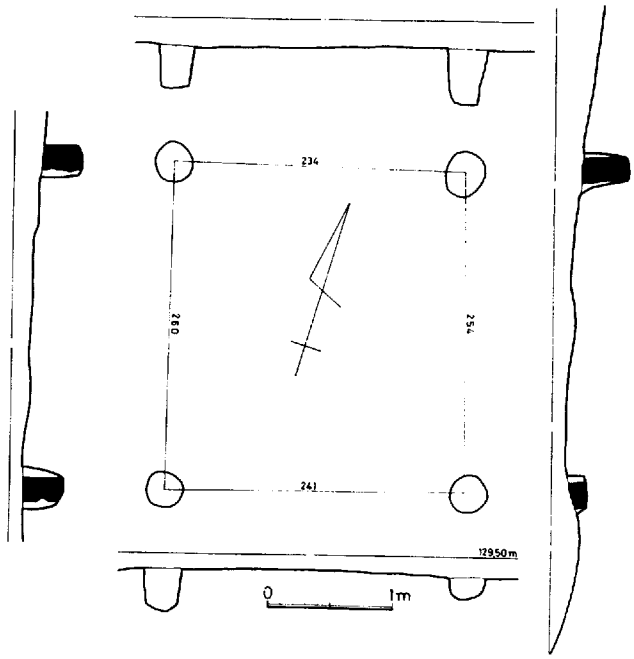
第104図　4区No.29建物（S＝1/60）



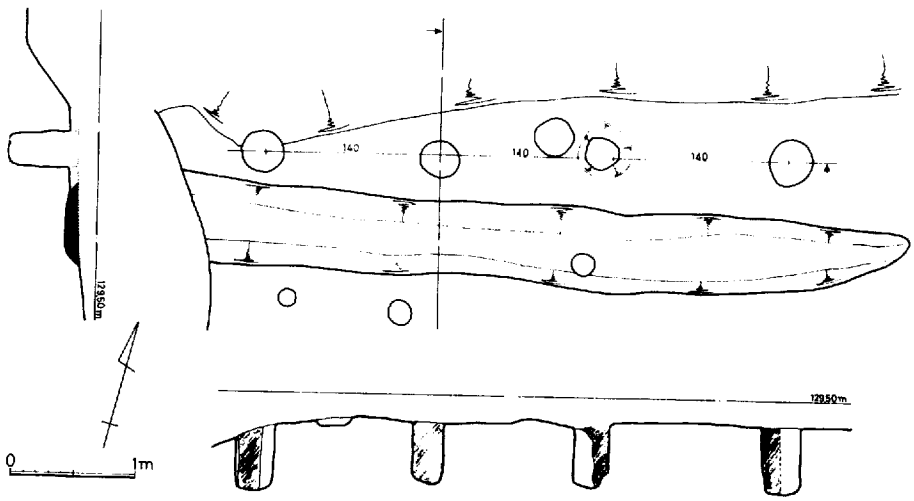
第１０５図　４区No.59遺構．No.114 柱穴列．その周辺 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



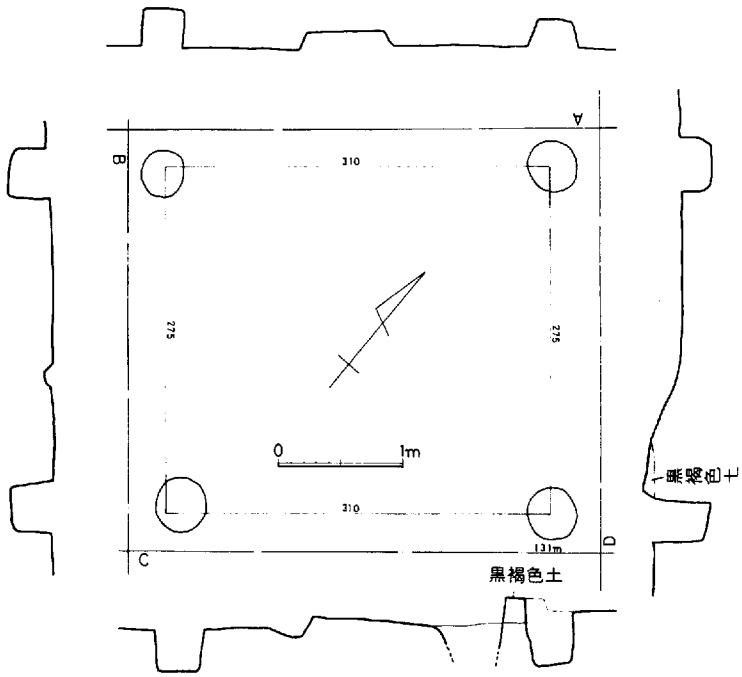
第１０６図　４区No.79建物 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



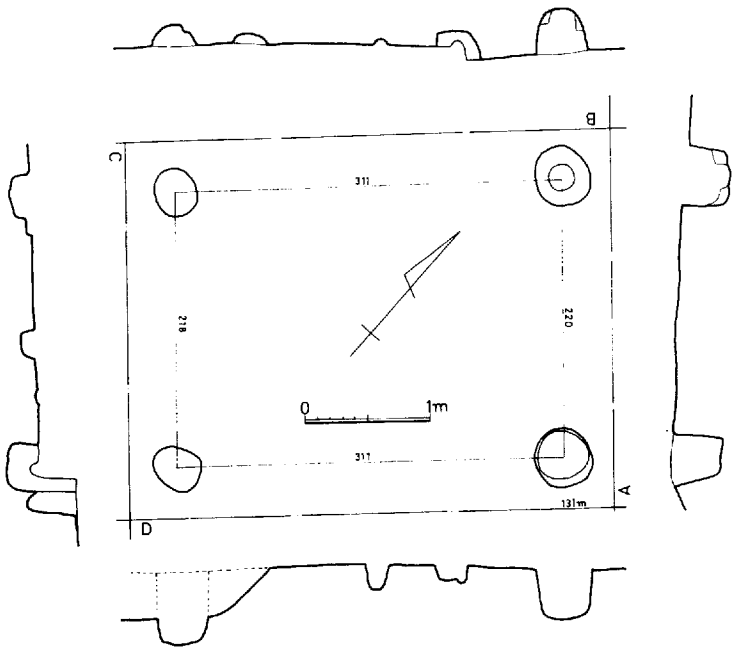
第１０７図　４区No.80建物 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



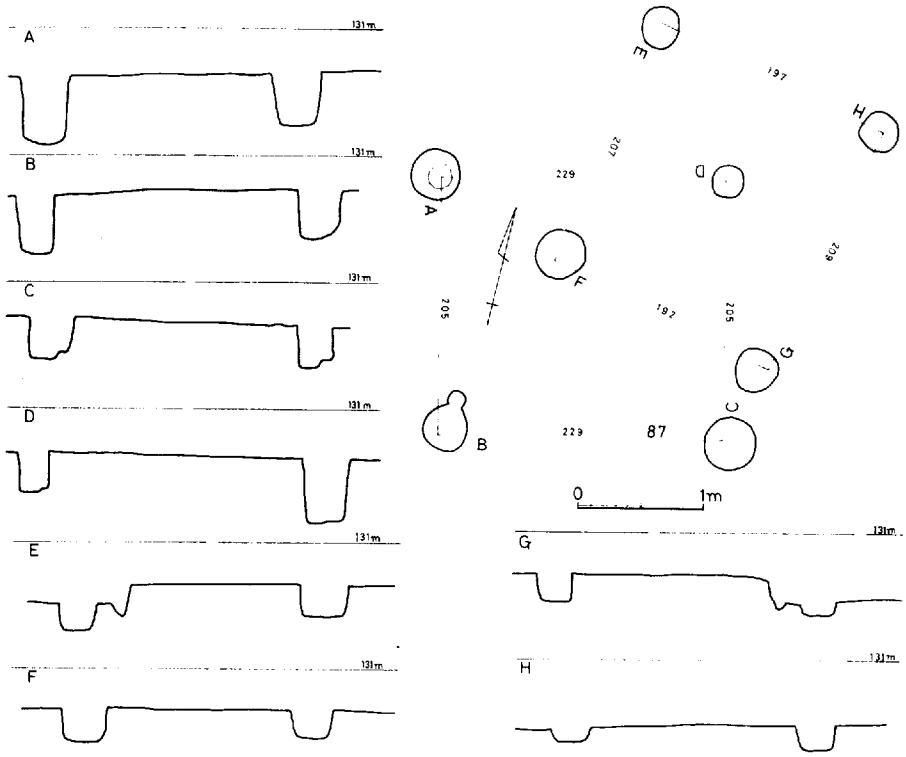
第１０８図　４区No.82建物 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



第１０９図　４区No.85建物 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

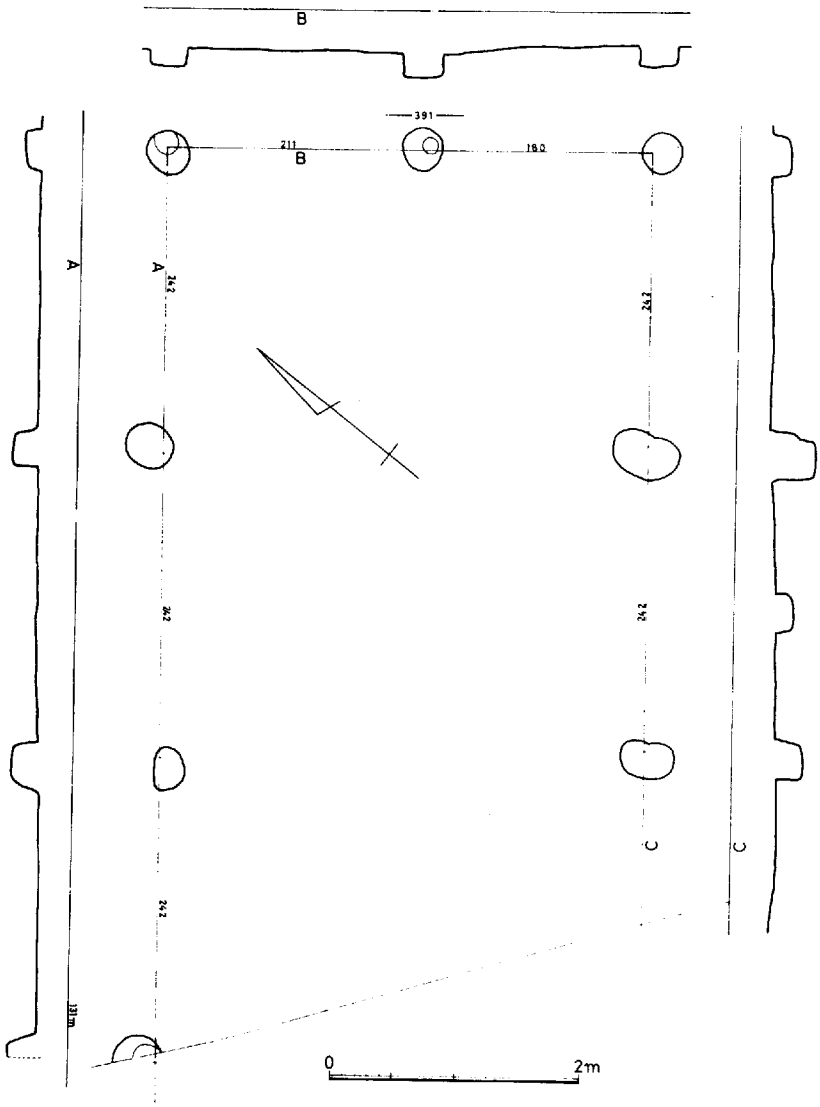


第１１０図　No.86建物 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



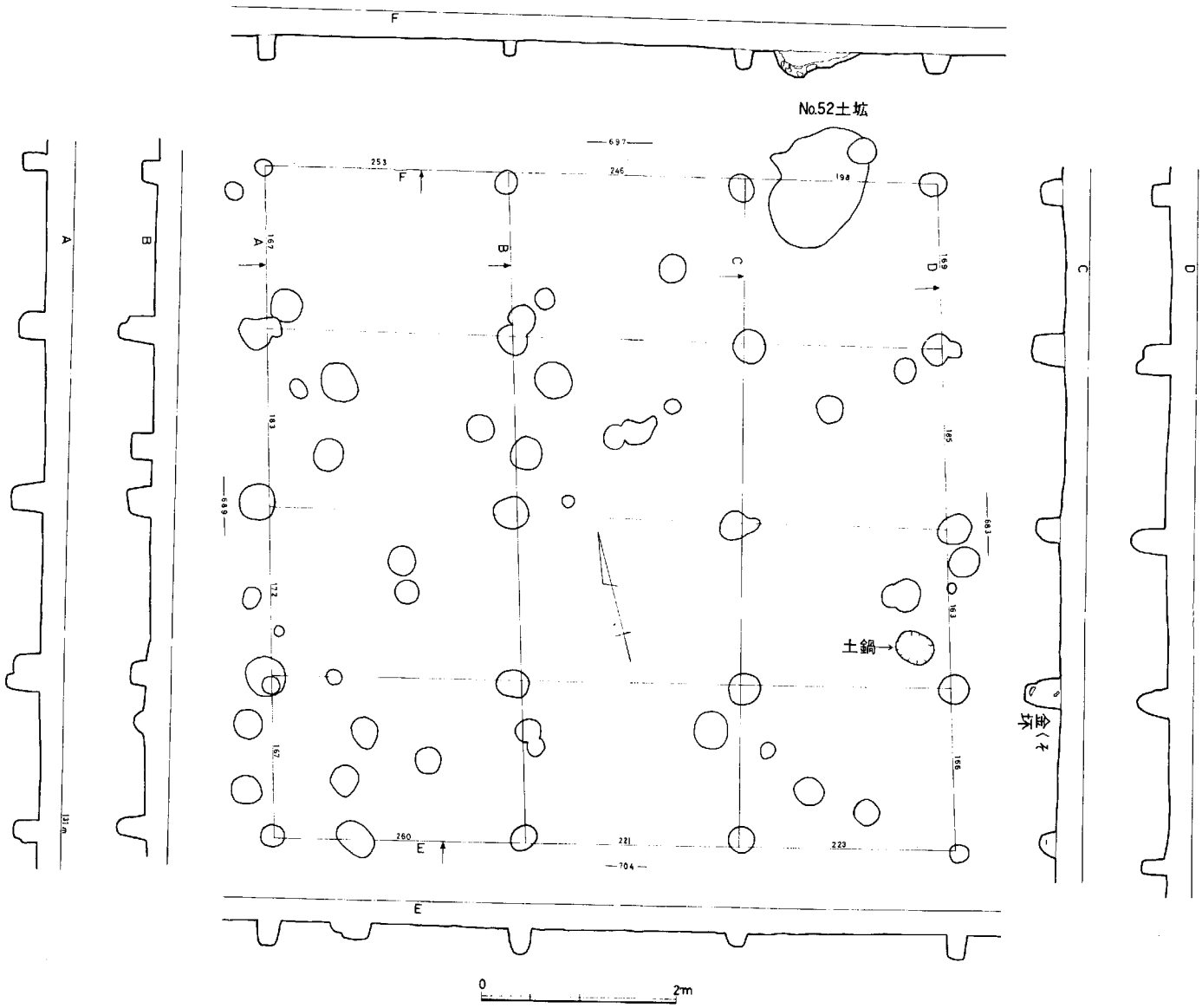
第１１１図　４区No.87とNo.87－２建物 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

第１１２図　４区No.88建物 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

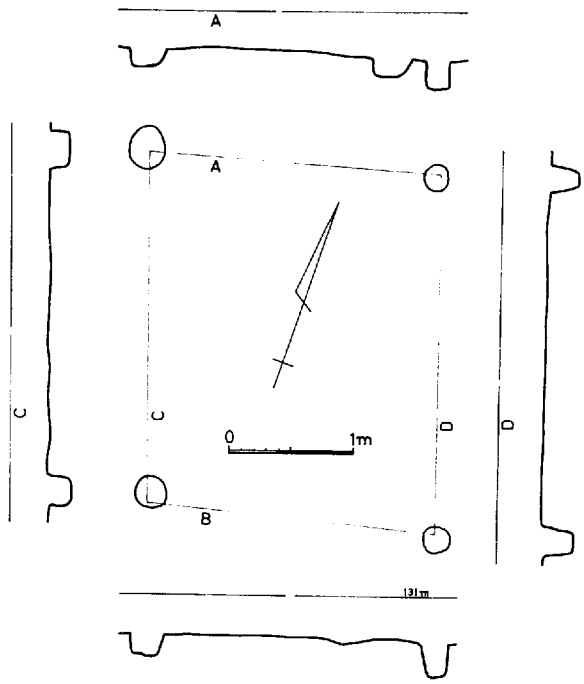


第１１３図　４区No.90建物 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

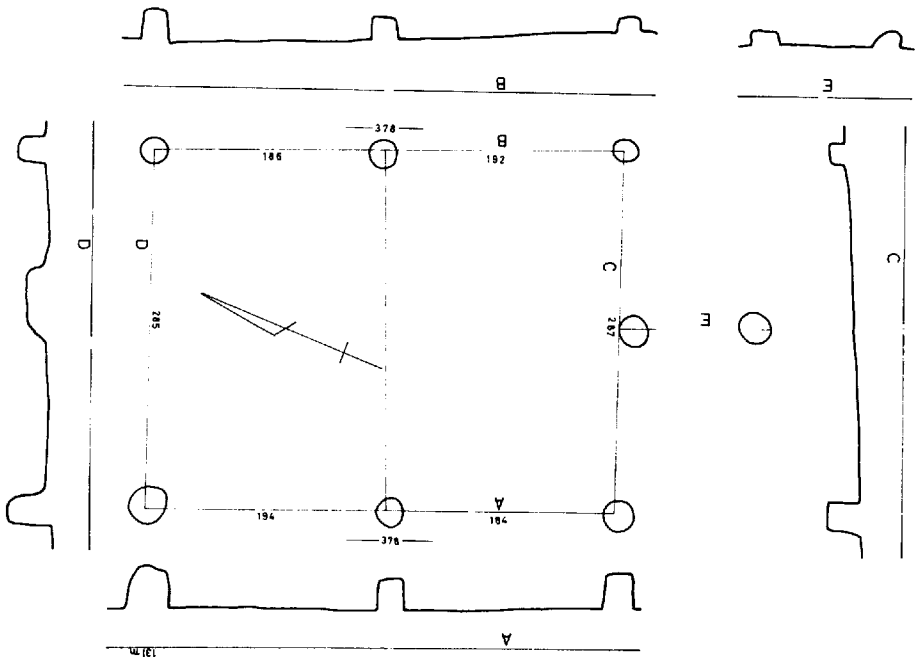
90



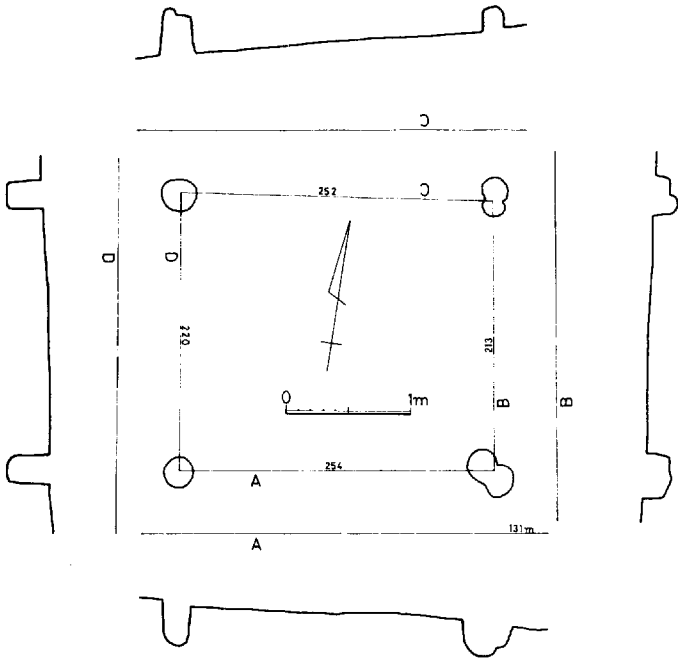
第１１４図　４区No.89建物 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



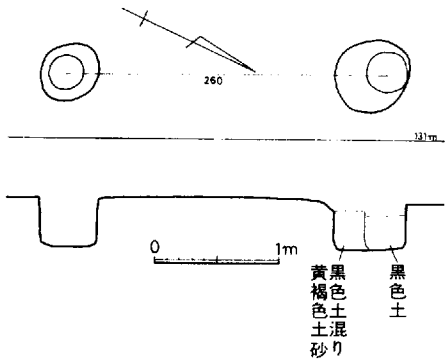
第１１５図　４区No.91 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



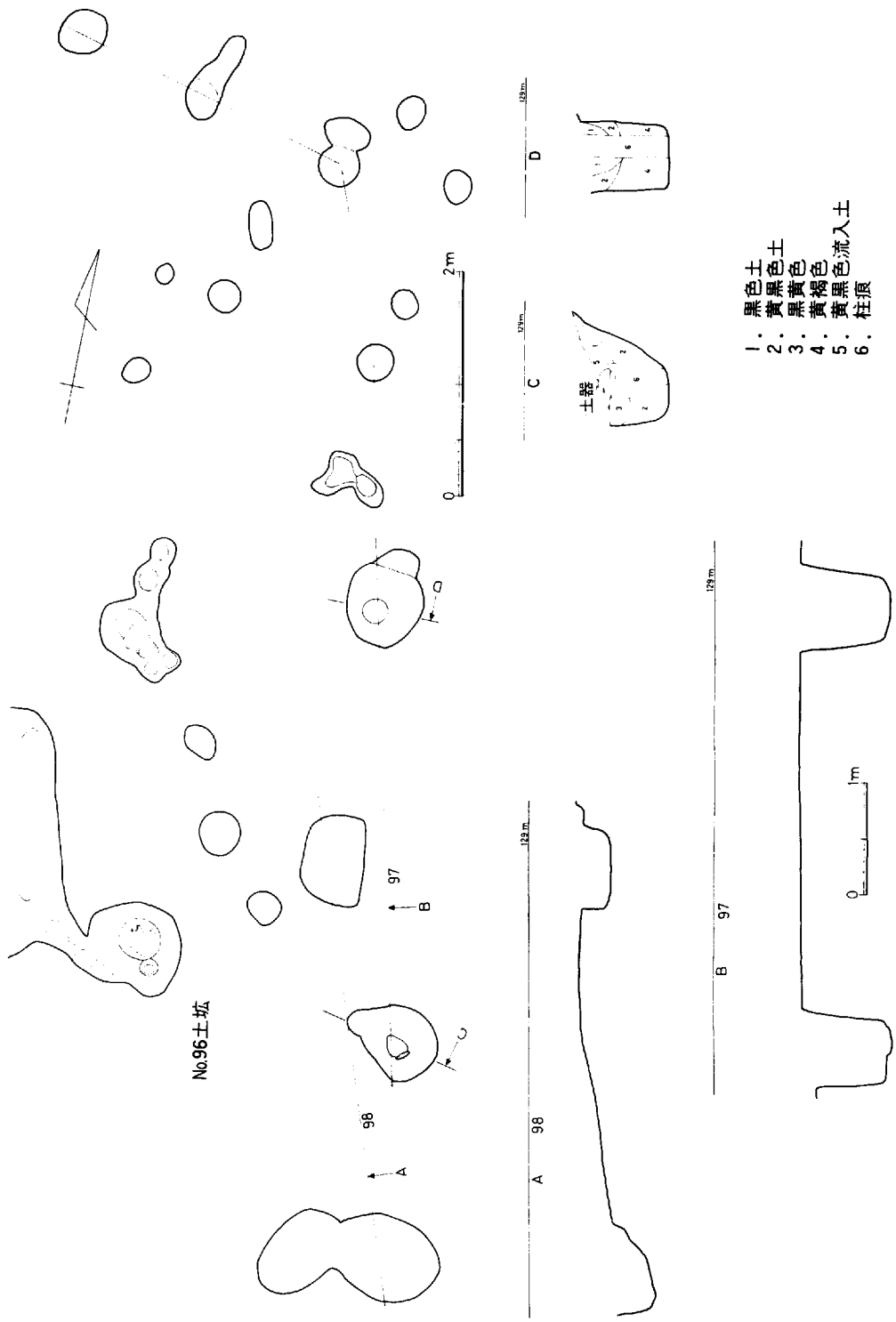
第１１６図　４区No.92建物 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



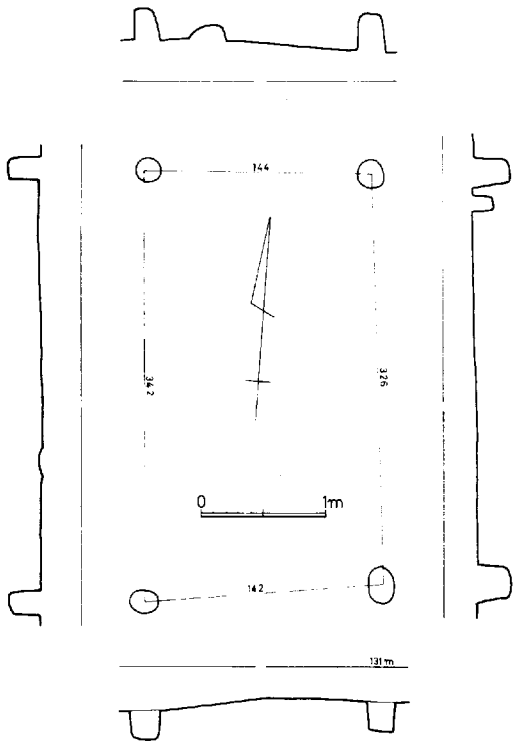
第１１７図　４区No.94建物 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



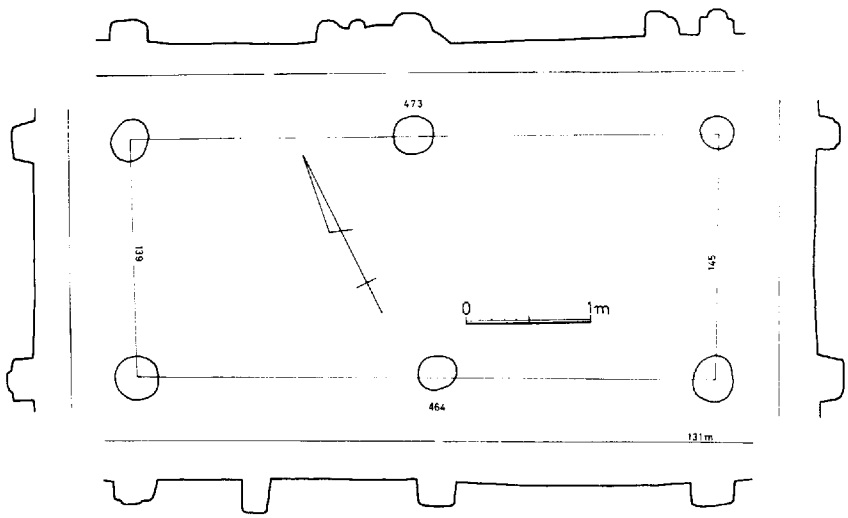
第１１８図　４区No.93建物 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



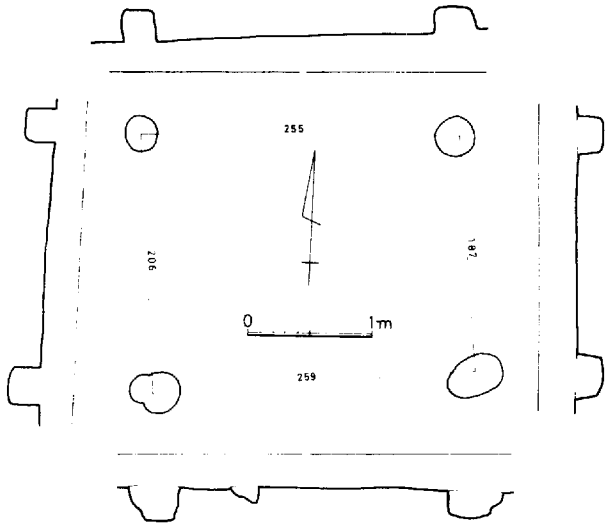
第119図　4区No.97・98柱穴列（S＝1/60）



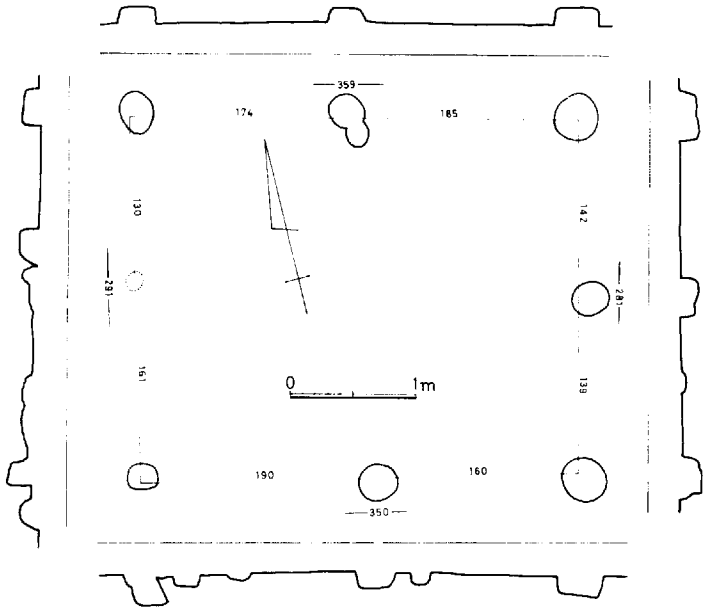
第１２０図　４区No.101 建物 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



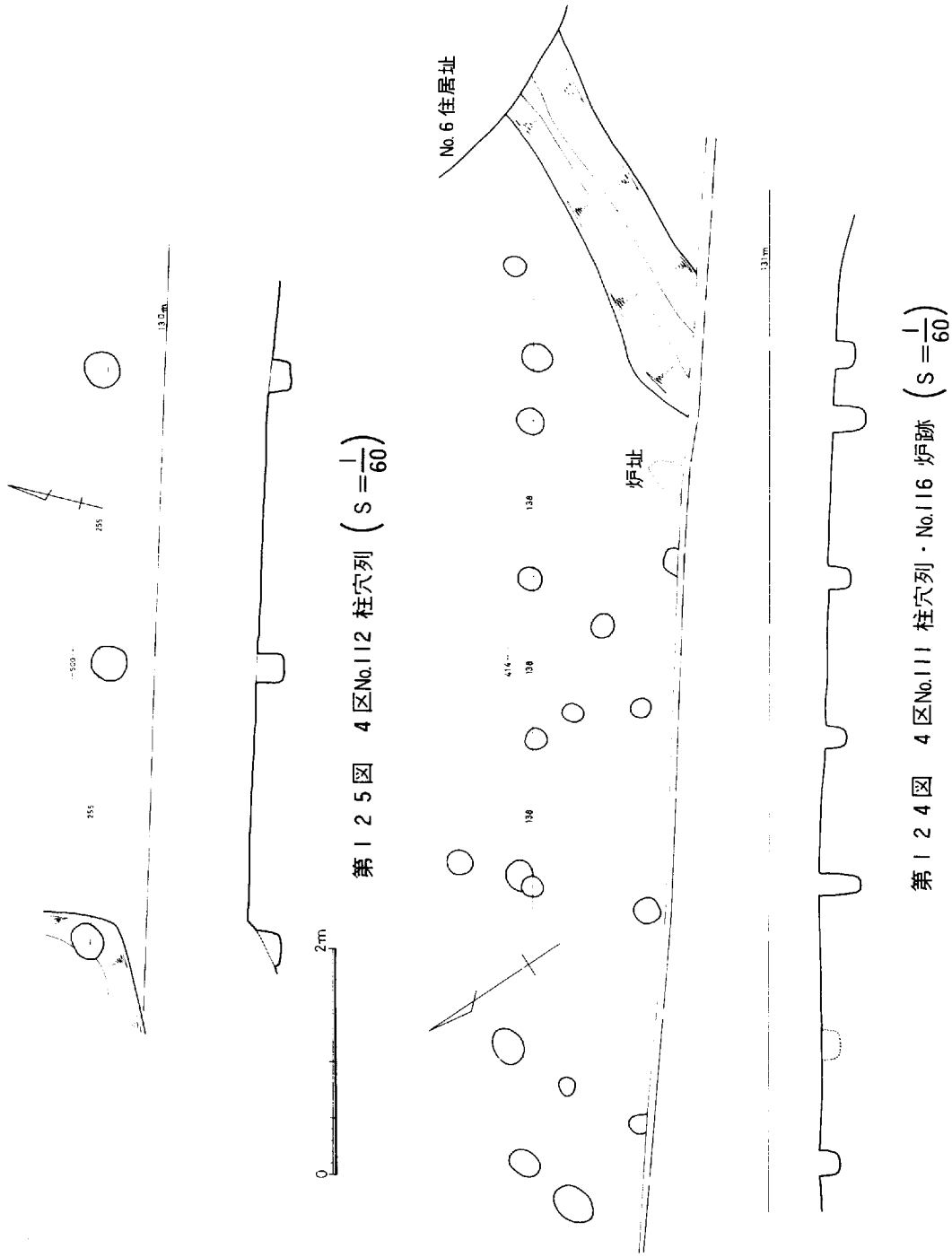
第１２１図　４区No.102 建物 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



第１２２図　４区No.103 建物 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

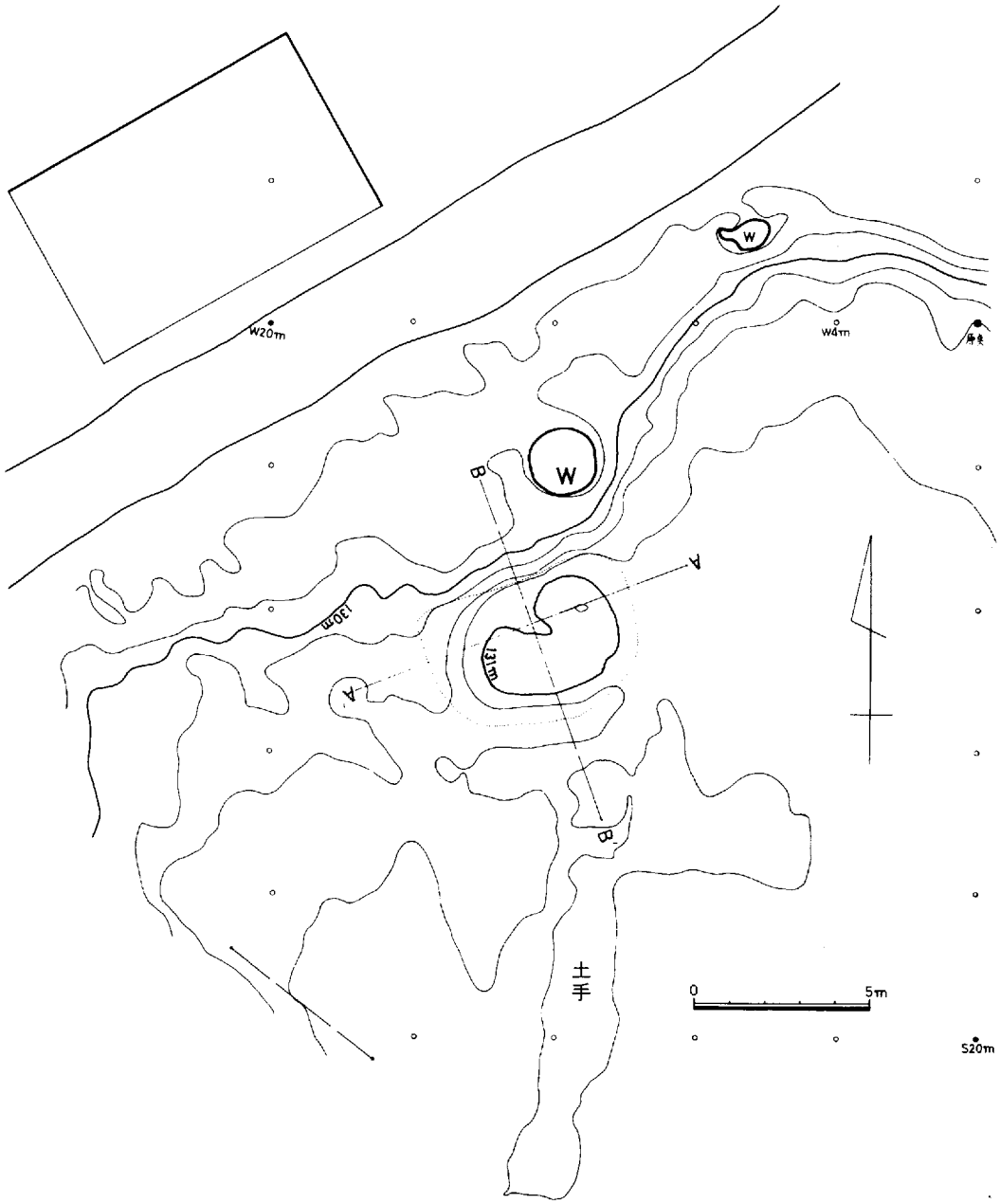


第１２３図　４区No.104 建物 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

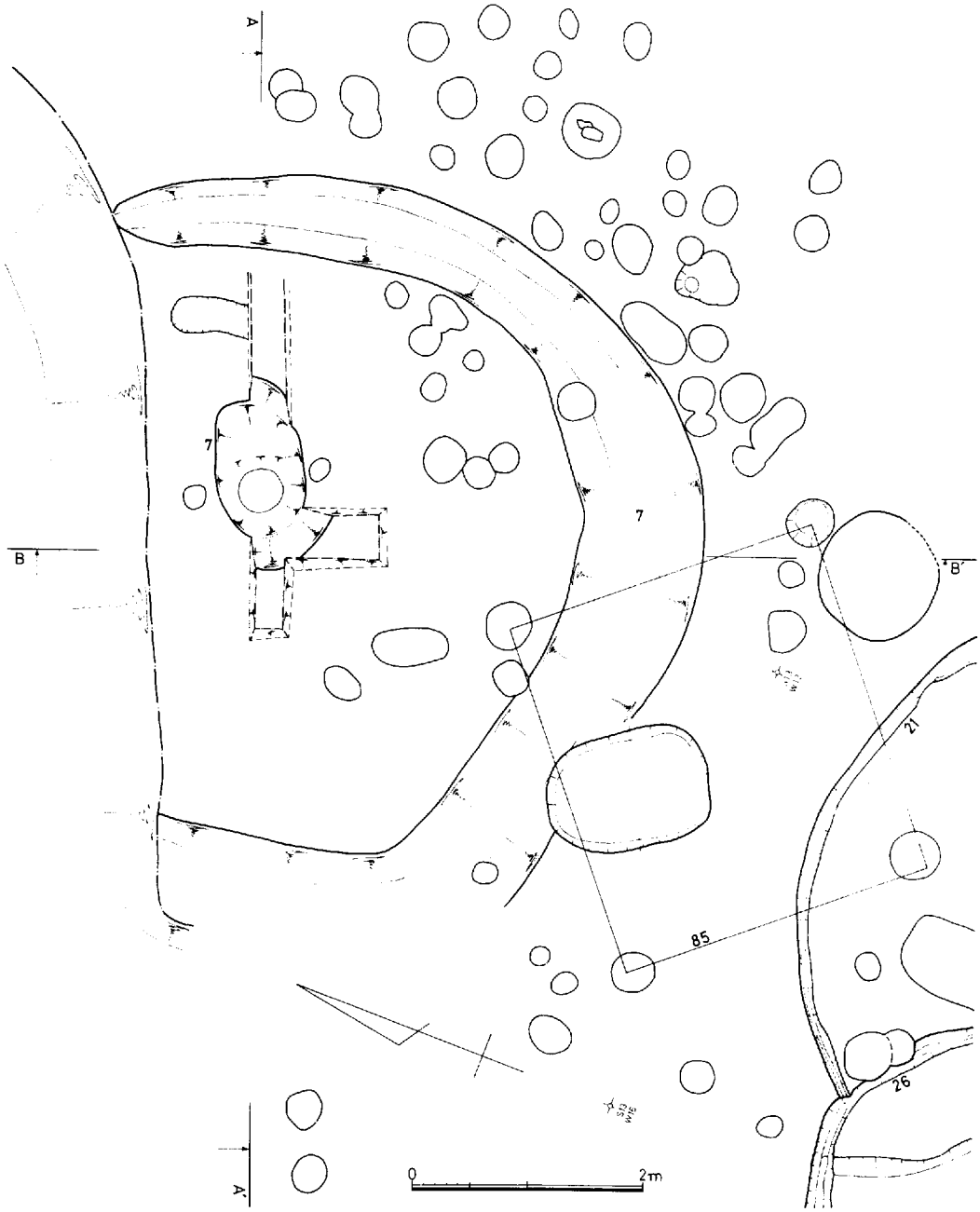


第125図　4区No.112 柱穴列 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

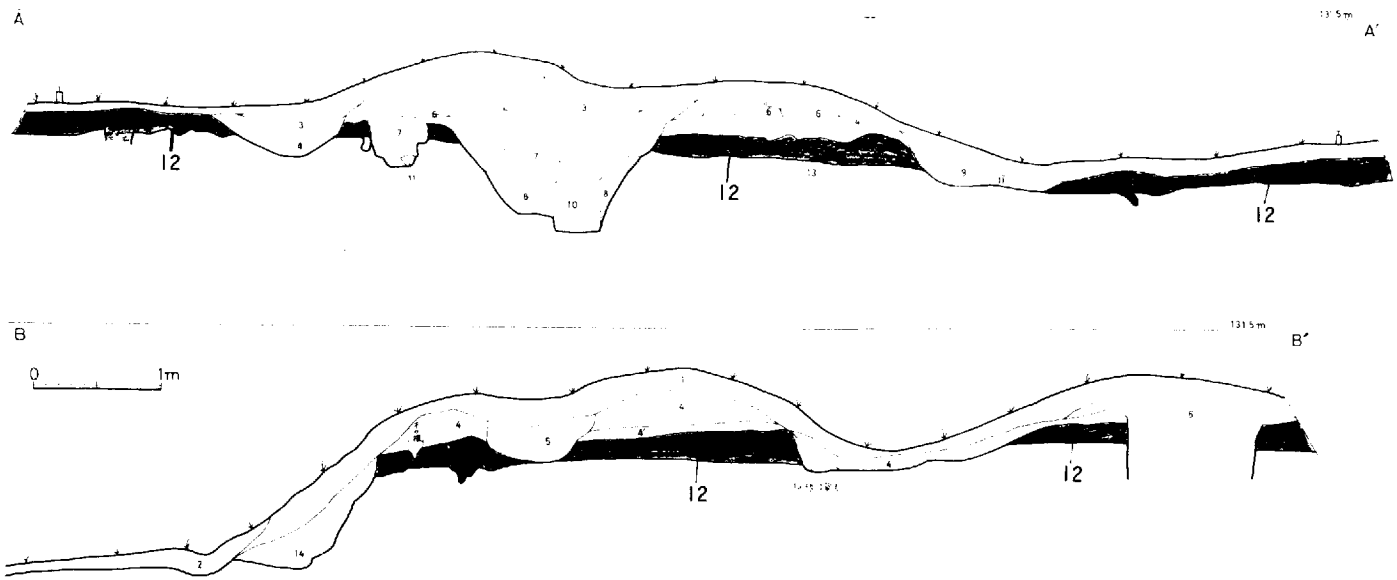
第124図　4区No.111 柱穴列・No.116 炉跡 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



第１２６図　４区No.７遺構 ① 地形測量図 $\left(S=\frac{1}{200}\right)$

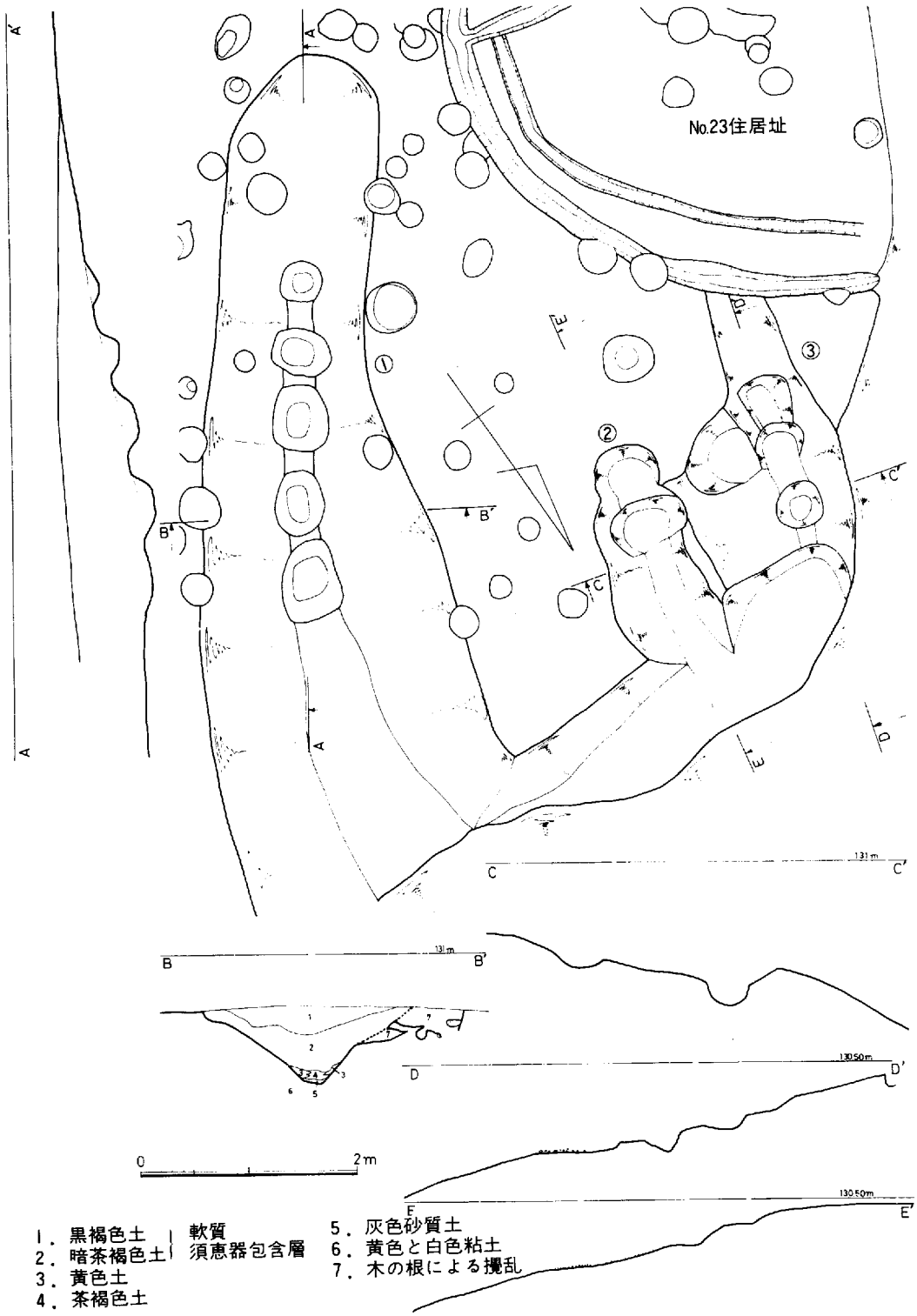


第１２７図　４区No.７遺構 ② 掘り上り平面図 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

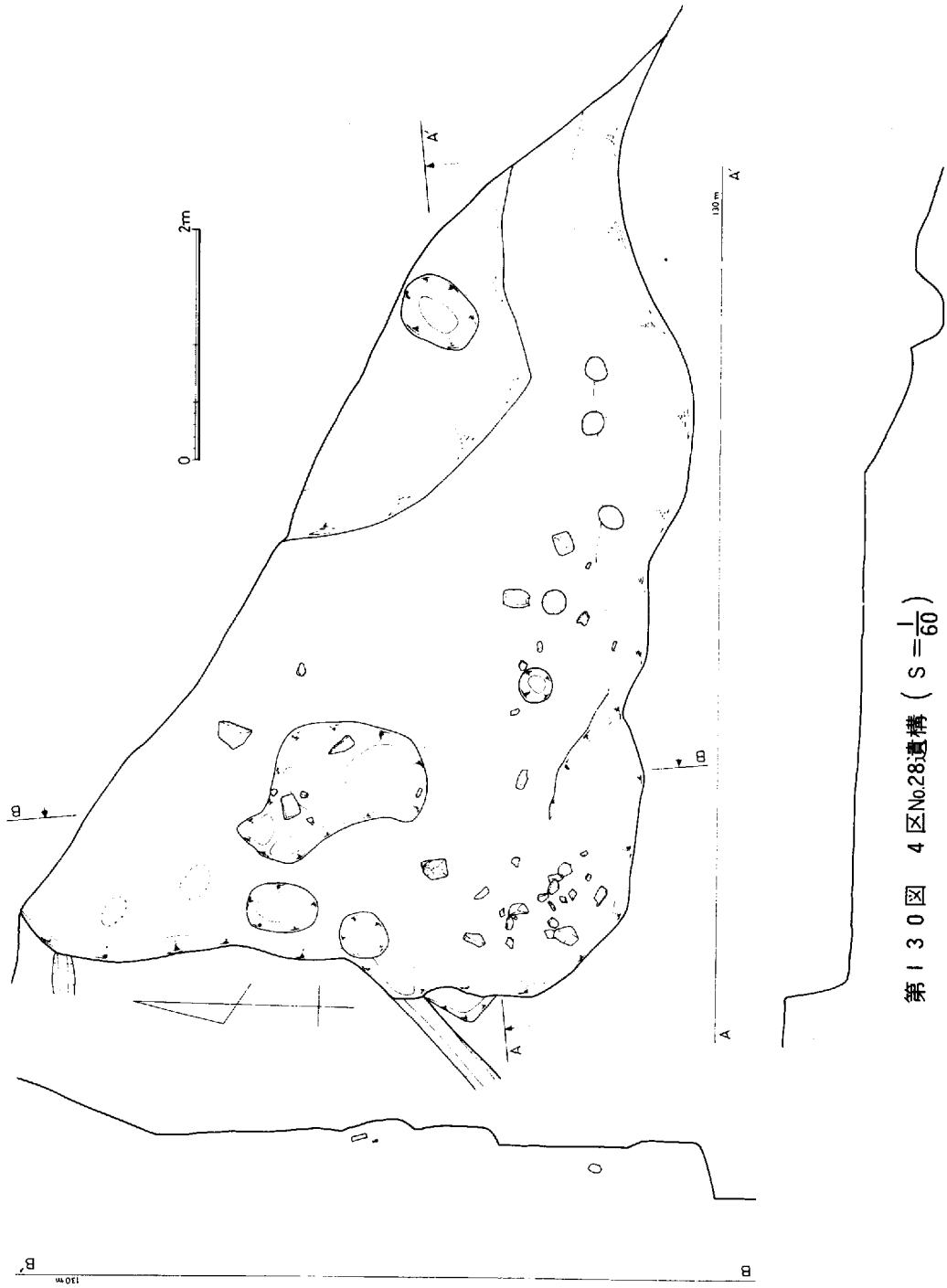


1．黄褐色土（表土）
2．灰茶褐色土（表土）
3．暗黄褐色土
4．暗茶褐色土
4′ 暗茶褐色土(黄色土細粒やや多し)
5．黒色土と茶色土の混在
6．黄色土粒状
7．茶色土
8．黄色土．茶色土混在
9．茶褐色土
10．黒茶色土
11．淡黒色土
12．黒色土
13．明茶色土（地山）
14．黄色土混り灰黒色土

第１２８図　４区No.７遺構 ③ 断面図 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$



第129図　4区No.25遺構 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

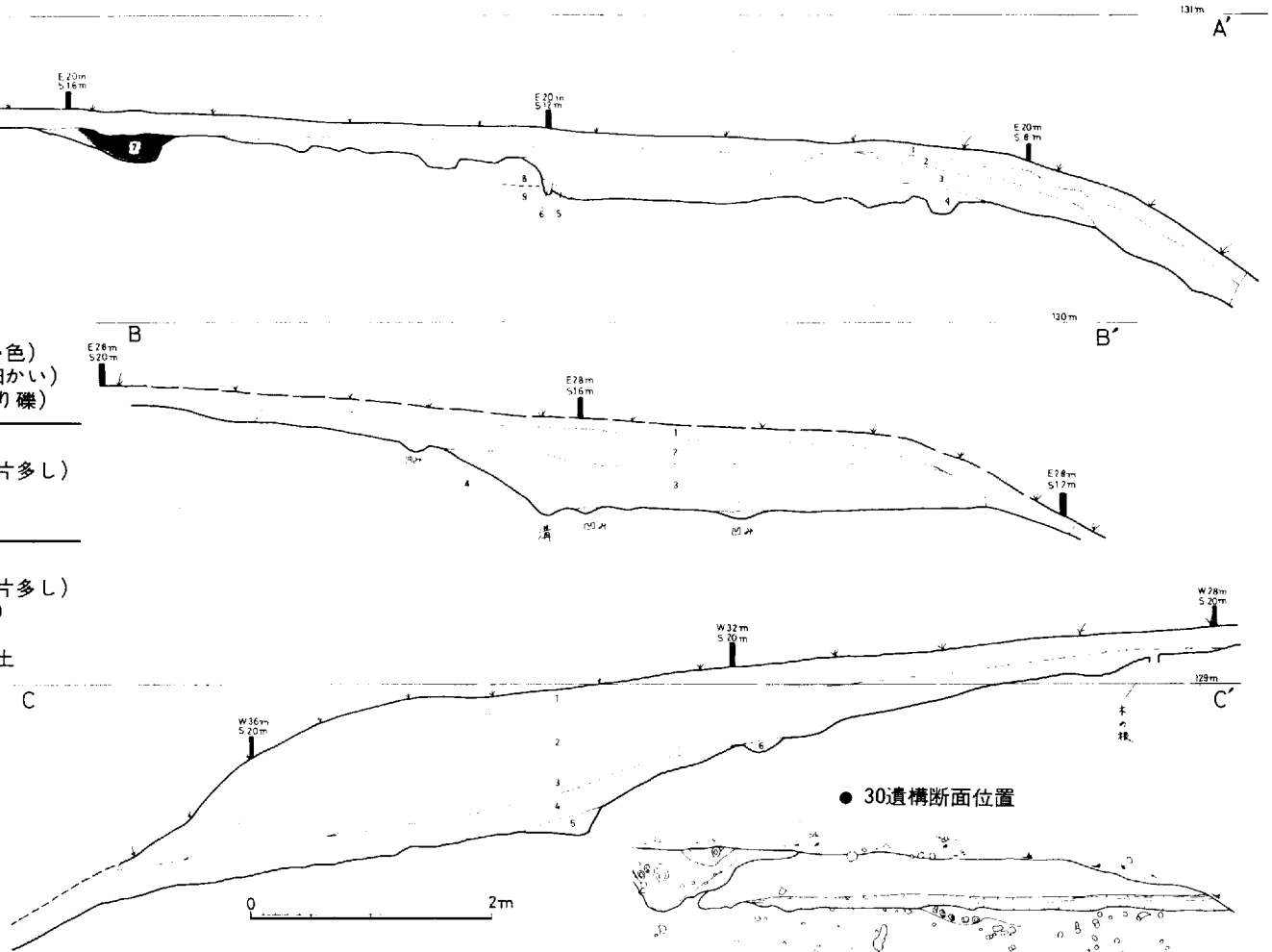


第１３０図　４区No.28遺構（S＝$\frac{1}{60}$）

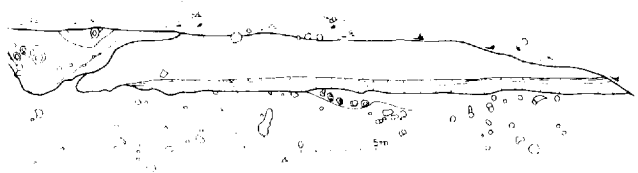
A 1．淡黄色土（表土）
2．淡暗黄色土
3．淡茶色土
4．淡黒褐色土
5．黄色と淡灰色土混在
6．灰褐色土
7．黒色土(部分的に淡い色)
8．地山黄色土(きめが細かい)
9．地山黄色砂礫（くさり礫）

B 1．表土掘り上げ
2．明茶褐色土（須恵器片多し）
3．淡黒褐色土
4．地山くさり礫黄色

C 1．表土黄色土
2．明茶褐色土（須恵器片多し）
3．暗茶褐色土（漸移的）
4．淡黒褐色土
5．黄色礫混り明茶褐色土



● 30遺構断面位置



第131図　4区No.30遺構断面図 $\left(S=\frac{1}{60}\right)$

小中遺跡　航空写真　（北より）

図版 2

1．　小中付近航空写真
（西北上空より）

2．　小中遺跡　遠景　　（西北より）

1．　I区　調査前全景　　（南より）

2．　I区　調査前全景　　（南西より）

図版 4

1．　I区　全　景　（南南東より）

2．　I区　手前は2区工事用道路によって消失　（南西より）

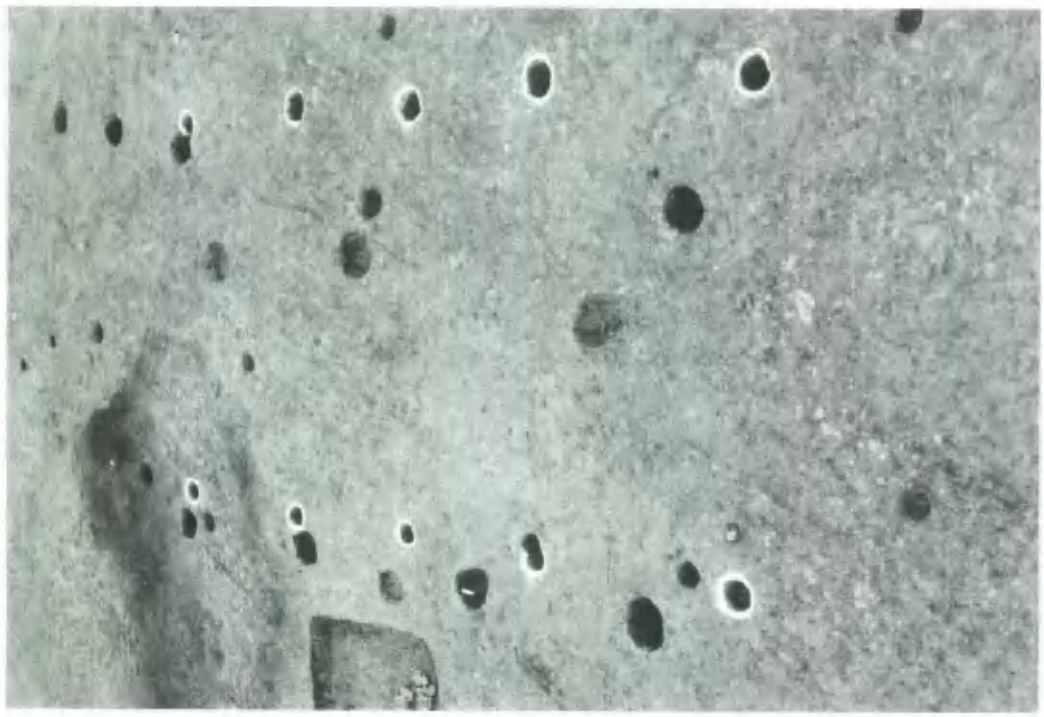
1. Ⅰ区 F，B地点 （西南西より）

2. Ⅰ区 E，F，B地点 （西南西より）

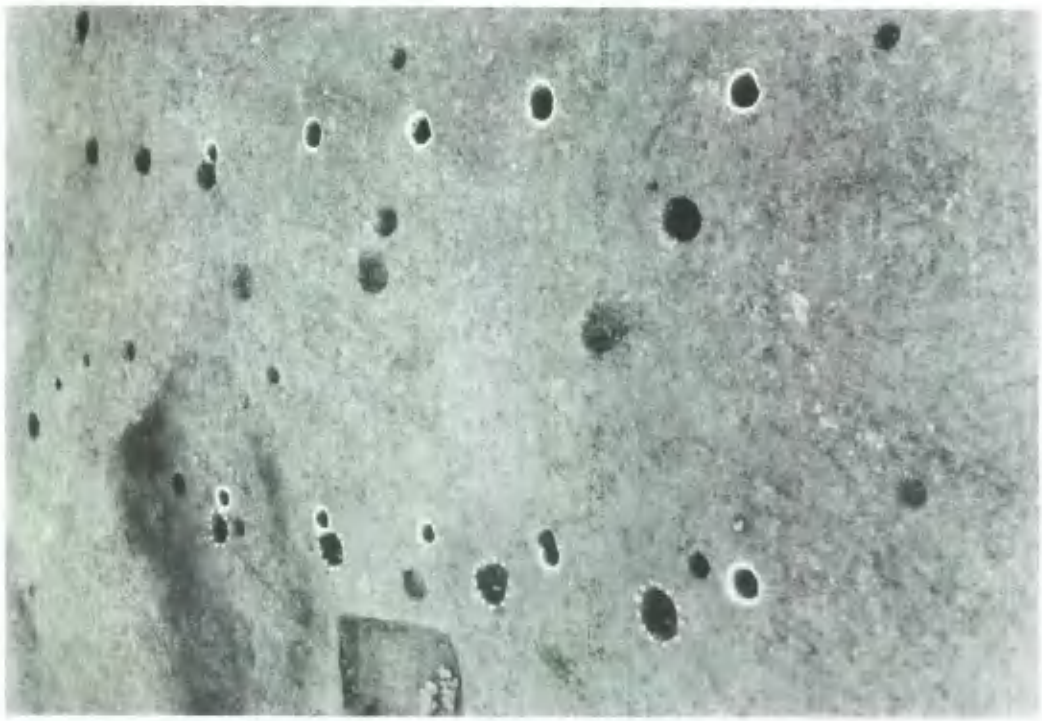
図版 6

1.　I区 E, H, G地点　表土剝ぎ終了後全景　（東より）

2.　I区　B, C, F地点　（北より）



1．　Ⅰ区　No.43　（南より）



2．　Ⅰ区　No.43・44　（南より）

図版 8

1．　I区　F地点　31遺構　　（北西より）

2．I区　F地点　37遺構　　（北西より）

1．　Ⅰ区　No.35　土拡断面　（西方より）

2．　Ⅰ区　No.39　土拡断面　（南より）

図版10

1．　Ⅰ区　近世墓56　（北より）

2．　Ⅰ区　近世墓56　遺物出土状態　（東より）

1.　I区　調査後あけ渡し　（南より）

2.　I区　調査後あけ渡し　（南より）

図版12

1．　2区　発　掘　前　　（北西より）

2．　2区　トレンチ調査　　（東南東より）

2区　全　　景　（西北より）

図版14

1．　2区　古道　全　景　（西北西より）

2．　2区　No.8遺　構　（北より）

図版15

▲1. 2区 F断面全景 北東より

◀2. 2区 F断面の一部 北西より

図版16

1．　2区　発掘調査風景　（北東より）

2．　2区　発掘後明渡し，工事用道路造成　（北東より）

1．　3区　古道　発掘前　　（東より）

2．　3区　古　　道　　（東より）

図版18

1．　3区　古道①②発掘前状況　　（西より）

2．　3区　古道①②全　景　　（西より）

1．　3区　全　　景　　（西より）

2．　3区　古道②全　　景　　（西より）

図版20

◀1. 3区 古道① 全景 （西より）

2 3区 古道① 全景 （東より）▶

1. 3区 古 道① (東より)

2. 3区 古 道① 砂利敷状況 (東より)

図版22

1．　3区　古道　断　面B　（東より）

2．　3区　古道　肩部分，列石および土器出土状況　（西より）

図版23

1. 3区 北端部全景（北より）

2. 3区 No.81遺構（南より）

3. 3区 No.81遺構鎌出土状況（東より）

図版24

1．　4区　発掘前　全　　景　　（北より）

2．　4区　トレンチ発掘　全　　景　　（北より）

3．　4区　全　　景　　（北西より）

1．　4区　全　　景　　（北西より）

2．　4区　全　　景　　（東南より）

図版26

1. 4区 1地点 全 景 (北東より)

2. 4区 1地点 全 景 (南西より)

1．　4区　No.87　建　　物　　（東より）

2．　4区　No.89建物とその周辺　　（東南より）

図版28

1．　4区　No.30遺　　構　　（西北西より）

2．　4区　No.30遺　　構　A断面　　（東より）

1．　4区　No.25遺　構①　（南西より）

2．　4区　No.25遺　構①　（北東より）

図版30

1．　4区　No.25遺　　構①　断面　　（北東より）

2．　4区　No.25遺　　構②③　　（南西より）

1．　2区　No.10住居跡実測風景

2．　発掘調査員と作業員

3．　写真撮影用ヤグラ組立

図版31

天神原遺跡(9)

総　目　次

第1章　はじめに …… 337
第2章　調査の経過 …… 338
　日誌抄 …… 339
第3章　遺跡の地理的　歴史的環境 …… 353
第4章　第一次調査の概要 …… 355
第5章　第二次調査の概要 …… 365
　第1節　遺跡の概要 …… 365
　第2節　遺構・遺物 …… 370
　　A　住居址 …… 370
　　B　溝 …… 418
　　C　建物 …… 442
　　D　土壙・土壙墓 …… 445
　　E　古墳 …… 473
　　F　弥生時代前期の土器 …… 477
　　G　石器 …… 478
第6章　まとめにかえて …… 483
　第1節　出土遺物について …… 483
　第2節　集落について …… 487
　第3節　土壙墓について …… 491
　第4節　古墳について …… 491

図　目　次

第1図　遺跡周辺の地形図 …… 356
第2図　天神原遺跡付近の地形図 …… 357
第3図　天神原遺跡A地点の地形図 …… 358
第4図　2号墳平面図・断面図 …… 359
第5図　2号墳主体平面図・断面図 …… 361
第6図　3号墳平面図・断面図 …… 360
第7図　3号墳主体平面図・断面図 …… 361
第8図　4号墳平面図・断面図 …… 362
第9図　4号墳主体平面図・断面図 …… 363
第10図－1　3号墳出土遺物 …… 363
　　－2　4号墳出土（変形方格規矩文鏡拓影） …… 364

第11図　第一次調査トレンチ配置図 …… 366
第12図　主要遺構配置図 …… 366
第13図　A・B地点遺構図 …… 367
第14図　C・E・F地点遺構図 …… 368
第15図　1号住居址平面図・断面図 …… 370
第16図　1号住居址出土遺物 …… 371
第17図　2号住居址平面図・断面図 …… 372
第18図　2号住居址出土遺物 …… 373
第19図　3号住居址平面図・断面図 …… 374
第20図　3号住居址出土遺物 …… 375
第21図　4号住居址平面図・断面図 …… 376
第22図　5号住居址平面図・断面図 …… 377
第23図　5号住居址内ピット断面図 …… 378
第24図　5号住居址出土遺物 …… 379
第25図　6号住居址平面図・断面図 …… 379
第26図　7号住居址平面図・断面図 …… 380
第27図　8号住居址平面図・断面図 …… 381
第28図　8号住居址出土遺物 …… 382
第29図　9号住居址平面図・断面図 …… 384
第30図　10号住居址平面図・断面図 …… 385
第31図　10号住居址出土遺物 …… 386
第32図　11号住居址平面図・断面図 …… 388
第33図　12号住居址平面図・断面図 …… 389
第34図　12号住居址出土遺物 …… 390
第35図　13号住居址平面図・断面図 …… 391
第36図　13号住居址出土遺物 …… 392
第37図　14号住居址平面図・断面図 …… 393
第38図　14号住居址出土遺物 …… 394
第39図　15号住居址平面図・断面図 …… 395
第40図　15号住居址出土遺物 …… 397
第41図　16号住居址平面図・断面図 …… 398
第42図　16号住居址出土遺物 …… 399
第43図　17号住居址平面図・断面図 …… 401

第44図　17号住居址出土遺物 …… 402
第45図　18号住居址平面図・断面図 …… 403
第46図　19号住居址平面図・断面図 …… 405
第47図　19号住居址出土遺物 …… 404
第48図　20号・21号住居址平面図・断面図 …… 406
第49図　20号鍛冶炉 …… 407
第50図　20号住居址出土遺物 …… 407
第51図　21号住居址出土遺物 …… 403
第52図　22号住居址平面図・断面図 …… 408
第53図　23号住居址平面図・断面図 …… 410
第54図　23号住居址出土遺物 …… 409
第55図　24号住居址平面図・断面図 …… 411
第56図　24号住居址出土遺物 …… 412
第57図　25号住居址平面図・断面図 …… 413
第58図　25号住居址出土遺物 …… 414
第59図　26号住居址平面図・断面図 …… 415
第60図　26号鍛冶炉 …… 415
第61図　27号住居址平面図・断面図 …… 416
第62図　溝・土層断面No. 1 …… 419
第63図　溝・土層断面No. 2 …… 419
第64図　溝・土層断面No. 3 …… 420
第65図　溝・土層断面No. 4 …… 420
第66図　溝・土器溜りNo. 1　平面図・断面図 …… 422
第67図　溝・土器溜りNo. 1　出土土器 …… 423
第68図　溝・土器溜りNo. 2　平面図・断面図 …… 425
第69図　土器溜りNo. 2　出土土器 …… 426
第70図　溝・土器溜りNo. 2　出土土器 …… 427
第71図　溝・土器溜りNo. 3　平面図・断面図 …… 431
第72図　溝・土器溜りNo. 3　出土土器 …… 432
第73図　溝・土器溜りNo. 3　出土土器 …… 433
第74図　溝・土器溜りNo. 3　出土土器 …… 435
第75図　溝・土器溜りNo. 4　平面図・断面図 …… 437
第76図　溝・土器溜りNo. 4　出土土器 …… 438

第77図　溝・出土土器 …… 439
第78図　溝・出土土器 …… 440
第79図　溝・出土土器 …… 441
第80図　建物２　平面図・断面図 …… 443
第81図　建物３　平面図・断面図 …… 444
第82図　土壙墓１（２００１）平面図 …… 445
第83図　土壙墓１（２００１）平面図・断面図 …… 446
第84図　土壙墓１（２００１）出土土器 …… 449
第85図　土壙墓１（２００１）出土土器 …… 450
第86図　pit　２００８　平面図・断面図 …… 452
第87図　pit　２００８　出土土器 …… 452
第88図　円形周溝遺構（２００９）平面図・断面図 …… 453
第89図　〃　出土土器 …… 453
第90図　土壙墓２（２０１０）平面図 …… 454
第91図　土壙墓２（２０１０）土層断面図 …… 454
第92図　土壙墓２（２０１０）平面図・断面図 …… 456
第93図　土壙墓２（２０１０）出土土器 …… 457
第94図　土壙墓３（２０１８）平面図・断面図 …… 459
第95図　土壙墓３（２０１８）出土土器 …… 458
第96図　土壙墓４（２０２０）平面図・断面図 …… 461
第97図　２０２０・４３０１・４４０１・１０４　出土土器 …… 462
第98図　土壙　出土土器 …… 463
第99図　土壙墓３００１　平面図・断面図 …… 464
第100図　pit　１０１～１０６　平面図・断面図 …… 465
第101図　pit　４３０１　平面図・断面図 …… 467
第102図　pit　４４０１　出土土器 …… 470
第103図　主な土壙　平面図・断面図 …… 472
第104図　９号墳　平面図・断面図 …… 474
第105図　10号墳　平面図・断面図 …… 475
第106図　旧石器実測図（栗野） …… 478
第107図　弥生時代前期　甕形土器 …… 479
第108図　弥生時代前期　土器拓影 …… 480
第109図　石器類実測図 …… 481

第110図　石包丁実測図 …… 482

表　目　次

表 1　住居址一覧 …… 417
表 2　古墳一覧 …… 476

図　版　目　次

図版 1 － 1　遺跡遠景　西低地より …… 494
2　遺跡遠景　東丘陵より …… 494
図版 2 － 1　C地点　西より …… 495
2　A地点谷・D地点　東より …… 495
図版 3 － 1　A地点トレンチ　南より …… 496
2　A地点トレンチ　西より …… 496
図版 4 － 1　2号墳全景　北より …… 497
2　2号墳主体　西より …… 497
図版 5 － 1　4号墳・3号墳全景　西より …… 498
2　3号墳・4号墳全景　南より …… 498
図版 6 － 1　3号墳全景　北より …… 499
2　3号墳主体　南より …… 499
図版 7 － 1　4号墳全景　南より …… 500
2　4号墳鏡出土状況 …… 500
図版 8 － 1　4号墳主体　南より …… 501
2　A地点溝検出状況　東より …… 501
図版 9 － 1　A地点　南より …… 502
2　A地点溝全景　西より …… 502
図版10 － 1　A地点　北より …… 503
2　A地点東半部　北より …… 503
図版11 － 1　A地点　南より …… 504
2　C地点北半部　西より …… 504
図版12 － 1　C地点南半部　西より …… 505
2　C地点　西より …… 505
図版13 － 1　E地点 101 ～ 106　検出状況　北より …… 506
2　F地点柱穴と5号住居址　東より …… 506

図版14－1	1号住居址遺物検出状況	北より	507
2	1号住居址	北より	507
図版15－1	2号住居址	東より	508
2	3号住居址	北より	508
図版16－1	3号住居址	北より	509
2	4号・5号住居址	東より	509
図版17－1	4号住居址	東より	510
2	5号住居址	北より	510
図版18－1	6号住居址	北より	511
－2	7号住居址	北より	511
図版19－1	8号住居址	西より	512
2	9号住居址	南より	512
図版20－1	10号住居址	西より	513
2	11号住居址	西より	513
図版21－1	12号住居址炭化材検出状況	北より	514
2	12号住居址		514
図版22－1	13号住居址	北より	515
2	14号住居址	北より	515
図版23－1	14号住居址	北より	516
2	15号住居址	東より	516
図版24－1	15号住居址高坏出土状況		517
2	15号住居址土器出土状況		517
図版25－1	16号住居址	南より	518
2	17号住居址炭化材出土状況	北より	518
図版26－1	19号住居址	南より	519
2	19号住居址掘りあげ	南より	519
図版27－1	18号住居址	東より	520
2	22号住居址	西より	520
図版28－1	20号（右）21号（左）住居址	南より	521
2	20号住居炉	鍛冶炉	521
図版29－1	23号住居址	西より	522
2	24号住居址	西より	522
図版30－1	25号住居址	西より	523

2	26号住居址　南より　鍛冶炉		523
図版31－1	27号住居址　北より		524
2	建　物1　東より		524
図版32－1	建　物2　建　物3　東より		525
2	建　物4　北より		525
図版33	A地点溝　北より		526
図版34－1	溝土器溜り　No.5		527
2	溝土器溜り　No.1		527
図版35－1	溝土層断面　No.1		528
図版35－2	溝土層断面　No.4		528
図版36－1	溝北部分　北より		529
2	溝土層断面		529
図版37－1	土壙墓1(2001)　検出状況　南より		530
2	土壙墓1(2001)　北より		530
3	土壙墓1(2001)		530
図版38－1	2002　南より		531
2	2009　円形周溝遺構　西より		531
図版39－1	2008　東より		532
2	2008　遺　物		532
図版40－1	土壙墓2(2010)　検出状況		533
2	土壙墓2(2010)　掘りあげ		533
図版41－1	土壙墓4(2018)　検出状況		534
2	土壙墓4(2018)　掘りあげ		534
図版42－1	2016　弥生前期甕出土状況		535
2	2019　検出状況　南より		535
図版43－1	E地点　101～106　北より		536
2	103・104　南より		536
図版44－1	2020　検出状況　東より		537
2	B地点　3001　南より		537
図版45－1	C地点　4301　西より		538

	2	C地点　4 4 0 4	東より	538
図版46		9号墳	南より	539
図版47－1		11号墳	西より	540
	2	11号墳		540
図版48－1		C地点発掘風景		541
	2	A地点発掘風景		541
	3	C地点発掘風景		541
図版49		天神原付近の中国縦貫道　（撮影　小谷 善守氏）		542
図版50		出土遺物　1		543
図版51		出土遺物　2		544
図版52		出土遺物　3		545
図版53		出土遺物　4		546
図版54		出土遺物　5		547
図版55		出土遺物　6		548
図版56		出土遺物　7		549
図版57		出土遺物　8		550
図版58		出土遺物　9		551
図版59		出土遺物　10		552
図版60		出土遺物　11		553
図版61		出土遺物　12		554
図版62		出土遺物　13		555
図版63		出土遺物　14		556
図版64		出土遺物　15		557
図版65		出土遺物　16		558

第1章　は　じ　め　に

本報告は中国縦貫自動車道建設にともない，記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査の概要である。

◎　遺跡の所在　　岡山県津山市河辺

◎　遺跡の調査対象面積　　13,201㎡

　　調査実施面積　　8,803㎡

◎　調査期間と担当調査員

第一次調査	昭和45年11月24日～昭和46年2月10日	担当	河本　清，橋本惣司 柳瀬昭彦
第二次調査	昭和46年4月1日～昭和47年3月31日	担当	河本　清，橋本惣司 柳瀬昭彦，下沢公明
	昭和47年4月1日～6月10日	担当	橋本惣司，柳瀬昭彦

◎　整理，報告書作成

本遺跡の発掘調査担当調査員のうち，河本は岡山県津山市教育委員会に，柳瀬は岡山県立博物館へ異動し，橋本・下沢が主に担当した。遺物の註記・復元等は津山収蔵庫の作業員が行ない，図面整理・トレース・遺物写真は橋本が，遺物実測，トレースは下沢が主に担当した。報告書作成期間は，昭和49年5月1日から9月30日までである。

◎　土器の縮尺は$\frac{1}{3}$である。他の遺物及び遺構図は個々に表記した。

◎　本文は第1章，第2章，第3章を橋本が，第4章は河本・橋本・柳瀬，第5章は調査員全員で執筆し，第6章第1・2節は下沢，第3節は橋本が担当した。

◎　図版は調査員全員による。

◎　調査作業員（順不同）　安藤四郎・早瀬一二・西尾藤一・野口勅次・井上恵・井上正之・国政重夫・本郷賢二・久常潔・本山猛・竹内美登・小林保平・本山光治・中尾賢治・鳥越潔・鵜塚和子・西尾ときえ・荒田沢野・木下花子・植木君江・赤松富子・小林千里・小林百代・森幸子・中塚欣子・中島重子・山本香代子・大野富子・丸玉ゆき子・赤松寿子・赤堀悦子・福井律子・高畑富子・赤松梢・森美恵子・小林弘子・山林聴子・多木芳子・国政本芽・藤田由恵

◎　遺物整理作業員（順不同）　日笠月子・日笠栄・高畑春美・今井比登美・橋本雅子

以上の方々の協力を得た。記して謝意を表したい。

第2章　調査の経過

天神原遺跡は古墳群として早くから知られていた。県教委は分布調査後，久米廃寺，美作国府跡とともに路線変更を要望していたが，周辺の土地状況等から変更できないとの回答があり，記録保存の対象遺跡となった。津山Ⅰ．C～落合Ⅰ．C間の建設が優先となり，昭和45年度調査の計画であった。分布調査時では2基の円墳の存在が認められていたが，立木伐採後，円墳3基と弥生式土器2片を採集し，弥生時代の遺跡が存在することが予想された。

7月15日より30日まで，岡山理科大学によって地形測量と3ケ所のトレンチ調査が実施された。そのため，当初，古墳群のみが調査の対象であったが，調査期限を昭和46年度まで延長することとし，昭和45年度を第一次調査として，古墳3基と遺構の範囲確認を目的にして，11月24日より昭和46年3月6日まで実施した。

第一次調査では天神原遺跡の中心であるA地点に幅2mのトレンチを11ケ所を設定し，土壌構造の確認調査を実施したところ，西斜面に弥生時代終末期の，延長75mにおよぶ溝と住居址2，柱穴多数を確認した。またC地点でも弥生時代後期の土器を含む層，柱穴を確認して，遺跡の範囲は10,000m²以上の広がりをもつことが明らかになった。さらに，古墳3基の調査を終了した。いずれも直径7～10m，高さ0.7m～1.5mの小円墳で，木棺直葬の主体であった。3号墳の周濠から出土した須恵器は，坏から6世紀初頭と考えられた。これらの古墳の他に2基の古墳が，存在することも明らかになった。以上の成果に基づき，第2次調査は12ケ月の調査期間で4名の調査員が担当することになった。

第2次調査は昭和46年4月12日より，1名増員し4名の調査員が担当して開始した。全面調査を予定し，排土場所を設定するため，トレンチによる方法をとった。その結果，D，G地点は表土も浅く，遺構・遺物は全く無く，調査は遺跡の東端E地点，F地点，B地点，A地点，C地点の順に実施し，排土場所を考慮し，検出した遺構をできるだけ埋めないようにつとめた。

E地点では住居址3（1号～3号），建物1，ピット6，柱穴多数が検出された。F地点では住居址3（4号～6号）と柱穴多数が検出された。B地点では住居址1（7号住居）と須恵器をもつ土壙墓1を調査した。

7月からA地点南東部からの調査を開始した。墳丘が削平され，周濠のみが残った古墳（9号墳），弥生時代前期の甕形土器の出土，住居址3（8号～10号），土壙墓などが検出された。

9月20日より11月30日まで調査員1名が久米町久米東遺跡（宮尾遺跡）の第一次調査に入ったため，調査員3名となった。

住居址は，A地点に12軒の住居址が存在することがわかった。前記した西斜面の75mの溝との関係を討議しながら調査を継続した。天神原遺跡は弥生時代後期後半の大集落址であることが次第に明らかになってきた。

47年1月20日より2月22日までは落合町赤野遺跡・下河内調査区の調査にも3名の調査員が不定期的ではあったが，併行して担当せざるをえないというきわめて，変則的な事態が生じ，天神原遺跡の調査が滞った。さらに2月11日より押入西遺跡の第二次調査を併行して実施することとなり，余儀なく調査員，作業員ともに新たな遺跡に従事し，一時天神原遺跡の調査を中断した。この時点で県教委は日本道路公団と協議し，天神原遺跡の調査は昭和47年4月から6月10日まで延長することになった。

昭和47年4月，当初から担当していた河本・下沢が異動し，橋本・柳瀬を中心に5月からは新東・田仲・高畑・栗野などの協力を得て調査を継続した。調査対象地点はA地点の南端部，C地点南半の約800㎡であった。C地点の南半は包含層が次第に厚くなり，約50～60cmであるためと調査期限が切迫しているため，やむをえず重機による表土除去を実施した。（C地点4区　5月20日）C地点では住居址7（20号～26号）と建物3棟，貯蔵穴1，柱穴多数が検出された。包含層からは弥生時代前期の土器片，表土からは須恵器片等が出土した。住居址のうち，20号・26号は古墳時代のもので，いずれも鍛冶炉をもっていた。

調査は昭和47年6月10日終了した。

日　　誌　　抄

昭和45年11月24日～12月2日　器材搬入，事務所建設，調査対象地域の清掃。

12月3日～9日　古墳墳丘清掃，写真撮影。

12月10日～15日　地形測量，縮尺 $\frac{1}{100}$ ，1m間隔の等高線，A地点完了，地形にあわせてグリッド基準線を設定，西偏12°

12月16日～18日　A地点の西斜面上に幅2mのトレンチを設定し南から第1トレンチ～第11トレンチとした。第1トレンチからは須恵器坏片，弥生式土器片などが出土しはじめた。

12月19日～24日　トレンチ掘り下げつづく，検出遺構の写真撮影。

12月25日～昭和46年1月10日　屋外作業休み。

昭和46年1月11日～13日　第6トレンチ掘り下げ，第7トレンチ掘り下げ，第8トレンチ設定，C地点地形測量，C地点グリッド設定，第8トレンチ掘り下げ。

1月14日～18日　C地点第1・第2トレンチ掘り下げ，遺構も検出，包含層から弥生式土器片が出土する。耕土層下は全面黒色の包含層がある。

1月19日～22日　C地点第Ⅱトレンチ残り，第Ⅲトレンチ東北部及び第Ⅰグリッドより柱多数検出，地山を掘りこんだ楕円形の遺構，A地点谷清掃，トレンチ設定。

1月23日　A地点トレンチ，3号墳・4号墳地形測量。

古墳のほぼ中央に原点をもうけ，原点で直交する二本の直線で区切る。4区を1～4区とした。A地点谷部分トレンチ掘り下げ，第Ⅲトレンチ南側に北東に走る幅約2mの溝状遺構が検出された。溝状遺構の性格を確認するために1部掘り下げた。

1月26日　2号墳測量，A地点谷溝状遺構写真撮影。

1月27日　3・4号墳表土除去，2号墳割付け，清掃，A地点谷写真撮影。

1月28日～29日　2号墳～表土除去，3号墳～表土除去と周濠追求（南西Ⅱ区の周濠上から須恵器出土），4号墳～表土除去と周濠追求。

1月30日　2・3・4号墳～周濠追求，第6トレンチ溝状遺構追求，弥生後期土器多数出土。

2月2日　2・3・4号墳周濠追求，4号墳Ⅲ区周濠より弥生土器の散布及び焼土確認，弥生の溝の追求のため北斜面に第7トレンチ設定，遺構確認，3号墳周濠上層より糸切底須恵器出土，1区周濠黒土上に昨日の須恵器と同類片出土，4号墳墳丘斜面より糸切底皿（土師質，須恵質共）

2月3日～5日　4号墳～墳丘周濠の清掃及び写真撮影，3号墳～周濠追求及び墳丘清掃写真撮影，2号墳～周濠追求，A地点溝状遺構断面実測，土器取り上げ。

2月6日　2号墳～周濠追求，3・4号墳～地形測量。

2月8日　2号墳～墳丘清掃，写真撮影，3・4号墳～主体検出，A地点溝状遺構第6トレンチ土器取り上げ。

2月9日　4号墳～1区から方格規矩文鏡（直径9cm）出土，主体部は不明，鏡の写真撮影と実測。3号墳～主体部の追求，北東－南西の主体部と思われる黒色土が検出された。

2月10日　3号墳～掘り方と検出と写真撮影。

2月12日　3号墳，中央部に旧地表の黒色土を掘りこんだ赤褐色の土壌が検出された。

2月13日　2号墳，墳丘測量，主体検出，墳丘中央部に主体と掘り方を検出した。3号墳，掘り方の平面，断面実測，掘り方の掘り下げ。

2月15日　3号墳，掘り方の部分を検出したが，又その下にさらに狭い掘り方と主体があったので写真撮影。

2月18日　2号墳，主体部検出作業，約10cm位下げる，黄色粘土が主体部（木棺）の形に部分的に検出された。南側掘り方はほぼ確認できた。3号墳，主体部検出，副葬品なし，写真撮影，主体部確認のために横断トレンチを入れ断面図作成（15cm幅）

2月19日　2号墳，主体部の写真撮影と掘り下げ（遺物なし），3号墳，主体部の写真

撮影，主体部の横断面の写真撮影，Ⅱ区掘り下げ，4号墳，主体及び掘り方の検出，主体部の西側肩がはっきりしないが一部想定の線を引き主体部とする。午後写真撮影をおえ，主体部の掘り下げを進めた（遺物なし），プラン実測，Ⅰ区マウンド削平をはじめる。

2月20日　2号墳，主体部掘り下げ，3号墳，Ⅱ区地山面まで掘り下げ，N－0 Section（3号墳・4号墳の周濠切り合いの状態の断面）写真撮影，主体部，A－0（主体断面）W－0 Section（周濠部，　鏡　出土状態），4号墳，主体部 Section 実測，Ⅰ区墳丘削平－黒色旧表土に炉址を検出する。対策委員会。

2月21日～25日　2号墳，主体部実測及び写真撮影，Ⅰ区Ⅱ区掘り下げ，墳丘掘り下げ，3号墳，Ⅰ区，Ⅲ区地山面まで掘り下げ，弥生時代の柱穴検出，Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区壁清掃，0－S，0－W，0－N，0－E断面写真撮影，0－W断面実測中，4号墳，Ⅰ区炉址写真撮影，Ⅲ区地山面まで掘り下げ，周濠より鏡の口縁部出土，Ⅲ区下壁清掃，写真撮影終了，Ⅲ区西壁，Ⅱ区西壁清掃，0－S，0－W，0－N，N－S断面写真撮影。

2月26日　2号墳，掘り下げと主体の断面実測，3号墳，0－Wの断面実測と鏡の取り上げ，野介代遺跡調査開始。

2月27日　2号墳，掘り下げ，3号墳，0－E断面実測。

3月2日～6日　2号墳，Ⅰ区・Ⅱ区の墳丘掘り下げとⅢ区・Ⅳ区の清掃，墳丘断面の写真撮影，3号墳，0－S断面実測，4号墳，Ⅰ区の弥生式土器取り上げ，西壁・北壁・南壁の実測完了と東壁実測，野介代遺跡の調査のため第一次調査を終了する。

3月9日　美作国府第二次調査開始。

第二次調査

昭和46年4月13日　B地点－トレンチ設定，地形測量，A地点－北斜面草刈。

4月14日　北側斜面トレンチ設定，B地点～トレンチ調査完了，住居址1，土壙墓1，ピット2を検出。

4月15日　A地点9号墳実測 $\frac{1}{50}$，北側斜面トレンチ1～3まで完了，谷・地形測量，D地点～トレンチ設定。

4月16日　D地点～トレンチ掘り下げ（遺構なし），9号墳～発掘開始，表土除去，C地点，グリッド設定（8m）

4月19日　9号墳周濠追求（直径12m位），E地点トレンチ4，住居址1と柱穴が多く出た。

4月20日～24日	9号墳周濠追求と清掃，写真撮影，E地点，地形測量，1号住居址検出，1号住居址の上に破壊された古墳があり陶棺の破片出土。表土除去（柱穴多数確認）1号住居址，柱穴群の検出と平面プラン検出及び清掃。
4月26日	E地点－1号住居址，柱穴群の清掃と写真撮影，内部掘り下げ。
4月27日	E地点－住居址掘り下げ，A地点，9号墳地形測量。
4月30日	E地点，1号住居址清掃後写真撮影，2号住居址－平面検出と一部掘り下げ，3号住居址－一部プラン検出，対策委員会。
5月1日～5日	作業休む。
5月6日	E地点，2号住居址，部分的に掘り下げ，床面検出と写真撮影，建物1－柱穴掘り下げ，周辺の柱穴掘り下げ，3号住居址－平面プラン径6m全面検出。
5月7日	E地点，3号住居址－平面プラン写真撮影と掘り下げ，2号住居址－床面検出（貼床，柱穴プラン確認）
5月8日～10日	E地点，1号住居址－平面実測と割付け，2号住居址拡張，ピット1～6掘り下げ，3号住居址掘り下げ，床面検出と清掃，E地点－表土除去。
5月11日～12日	E地点，1号住居址，住居址実測と土器断面図作成，土器断面実測と土器取り上げ,ピット柱穴を掘り始める。2号住居址，ピット6を含む横断面図作成，その他のピット掘り下げ（ピット7のセクション），3号住居址，柱穴の掘り下げと全面写真撮影，F地点－表土除去と住居址半分検出。
5月13日	E地点－1号住居址断面図実測，写真撮影，2号住居址，ピット6完掘，底面に土器片が密着して出土，ピット3断面実測，ピット7・8W－Eセクションにくり込み，ピット1完掘，F地点，4号住居址，5号住居址。
5月14日～15日	E地点，1号住居址断面実測完了，2号住居址－ピット8～11断面図完了，ピット1～11完掘し清掃と写真撮影（ピット4上面より石庖丁破片出土），3号住居址－柱穴掘り下げと写真撮影，実測のやり方，F地点－表土除去。
5月17日	E地点－西側表土除去，柱穴掘り下げ，F地点，表土除去。
5月18日	E地点，3号住居址，遺物，溝状遺構撮影，表土除去，2号住居址，貼床の部分を排土した後に別の周濠を確認する。F地点，表土除去，ピット掘り下げ，E～F地点にかけてグリッド杭設定。
5月19日	E・F地点2,400㎡，70%発掘1,680㎡。
5月20日	E地点，3号住居址実測，2号住居址写真撮影，F地点，ピット掘り下げ。
5月21日	E地点，2号住居址割付け，写真撮影，表土除去，F地点，写真撮影。
5月22日～25日	E地点，柱穴掘り下げ，表土除去，F地点，平板実測（用水路脇）
5月26日	E地点，2号住居址割付け及び平面実測，ピット群検出作業，F地点，4号

住居址プラン写真撮影，５号住居址プラン検出作業および写真撮影。

5月31日～6月2日　Ｅ地点，ピット群写真撮影と掘り下げ。

6月5日　Ｅ地点，ピット１０１・１０３・１０５断面実測，５号住居址掘り下げ，住居内に貯蔵穴と推定される４つ検出する。拡張と推定される壁帯溝を２本確認。

6月7日～8日　Ｅ地点，３号住居址，貼床を除去し古い時期の床面および周溝，柱穴を検出し実測を行なう（中央部に古いピット検出）写真撮影，５号住居址，写真撮影，ピット・周溝掘り下げ（ピットはいずれも浅く用途不明）中央ピット検出。

6月9日　Ｅ地点，３号住居址実測完了，４号住居址掘り下げ，写真撮影，グリッド設定，５号住居址－中央ピット・全景写真撮影，グリッド設定，６号住居址掘り下げ，Ｂ地点，トレンチ遺構なし，Ｇ地点，東谷斜面にトレンチ設定。

6月10日～14日　Ｆ地点，５号住居址実測，Ｅ地点－２号住居址実測，Ｇ地点－トレンチ掘完了，遺構は検出できなかった。

6月17日～21日　２号住居址－Ｂ Ｂ′断面図作成と完了，５号住居址－平面図，横断面図作成，貼り床除去，ピット１０８・１０９掘り下げ70～80cmの深さ。

6月23日　Ｆ地点－５号住居址，ピット１０７～１１１まで写真撮影，セクション断面実測後掘り下げる，６号住居址，平面図完了。

6月24日　５号住居址－新たにピット１１２発見，断面図作成後掘り下げ，６号住居址－断面図作成，写真撮影（完了）４号住居址，平面図，断面図，写真撮影（完了）

6月25日～26日　５号住居址－平面断面実測，写真撮影，Ｂ地点－土壙墓１，短頸壷１，平面断面実測，写真撮影，対策委員見学。

6月28日　Ｅ地点，柱穴群一部掘り下げ，Ｂ地点，住居址周辺の排土。

6月29日　９号墳主体部検出作業，Ｅ地点，柱穴群清掃，５号住居址$\frac{1}{2}$縮尺トレース。

6月30日　Ｂ地点，住居址周辺の排土，９号墳－黒色土掘り下げ，黒色土中に弥生の遺構が検出された。従って９号墳の主体は削平されたものと推定される。

7月2日　Ａ地点－８ｍグリッド設定。

7月3日～5日　Ａ地点－グリッド，表土除去，掘り下げ，Ｂ地点－表土除去，Ｆ地点－５号住居址実測，清掃，文化課調査員等見学。

7月6日～8日　５号住居址－写真撮影，実測すべて完了，９号墳－旧地表まで表土除去，Ａ地点，３Ｄ掘り下げ完了，グリッド３Ｄ地点より前期の土器（甕）出土。

7月9日～10日　Ａ地点－３Ｅ掘り下げ，表土除去完了後清掃（暗褐色層から須恵器片多数出

土），９号墳写真撮影，Ｂ地点，７号住居址写真撮影と掘り下げ，完掘，$\frac{1}{100}$平板実測，Ｅ地点一ピット群実測，土壙墓。

7月13日　Ａ地点，３Ｅ清掃（幅50cmの溝状遺構確認），３Ｄ黒色土層より須恵器片（壺２，高杯）多数出土。

7月14日　Ａ地点，３Ｄ掘り下げ完了，Ｂ地点，７号住居址写真撮影。

7月15日　Ａ地点，３Ｂ～Ｄの柱穴掘り下げ，３Ｆ，２Ｆ表土除去。

7月19日　Ａ地点，１Ｅ，２Ｅ表土除去。

7月20日　１Ｄ・２Ｄ・１Ｅ・２Ｅ表土除去，削りによる清掃。

7月21日　１Ｄ・２Ｄ・１Ｅ・２Ｅ柱穴掘り，１Ｃ・２Ｃ表土除去，９号墳土手除去。

7月22日～27日　雨天のため作業中止。

7月28日　１Ｂ・２Ｂ・３Ｃの清掃，３Ｆの表土除去。

7月29日　１Ｆ～３Ｆ表土除去，１Ｅピット２００３掘り下げ完了，ピット２００２掘り下げ中，写真撮影，２Ｄピット２００１一部写真撮影終了，Ａ地点のピット番号は２０００番台とする。１Ｃ石組遺構検出（高台付き土器・布目瓦出土）写真撮影。

7月31日　２Ｆ・３Ｆ表土除去，ピット２００１・２００３写真撮影，１Ｄ・２Ｄ清掃。

8月３日～４日　１Ｇ～３表土除去，１Ｇ・２Ｇ清掃，１Ｈ・２Ｈ表土除去。

8月５日　１Ｆ～３Ｆ，１Ｇ～３Ｇ，１Ｈ～３Ｈ，１Ｉ～３Ｉ溝状遺構。

8月６日　１Ｇ・２Ｇ・３Ｇ表土除去。

8月７日　１Ｈ～３Ｈ完了，２Ｉ・３Ｉ・３Ｌ表土除去完了。３Ｇ遺構検出作業，ピット２００１・２００２実測，２００４実測完了。

8月９日～10日　１Ｆ～３Ｆ・１Ｇ～３Ｇ・１Ｈ～３Ｈ・２Ｉ～３Ｉ遺構検出，１Ｇ～２Ｇ住居址１，１Ｆ住居址？，ピット２００１実測，土器取り上げ。

8月11日　ピット２００１実測，土器取り上げ，２Ｉ・３Ｉ・３Ｊ清掃，全景写真，柱穴掘り下げ，３Ｅの溝１掘り下げ，遺構見取図。

8月12日　Ａ地点，１区２区柱穴掘り下げ，２００１実測，２００５実測土器取り上げ，１Ｄ・２Ｄ遺構検出。

8月13日　Ａ地点２区１Ｄ・２Ｄ土壙の検出作業，土壙２００６掘り方はじめる。口縁部直下に３本の沈線をもつ甕が出土（前期の土壙か？），ピット２００７掘り下げ開始，ピット２００１セクション実測，１Ｄ・２Ｄ数基の土溝が検出，１区柱穴・住居址掘り下げ開始。

8月17日　Ａ地点，９号住居址１Ｆに検出，写真撮影，10号住居址１Ｇ～２Ｇにかけて検出，床面一部検出，住居址内に　・坏・高坏・土師器・壺を伴う土壙墓検

出（２００８）

8月18日　８号住居址１Ｅで検出，10号住居址床面検出（４本柱）住居址内より小型台付き壷・浅鉢・高杯検出，ピット２００８写真撮影，ピット２００１実測，土器取り上げ。

8月19日～21日　ピット２００１実測，８号住居址一部掘り下げ，写真撮影，４本柱検出，周辺部ベット状をなす，床面検出，ピット２００９掘り下げ，プラン検出，写真撮影完了，土壙墓，土器実測，取り上げ（２００８），10号住居址床面検出，清掃と写真撮影，柱穴掘り下げ，１Ｈ遺構検出。

8月24日　８号住居址一床面追求作業，柱穴掘り，10号住居址柱穴掘り，西斜面溝第１調査区（８Ｃ～８Ｄ）表土黒色土の排土。

8月25日～26日　８号住居址一土手の写真撮影終了後実測完了，土手のとり払い，９号住居址平面実測完了，10号住居址一中央ピットの断面・写真撮影と実測，三条の溝，周溝の掘り下げ，ピット２００９円形の溝掘り上げ，（溝の底から土師器の壷出土），溝第１調査区一表土並びに黒色土の除去完了，溝第２調査区一耕土層の除去開始，対策委員会。

8月27日～31日　西斜面地形測量，溝第３調査区一表土除去，８号住居址一東半分の柱穴を探るる作業，床面検出，溝掘り下げる。

9月１日～２日　溝第３調査区完了，溝第４調査区掘り始め，表土除去，ピット２００１実測と土器取り上げ，ピット２００１溝状掘り上げ，ピット２０１２・２０１３・２０１４掘り上げ，Ａ地点一遺構平板実測（$\frac{1}{100}$）

9月３日～４日　溝第４調査区表土除去，Ａ地点小ピット掘り下げ，ピット２００１掘り下げおよび図面作成（13枚目），８号住居址写真撮影，ピット２０１０掘り下げ。

9月７日～８日　溝第Ⅳ調査区表土除去完了，溝第Ｖ調査区表土除去開始，Ａ地点１区・２区一平板実測完了。

9月９日～13日　溝第Ｖ調査区表土除去，ピット２００１ほぼ完了，写真撮影完了，８号住居址写真撮影，９号住居址実測完了，10号住居址割り付け，ピット２０１１（ⅢＥ）写真撮影ピット２０１０清掃と写真撮影。

9月14日～16日　ピット２０１０写真撮影完了，割り付け完了，８号住居址～割り付け，平面実測，10号住居址～土器実測と平面実測，遺物実測，取り上げ，文化課調査員見学。

9月20日　４Ｋ・５Ｋ表土除去，久米東（宮尾遺跡）第一調査開始，橋本が担当。

9月21日　ピット２０１０実測開始，ピット２０１４遺物検出作業，対策委員会。

9月22日　８号住居址平面実測，断面図完了，10号住居址平面実側，ピット２０１０平

面実測，４Ｋ・５Ｋ・４Ｊ→５Ｊ遺構検出作業。

9月23日　４Ｋ・５Ｋ清掃，溝第Ｖ調査区清掃。

9月25日～27日　４Ｉ・５Ｉ・６Ｉ表土除去，８号住居址～柱穴断面及び見透し図作成，平面図補足，10号住居址，セクション断面図。

9月28日～29日　８号住居址，Ｄ～Ｄ′断面図作成，10号住居址～断面図完了。５Ｈ・４Ｈ表土除去，ピット２０１０一あぜのとり払い後清掃，写真撮影。

9月30日～10月１日　10号住居址一ピット２００９完了，２０１０プラン完了，８号住居址一Ｔ３完了，４Ｈ・５Ｈ表土除去，清掃。

10月２日　４Ｈ・５Ｈ耕土排土。

10月５日　８号住居址一４Ｔ（柱穴）写真撮影，５Ｈ・４Ｈ・４Ｉ・５Ｉ遺構検出作業。

10月６日　８号住居址掘り上げ完了，写真撮影，柱部分写真撮影，ピット２０１４土器検出作業４Ｊ一シスト実測，写真，掘り下げ，ピット２０１０実測，掘り下げ。

10月13日～14日　４区完了，ピット２０１０実測，

10月15日　５Ｋ一ピット掘り，Ａ区のグリッド設点。

10月18日～23日　Ａ地点４区一遺構検出作業及び柱穴・ピット掘り下げ，５Ｋ長辺１ｍ90，短辺１ｍ10，長方形土壙確認，ピット内より遺物が多く出る。

10月25日～26日　Ｈ一４区ピット住居址と確認，11号住居址一溝状遺構掘り下げ，10号住居址写真撮影，土器整理。

10月27日　11号住居址一掘り下げ，床面溝およびピット（柱穴）を残してほぼ完了，断面写真撮影，12号住居址一プラン確認，掘り下げ，ピット２０２０掘り下げ（12号住居址をきっている。）溝状遺構掘り下げ。

10月28日～30日　11号住居址一清掃後柱穴周溝プランの写真撮影，12号住居址とピット2010の掘り下げと実測。

11月２日～４日　ピット２００９，土層断面の実測と土堤取，12号住居址掘り下げ，土層断面作成，ピット２０２０写真撮影，ピット２０１９土層断面作成。

11月５日～９日　ピット２０１０一写真撮影，溝㋐㋑㋒㋓㋔まで掘り初める。㋓の一層二層の設点近くから土器集中がみられた。ピット２０２０平面図作成，溝掘り，ピット２０１０写真撮影，シスト写真撮影，ピット２０２０断面図作成，11号住居址一割付け後平面実測開始。

11月10日　ピット２０２０写真撮影，断面図作成，ピット２０１０平面図作成，11号住居址平面図作成。

11月11日　ピット２０２０実測完了，12号住居址一ピット２０２０にかかる部分の掘り

下げ。

11月12日　溝レ・ソ一土器検出作業，溝イ～ツまで清掃，ピット２０２１掘り下げ完了，12号住居址・12Ｈ一清掃後写真撮影。

11月15日～16日　３区表土除去，12号住居址写真撮影，木炭検出作業，ピット２０１０実測完了。

11月17日～22日　ピット23検出，写真撮影，掘り下げ，４Ｅ・５Ｅ・６Ｅ・７Ｅ表土除去，Ａ３区耕土除去，11号住居址平面図実測，12号住居址，炭化材の検出，写真撮影，実測，割付け，13号住居址プラン検出，溝イロハニまで写真撮影。

11月23日～26日　13号住居址掘り下げ，３区拡張，12号住居址一平面図・木炭断面実測および床面・柱穴の検出完了，11号住居址，平面図，断面図実測，３Ｅ耕土除去，文化課調査員会議。

11月27日　対策委員会。

12月２日　調査員会議。

12月３日～７日　12号住居址平面実測，13号住居址一中央ピット検出および割付け，14号住居址一石および土器出土状態写真撮影，割付け，15号住居址掘り下げ，16・17号住居址検出。

12月８日　12号住居址木炭断面，15号住居址掘り下げ，断面清掃，写真撮影，16号住居址掘り下げ，ピット２０２０・２０２３・２０２４掘り下げ，11号墳掘り下げ，３区除去，グリッドくいうち。

12月10日～13日　12号住居址木炭取り上げ．ピット中央穴掘り下げ，写真撮影，実測，15号住居址断面実測図・溝掘り下げ，13号住居址実測，11号墳一掘り下げほぼ完了，写真撮影，14号住居址一平面・断面実測完了，写真撮影，17号住居址プラン検出，対策委員会。

12月14日～18日　14号住居址遺物取り上げ，溝ピット掘り下げ，写真撮影，15号住居址遺物出土状況写真撮影，16号住居址掘り下げ，３区清掃，２０２８は周溝を持つピット，１２３Ａ・１２３Ｂ耕作土排土，３Ｅ柱穴掘り下げ。

12月21日～22日　11号住居址外溝断面写真撮影，実測，14号住居址平面図，断面図実測，15号住居址一柱穴プラン写真撮影，ピット２０２３平面実測。

12月23日～24日　ピット２００１割付け，実測，10号住居址一外溝の検出・掘り下げ，13号住居址実測終了，ピット２０２３断面実測，17号住居址掘り下げ，１Ｂ・２Ｂ・３Ｂ耕土除去，３Ｂより石庖丁出る。15号住居址平面実測と柱穴掘り下げ，18号住居址平面実測，天神原遠景写真撮影，１Ａ～３Ａ表土除去。

12月25日　10号住居址排水溝平面実測，13号住居址断面実測，18号住居址断面実測，ピ

ット２００１底面検出，ピット２０２８検出・写真・土壙墓・２号墳下清掃，１Ａ～３Ａ盛土除去，地神撤去。

12月26日～昭和47年１月５日　作業中止。

昭和47年１月６日　Ａ地点２区耕土除去。

１月10日　西斜面グリッド設定，２区平板実測 $\frac{1}{100}$，４区南遺構検出，押入西小屋，事務所完成。

１月12日　排水作業，展示会用の遺物写真撮影。

１月13日　西原遺跡土器洗い，遺物整理，地図，図トレース，展示会用スライド。

１月14日　報告書図面トレース，Ｂ地点掘り下げ，住居址・柱穴検出，西原遺跡土器洗い。

１月15日　Ｂ地点掘り下げ，２間×３間の柱列確認，図面トレース，12号住居址復元，西原遺跡土器洗い。

１月17日　連絡会議，東備西播分布調査。

１月18日　溝イロハニホ掘り，排土，報告書作成。

１月19日　溝イ～ホ～チまで掘り下げ，写真撮影。

１月20日　土器整理，西原遺跡土器洗い，赤野遺跡調査開始。

１月22日　ホにかかる土層断面作成，６Ｉ・６Ｈ掘り下げ，６Ｊ溝を横断面実測，６Ｋ土器出土状態実測，⑪まで掘り下げ。

１月23日～25日　土器整理，展示用土器復元。

１月26日　５Ｅ平面実測，11号墳平面実測，溝７Ｇ・７Ｈ（ヌ・ル・ヲ区）掘り下げ，ピット２００１写真撮影（展示用）

１月27日　溝ヲ～カまで掘り下げ，ヌまでの実測のやり方設定，11号墳平面実測完了，５Ｅ平面実測，土器洗い。

１月28日　６Ｉ～７Ｉ平面実測完了，ヲまで溝の排土完了，土層の写真撮影，キまで溝の排土行なう。

１月29日　ヨ一掘り下げ，11号墳，Ｂ～Ｂ′断面写真撮影，実測，５Ｅ実測，対策委員会。

１月30日～31日　溝８Ｅ・９Ｅ・９Ｄ掘り下げ，５Ｅ実測，11号墳Ｂ～Ｂ′断面図完了，溝８Ｇ・９Ｇ。

２月１日　溝出土土器洗い，土器図トレース。

２月２日　ピット２０２４・２０２７セクション実測，ピット２０２５写真撮影。

２月３日　５Ｅ実測，補足調査，溝ツ掘り下げ，土器整理。

２月４日～８日　土器洗いと整理，Ｂ地点柱穴掘り下げ，５Ｅ遺構掘り下げ。

2月9日	B地点山道にかかる柱穴掘り下げ完了，13号住居址一貼り床の除去，写真撮影，ピット２００９柱穴掘り，土器整理，６Ｆ～
2月10日	図面整理。
2月12日	天神原遺跡の調査を中断し押入西遺跡の調査に従事する。
3月1日	調査員１名が溝の調査再開，断面図作成。
3月3日	２の土層セクションを取る。土手の撤去を行なう。
3月4日	溝土器溜りNo.３，平面実測。
3月6日	連絡会議。
3月7日	土器溜り，No.３平面，断面終了。
3月8日	土器溜りNo.５の平面実測，溝土層，セクションNo.３完了。
3月9日	土器溜り，No.５平面実測終了。
3月10日	土器溜りNo.５断面図作成，溝西端の落込みを掘る。
3月11日	No.４土層断面作成，土器溜りNo.５～６取り上げ，溝に残る土器溜りおよび土層断面ほぼ完了。
3月13日～14日	溝土層セクションNo.１の作図完了，溝の西端より北よりに50cmの所の落ち込みを掘る。
3月15日	C地点一調査開始のためにベルコン設営．溝西側より弥生中期の土器出土，17号住居址一セクション実測作成。
3月16日～18日	17号住居址セクション土手の写真と撤去，C地点の北から東よりに耕土除去開始，津山文化センターで展示会（18日まで）
3月19日	溝の西側遺構掘り下げ，16・17号住居址掘り下げ，19号住居址検出，掘り下げ。
3月21日	係会議。
3月22日	16号住居址一土層断面の作図と写真撮影，柱穴掘り，17号住居址一排水溝を掘る。C地点耕作土除去，道路公団津山工事事務所長見学。
3月23日～31日	C地点一北側の耕土，排土作業，耕土を約20cm厚さ除去すると地山面が露出し柱穴が多数検出されている。
4月1日～8日	土器整理（押入西），図面整理。人事異動により，河本・下沢転出。
4月11日	溝平面図
4月12日～14日	C地点耕土除去，ベルコン７台小中遺跡へ・５台平遺跡へ搬出，A地点15号住居址一柱穴掘り下げ，平面実測，17号住居址平面図作成，16号住居址一ピットおよび排水溝を掘る。
4月15日～16日	雨天のため作業中止。

4月17日	連絡会議。
4月18日～21日	C地点耕土除去，16号住居址一平面図，土層断面図，写真完了。
4月22日	15号住居址一平面・断面実測全体写真撮影完了，16号住居址一断面図・全体写真終了，C地点耕土除去。
4月24日～25日	15号住居址一平面実測と補足調査，19号住居址一プラン清掃，写真撮影，C地点耕土除去，新東主事応援（5月末まで）
4月26日	土器整理（押入西）
4月27日	C地点耕土除去，A地点一全体写真および部分写真，19号住居址掘り下げ。
5月1日	係会議。
5月2日	19号住居址一柱穴掘り下げ，割付け，断面図作成，ピット２０１８平面実測，割付け，ピット２０１９・２０２０写真撮影，A地点～３区平板測量完了，開発公社林技師・大賀技師応援。
5月3日	ピット２０１９～平面実測完了，ピット２０２０～平面実測完了，ピット２０１８～平面・断面実測，遺物出土状態写真撮影，16号住居址～補足調査，19号住居址～中央ピットから放射状にのびる溝，壁溝，排水溝の掘り下げ，A－４－G・A－４－Fのピット確認作業，栗野・高畑・二宮・田仲主事応援。
5月4日	A地点Ⅱ区・Ⅳ区，B地点の平板実測，ピット２０１９・２０２０完了，ピット２０１８～平面・断面実測と掘り下げ，19号住居址～排水溝，写真撮影，柱穴，断面実測，出土遺物整理。
5月5日	19号住居址～平面実測，断面図，写真，遺構写真，Ⅱ・Ⅲ区～柱穴確認，B地点～建物Ⅲ，ピット２０１８～実測・写真，土器取り上げ，ピット2027～平面実測。
5月6日	19号住居址～平面図作成終了，遺構掘り下げ，平面写真，16・17・19号住居址～写真撮影，A地点～平板実測完了，全体写真撮影，B地点～建物Ⅱおよび Ⅲ検出，写真撮影，C地点～Ⅰ区柱穴掘り下げ。
5月7日～8日	19号住居址～遺構検出，掘り下げ，建物２・３～実測，平板測量完了，C地点～測量，遺構掘り下げ，遺物整理。
5日9日	19号住居址～断面図作成，C地点～遺構掘り下げ。
5月11日	19号住居址～下層の柱穴検出，断面実測，建物Ⅱ・Ⅲ～掘り上げ写真終了，全体写真撮影。
5月12日	19号住居址～最終掘り下げ，断面実測，写真撮影，C地点～遺構検出，掘り下げ。

5月13日	遺物整理。
5月15日	C地点～遺構検出，平板実測，22号住居址～検出，掘り下げ，20・21号住居址～検出，一部掘り下げ，4区包含層掘り下げ，1区完了。
5月16日～17日	22号住居址～写真撮影，平面・断面実測完了，19号住居址～補足実測，20・21号住居址～掘り下げ，C－4区包含層掘り下げ。
5月18日	C地点2区～23号住居址検出，約11m，20号住居址～炉検出，3区・4区～平板実測。
5月19日	C地点～23号住居址検出，20号住居址検出，第1トレンチ実測。
5月20日	C地点4区～第2トレンチ西側断面実測，24号住居址～検出，掘り下げ，21号住居址検出，掘り下げ，C地点4区～ブルドーザーにより表土除去，ピット4402～土器取り上げ，20号住居址～検出，掘り下げ，対策委員会。
5月21日	C地点3・4区～表土除去，23号住居址掘り下げ，4区～清掃，遺構検出。
5月23日	C地点～4区清掃，検出，20・21号住居址掘り下げ，3区～清掃，検出。
5月24日	20号住居址～実測・遺物取り上げ，写真撮影，23号住居址～上面貼床部分の除去。
5月25日～27日	20・21号住居址～平面実測，23号住居址～平面実測，24号住居址～掘り下げ，床面土器出土状態写真撮影，土層断面写真撮影，実測，25号住居址～平面プラン検出および掘り下げ，写真撮影，26号住居址～平面遺構検出後写真撮影，平面実測，C地点3区・4区～遺構検出作業，3区～ピット，柱穴検出作業，ピット4301・4302・4303・4304・4306・4307～プラン，写真撮影，掘り下げ，断面。写真整理。
5月29日	20号住居址～鍛冶炉，断面調査，23号住居址～平面実測，貼床部分断面撮影，24号住居址～ピット掘り下げ，平面写真，実測割付け，25号住居址～写真撮影，実測割付け，26号住居址～鍛冶炉，断面調査，ピット4302掘り下げC地点3・4区～遺構検出作業，写真整理。
5月30日～31日	23号住居址～平面実測，24号住居址～平面実測，写真撮影，遺物取り上げ，25号住居址～写真撮影，断面実測，26号住居址～鍛冶床断面実測，写真，ピット4301～平面・遺物実測，ピット4302・4304～掘り下げ，井戸か，C地3・4区～遺構検出。
6月1日	20号住居址～鍛冶炉断面実測，23号住居址～平面実測，中央ピット～十字断面実測図，排水溝断面図，24号住居址～平面実測図，貯蔵穴掘り下げ，ピット4404～掘り下げ，C地点3・4区～柱穴半断面掘り下げ，D地点谷溝，ピット断面，セクション図，写真撮影。

6月2日	20号住居址～鍛冶炉断面，写真撮影，23号住居址～排水溝完了，全体写真完了，平面図ほぼ完了，24号住居址～平面図完了，ピット４３０１・４３０４～掘り下げ，断面図作成，平面図作成，Ｃ地点～Ⅱ・Ⅲ区・建物Ⅳ～柱穴掘り下げ。
6月3日	24号住居址補足，土器整理，器材整理。
6月4日	排水作業，24号住居址～写真撮影，Ｃ地点～３区写真，４区～建物Ⅳ検出，写真，建物Ⅴ写真。
6月6日	Ｃ地点～全体写真，柱穴，土器掘り上げ，器材整理。
6月7日	遺物（押入西遺跡）を平遺跡へ運搬，ベルコンを宮尾遺跡へ運搬。
6月8日	23号住居址～断面実測，24号住居址～遺物実測，掘り下げ，26号住居址～写真撮影，狼谷・北山・宮尾遺跡へ器材搬出。
6月9日	23号住居址～断面実測完了，24号住居址補足，27号住居址～対策委員からの指摘で宅地の一部にトレンチを設定し検出，ピット４３０１～掘り下げ，実測，写真撮影，津山市立中央公民館へ天神原・押入・西原・野介代遺跡の遺物搬出，小中遺跡へ器材搬出。
6月10日	27号住居址～実測，写真，平遺跡へ器材搬出。

第3章　遺跡の地理的　歴史的環境

岡山県津山市街地の東に，吉井川の支流，加茂川の低地がひろがっている。加茂川が形成した最大の低地である。

低地は海抜90m～１０５mで低位の段丘もみられる。低地の中央部を蛇行して流れる加茂川も川東，浜崎井の口に流路を残しているが右岸には比高約２m前後の沖積段丘がみられ，かなり早くから安定していたと考えられる。

この低地の北辺には標高１６０m～１４０mの第三紀丘陵がめぐっている。

北辺に高野丘陵，西辺に川崎丘陵，東から南にかけて河面，河辺丘陵である。これらの丘陵は津山盆地において一般的に見られる景観で樹枝状に侵食され，谷水田が谷頭部までおよんでいる。また，加茂川の右岸高野本郷の夜半寺，西高下，高野山西の山西，左岸の天神原，河辺，上原には標高１２５m前後の段丘がみられる。天神原遺跡はこの段丘に位置している。

天神原遺跡は天神原古墳群，天満神社支群として，古墳７基の存在が知られていた。

弥生時代の遺構の存在は第一次調査前の表面採集による二片の土器であったが，数年前にピット状の遺構を渡辺健治氏が発見されていたことが後日明らかになった。したがって，天神原遺跡と呼称することにした。

本遺跡の周辺では国分寺付近より旧石器時代の万能石器が採集されている。縄文時代の遺物は津山盆地東部はきわめて少なく，弥生時代前期の遺物も天神原遺跡の出土例は，一丁田遺跡についで，津山市で二例目というほどである。しかし弥生時代中期以後の遺跡は増加する。

岡田遺跡は昭和46年津山市教育委員会が調査し，弥生時代中期～後期の集落であることが明らかになった。住居址，袋状の貯蔵穴がかなり検出された。また，井の口車塚付近からも弥生時代後期の土器が採集されている。

古墳の分布は加茂川の低地をめぐって，きわめて多いし，発掘例も比較的多い。

高野山西にある正仙塚は全長65mの前方後円墳で，長持形石棺からは直径１１.８cmの舶載鏡「半円方形帯神獣鏡」「変形四獣鏡」勾玉，管玉，鉄器，土器師などが出土し４世紀末に比定されている。（註１）

押入飯綱神社古墳群は４基の古墳で構成されそのうち，昭和45年調査された３号墳は，１辺約11mの方墳で二段の葺石をもち，箱式石棺を主体部にもっていた。（註２）

さらに南の能満寺古墳群は24基で構成される後期の群集墳で，調査されたＥ古墳は小横穴石室内に陶棺２個があり，６世紀末葉に比定されている。

加茂川の左岸では近長四塚古墳群がある。全長52mの前方後円墳，１辺17mの方墳，２基の円墳で構成され，加茂川からの用水のとり口の丘陵上に位置する５世紀代の古墳である。河面には河面丸山２号墳は土師器の亀甲型陶棺を内蔵していた。

さらに，加茂川の攻撃斜面に比高約50mの第三紀丘陵があり，丘陵上には5支群44基で構成される井の口古墳群がある。マイマイ塚支群は10基で主墳井の口車塚（マイマイ塚）は全長36mの帆立貝式古墳で葺石，形象埴輪，須恵器，などが出土し，5世紀代に比定されている。また，車塚の陪塚と思われる円墳からは家形埴輪が出土している。(註3)

天神原支群は15基でほとんど陶棺を内蔵する。横穴式石室墳である。本調査の対象となった天満神社支群は8基で構成され，1号墳は南端に位置する直径約20m高さ2.5mの円墳で，一部盗掘をうけている。2号墳は調査の結果直径10m，高さ1.3m木棺直葬墳であった。3号墳は直径10m，高さ1mの木棺直葬墳で，周濠から須恵器　，坏が出土し，6世紀初頭に比定できる。4号墳は約9m，高さ1.1mの木棺直葬墳で，変形方格規矩文鏡が1面出土した。5号墳は天満神社の境内にあるがその$\frac{2}{3}$以上を破壊されている。6号墳は前方後円墳と考えられ，河原石が散乱しており葺石の存在が考えられる。長さ25m，後円部の高さ4mを測る。7号墳は最も北端に位置する直径約20m，高さ1.5mの円墳である。8号墳はやや西よりの突出部にあり，破壊された横穴式石室墳で，直径13m，高さ2mの円墳である。

なお，本調査の結果，削平された円墳が3基と小型の横穴式石室が検出された。9号墳は直径約9m，10号墳は　9m，11号墳は，河原石を使った石室であるが破壊されていてその正確な規模は明らかではない。

以上のように，天満神社支群は6号墳，7号墳を主墳にした古墳群である。

美作国分寺の東丘陵上には観音山古墳群，長畝山古墳群がある，後者は北支群16基，南支群12基で構成されている。

広戸川の左岸にも前方後円墳を含む古墳群が存在している。

歴史時代では加茂川の低地に条里制地割が遺存している。美作国分寺は瓦類，円面硯，塼，礎石なども出土し，現在の国分寺を包括した2町四方の寺域が考えられている。高野の夜半廃寺は平安時代建立の寺院址である。

註－1　津山市史　第一巻　原始・古代　昭和47年
　　2　岡山県理蔵文化財発掘調査報告　4飯綱神社古墳　1973
　　3　渡辺健治氏のご教示による。

第4章　第一次調査の概要

第一次調査は昭和45年11月24日より昭和46年2月10日まで古墳の調査とトレンチによる弥生時代の遺構の広がりを確認する目的で調査を実施した。

天満神社支群2号墳

直径約12m，周湟から高さ1.5mの円墳である。

主体部は，墳丘の中央に東西に設けられた木棺直葬である。木棺は青灰色の小石まじりの粘土で固められた，長さ2.2m，幅0.5m，深さ0.3mを測る。棺内には全く遺物が検出できず，棺外においても同様であった。

墳丘は，旧地表面をわずかに整地したのち，周囲から採土して盛り上げており，盛り土の厚さは0.5mであり，周湟と思われる幅1.2mの部分は土取りのあとと考えられる。

遺物は，墳丘盛土内から出土した須恵器片が数個だけで，古墳の時期決定の資料とはなりえない。

天満神社支群3号墳

直径10m，周湟よりの高さ0.7mの円墳である。

主体部は，墳丘中央にほぼ東西に設けられた木棺直葬である。木棺は旧地表を約10cm堀り込んでおり，堀り方は更に広い。木棺は長さ2.2m，幅0.5mで，深さ0.3mで，棺内からは遺物は検出できなかった。

墳丘は土砂が流出して低くなっているが，幅1.6m，深さ0.2mの周湟がめぐっている。そして，旧地表上の盛り土は，墳頂で0.5mを測る。

棺外遺物としては，南西部の墳丘斜面と周湟内に須恵器片が散布しており，須恵器坏蓋1，（口径12cm，器高5.7cm），坏身1，（口径11cm，器高4.8cm），完形に近い瑞1，（口径約9.8cm，器高10cm，胴部最大径11cm，西側周湟底から出土・肩部と口縁部に波状文）が確認できた。

それらの遺物から，この古墳の時期を6C初頭と考えて妥当ではなかろうか。

天満神社支群4号墳

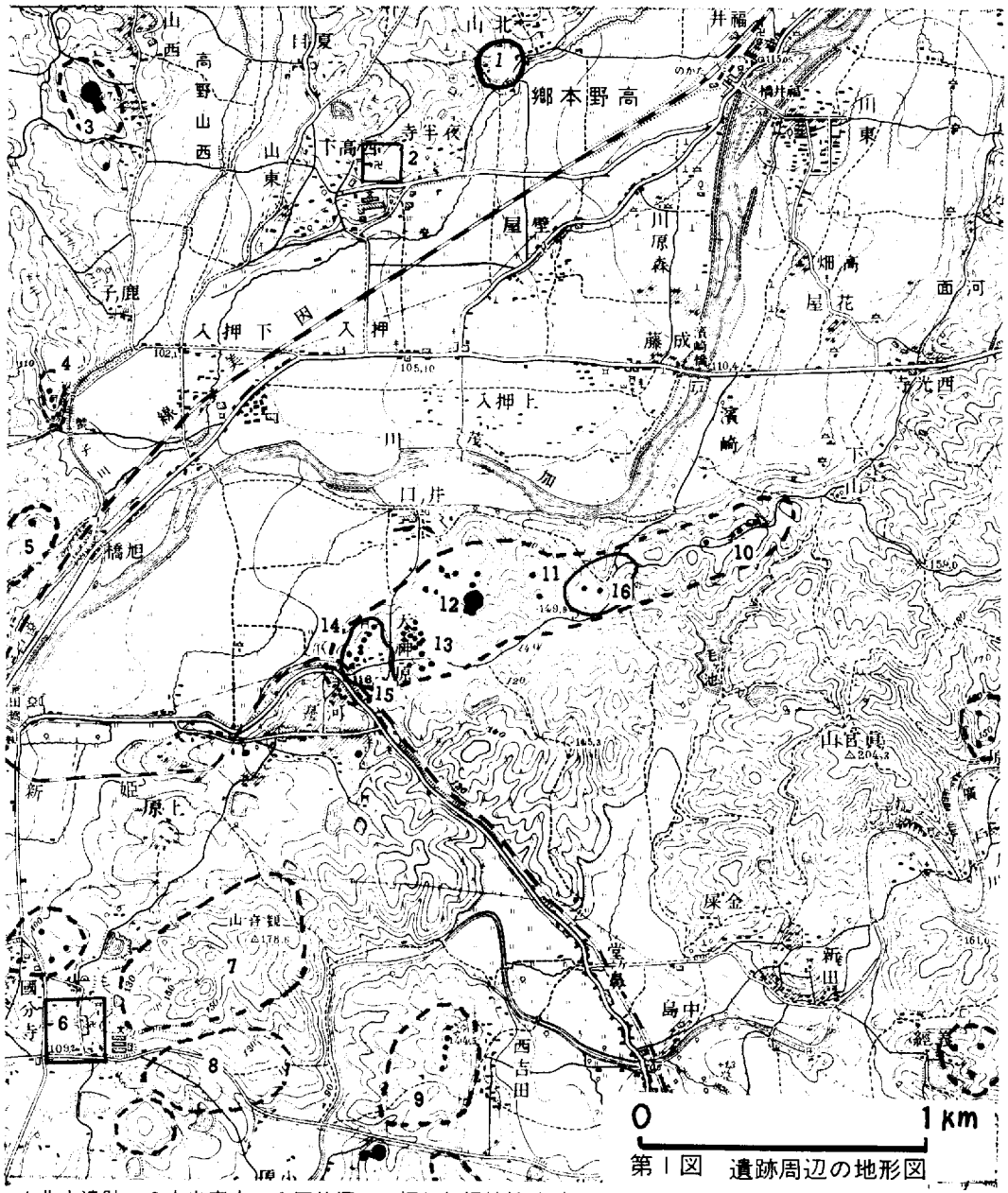
直径8m，高さ0.8mの円墳である。

主体部は，北東〜南西向きに，中央よりやや北にかたよって設けられた木棺直葬である。長さ2m，幅0.6m，深さ0.3mを測るが，木棺の北に青銅鏡が南に向けて出土した。鏡は仿製鏡で，直径0.9m，鏡背文は変形の方格規矩文である。墳丘の盛り土内からは数片の須恵器片が出土しただけであった。

旧地表上への盛り土としては，現墳頂まで0.6mを測り，周湟は幅1.3m，深さ0.2m墳丘の周囲をめぐっている。

天神原遺跡

天神原における中国縦貫自動車道の用地内の総面積は13,000m²をこえる。



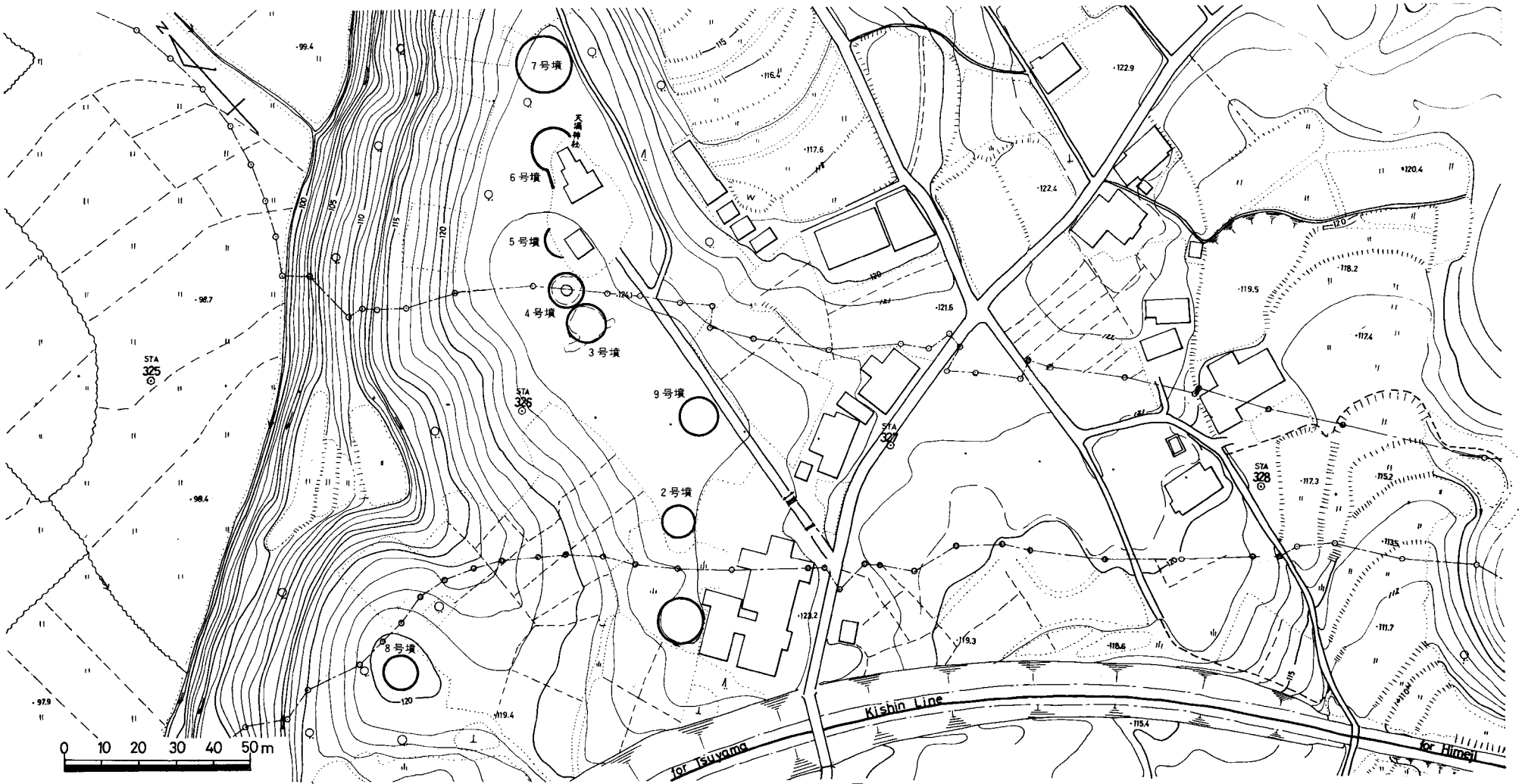
第1図　遺跡周辺の地形図

1北山遺跡　2夜半廃寺　3正仙塚　4押入飯綱神社古墳群　5能満寺古墳群　6美作国分寺
7観音山古墳群　8長畝山古墳群　9西吉田古墳群 10井の口古墳群三毛ヶ池支群　11岡田支群
12マイマイ塚支群　13天神原支群　14天満神社支群　15天神原遺跡　16岡田遺跡

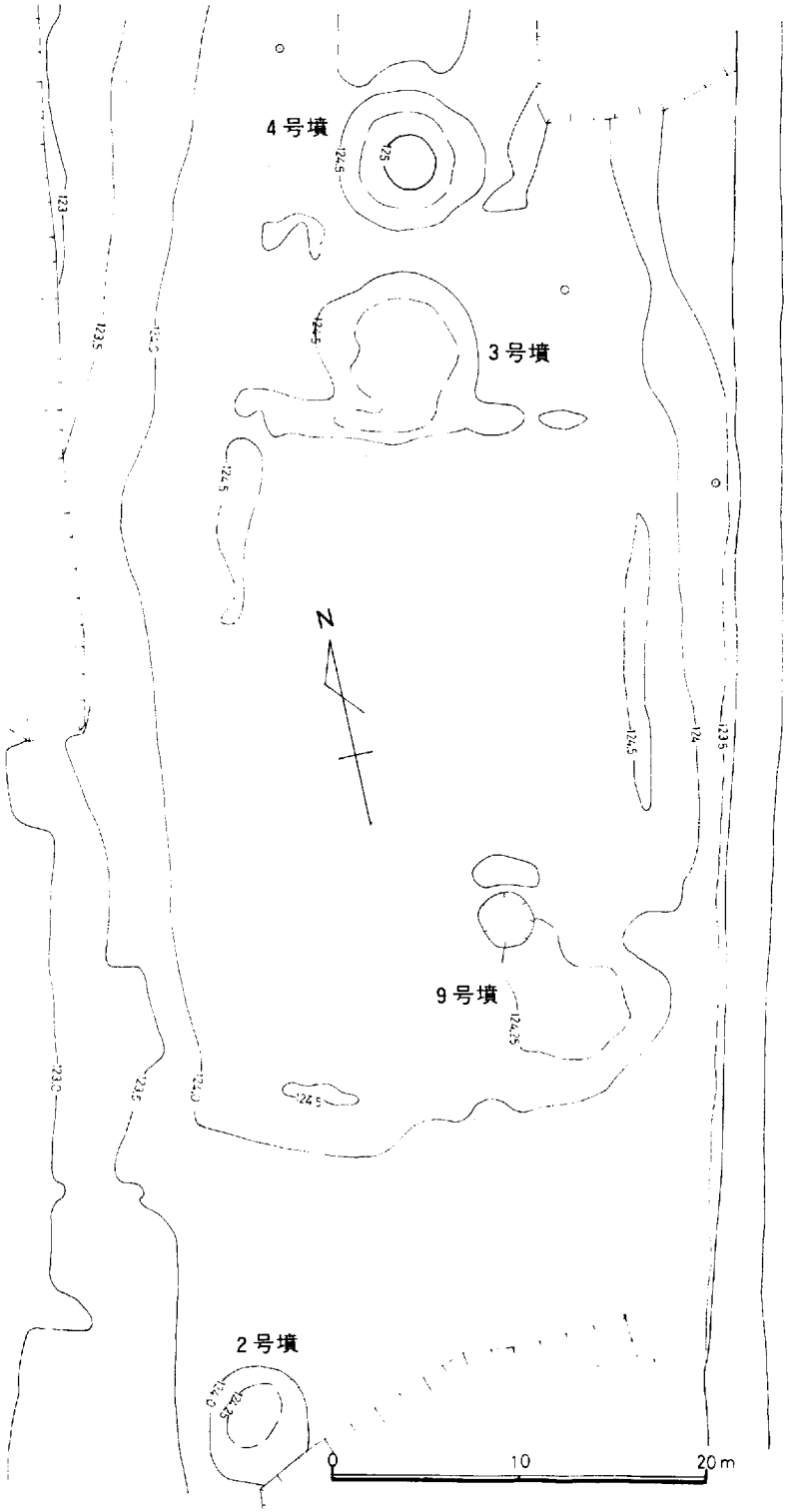
舌状段丘と西斜面を含めた地域をA地点とし，東の緩斜面をB地点，B地点と道路をへだてた東の畑をC地点とした。A地点とC地点は4mのグリッドを設定したが，トレンチは，幅2mのものを4m間隔に設定した。B地点は2m×2mの坪掘りをした。

◇　A　地　点

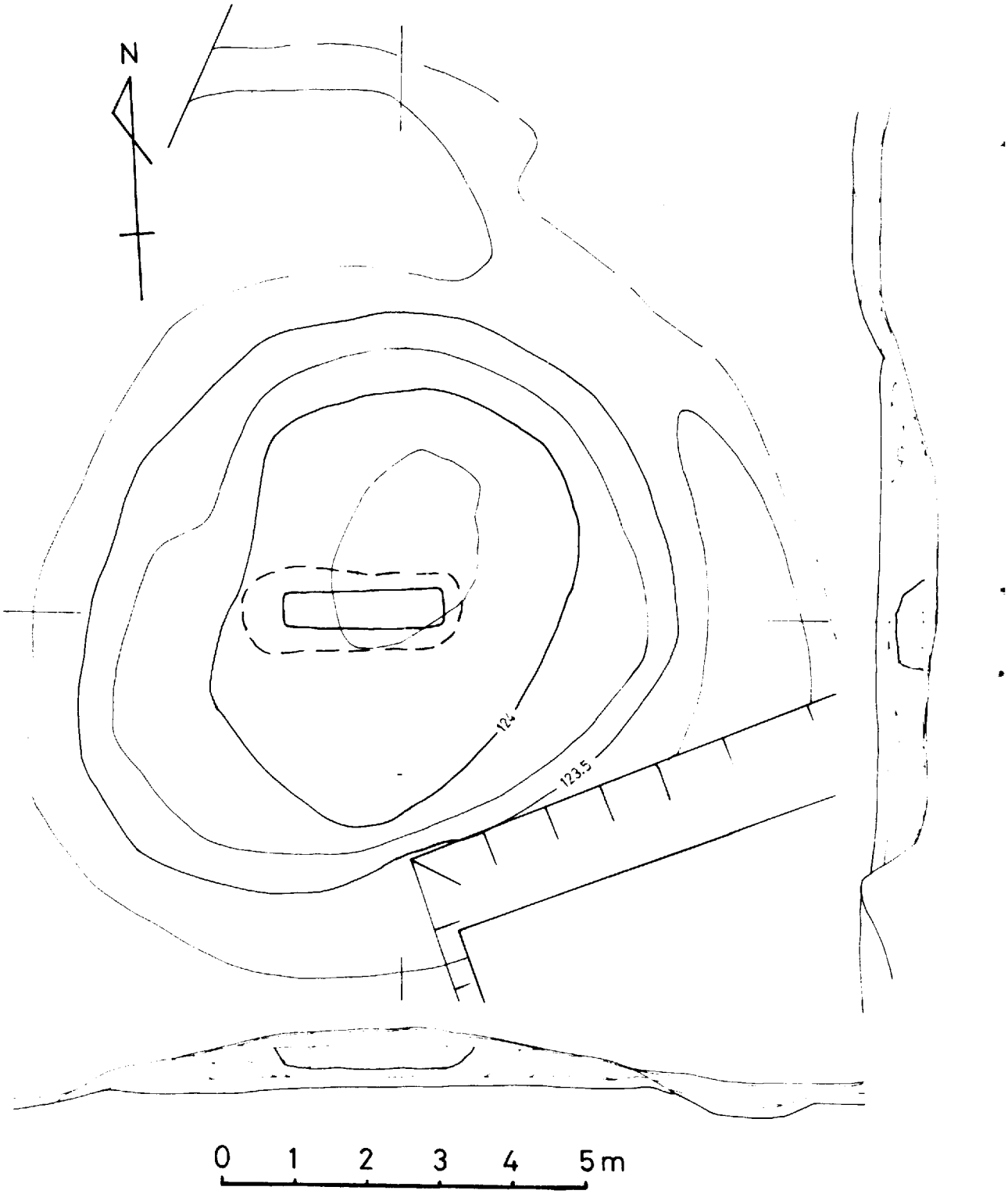
古墳の立地する段丘上は，古く神社の敷地であったらしく，遺構は削平されていると考え段丘の



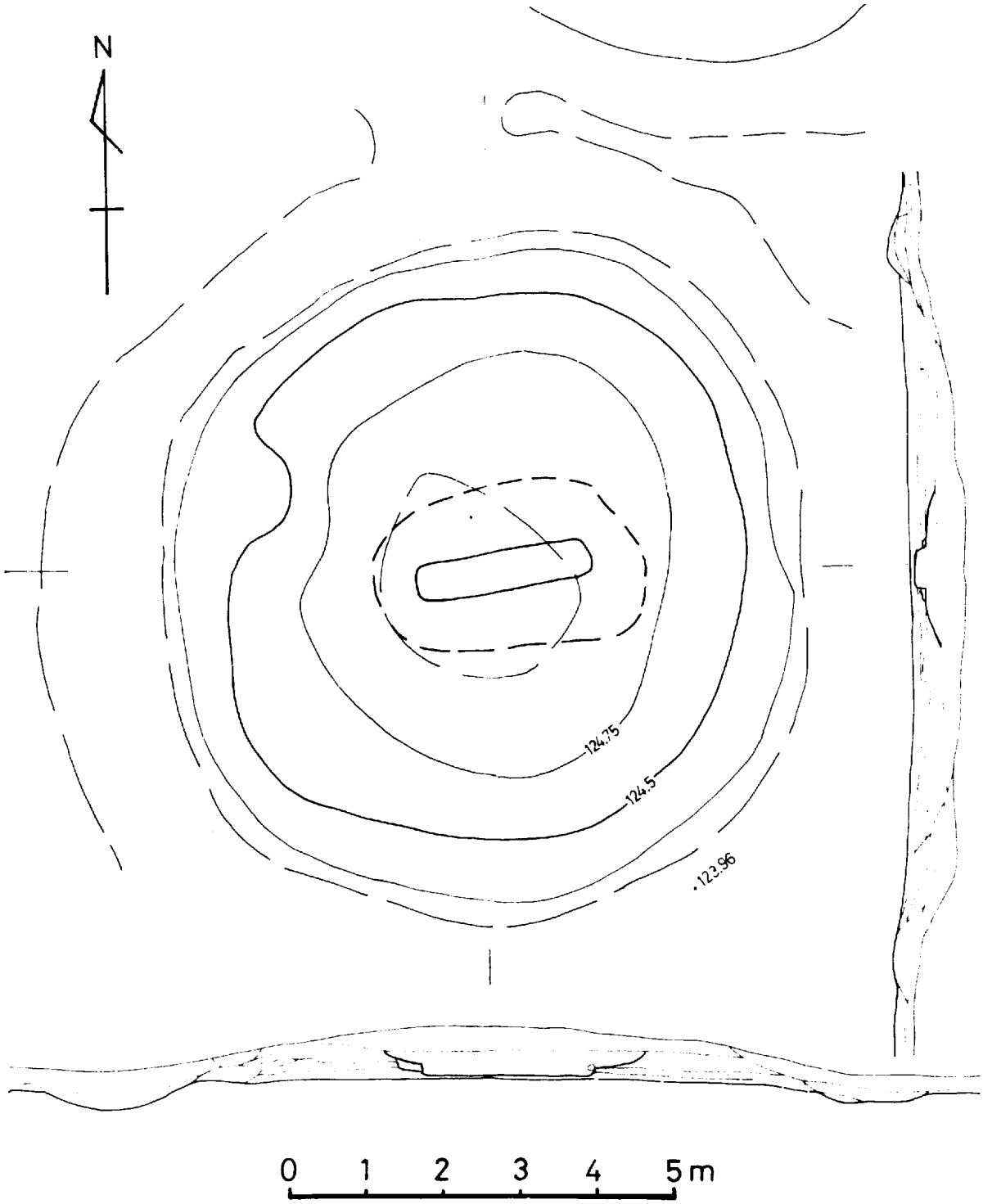
第2図　天神原遺跡付近地形図



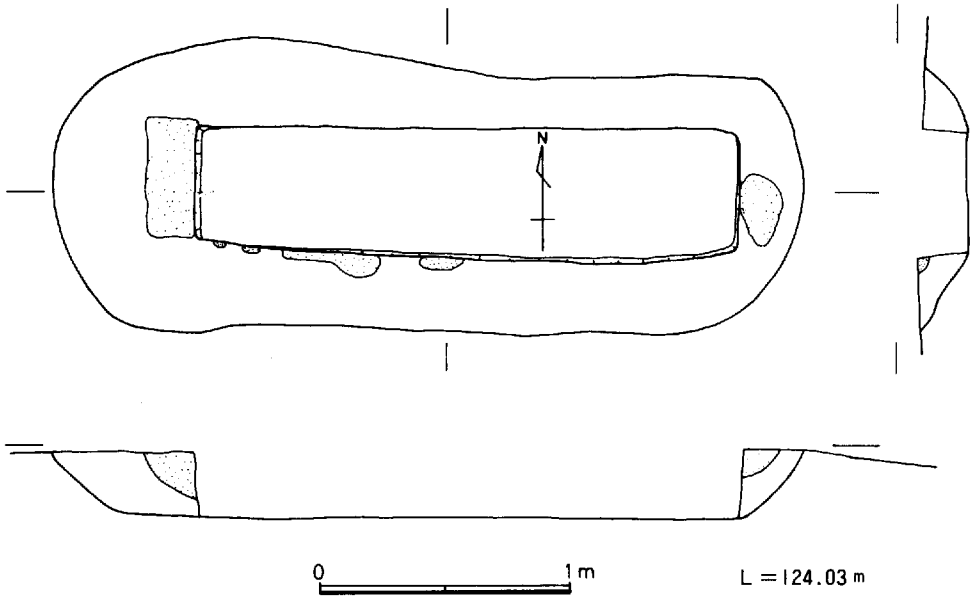
第3図　A地点の地形図



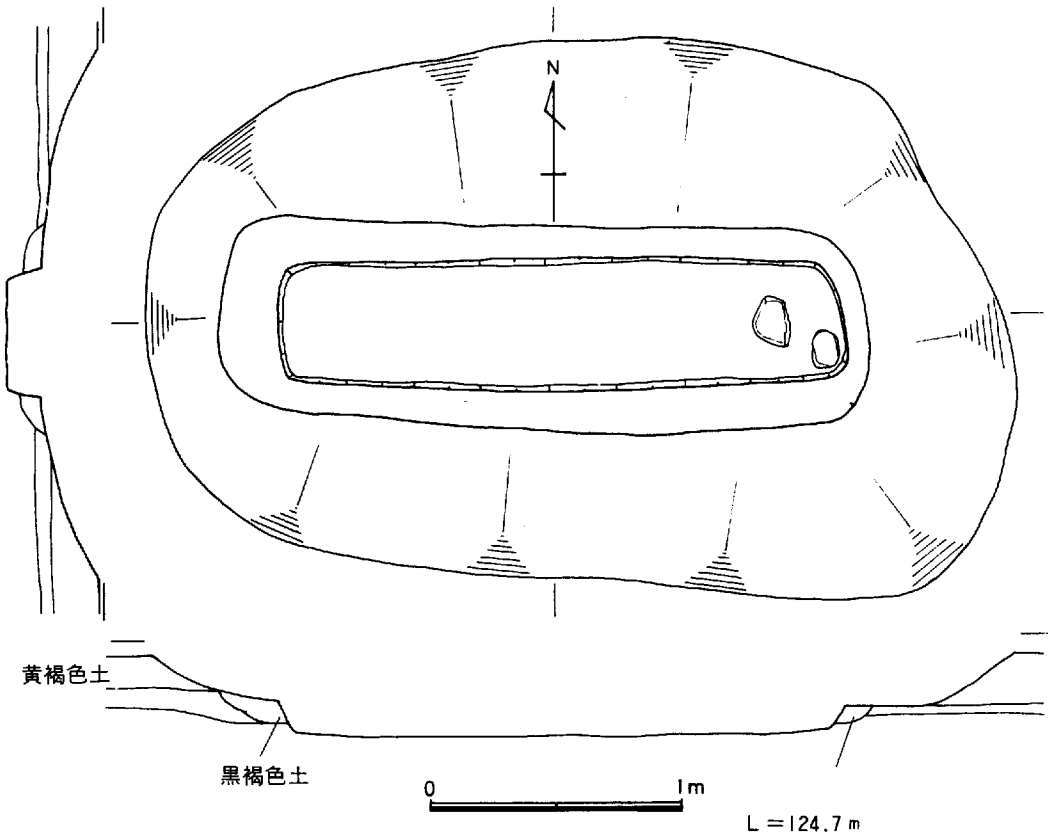
第4図　2号墳平面図・断面図



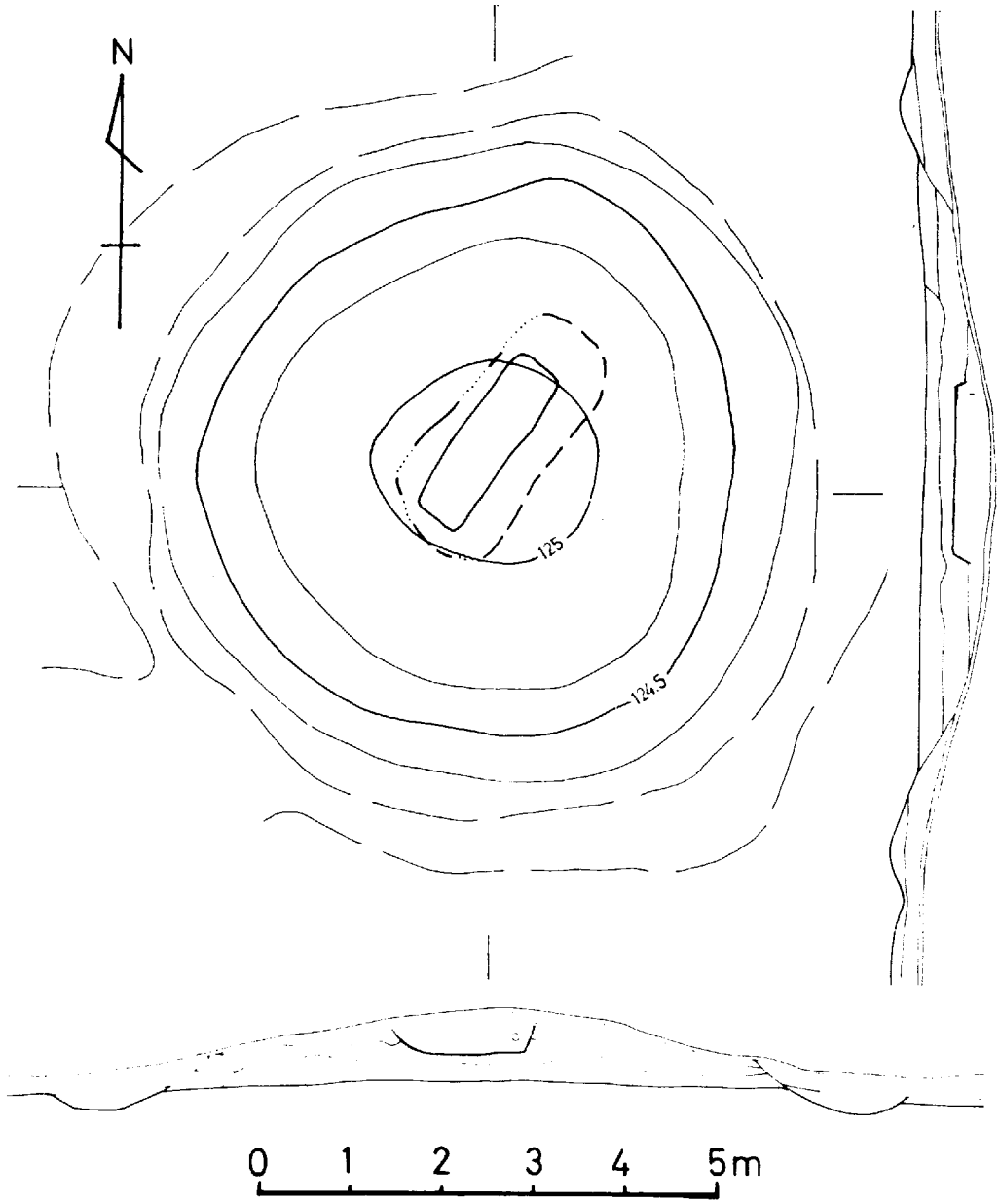
第6図　3号墳平面図・断面図　　L＝125m



第5図　2号墳主体平面図・断面図



第7図　3号墳主体平面図・断面図

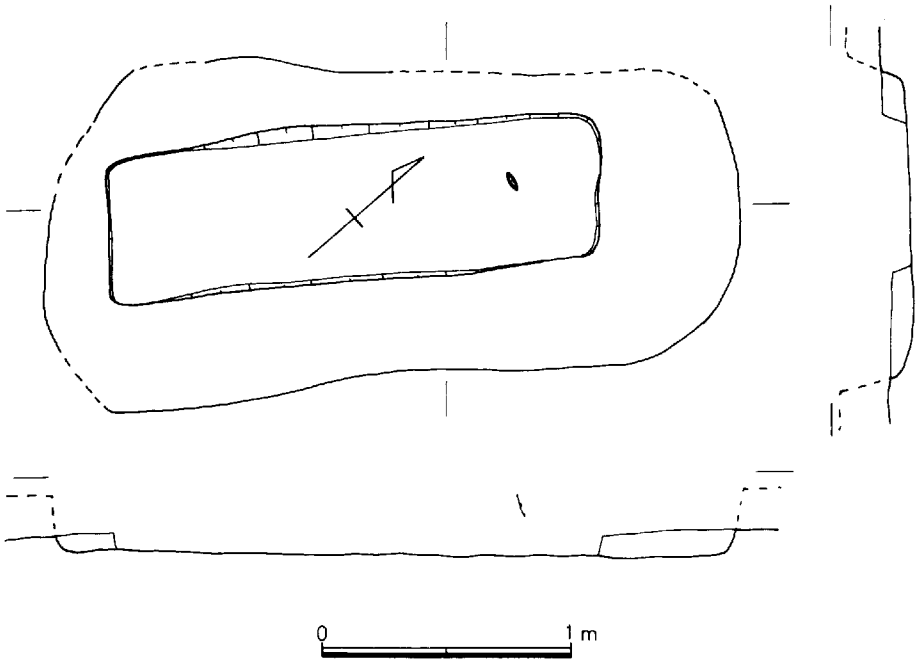


第8図　4号墳平面図・断面図

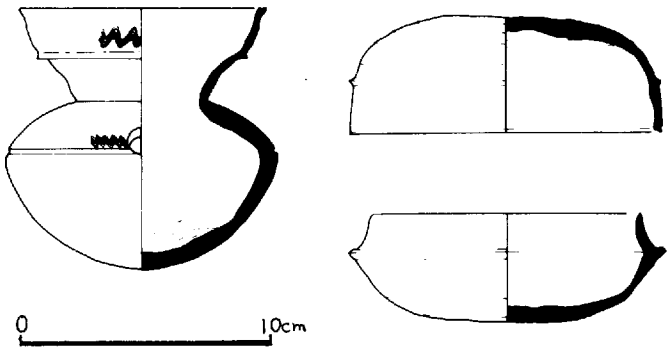
西斜面にほぼ東西のトレンチ（幅2m）を設定した。後世の開墾によって地山礫層が露出している部分を除いて，7本のトレンチを設定し，斜面の下の浅い谷には，それらに直交するトレンチを3本，第3トレンチの延長上に1本のトレンチを設定した。

第1トレンチでは，斜面にかかる部分で直径約4.5mの住居址を検出した。

第2トレンチでは，10個の柱穴と住居址らしい遺構を検出した。



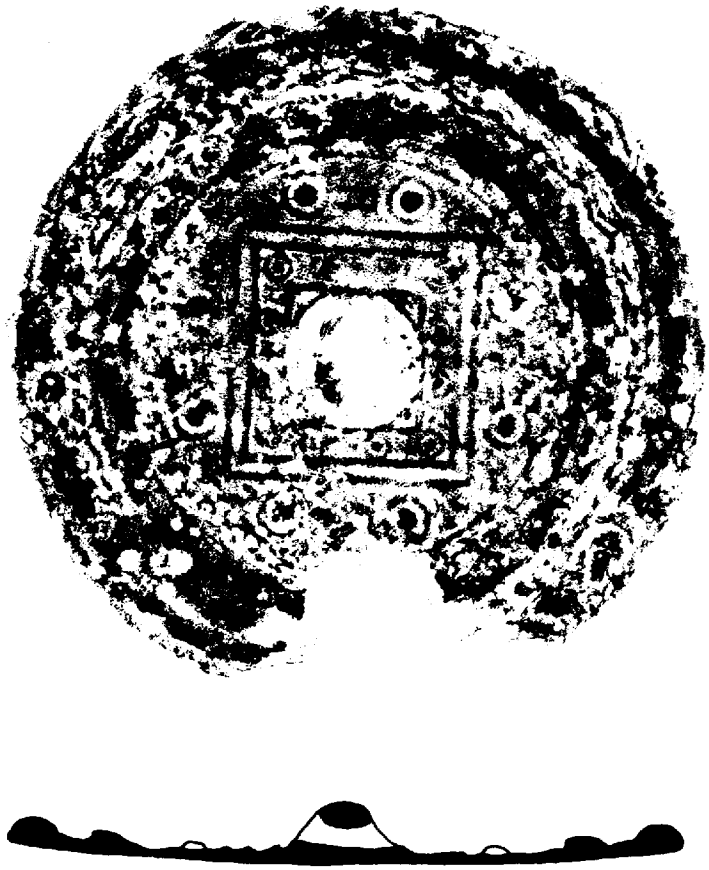
第9図　4号墳主体平面図・断面図



第10－1図　3号墳出土遺物

第3トレンチでは，斜面には柱穴が数個検出されただけであったが，谷への延長トレンチでは，幅約2mの溝状遺構が検出された。これは，昭和45年7月の岡山理科大学の調査でピットと考えられていたもので第9トレンチにあらわれていた。

第5・6・7トレンチにも溝状遺構は検出され，道路用地内での総延長は，80mにもおよぶ溝で



第10－2図　変形方格規矩文鏡拓影（4号墳出土）

あることがわかった。

溝は斜面を斜めに走り，舌状の段丘をめぐっているのではないかと思われる。溝の横断面は，上幅2.2m，下底幅約1.5mの逆台形を呈し，溝内には，弥生時代後期末葉の土器を包含している。

2・3・4号墳の墳丘盛土中にも，弥生時代後期末の土器片が混入しており，墳丘下にもそれぞれ柱穴・炉址などの遺構が検出された。

◇　B　地　点

2ケ所の坪掘りをしたが，遺構は検出できなかった。また，B地点の大部分は，屋敷跡で，遺構は削平されていると考えられる。

◇　C　地　点

第1トレンチ28m，第2トレンチ40m，第3トレンチ44mで，耕土層の下には，弥生後期末の土器を包含する黒色土層が，全面に広がっている。耕土層からは，須恵器・瓦器も出土している。黒

色土層は南に厚く，北に薄く，第2第3トレンチの北半分では，黄色の地山に掘り込まれたピット・柱穴・住居址らしい遺構が確認された。

まとめにかえて

1. 2号・3号・4号墳は，いずれも墳丘，主体，周濠の規模は類似している。また，棺内に遺物をもたない点でも共通している。群集墳盛行期より，さかのぼった時期の古墳群ではなかろうか。

2. 古墳それぞれが，はっきりした周濠を持っており，ほぼ同時期と思われる隣接した3号墳と4号墳の周濠が切れ合っていないことから，周濠のもつ性格を墓域と考えることもできよう。

3. この天神原の舌状段丘上に，弥生時代後期から古墳時代初期への過渡期の集落の存在が推測できる。

4. 全国でも，類似遺跡の全面調査は少なく，本調査では，段丘斜面の溝状遺構と集落との関連を把握する資料を得ることができよう。

5. 第2次調査（本調査）では，調査面積が広く，9号・10号墳の調査もあり，今後長期間の調査が必要である。

第5章　第二次調査の概要

第1節　遺跡の概要

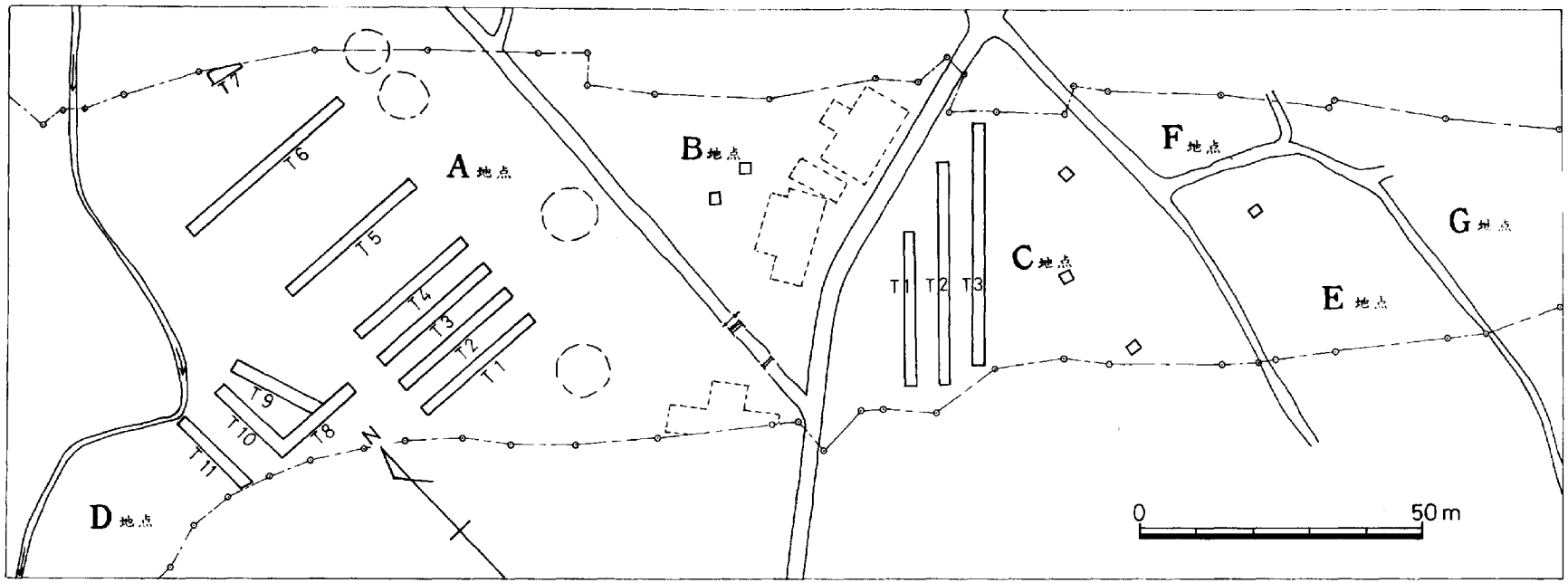
本遺跡の範囲はA地点西斜面から東の谷までの250m間を考えることができた。しかし，西斜面の溝より西には遺構がなく，東谷部分にも遺構は見い出せなかった。したがって，本遺跡は乾燥する台地上にあるといえる。

遺構の各地点を便宜上道路によって区分したが結果的にはA地点は平担面と西斜面，B地点はA地点の東斜面からC地点との分水界まで，C地点は浅い谷をめぐる地点，D地点はA地点の西にある丘陵北斜面，E地点はF地点はC地点と東谷の緩斜面，G地点は東谷部分とかなり微地形的な区分とも重なった。以下地点ごとに検出した遺構・遺物について概略をのべる。

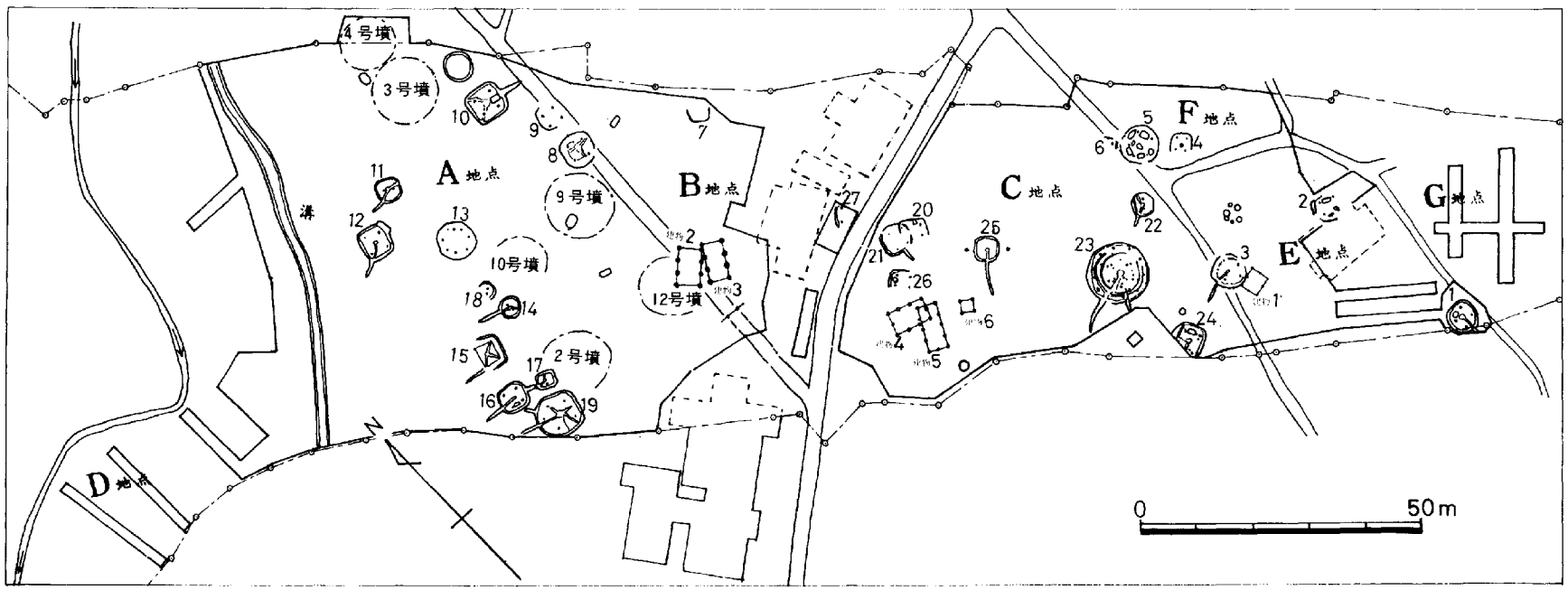
1. A　地　点

本遺跡の中心的な地点で弥生時代前期の土壙2，弥生時代後期の住居址12軒，土壙墓4基，掘立柱建物2棟，溝1条，古墳7基，古墳時代土壙墓1，円形周溝遺構1，時期不明の組合せ式石棺1，弥生時代と思われる土壙，柱穴多数を検出した。

住居址は平担地中央部にはなく，傾斜肩部に馬蹄形をなして存在し，時期が明らかに異なる13号，9号，18号を除けばいずれも隅丸方形を呈し，床溝と傾斜下面への外溝をもっている。掘立柱建物は切り合って存在し，1間×3間の北東－南西方向の建物である。他の住居址との時間差はあまりないと思われる。

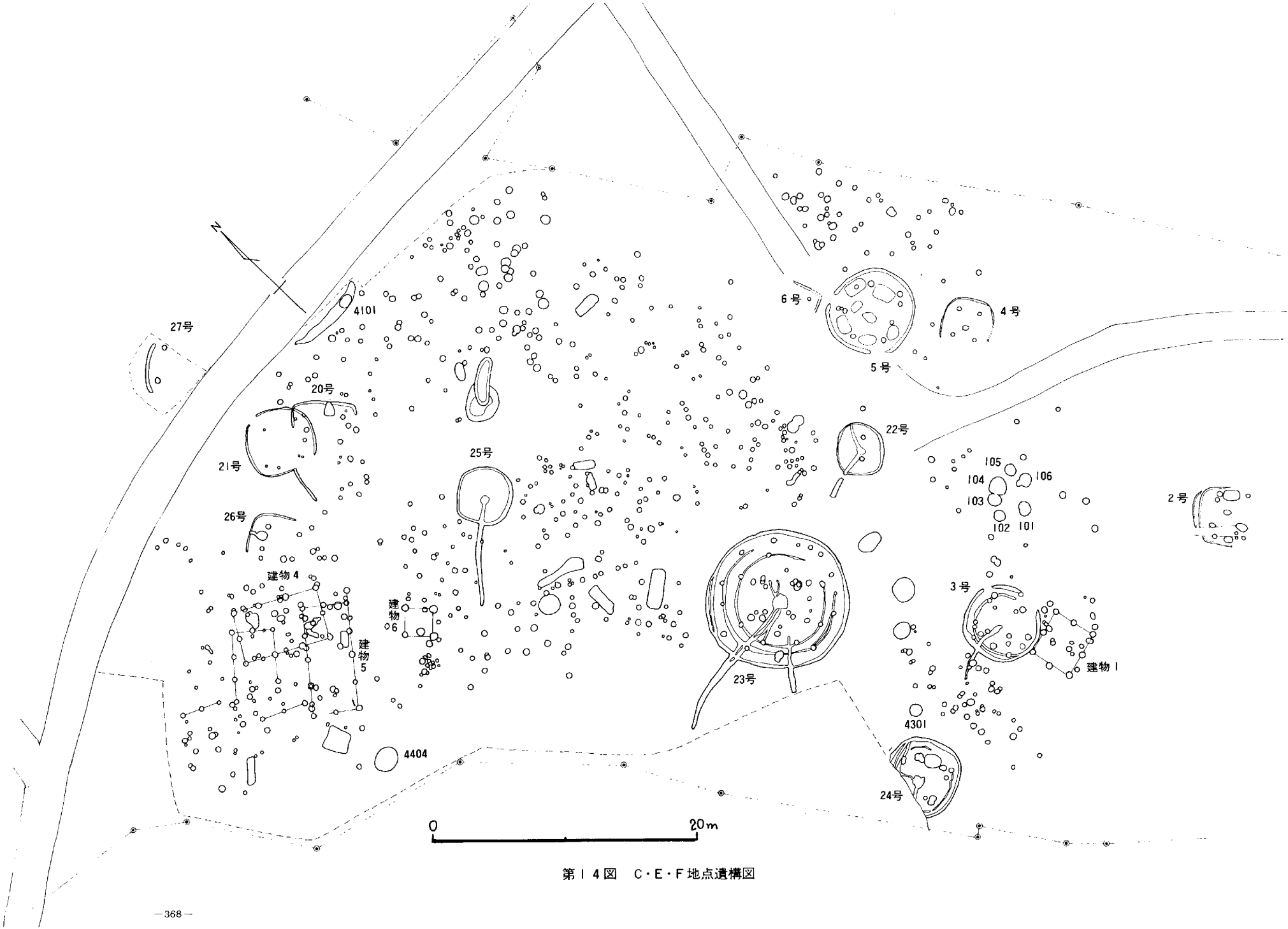


第１１図　第一次調査トレンチ配置図　遺構配置図



第１２図　主要遺構配置図

第13図　A・B地点遺構図



第14図　C・E・F地点遺構図

古墳は第一次調査で2号，3号，4号墳の調査をし，3号墳周濠出土の須恵器坏，甕から6世紀初頭に位置づけた。第二次調査で9号墳，10号墳，11号墳，12号墳が検出された，いずれも半壊され，墳丘は削平されて主体部は消失していた。11号墳は小型の横穴式石室であるが，他は円墳，木棺直葬墳であったと思われる。

遺物は住居址，溝，土壙墓から出土した弥生時代後期の土器が最も多い。弥生時代前期の土器は9号墳付近の表土からの出土が多く，特に２００５・２００６・２０１６からは甕形土器が出土した。表土からは石包丁・石鏃・有孔円板などが出土している。須恵器は２００８から高坏・甕，２０１５からは高坏・甕・壷が出土した。２０１５は10号墳の周濠内であり，共伴遺物になる可能性もある。2号墳，4号墳付近から器台の破片が出土している。11号墳にともなう坏蓋1がある。土師器には２００８出土の埦・壷，２００９出土の甕，がある

2. B　地　点

南半は宅地による掘削が著るしく，住居址2軒は弥生時代のものと思われるが，7号住居址は隅丸方形，27号住居址は円形プランの一部を残すのみである。これらのほか，古墳時代の土壙墓1を検出した。B地点の北半は表土の下には包含層がなく，南半も削平により遺物は概して少なかった。

3. C　地　点

南西にひらく，浅い谷部分でA地点についで遺構密度が高い。住居址7軒・掘立柱建物3棟・弥生時代後期の貯蔵穴1・井戸状ピット1・土壙1・柱穴多数を検出した。

住居址のうち，20号，26号は古墳時代のもので，鍛冶炉をもっていた。21号，22号，23号，24号，25号は弥生時代後期と思われ，床溝と外溝をもち，とくに，23号住居址11mの大型である。掘立柱建物4は2間×3間の東西棟，建物5は2間×4間の南北棟，建物6は1間×1間である。包含層は谷中央に向って厚く，中央部では黒褐色粘質土に弥生時代前期の土器片も含んでいた。上層からは円面硯片，高台のついた須恵器坏片なども出土している。

4. D　地　点

トレンチ調査の結果，薄い表土を除去すると岩盤が露出し，遺構・遺物ともに検出できなかったため，調査地域から除外した。

5. E・F　地　点

南へのびる台地で，住居址6軒・建物1・貯蔵穴6・柱穴などを検出した。住居址はいずれも弥生時代後期と思われる。1号，3号は床溝・外溝をもつが，2号，5号はそれらがないが住居内に貯蔵穴をもっている。建物は2間×2間であるが時期は不明。6個の貯蔵穴は同一屋内につくられた可能性があり，5号住居址などと同様なものかもしれない。

6. G　地　点

東谷に3本のトレンチを設定した。しかし，少量の遺物を採集したのみで，遺構は存在しなかった。

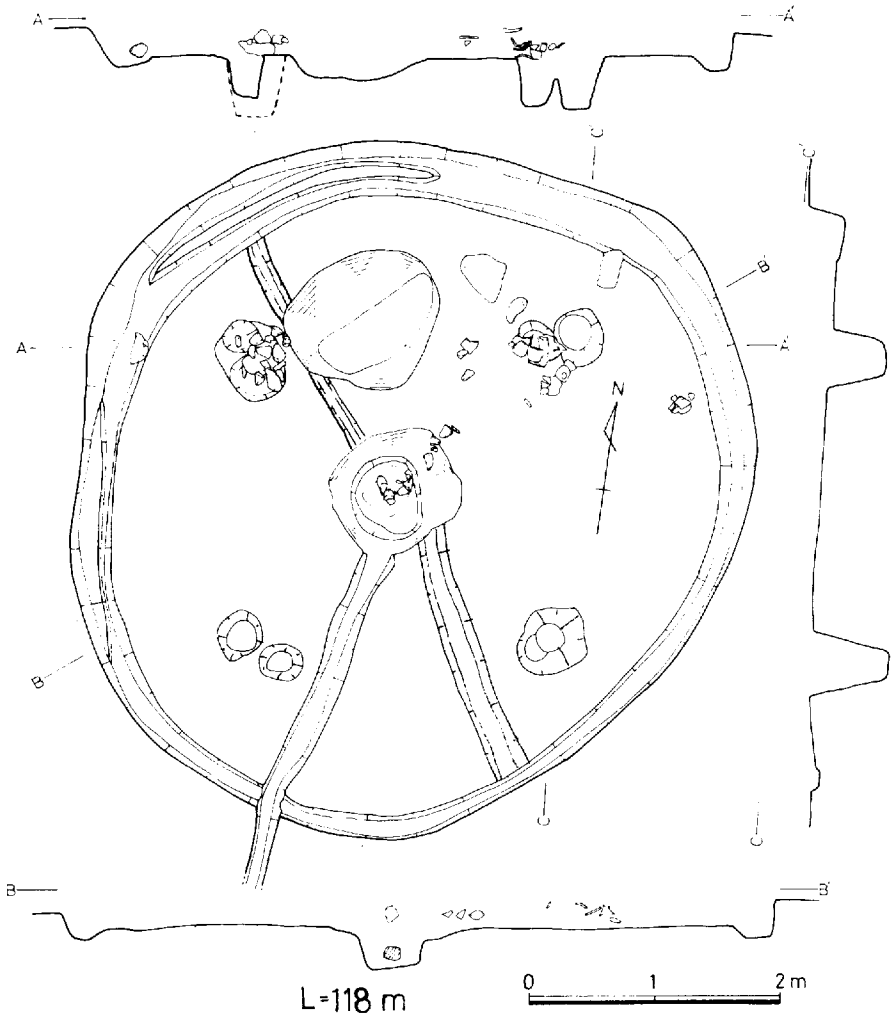
第2節　遺構・遺物

A．住居址

1号住居址

面積　18.4㎡

天神原遺跡の最も東端斜面に検出された，直径5.5mのほぼ円形を呈する竪穴式住居址である。四本柱であるが，建て替えにより8本の柱穴痕を検出した。



第15図　1号住居址平面図・断面図

古い時期の柱間はいずれも2.4mで一定しているが，新しい時期のものは2.2m～2.6mとややばらつきがある。

直径0.6m，深さ0.3mの中央穴は新旧共通であるが，それからのびる床溝は南東方向のものが

古く，南方向のものが新しい。地辺の皿状ピットは，古い時期のものである。

出　土　遺　物

1は脚径22cmを測る器台形土器である。

裾部は「ハ」の字状に高く広く脚部を有し，端部を屈曲させ，端面に凹線を施こす。脚部には横位の沈線を施文している。

石粒を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

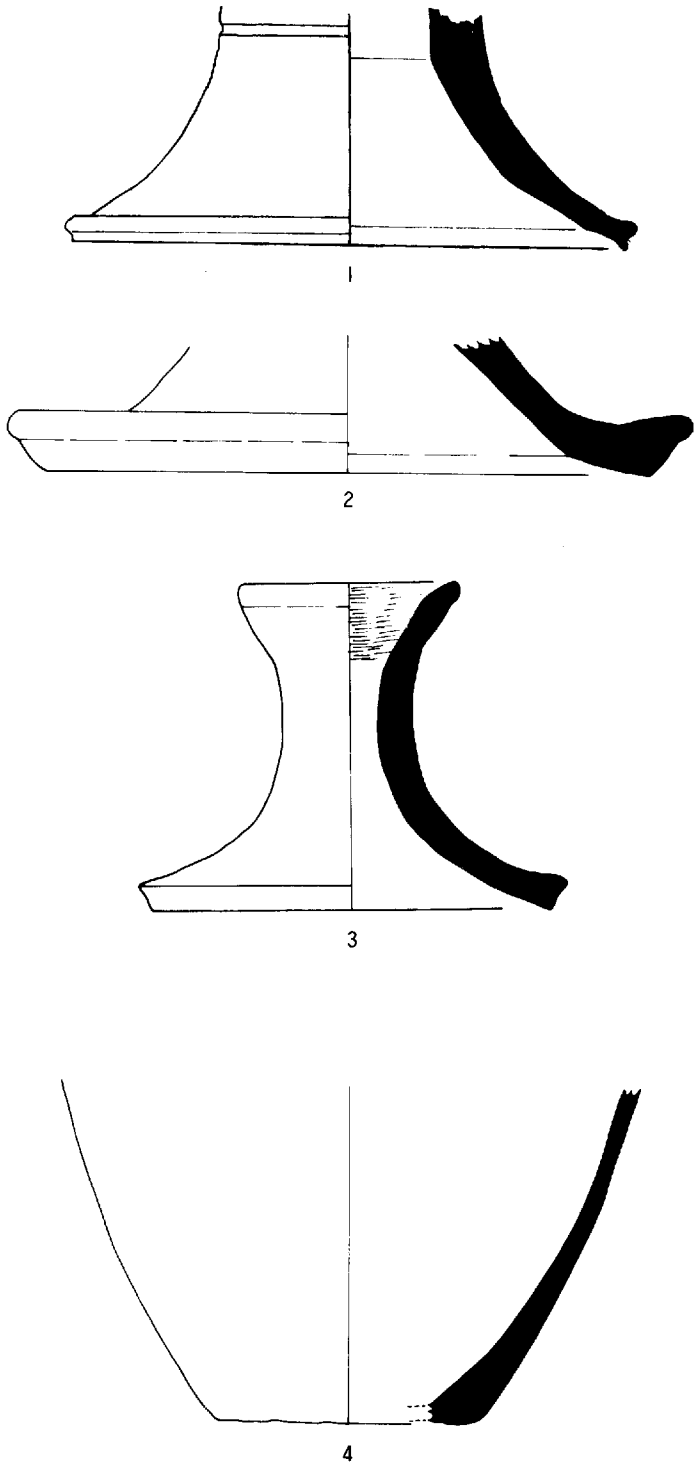
2は脚径24cmを測る器台形土器である。

裾部端面を外方に拡張し，肥厚させ屈曲させる。器面の剥離が著しく，整形痕は不明である。

石粒を多く含み，焼成はあまい。色調は茶褐色を示す。

3は口径8.5cm，器高13cm，脚径16cmを測る器台形土器である。

外反する頸部を有し，口縁端部は丸く仕上げている。脚部は「ハ」の字状に低く開く裾部



第16図　1号住居址遺物

をもち，裾端面を屈曲させる。

脚部は縦位の篦磨きがなされ，口縁部内側は横位の荒い櫛状工具により整形されている。

胎土は石粒を多く含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

4は甕形土器の底部である。

器面は細い刷毛状工具による縦位の整形痕がみられ，底部は凹凸がはげしい。焼成は良好である。色調は褐色を示す。

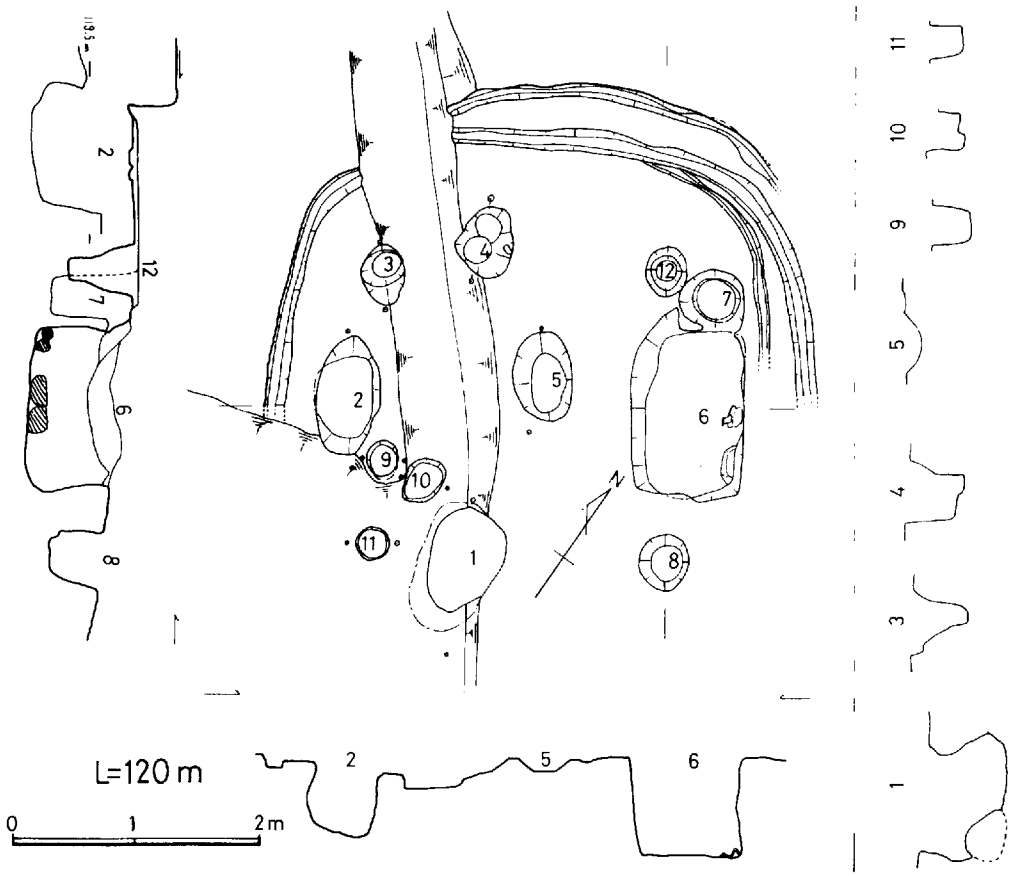
その他に，この住居址からは脚部に櫛状工具による4本程度の横位の沈線がみられる破片が出土している。

2　号　住　居　址

復元推定面積　　14.7㎡

東谷の斜面に位置し，宅地などで削平をうけ南東部を消失している。平面形は隅丸方形を呈し，二度建て替えがおこなわれている。

最も新しい時期のものは円孤状に残る壁溝と柱穴4・7・8・10で，床面からは壷形土器の口縁



第17図　2号住居址平面図・断面図

部が出土した。柱穴4の掘り方から頁岩製の石庖丁片が出土した。　貼り床は3〜5cmの厚さであった。

つぎに新しい時期のものの床面積は，推定14.7㎡である。柱穴3・12・8・11の4本柱で，柱間はいづれも2.3mをはかる。床には12−8間・8−11間・11−3間には袋状ピットが掘り込まれていた。

ピット1・2は楕円形で深さ0.6〜0.7mの袋状をなす。ピット6は1.3m×0.9mの長方形でやや袋状をなす，深さは0.8mの貯蔵穴で，ピット底面からは甕・高坏が石とともに出土した。

出　土　遺　物

5は口径10cmを測る壷形土器である。

口縁部が外方へ開くもので，口縁端部は丸く仕上げられている。

内面肩部において，横位の箆削りがなされている。

胎土，焼成とも良好である。色調は灰褐色を示す。

6は口径14cmを測る甕形土器である。

外反する口縁端部を拡張し，複合口縁をつくる。口縁端面は横ナデにより整形され，内面は横位の箆削りがなされている。

胎土，焼成とも良好である。色調は灰褐色を示す。

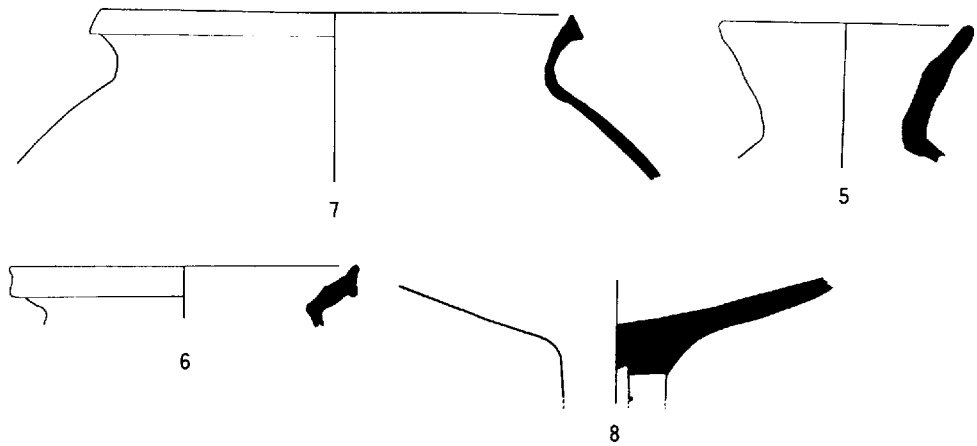
7は口径18.8cmを測る甕形土器である。外反する口縁端部を拡張させ，複合口縁をつくる。

器面の剥離が著しく整形痕などの観察は出来なかった。色調は灰白色を示す。

8は高坏形土器の破片である。器面の剥離が著しく，整形痕などは観察出来なかった。色調は灰色を示す。

3　号　住　居　址

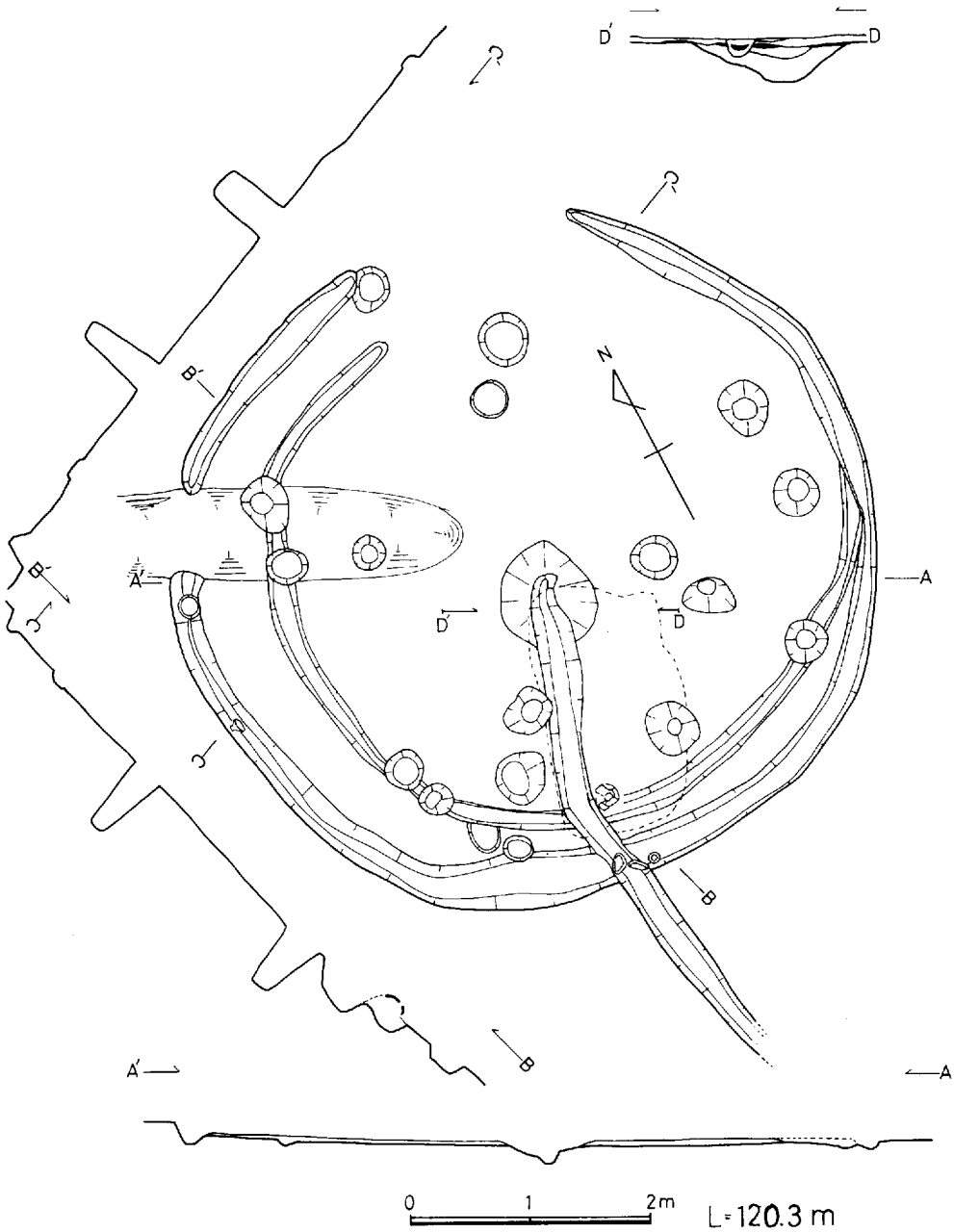
C地点とE地点の境界をなす農道下より検出した直径約6mの円形の竪穴式住居址である。



第18図　2号住居址出土遺跡

拡張前の住居址は直径５ｍの円形で，４本柱と思われる。柱間は1.6ｍ・1.8ｍとやや狭いが，柱穴は50cm以上もある。この住居址の時期を決定する遺物は出土していない。

拡張後，３～５ｍの貼り床をして，直径5.7ｍ～5.9ｍのややいびつな円形となり，床面積は約



第１９図　３号住居址平面図・断面図

22m²で，５本柱であったと思われる。

柱間は2.3～2.7ｍで，断面皿状の中央ピットから幅0.3ｍの床溝がやや「く」の字形をなして南へのび，外溝へつづいている。床面から甕形土器・壁溝から小型台付鉢・高坏脚部が出土している。

出　土　遺　物

9は壷形土器の胴部の破片である。頸部が直口する状態で残るが，どのような口縁がつくのは不明である。胴部の感じからすれば，底部は丸底に近いものと考えられる。器面の剥離が著しく，詳細な観察は出来なかった。色調は褐色を示す。

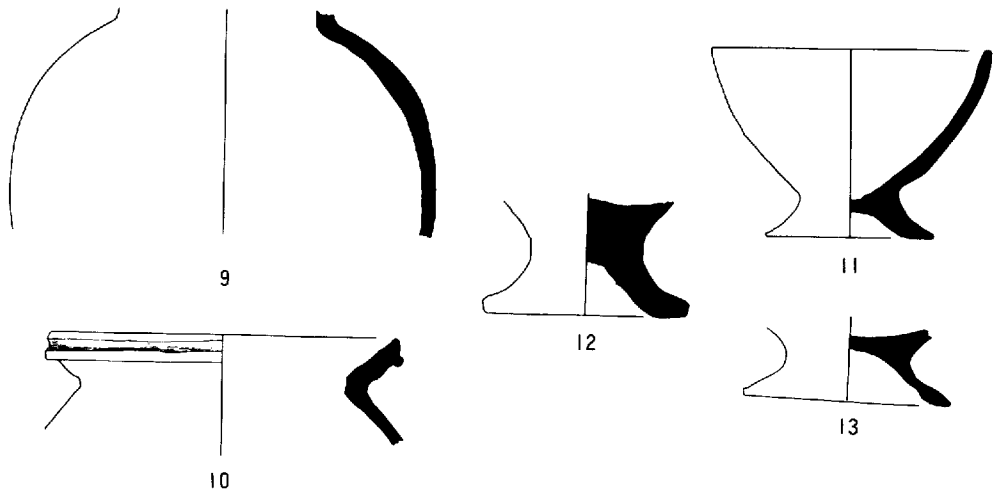
10は口径14cmを測る甕形土器である。「く」の字状に外反する口縁端部を下方に拡張し，複合口縁をつくる。口縁端面には横ナデによる凹線がみられる。器表面にススが付着する。色調は暗茶褐色を示す。

11は口径１１.２cm，器高7.5cm，台径6.6cmを測る台付鉢形土器である。鉢部は内弯気味で，端部は丸く仕上げている。台部は「ハ」の字状に偏平に開くもので，厚手に仕上げられている。磨滅により整形痕は不明である。胎土，焼成は良好である。色調は褐色を示す。内外面とも丹塗りが施こされている。

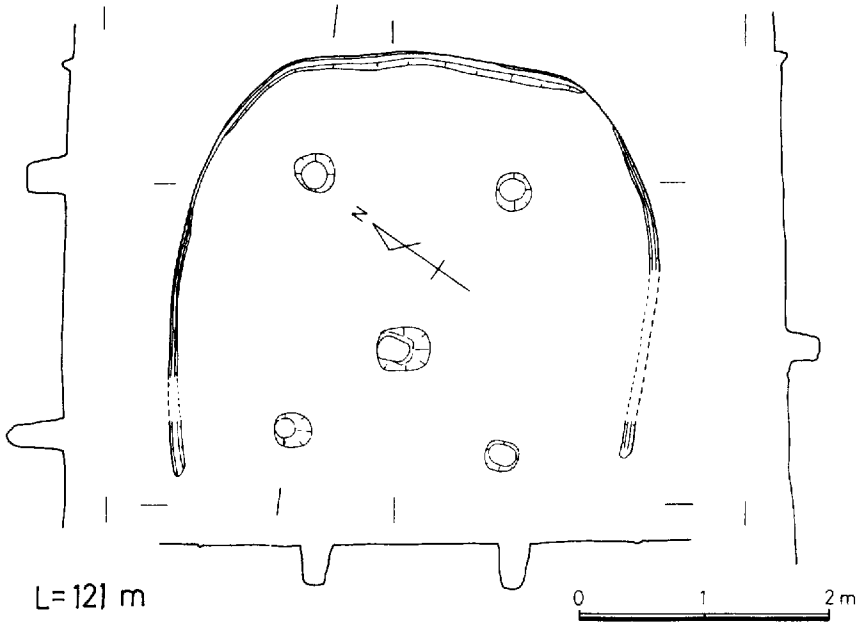
12は台径８cmを測る鉢形土器の台部である。「ハ」の字状に開き，器壁が厚いため安定感がある。胎土，焼成とも良好である。色調は赤褐色を示す。丹塗りが認められる。

13は台径8.2cmを測る鉢形土器の台部である「ハ」の字状に開くもので，器壁を薄く仕上げているため，より広い感じをうける。内面には横位の篦削りが認められる。

胎土，焼成とも良好である。色調は褐色を示す。丹塗りがなされている。



第２０図　３号住居址出土遺物



第21図　4号住居址平面図・断面図

4　号　住　居　址

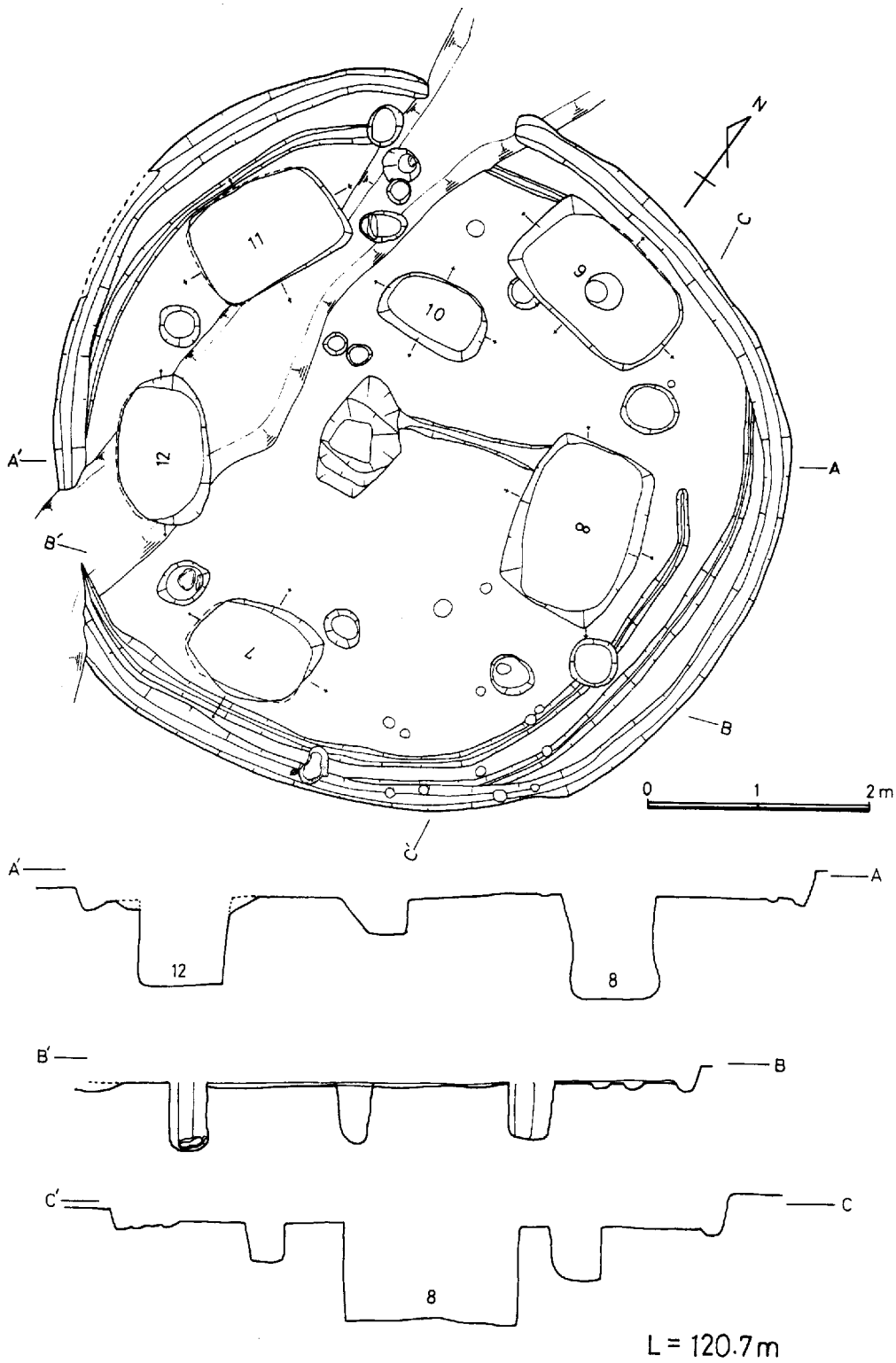
F地点に位置する隅丸方形の竪穴式住居址で3.7mを測るが，削平された壁溝（東辺は消失）柱穴4，中央ピットが検出された。

柱間は1.7～1.8m，2.0～2.1mで北東一南西方向の棟が考えられる。中央ピットはやや西よりに位置し，30cm×40cmの角張ったプランを呈し，深さ30cmで木炭片・焼土が検出された。

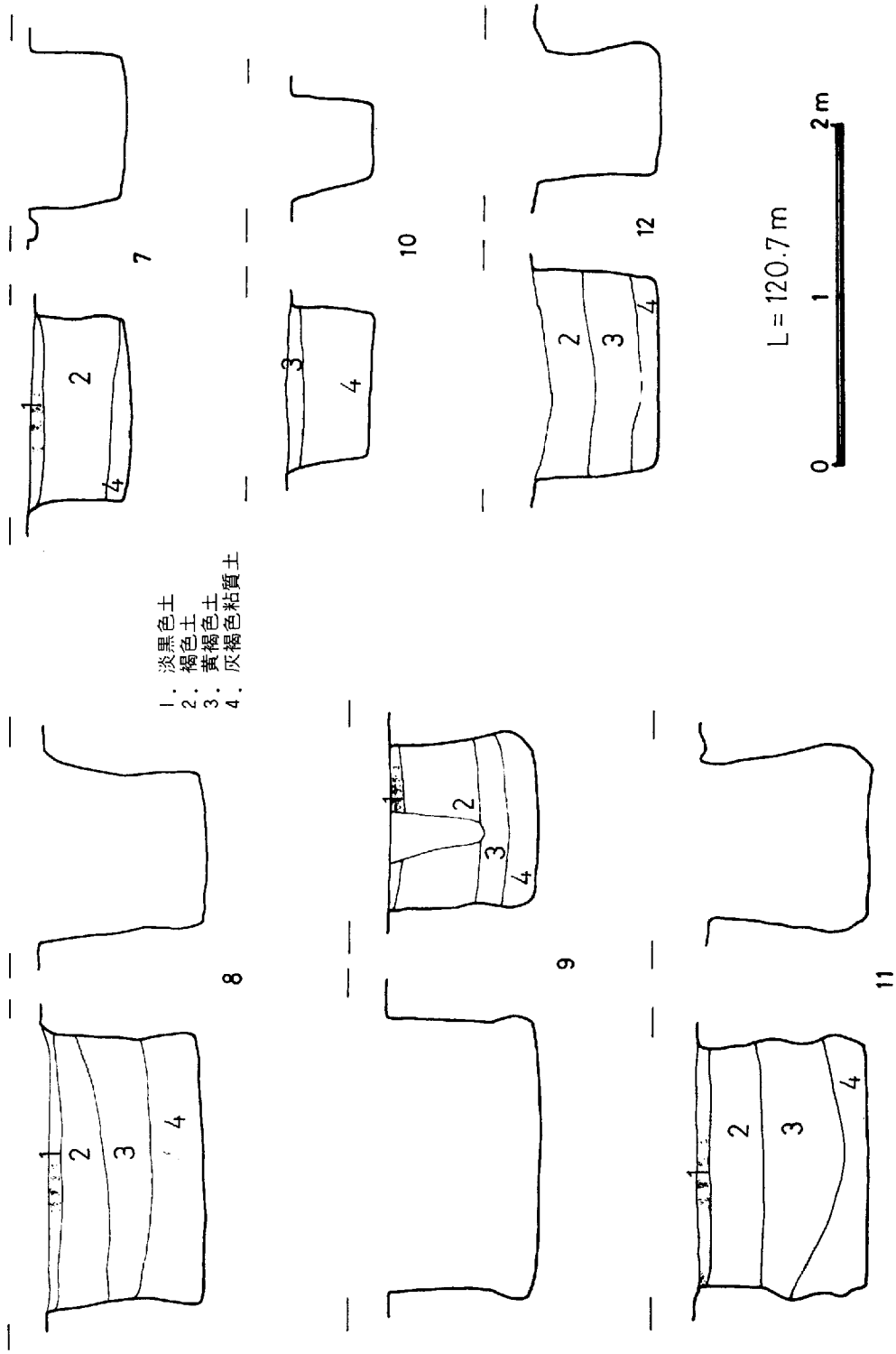
5　号　住　居　址

4号住居址の西に位置する長径約7m・短径6.5mのやや長円形の竪穴式住居址である。二度建て替えがおこなわれている。第1期の住居址は直径5.5mの円形で住居址内に7・10・12のピットが掘り込まれていた。7は1.2m×0.9m・深さ0.6m，10は1m×0.6m・深さ0.5m，12は1.2m×0.8m・深さ0.75mでいずれも灰褐色土・褐色土などで埋まっていたが遺物は出土しなかった。

第2期の住居址は東部分に壁溝を残すのみで第3期の壁溝で削平されている。この第2期もしくは第3期にともなうと思われる8・9・11のピットが検出された。いずれも第3期の床面では淡黒色土が薄く堆積していた。8は1.5m×1.1mの方形で深さ1m，9は1.6m×1mの方形で深さ0.9m，11は1.4m×0.9mの方形で底面でやや広がり袋状をなし，深さ1mである。いずれからも遺物の出土はないが，堆積土はほぼ同じであり，意図的に堆積した状態を示している。



第２２図　５号住居址平面図・断面図



第23図　5号住居址内ピット断面図

第２４図　５号住居址出土遺物

第３期の住居址は５本柱と思われ，ピットのない部分に柱が建てられている。床面積約30㎡である。また，すでに埋められた７・10・12のピットと，のちに掘り込んだ８・９・11との重複はない。

出土遺物は南側の壁溝からすり石と石庖丁各１が出土した。また埋土からはサヌカイト片・旧石器のナイフ型ブレイド１が出土した。

出　土　遺　物

14は口径13cmを測る甕形土器である。「く」の字状に外反する口縁端部を上下に拡張し，複合口縁をつくる。口縁部端面には横ナデによる凹みを施こす。胎土・焼成とも良好である。色調は褐色を示す。

15と**16**は住居址覆土下層より出土したもので，**16**は，24－11あるいは**46**でみられたような木葉痕が認められる。

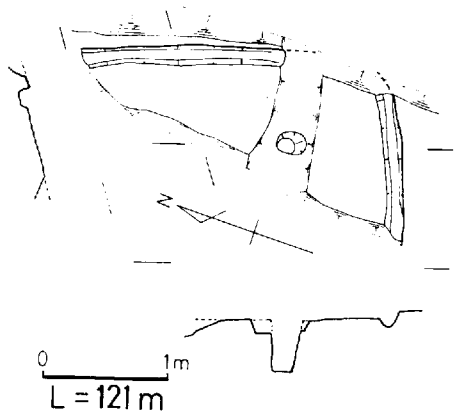
なお**14**はピット１１１よりの出土である。

６　号　住　居　址

５号住居址の北にほぼ接して検出した竪穴式住居址である。この遺構は，農道部のみに残っているもので，柱穴１とともに壁溝を検出したにすぎない。壁溝から，弥生式土器片が出土した。

８　号　住　居　址

A地点の東斜面の縁辺部に位置する5.9ｍ×5.5ｍの隅丸方形プランの竪穴式住居址である。４本柱で柱間は2.7ｍ～2.9ｍで柱穴掘り方には河原石がていねいにうら込めされている。東辺を除く３辺には柱より外側に幅約１ｍ・高さ10cmのベッド状遺構がある。この遺構は床面を刻んで複雑に走る床溝を埋めて－あるいは暗渠で－つくられ，柱間を細い溝がつながっている。この溝はベッド状遺構を積むために板もしくは丸太を個定するためのものと思われる。

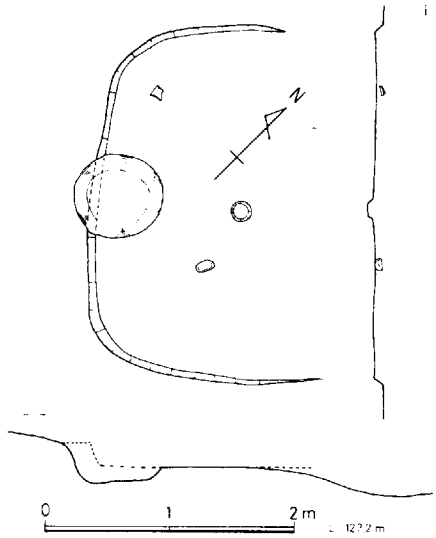


第２５図　６号住居址平面図・断面図

なお，北辺の一部と東辺には当初からベッド状遺構はつくられなかったと思われる。

床溝は東西に二条，南北に一条が中央ピットで合流し，東西の二条はさらに短かい溝でつながり東辺で合流して外溝となっている。

中央ピットは柱穴を思わせるような直径約40cm・深さ50cmのもので，下層からは木炭などが出土した。



第２６図　７号住居址平面図・断面図

出　土　遺　物

17 は口径１７.３cm・器高８.５cmを測る鉢形土器である。２段に屈曲して外反する口縁部を有するものである。口縁部は横ナデがなされ，器面は丁寧な篦磨きがなされている。底部は篦による整形がみられるが，器壁は厚い。胎土・焼成は良好である。色調は黄褐色を示す。

９　号　住　居　址

Ａ地点，８号住居址の北側に位置する竪穴式住居址で，神社の参道によって東側の部分を削平されている。

やや角ばった円形プランの４本柱で，柱間はほぼ２.５ｍである。壁高は15ｍ前後で溝はなかった。埋土からは，弥生時代前期の土器片も出土している。

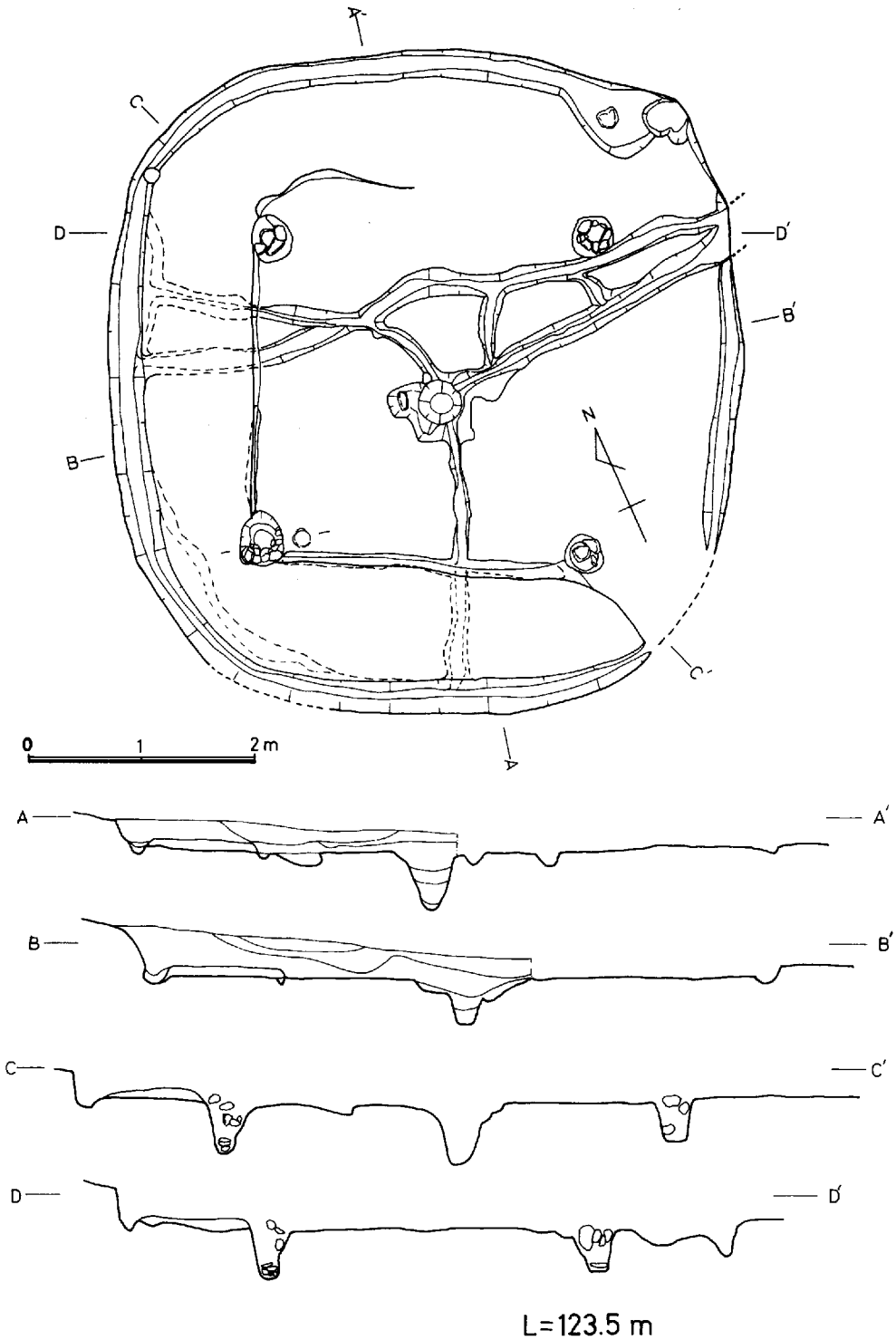
10　号　住　居　址

床面積　25㎡

１辺約５.５ｍの隅丸方形を呈する竪穴式住居址である。４本柱で柱間はいずれも２.６ｍ・柱穴の深さ０.４ｍ～０.５ｍ，東側では掘り方に河原石がていねいにうら込めていた。

床溝はＹ字形につくられ，中央ピットに合流し，さらに，東側の壁溝を約10cmも深く切って外溝となっている。壁溝はほとんど水平に近く，西壁からの二条の床溝は中央に向って深く，中央ピットから東壁の部分までさらに深くなって外溝部分よりは深い。中央ピットは幅30cm～40cm・高さ10cmの周堤をもち，１.１ｍ×０.８ｍ・深さ35cmを測る。周堤は木炭・灰と焼土が互層をなし，ピット底部には木炭・焼土が堆積しており，床溝から水が流れ込むとは考えられない。

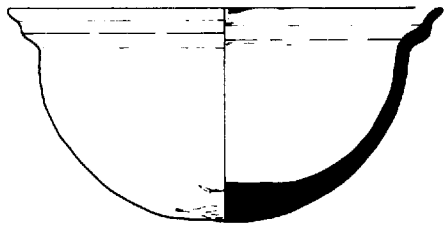
出土遺物は南西隅に二重口縁をなす壷型土器・南辺に手づくね土器２，北東隅に高坏が出土した。これらの遺物の他に四隅の壁溝に10cm～15cmの棒状の河原石が３～６個かたまって検出された。これらの河原石は使用痕が明らかではないが，床面から出土した数個の平石とも関連が考えられる。



第２７図　８号住居址平面図・断面図

出土遺物

18 口径２０.９cmを測る。外方に広がる複合口縁を有する頸部から上半を残す壷形土器である。頸部は「ハ」の字状に開き気味の肩部に移行する。頸部には縦方向の櫛状工具による調整がみられ，その縦方向の櫛を擦消するように横位に沈線状の櫛を施こす。肩部には頸部と同様であるが，横位の沈線の数が多くなってゆくことが観察される。口縁部はナデによって整形されている。胎土・焼成とも良好である。色調は褐色を示す。



17

第２８図　８号住居址出土遺物

19 口径２.２cm ・推定器高４.４cmを測る台付小形壷形土器である。肩部から直口する口縁を有し，底部は脚を有するために，窪んだ状態になる。脚部は偏平な裾を有するものである。肩部に径３mm～２mmの円形の孔が２個１対で，２ケ所うがたれている。

器壁は非常にモロク，水洗いが出来ず，整形痕の観察は出来なかった。　胎土は非常に良く，石粒などの混入はわずかであった。色調は褐色を示す。

20 脚径８.５cmを測る高坏形土器の脚部である。「ハ」の字状に低く開き，裾下方に稜を有する。

器壁が非常にモロク，水洗いが出来ず，整形痕などの観察は出来なかった。　細かい石粒を多く含む。色調は茶褐色を示す。

21 口径８.８cm，器高６.７cmを測るコップ状土器である。胴部には指頭圧痕を残す。胴部下半からは，細かい刷毛状工具により整形されている。

なお，口縁端部は丁寧に平たく仕上げられている。

器壁は非常にモロい。色調は茶褐色を示す。

22 推定口径６.８cm・器高３.６cmを測る椀形土器である。**21** とほぼ同一の内容を示すものであるが，器高がこの土器の方が高く作られている。器壁は非常にモロい。色調は茶褐色を示す。

23 推定口径12cm・器高４cmを測る皿形土器である。器壁が非常にモロい。水洗いが出来ず詳細な観察は出来なかった。色調は茶褐色を示す。

24 ２.８cmを測る底部である。器形は不明であるが**46** と同様に鉢形土器になることも考えられる。

11　号　住　居　址

床面積　１１.６８m²　２本柱

A地点の西斜面肩部に位置する小型の竪穴住居址である。やや変形した隅丸方形を呈し，約3.5m×3.5mをはかる。遺存状態がよく，60mの壁高をはかる部分がある。深さ50cmと60cmの柱穴が1.6mの間隔で検出され，これらが棟方向を示している。

床溝は東辺から中央ピットに入り，南西隅で壁溝を切る「く」の字形をなしている。外溝では約40cmを暗渠とし，傾斜下面にのびている。中央ピットは深さ30cmで，木炭片など含んでいた。南西隅の壁溝内に傾斜した深さ40cmの柱穴が検出されたが，その延長が2本の主柱が結ぶ中心にあたり，二本柱による棟を補強するための支柱と考えられる。床面には河原石が1個置かれている。

12 号 住 居 址

A地点の西斜面に位置する5.5m×5.2mの隅丸方形の竪穴式住居址である。火災に遭っており棰木・柱・萱などの炭火物のほか，高坏・甕などの土器も出土した。4本柱で柱間は2.7～2.5mであるがいずれの柱穴も外側に傾斜している。

最も傾斜している北東の柱穴壁で約20°南西柱穴壁で約8°この傾斜が柱の傾斜度と一致するか否かは不明であるが，これに近い傾斜が考えられ，上屋構造を支える機能とどのように関連するか明らかではない。

中央ピットの周囲には下幅30～40cm・上幅20cm・高さ5cmの周堤が馬蹄形に検出された。中央ピットは50cm×60cmの方形を呈し，深さ17cmを測る。

床溝は中央ピットの隅から，幅20cm・深さ20cmで南西の壁溝に達し，やや北側にずれも外溝とつながっている。

検出した炭化物から住居の上屋構造をうかがうことができる。すなわち，中央部から放射状にのびる棰木は10cm前後の丸太材が使われていた。これらの棰木に交錯して四主柱を結ぶ形で丸太材が検出された。また中央ピット上に棟木と思われる15cmの丸太材が南北に検出された。炭化した萱は屋根をふいていたものである。主柱のうち南西柱と北西柱は約20cm立った状態で炭化して残存していた。

出 土 遺 物

25 は口径11.3cmを測る壷形土器である。「く」の字状に外反する口縁端部をつくり，口縁端部は丸く仕上げられている。口縁端部近くに横ナデによる凹みがみられる。

器表面は箆削りがなされ，内面においても横位の箆削りがなされている。色調は褐色を示す。

26 は口径15cmを測る甕形土器である。外反する口縁をやや肥厚させ,端部近くに沈線を施こして

いる。

口縁部は横ナデにより整形されており，肩部から胴部にかけては，幅3㎜～4㎜前後の叩キが施こされている。内面に明確な篦削りは認められなかった。胎土は石英粒を含み，焼成は良好である。色調は灰褐色を示す。

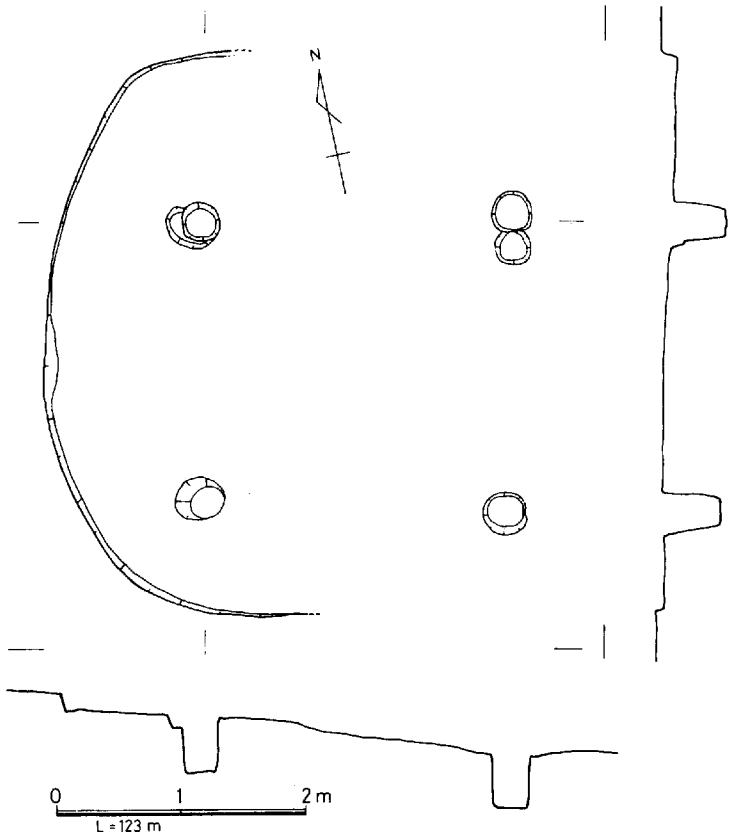
27 は口径15㎝を測る甕形土器である。わずかに外反する口縁端部を下方に拡張し，複合口縁をつくる。口縁端面には横ナデによる凹みを有する。胴部はあまり張る感じをもたない。

器壁は脆弱で水洗いが出来ず，詳細は不明である。胎土には石粒の混入が多い。器表面にススの付着が認められる。色調は茶褐色を示す。

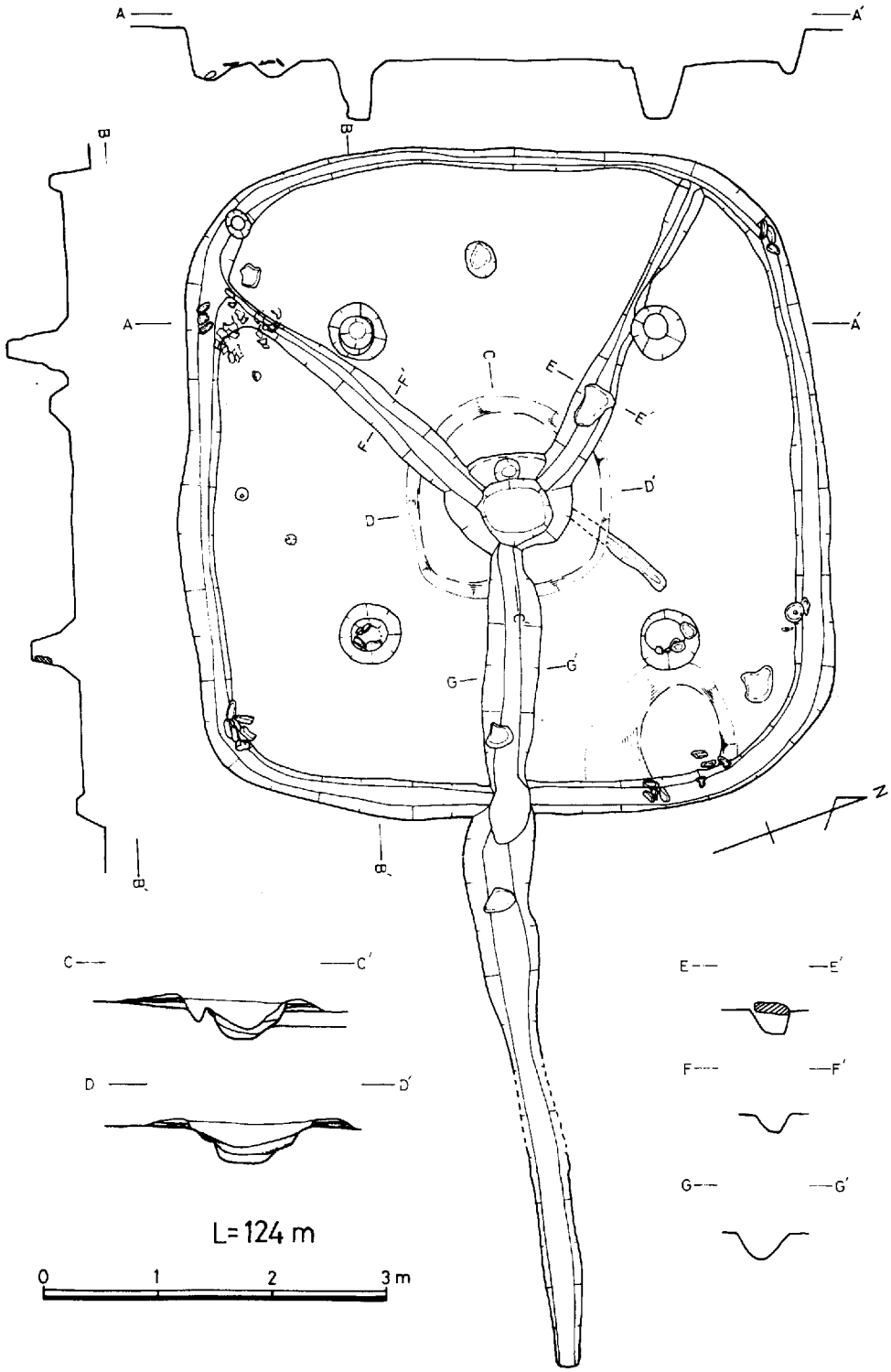
28 は口径16.6㎝，・器高11.5㎝・脚径14㎝を測る高坏形土器である。坏部は浅く内弯し，端部は丸く仕上げ，上端に凹線を施こす。脚部は直口するもので，「ハ」の字状に広く開く裾部を形成している。

29 は高坏形土器の脚部である。裾部は高く「ハ」の字状に開くようである。脚孔は3ケ所にうがたれている。

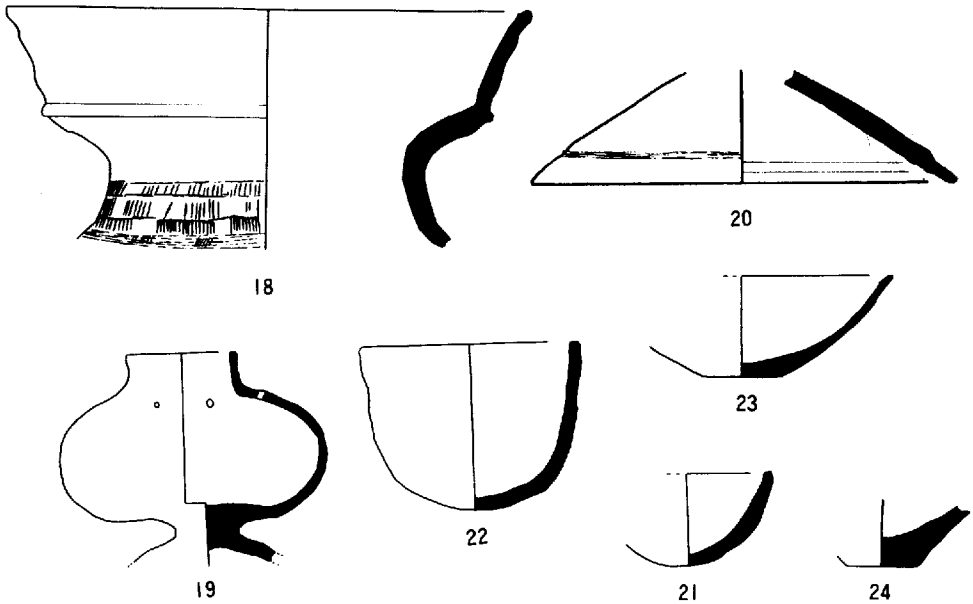
器壁の剥離が著しく水洗いが出来ず，詳細な観察は出来ないが，造りは丁寧なようである。色調は褐色を示す。



第29図　9号住居址平面図・断面図



第３０図　１０号住居址平面図・断面図



第３１図　１０号住居址出土遺物

13 号 住 居 址　２８.４２㎡

Ａ地点で唯一の円形のプランをもつ竪穴式住居址である。やや楕円を呈し，長径７ｍ・短径6.7ｍ，７本柱で柱間は1.6ｍ・1.9ｍ・2.1ｍ・2.2ｍと交互に変わっている。中央ピットは二段に掘り込まれ，直径約90㎝，最深部で約30㎝を測る。周堤帯は幅30㎝～40㎝で，高さ７～８㎝と低い。中央ピット内，壁溝内から，弥生式土器片・床面からサヌカイト製石鏃１・サヌカイト剥片が出土した。この住居址は出土遺物などから，Ａ地点では最も古い時期と考えられる。

出 土 遺 物

30 は口径１３.１㎝を測る甕形土器である。口縁部はゆるやかに外反し，口縁端部を内傾させる。口縁端部の拡張はあまりなされておらず，口縁端面に２本の凹線を施こしている。内面には輪積痕がみられ，右から左方向へ横位の箆削りがみられる。胎土・焼成とも良好であるが，器面が荒れている。色調は茶褐色を示す。

31 は口径14㎝を測る甕形土器である。口縁部はゆるやかに外反し，口縁端部を上下に大きく拡張し，口縁端面に３本の凹線を施こす。頸部屈曲部は強く横ナデをされ，稜線を出している。肩部の張りはあまりない。器壁が荒れているため，整形痕について図示出来なかったが，頸部下半から底部にかけて荒い櫛状工具で上から下にかけての整形痕が認められる。内面は頸部下半から右から左へ横位の箆削りが認められた。焼成は良好，色調は茶褐色を示す。胴部下半にススの附着が著しい。

32 は壷形土器の底部と推定される破片である。焼成は良好で，胎土は石粒を含んでいる。色調は褐色を示す。

33 は底径９cmを測る壷形土器の底部である。焼成は良好で，胎土は石粒を含んでいる。色調は褐色を示す。

14　号　住　居　址

ややくずれた円形で3.5ｍ～3.8ｍの竪穴式住居址である。中央よりに1.1ｍの間隔で２本の柱穴を検出した。深さ0.5ｍのものと0.7ｍのもので，柱数が少ないために必然的に深くしているものと思われる。床溝は南西から中央ピットを通って北西へのび，やや北側にずれて30cm～40cmの暗渠部があって，外溝は約４ｍ北西方向にのびている。床溝の底面は傾斜に沿ってしだいに低くなっている。

中央ピットは二段に掘り込まれているが，柱穴を思わせるほどの深さを呈している。床面には炭化材が残っていた。

出　土　遺　物

34 は口径１5.2cmを測る壷形土器である。頸部は内弯気味で，口縁端部を下方に拡張する部分で外反する。口縁端面は凹線を施こし，口縁端部を下方に拡張した部分は指頭による整形痕が文様状に残されている。器表面は磨滅により整形痕は不詳であるが，頸部から胴部にかけて箆による磨きが観察される。内面は剥離が著しく不明である。胎土は細砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

35 は口径15cmを測る壷形土器である。口縁端部はやや外反気味になり，口縁端部を若干拡張気味にしている。胎土は石粒を含み，焼成は良好であるが，器壁は脆弱である。色調は褐色を示す。

36 は口径５cmを測る甕形土器である。頸部をゆるやかに外反し垂直に拡張し複合口縁をつくる。器壁の剥離が著しく，整形痕は不明。胎土は細砂を含む。色調は灰白色を示す。

37 は口径16cmを測る甕形土器である。「く」の字状に外反する頸部から上方へ拡張させて複合口縁をつくる。口縁端面には４本の凹線がみられる。肩部から胴部にかけてはあまり張らず，胴部下位で若干張り気味にして底部に移行してゆく。器壁は非常に薄く仕上げられているが，内面には輪積痕が認められる。器壁は剥離が著しく整形痕は不明であるが，器面の状態は丁寧な調整を行なっている。胎土焼成とも良好である。色調は褐色を示す。器表面全体にススが付着が認められる。

38 は高坏形土器の坏部の破片である。口縁端部は斜め上方に拡張している。器壁の剥離が著しい。胎土は緻密である。

39 は鉢形土器と推定される破片である。頸部から若干外反させ，口縁端部は丸く仕上げている。器壁の剥離が著しい。胎土は石粒を多く含み，焼成は脆弱である。色調は褐色を示す。

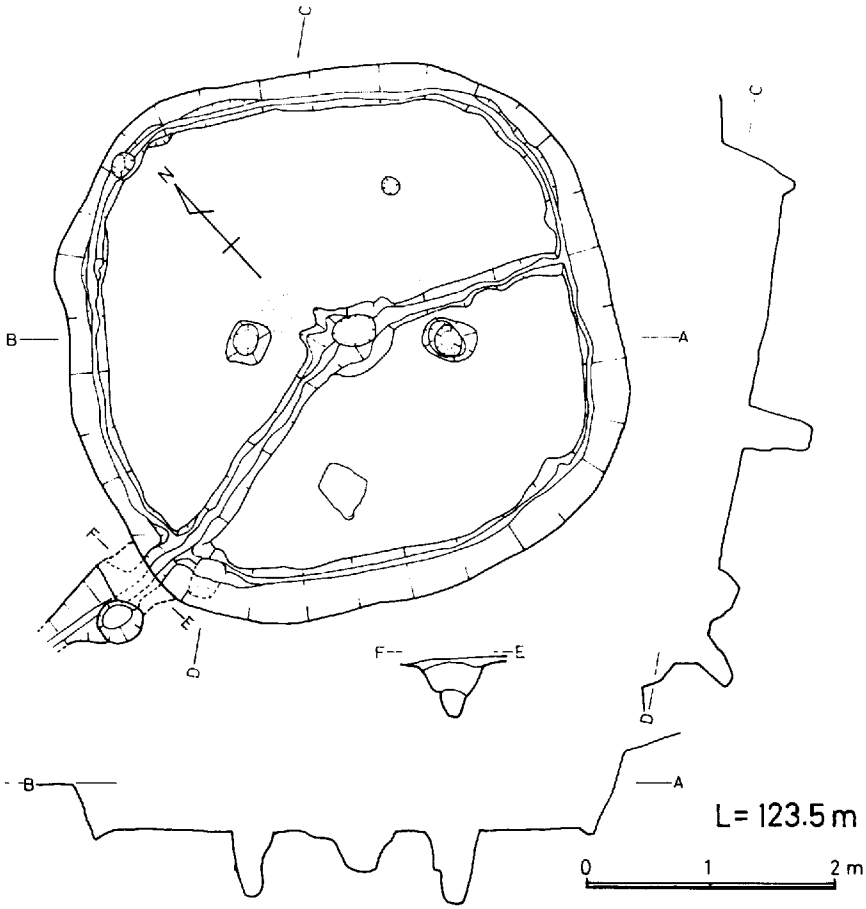
40 は底径８cmを測る鉢形土器の脚部と推定されるものである。強く外へ開く裾部で，脚端部はやや内側へ向いて屈曲線をつくる。この屈曲面に凹線を施こしている。脚部には縦位の箆削りがみられ，胎土，焼成とも良好である。色調は茶褐色を示す。

41 は脚部の破片である。脚部の剥離の状態及び脚部上面（器が乗れば底部）は荒い櫛状工具に

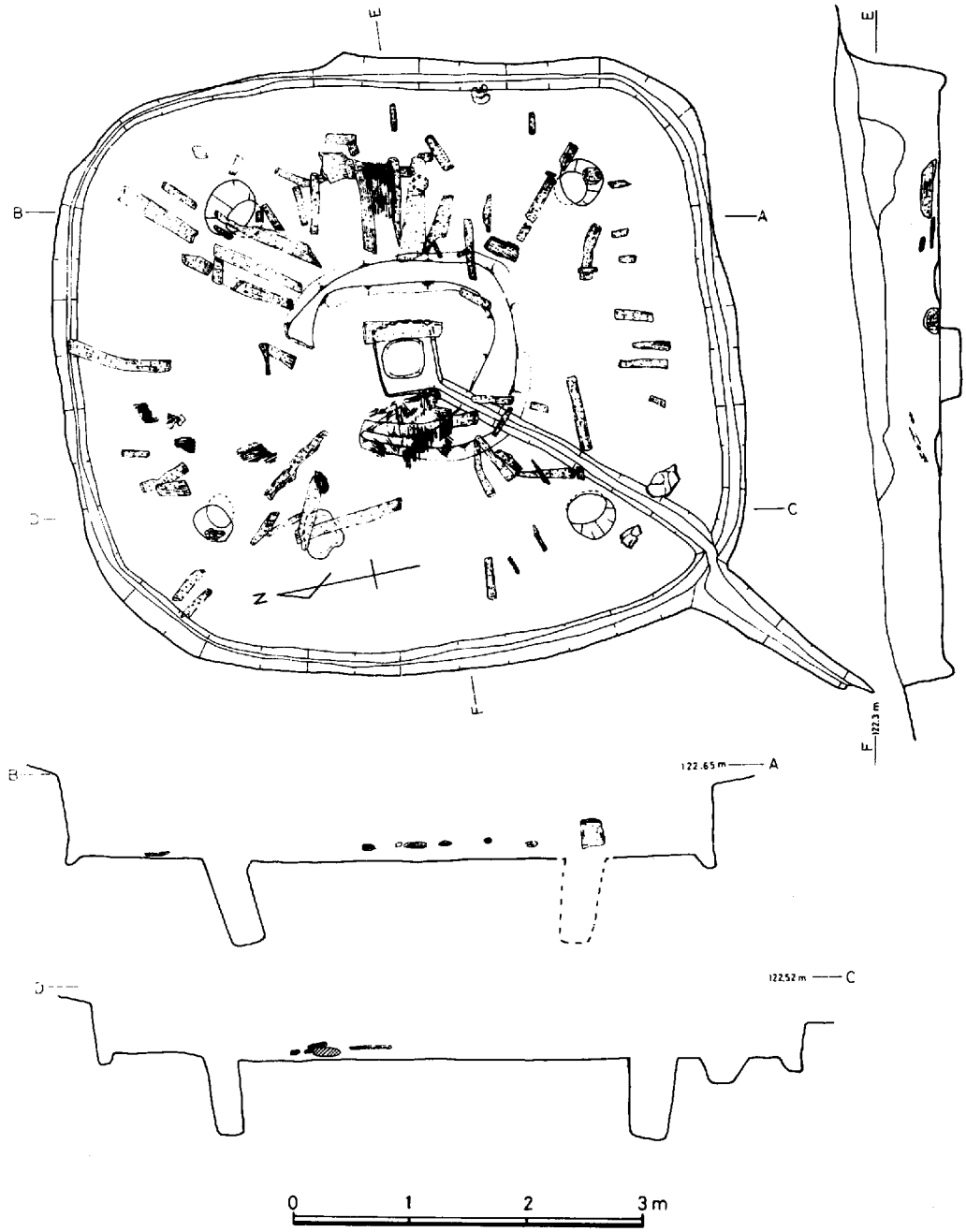
より平滑に整形されていることからして脚部として誤まりないと考える。裾は脚部上面と同様に荒い櫛状工具により整形されている。内面は刷毛状工具の上から箆による整形がなされている。胎土，焼成とも良好である。色調は褐色を示す。

15 号 住 居 址

A地点の南より西斜面肩部に位置する。1辺約5.2mの胴張り方形をなす竪穴式住居址である。4本柱で柱間3.1m～3.5mと異なるが柱より外側に地山造出しのベッド状の遺構が検出された。高さ約25cmで内側に細い溝がある。西半分は削平され壁溝も消失している。柱穴掘り方に河原石が裏込めされていて柱痕もよく残っており直径約15cmを測る。床溝は北東隅，南東隅からベッド状遺構を切って中央ピットで合流し，南西隅から西に向って傾斜下面に下っている。しかし床溝は柱によって中断される部分があり，その機能を単なる排水とは考えられないこともある。断面L－L′では暗渠状をなしているので，ベッド状遺構の下は暗渠であったと考えられる。出土遺物には高坏・小形壷・碗がある。



第32図　11号住居址平面図・断面図



第３３図　１２号住居址平面図・断面図

出土遺物

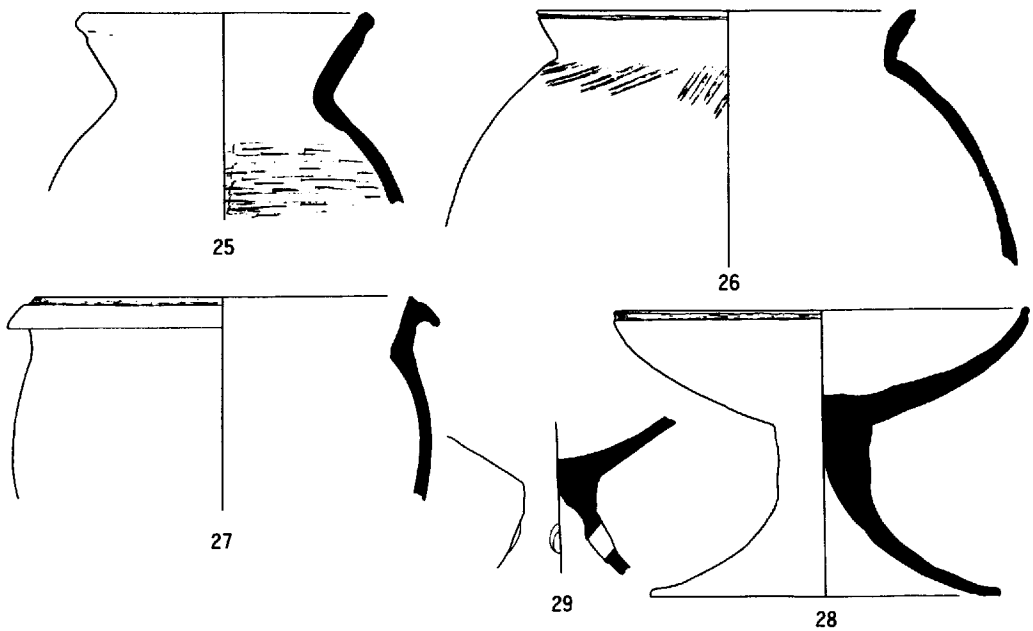
42は口径13.1cmを測る壺形土器である。頸部から「く」の字状に外反した端部より上方に拡張する複合口縁を作る。「く」の字状に外反した端部には沈線を施こす。頸部から胴部にかけては，かなり強く張る胴部を形成している。文様は頸部下半から肩部にかけて，櫛目文を施こしている。櫛目文は非常に薄く，基本的には図示した如く，6本程度の櫛による波状文－直線文－波状文－直線文の組合せが観察された。胎土は細い石粒を多く混入しているが，焼成もよく器表面の調整は丁寧である。色調は茶褐色を示す。

なおこの壺形土器は，覆土上層より出土したものである。

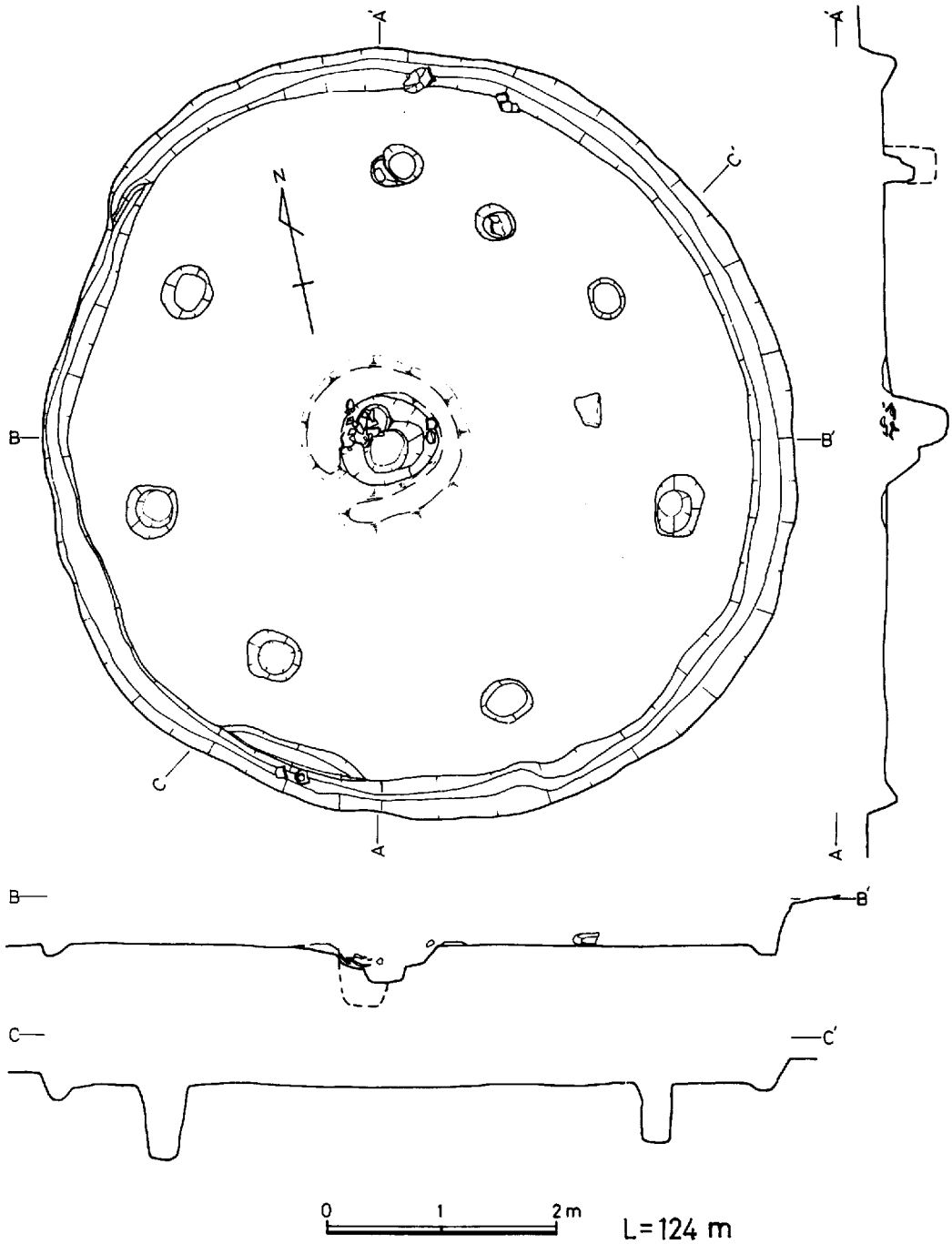
43は破片実測が可能な程度の壺形土器口縁部の破片である。「く」の字状に外反した端部が，若干内傾した複合口縁を形成する。「く」の字状から拡張した部分に，箆状工具による面取りがあるため，「く」の字状端部が拡張部より張り出しているように観察される。

44は甕形土器口縁部破片である。ゆるやかに外反した口縁部を，口縁端部は何ら変化を加えず，丸く作っている。内面は剥離が著しく，整形痕などの観察は出来なかったが，内面の整形は荒い櫛削りが見られた程度である。色調は茶褐色を呈する。

45は口径18.4cm・器高13cm・脚径14.2cmを測る高坏形土器である。坏部は中位部で稜をもって外部へ広がってゆく。脚部は短かく「ハ」の字状は開く裾を作る。脚部の位置は破片実測のため不明である。胎土，焼成とも良好である。色調は暗茶褐色を示す。

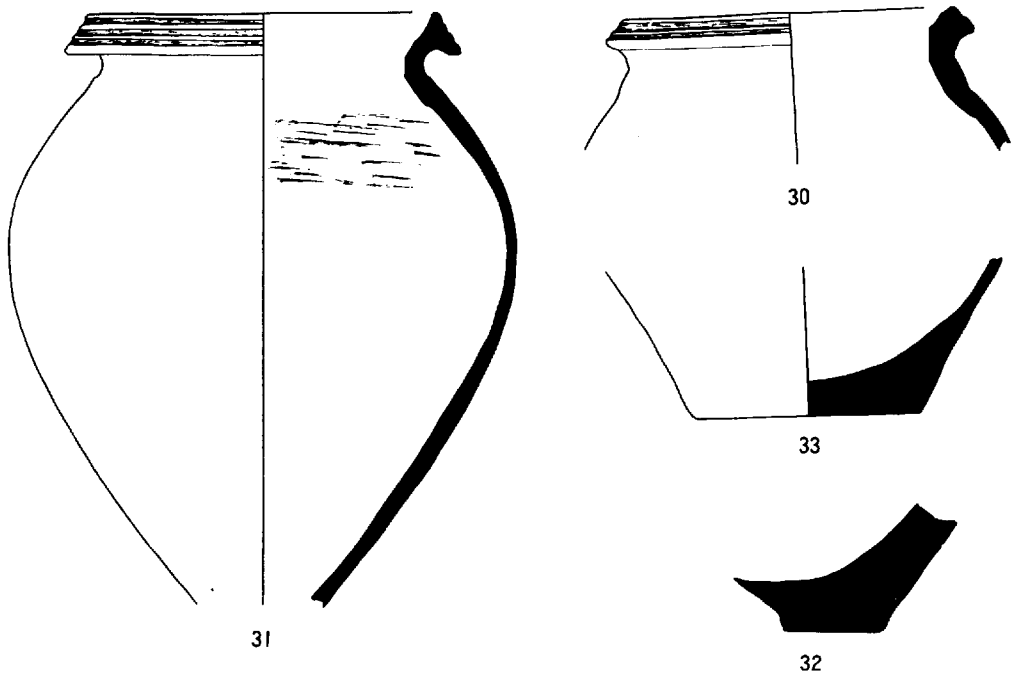


第34図　12号住居址出土遺物



第35図　13号住居址平面図・断面図

46 は推定口径13.8cm・器高7cm・底部径3.5cmを測る鉢形土器である。単純に外部に広がるもので，口縁部において，直線上に立ち上がる器形を示す。内面は左から右へ斜め方向に荒い櫛状



第３６図　13号住居址出土遺物

工具によって整形され，底部にかけては，その上から４本程度の同様の工具により直線的な間隔をもって整形をしている。底部は平底を呈し木葉文の圧痕が明瞭にみられる。器面表面の調整痕は胎土が非常にモロク，洗いが出来ず，またキレツが著じるしく入っており詳細に観察されなかった。色調は茶褐色を示す。

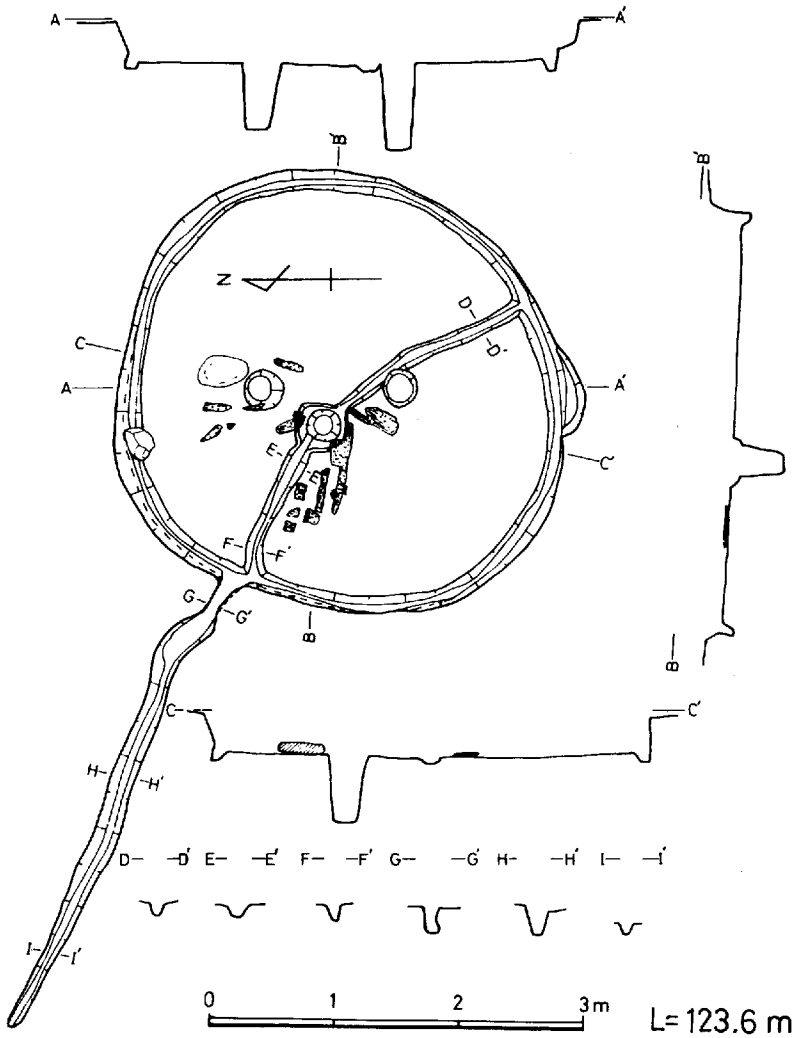
47，**48** は両者とも脚部の破片である。手捏状ではあるが，丁寧な造りをしている。いずれも焼成は良好であり，色調は茶褐色を示す。

16　号　住　居　址

Ａ地点，南よりの西斜面に位置する１辺約4.５ｍの隅丸方形の竪穴式住居址である。17号住居址の外溝を切って掘り込まれている。４本柱で，柱間は２ｍ～2.６ｍとすべて異なっている。また主柱以外に７個の柱穴と両側に古い壁溝があり拡張がおこなわれたと思われる。中央ピットでは角張った形であるが床溝が直線的に西へのびている。柱穴の傍に不定形な盛土がみられる。これは柱をぬきとる時にできたもので柱穴は，いずれもロート状になっている。南側の柱間に1.１ｍ×0.７ｍ，深さ0.３ｍの長方形ピットを検出した。

出　土　遺　物

56，**57**，**60** は覆土上層より，**49**，**55** は中層より出土している。住居址に確実に伴なうもの

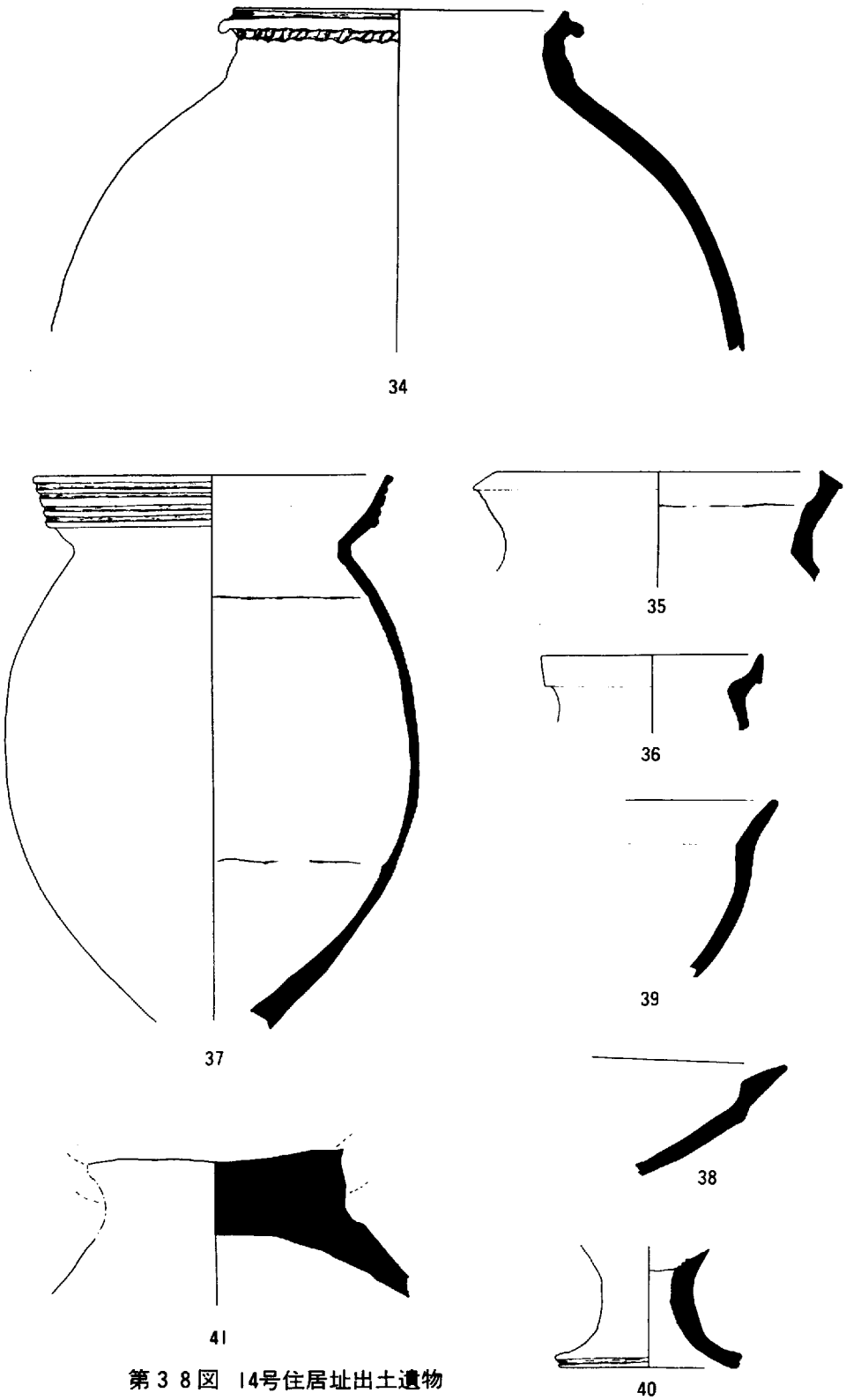


第３７図　１４号住居址平面図・断面図

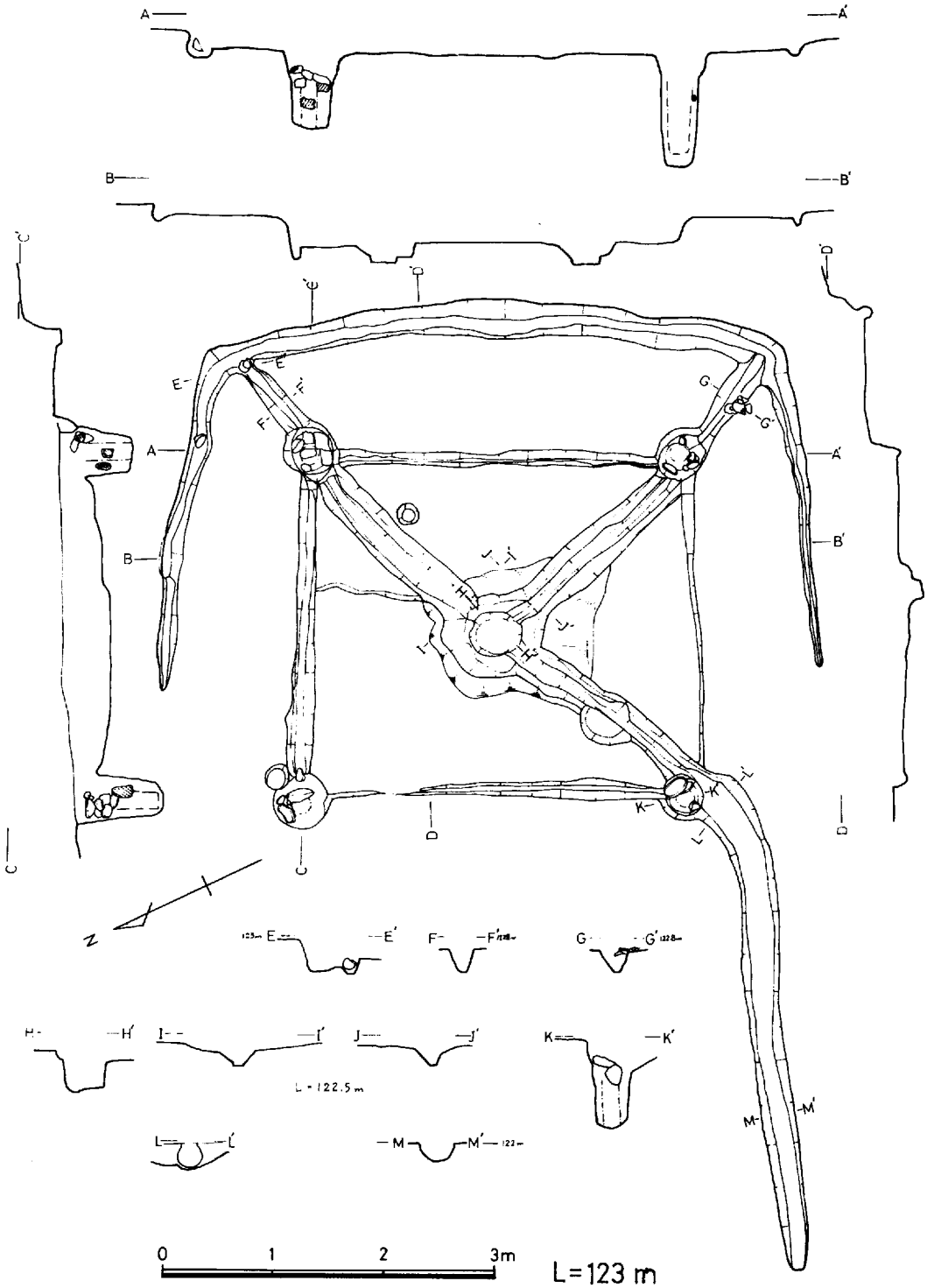
は**58**，**59**の２個である。

58は口径22cmを測る鉢形土器である。平らたく外方へ開く器形で，口縁部は若干立上がり気味になり，口縁端部は丸く仕上げられている。器壁の剥離が著しく，整形痕などは不明。胎土は荒い石粒を多く混入しており，脆弱である色調は灰白色を示す。内面に丹彩がみられる。

59は口径11cm，器高7.5cm，台径5cmを測る台付鉢形土器である。やや内弯気味の鉢で，口縁端部は丸く仕上げられている。台部は裾部が短かく「ハ」の字状に開くもので，端部は細くならず太めの接地面を有する。器壁は剥離が著しく，胎土も脆弱なため整形痕などは不明。石粒の混入は



第３８図　14号住居址出土遺物



第３９図　１５号住居址平面図・断面図

少ない。色調は灰褐色を示す。

17 号 住 居 址

A地点，16号住居址の西に位置する3.0 m×2.7 mの隅丸長方形の小型の竪穴式住居址である。床面積6.3 m²で，本遺跡検出の住居址中最も小さいものである。壁高40cm〜50cmを測り遺存状態もかなり良好である。壁溝は外側をえぐり込んでめぐり二本の柱は1.4 m間隔に北北東一南南西方向をさし，棟の方向を示している。二本柱のために柱穴は70cm〜75cmと深く穿っている。

中央ピットは45cm×35cmの長方形で深さは10cm未満を測る。この中央ピットの隅から西方へ床溝がのび，約60cmの暗渠で外溝となっている。外溝部分は床溝に比べて幅・深さともに大きくなっている。床面には木材が炭化して出土したが遺存状態があまり良好でない。

出 土 遺 物

62 は口径13.9 cmを測る壺形土器である。頸部は「く」の字状に外反し，口縁端部を拡張させ，複合口線をつくる。口縁端面は横ナデによってやや凹状に近づいているが，文様等の施文はなされていない。胎土，焼成とも良好であるが，器壁は脆弱である。色調は茶褐色を示す。

63 は口径18.9 cmを測る甕形土器である。ゆるやかに外反する口縁部をやや肥厚させ，複合口縁をつくる。この口縁端面に4本の沈線状の凹線を施こしている。器壁は脆弱で水洗いが出来ず，整形痕などは不明。荒い石粒と砂粒を含む。色調は褐色を示す。

64 は底径4.5 cmを測る甕形土器の底部であるが，壺形土器のそれになることも考えられる。張り出し状の底部から，偏平に開く胴部を有するものと思われる。底部は平滑ではなく，やや凹凸がみられ，不安定である。

器面の剥離が著しく，整形痕の図化は困難であったが，叩きが観察された。胎土，焼成とも良好である。色調は茶褐色を示す。

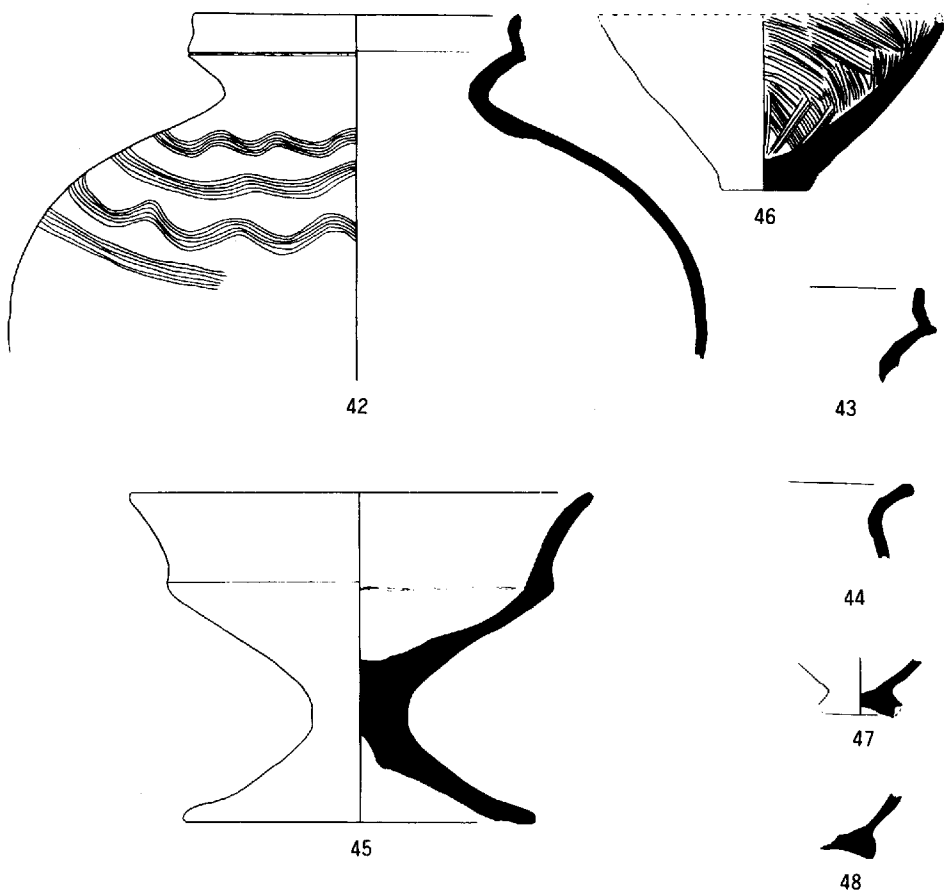
65 は底径3 cmを測るもので，**64** と同様に器種は決めがたい。**64** と胎土，焼成ともあまり変わらず，太めの叩きを施こしているのがみられる。

18 号 住 居 址

A地点，14号住居址の北側に位置する直径3 mの小型の竪穴式住居址である。西半を削平されているが柱穴2を検出している。また住居内の浅いピット内には大きい河原石が2個置かれサヌカイト製石鏃3，剥片多数が出土した。

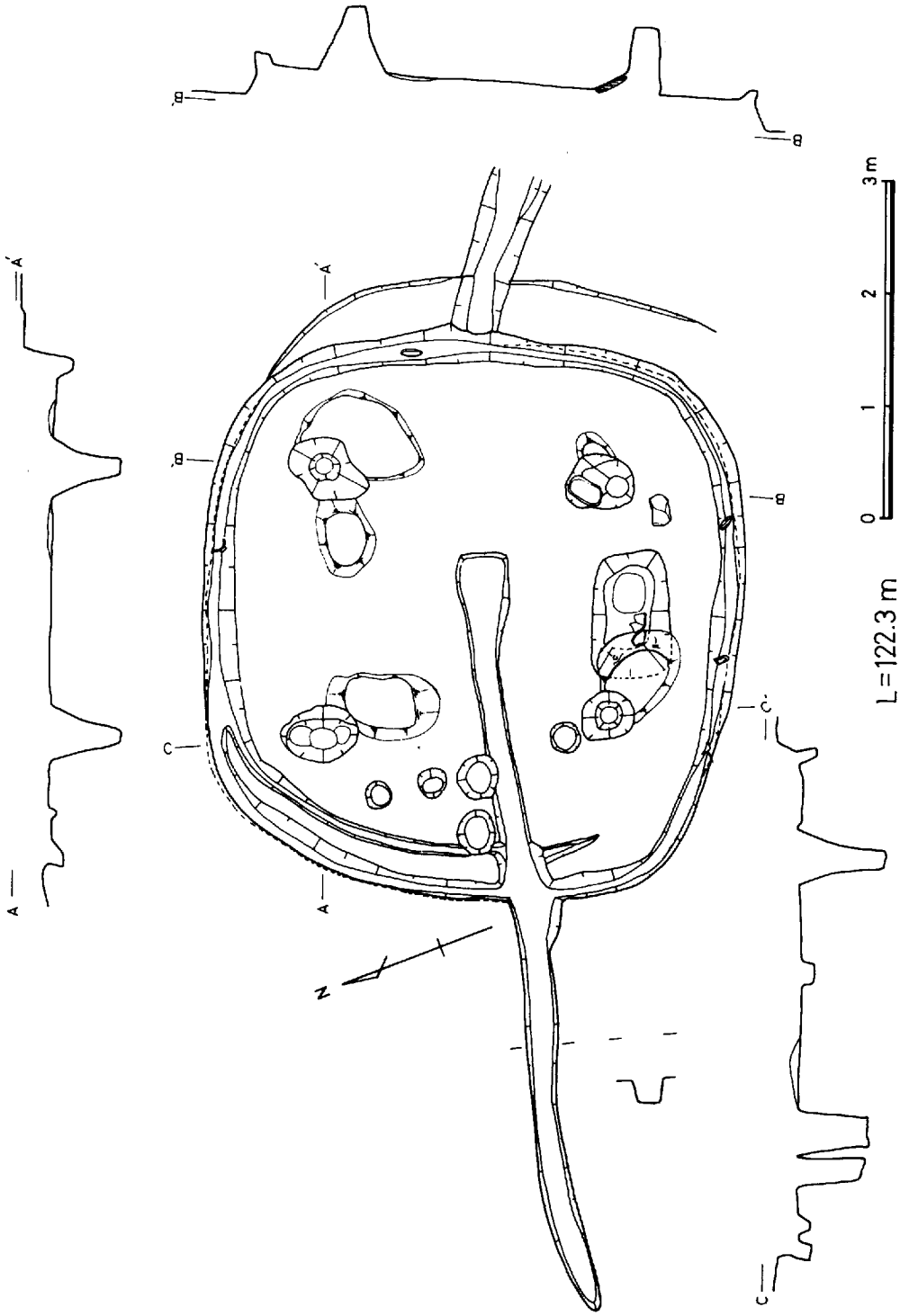
19 号 住 居 址

A地点，南端の斜面に位置する胴張り隅丸方形の竪穴式住居址である。柱穴は1〜5の5本で1－2間3.5 m，2－3間3.4 m，3－4間3.4 m，4－5間2.8 m，5－1間2.8 mである。柱間の外側には高さ約10cm，幅1 m〜1.2 mのベッド状遺構が，1－2，2－3間につくられていた。中央ピットは不定形で柱穴1・2・3－4間の壁溝から床溝がこれに合流し西へ幅約50cmの床溝となって外溝とつながっている。西側の壁溝には長さ10cm〜15cmの河原石が3〜4個づつかたまって10

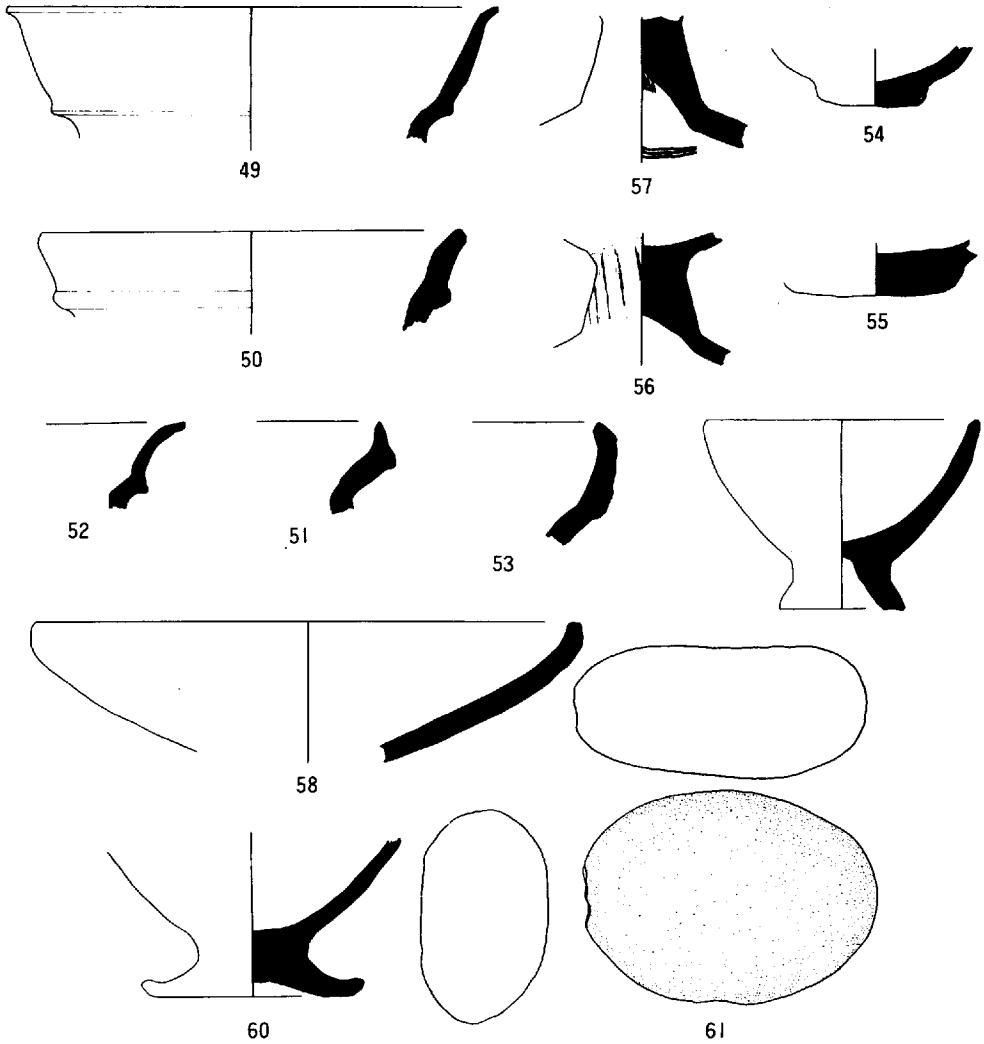


第４０図　15号住居址出土遺物

数個出土した。また，手焙型土器が壁溝から，甕形土器が床面から出土した。この五角形の住居址は最も新しい時期のものでベッド状遺構・貼り床を除去すると柱穴・床溝などが複雑に入りみだれて検出された。最も古い住居址（第１期）は柱穴７～12の６本柱で柱間は７－８間2.7ｍ，８－９間2.8ｍ，９－10間3.3ｍ，10－11間2.8ｍ，11－12間2.7ｍ，とかなり整った六角形をなし，柱は細い溝で結ばれている。この溝は８号，15号住居址の例のようにベッド状遺構の内側に掘られた溝と共通のものと思われ，第１期にもベッド状遺構が存在したことを示唆している。壁溝は五角形住居址と重なっていて，南側と西側に一部残っている。また北西にのびる外溝は第１期のものと思われる。第２期は柱穴12～17の６本柱で拡張され，柱間も広がり，12－13間3.9ｍ，13－14間3.7ｍ，14－15間2.8ｍ，15－16間3.5ｍ，16－17間３ｍ，17－12間3.3ｍと大型の六角形をなす。



第41図　16号住居址平面図・断面図



第42図　16号住居址出土遺物

柱間の細い溝は第1期と同じ性格のものと思われる。12－13，12－17の中間にある柱穴も第2期にともなうものであろう。壁溝は東側と南西側に弧状に残っている。床溝は中央ピットから西へのび外溝につながっている。そして第3期は五角形の住居址となるのである。なお1－2間にある細い二条の溝と二個の柱穴が最も古い住居址とも考えられるが，全体の復元ができず不明である。

出　土　遺　物

66は底径3cmを測る甕形土器である。肩部上半から欠失している。胴部はほとんど張ることなく，胴部下半からゆるやかに底部に移行してゆき，安定した底部をつくっている。器壁は非常に薄

く仕上げられていることから篦削りを推定するが，剥離が著しく確認されなかった。器面は縦位の荒い櫛状工具による整形がみられたが，叩きの有無は内面と同様確認出来なかった。胎土，焼成とも良好である。色調は暗茶褐色を示す。

67 は底径 2.5 cmを測る甕形土器の底部である。底部は張り出し状で，不安定なものである。器壁の剥離が著しく，整形痕などは不明。内面に荒い櫛状工具によるとみられる整形痕がみられる。色調は褐色を示す。

68 は底径 3.5 cmを測る甕形土器の底部である。**67** のように張り出さないが，不安定な底部である。剥離が著しく整形痕などは不明。色調は褐色を示す。

69 は器高 1 9.9 cm，底径 4.8 cmを測る手焙形土器である。鉢部は平底を持ち，やや偏平に外方へ延び，凸帯を設うけ，さらに垂直に延び，やはり凸帯をつけ被部へと移行する。下方の凸帯には右から左方向に斜めの刺突が，上方の凸帯には左から右方向斜めの刺突が施こされている。下方の凸帯はあまり張り出さないが，上方の凸帯は被部との接合の為張り出しが強い。また，横ナデにより凸帯裏にくぼみを持っている。整形は縦位の荒い櫛状工具による削りをしたあと，横位の篦磨きがなされている。被部は均整のとれた姿をし，口縁端面は約 1 cmほどの面を設うけ，鉢部の凸帯と同様に刺突を加えている。また口縁部と鉢部との接合部はやはり右から左への刺突を加えており凸帯のと合せて，羽状文風に施こしている。整形は体部と同様に，荒い櫛状工具の上から篦磨きがなされている。被部中央に径 5 mmほどの焼成前の穿孔がみられる。内面は，細い櫛状工具による整形がみられる。胎土は細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は灰茶褐色を示し，全面丹塗りされている。

70 は脚部 1 5.8 cmを測る高坏形土器の脚部である。脚部はやや開き気味に裾部に移行し，「ハ」の字状に低く拡がる裾部をつくる。裾端部は丸く仕上げられている。脚孔は 4 ケ所と推定される。器壁の剥離が著しいが，胎土は緻密である。丹塗りが施こされている。

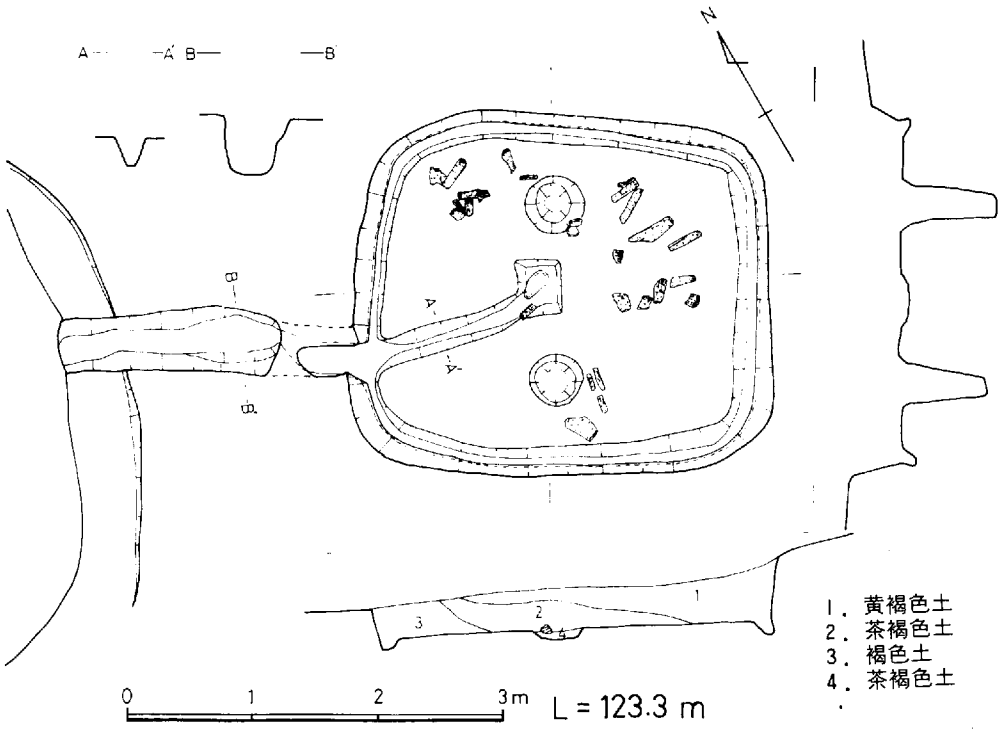
20 号 住 居 址

C地点，北辺 4.5 m，南辺の残存 3.5 mの隅丸方形を呈する竪穴式住居址である。4 本柱で柱間は 2.9 m・2.6 mと 1.9 m・1.8 mでいずれも柱穴の大きさが同じである。復元すると，4.5 m×4 mの長方形のプランが考えられる。

北壁に接して，鍛冶炉がつくられていた。住居址内に開くU字形の土堤は幅20cm・高さ15cmで40 cm×50cmの火床を抱いている。火床上には横の細溝によって凹凸面ができている。厚さ 5 cmの火床部分は表面から黄白色・赤色・褐色と変化し，かなり強く火をうけていることを示している。

出 土 遺 物

71 は頸部からL字状に近くまげ口縁端部に稜を有する。胴部はあまり張ることなく，底部に移行すると推定される。土器そのものが非常にモロク，水洗いが出来ず，整形具についての詳細な観察は出来なかったが，頸部から縦方向の篦削りが認められる。



第43図　17号住居址平面図・断面図

72（須恵器）は口径14cm，器高9.3cm，脚部9.2cm，脚高4.7cmそれぞれ測る須恵器の高坏形土器である。坏部半ばから内弯気味になり，口縁端部は丸味を有する。坏部下半において箆状工具による面取りがなされている。脚部は「ハ」の字状に開き，端部に稜を有する。胎土は細砂を多く含み，焼きは甘く色調も茶灰色を示す。

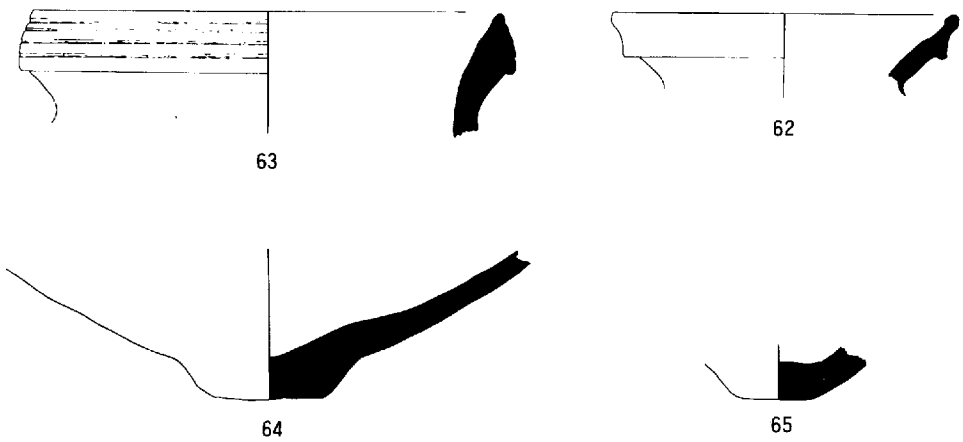
21　号　住　居　址

C地点の浅い谷頭付近に位置する変形した隅丸方形を呈する。削平が著るしく壁高はわずかで壁溝がかろうじて残り，中央部を南北に走る後世の溝で床面の遺存状態も良好ではない。四本柱と思われるが柱穴は直径10cm～15cmで，菱形の配列をなす。建て替えが行われているが古い時期の住居址は壁溝を一部残すのみである。新しい住居址は南へのびる外溝をもっている。東辺に焼土が検出された。

住居址中央部の土壙は住居址に先行するものである。

出　土　遺　物

73は口径11.9cm，器高9.5cm，底径3.3cmを測る鉢形土器である。「く」の字状に外反する



第44図　17号住居址出土遺物

口縁端部を拡張させ，複合口縁をつくる。口縁端面は横ナデによる整形がみられる以外は無文である。底部は丸底に近く，不安定な底部を有する。器壁の剥離が著しく，整形などの観察は出来ないが，内面の底部に篦削りが認められる。胎土，焼成ともに良好である。色調は茶褐色を示す。

22　号　住　居　址

長径4m，短径3.5mの楕円形に近いプランを呈し，二本の柱穴は1.8mの間隔である。住居址中央を南北に後世の溝が走り，壁溝が削平されている。中央ピットは柱穴状で深さ45cmを測る。中央ピットから北と南西に二条の床溝が直線的にのび，約50cmの暗渠部分から外溝につながっている。しかし，床溝に比べて，外溝は急に深さと幅を増している。北側の壁溝から石庖丁1個と土器片が出土した。

23　号　住　居　址

C地点の浅い谷の東斜面に位置する直径11cmの円形プランの竪穴式住居址である。床面積も82m²と大型である。　同心円に二度の建て替えがおこなわれている。

第1期は直径7mの円形で柱は1～6の6本柱で南西にのびる床溝と外溝がある。

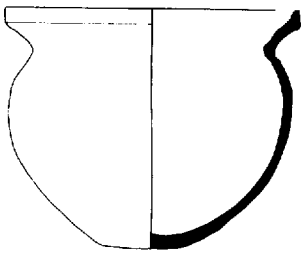
第2期は直径9mに拡大されて，柱は7～10の4本の棟持柱と第1期壁溝上に11～17の7本の主柱を配している。柱穴13と14の間隔が広く検出できない柱穴が存在したかもしれない。中央ピットから西へ床溝がやや曲がって外溝とつながっている。

第3期はさらに拡大され，直径11mを測る。4本の棟持柱の間隔が2.6m～2.7mと広くなり，第2期の壁溝上に22～31の10本の主柱を配している。中央ピットは直径約1mの不定形な皿状を呈し，10数個の河原石が入っている。この中央ピットから西へ直線的にのび，第2期の床溝と交錯し

て外溝とつながっている。

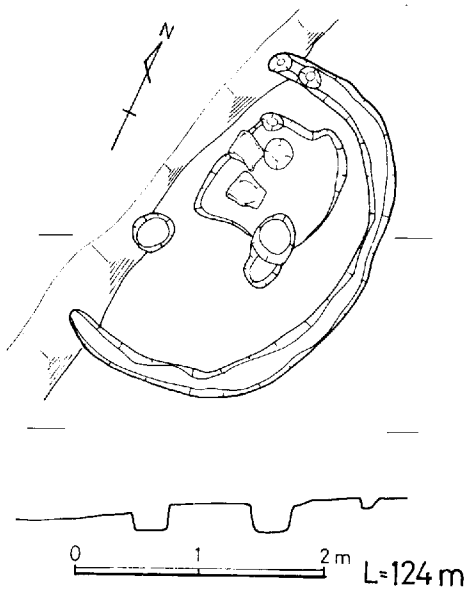
床面からの遺物はあまり多くなく，石庖丁の破片，時期があきらかな程度の土器片程度である。

この住居址は意識的な拡張をしており，直径も7m・9m・11mと規則的であるし，古い壁溝上に主柱を配している。



73

第51図 21号住居址出土遺物



第45図 18号住居址平面図・断面図

出土遺物

74 は口径29.1cmを測る壺形土器である。外反する口縁端部を上下に拡張し，複合口縁をつくる。口縁端面は剥離の為不詳である。口縁部には荒い櫛状工具による整形がみられる。器壁は水洗いに不適で溶解しやすい。色調は明るい褐色を示す。

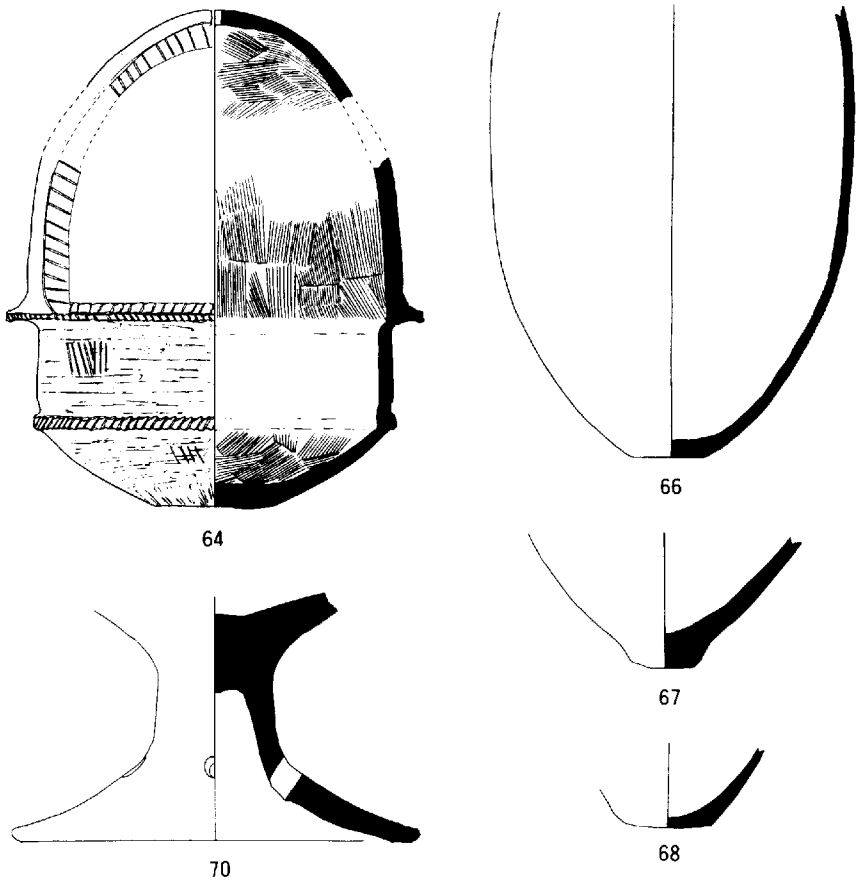
75 は口径18cmを測る壺形土器である。「L」字状に外反する口縁端部を肥厚させ，複合口縁をつくる。**74** の土器と同様に水洗いが不適で溶解しやすい。色調は明るい褐色を示す。

76 は口径16cmを測る甕形土器である。外反した口縁を上下に拡張し，複合口縁をつくる。口縁端面は横ナデによる整形をおこない，頸部内面は横位の荒い櫛状工具による整形が，それ以下は横位の箆削りがみられる。胎土，焼成とも良好である。色調は茶褐色を示す。

77 は口縁端部を上下に拡張し，複合口縁をつくり，口縁端面に3本の凹線を施こす甕形土器の破片である。

78 は「く」の字状に外反する口縁端部を上下に拡張し，複合口縁をつくる。口縁端面は横ナデにより **76** と同様に，凹線状のくぼみが施こされている。内面は横位の箆削りがなされている。胎土は石粒を含むが，焼成とも良好である。色調は茶褐色を示す。

79 は外反する口縁を上下に拡張し，複合口縁をつくる甕形土器（壺形土器）である。口縁端面は磨滅のため詳細は不明であるが，凹線の痕跡が認められ，また上下の端に刺突による列点文がみ



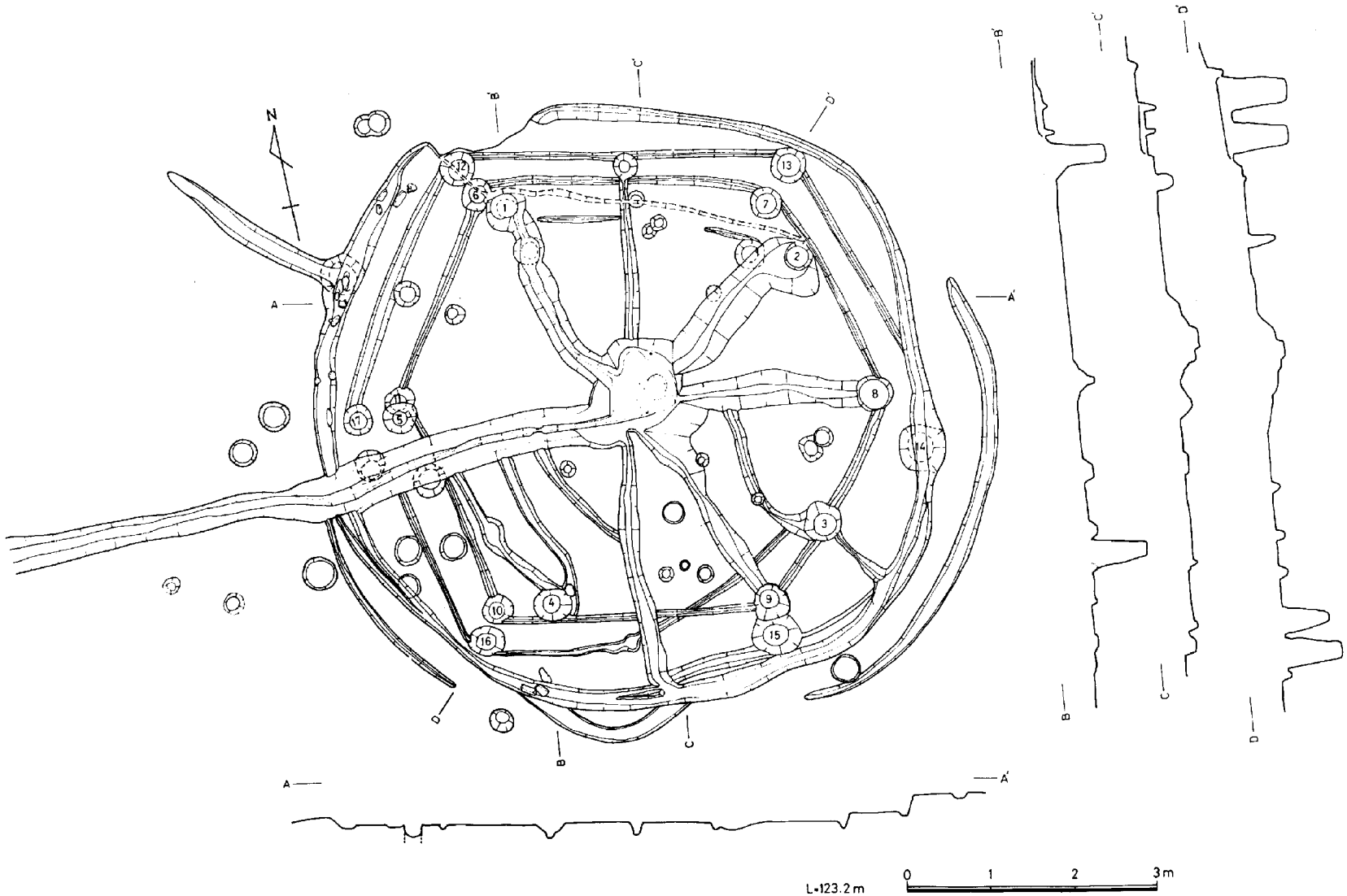
第47図　19号住居址出土遺物

られる。

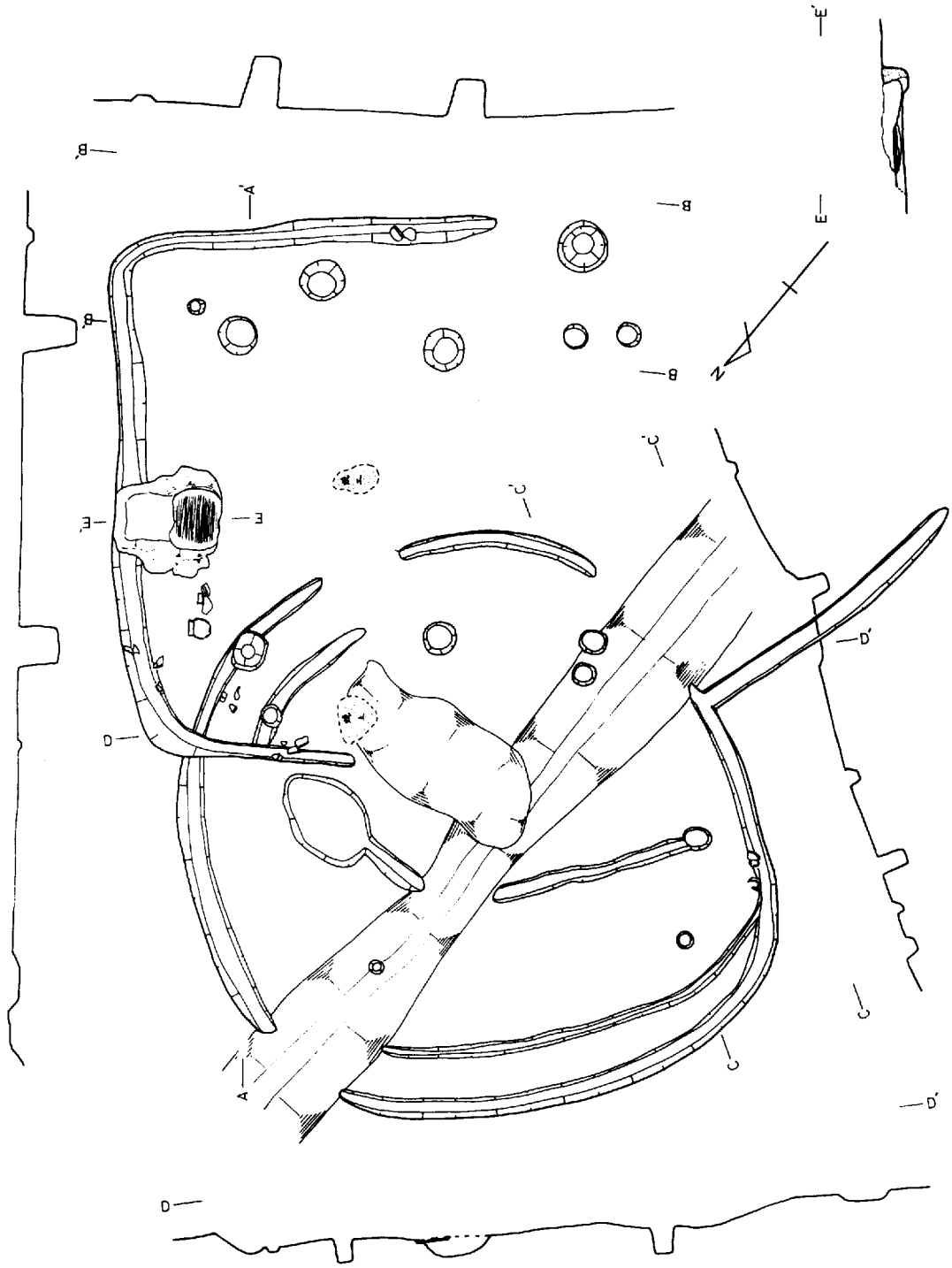
80 は底径6.7cmを測る甕形土器（壷形土器）の底部である。剥離が著しく，詳細は観察されない。色調は褐色を示す。

81 は口径17cmを測る高坏形土器の坏部である。口縁端部を肥厚させ，複合口縁としている。口縁端面には数本の凹線が施こされた上から深いタッチの線による山形文が描かれ，山形文と山形文との間に竹管による押圧が施こされている。この山形文の中には，斜めと斜格子となる線が充填されている。剥離が著しいが，胎土，焼成とも良好である。色調は褐色を示す。なお，丹塗りがなされている。

82 は脚部の破片で，縦位の箆磨きがなされている。細砂を含み，胎土，焼成とも良好である。色調は茶褐色を示す。



第４６図　１９号住居址平面図・断面図



第48図　20号・21号住居址平面図・断面図

83 は底径 6.8 cmを測る底部である。剥離が著じるしく詳細な観察は出来なかった。石粒を含み脆弱である。色調は褐色を示す。

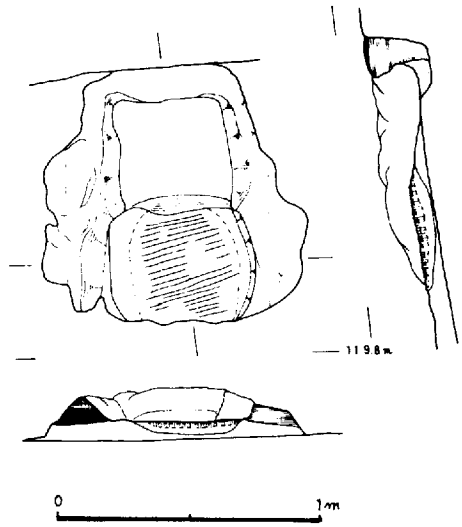
24 号 住 居 址

C地点の南端に位置する竪穴式住居址である。

西側を約$\frac{1}{4}$を消失しているが，1辺約5mの隅丸方形を呈する。壁溝は二条がめぐっているが柱穴が3〜4個づつかたまっており，建て替えの回数が多くなる可能性がある。

北西柱がいづれも不明で，4本柱の場合，4－7－13が柱間は2.1m・2.6m・3－8－11が柱間は2.2m・2.5m・5－10－12が柱間は2.4m・2.3mという組み合せが考えられる。

ピット6はやや袋状をなす貯蔵穴で，最も新しい時期に属すると思われる。底面からは台付埦が出土した。



第49図　20号鍛治炉

中央ピットは不定形で浅い皿状を呈し，北と西に床溝がのびている。

遺物は南辺 壁溝から手捏形土器などが出土した。埋土からサヌカイト剥片が出土した。

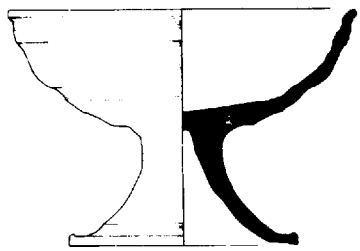
出 土 遺 物

84 はかなり大きな壷形土器の底部である。底部には木葉痕がみられる。器壁は溶解しやすく，詳細な観察は出来なかった。

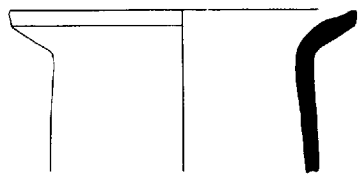
85 は口径17cmを測る甕形土器である。外反する口縁端部を上下に拡張し，複合口縁をつくる。口縁端部から頸部にかけて横ナデを施こし，内面は篦削りがみられる。器壁は脆弱である。色調は茶褐色を示す。

86 は外反する口縁を上方に拡張し，複合口縁をつくる。頸部は強く横ナデされている為に，えぐるようになる。口縁端面は丸味を持って仕上げられている。器壁が脆弱で水洗いが出来ず，また内面の剥離が著しい。胴部にはススの付着が認められる。

87 は「く」の字状に外反する口縁端部を垂直にさせ，複合口縁をつくる。内面は横位の篦削りが認められる。器壁が脆弱で水洗いが出来ず，詳細は不明であ



72



71

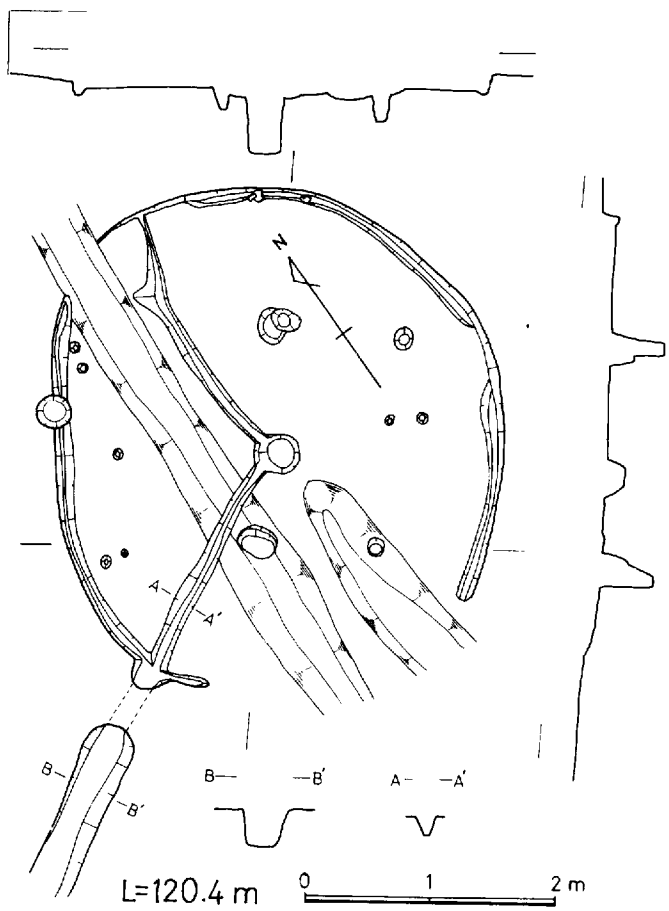
第50図　20号住居址出土遺物

る。色調は茶褐色を示す。

88 は高坏形土器の坏部の破片である。

器表面は篦磨きがなされており，丁寧なつくりをしている。図示した破線は，粘土の充填部分を示したものである。色調は茶褐色を示す。

89 は高坏形土器の脚部である。やや外方に広がる脚から低く，若干丸味をもった裾部をつくっている。脚部内面に絞りが認められ，脚孔は4ケ所である。器壁は脆弱で水洗いが出来ず，詳細は不明である。色調は赤褐色を示す。丹塗りが施こされている。



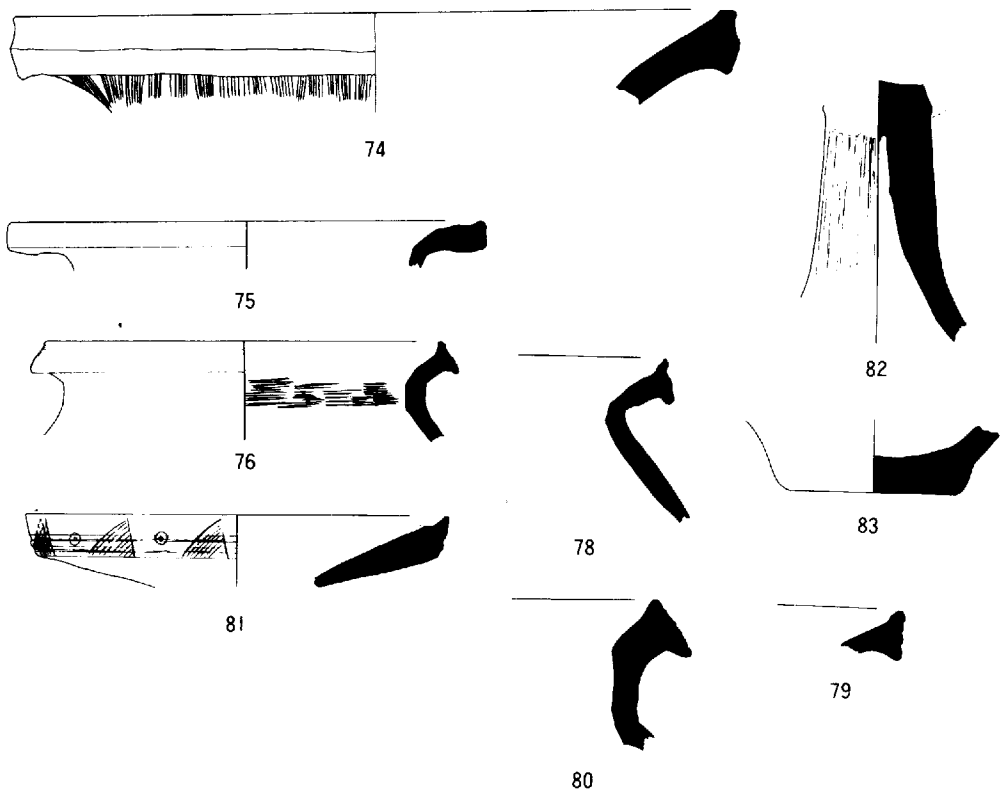
第52図　22号住居址平面図・断面図

90 はやや開き気味の高坏形土器の脚部である。縦位の篦削りというよりか，篦磨きの方が適切と考えられる整形がみられる。胎土は木目の細い粘土を用いており，焼成も良好である。色調は灰褐色を示す。

91 は口径14cm，器高8cmを測る台付鉢形土器である。鉢部は丸味をもって外方へ広がり口縁端部は丸く仕上げられている。台部は短かく「ハ」の字状に開いている。器壁が脆弱で水洗いが出来ず，詳細は不明であり，また剥離が著しい。色調は灰白色を示す。

92 は台径9.3cmを測る鉢形土器の台部と推定されるものである。「ハ」の字状に低く遍平に開く台部で，端部を屈曲させている。胎土は石英粒を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

93 は口径7.5cm，器高8.7cm，台形3.4cmを測る台付鉢形土器である。やや内弯気味の深鉢を呈し，口縁端は丸く仕上げている。台部は内弯気味の短かく低いものである。全体的なつくりは厚手の感じを受ける。器壁が脆弱で水洗いが出来ず，詳細は不明である。色調は茶褐色を示す。



第５４図　　23号住居址出土遺物

94 は口径6.6cm，器高6.3cm，底径2.8cmを測る鉢形土器である。直口状に開くもので，口縁部を外方へ屈曲させている。底部はしっかりとした面をもち，木葉痕がみられる。器壁は脆弱で水洗いが出来ず，詳細は不明である。色調は茶褐色を示す。

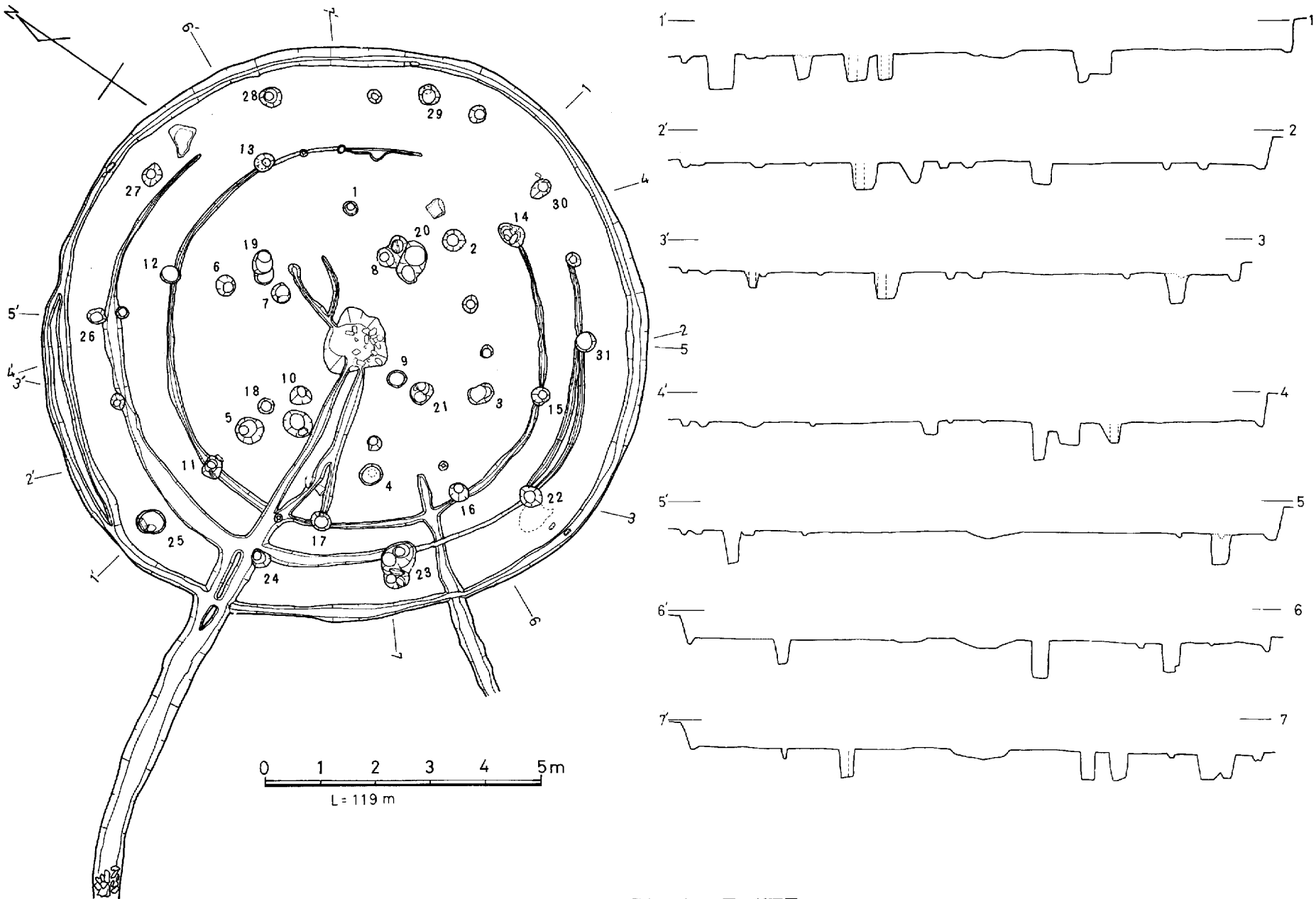
95 は口径7.8cm，器高7.9cmを測るコップ形土器である。口縁部はやや外方へ屈曲し，丸く仕上げている。底部は丸底風に作られている。器壁が脆弱で水洗いが出来ず，詳細は不明である。胎土は粒子の混入は少ない。色調は茶褐色を示す。

25　号　住　居　址

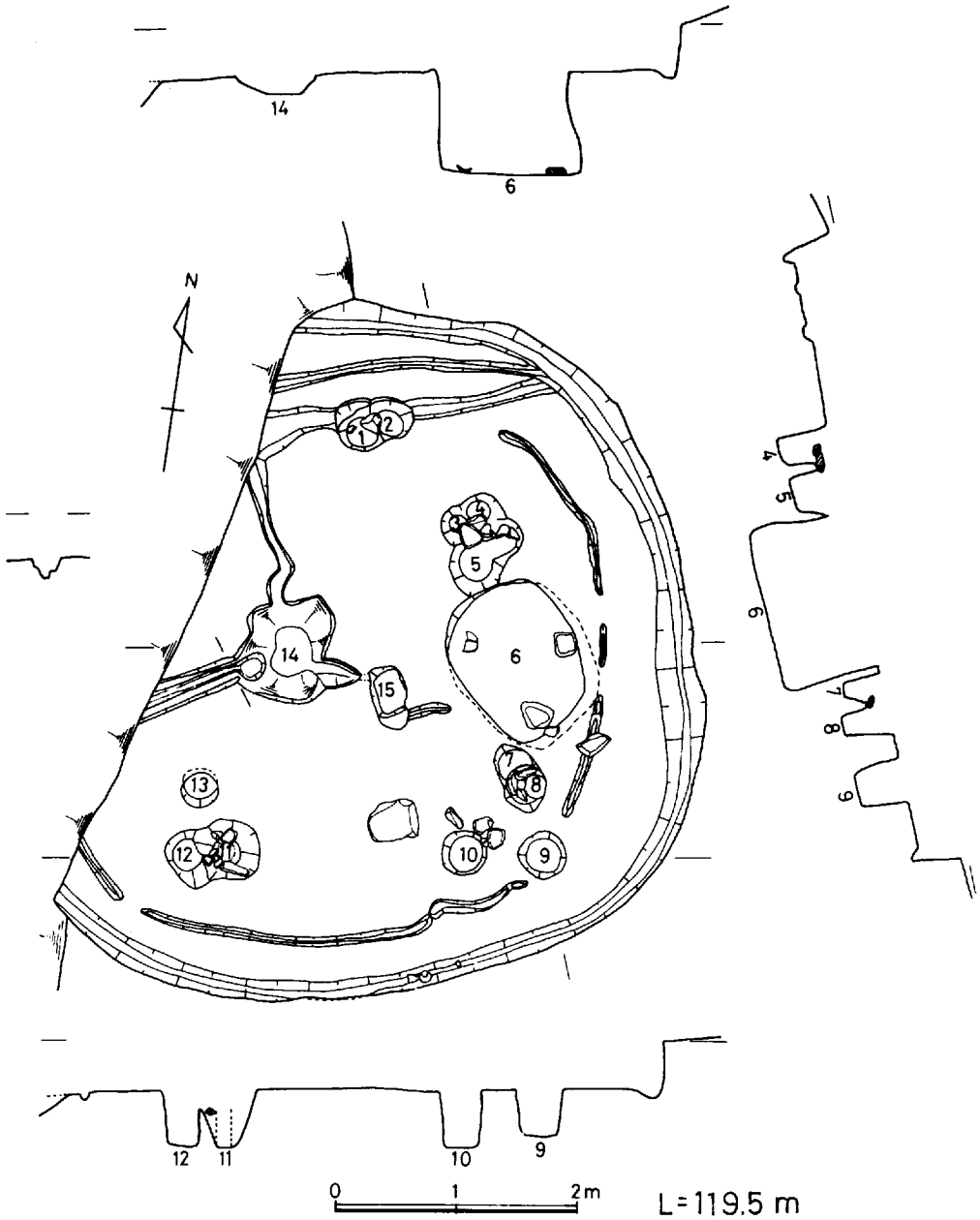
C地点の中央部に位置する円形に近い1辺4.2mの隅丸方形を呈する竪穴式住居址である。

床面には杭跡が4本あるのみで住居址内には柱穴はなく，両外側に柱穴があり，この住居址の棟持柱の可能性がある。

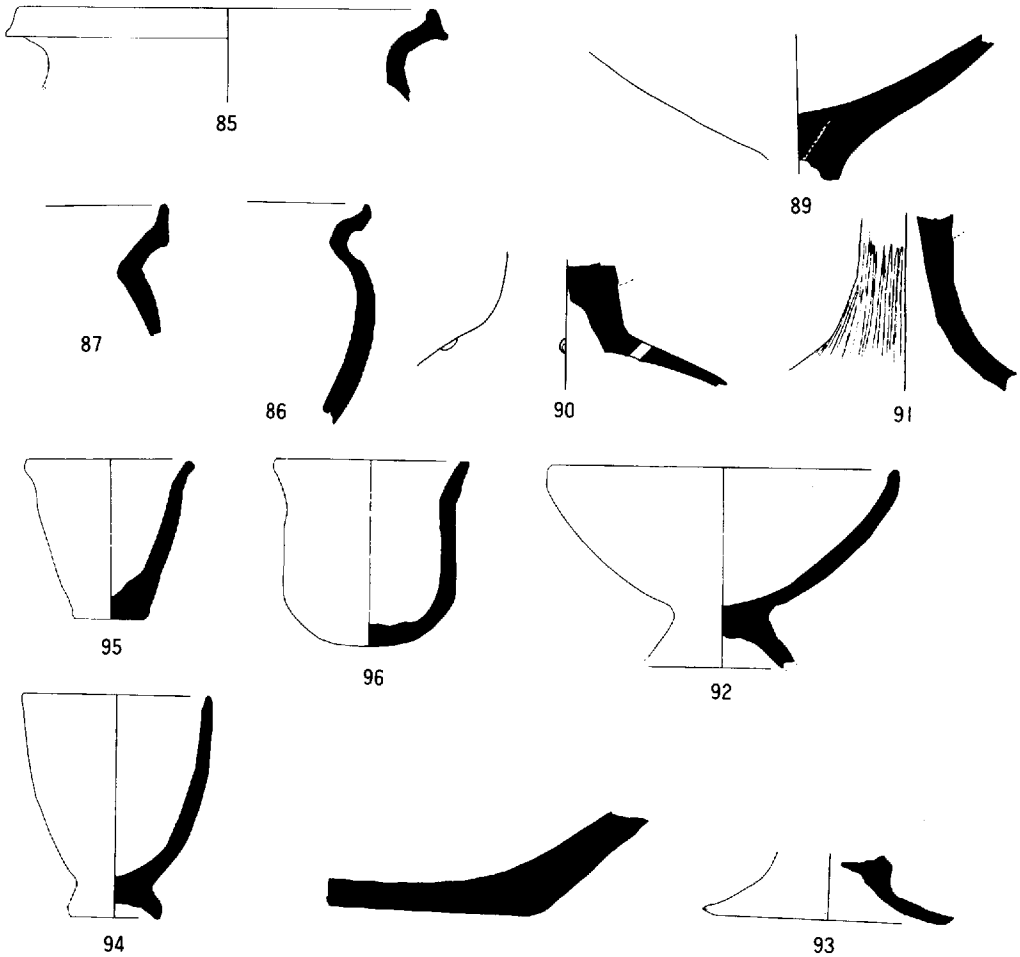
中央ピットは円形の浅い皿状で，南西へ床溝がのび，外溝は6cm以上にのび，傾斜下面にゆるやかに傾斜している。



第５３図　２３号住居址平面図・断面図



第５５図　２４号住居址平面図・断面図



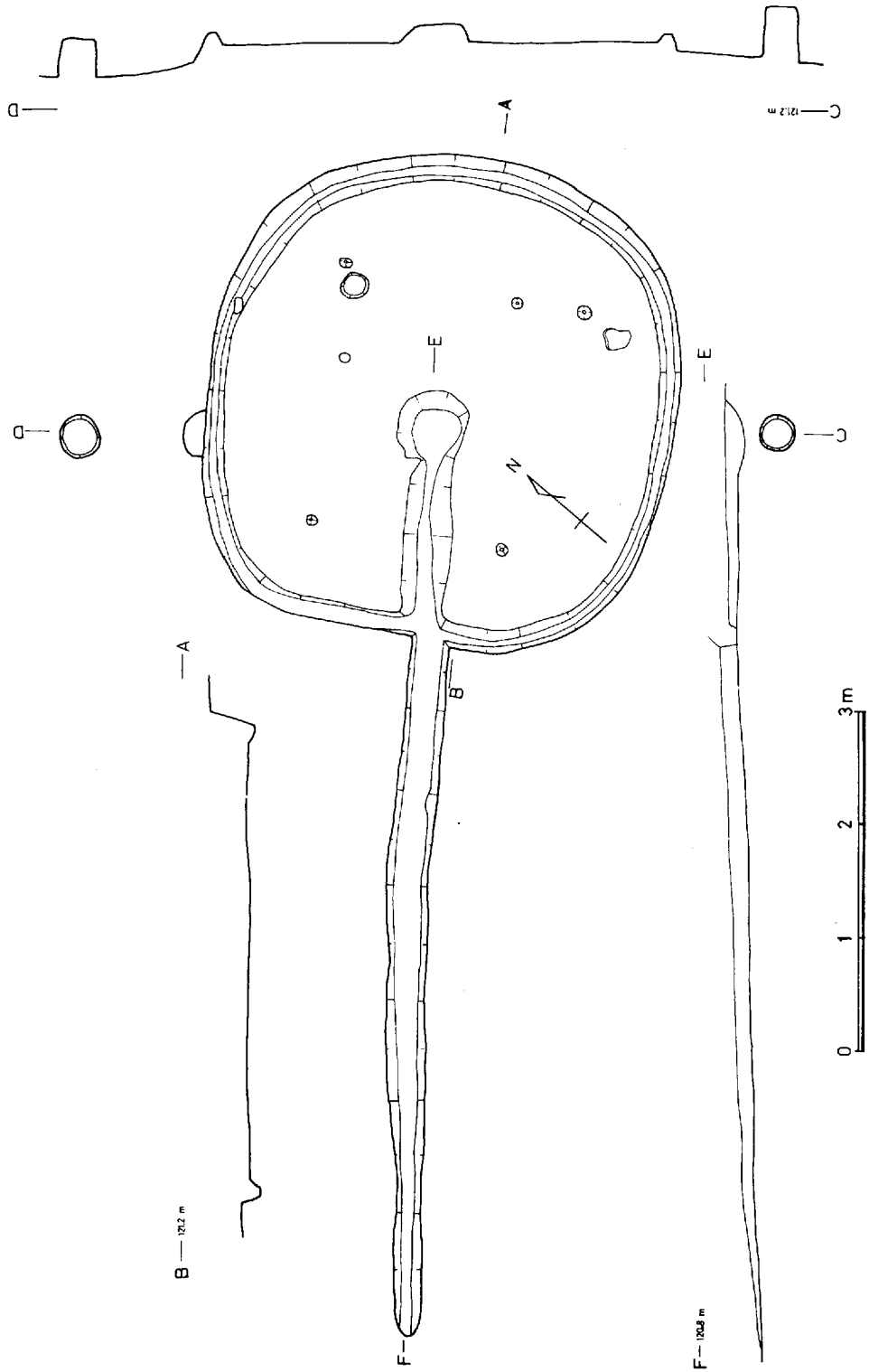
第５６図　　24号住居址出土遺物

出　土　遺　物

97 は外反する口縁端部を上下に拡張し，複合口縁をつくる。口縁端面には沈線に近い凹線が4本施こされ，その上から篦削りがされているので，遍平な凹線となる。内面は横位の篦磨きがなされている。ススの付着が認められる。胎土・焼成とも良好である。色調は茶褐色を示す。

98 は外反する口縁端部を上下に拡張し，複合口縁をつくる。口縁端面には不明瞭ではあるが，３本の凹線が施こされている。内面は横位の篦削りが認められる。器表面にはススの付着が認められる。

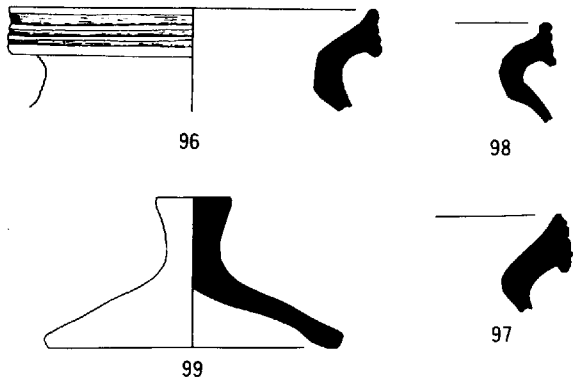
99 は摘み径３cm，器高６cm，口径１１.５cmを測る蓋形土器である。摘みの部分は高くしっかり



第57図　25号住居址平面図・断面図

とし，裾部は「ハ」の字状に広がり，端部は丸く作られている。器壁は脆弱で水洗いが出来ず，整形などは不明である。内面は篦磨きが認められる。色調は褐色を示す。

96 は住居址覆土上層より出土し，**97** ～**99** は下層より出土している。



第５８図　　25号住居址出土遺物

26　号　住　居　址

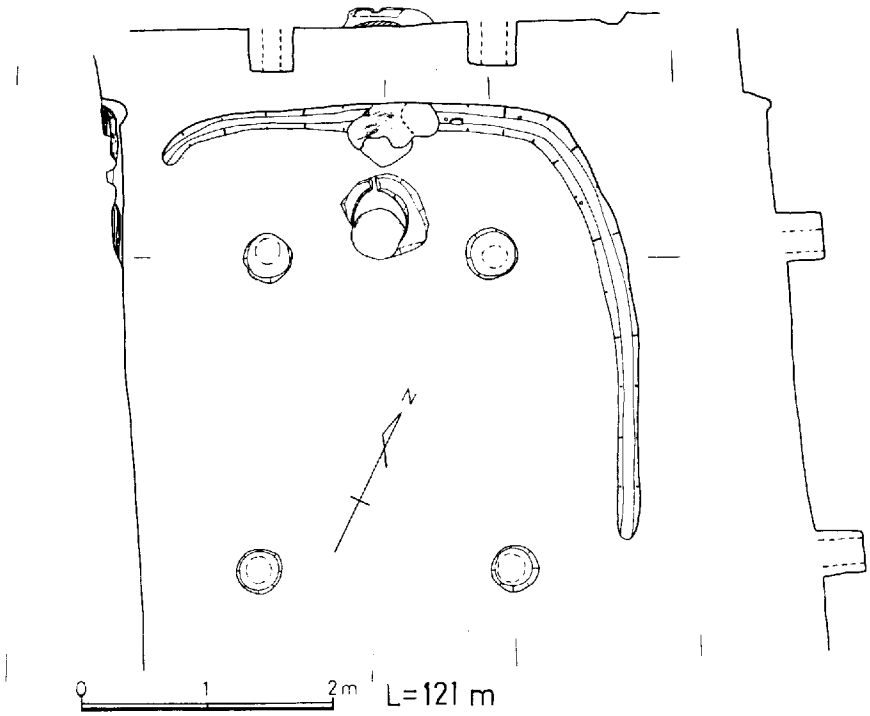
Ｃ地点の西に位置する４ｍ×５ｍの隅丸長方形の竪穴式住居址である。壁溝は二辺しか残存していないが柱穴は４本検出された。柱間は，1.８ｍ，2.０ｍ，長辺2.５ｍである。北辺部に鍛冶炉が検出された。鍛冶炉は粘土でかためられた下幅20cm，上幅８～10cmの土堤が直径40cmの火床を馬蹄形にめぐっている。火床はきわめて堅く表面から黄白色・赤色・黄色と変化している。周堤は北側で５cm～７cmが途切れ，フイゴの羽口の位置ではないかと思われる。北側の壁溝から鉄滓と須恵器高坏片が出土した。また地壁に接して古い鍛冶炉が壊れた状態で検出された。須恵器から７世紀代の住居址と考えられる。

27　号　住　居　址

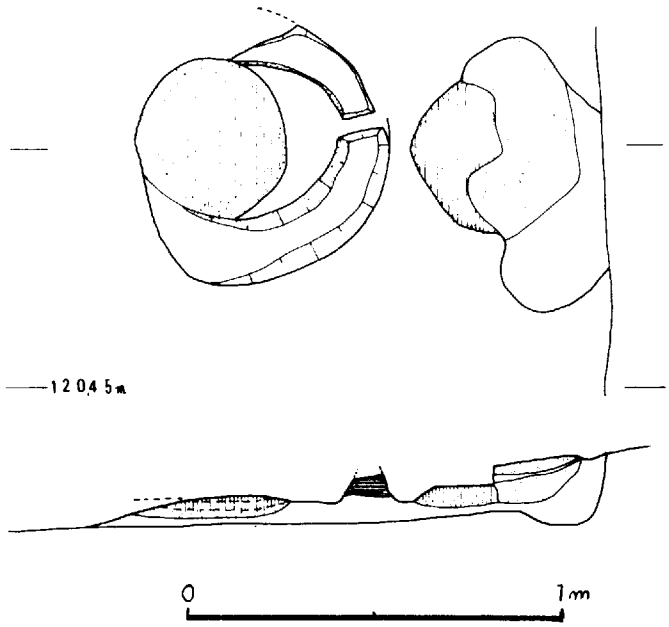
Ｂ地点の東部分はＣ地点に向ってゆるやかに傾斜している。Ｂ地点の宅地内の庭園部分にかろうじて一部分が残っていた円形の竪穴式住居址である。東側は宅地により削平され南側は，市道で切られているが，かなり大型の住居址であったと思われる。壁溝から弥生式土器片が，少量出土したのみである。

28　号　住　居　址

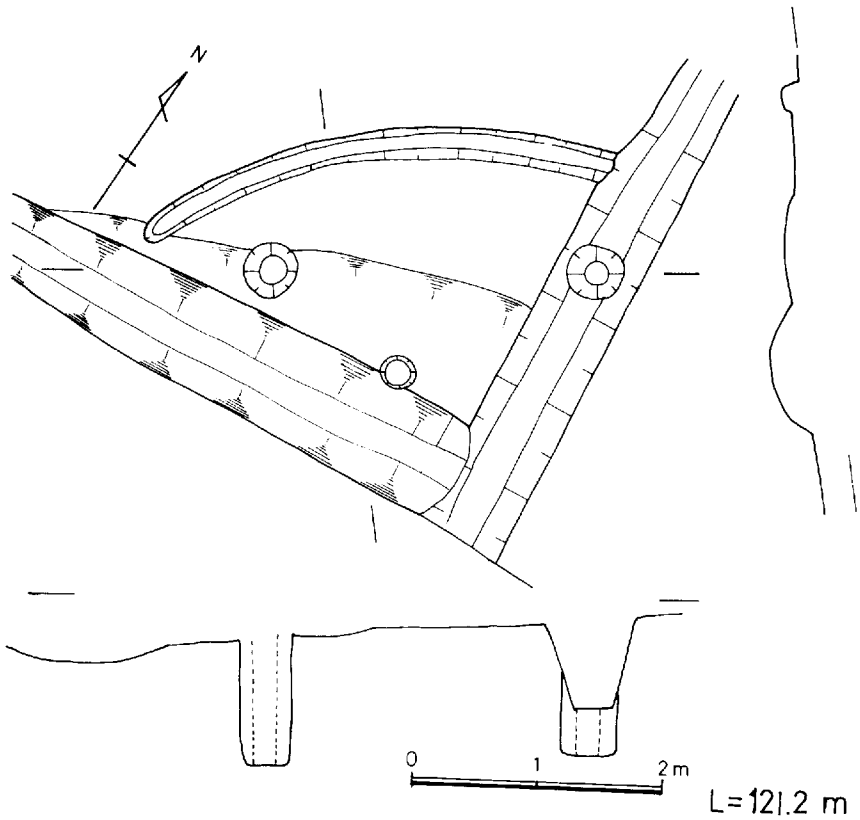
Ｅ地点に円形ピット１０１～１０６が円をなして検出された。これらのピットのうち，１０１・１０２・１０５・１０６はいずれも袋状をなし住居址内に掘り込まれた貯蔵用ピットと考えられ，住居址として番号を付した。規模は不明である。



第５９図　２６号住居址平面図・断面図



第６０図　２６号鍛冶炉



第６１図　２７号住居址平面図・断面図

住居址一覧表

番号	地点	形	規模㎡	内溝	外溝	中央ピット	建てかえ	柱数	付属施設	主な遺物
1	E	円	18.4	2	2	1	1	8	皿ピ　石	器台・高坏 カメ
2	E	隅丸方形	14.7 (推)			1	2	4	貯ピ　3	カメ・高坏 石庖丁
3	E	円	21.8	1	1	1	1	5		埦
4	F	隅丸方形	12.6 (推)			1		4		
5	F	円	30.24	1		1	2～3	5	貯ピ　6	石庖丁
6	F	隅丸方形								
7	B	〃								
8	A	〃	23.4	4	1	1 円		4	ベッド	埦
9	A	〃						4		
10	A	〃	25	3	1	1 円		4	周堤　石	壷 手ずくね土器
11	A	〃	11.68	2	1	1 円		2	暗渠　石	石　鏃
12	A	〃	23.15	1	1	1 角		4	周堤　石	高坏・カメ
13	A	円	28.42			1 円		8	周堤　石	カメ・石鏃
14	A	円	8.3	2	1	1 角		2	暗渠　石	高坏・カメ
15	A	方	27.0	3	1	1 円		4	ベッド	高坏・カメ
16	A	隅丸方形	17.2	1	1	1 角	1	4	皿ピ	
17	A	〃	6.3	1	1	1 角		2	暗渠　石	
18	A	円						2	——	
19	A	円	38.59	6	2	1	3	5～6	ベッド	手アブリ型土器 カメ
20	C	方	19.3					6	鍛冶炉	須恵器 土師器
21	C	隅丸方形			1	1	1	4	——	
22	C	円	10.6	2	1	1		2	暗渠	石包丁
23	C	円	81.6	3	2(3)	1	2	45		
24	C	隅丸方形	24	3		2	1	4	貯ピット　1	
25	C	〃	12.6	1	1	1		杭　4 外杭 2		
26	C	〃						4	鍛冶炉　1	スエ器　鉄滓
27	B	円						1	——	

B. 溝

溝状遺構はA地点の西側の丘陵傾斜面に，等高線に沿って掘削される。用地中央から南西端の地形は，戦時中の開墾により崩れている。１１０ｍの等高線より上方に，南方向の谷が入ってきているので，等高線を斜に切る格好になる。従がって溝は用地北東端が高く，順次南西に行くにつれて下がって行く。中央部付近までは，等高線に沿ってやや蛇行をさせるが，等高線を切って行く部分は，直線的な形態を呈している。

底面は平担にされ，凹凸はあまり見られない。

断面形態は，各断面図で示した如く逆台形のプランを示している。切り込みの肩部は，溝が丘陵傾面に掘削されているため，検出された延長75ｍにおいて，旧地表からそれを確認することは出来なかった。遺溝が確認された面は第三紀層面，又は第三紀層上面に堆積する黄褐色土層からであり，これから上位の土層は表土層となる。

切り込みの角度は，東側において40度～70度を，西側は50度～65度をそれぞれ測る。これら計測した地点で，西壁よりも東壁の方が角度が立つものは２地点みられる。他は西壁が立っており，全体的にみても，西壁の角度が急なことが看取される。

深さは最も深い所で85cmで，浅い所は45cmである。深さは溝の蛇行している部分が比較的深く，直線になり，谷に行くに従って浅くなっていく。この状態は，溝が深く残されている部分では第三紀層の残されている面が存在するため，近世の削平，あるいは流出を比較的最少限度に止めた自然的な条件によると考えられる。一方，地形図で示した如く直線部分は谷が入り，第三紀層がその谷に向って下行してゆくため，第三紀層への切り込みは深くはなく，それに達しない部分もある。特に谷の堆積層は，暗黒褐色層であり，自然的あるいは人為的な条件による変化を生じ易い土層であるといってよい。

土層断面については，各断面図ごとに述べていく。

溝土層断面　No. 1

層序は表土－暗黒褐色土－暗黒褐色土－茶褐色土（第三紀の黄褐色粒子を多量に含む）－暗茶褐色土－茶褐色土の堆積がみられる。

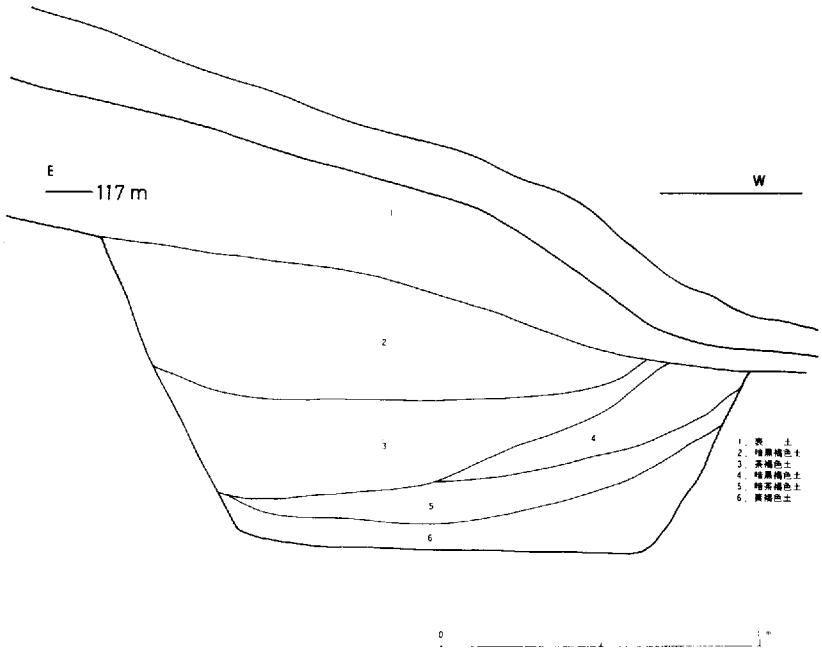
溝の切り込みの肩は，斜面の流土により確認出来なかった。

第２層と第３層の暗黒褐色土は，断面図において区分しているが，層の土質の差は明確なものはなく，粒子の混入により分けられたが，基本的には同一土層である。

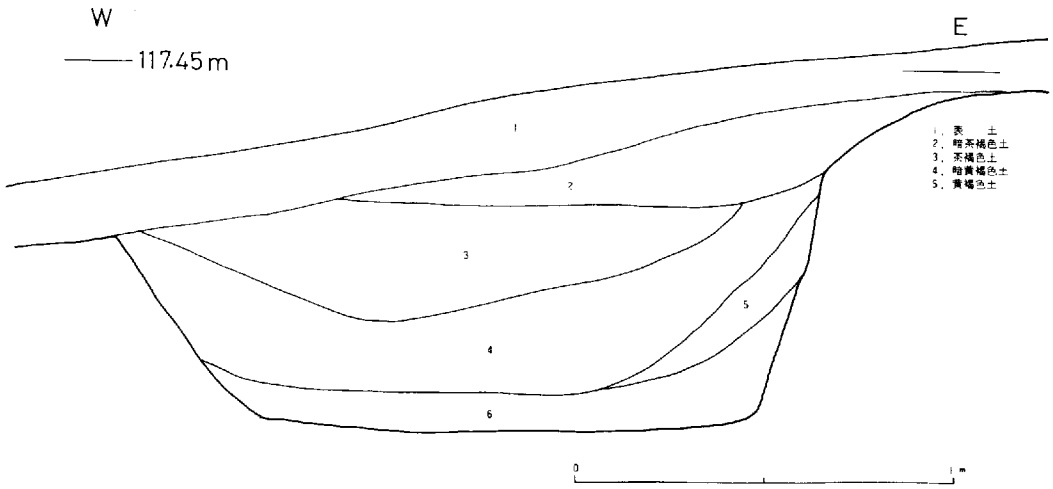
第４層の茶褐色土は斜面とは逆方向に，溝に流れこんでおり，斜面の上の方から，最も早く溝内の堆積土となる第３層の暗黒褐色土は，この第４層が流入した線から堆積するという逆の現象を示している。

溝土層断面　No. 2

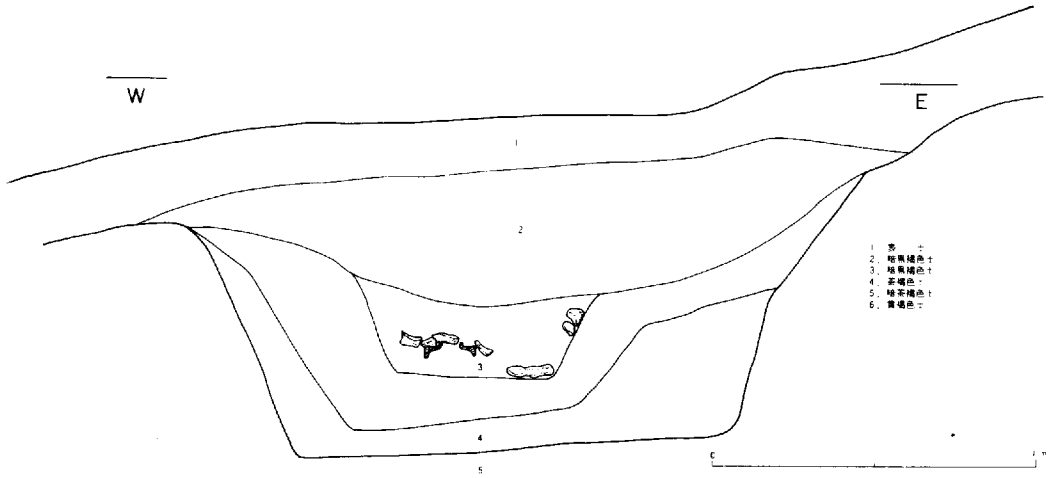
層序は表[1]土－暗黒褐[2]色土－茶褐[3]色土－暗黒褐[4]色土（若干の地山土粒を含む）－暗褐[5]色土－黄褐[6]色



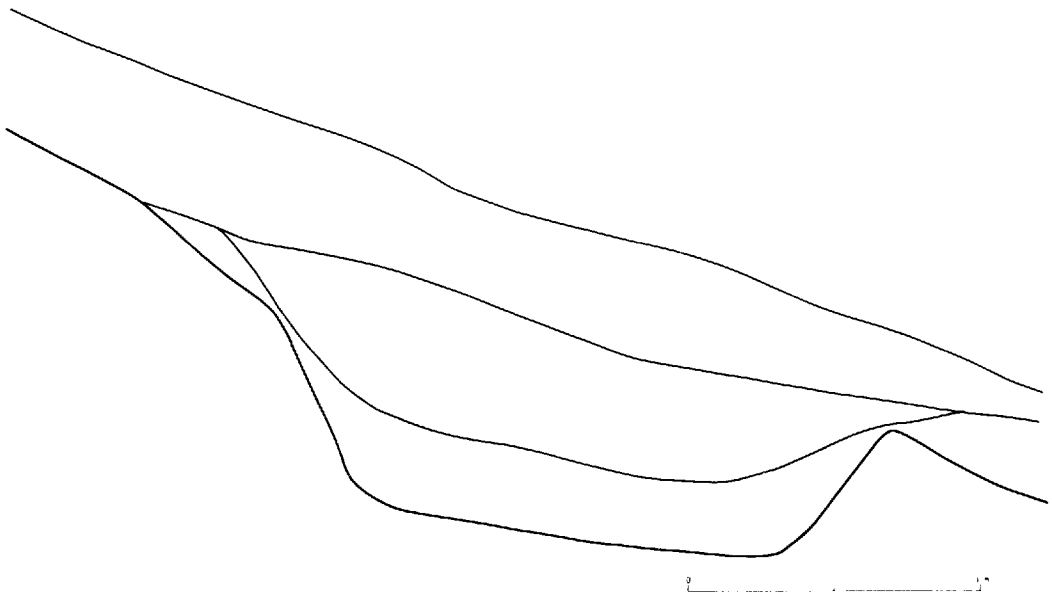
第６２図　溝　土層断面No. 1



第６３図　溝　土層断面No. 2



第６４図　土層断面No.３



第６５図　溝　土層断面No.４

土の堆積がみられる。

溝の切り込みは，第三紀層上層に堆積する軟弱な黄褐色土からであるが，表土を排土するとすぐに黄褐色土の面が露出する。又，溝内の埋土の堆積状態からしても，この土層より上部で肩を持っていたことが考えられる。

第2層と第4層の暗黒褐色土は同一の土層と認められる。従って，第4層が東より流入していく過程で，第3層の茶褐色土が西から流入し，さらに東より第2層の暗褐色土が流入したと考えられる。第3層の茶褐色土は黄褐色土の第三紀粒を多量に含む土層で，流入の仕方が西からというように，斜面の逆方向に流れる状態を示している。

溝土層断面　No.3

溝が中央部に逆台形状に第3層茶褐色土が堆積する掘り込みが認められる。この掘り込みには，10cm程の石を多く含み，また壷形土器の口縁部が逆になった状態で出土している。

第4層暗黄茶褐色土の堆積も，第3層の掘り込みと同じような状態を示しているが，遺物・礫第は検出されなかった。

この第3層の掘り込みは断面での観察であり，平面的にはどのようなプランを示すのか確認出来ない。第4層の状態から考えてみるならば，溝が埋ったために，2次的に掘削したとも考えられるが，第3層中の壷形土器が，土器溜りの土器群とは時期的な差をもって存在する可能性もある。さらにこの地点から礫の出土が多いことからすれば，溝とは有機的なつながりをもっていたとも考えられるが，本来の機能とは別途の遺構として把握出来る。

溝土層断面　No.4

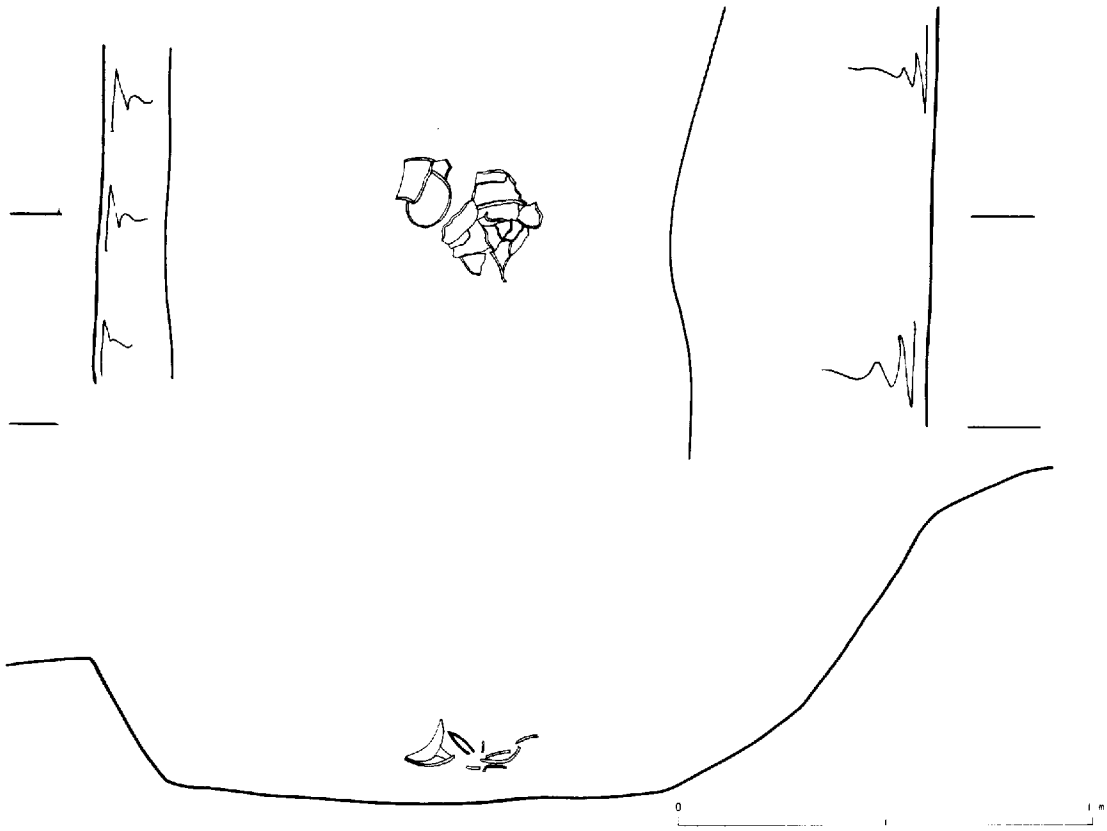
層序は表土ー黒褐色土（石粒を多く含み，土器片の混入が多い）ー黄褐色土（第三紀層粒子を含む）の堆積がみられる。

斜面の角度が強いため，他の土層断面において観察された堆積状態とは相違し，2層の堆積がみられたにすぎない。この2層の堆積土は比較的厚く，短期間に埋没したことを推定させる。

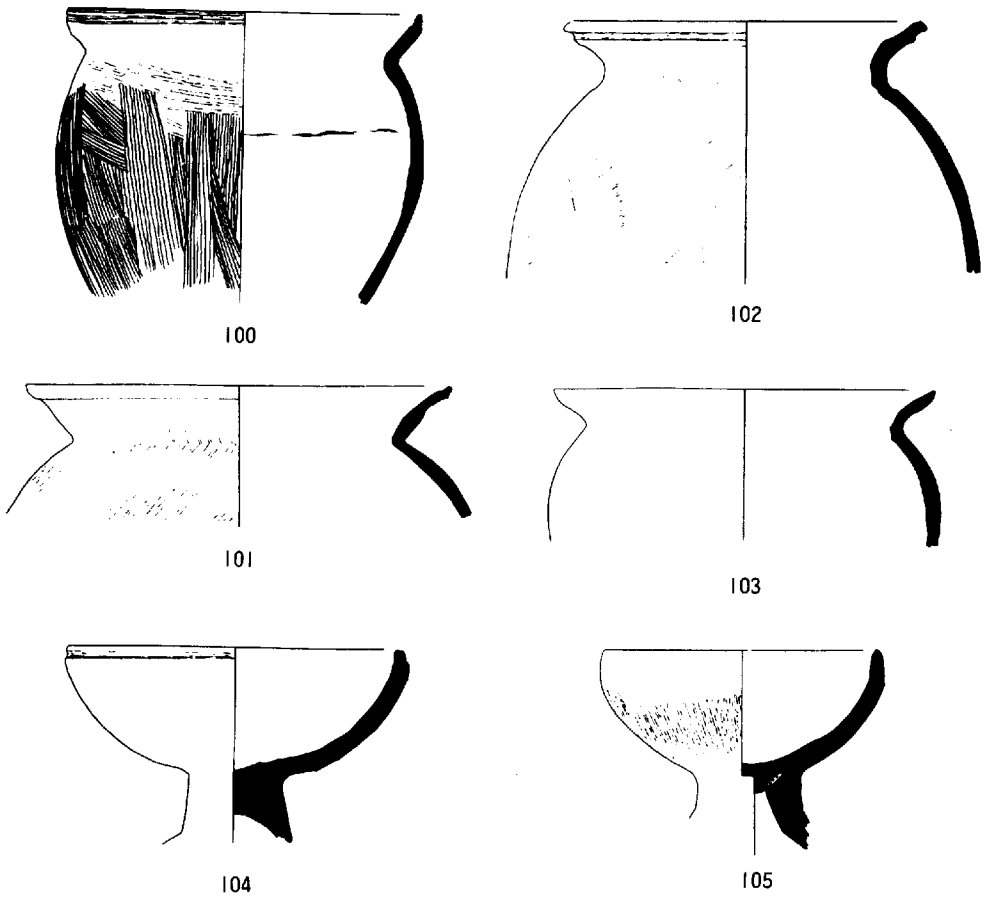
これら土層断面から観察されることは，No.1の第4層と第5層・No.2の第4層と第5層が，逆の流れで溝内に堆積していることである。又，この土層中には第三紀層の粒子が多く含まれていることから，溝掘削時の排土と考えられる。旧地表の状態において，溝を掘削しただけで，その地表に何らの構造物を設けないとすれば，丘陵傾面の上方（溝東側部）から堆積が始まることは，No.4の土層断面のような観察がなされる。

しかしながら，No.1及びNo.2はNo.4とは相違し，地形的な条件に恵まれ（斜面の傾斜角度が弱い）溝外部の施設が存在したことを推定させる堆積状態を示している。即ち，堆積が逆流している土層は，溝の掘削土であり，この土層により溝西側部分に土塁を設けていたと考えられる。

溝内の土層堆積状態は以上であるが，溝内には自然的な流入ではなく，意識的に遺棄された状態での土器溜りが5ケ所，散乱した状態で土器が少ない土器溜りはこの他に4ケ所確認された。



第６６図　溝　土器溜No.１平面図・断面図



第67図　溝　土器溜No.1出土土器

以下各土器溜り及び土器について述べていく。

土器溜りNo.1ー溝のほぼ中央附近に，底面から7cm程浮いた状態で一括されていた。完形品はなく，甕形土器と高坏土器が出土している。

100は口径14cmを測る甕形土器である。「く」の字状に外反する口縁部を有するもので胴部の張りはあまり強くなく，球形に近い。口縁端部は，櫛状工具による数条の直線を施している。

器面はやや斜め気味の太めの叩キがなされた後，この叩キ目を消すように縦位の荒い櫛状工具による整形がされている。内面は頸部から胴部上半にかけて横ナデがなされ，胴部上半から下は細い刷毛状工具による整形がなされている。ススが附着する。胎土・焼成とも良好である。

101は口径17cmを測る甕形土器である。「く」の字状に強く外反する口縁部を有するもので，口

縁端部は上方に広がり気味に拡張し，幅の狭い複合口縁をつくる。

口縁部は横ナデにより整形され，頸部以下は斜め方向の幅２mm～２.５mmの叩キにより整形されている。内面の整形痕は不明である。ススの附着が認められる。細砂を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

102 は口径14cmを測る甕形土器である。「く」の字状に外反する口縁部を有し，端部に凹線を施している。頸部は強く横ナデがなされているため，立上がり気味の形態を示している。

肩部は張ることなく，球形に近い胴部へ移行する。

左下りの横位の叩キ目（幅約２mm）がなされていたことから，縦位の細い刷毛状工具による整形が認められる。内面は外面と同様な横位の細い刷毛状工具による整形がされている。ススの附着が認められる。石粒を多く含み，焼成は良好である。色調は灰褐色を示す。

103 は口径15cmを測る甕形土器である。口縁部は単純に「く」の字状に外反し，胴部は球状に近い形態を示している。縦位の細い刷毛状工具による整形がみられ，内面は横位の櫛削りがなされている。石英・石粒を含み，焼成は良好である。色調は暗灰色を示す。

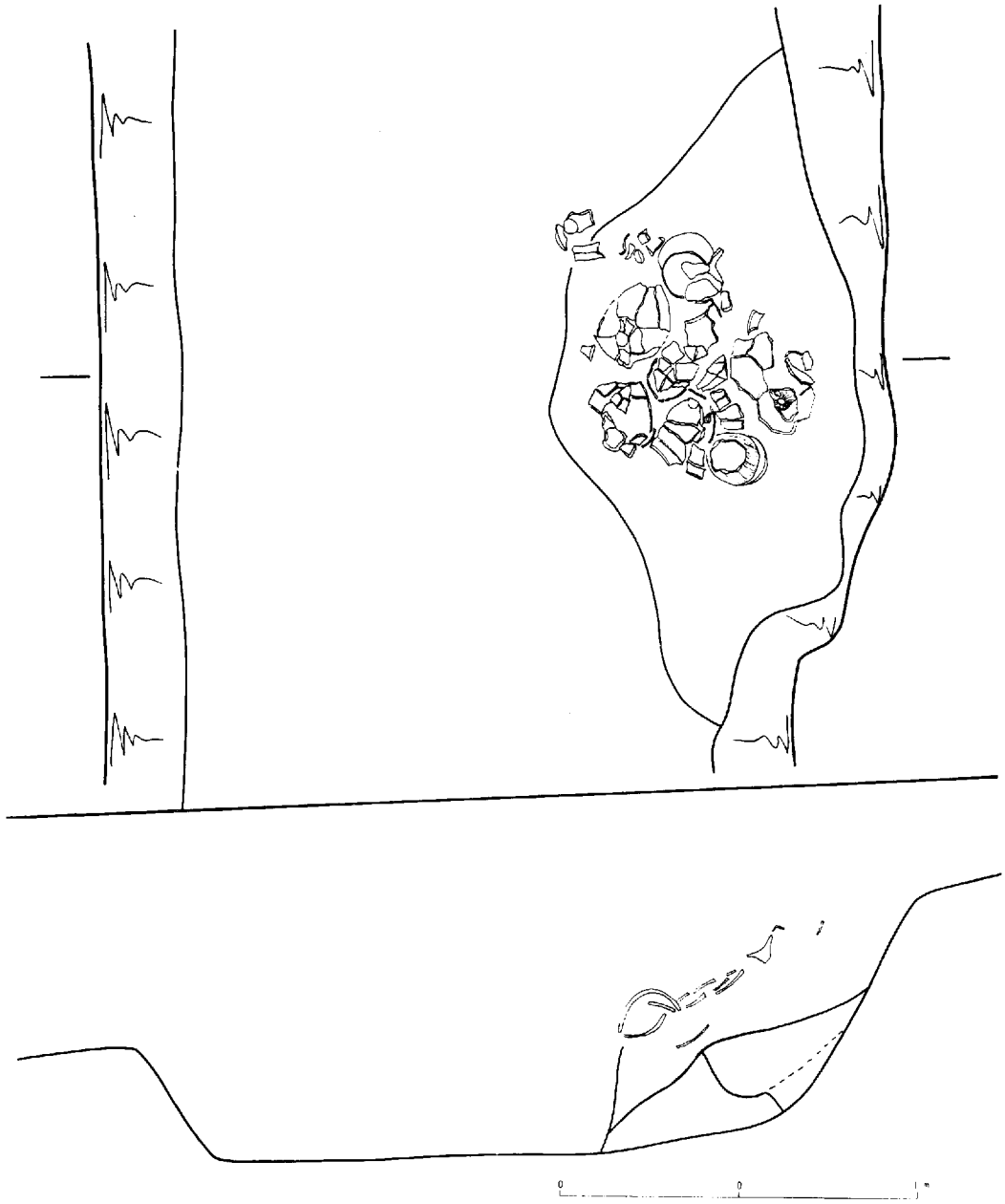
104 は口径13cmを測る高坏形土器である。深い坏部を有するもので，口縁端面に凹線を施こしている。胴部は開き気味に，裾部へ移行する。器壁の剥離が著しく，整形痕の詳細は観察出来なかったが，外面は細い篦状工具による磨きがみられ，内面に丹塗りが認められる。石英粒を多く含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

105 は坏径11cmを測る高坏形土器である。坏部は深い椀状の形態を示すもので，口縁部が内弯気味になる。脚部は短く，裾部も短かく開くものがつくと推定される。坏部と脚部との接合は，坏部に凸帯をつくり脚部にはめこんでいる状態が看取される。口縁部は右から左への横位のナデが，下半は斜めの篦磨きがなされている。内外面とも丹塗りがなされている。ススの附着が認められる。石英粒を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

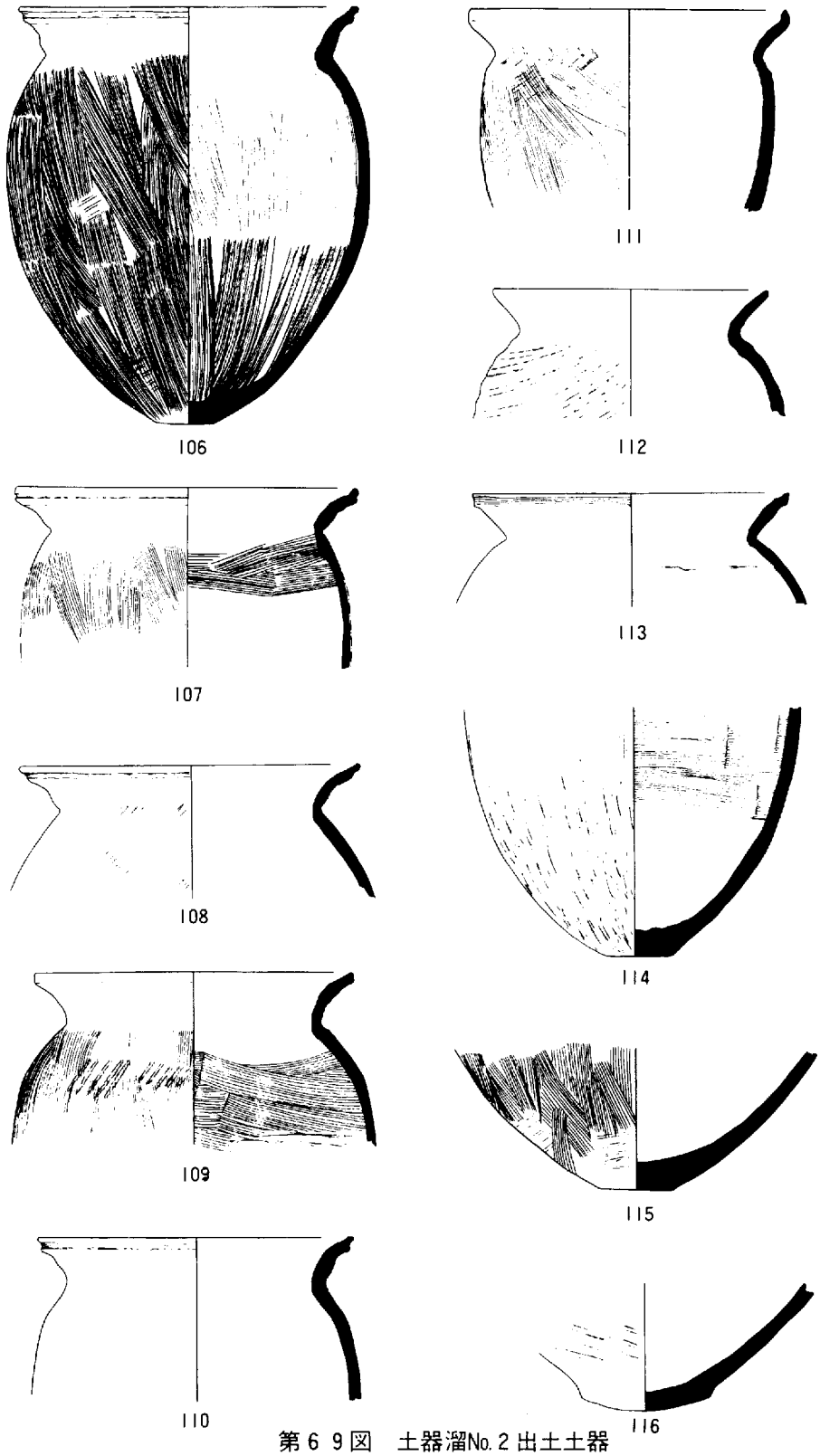
土器溜り No.2 ―溝東壁よりに流れ込んだ状態で，底面より約2.6cm程浮いて検出された。

土器が存在する下の土層は，暗黒褐色土と黄褐色土（第三紀世の粒子を多く含む）の２層がみられる。又，土器溜りの周辺は幅8.6cm，長さ16.5cm程の張り出し状になっている。この張り出し状は，東側の壁が変則的な状態を示し，又，土器溜りの下に堆積する２層のうち，黄褐色土が途中で流入した状態を示す。このようなことから，この土器溜りは溝壁近くに存在していたものが，壁の崩壊により流入したと推定される。

106 は口径15cm・器高18.4cm・底径2.1cmを測る甕形土器である。「く」の字状に外反する口縁を有し，口縁端部は外方へ拡張し複合口縁状をつくる。口縁端面には凹線を施している。肩部の張りはほとんどなく，胴部最大径は上位にあり，やや長めの胴部を形成する。底部は不安定なもので，やや丸味を有する。頸部下半から底部にかけて，斜めの太い叩キによる整形があり，その叩キ



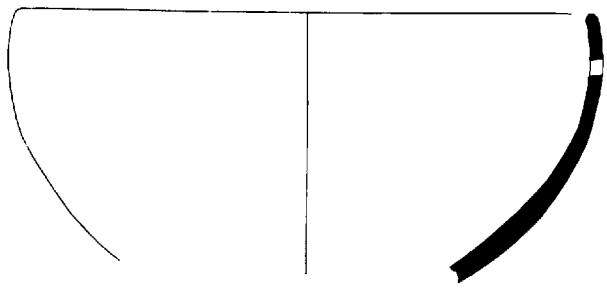
第６８図　溝　土器溜No.２平面図・断面図



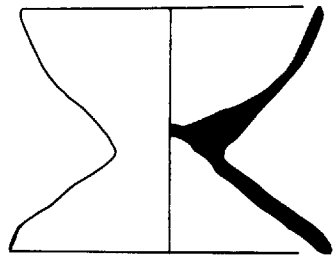
第69図　土器溜No.2出土土器

を消すように縦位の細い条を有する櫛状工具による整形が認められる。叩キは一部においては確認されるが，ほとんど，この櫛状工具により消されている。内面は胴部中半までは縦位の細い刷毛状工具により整形され，胴部中位以下は，外面と同様に細い条のある櫛状工具により整形されている。

器壁の厚さは，刷毛状工具により整形されている部分は5㎜を，櫛状工具の部分は3㎜程度であり，工具による器壁の厚さ浅さが観察される。なお，底部は凹凸が多く，器壁も1㎝を測るかなり厚めのものである。



117



118

第70図　溝　土器溜No.2出土土器

107 は口径15㎝を測る甕形土器である。「く」の字状に強く口縁部を外反させるもので口縁端部を上方に拡張させ，端面に凹線を施している。頸部から肩部の張りはあまりなく，胴部の丸味も小さい。縦位の細い櫛状工具により整形され，内面は右から左へ横位の荒い櫛削りがおこなわれている。ススの附着が認められる。石英を含み，焼成はあまい。色調は茶褐色を示す。

108 は口径15㎝を測る甕形土器である。「く」の字状に外反する口縁部を有するもので口縁端部を外方へ開き気味に拡張し，端面に凹線を施す。器壁が荒れており，整形痕の詳細な観察は不明であるが，叩キによる整形と，内面は横位の荒い櫛状工具の痕跡が認められる。

109 は口径14㎝を測る甕形土器である。外反する口縁部をもち，口縁端部を若干立上がらせる。頸部の横ナデが強いため，頸部が立上がり気味となる。肩部は張ることなく，球形に近い胴部へ移行していく。

斜めの叩キをしたあと，縦位の細い刷毛状工具により整形され，叩キ目を消している。内面は左から右の横位の細い刷毛状工具により整形され，胴部上半において，刷毛の上から横位の箆削りを行なっている。

110 は口径14㎝を測る甕形土器である。外反する口縁部を有するもので，口縁端部を上方に拡張し，その端面に凹線を施す。頸部から肩部への張りはあまりなく，胴部の丸味もみられない。器壁

の剥離が著しく，整形痕の詳細な観察は不明であるが，外面は細い刷毛目がみられる。なお胴部には叩キがなされた可能性がある。石英・石粒を多く含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

111 は口径14cmを測る甕形土器である。外反する口縁部を有し，口縁端部を内弯気味に拡張させている。左下りの太めの叩キを施した上から，斜め方向の細い刷毛状工具により整形され，叩キ目を施している。頸部の叩キ目は，口縁部をつくる為，又，器壁のためにされたものが，口縁部をつくるために外反させたとき，叩キ目がこのような形になったと推定させる。内面は不詳であるが，篦削りがなされている様である。ススの附着が認められる。
石粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

112 は口径12cmを測る甕形土器である。「く」の字状に外反する口縁部を有し，口縁端部は変化をさせない。頸部下半から太い叩キが施され，叩キによる器面の凹凸が著しい。内面の整形痕は不詳である。ススの附着が認められる。石英石粒を含み，焼成は良好である。

113 は口径14cmを測る甕形土器である。「く」の字状に外反する口縁部を有するもので口縁端部を上方に拡張し，端面に櫛状工具による数条の直線を施す。細い刷毛状工具の整形がみられ，内面は輪積み痕が残される。ススの附着が認められる。

114 は底径３cmを測る甕形土器の底部である。底部は平底を呈するもので，底面の状態はやや不安定である。胴部下半にかけて，縦位の細い刷毛状工具による整形がなされ，下半から底部にかけては，上から下への縦位の篦削りがなされている。内面は右から左へ細い刷毛状工具により整形されており，底部は指頭による整形がされているため，凹凸がみられる。ススの附着が認められる。
石粒を多く含み，焼成は良好である。色調は暗茶褐色を示す。

115 は底径３cmを測る甕形土器の底部である。幅1.5mm～２mm程度の左下りの叩キを施した上から，縦位の荒い櫛状工具により整形され叩キ目を消している。内面の整形痕は剥離のため不詳である。底部は安定した面を有する。

ススの附着が認められる。細砂を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

116 は底径5.7cmを測る甕形土器の底部である。幅３mm程度の太い左上がりの叩キがみられ，底部は張り出し状で，いくぶん凸状になっており不安定なものである。内面の調整痕は剥離のため不詳である。石粒を多く含み，焼成は良好である。色調は灰白色を示す。

117 は口径２2.5cmを測る鉢形土器である。深い埦状を示すもので，口縁部近くに径６mmの焼成前の穿孔がみられる。この孔の数は，破片実測のため不詳である。内面は篦磨きがなされ，全面丹塗りされている。ススの附着が認められる。細砂を含むが，堅緻である。色調は茶褐色を示す。

118 は口径１1.8cm・器高9.8cm・脚径１2.8cmを測る高坏形土器である。埦状の坏部を有するもので，脚部はほとんどなく，坏部から「く」の字状に裾部を形成する。坏部は横位の篦磨きが，内面は縦位の条のある荒い櫛状工具により整形されている。裾部は篦削りのあと，篦による磨きをおこなっている。丹塗りがなされている。器面の磨滅が著しい。細砂・石粒を含み，焼成は良好で

ある。色調は茶褐色を示す。

土器溜りNo.3一溝ほぼ中央よりの位置に，溝に平行して，１５５cmに渡って検出された。土器数は溝底面に接したものはなく，約1.6cm程浮いた状態で存在している。

この土器溜りは第１次調査の時に確認され，壷・高坏などを検出しており，元位置での関係は不明である。

119は口径９cm・器高２１.９cmを測る壷形土器である。外反する口縁部を有し，口縁端部は内弯気味に丸く仕上げている。頸部は立上がりの傾向を示し，横ナデで整形している。胴部径が中位にあり，強い球形を呈し，底部は丸底でややふくらみを持っている。

肩部から胴部上半にかけて荒い櫛状工具により整形され，胴部上半から底部にかけて細い刷毛状工具による整形をおこなっている。内面は荒い櫛状工具による削りがみられる。丹塗りがなされ，胎土・焼成とも良好である。

120は口径１５.２cmを測る甕形土器である。「く」の字状に外反する口縁を有し，口縁部を肥厚させ，又口縁端部を立上がらせる。胴部は下ぶくれの形態を示す。口縁端面に櫛状工具による面取りがみられる。肩部に，幅約２mmの左下がりの叩キがなされ，その上から縦位の細い条のある櫛状工具により，整形され，叩キ目を消している。内面は外面と同様の整形具により，胴部は左から右の横位に中位下半は，横位の上から縦位の整形をおこなっている。ススの附着が認められる。
石粒を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

121は口径15cmを測る甕形土器である。「く」の字状に外反する口縁部を有し，口縁端部を上方に拡張させ複合口縁をつくる。端面には凹線を施す。胴部は肩の張らない球形に近い形態を示す。口縁部は横ナデにより整形され，頸部下半からは，左下がりで幅2.5cmの叩キがみられ，この上へ左から右の斜めの細い刷毛状工具により整形され，叩キを消している。内面は1.5cm～1.7cmの幅で，輪積み痕を明瞭に止め細い刷毛状工具により整形がなされている。ススの附着が認められる。細砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

122は口径16cm・器高２１.９cmを測る甕形土器である。「く」の字状に外反する口縁端部を，水平近くまで曲げ，口縁端部に凹線を施す。胴部は無花果形をなし，底部は尖り状となり，底部としての安定は全くない。左下がりの幅約0.3cmの叩キがなされ，その上から条線を有する櫛状工具による整形がなされ叩キを消している。この櫛状工具の整形痕は，器壁が荒れているため，あまり明確ではない。内面は頸部下半に輪積み痕がみられ，外面と同様の整形具により整形がなされている。胴部下半より底部にかけて，ススの附着が認められる。石粒を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

123は口径14cmを測る甕形土器である。「く」の字状に外反する口縁部を有し，口縁端部を肥厚させ複合口縁状をなす。胴部は球形に近い形を有するが，やや下ぶくれの形態をとる。

左下がりの幅約2mmの叩キを施した上から，縦位に細い条線を有する櫛状工具により整形され，叩キを消している。胴部上半近くまでは横ナデにより，これらの整形痕が消されている。内面は頸部下半に輪積み痕がみられ横位の細い条線を有する櫛状工具により整形されている。石粒を多く含み，焼成は良好である。色調は赤褐色を示す。

124 は口径14cm・器高15.3cm・底径3.4cmを測る甕形土器である。「く」の字状に外反する口縁部を有し，口縁端部を，やや肥厚させながら複合口縁をつくる。胴部最大径は上位にあり，底部は丸味をおび，やや安定感を欠く，器面の剥離が著しく，整形痕などの詳細は不明であるが，外面には左下がりの叩キがみられる。石粒を多く含み，焼成はやや軟弱である。

125 は口径15cm・器高22.7cm・底径3.4cmを測る甕形土器である。外反する口縁部を上方に拡張させ，複合口縁をつくる。肩はあまり張らず，長胴気味の胴部を有する。底部は丸味をおび，安定性はない。口縁部から頸部にかけて横ナデがなされ，胴部は細い条線を有する櫛状工具による整形がみられる。内面は，箆削りがみられる。器壁全体にススの附着が認められる。石粒を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

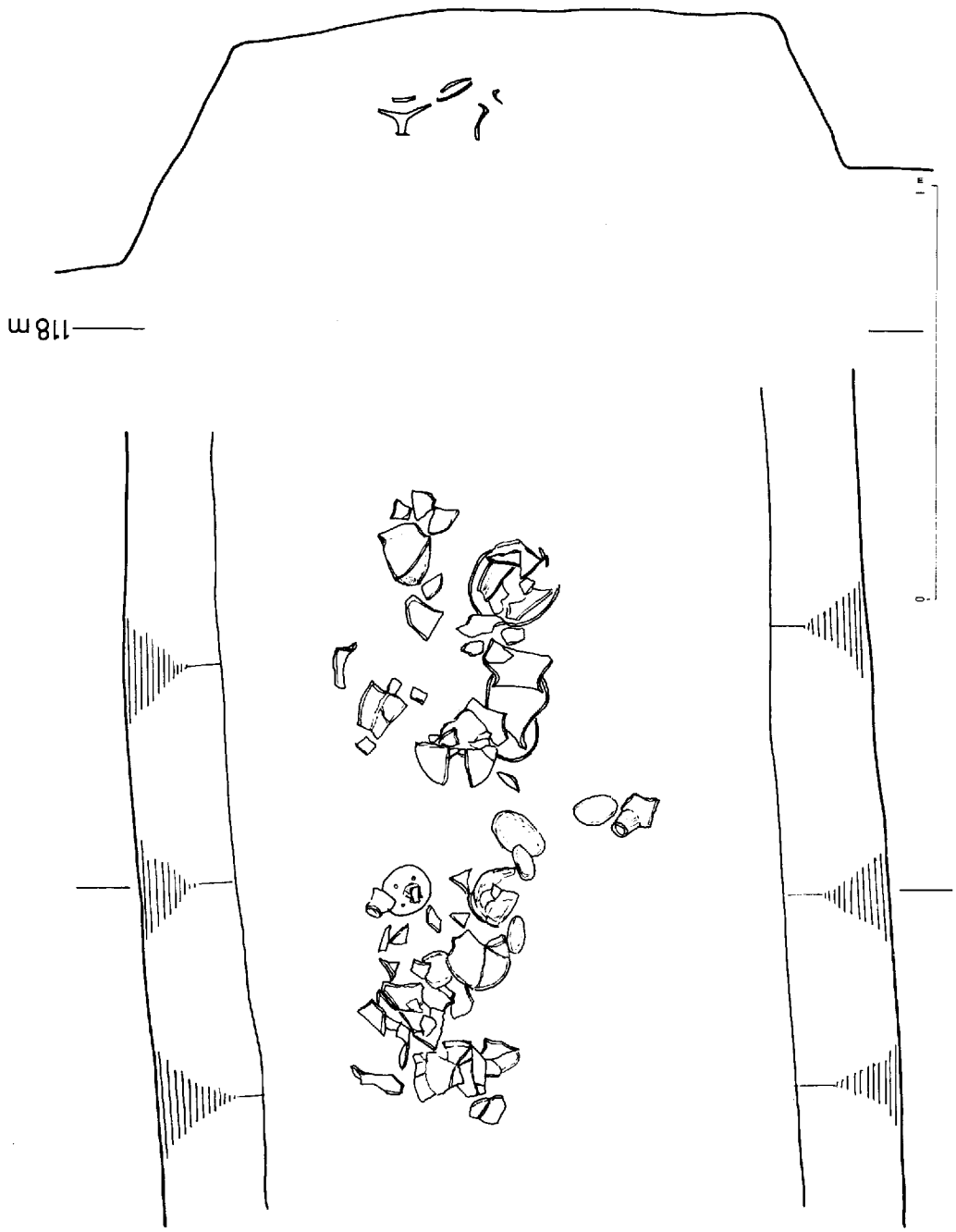
126 は口径13cmを測る甕形土器である。外反する口縁部の端部を上方に拡張気味にさせ複合口縁状にし，胴部は張り気味になる。幅約3mmの左下がりの叩キを施した後，縦位の細い条線のある櫛状工具により整形し，叩キ目を消している。内面の胴部中位上半は，右から左にかけて横位の深いタッチで，又，中位下半は縦位の細い刷毛状工具により整形されている。ススの附着が認められる。石粒，細砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

127 は口径16cmを測る甕形土器である。外反する口縁部を有し，口縁端部を上方に拡張させ，複合口縁をつくる。頸部は稜を有し，やや下ぶくれの胴部を有する。縦位の荒い櫛状工具による整形がみられ，内面は横位の箆削りがみられる。器面全体にススの附着が認められる。石英粒，細砂を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

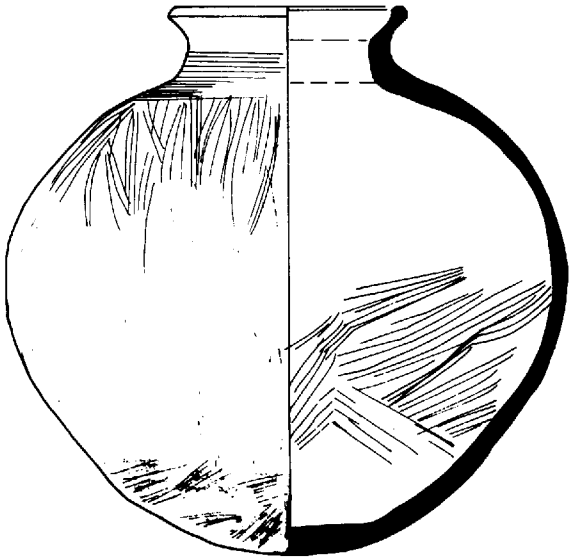
128 は口径13.5cm・器高18.2cm・底径2.3cmを測る甕形土器である。「く」の字状に外反する口縁部を持ち，口縁端部に稜を有する。胴部は球形に近いもので，不安定な底部を有する。口縁部から頸部にかけて，右から左への横ナデにより整形する。頸部下半から胴部下半にかけて，右から左への横位の櫛状工具により，又，胴部中位より底部にかけて，縦位の刷毛状工具により整形がおこなわれ，櫛目を消している。内面は頸部下半に輪積み痕が残る。横位の箆削りがなされた上から，細い刷毛状工具により整形する。胴部下半より底部にかけて，ススの附着が認められる。石粒を多く含み，焼成は良好である。色調は淡茶褐色を示す。

129 は口径16cm・器高10.5cm・底径3.6cmを測る鉢形土器である。外反する口縁部を有し，端部を上方に拡張させその端面に櫛状工具による沈線を施す。丸味を持つ胴部を有し，安定性のある底部をつける。

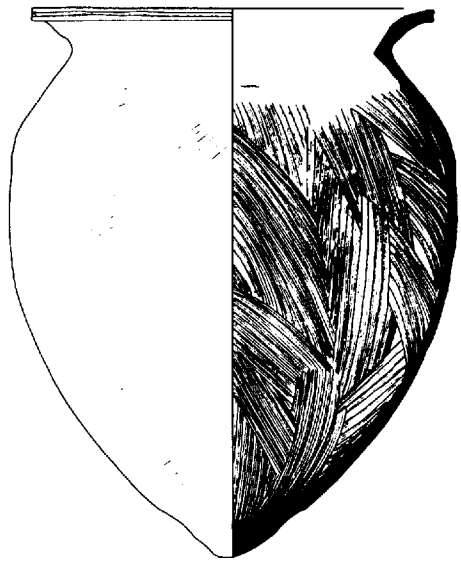
右下がりの細い条線のある櫛状工具により整形され，底部近くは縦位となる。内面は細い刷毛状



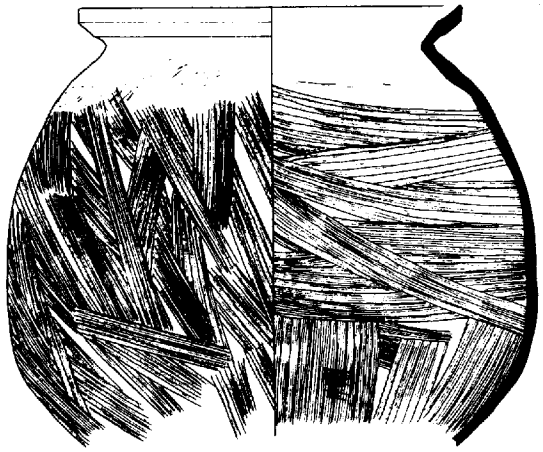
第71図　溝　土器溜No.3平面図・断面図



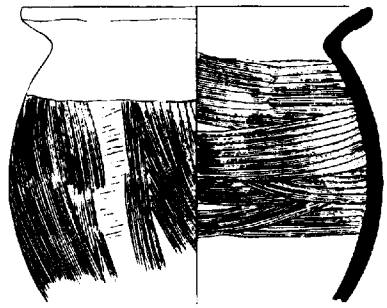
119



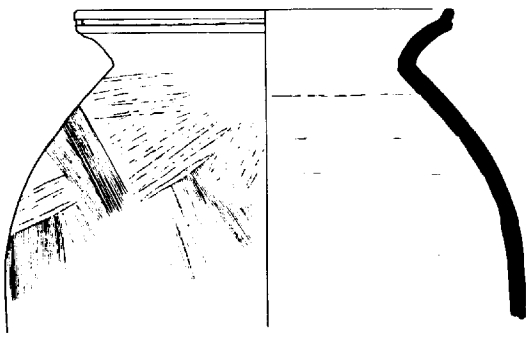
122



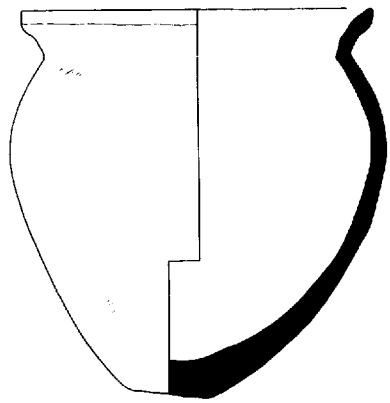
120



123

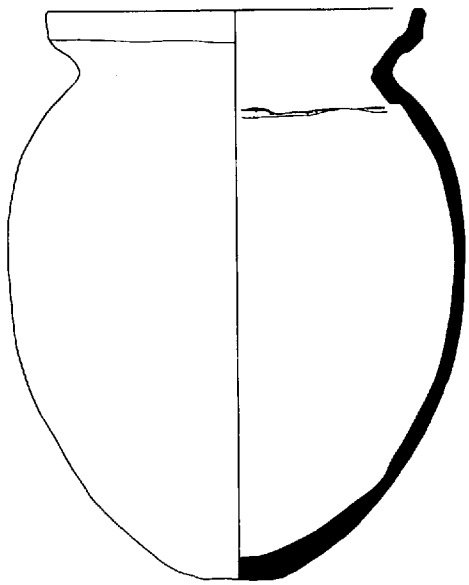


121

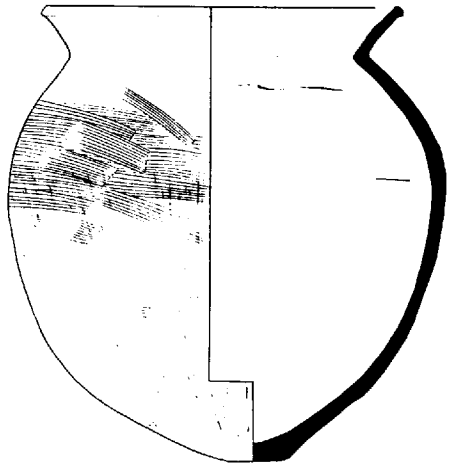


124

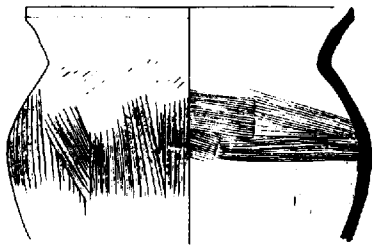
第７２図　溝　土器溜No.３出土土器



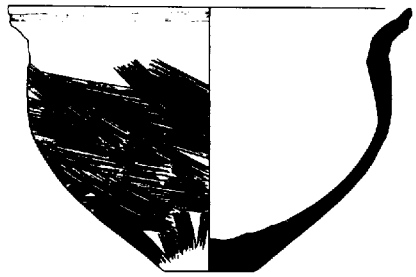
125



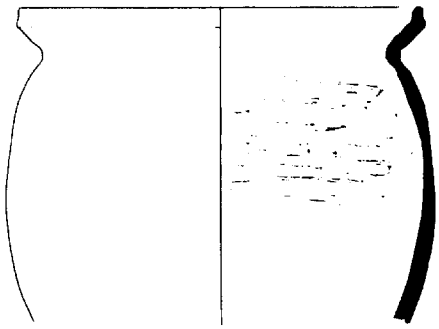
128



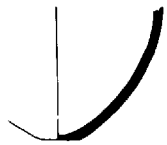
126



129



127



130

第73図　溝　土器溜No.3出土土器

工具による整形痕がみられ，底面は凹凸がみられる。石粒を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

130 は底径 1.4 cmを測る小形の甕形土器の底部と推定されるものである。剥離が著しく，整形痕などは不詳である。石粒を多く含み，焼成は軟弱である。色調は灰白色を示す。

131 は口径22cm・器高１６.９cm・脚径１５.３cmを測る高坏形土器である。坏部は鉢形に開き，口縁部は稜を有し，そり気味に外方へ広がる。稜の部分には沈線を施し，下には粘土紐による凸帯を貼り付ける。脚部はやや開き気味で，筒状を呈し，「ハ」の字状に高く開く裾部をつくる。裾端部は狭い端面を有する。口縁部は横ナデにより整形され，凸帯から下は縦位の細い刷毛状工具により整形された後，右から左への横位の篦磨きがされている。脚部は左から右への横位の篦磨きがおこなわれ，裾部においても，縦位の篦磨きがおこなわれている内面は篦磨きがおこなわれ，裾部は荒い櫛状工具による整形がおこなわれている。

裾部の孔は４個と推定される。内外面とも丹塗りを施している。細砂を含み，堅緻である。

132 は口径19cm・器高１６.４cm・脚径１３.５cmを測る高坏形土器である。坏部はやや丸味を持ち，段をつけて外反する口縁部をつくる。脚部は筒形を呈し，「ハ」の字状に高く開く裾部を持つ。

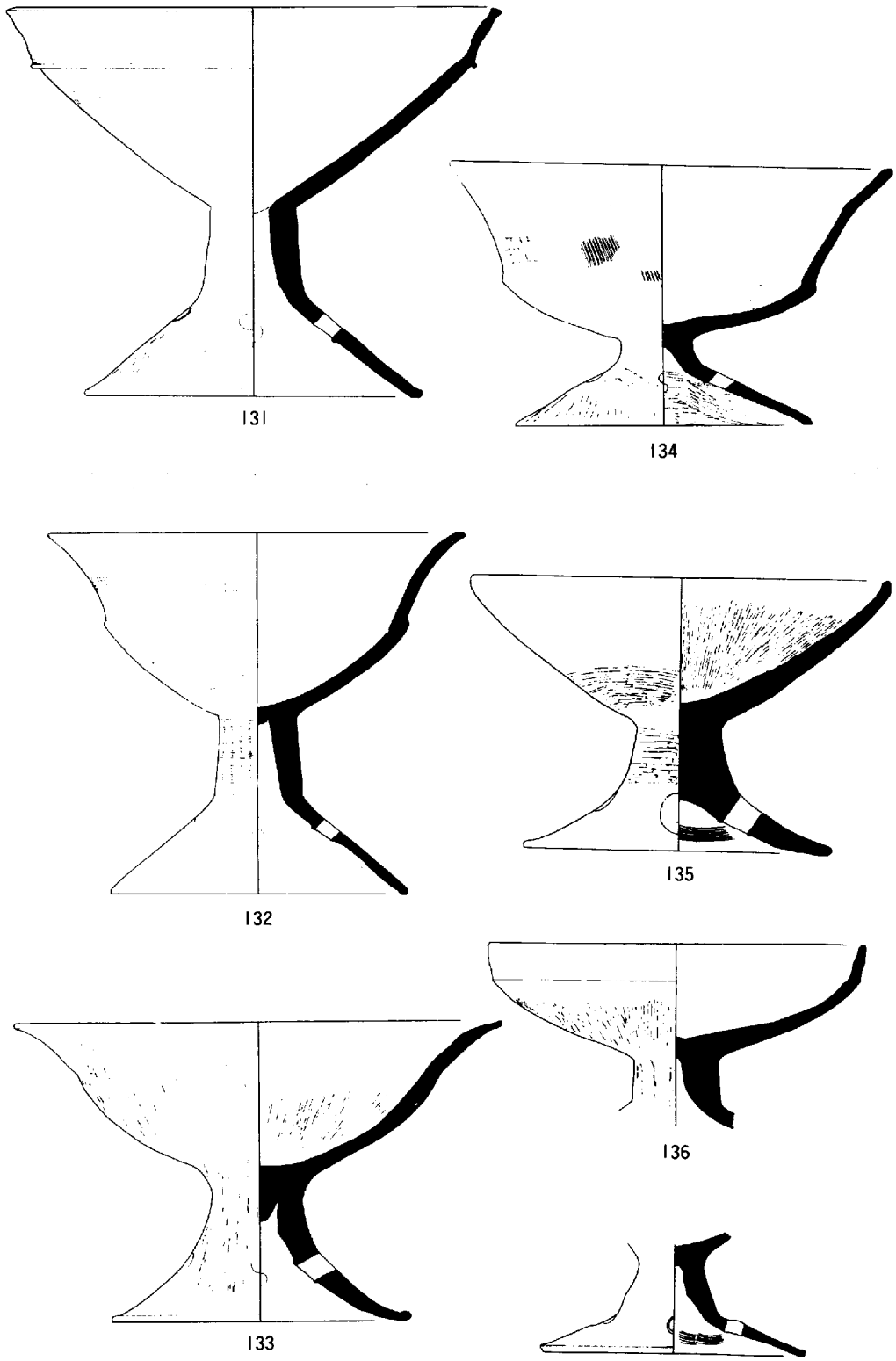
細く深いタッチの縦位の櫛状工具により整形され，その上から横位の篦磨きがなされている。脚部は縦位の篦削りをした後，横位の篦磨きを行い，又裾部も篦磨きを施している。内面は裾部において荒い刷毛状工具による整形をおこなう。内外面とも丹塗りされている。石粒を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

133 は口径２２.３cm・器高１３.６cm・脚径１３.７cmを測る高坏形土器である。坏部は稜を持たず，外方へ強く広がる口縁を有し，脚部は開き，そのまま高く広く開く裾部へと移行する。裾端部は稜をつくる。横位の荒い櫛状工具の整形のあと縦位の篦磨きがなされる。脚部は縦位の篦磨きをおこなう。裾部は細い櫛状工具の整形のあと，篦磨きをおこなう。内面は篦磨きをおこなっている。石粒を含み，焼成は良好である。色調は赤褐色を示す。

134 は口径２０.２cm・器高１１.８cm・脚径１３.６cmを測る高坏形土器である。坏部は低く広がり，稜をつくり，外方に大きく開く口縁部をつくる。脚部は短かく「ハ」の字状に低く広く開く裾部を有する。縦位の荒い櫛状工具の整形の後，任意の方向で篦磨きをおこなう。脚部は縦位の篦削りをおこなう。裾部は坏部に用いられたと同様の，縦位の荒い櫛状工具により整形された後，篦磨きをおこなう。内面は横位の荒い櫛状工具により削り，その上から，削りの凹凸を消す程度の整形である。石粒・細砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

135 は口径19cm・器高１２.４cm・脚径14cmを測る高坏形土器である。

外方に広がる体形の坏部を有する。脚部は，開き気味で，低く「ハ」の字状に開く裾部をつくる。器壁は全体的に，非常に厚くつくられている。坏部は横位の篦磨きを行い，脚部も横位の篦磨きをおこなう。内面は縦位の篦磨きをおこない，裾部は荒い櫛状工具により整形される。内外面とも丹



第74図　溝　土器溜No.3出土土器

塗りを施す。細砂を含み，焼成は良好である。色調は赤褐色を示す。

136 は口径１７.１cmを測る高坏形土器である。口縁部は稜を持ち，上方に立上がる。脚部は短かく筒形となり，短かい裾部がつくと推定される。縦位の篦磨きをおこない，脚部は縦位の篦削りをする。内外面とも丹塗りを施す。細砂を含み，焼成は良好である。

137 は脚径１１.９cmを測る高坏形土器の脚部である。脚部は外方に開き気味で，低く開く裾部をつくる。篦磨きがなされ，内面は荒い櫛状工具による整形がみられる。細砂を含み，焼成は良好である。

土器溜り　No.4

溝中央より西壁よりに，底面から約15cm浮いて，甕・高坏・礫などが検出された。この土器溜りは，礫の存在が多いことが注意される。断面の観察においては，これら礫・土器類は流入した状態を示さなかった。やはり，他の土器溜りと同様に溝内に遺棄されたと考えられる。

138 は口径15cmを測る甕形土器である。「く」の字状に外反する口縁部を有し，口縁端部は変化をさせず，胴部の最大径は中位にあり，やや張り気味の球形状を示す。左下がりの１.５mmから２mmの叩キを施した上から縦位の刷毛状工具による整形がなされ，叩キ目を消している。内面の整形痕は不詳である。ススの附着が認められる。石粒を多く含み，焼成は良好である。色調は暗茶褐色を示す。

139 は口径12cmを測る甕形土器である。口縁部はやや開き気味に立ち上がり，胴部は球形に近いものを持つ。口縁部は横ナデによる整形がみられる。胴部は左下がりの幅約２mmの叩キを施した後，縦位の細い条線のある櫛状工具により整形し，叩キ目を消している。内面は，横位の細い条線のある櫛状工具により整形される。器壁は底部に行くに従い，厚さを増してゆく。石粒を含み，焼成は良好である。色調は暗茶褐色を示す。

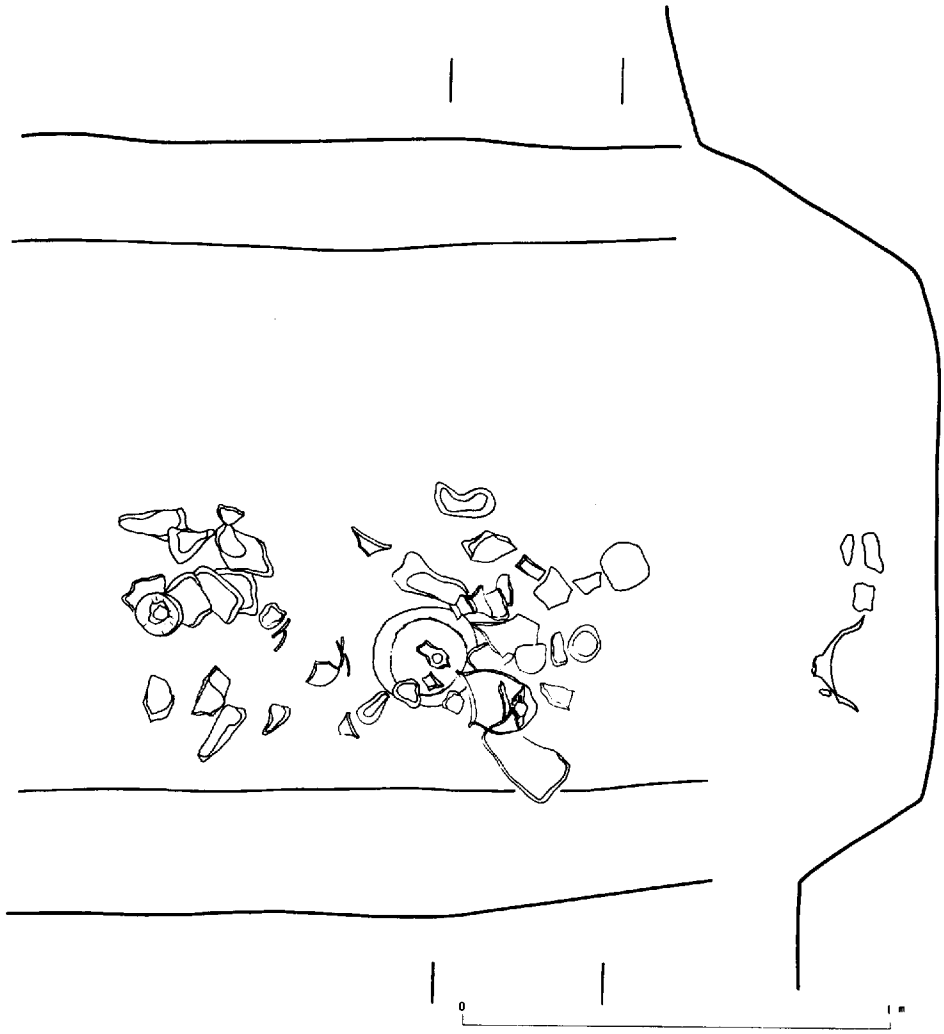
140 は口径２３.５cmを測る高坏形土器である。

坏部は稜を設け，外反する口縁部を有する。脚部は短かく開くもので，低く短かい裾部を形成すると推定される。坏部に凸帯をつくり，脚部にはめ込む。整形痕等については，剥離が著しいため観察出来なかった。内外面とも丹塗りが施されている。粒子の混入はあまりない。

以上が土器溜り出土土器の実態である。この他に，溝の時期比定，又機能の停止に関わりを持つと考えられる土器類が１４１～１７６である。

143 は土層断面No.３の第３層から出土したものである。複合口縁を有し，端面に５本の線による櫛描き波状文を施文する。丹塗りがなされている。

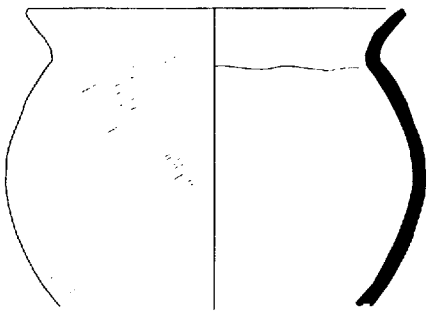
144・145 はこの土層断面観察用に残した土手下層より出土したものである。前者は，口径14cm，器高１１.３cmを測る小形の甕形土器である。単純に外反する口縁部を有し，端部は丸く仕上げられる。肩部近くに最大径があり，明確な底部はなく，凹み状の不安定な底部に移行する。器壁は底部にかけて厚く仕上げられる。口縁部は左から右への横ナデがなされる。頸部下半から左下がりの約



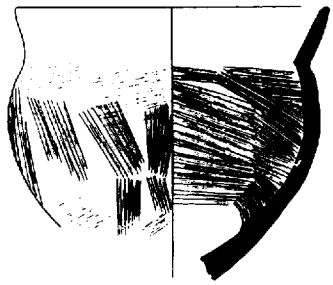
第７５図　溝　土器溜No.４平面図・断面図

2.5㎜の叩キがなされ，その上から縦位の櫛状工具により雑に整形される。内面は頸部から胴部下半にかけて，横位の非常に荒い櫛状工具により整形削りされた後，等間隔に縦位の，横位のそれよりは荒くない櫛状工具が施こされる。底部にかけては細い刷毛状工具による整形がみられる。焼成は良好で，色調は灰茶褐色を示す。

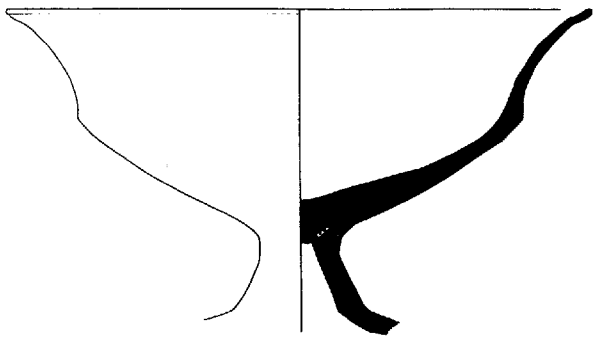
後者は口径13㎝を測る甕形土器？である。頸部をやや屈曲する程度のもので，口縁部は，わずかに尖る口縁部をつくる。胴部は口縁部より張ることはなく，底部に移行する。左下がりの約2.5㎜幅の叩キを施した後，斜めの細い櫛状工具による整形がなされる。内面は，口縁部から胴部下半にかけて，横位の非常に荒い櫛状工具による整形（削り）される。又底部にかけては，縦位の細い櫛状工具による整形がなされる。



138

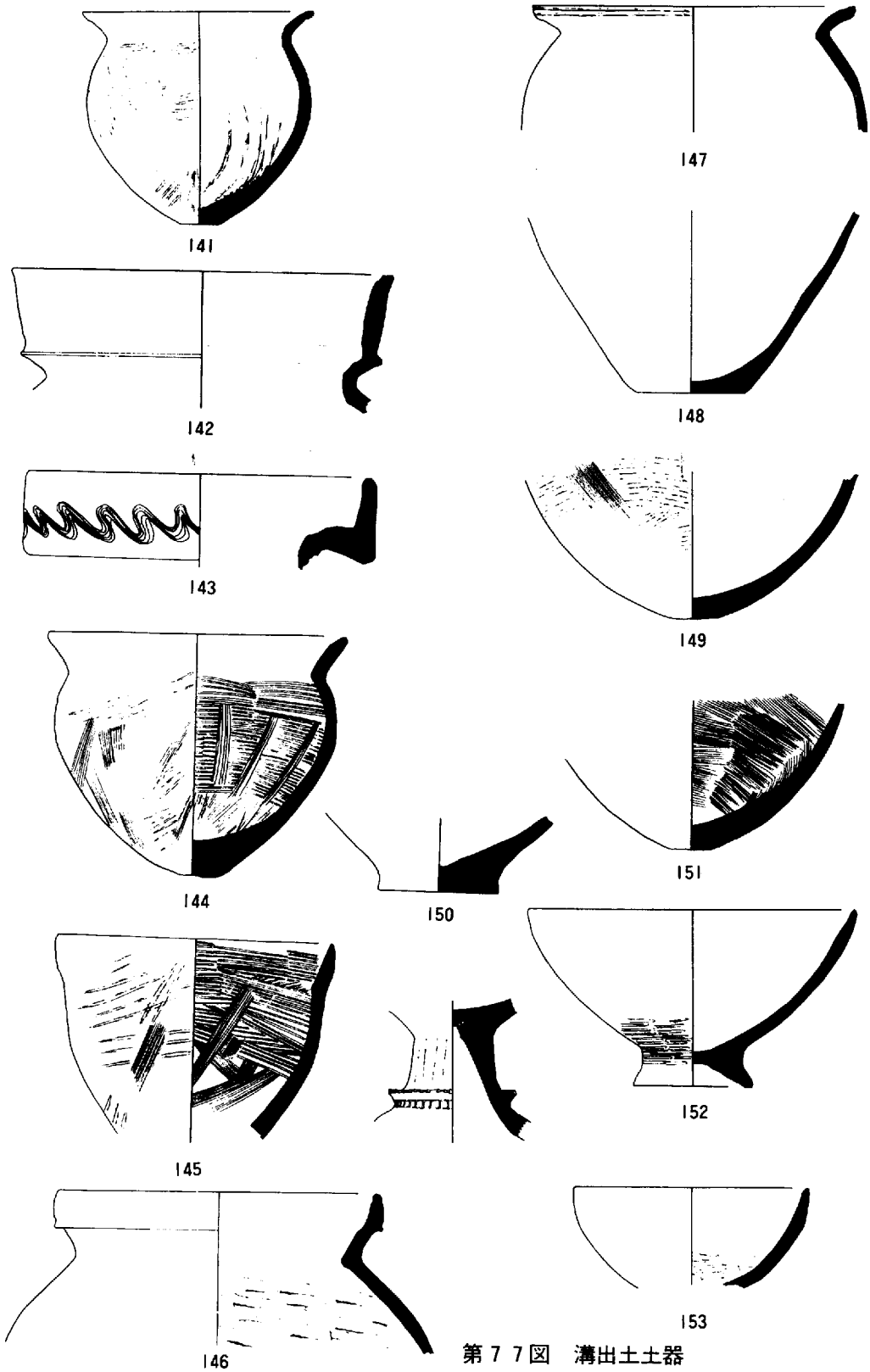


139

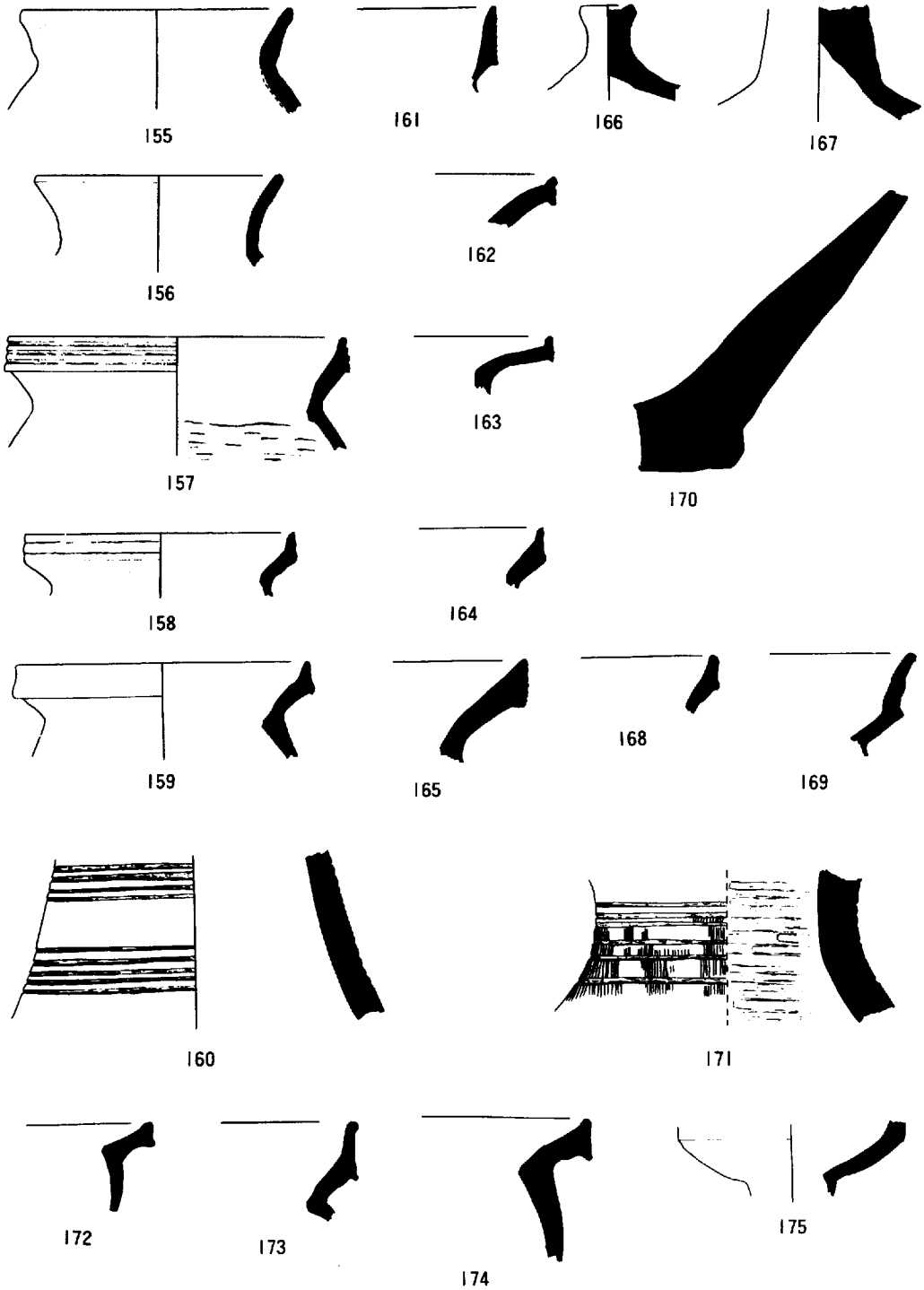


140

第76図　溝土器溜No.4出土土器



第77図　溝出土土器


155
161
166
167
156
162
157
163
170
158
164
159
165
168
169
160
171
172
173
174
175

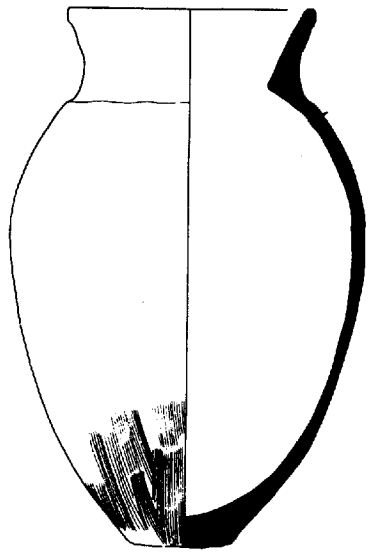
第７８図　溝出土土器

壁は底部に近づくにつれて，厚さを増していく。焼成は良好で，色調は灰褐色を示す。

この両者の土器は，胎土・整形とも非常に類似する。

176は底面より約28cm浮いた状態で検出されたものである。

146～153と**171～175**は，それぞれ同一地点に，まとまって出土したものである。**155～169** は土器溜りNo.3を検出した第1次調査のトレンチの際，下層より出土したものである。



第79図　溝出土土器　176

C．建　　物

建　物　2

A地点とB地点の境をなす神社参道部分から検出された掘立柱建物で，1間×3間で梁間４１０cm，桁は２０５～２３５cmである。棟は北東一南西方向で柱は直径15cmの丸柱と思われる。柱穴から弥生式土器細片が出土した。建物３との共存は考えられないが，前後関係は明らかでない。

建　物　3

建物２とは方向をやや異にし，柱穴の掘り方も大きく直径50～60cmである。梁間は３５０～３７０cm，桁は２０５～２３０cmとばらつきがある。棟は建物２よりやや北にふっているが，前後関係は明らかでない。柱穴から弥生式土器細片が出土している。

建　物　4

C地点の西端に検出した掘立柱建物で，2間×3間，梁間約２m，桁は2.2m～2.3mを測る。棟は北西一南東方向を示し，円形の掘り方から弥生式土器片が少量出土している。
建物５より新しいと思われる。

建　物　5

C地点，建物４と切り合って検出した２間×４間の掘立柱建物である。梁間1.6m～1.8m，桁1.9m～2.2mを測り，棟は北東一南西方向で，直径40cmの掘り方から弥生式土器片が出土している。

建　物　6

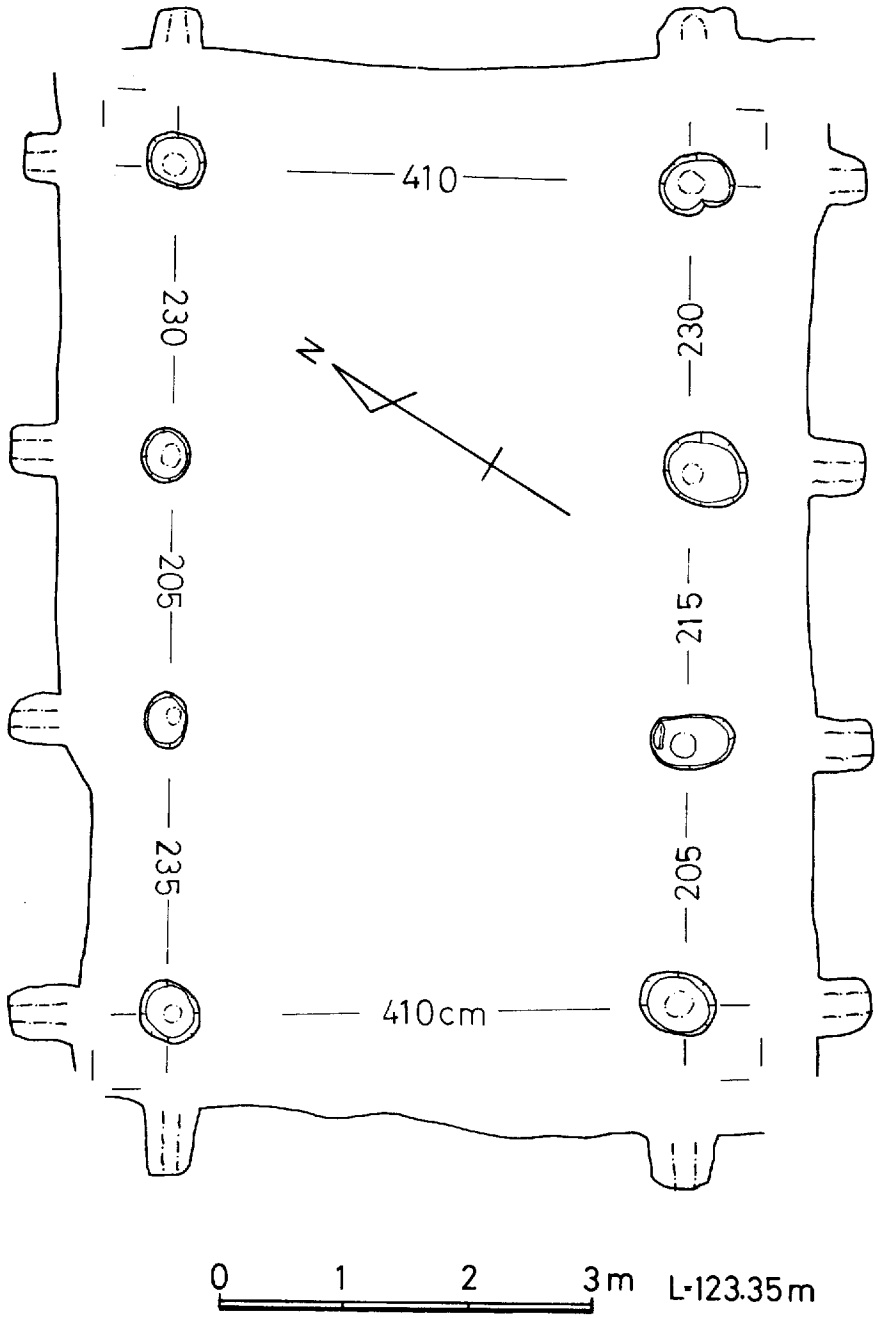
C地点，建物５の東に検出した１間×１間の掘立柱建物である。

天神原遺跡において，全域に柱穴が検出されたが，建物として確認できたものは６棟である。

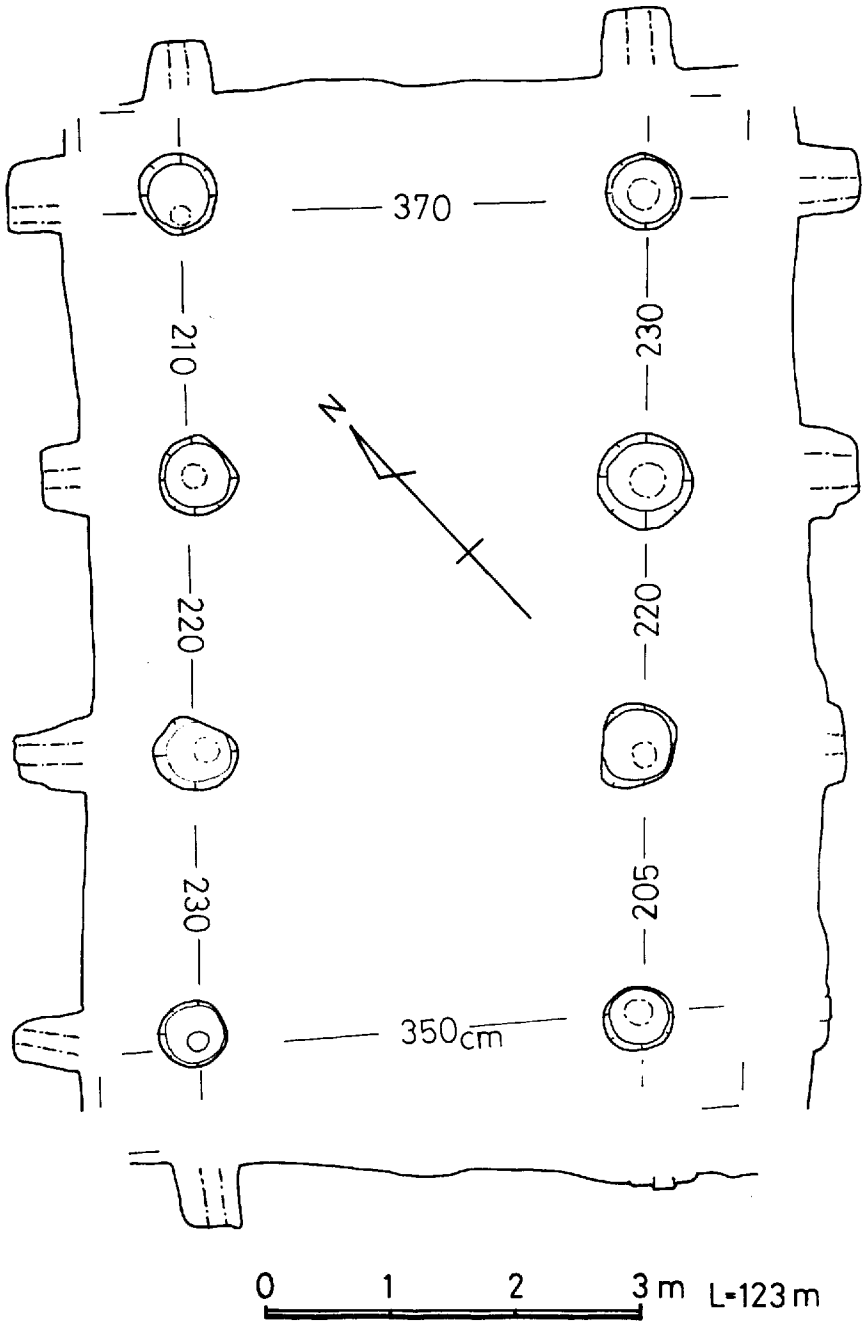
A地点の東南付近の建物２，３は規模が類似し，時期も弥生時代後期で，A地点の住居址の多くとほぼ同時期と思われる。これらの前後関係は明らかではないが，共存は考えられない。

C地点の建物４，５も切り合っており，前後関係は明らかでないが，柱穴から出土した土器から，弥生時代後期と考えられる。

建物６の北西隅の柱穴から多くの土器が出土している。弥生時代後期と考えられる。これらの建物は集落において，住居址の配置から考えて，住居址とともに集落形成のうえで共通的位置を占めると考えられる。すなわち，A地点において，12戸の住居址に２棟，C地点において，20号，21号の古墳時代の住居址を除く，11戸の住居址に３棟であり，集落における共有施設であった可能性がある。



第８０図　建物２平面図・断面図



第81図　建物3平面図・断面図

D. 土　壙・土壙墓

天神原遺跡における土壙は不十分な整理の状態であり本項においては主要遺物を含むもののみをとり上げる状況となった。従って，これらの中には土壙墓から建物の柱穴までも含まれている。さらに，遺構記号も明らかに土壙墓と思われるものには番号を付したほかは，調査時に付したものをそのまま用いているためpit …としている。

時代は弥生時代～古墳時代にわたるものである。

土壙墓１（２００１）

長軸２ｍ，短軸1.６２ｍ，深さ1.９０ｍの楕円形で，底面は長軸1.４０ｍ，短軸６４㎝の隅丸長方形のプランを呈する。

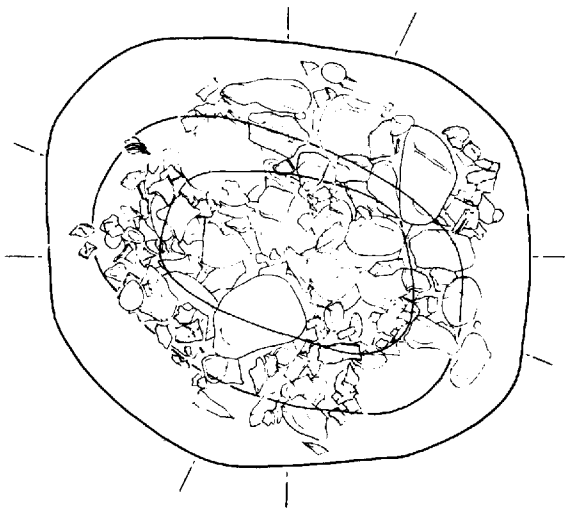
遺構確認面から深さ約70㎝間の土層は，25㎝～５㎝大の河原石と，故意に打ち砕いた状態の多量の土器片が混入する。土器の出土状態は，遺構内において完形品になるものはなく，破片のままである。土器が存在する上から河原石を投げ入れたように，土器が河原石により潰された状態を示している。この潰された土器を接合しても，完形になるものはなく，上述した如く破片の状態が大半を占める。　このようなことからすれば，別地点において故意に破砕された土器の一部をこの土壙に持ってきたと考えられる。

河原石と土器片を含む土層は暗褐色土で，若干の炭化物を混入するものである。

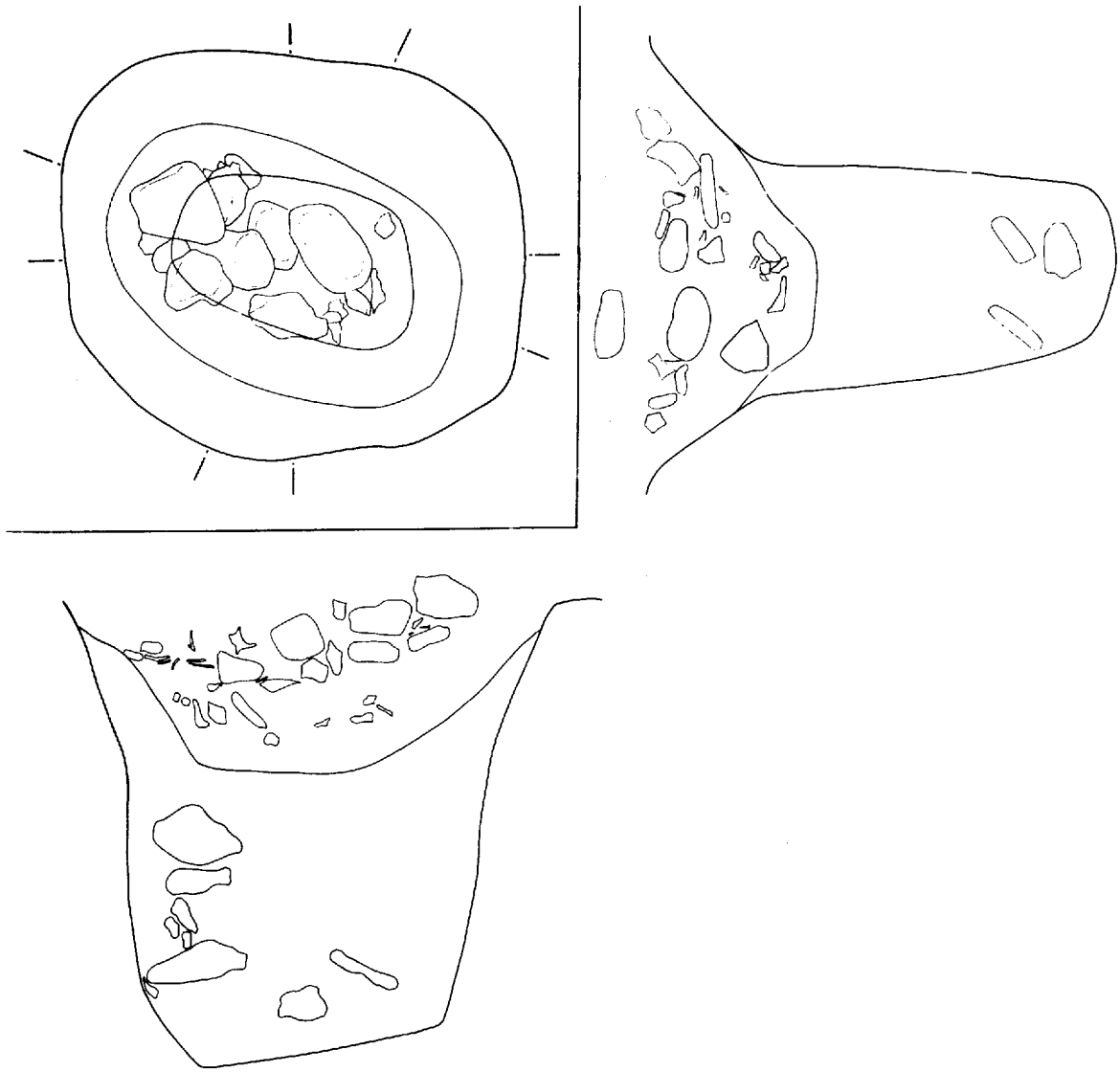
暗褐色土層の下は良質の褐色土があり，この土層中には，遺物の混入はみられず，埋め土として持ってこられたものと考えられ，約40㎝大の河原石が落込んだ状態で認められた。

これら河原石は底面に接しておらず，約10㎝程浮いた状態であった。

河原石および土器片を含んだ土層は，断面の状態を観察すると，落込んだ状態を示しており，また褐色土中の河原石もやはり，くずれた状態を示している。このことから，褐色土中の河原石を蓋として用いてあったものが，くずれたことにより，河原石および土器片を含む土は，元来地上に盛ってあった状態であったが，そのために落込んだと考えられる。



第８２図　土坑墓１（2001）平面図



第83図　土坑墓1（2001）平面図・断面図

＜出土遺物＞（第84図）

１７７は口径24cmを測る複合口縁部を有する壷形土器である。

複合口縁部は広い凹面を有するが，器面の剥離が著しく，施文の有無は不明である。

胎土，焼成とも良好である。色調は褐色を示す。

１７８は口径約２１.５cmを測る複合口縁部を有する壷形土器（器台？）である。

複合口縁部に，上下端部に凹線を施こすと推定されるもので，この凹線の間の部分に櫛状工具による波状文を施こしている。この波状文は，沈線の中に細い条を有する線である。

内面に丹塗りが認められる。

胎土は石粒を多く含むが，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

１７９は口径15cmを測る複合口縁を有する壷形土器である。

複合口縁部に横ナデによる凹線状の凹みを施こした上から，鋸歯文を施文している。この鋸歯文は，篦状工具の先端で施文した様に，細く深い沈線を施こし，内部には５～７本の沈線により右から左への斜線を充填させている。

１８０は口径12cmを測る口縁端部を肥厚させる直口の壷形土器である。

肥厚させた口縁端部に凹線を施こし，口縁部は右から左方向への凹線を施こしている。また，肩部には右から左へと，左から右への刺突がなされて，羽状文をつくっている。

内面の整形は指頭による整形痕がみられる。

堅緻で色調は褐色を示す。

１８１は口径12cmを測る複合口縁部を有する壷形土器である。

頸部が若干直口状になり，肩部に刺突列点文を施こしている。

内面は横位の篦削りがなされている。

細砂および石英粒を含み，軟弱である。色調は褐色を示す。

１８２は口径11cmを測る複合口縁の壷形土器である。

複合口縁部に凹線を施こすもので，頸部には縦位の荒い櫛状工具による整形がみられる。

堅緻で色調は灰白色を示す。

１８３は口径15cmを測る口縁部を折り返すようにして，複合口縁をつくる壷形土器である。

複合口縁部に凹線を施こしているが，整形痕などは器面の剥離が著しく不明である。

細砂を含み焼成は良好である。色調は褐色を示す。

１８４は口径14cmを測る複合口縁部を有する甕形土器である。

器形は「く」の字状に外反する頸部から肩の張らない丸味のある胴部を形成するものと推定される。

口縁端部をやや肥厚させた状態がみられ，複合口縁には，しっかりした凹線が施こされている。頸部から肩部にかけて縦位の，また胴部にかけては横位の荒い櫛状工具による整形がみられ，内面

は横位の篦削りがなされている。

ススの付着が認められる。焼成は良好で，色調は灰褐色を示す。

185は端部を上下に拡張させ，口径13cmを測る複合口縁を有する甕形土器である。

複合口端部に凹線を施こすが，その施文の上から横ナデをしている為に，凹線が消されている感じをうける。頸部から胴部にかけて，縦位の櫛状工具による整形がみられ，内面は横位の篦削りが行なわれている。器表面にススの付着が認められる。

石粒を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

186は口縁端部を下方に強く拡張させる．口径17cmの複合口縁部を有する甕形土器である。

複合口縁部には凹線を施こす。内面には横位の篦削りがみられる。

石粒，細砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

187は口縁端部を下方に拡張させ，口径13cmの複合口縁部を有する甕形土器である。

複合口縁部には横ナデによる凹面部をつくる。頸部から胴部にかけて，やや斜めの細く深い線を痕す櫛状工具による整形がされている。内面は横位の篦削りがみられる。器面にススの付着がみられる。

砂粒を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

188は口縁部を逆「L」字状に強く外反させ，上下に拡張させる口径21cmの複合口縁部を有する甕形土器（壷形土器？）である。

胴部は口縁部径より張らず，ナデ形をしている。

複合口縁部には沈線状の凹線を施こし，内面は横位の篦削りを行なっている。

石粒，細砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

189は口縁端部を上下に拡張させ，口径18cmの複合口縁部を有する甕形土器である。

複合口縁部には凹線を施こしている。器表面には，2mm～3mmの線の中に細い条を有する櫛状工具で縦位に整形されており，内面は横位の篦削りがなされている。器面にススの付着がみられる。

石粒を多く含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

190は口縁部を上下に拡張させ，口径17cmの複合口縁部を有する甕形土器である。

複合口縁部には凹線を施こし，「く」の字状に外反する頸部に刺突列点文を施こしている。

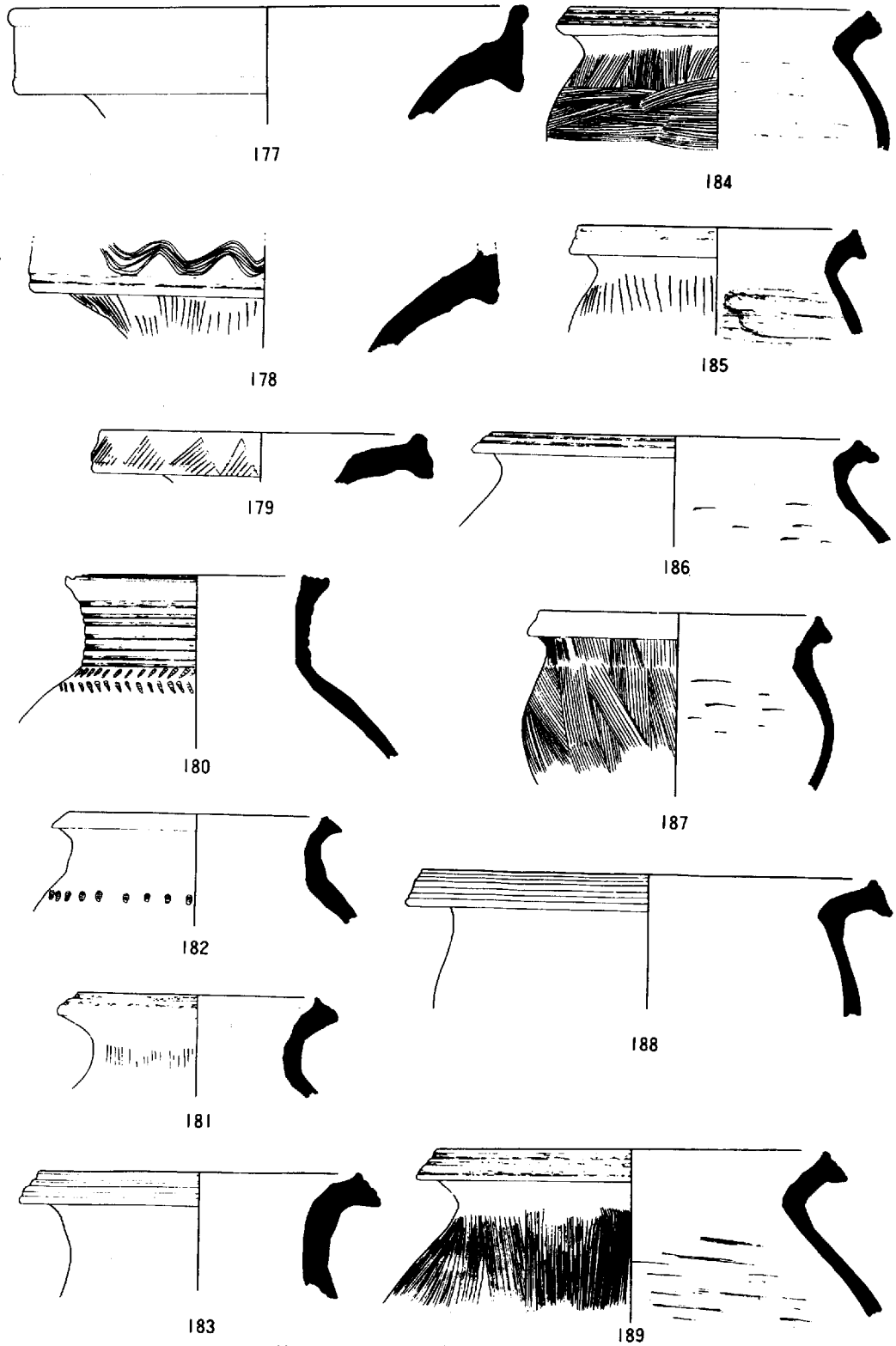
丹塗りがなされている。石粒を多く含む。堅緻で色調は褐色を示す。

191は口縁端部を上下に拡張させ，口径17cmの複合口縁部を有する甕形土器（壷形土器？）である。

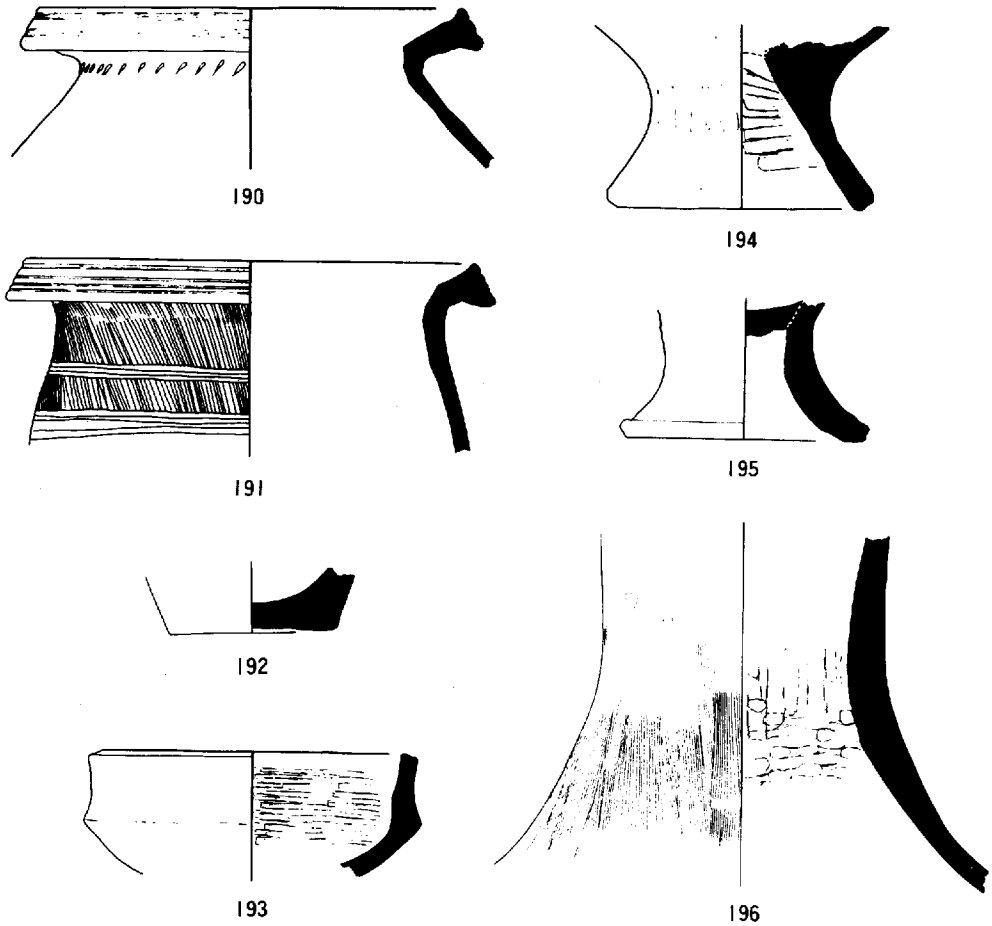
複合口縁部に沈線に近い凹線を施こし，器面は，やや斜めの細く深い刷毛状工具により整形されている。この整形痕の上から櫛状工具による横位の沈線が2カ所に施文している。

器形は12のものと大差のないもので，器表面の施文の有無だけが異なる。

堅緻で，色調は淡白褐色を示す。



第84図　土坑墓1　出土遺物
(2001)



第85図　土坑墓1　出土土器

192は底径6.8㎝を測る甕形土器の底部である。上げ底気味のもので，色調は褐色を示す。

193は口径12㎝を測る鉢形土器である。

坏部中央に稜線をつくり，垂直に立ち上がるものである。この坏部に脚がふするかどうかは破片のため不明である。

内外面とも横位の細い篦による磨きがみられる。堅緻で色調は茶褐色を示す。

194は台径10㎝を測る鉢形土器の台部である。「ハ」の字状に裾部が短く広いもので，器壁は厚く仕上げられている。器面には縦位の篦削りがなされている。

195は台形9.5㎝を測る鉢形土器の台部である。

裾部をやや延ばし気味で，端部を屈曲させている。台部と鉢部との間は，粘土を充填させている。器壁は18と同様に厚くつくられている。

剥離が著しく，整形痕は不明である。色調は淡褐色を示す。

196は器台形土器の胴部破片である。外面は縦位の細く深いタッチの櫛状工具で整形され，内面は，指頭によるしぼりがなされている。

石英粒を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

pit 2008（第86図）

A地点10号住居址内上部に検出された古墳時代の土壙墓である。土壙は長方形を呈し長辺1.42m，短辺6.7m，深さ0.25mを測る。土壙内は淡黒褐色土で埋まっているが，底面はH－10の埋土との関係で識別は困難に近く，出土遺物等から判断して大略をつかんだ。

墳丘との関係では，調査前における状況，調査中における観察においても一切そういった痕跡はみられず，本遺構はそういった施設をもたない古墳時代の墓である可能性が強い。

遺物は土壙西よりに須恵器高坏，甕，土師器坏，坩が一括出土した。

＜出土遺物＞（第87図）

無蓋高坏，器高11cm，坏部径16.4cm，脚底径9.5cm，脚高5.3cmを測る。坏部は中央に明瞭な二本の稜線により上下を区分し，その下端に四本よりなる櫛描波状文が巡っている。さらに，先の稜線帯内に2個のつまみを付し，坏部を飾っている。底部はヘラ削りによる整形である。口縁部内面は，端部に細い凹線を，さらに下った部位に浅く幅広い凹線を巡らしている。脚部は太くて短かく，四方に梯形の透しを切っている。脚端部は上部に浅い凹線をめぐらし，幅広く垂直に近い立ち上りをなす。下端は丸く仕上げている。灰色を呈し，一部風化がみられる。

甕，口径5.2cm。器高10.2cm。胴部最大径10.1cmをはかる小型甕である。頸部はややしぼり気味で，まっすぐに外反して口縁端部に至る。頸部と口縁部は一本の稜線によって区分され，11本の櫛描波状文によって頸部を飾っている。体部の肩はやや張り気味で，胴部の張り出しは鋭く，その中央に円孔を穿つ。底部は尖り気味で，全体にタマネギ形をなす。体部中央下から底部にかけてはヘラにより丁寧に平滑に仕上げている。

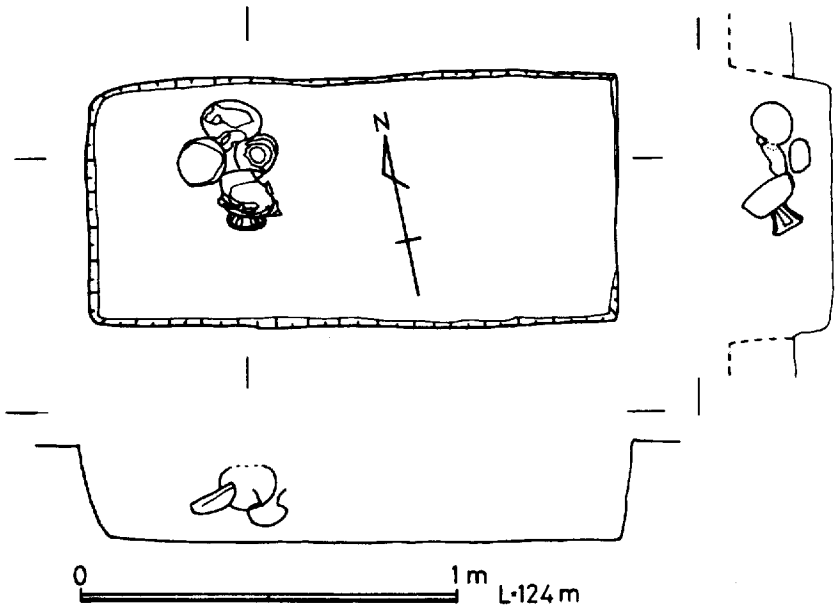
土師器坏，口径12.1cm，器高5.5cm。体部最大径13.2cm，体部上方を内弯させて口縁部をつくり，口縁端は丸く仕上げている。胎土中に砂粒を含み，淡褐色を呈する。焼成良好。

土師器坩，遺物取り上げの時点で破損したため，石こう型取りによる実測図である。

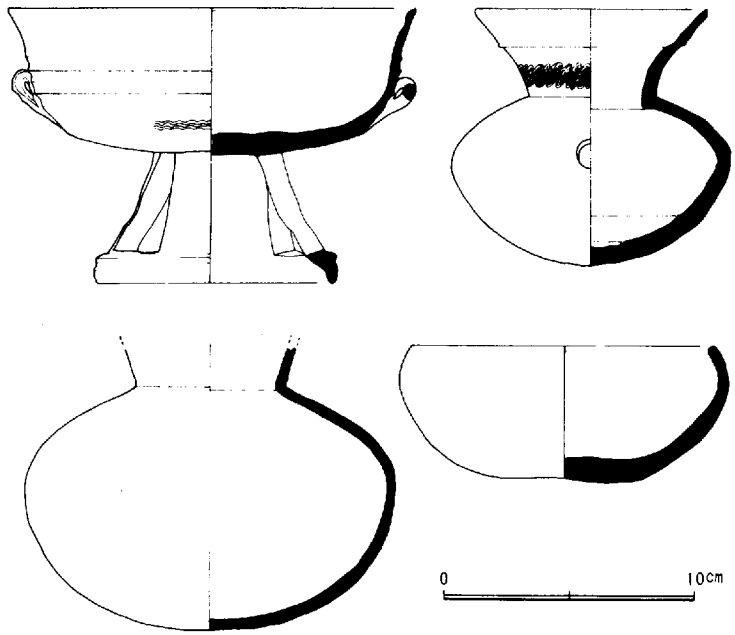
胴部最大径14.8cm，肩部は直線的に下り，胴部から底にかけて張り気味である。このため丸底であるが安定した底部をなしている。器壁は3mm～5mmで肩部から胴中央部がもっとも薄い。胎土中に砂粒を含み明褐色を呈する。

これら一括土器の内特に，須恵器二点は，大阪府南部の陶邑古窯址のⅠ期に比定される時期のものである。類似する土器は美作地方においては，津山市日上，高祖神社裏古墳（注1），久世町鍋屋遺跡（注2），畝山80号古墳（注3）にみられる。これらはいずれも時間的に近い時期のものである。しかしながら，pit 2

００８出土の須恵器は，上にあげた遺跡出土のものより若干古い要素をおびており，現地点におけ



第８６図　（2008）平面図・断面図



第８７図　（2008）出土遺物

現時点における美作最古の時期に位置づけられるものである。

また，美作地方における須恵器窯址の最古のものは勝田郡勝北町用田池所在の用田池東古窯址(注4)で，6世紀前半に比定されるものである。備前南部地方における古窯址をみてもこの時期に比定されるものは発見されていない(注5)。とすれば，この期の須恵器は「須恵器生産が陶邑の地に固定した」(注6)段階のものであり生産体制の確立による初期の流入品として位置づけられる可能性が強い。

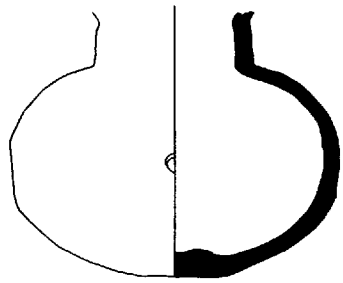
pit ２００９（第88図）

径１7.６０ｍを測る円形周溝遺構である。溝は幅60cm前後で深さも一定せず，６cm程で浅く巡っている。削平の為その遺存状態はよくない。

遺物は東側周溝内の内壁よりに底面に接した状態で出土した。

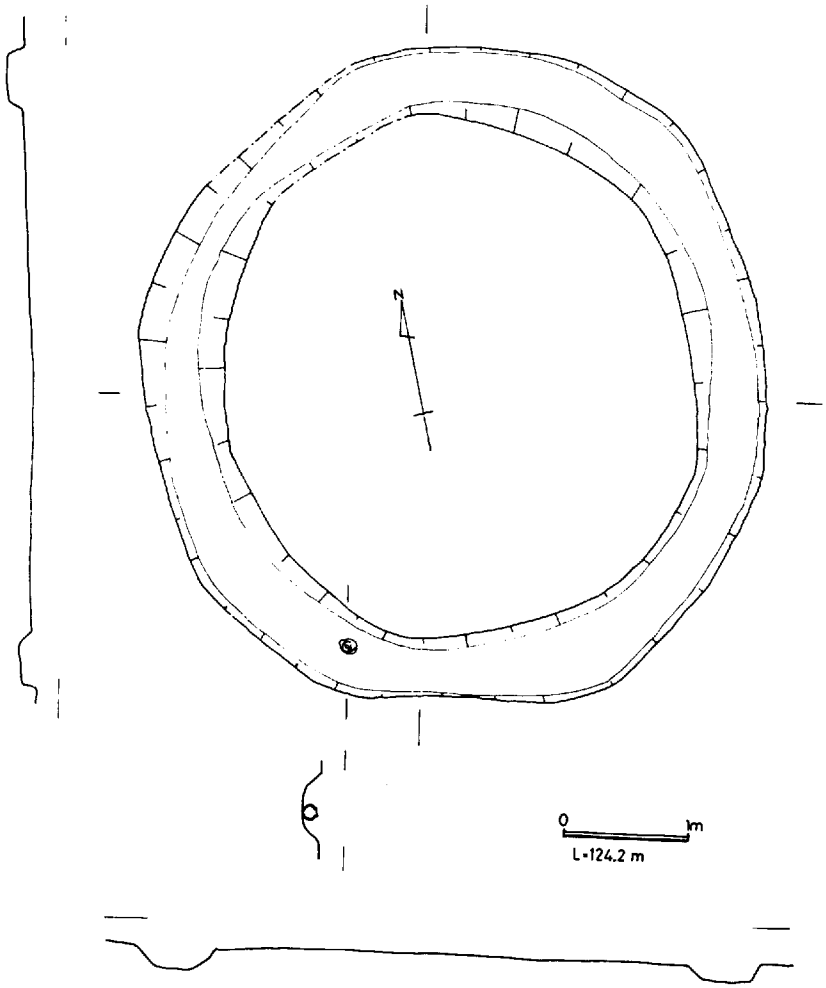
＜出土遺物＞（第89図）

２３２は口縁部を欠失した壷形土器である。頸部は垂直に立ち上がり，横に張り気味の胴部中央に輪積みによる稜がみられる。底部は丸味を呈するが，丁寧な仕上げをすることはない。



232

第89図　(2009)出土遺物

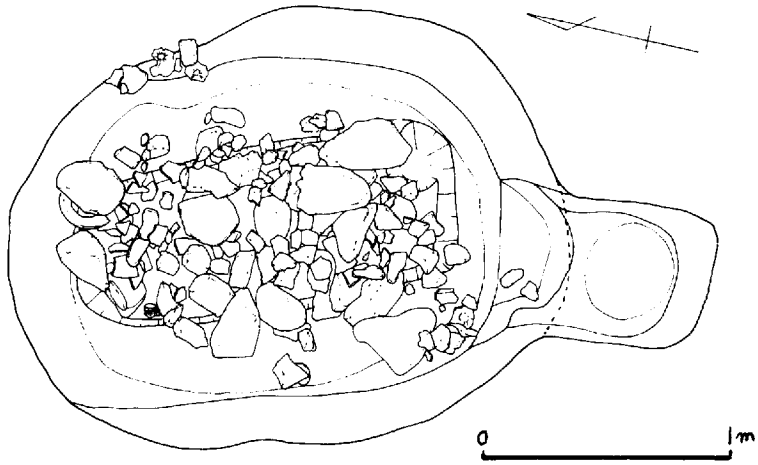


第８８図　Ｐ2009

内面の底部近くは，凹凸が著しい。

磨滅が著しく，整形痕などは不明である。細砂を含み，色調は褐色を示す。

なお検出時に，胴部中央に穿孔が認められたが，復元不可能であるため正確な位置は不明である。穿孔は焼成前のものである。このことから，器形は瑯とも考えられる。

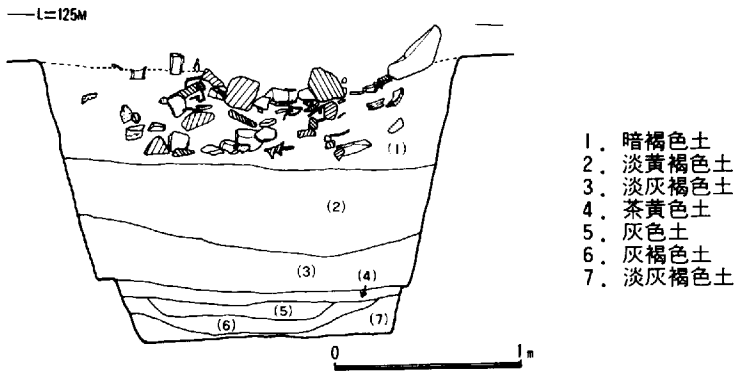


第９０図　土坑墓２（2010）

土壙墓２（２０１０）

長軸2.２４ｍ，短軸1.７５ｍ，深さ1.５５ｍの不整楕円形の平面形態を呈する。遺構確認面から約1.１５ｍの深さの部位において，両長側面に平担部を保ち長軸1.５４ｍ，短軸0.６５ｍ，深さ0.３５ｍを測る箱形土壙を有する土壙墓である。

遺構検出面から深さ５５cmまでは30cm～10cm内外の河原石または故意に打ち欠いた多数の土器片



第９１図　土坑墓２（2010）土層断面図

が，中央部に向って落ち込んだ状態で認められる。これら土器片は完形になるものは全くない。この河原石と土器を含む土層は暗褐色土で土層中に若干の炭化物を混入する。さらに，この土層下は淡黄褐色土で埋められているが，遺物は一切混入しない。箱形土壙上面は黄褐色地山粘土を10cmほどの厚さで覆い，あたかも棺直上を意識した明瞭な土層で区分される。箱形土壙内部には木棺の痕跡は認められなかったが，四隅に小穴４個を穿っている他，土壙中央部面より底部近くに10cm弱の円礫が認められる。なお，土壙上面の南にみられる突出した掘方は本土壙とは関係しない柱穴である。

＜出土遺物＞（第93図）

１９７は口径11cmを測る壷形土器である。

外反する口縁部を持ち，口縁端部を屈曲させる。外面は細い櫛状工具がみられ，内面は，横位の篦削りをおこなっている。

石粒を含み，焼成は良好である。色調は灰褐色を示す。

１９８は口径１０.７cmを測る壷形土器である。

「く」の字状に外反する口縁部を有し，口縁端部を肥厚屈曲させ，上方に拡張する。胴部は肩部の張る形態を示す。

頸部の孔は２対で２ケ所うがたれている。内面は横位の篦削りがおこなわれている。

石粒・細砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

１９９は口径１３.３cmを測る甕形土器である。

外反する口縁部を下方に拡張し，複合口縁をつくる。口縁端面は横ナデによる凹みがみられる。

石粒・細砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

２００は口径12cmを測る甕形土器である。

外反する口縁部をもち，口縁端部を肥厚させながら上下に拡張する複合口縁をつくる。口縁端面は横ナデにより凹みをつくる。

頸部から胴部にかけて縦位の荒い櫛状工具による整形がなされる。内面は横位の篦削りがなされる。

石粒を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を呈す。

２０１は底径６.４cmを測る底部破片である。

内面は，荒い櫛状工具による整形がなされる。

石粒を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

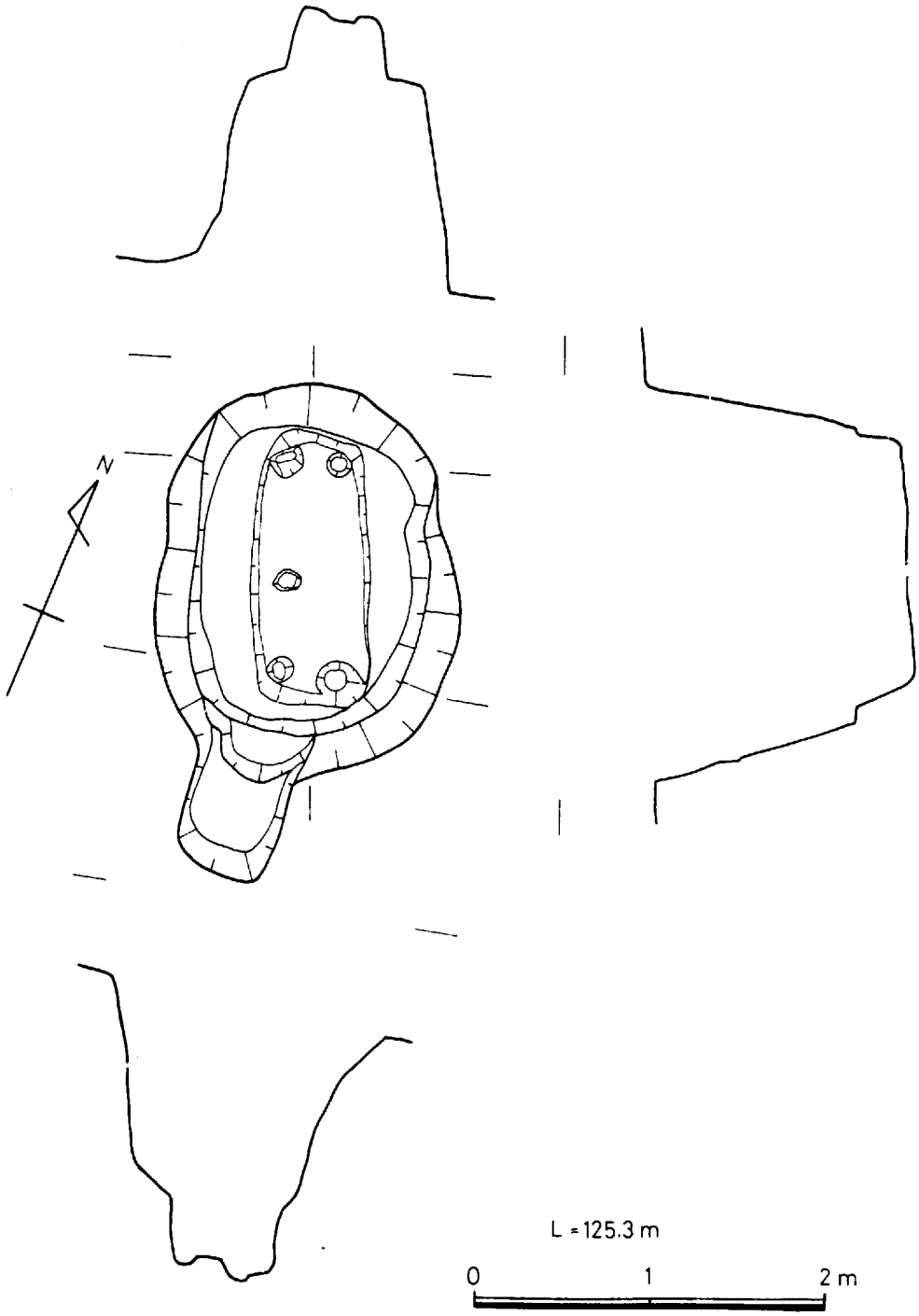
２０２は底径６.３cmを測る底部破片である。

石粒を含み，焼成良好。色調は灰白色を示す。

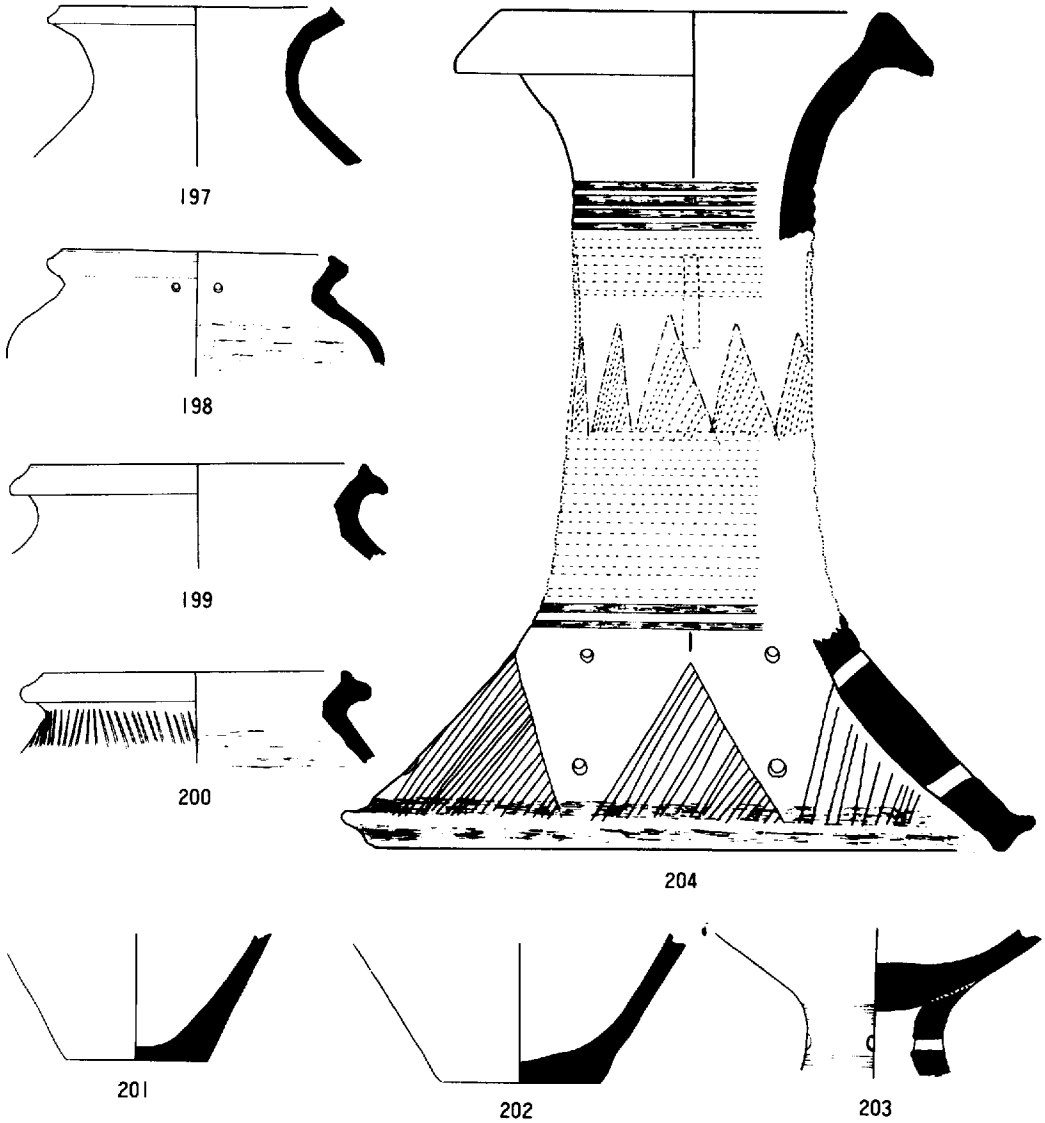
２０３は高坏形土器の接合部の破片である。

脚部には８本単位の櫛による直線文が施文され，この間に４ケ所において穿孔される。

細砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。



第９２図　土坑墓２（2010）平面図・断面図



第93図　土坑墓2（2010）出土土器

204は口径15cm，推定器高33cm，台径25.2cmを測る。外反する口縁部を有し，口縁端部を下方に拡張して複合口縁部をつくる。胴部は筒形を呈し，「ハ」の字状に大きく開く裾部をつくり，裾端部を屈曲させる。

複合口縁部は剥離が著しく，文様の施文の有無は不明である。胴部中央に，内部に左下がりの斜線を充填さす箆描き鋸歯文を描き，その上下に凹線文を多条する。鋸歯文上部から凹線にかけて，長方形の透しを4ケ所（推定）設ける。裾部は，山形文を施文し，内部に左下がりの斜線を乱雑に充填する。山形文の間には上下対で7ケ所に円形の穿孔を施す。裾端部は横ナデにより凹みを，端面には荒い刷毛状工具による凹みを有する。

器面の剥離が著しく詳細な観察は出来なかった。小砂粒を多く含み，焼成は良好である。色調は

褐色を示す。

pit ２０１８（第94図）

Ａ地点丘陵平担部に検出された主軸を略東西に置　長方形土壙である。土壙上部の長辺２ｍ，短辺１ｍ～0.85ｍ，底部の長辺1.8ｍ，短辺0.8ｍ～0.7ｍを測る。即ち，長辺が東にやゝ開く形態のものである。現存の深さは0.45ｍで底部は平担であるが，両側面に幅・深さとも10cm前後の掘り込みがみられることから組合式木棺を開いた土壙墓であったと推察される。土壙内は中央やゝ西より付近に口縁部欠損の壷が横倒した状況で出土した。壷は土壙底部に接するのでなく，少し浮いた状況を呈している。さらに，この壷出土付近から東にかけて細長い朱の痕跡をみた。

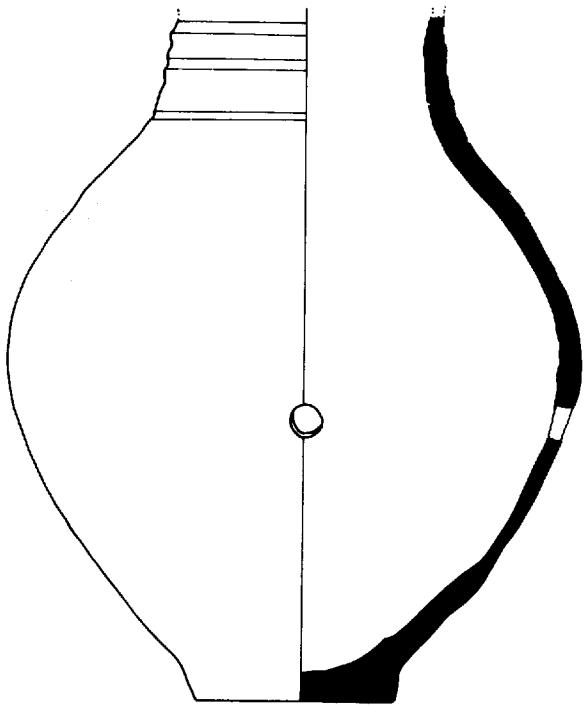
土壙上面には河原石の集石がみられるが，これは棺上部を覆う状況を呈している。

＜出土遺物＞（第95図）

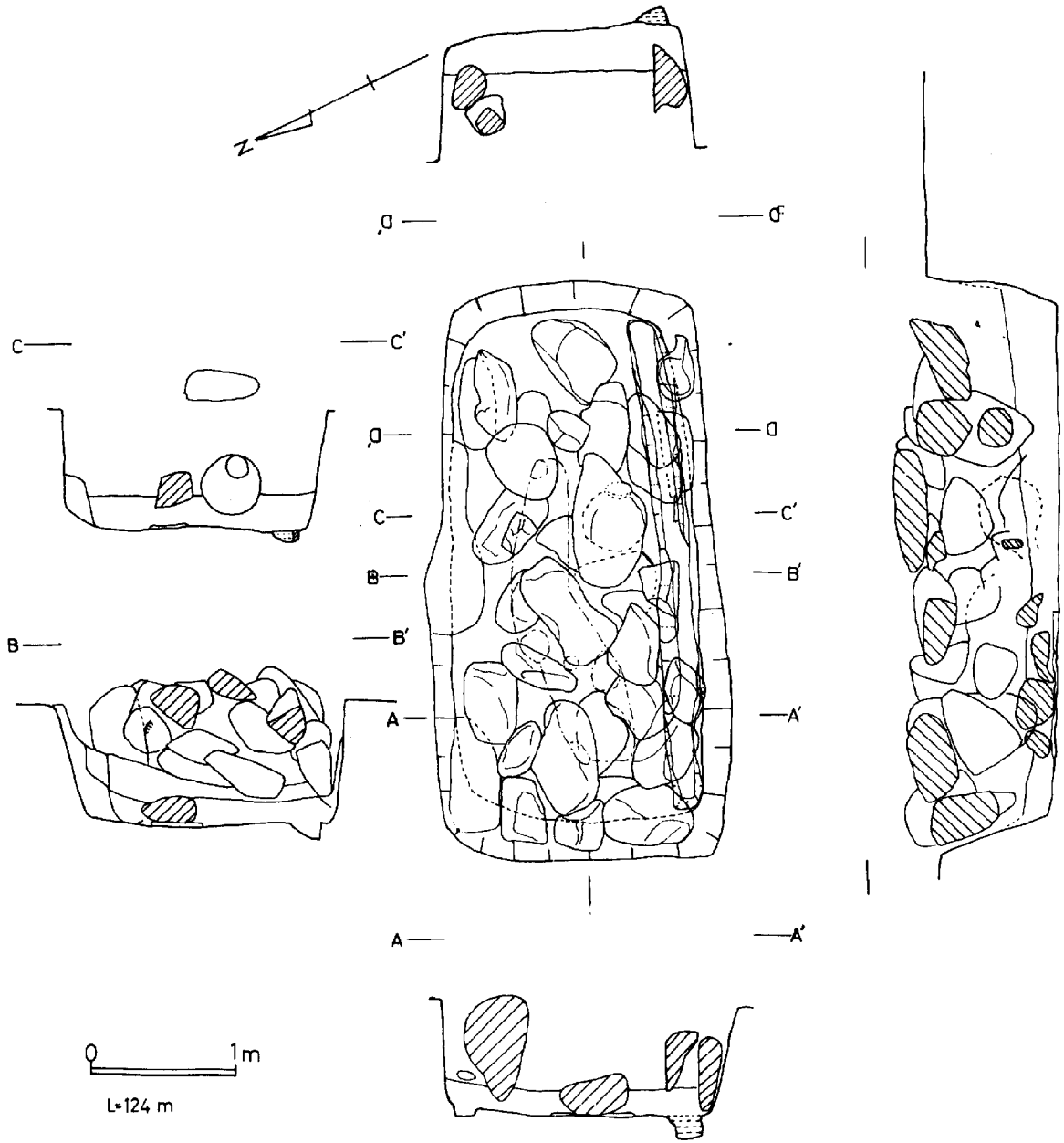
２３４は底径7.9cmを測る壷形土器である。口縁部は欠失し，頸部に凹線を施す。肩部は張らず，胴部最大径は上位にある。底部は中央に凹みを有する。胴部中央に，焼成後の径1.2cmの穿孔がみられる。穿孔方向は外からである。

器面は剥離が著しく，整形痕などは不明である。内面は，胴部中位に輪積痕を消したと推定される指頭圧による整形がみられる。また，底部においても同様な凹凸がみられる。

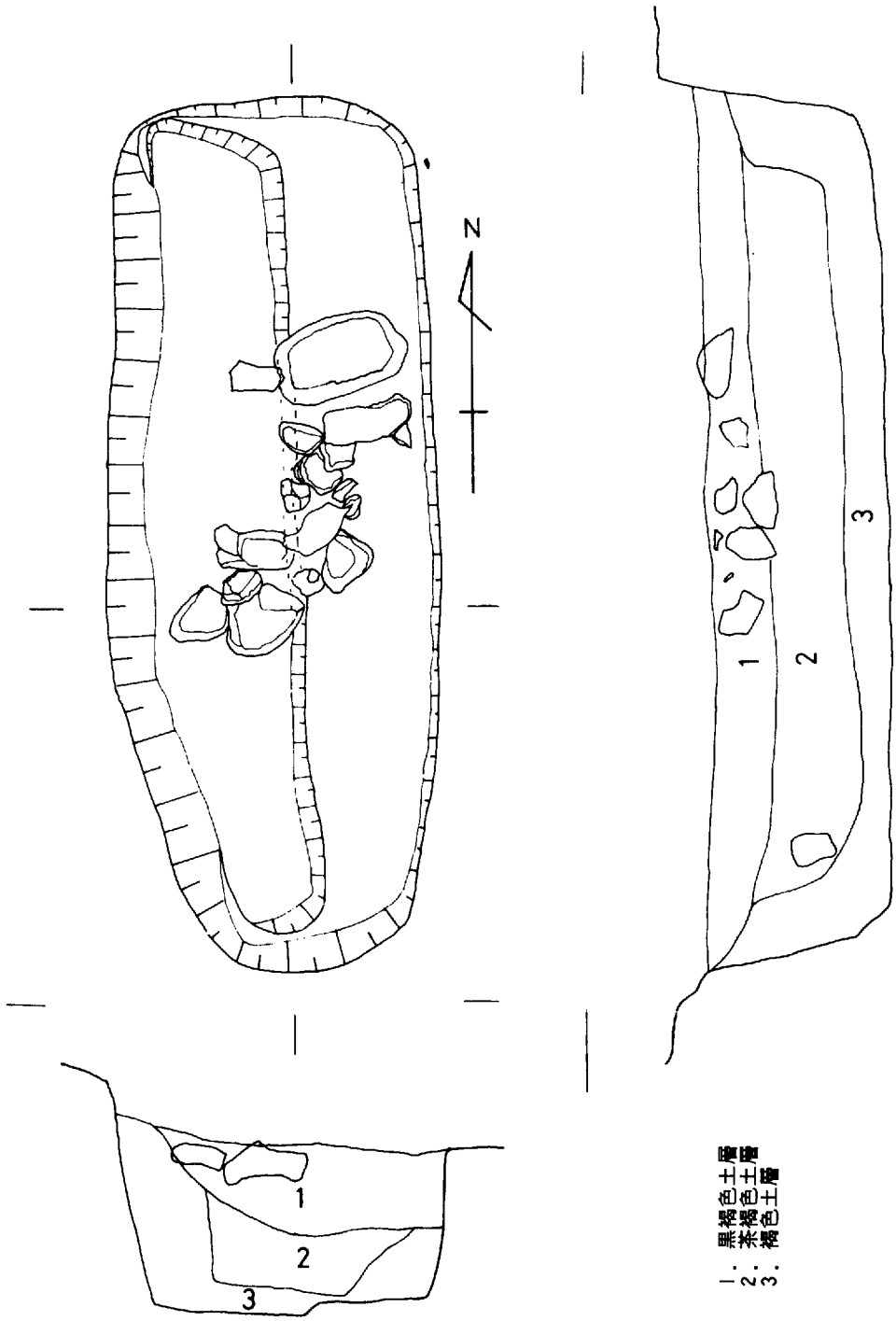
胎土は石粒も多く含み，焼成はややあまい。色調は茶褐色を示す。



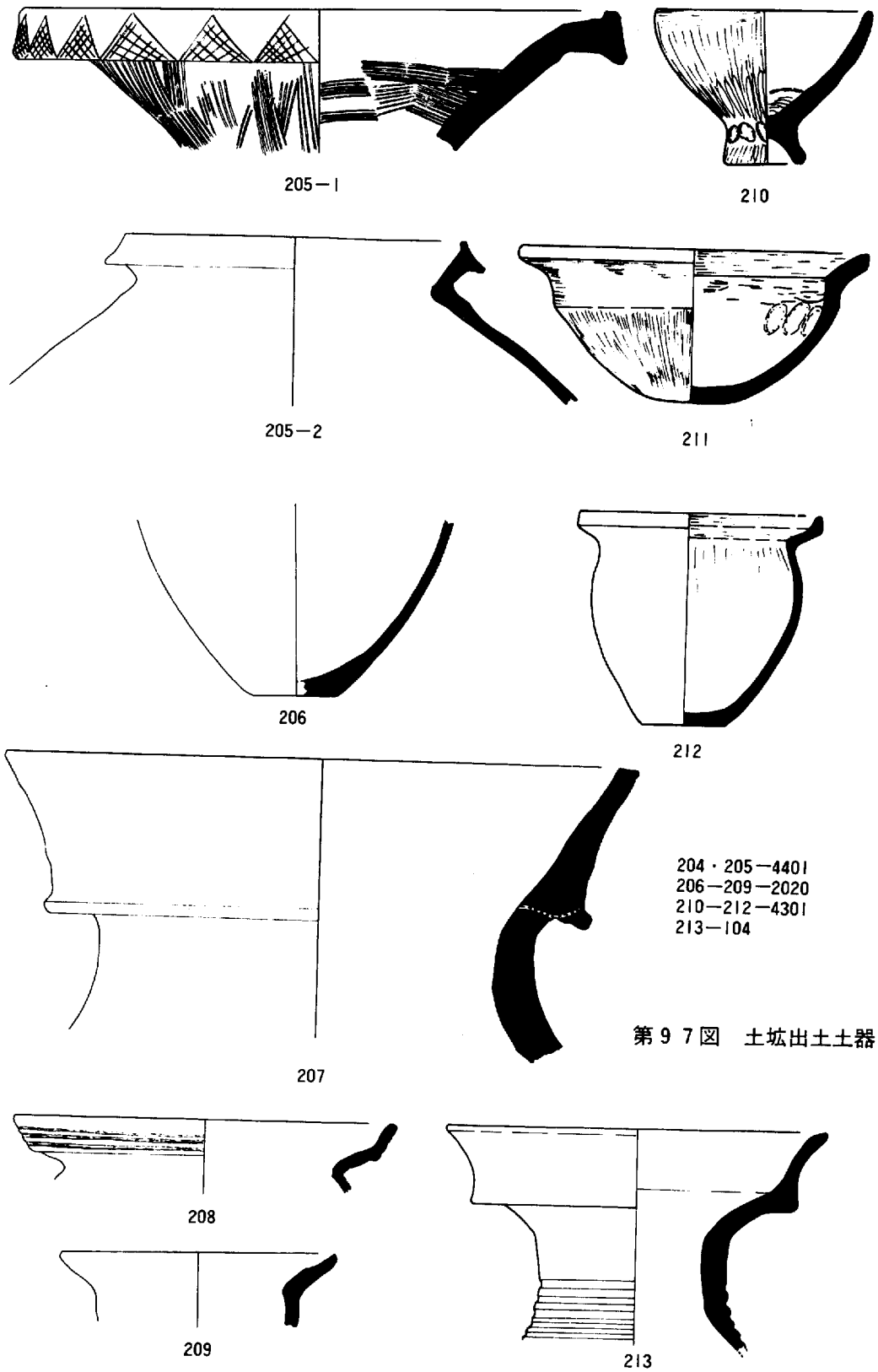
第９５図　土坑墓３（2018）出土土器



第９４図　土坑墓３（2018）平面図・断面図



第96図　土坑墓4（2020）平面図・断面図


205－1
210
205－2
211
206
212
207
204・205－4401
206－209－2020
210－212－4301
213－104
208
209
213

第97図　土坑出土土器

土壙墓4（2020）

A地点　12号住居址の東辺を切って掘り込まれ，長辺2.5m，幅約1mのほぼ長方形を呈する。深さ約60cmであったが，上層の黒褐色土には河原石と土器片が混在していた。土器片は中層，下層からは出土していない。土壙墓と考えられる。

＜出土遺物＞（第97図）

207は口径30cmを測る壺形土器である。

外反する口縁部を上方に拡張し，複合口縁をつくる。器面の荒れが著しく，整形痕などの観察は出来なかった。

208は口径18.2cmを測る甕形土器である。

「く」の字状に外反する口縁部を有し，口縁端部を上方に拡張して複合口縁をつくる。端面には，不詳明ではあるが，3本の凹線が施こされている。内面には，箆削りがみられる。

ススの附着が認められる。石粒を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

209は口径13cmを測る甕形土器である。

外反する口縁部を持ち，口縁端面は変化をさせない。焼成は堅緻である。色調は褐色を示す。

206は推定底径4cmを測る。器種は不明である。細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は茶褐色を示す。

pit　2025

A地点西斜面にかかる位置において検出された土壙で長辺1.05m，短辺0.5m，斜面上部での深さ0.2mを測る。底部は中央付近が一段と深くなって安定していない。

＜出土遺物＞（第98図）

231は口径20cmを測る器台形土器である。

口縁端部を下方に拡張し，複合口縁にする。複合口縁には，細い線ではあるが明確に鋸歯文が施文され，内部には左下がりの斜線が充填される。鋸歯文の間には，竹管により円形の刺突文を施している。

石粒を含み，焼成は良好である。

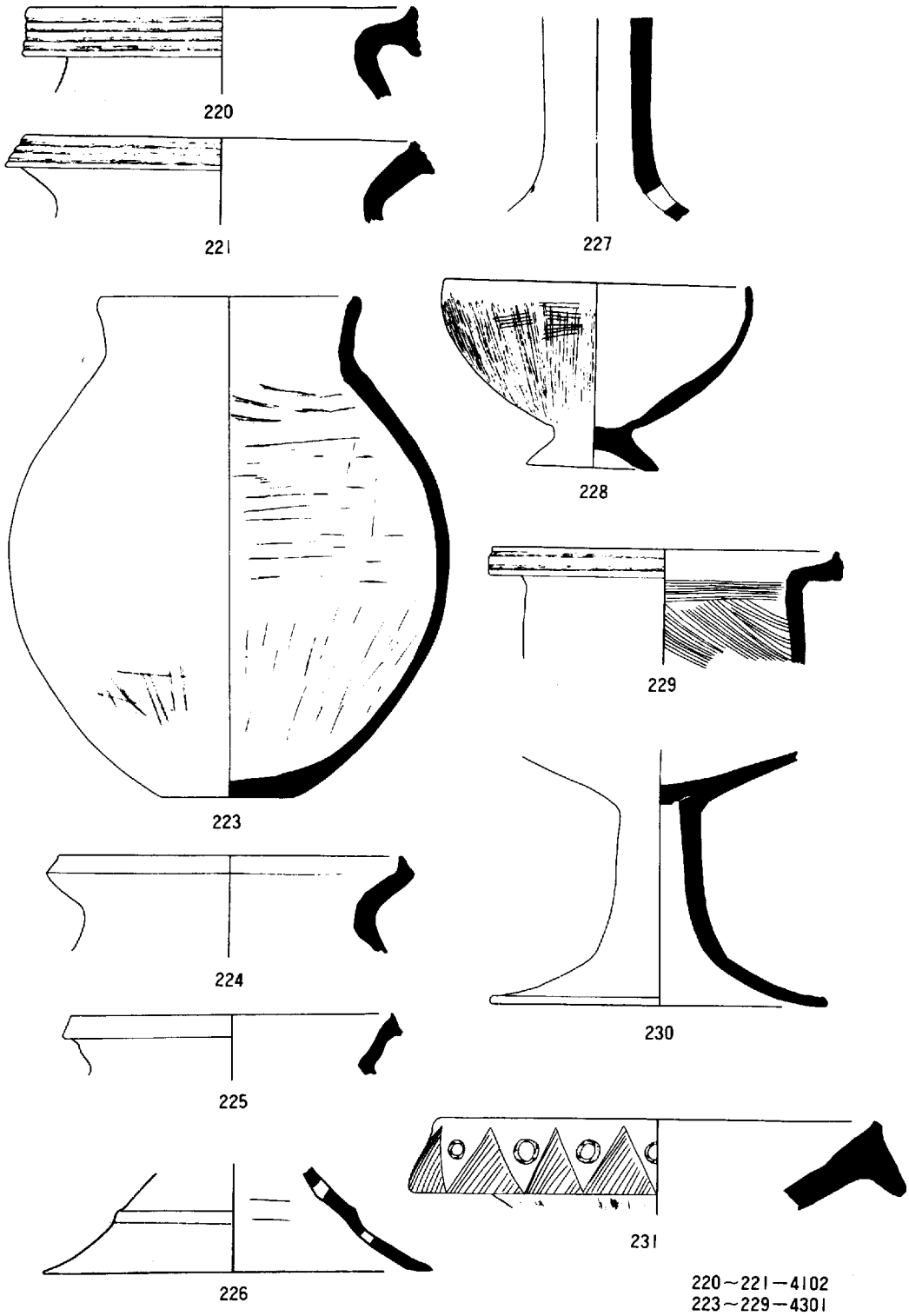
なお，破片であるため口径は任意である。

土壙墓　3001

B地点　長さ1.8m，幅0.7mの長方形を呈し，深さ30cmの舟底形をなし，中央に長さ1.5m，幅25cmの溝が存在する。上層より須恵器片が出土している。須恵器は壺形土器で，6世紀末～7世紀初めと考えられる。

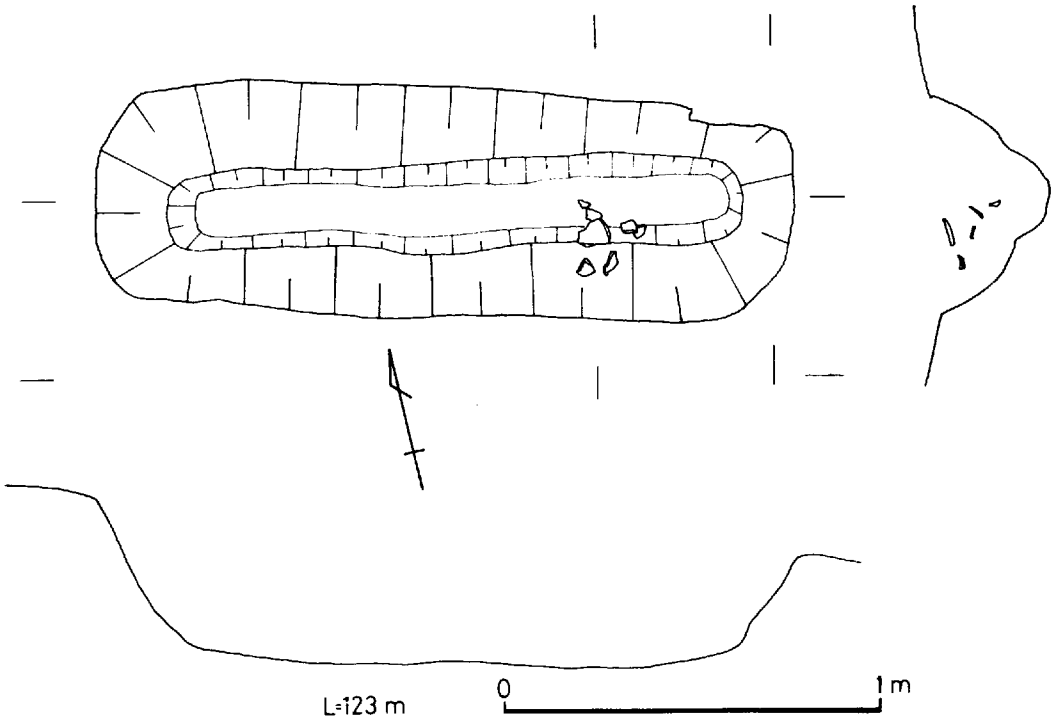
pit　4102

C地点の北東部に検出された長辺約4mの細長い土壙である。詳細不明。



220～221－4102
223～229－4301
230－4412
231－2025

第98図　土坑出土土器



第９９図　土坑墓3001平面図・断面図

＜出土遺物＞（第98図）

２２０は口径18cmを測る甕形土器の口縁部である。口縁部を水平近く曲げ，上下に拡張し，複合口縁をつくる。端面には４本の凹線を施こす。内面は横位の篦削りがみられる。

石粒を含み，脆弱である。色調は暗茶褐色を示す。

２２１は口径18cmを測る甕形土器の口縁部である。外反する口縁部を有し，端部を肥厚させ，複合口縁とする。端面には３本の凹線を施す。

焼成は堅緻である。色調は褐色を示す。

pit　１０４（第100図）

丘陵東端近くに検出された６個よりなる一群の袋状pit の内の１つで，もと住居址内H－28に存在したものが削平により住居址床面が削失したものと推察される。

＜出土遺物＞（第97図）

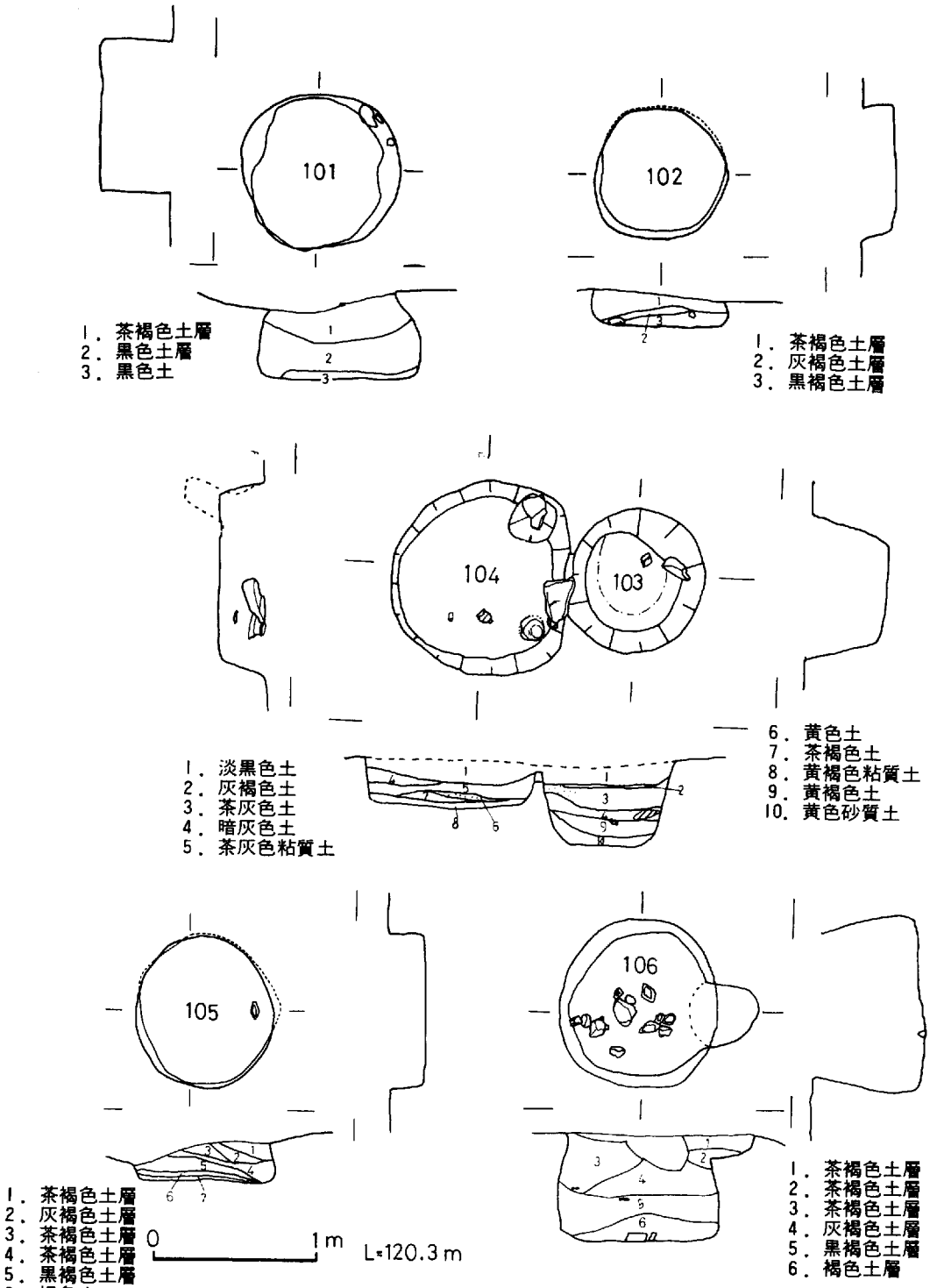
２１３は口径18cmを測る壷形土器である。外反する口縁部を外方に拡張し，複合口縁とす。頸部から肩部にかけて，凹線が施されている。

剥離が著しく，整形痕などは不明である。

石粒を多く含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

pit　４３０１

Ｃ地点の24号住居址の北側に検出した袋状をなす貯蔵穴である。南側が後世の掘り込みによって



第100図 Pit100～106　平面図・断面図

変形しているが，径1.6mの多角形をなすと思われる。底面に近い部分ではやや広がりをもち径2m前後を測る。上層の暗褐色土・褐色土中には大きい河原石が投げ込まれた状態で出土した。下層の褐色土からはピットの中央部分に土器，炭化材・焼土・石が混然とした状態で出土した。底面の中央に黄色粘土塊が貼られた状態で検出された。土器類には完形のものもあるが投げ込まれた状態で出土している。

＜出土遺物＞（第97図）

210は口径11.2cm・器高7.4cm・台径3.5cmを測る台付鉢形土器（手担）である。鉢部は縦位の篦状工具により整形され，鉢部と台部の接合部は指頭圧により整形される。内面は，横位の篦状工具による整形がみられる。

石粒を含み，焼成は良好である。色調は黄灰色を示す。

211は口径16.5cm・器高7.2cm・底径5.5cmを測る鉢形土器である。

外反する口縁を有し，端部は垂直に立ち上がる。

口縁部は横ナデによる整形をし，胴部は細い刷毛状工具により整形する。内面は横位の篦削りと，指頭圧による整形がみられる。

石英粒を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

212は口径11.9cm・器高9.9cm・底径3.9cmを測る甕形土器である。

外反する口縁部を有し，端部を上方に拡張する。剥離が著じるしく，整形痕などは不詳である。内面は横位の篦削りが認められる。焼成は良好。色調は灰褐色を示す。

214は口径25.7cmを測る壷形土器（特殊壷）である。

口縁部を水平近くまげ，その端部を上下に拡張し，端面に鋸歯文は，深く明確なタッチで描き，内部には傾線を充填さす。

器面の剥離が著しく，整形痕などの観察は出来なかった。

石粒を含み，焼成は脆弱である。色調は灰褐色を示す。

215は口径29cmを測る器台の口縁部である。端面には，波線状の凹線が7本施されている。

細砂を含み，焼成は良好である。色調は褐色を示す。

216は台径33cmを測る器台形土器の台部である。端部を上方に拡張し，屈曲する。

裾部には，細い刷毛状工具の整形をし，雑な鋸歯文を施文する。斜格子を施した後に，これら斜格子に用いた線より太目の沈線により区割をしている。

石粒を含み，焼成は良好である。色調は灰褐色を示す。

217は台径34.2cmを測る器台形土器の台部である。

端部は肥厚し，屈曲をさせる。肥厚部分には，横ナデによる凹みをつくり，端面も横ナデにより凹みをつくる。

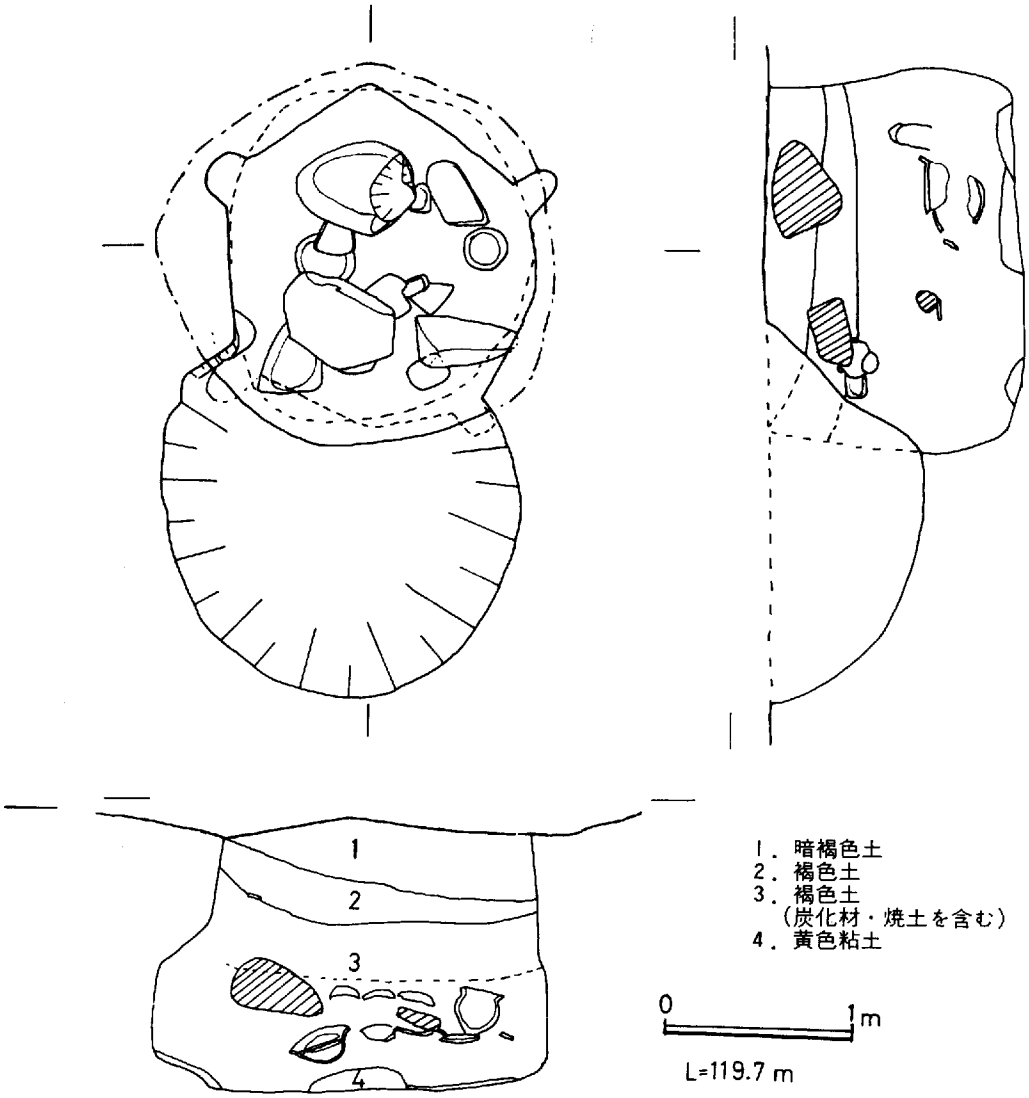
裾部には，深いタッチの山形文を施文し，内部に左下がりの傾線を充填させる。山形文から上は

凹線文を多条する。山形文は2個で1対となり，その間に長方形の透しを施す。

2 2 3 は口径12cm・器高23cm・底径6cmを測る壷形土器である。

口縁部は垂直に立ち上がり，やや開き気味になり，端部は変化をみせてない。胴部最大径は中位にあり，球形の均性のとれた胴部をつくり，平底の底部に移行する。

胴部下半から底部にかけて，縦位の箆削りがなされる。内面は，頸部から胴部中程にかけて右から左の横位の箆削りがなされ，胴部下半は縦位のサッ痕がみられる。



第101図　Pit 4301平面図・断面図

外面の胴部下半に，鋭い篦先による陰刻がなされているが，内容は不明である。

細砂を多く含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

224は口径16cmを測る甕形土器である。

外反する口縁部を有し，端部を上方に拡張する。

剥離が著しく，整形痕などの観察は出来なかった。

石粒・細砂を含み，焼成はややあまい。色調は暗茶褐色を示す。

225は口径15cmを測る甕形土器である。

「く」の字状に外反する口縁部を有し，端部を上下に拡張する。

剥離が著しく，整形痕など観察は出来なかった。

石粒を含み，焼成はややあまい。色調は灰茶褐色を示す。

226は脚径18cmを測る高坏形土器の裾部である。稜を附け，外方へ大きく開き，上下に円形の透しを設ける。破片の為，この透しの数は不明であるため，図化の位置は断面のみに止めた。

丹塗りがなされる。細砂を含み，焼成は良好である。色調は暗茶褐色を示す。

227は高坏形土器の脚部の破片である。

垂直にのびる脚部を持ち，裾部上方に円形の透しをうがつ。透しは2対1組であるため，等間隔で図示出来ない。

丹塗りがなされる。細砂を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

228は口径14.2cm・器高8.4cm・台径6cmを測る台付鉢形土器である。

内弯気味の深い鉢部を有するもので，「ハ」の字状に短かく開く台部が付くものである。鉢部の器壁は非常に薄い。

横位の荒い櫛状工具による整形のあと，縦位の篦磨きを行い，その整形痕を消す。内面は剥離のため不明である。

丹塗りがなされる。石粒を含み，焼成は良好である。色調は茶褐色を示す。

229は口径16cmを測る甕形土器である。

口縁端部を水平近く曲げ，上方に拡張し複合口縁をつくる。端面には，凹線状の沈線を2本施す。内面は頸部下半に横位の，胴部にかけて斜めの荒い櫛状工具による整形がなされる。

細砂を含み，焼成は良好である。色調は灰白色を示す。

pit 4401

建物6の南西角の柱穴より出土した遺物である。

＜出土遺物＞（第97図）

205－1は口径28cmを測る器台形土器である。

口縁端部を水平に屈曲させ，上下に拡張し，複合口縁にする。端面には鋸歯文を施し，内部に格子目文を充填する。

外面は縦位の荒い櫛状工具により整形され，内面は横位の，外面のそれと同様の工具による削りがみられる。細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は淡い褐色を示す。

205－2は口径16cmを測る甕形土器である。

「く」の字状に外反する口縁部を有し，端部を上下に拡張し複合口縁にする。

剥離が著しく，整形痕などの観察は出来なかったが，内面は箆削りがなされているようである。

石粒を多く含み，脆弱である。色調は褐色を示す。

218は口径31cmを測る器台形土器である。

口縁端部を上方に大きく拡張し，複合口縁をつくる。複合口縁部には，鋭く，明確なタッチの鋸歯文を施文し，内面に，左下がりと右下がりの斜線を充填する。 この鋸歯文の間には，2重の竹管による押圧が，又一部において，その一廻り小さい竹管が，それで施されている。これは3ケ所に確認され，他は施文されていないようである。複合口縁部の上端には刻み目が，下端には沈線が施される。

胴部以下は，破片がなく不明であるが，凹線を多条すると推定される。なお，鋸歯文は26，竹管文は26の単位がみられる。

丹塗りされる。細砂を多く含み，焼成は良好である。色調は明るい褐色を示す。

219は器台形土器の胴部から裾部への破片である。胴部中央に長方形の透しを施け，その両側に文様面を施けている。1面には，2重の竹管による押圧が2個平行して施けられ，その間を竹管文の上下端を結ぶことなく，斜め沈線を施こし,細組紐文状にしている。もう1面には，交互に方向を変えて沈線を施し，それぞれの斜線ごとに横位の沈線により区画をする。この文様帯の上下には，凹線を多条する。なお，この文様帯は，破片が片面の遺存であるため，他の2面の文様構成は不明である。

裾部にかけては山形文が施文され，内部に左下がりと右下がりの斜線を充填させる。

これら文様に用いられている沈線は，鋭く，明確である。

丹塗りが施される。細砂を含み，焼成は良好である。色調は明るい褐色を示す。

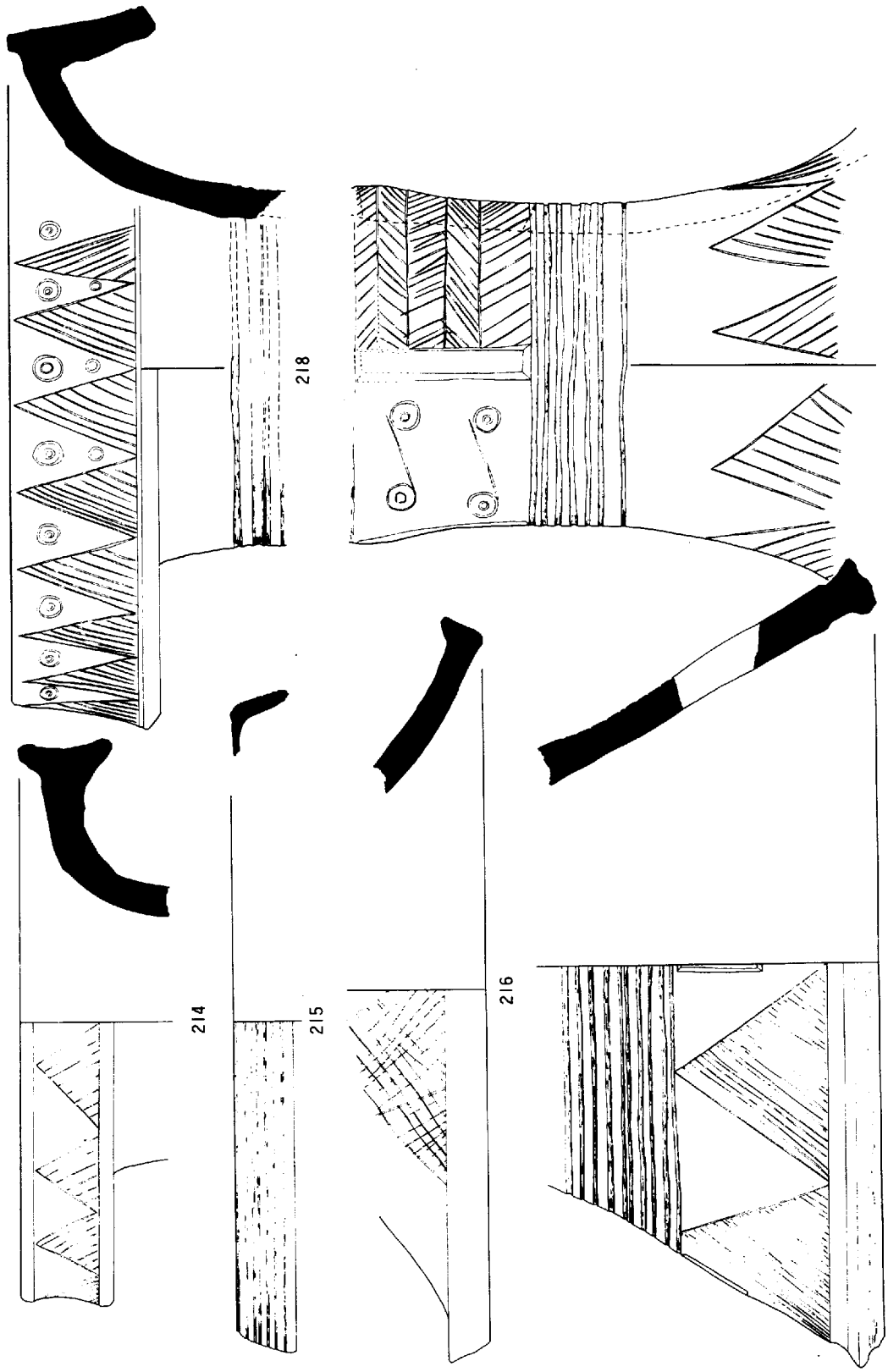
218と**219**は胎土・焼成とも類似しており，同一個体と考えられたが，口縁部の破片と胴部の破片の接合点はなく，さらに口縁部は胴部への移行の線が直線状に対し，胴部は外方に開く傾向が観察され，その径の接点は胴部の文様帯でしかないことになる。このようなことから，別個体として扱うことにした。

pit 4412

建物4に関係する柱穴である。2間×3間の建物の北列の内，西から2個目の古い柱穴内より出土した遺物である。

＜出土遺物＞（第98図）

230は脚径16cmを測る高坏形土器の脚部である。広く外方へ開く坏部を有すると推定されるも



第102図　土坑出土土器

ので，脚部は開き気味の長脚で，「ハ」の字状に低く開く裾部をつくる。外面は篦みがきがなされる。

円形の透しは４ケ所にうがつ。坏部と脚部との接合は，坏部を脚部にはめ込む。

丹塗りがなされる。細砂を含み，焼成は堅緻である。色調は赤褐色を示す。

その他の土壙

２００２　Ａ地点８号住居址の西に検出された不定形の浅い土壙である。河原石が中央部に多く検出されたが遺物をともなわないので時期は明らかでない。

２００４　Ａ地点　遺物はなく，詳細不明。

２００５　Ａ地点　９号墳の周湟によって西側が消失しているが，弥生時代前期の甕形土器が横転してつぶれた状態で出土した。

２０１４　Ａ地点中央部，土師器坏など出土した。

２０１６　Ａ地点　直径約50cm・深さ40cmの柱穴に弥生時代前期が落ち込んだ形で出土した。これらの他に性格・時期ともに不明の土壙を多数検出したが本報告に記載できなかった。

pit　２００８の注

注１　今井堯，渡辺健治「美作国河辺，高祖神社裏古墳出土の古式須恵器について」　貝塚第71号　１９５７

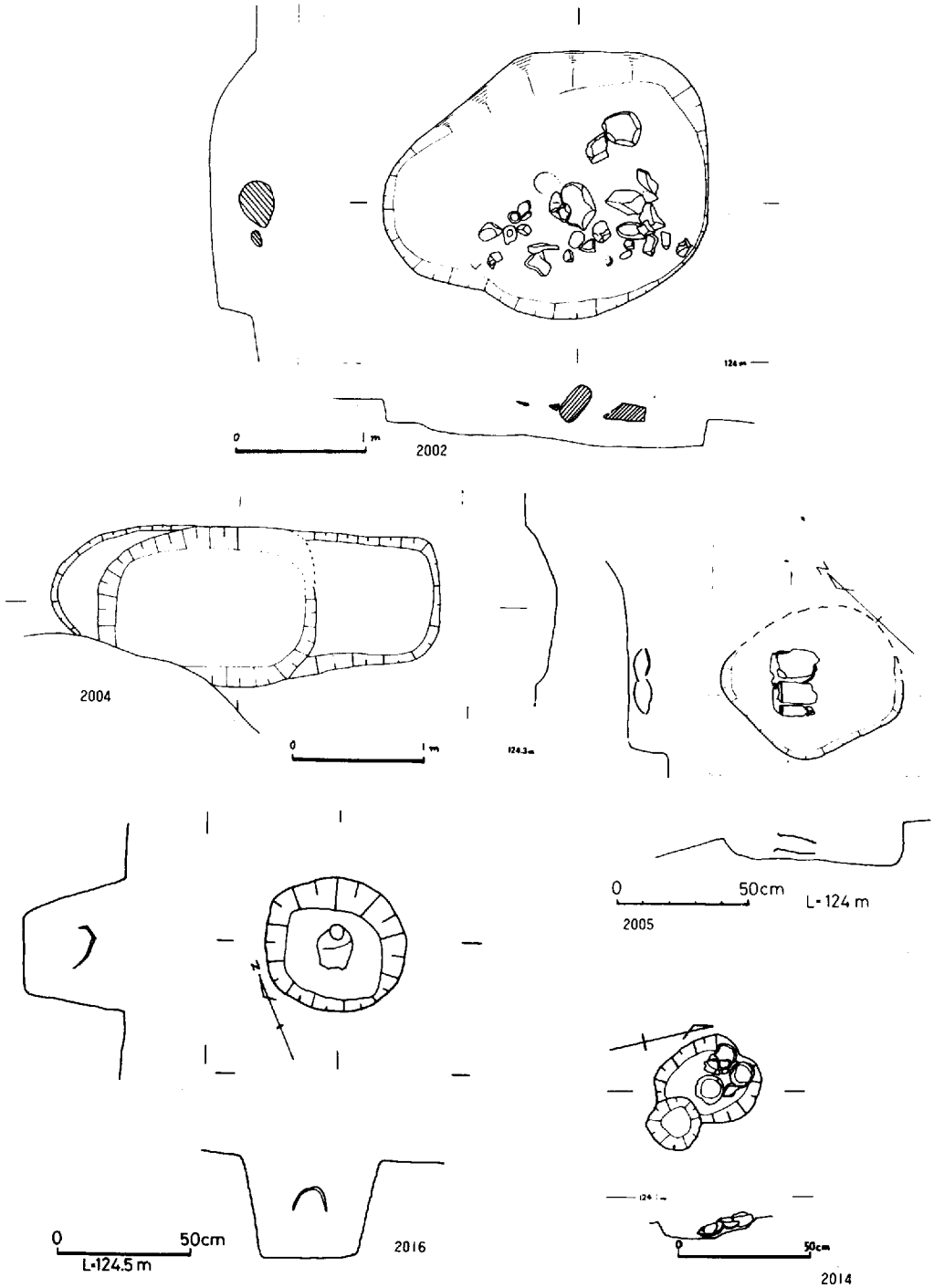
注２　今井堯，船津昭雄「美作久世町鍋屋遺跡」　古代吉備　第５集　１９６３

注３　今井堯「津山市史」　第１巻　原始，古代　１９６７

注４　注３に同じ

注５　西川宏「備前の古窯」古代の日本４　中国，四国　１９６５

注６　田辺昭三「陶邑古窯址群Ｉ」平安学園研究論集第10号　53頁　１９６６



第１０３図　主な土坑平面図・断面図

E. 古　　墳

9 号 墳

調査前の地表観察で，古墳と考えられ,9号墳とした。調査の結果，幅2～2.2m・深さ0.5～0.6mの周湟が検出された。直径10mの円墳の墳丘がほとんど削平されて，盛土は30cmを残すのみであった。

主体部の検出につとめたがすでに消平されており，盛土からは弥生式土器・サヌカイト剥片が多数出土した。旧地表土の黒色土が地山上面に厚さ15cmほど残っていた。

盛土が削平されているが，周湟内に石材などが落ち込んでいないので，内部主体は木棺直葬であった可能性がある。しかし，共伴遺物は皆無であった。

10 号 墳

A地点中央部の9号墳の西に位置する円墳で西側を削平されているが，直径約10cmを測る。墳丘はほとんど消失し，幅1.5～2mの皿状の周湟が半円形に残存していた。

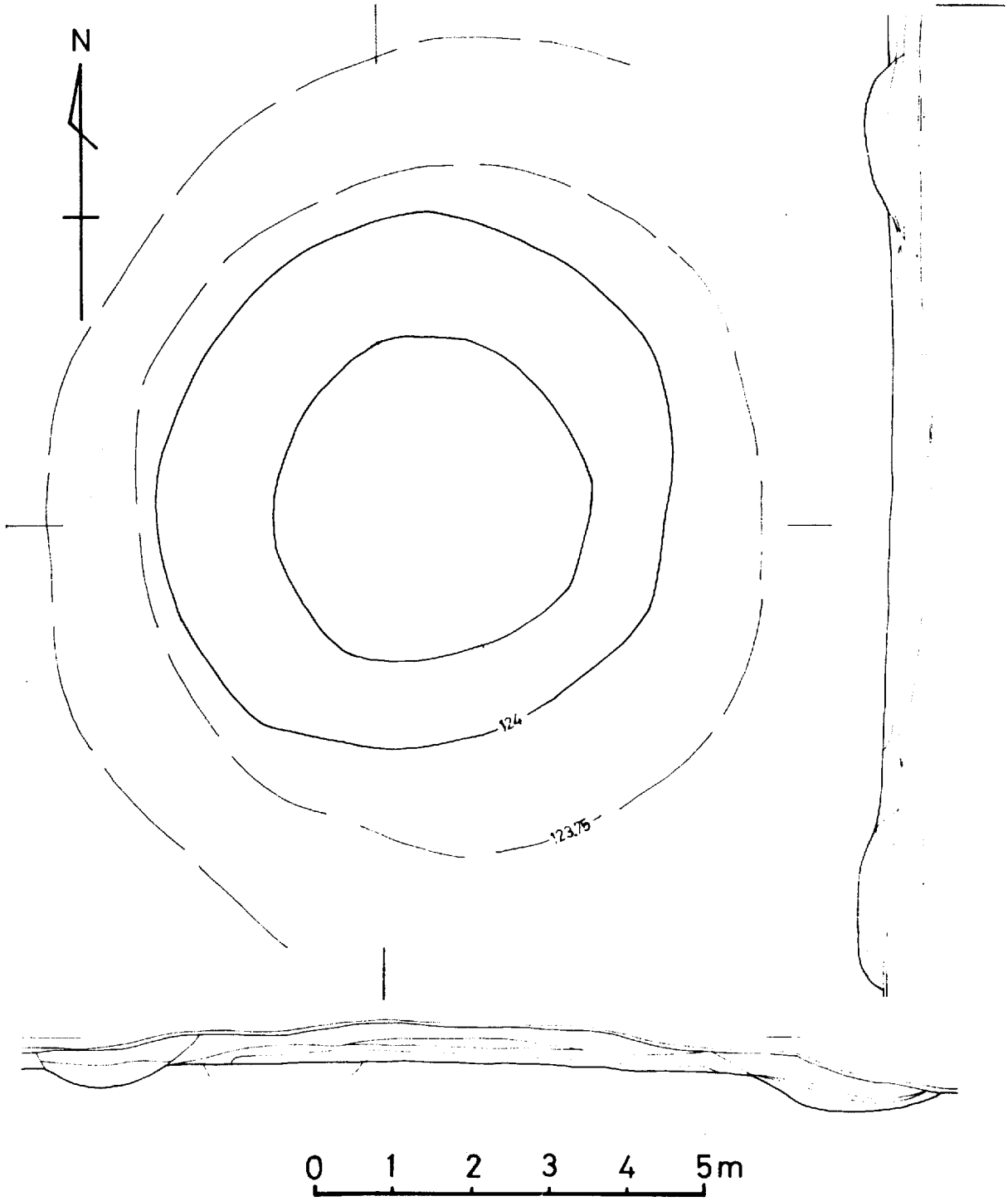
北側の周湟内のピット（2015）から，須恵器高坏，壺が出土した。このピットが10号墳の周湟に堀り込まれ，須恵器類が意識的に埋められた状態で出土しており，10号墳にともなうと考えられる。

内部主体は削平されて明らかでないが，周湟内に石材等も落ち込んでいないことから，木棺直葬であったと思われる。

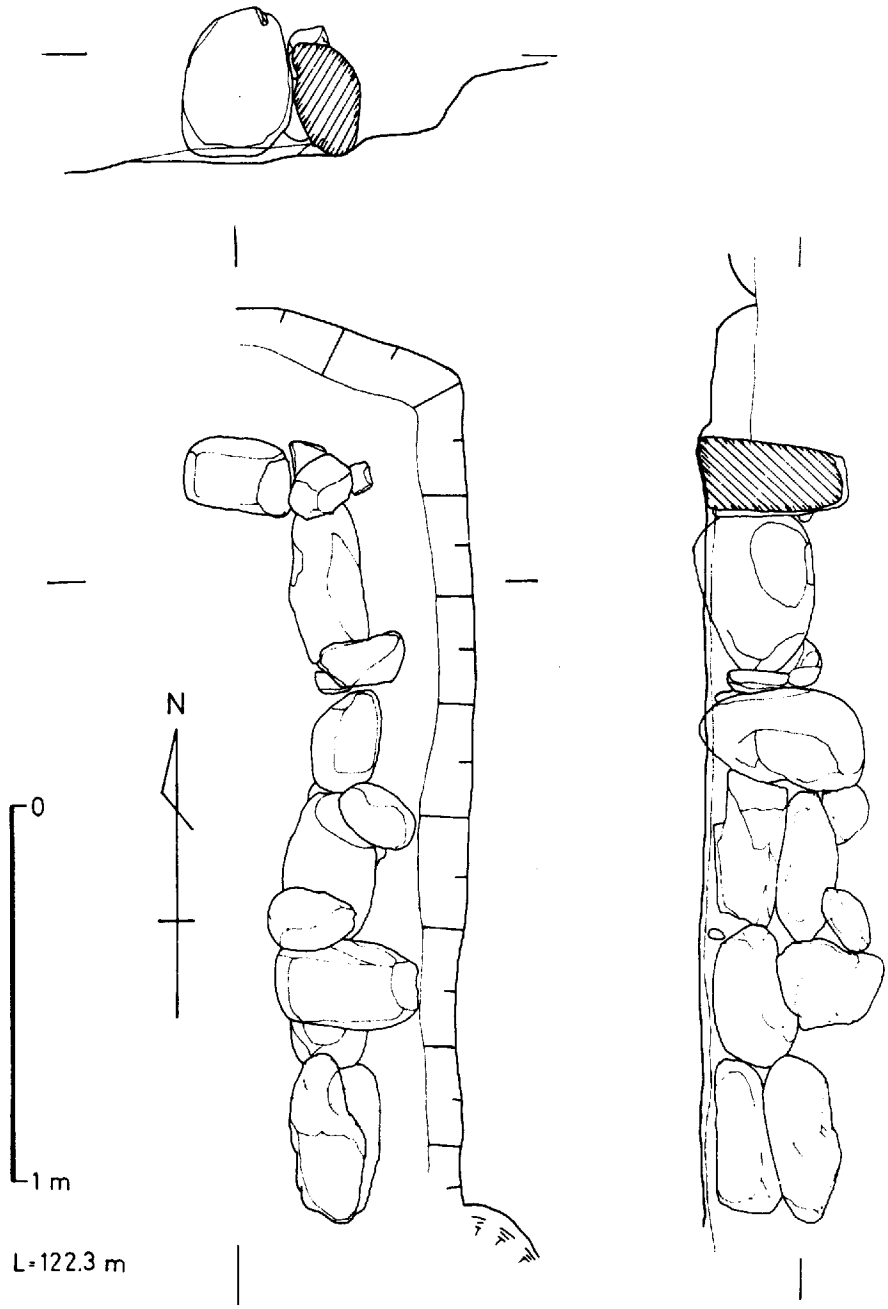
11 号 墳

A地点の斜面側に検出された小古墳である。開墾による削平を受け，墳丘および斜面側の側壁，天井石などは残存しない。河原石による石室構造は，小型ながら明らかに横穴式石室の形態をもっている。また，地山を15～20cm掘り込んだ，掘り方も検出されている。奥壁と考えられる根石は立てて使用され，側壁の残存する5個の根石のうち4個は，横口積みで使用されている。根石の1個だけは，立石として使用されているが，玄門を意識したものかもしれない。側壁は二段目からは，横口積み，小口積みの両方が見られるが，それは河原石の形状に左右されるものであろう。

遺物は須恵器坏蓋1出土している。石室の形態・規模からみて，終末期の古墳と考えられる。



第１０４図　９号墳平面図・断面図　Ｌ＝124cm



第１０５図　11号墳平面図・断面図

天満神社支群古墳一覧表

番号	墳形	直径（m）	高さ	内部主体	外部施設	遺物	調査
1	円	12	2	不明	なし		未調査
2	円	10	1	木棺直葬	周湟巾 1.5m		第一次
3	円	10	0.7	〃	〃	須恵器瓶・坏・蓋	第一次
4	円	8	1.2	〃	〃	青銅鏡	第一次
5	円	不明$\frac{3}{4}$破壊	不明	〃	不明		未調査
6	前方後円	30	4	不明	葺石		〃
7	円	20	1.5	〃			〃
8	円	10	1.5	横穴式石室			〃
9	円	10	不明	不明	周湟のみ残存 巾 1.5m	なし	第二次
10	円	10	不明	不明	周湟$\frac{1}{2}$残存 巾 1.5m	周湟内ピットより須恵器高坏・壺	〃
11	不明	不明	不明	小型横穴式石室	不明	須恵器坏	〃
12	円	不明	不明	不明	周湟$\frac{1}{2}$残存 巾 1.2m	なし	〃

F．弥生時代前期の土器

本遺跡で20数点の土器片が出土したが，Ａ地点の９号墳付近とＣ地点包含層から出土した以外にはない。２００５出土の甕形土器は土壙内につぶれた状態で出土した。口縁部はゆるく外反し，端部にきざみ目を施し，やや下に三条の沈線がめぐる。

（図－１）

Ａ地点２０１６の柱穴に底部を上にして落ち込んだ状態で出土した。器高15cmで口縁部がゆるく外反し，口縁部にきざみを施している。器壁は底部に下がるにしたがって厚く，輪づみの手法から指頭による内面調整されている。全体の約$\frac{1}{3}$を欠損している。

（図－３）はＣ地点の包含層から出土した。口縁部と底部を欠くが，三条の沈線が施されている。焼成は不良で脆弱な土器である。

（図－４）はＡ地点から出土した。口縁部は貼り付けにより逆Ｌ字形を呈する甕形土器で，シャープな沈線が二条施され，焼成が良い。

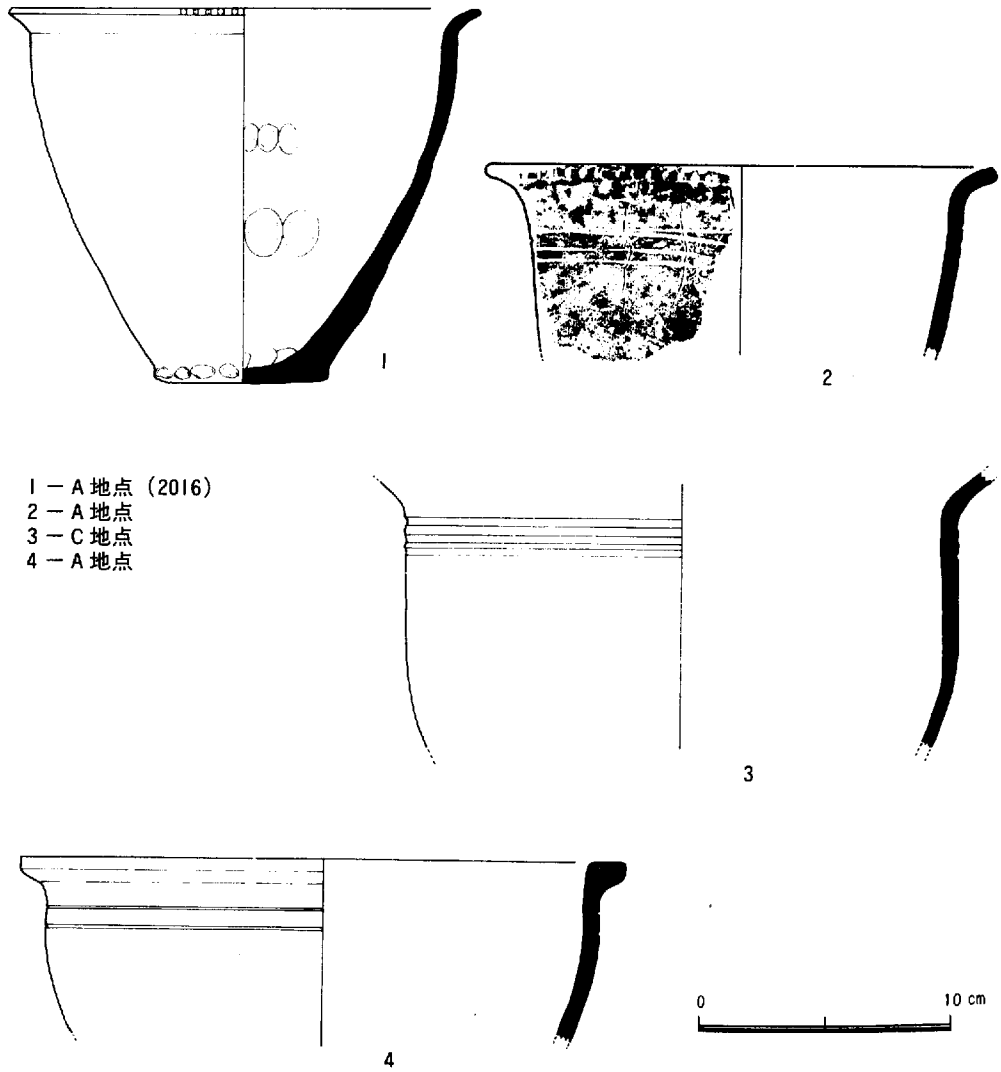
図の土器片はいづれも小片であるが，甕形土器と壺形土器である。

甕形土器は口縁部のきざみと沈線は一条～三条施されている。これらの二点だけは二条のヘラ描き沈線の間に刺突文が施されている。

壺形土器は四点出土しているうち，三点は肩部に２～３条の沈線を施し，外面はヘラ磨きである。肩はあまり張らず，最大径はあまり高くない。小片であるがヘラ描きによる木葉文がある。

これら弥生時代前期の甕形土器のうち，口縁部がにぶく外反し，端部に刻み目と口縁直下に一～三条のヘラ描き沈線を施したものは前期中葉に比定できると思われる。また，口縁部が貼りつけにより逆Ｌ字形をなすもの，口縁直下の沈線間に刺突文を施したもの，口縁端部に刻み目をもちながらも直角に外反し逆Ｌ字形をなすものなどは前期後葉に属すると思われる。

津山盆地において，一丁田遺跡（津山市山北）から前期後葉の土器片が出土している以外には全く出土していなかった。本遺跡は台地上には位置するが，一丁田遺跡は低い段丘上に位置する。今後の調査で低地を臨む台地上や低位の段丘上に弥生時代前期の遺跡が発見される可能性がある。

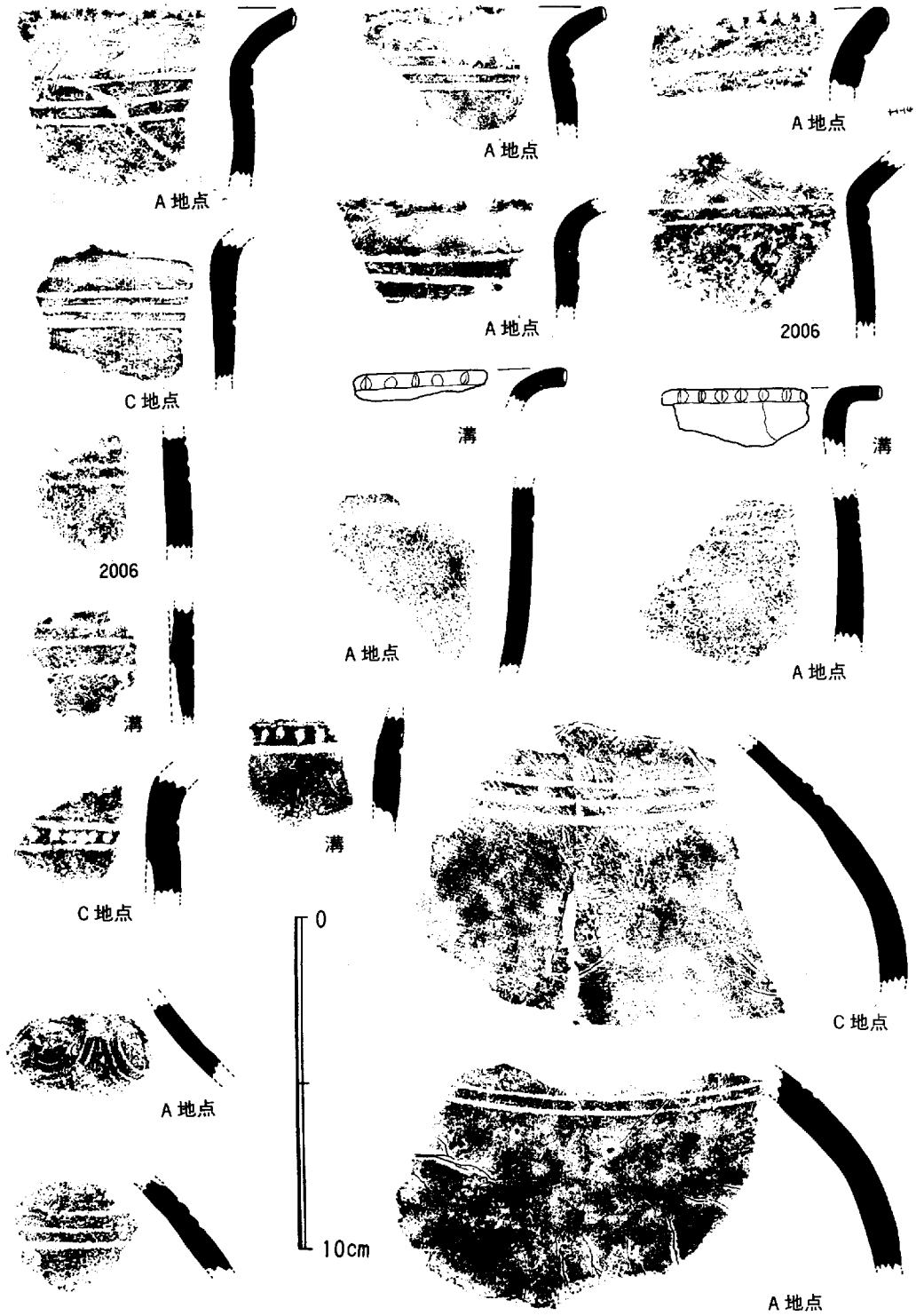


第106図　弥生前期の甕形土器

G．石　　器

ナイフ形石器

5号住居址の覆土中の遺物整理をした時に，たまたまみいだされたもので，本遺跡では唯一の先土器時代の遺物である。基部を欠損しているが，縦長の剥片を斜めに切断し，三角形に加工したもので，右刃の切出形石器である。打瘤痕は除去され，その打瘤痕の方を先端にしている。細部加工は刃の反対側にあたる左縁全体と，基部に近い右側半分に施されており，その断面は直角に近い急斜をしている。材質は黄白色で，一部茶色もみられ，チャートと思われる。長さ33.4mm，幅19.



第107図　弥生前期土器の拓影

3㎜，厚さ6.8㎜である。　（栗　野）

石鏃はすべてサヌカイト製で小型のものが多い。出土地点はA地点の中央部が最も多く，弥生前期の土器とその分布が重なる。住居址・土壙からの出土も埋土からのものが多く，確実に遺構に伴なうものは少ない。

石斧は16号住居址下層から出土した玲岩製である。刃部はかなり磨滅して鈍く，裏面が剥離し，現存長も約10cmの破片である。

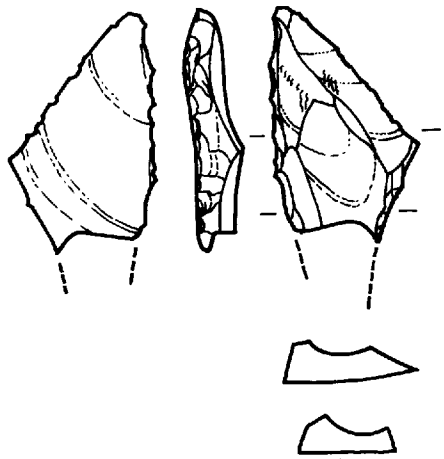
石包丁は12個中11個が頁岩製，変成岩製は1個である，遺構に伴っているものは2号住居址3号・5号・22号・23号・24号の各住居址の床面または壁溝から出土している。これらの住居址から出土する土器は弥生時代後期末葉と考えられ，石包丁が美作においてはこの時期まで使用されていたと考えられる。

石包丁の穿孔方法にはドリルを回転させて両側からの穿孔する方法が多く，孔の中央が最も小さくなる。（図110の1・2・3・4・5・6・7・8・9）

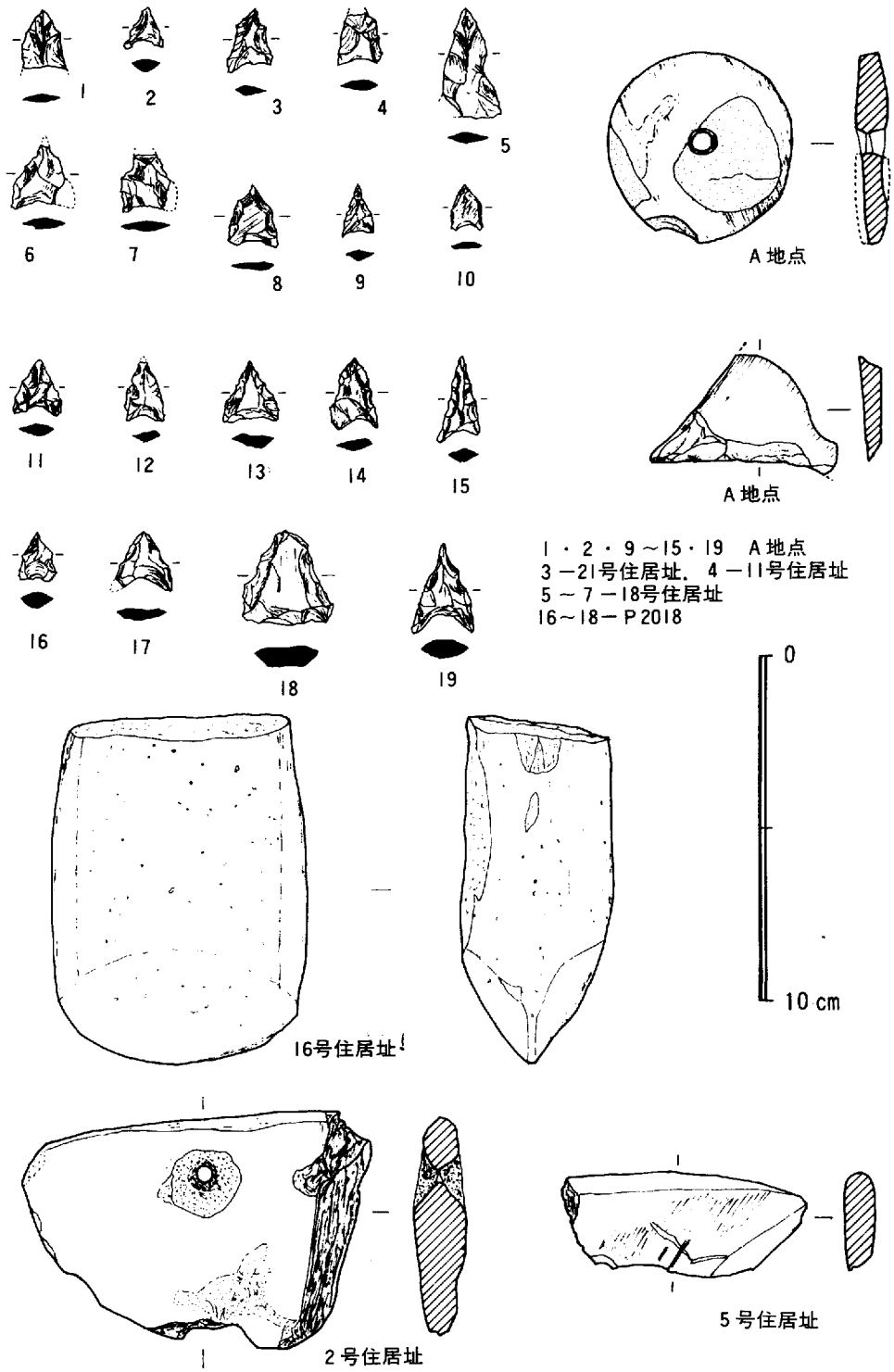
同じドリルの回転による穿孔でも，孔の断面形が円筒をなすものがある。（図110の5）

ところがこれらとは異なる穿孔方法で穿孔された石包丁が2号住居址から出土した（図109）これは細い鋭利なもので敲打して穿孔しているものである。

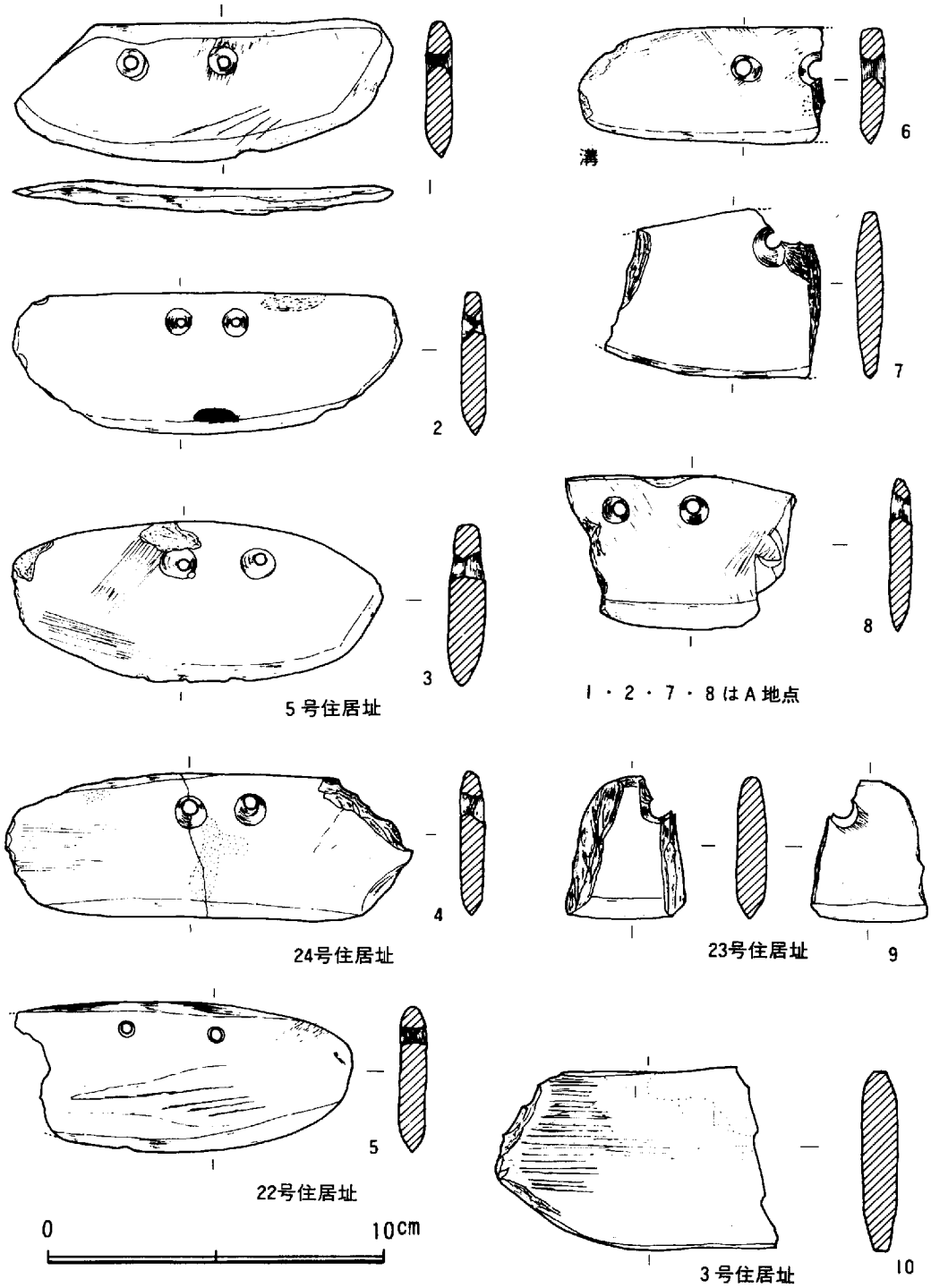
有孔円板（紡錘車？）は直径5.2cm・厚さ0.9cmで，中央に直径0.8cmの孔を穿っている。硬質砂岩製である。



第108図　5号住居址出土石器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
A地点
11
12
13
14
15
A地点
16
17
18
19
1・2・9～15・19　A地点
3－21号住居址，4－11号住居址
5～7－18号住居址
16～18－P2018
0
10 cm
16号住居址
2号住居址
5号住居址

第109図　石器実測図



第110図 石庖丁実測図

第6章　まとめにかえて

第1節　出土遺物について

ここで取扱う土器は，溝及び住居址出土のものである。個々の土器の内容については，第5章で説明を加えているので除き，両者の相対年代について述べる。

溝から出土した土器は，土器溜りからのものが主体を占める。溝の機能面，及び出土状態から観察すれば，溝の廃絶の時期に遺棄されたものと考えられる。しかしながら，各土器溜りの遺棄の時間の介在については不明である。

土器の器種は，壷形土器・甕形土器・高坏形土器・鉢形土器が存在する。壷形土器の出土は土器溜りNo.3からの1点のみである。これに対し，甕形土器の特徴的な手法と高坏形土器の器形の多様さが注目される。

甕形土器について，その特徴は下記のとおりまとめられる。

口　縁　部

* 凹線あるいは沈線を施すもの，また，丸く仕上げるもの。
* 端部を拡張し複合口縁にするもの。
* 口唇部をつまみ上げるもの。

器　　形

* 無花果状の胴部をもち，底部は尖り底なもの。
* 最大径は胴部上半に有り，肩は張らず，平底風の不安定な底部をもつもの。
* 最大径は胴部下半に有り，下脹状になる。底部は不明である。
* 最大径は胴部上半に有り，肩部は張りぎみに，平底風の不安定な底部に移行するもの。
* 凸状の底部を有するもの。
* 最大径は胴部上半近くに有り，卵形を呈し平底風の不安定な底部に移行する。

外　面　調　整

* 叩キの上から櫛状工具（註1）により整形されるもの。
* 叩キの上から刷毛状工具（註2）により整形されるもの。
* 叩キ（左下り）のみによるもの。
* 櫛状工具による整形後，篦工具により整形されるもの。

内　面　調　整

* 櫛状工具により整形されるもの。
* 篦工具により削り調整されるもの。
* 刷毛状工具及び櫛状工具により整形されるもの。
* 刷毛状工具及び篦工具により整形されるもの。

＊刷毛状工具により整形されるもの。

などが観察され，特に叩キの上から櫛状工具による手法を有する甕形土器は，各土器溜りに共通して存在している。また，144・145 などの小形の甕形土器にも同様な特徴が129の鉢形土器には，叩キこそみられないが，同様の櫛状工具により調整がなされている。

内面の特徴をみれば，125・127 の土器は篦削りがなされているが，刷毛状工具あるいは櫛状工具による整形は見られない。同様に109の土器の内面において刷毛状工具の上から篦工具による整形がなされているが，これらの土器は全体の比率からみれば，極くわずかであり，溝出土の土器の大部分は櫛状工具による調整が主体を占めている。

畿内では，北鳥池遺跡（註3）で，内面篦削りを有する甕形土器の出土が知られ（註4），従来の刷毛調整のそれと共存して出土している。しかしながら都出比呂志氏（註5）により述べられた，「連続ラセンタタキ手法」は145・121などのように二重になるものがあり，明確にそれと断定出来る資料はないが，122についてはその可能性がある。

又，兵庫県権現遺跡（註6）においても，叩キ目を刷毛で調整する手法をとる甕形土器が多量に出土している。他に小さく立ち上がった口縁端部に凹線を施しているものもみられる。

広島県横見廃寺（註7）出土の甕形土器は，口縁部をくの字状に外反し，端部を丸く仕上げるものが共通している。外面は平行叩キと推定されるものがみられ，内面は刷毛あるいは篦による整形がなされている。しかしながら7・9（註8）の如く内面が刷毛によるもの，8（註9）の外面は縦位の刷毛，内面は篦削りがみられるなど，調整の手段についての混在がみられる。

以上三遺跡にみられることは，天神原遺跡出土の甕形土器の内面における手法と外面口唇部について共通する要素がある。このようなことから，三遺跡と天神原遺跡とは時期的な共有関連があるものと考えられる。

高坏形土器は，土器溜りNo.3にみられるように器形の多様性が指適される。

高坏形土器の特徴は下記のとおりである。

坏　　部

稜をもたず上方へ広がる。

単純に外方へ広がるもの。

稜をもち，外方へ大きく開くもの。

外方へ強く反り，広がるもの。

稜をもち反り気味に外方へ広がるもの。

鉢状に開き，稜をもち外方へ広がるもの。

脚　　部

坏部から，ハの字状に開く裾部をつくるもの。

脚は筒状を呈し，ハの字状に高く開く裾をつくるもの。

脚は開き，高く広く開く裾へ移行し，裾端部は稜をもつもの。

脚は短かく，ハの字状に低く開く裾をつくるもの。

脚は短い筒状となるもの。脚は開き気味で，低く開く裾をつくるもの。

調整（内外面）坏部

篦磨きによるもの。

細い櫛状工具の後ち，篦磨きされるもの。

荒い櫛状工具の後ち，篦磨きされるもの。

調整（内外面）脚部

篦磨きされるもの。

縦位の篦削りの後ち，横位の篦磨きされるもの。

縦位の篦削りされるもの。

荒い櫛状工具の後ち，篦磨きされるもの。

などが観察される。坏部は，その器形こそ多様であるが，比較的一定の深さを保ち，酒津式（註10）にみられるそれと共通する。山陽新幹線の建設に伴って調査された上東遺跡（註11）においても同様の坏部に短脚部を有する高坏形土器が出土している。酒津あるいは新屋敷出土の脚部は，ややふくらみ気味で，裾部は低く広がる傾向を示している。又，上東遺跡出土の坏部は，屈曲部からの外反は比較的短かく，器壁が厚めである。これらが地域的な差として把握できうるものかどうかは疑問である。やはり地域的系譜の差としての形式として位置付けられるものと認識できよう。このことは岡山県津山市桃山遺跡（註12）出土の高坏形土器から推定できる。

溝の機能が消滅した以降に，人為的に置かれた土器は，142・143・176の3つである。142は口縁部⅓の破片，143は口縁部（全）の破片である。176は，ほぼ完形品である。

142・143のうち前者については，福市遺跡（註13），青木遺跡（註14）などにおいて見い出されるもので，後者についても，複合口縁部に波状文を施文するが，山陰地方には，この時期まで残されており，また，複合口縁の形態，さらには出土状態からして同一時期と推定して相違ないと考えられる。又，176については，2者と同時期かそれ以降と推定される。

住居址出土の土器において，叩キ目が観察されたのは，12号・17号址から出土した甕形土器の胴部上半と底部の破片である。12号址出土のものは，口縁端部に溝出土のと同様に凹線状の沈線を施こすが，端部の立ち上がりは認められず，胴部も球形に近い形態を呈している。

22号址と2号址のほぼ中央に位置する貯蔵穴群（第2節で述べているが,住居址と推定)の1つから，頸部に凹線を施す長頸壺が出土している。しかし12号址からは頸部の短い壺形土器が出土し，各住居址間における時期的な差が存在すると考えられる。

住居址の分布状態は，溝の存在する西斜面（A地点）と東側平担部（C地点を中心とする地域）に，それぞれまとまって占地する。A地点とC地点における土器について，その時期的な区分を明

確に位置づけるだけの豊富な資料は出土しなかった。

C地点は22号址と2号址のほぼ中央に位置する貯蔵穴群の1つから出土した壷形土器，23号址より出土した鋸歯文と竹管文の施文されている高坏形土器などが比較的古い時期にくると推定される。住居址の建換えを考慮すれば，やはりその出土状態から，頭初の時期と考えられる。

A地点は10号址の壷形土器，15号址の壷形土器・高坏形土器，さらには，器種の多種化からみれば，C地点より新らしくなると考えられる。このことは18号址の鉢形土器からも，より明らかであろう。

美作地方においては，備前南部さらには備中西部における弥生後期以降の編年作業が着実に前進して行くのに対し，現在弥生後期以降のそれについて，なされていないのが現状である。このような現状から，天神原遺跡出土の土器について，早急にその編年的位置付けを明らかにすることは困難である。このことを認識しつつも改ためて相対年代について検討を加えたい。

当遺跡において，住居址から出土した土器で最も古く位置付けられるのは1号址・13号址出土のものである。これらは備前南部及び備中西部の上東式の範疇として認識されるものである。本遺跡で主体を占める仮称天神原式（註15）は，これら土器とは形態・手法ともかなり時期的な差が有り，その間に型式差があるものと考えられる。

現在津山市教育委員会により発掘調査がなされている。大田十二社遺跡（註16）からは，明らかに2つの型式の存在が認められ，この2つの型式のいずれかに位置付けられるものと考えられる津山市桃山遺跡（註17）のいずれよりも古く位置付けられるものと考えられる。

このようなことから仮称天神原式は，従来美作地方で確認されなかった弥生時代後期末に比定される土器である。

第2節　集落について

天神原遺跡における竪穴住居址の分布状態は，西側の１２３ｍと１２２ｍの等高線に示される平担部と，東側では，１２０ｍ～１２１ｍの等高線上に存在する。（これらの分布状態からして，調査区の地点別から前者をＡ地点，後者をＣ地点とする。）

以下溝と関係する住居址について述べる。

Ａ地点における住居址の平面形態はつぎの通りである。

８号址―コーナーが丸味を持ち，張り気味の壁へ移行する。形の整った胴張り隅丸方形を呈する。

10号址―コーナーに丸味を持ち，壁は直線を示す隅丸方形を呈する。

11号址―コーナーは丸味を持ち，両壁が張る。コーナーの丸味が大きい為に胴張り隅丸方形を呈する。

12号址―東壁及び南壁は若干の丸味を持つコーナーから直線状の壁を示すが，西壁と北壁が張る為に不整形な形態を示す。

14号址―北壁から西壁にかけて胴張りの形態を示すが，他の壁は弧を描く不整形の形態を呈する。

15号址―３辺だけ確認されたが，コーナーは丸味を持たず，壁は直線状に張る胴張り方形を呈する。

16号址―胴張り隅丸方形を呈する。

17号址―隅丸長方形を呈する。

19号址―２度に渡り拡張が行なわれ，最新の形態は胴張り隅丸方形を呈するものと推定される。

以上がＡ地点における平面形態である。

柱穴は４本柱を基本とし，11号址，14号址，17号址は２本柱である。この３軒は面積的には他の住居址よりも小規模のものである。19号址は２回の拡張が確認され，５本―６本―６本という主柱穴で構成している。

建換えは，16号址が１回，19号址が２回認められる。16号址については，廃絶期における柱の抜き取りによる土溜りが，それぞれの柱穴の際に残されている。

中央穴は，周囲に凸帯を有するものが，10号址，12号址にみられる。掘り込みが三段になるものは，８号址・10号址・12号址・14号址・15号址・19号址で，段を有さないものは，16号址・17号址にみられる。14号址・12号址は方形の掘り方をもち，さらに円形の一段深り方を有するものが，形態的には整っている。

ベッド状遺構は，８号址・15号址・19号址に附設されている。貯蔵穴は，16号址の東―西柱穴間の中央に附設されている。

以上Ａ地点における住居址について略記してきたが，平面形態における方形への指向，規模での均一化，さらには平面形態での柱穴間の対応化などについて，住居址の定形化への方向が認められ

る。

C地点における住居址の平面形態はつぎの通りである。

2号址―東半分が削平により壁が削失する。胴張り隅丸方形を呈するものと推定される。

3号址―胴張り隅丸方形を呈する。

4号址―南壁を消失しているが，胴張り隅丸方形を呈するものと推定される。

5号址―胴張り隅丸方形を呈する。

21号址―南東コーナーが強く弧を描く，胴張り隅丸方形を呈する。

22号址―西壁から南壁にかけて，胴張り隅丸方形を呈するが，他の壁は強く張り不整形の楕円の形態を示す。

23号址―円形を呈する。

24号址―胴張り隅丸方形を呈する。

25号址―南辺が直線を示すが，他の辺及びコーナーは強く弧を描く，胴張り隅丸方形を呈する。

28号址―（22号址と2号址の中間に存在する貯蔵穴群）―他の住居址の位置関係及び北～東にかけ，等間隔に柱穴と推定されるＰｉｔが存在する。

各住居址の柱穴は4本と基本とするが，平面形態の関係から5本あるいは，最終拡張時には9本の主柱穴を有するものが存在する。2号址・5号址は2回，3号址・21号址・24号址がそれぞれ1回の拡張が認められる。中央穴はA地点のそれと相違し，4号址・5号址において，不整形ではあるが方形の明確な掘り込みを持つものが存在する。しかしながら，2号址・3号址・23号址・24号址においては，非常に不整形な皿状の凹みを呈するものが認められる。貯蔵穴は，2号址に3個，5号址に6個，24号址に1個，28号址に6個うがたれている。このようなことから，C地点の各住居址は，2号址・3号址・5号址・23号址・24号址・28号址の如く，胴張りの隅丸方形の平面形態を基調とし，数回の拡張と貯蔵穴の存在によって，その特徴が示される。

以上述べてきたように，A地点及びC地点における住居址が，平面形態・施設についての相違点が明らかになったと考えられる。この相違する様相が，同一時期におけるものなのか，あるいは，全く時期を隔たるものなのか，さらには集落を営なむ過程における継続した社会でのそれなのかについての判断は，最後の判断に導びかれる。

A地点及びC地点における住居址の時期差について，それを判断する資料となる土器の出土が少なく，最終的な結論を下せるものは検出されていない。しかしながら平面形態及び内部施設（例えば中央穴の定形化）からして，A地点の方形を基調とする住居址よりも早い時期に生活が営なまれたと考えられる。このことは，数度に旦る拡張の過程において，溝を掘削する外的条件が発生した為に，従来からの胴張り隅丸方形の平面形態からA地点に移動する時に方形を基調とする，あらたな住居址を構築したものと推定される。

生活の場がC地点からA地点にすべて移動したのではなく，C地点の貯蔵穴を有する住居址は，

それらを意識的に埋め，貼床をして使用したことが明らかになり，また，これら6軒以外にC地点には，21号址・25号址・22号址・4号址などの住居址が存在している。これらの住居址は，形態・内部施設から推察すれば，A地点の住居址とほぼ同一内容を示している。このことから，A地点において，方形の住居址が営なまれた時期においても，ある時期においては，6軒は他の地点の住居址と同様に同時に生活を営なんでいたと考えられる。

これら住居址が，この地を放棄した時期を示す住居址は，8号址及び15号址におけるベッド状遺構の存在と出土遺物である。8号址は，胴張りに，15号址は，方形の平面形態にそれぞれベッド状遺構が附設されている。又，他の住居址と比較して，新しい要素を有する土器が出土していることなどからして，これらの住居址が下限を示すものとして把握したい。

以上述べてきた住居址は，西斜面に穿たれている溝とともに，その社会的背景について若干の考察を加えておきたい。

天神原遺跡において最初に集落を形成したのはC地点の貯蔵穴を有する住居址群である。この住居址群は，23号址－24号址－3号址－28号址－5号址－2号址によって形成される。この住居址により形成される集団は，数回の拡張を繰り返している。特に円形に集団を構成する住居址の中央に位置する23号址は，頭初は4本柱のものであったのが，4回の拡張をし，最終的には，81.6㎡を有する最大規模の住居址となる。他の住居址についても同様に，1回から2回に亘って拡張が見られることからして，特定の住居址に限定された形で拡張がなされていないことがうかがえる。しかしながら，住居址の位置及び規模において際立っている。

23号址の位置は前述1如く，強い胴張りを有する平面形態により構成される集団の中央にあり，すでに，この丘陵に生活を営なむために占地した時点から特定の役割を持っていたと考えられる。このことを明らかにするには，この集団を構成する個々の住居址の位置付けが問題となる。5号址は，2回の拡張がなされている。拡張の順に5A，5B，5Cと呼ぶ。最初に建てられた5A号址は，すでに7・10・12の3個の楕円状の小形の貯蔵穴を有している。次に，5B号址に拡張されたときにあらためて，前の3個とは別に，8・9・11の3個の隅丸長方形の大形の貯蔵穴を設けさせている。最後の拡張の時には，これら6個の貯蔵穴を埋め，さらにその上に貼床をして生活の場として使用しているのである。この拡張の過程をみてゆくと，拡張に伴なう面積の増大ではなく，貯蔵穴を設ける必要のために拡張がおこなわれたことが理解できるのである。したがって，24号址に存在する1個の貯蔵穴の意味とは，おのずから異なってくる。

5号址の貯蔵穴は，集団に直接関わる収穫物に対して，収穫物を構成員個々が保持するのではなく，5号址に示される形での共同による保有がなされたと考えられるのである。従がって23号址の大規模な面積を有するまでの拡張の連続は，集団を構成する居住員の増加に伴なうものとして把握されるであろう。

3号址・23号址・24号址にみられる拡張の継続は，共同体において比較的安定を保っていたことが

知られる。C地点において，胴張りの強い平面形態を有し，中央穴の明確な掘り方をしていなかったのが，A地点に改たに住居址を構えだすと，方形の平面形態を基調とし，中央穴も明確な掘り方を示すようになる。このことは，防禦施設の設定による新たな共同体の規制に伴なうものと考えられる。住居規模の一定化の傾向も，共同体における構成集団としての位置付けをより明確化させる契機ともなったと推定される。

A地点の住居址群は，17号址の壁外溝が16号址の埋土中に存在，16号址・17号址及び19号址の住居址間の距離，さらには住居址構築の時期のずれからも，その実数は調査検出されたものよりも少なくなる。8号址・9号址・10号址・11号址・12号址・14号址・15号址・19号址は，8号址の如く出土遺物において比較的新しいものを出土し，又，15号址の明確な方形の平面形態にベッド状遺構が附設されるように，時期的に若干の差を有することが知られるが，中央穴に空間を有して集落を構成することは，外的な要因により一段と明確な姿で，個々の集団の自立をうながしたものとして考えられる。

19号址はC地点における23号址と同様に，規模，16号址以外に建替えがなされていないのに対し，2回〜3回の建替えがなされ，ベッド状遺構も附設されるなど際立っている。特に手焙形土器の出土は，23号址と異なり特定の意味を有する住居址として考えられる。その意味するところは，共同体の再構成に伴なう祭祀の強化と構成員との階層的関係をより現象的に示す住居址といえよう。

C地点からA地点に住居址の移動を述べたが，移動がなされた後ちにもC地点においては，2号址・3号址・5号址・23号址・24号址・28号址もやはり継続している。5号址の6個の貯蔵穴を埋めた後，床面をつくる時に，他の住居址にみられるような壁外溝を明瞭ではないが設け住居址として使用している。又，A地点の住居址と同時期と考えられる21号址・25号址・22号址・4号址が新たに構築されながら継続していないものと考えられる。

天神原遺跡の集落は，吉井川と加茂川が合流して形成された沖積地を前面に有する恵まれた生産基盤を背景としている。しかしながら，この地は伯耆国西部，ならびに出雲国東部に貫ける交通の要所であり，共同体間における政治的影響をうけやすい占地条件である。このことが防禦施設をともなう集落を形成しなければならない必然的要因の一つと考えられるのである。かつまた，こうしたことがより広い範囲の集団間の共同体の再構成により共同体における個有の血縁的基盤をより強化したことを物語っている。この強化は，共同体が拡大をしてゆく為の基礎構成となるべきものであり，構成集団がすなわち，強い血縁的凝集として成り立っていたことがいえる。この単位集団が生産活動における自立した生産集団として質的変化を遂げうるのは，共同体における階級分化がなされてからであろう。

天神原遺跡の集落もこのような移動期の所産であったことがいえる。この再構成がなされることにより，古墳時代への自律的変革が始まるのである。

第3節　土壙墓について

天神原遺跡における土壙墓は，先に記したとおり弥生時代から古墳時代にわたり所在するが，ここでは弥生後期中葉に視点をおいて考察を加えたい。

この弥生後期中葉に比定される土壙墓はpit２００１，pit２０１０，pit２０１８である。pit２００１，pit２０１０は楕円形の平面形態を呈し，非常に深い土壙である。他，pit２０１０はその下部に箱形土壙を設ける特徴をもっている。さらに，三者の共通した点は，上面に河原石を集石している点にある。上面に土器を混入する土壙の混入状況は，完形となる土器が１個体もないということは，埋葬時点において，初めて供献されたものでないことを物語っている。即ち，２次的な葬送行為を示すものではなかろうか。また，これらの土器は器台１をのぞいて他は全て日常に使用される壷，甕等である。このことは，日常生活に用いられる土器と葬送儀礼用の土器との明確な意識による土器形態の未分離として把握されるものである。

さて，これら土壙墓に伴う住居址は，１号住居址・13号住居址の２軒のみで他の住居址の全てはこれら土壙墓より新しい時期のものである。この２軒の住居址は兵陵東端と西端にそれぞれ１軒づつ所在し，しかも，この間隔は１７５ｍという非常に離れた位置関係にあること，かつまた，検出された住居址がいずれも斜面にかつる位置ににみられることは，もと丘陵平担部に所在していたものが削平消失されたことを推察せしめる。

このようなことが考えられるならば，集落と墓が同一平面上に所在したといえる。

即ち，天神原遺跡におけるこの時期の土壙墓は，集落により接して所在していることは，単一の共同体による土壙墓として把握されるものである。（註18）

第4節　古墳について

調査地区内に３基の古墳が知られていたが調査の結果，さらに４基の古墳を検出し合計７基を調査した。したがって，井の口古墳群・天満神社支群は12基以上の古墳で構成されていることが明らかになった。

しかし，これらの古墳はすべて同時期ではなく，規模・共伴遺物などから，２号・３号・４号・９号・10号・12号墳はほぼ同時期とわれる。いずれも直径10ｍ前後，高さも１ｍ以下の小規模な円墳で，２号・３号・４号墳では内部主体は木棺直葬であり，墳丘が削平され，周湟のみを残す９号・10号・12号墳は内部主体が木棺直葬であった可能性がある。これらの築造年代については３号墳周湟出土の須恵器線，坏身・坏蓋は６世紀初めと考えて大過はないと思われる。また，10号墳周湟内（２０１５）出土の須恵器線・高坏・壷もこれに近い時期と思われる。

天満神社支群のうち，１号・５号・６号・７号墳は地表観察から横穴式石室をもたない古墳であることは明らかで，美作において横穴式石室の採用が６世紀前半と考えれば，これらの古墳が横穴

式石室採用直前の群集墳と考えることができよう。

11号墳は限化した小型の横穴式石室墳で７世紀代の須恵器坏蓋１が出土した。天満神社支群では８号墳とともに主系列よりはなれ，時期的にもかなりおくれるものであろう。

古墳以外の遺構については土壙墓２００８・２００９・３００１がある。２００８は須恵器甕・高坏・土師器椀・壷が出土している。須恵器は美作地方で最も古い型式といわれる津山市日上高祖神社裏古墳出土のものと同時期と考えられ，５世紀後半に比定できる。

２００９は直径５ｍの円形周溝遺構で溝中より土師器甕が出土している。規模が小さいこと，周溝の幅が狭ますぎることなどから削平された古墳とは考えられない。周溝内出土の土師器甕は置かれた状態であったことはこの遺構の祭祀的性格をうかがわせる。

参　考　文　献

註１　条の中に更に細い条を持つものをいう。

註２　一般的に用いられている沈線の太い，細いということではなく，註１に対し細い条線を持たないものをいう。

註３　荻田昭次　「北島池遺跡」大阪府立花園高等学校地歴部五周年記念『河内古代遺跡の研究』１９７０年６月

註４　都出比呂志氏は「古墳出現前夜の集団関係」の中で，内面篦削りの出現を北島池遺跡下層式の次にくる上田町Ｉ式にそれを求めている。しかしながら註３の報告書においては，内面の篦削りの存在が記述されている。この篦の使用が，本来の篦削りと異質なものとして考えておられ，このことから次の上田町Ｉ式にそれを求めたかについての内容説明がなされておらず不明である。従って，ここでは報告書に従いたい。

註５　都出比呂志　「古墳出現前夜の集団関係」　考古学研究　第20巻第４号１９７４年３月

註６　兵庫県社会文化協会　「播磨・権現遺跡」ー兵庫県姫路市権現遺跡調査概報ー１９７２年３月

註７　広島県教育委員会　「安芸横見廃寺の調査Ⅱ」　１９７３年３月

註８　広島県教育委員会　「安芸横見廃寺の調査Ⅱ」　27ページ，第15図　１９７３年３月

註９　註５に同じ

註10　間壁忠彦　「倉敷市酒津及新屋敷遺跡出土の土器」　瀬戸内考古学第２号　１９５８年３月
鎌木義昌　「岡山県倉敷市酒津遺跡の土器」・「岡山県倉敷市西阿知町新屋敷遺跡の土器」弥生式土器集式Ｉ　１９５８年11月

註11　岡山県教育委員会　「上東遺跡」　山陽新幹線建設に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書　１９７３年３月

註12　河本清　「津山市桃山作陽高等学校弥生時代竪穴群」　古代吉備　第５集　１９６３年５月

註13　山陰考古学研究所記録第１　「福市遺跡の研究」　１９６９年３月

註14　米子市教育委員会・青木遺跡市道調査団「米子市青木遺跡市道予定発掘調査概報」　１９７４年３月

註15　住居址及び溝の土器を示すが，溝土器溜りの甕形土器・高坏形土器について地域的な広がり，セット関係が明らかになれば，型式として取り扱いたい。

註16　津山市教育委員会による。

註17　註11に同じ

註18　津山市上原遺・同外道山遺は，弥生後期末の土壙墓群である。これらの土壙墓は集落とは隔絶した丘陵上に立地している。このことはこの時期になるともはや単一集団の墓でないことを示すものであろう。

「津山市上横野，上原遺跡の調査から」美作考古学研究会，近藤義郎氏発表要旨より

御船恭平「美作における弥生時代の墳墓について」古代学研究21・22合併号

近藤義郎　「弥生文化の発達と社会関係の変化」日本の考古学Ⅲ　４５７頁・４５８頁

遺跡遠景　　（西低地より）

遺跡遠景　　（東丘陵より）

図版 2

C地点　　（西より）

A地点谷・D地点　　（東より）

A地点トレンチ　　（南より）

A地点トレンチ　　（西より）

図版 4

2号墳全景　　（北より）

2号墳主体　　（西より）

4号墳・3号墳全景　　（西より）

3号墳・4号墳全景　　（南より）

図版 6

3号墳全景　　（北より）

3号墳主体　　（南より）

4 号墳全景　　（南より）

4 号墳　鏡出土状況

図版 8

4 号墳主体　　（南より）

A 地点溝検出状況　　（東より）

A 地点　　（南より）

A 地点溝遠景　　（西より）

図版10

A地点　　（北より）

A地点東半部　　（北より）

A地点　　（南より）

C地点北半部　　（西より）

図版12

C地点南半部　　（西より）

C地点　　（西より）

E地点 101－106検出状況　　（北より）

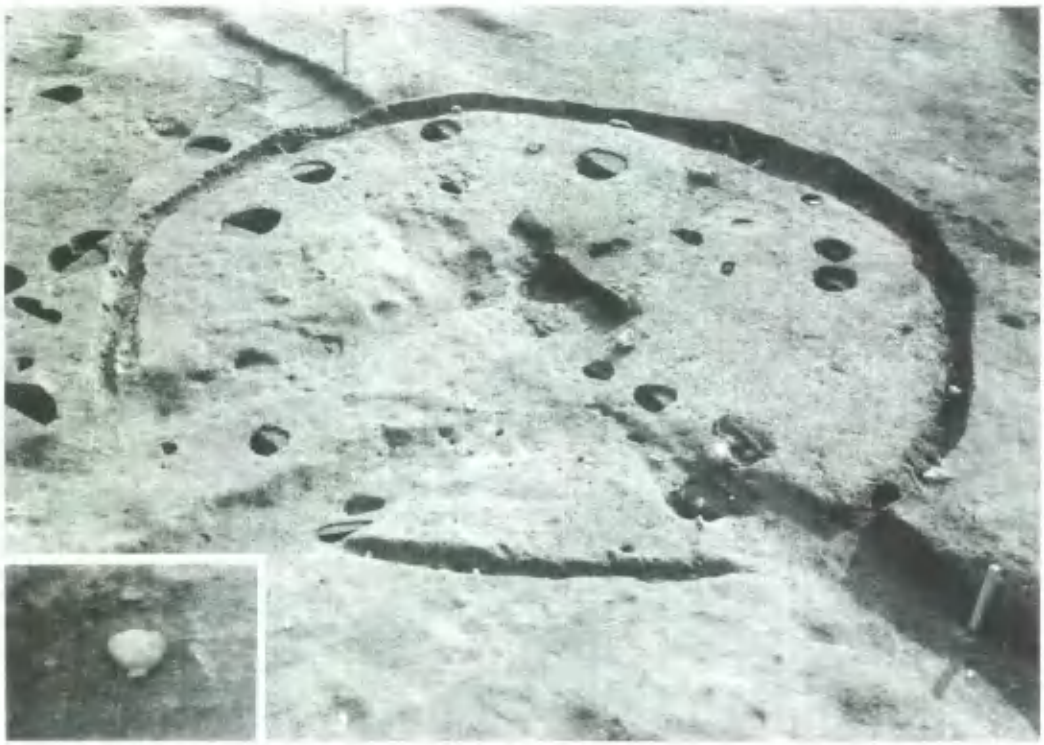
F地点柱穴と5号住居址　　（東より）

図版14

1号住居址遺物検出状況　　（北より）

1号住居址　　（北より）

2号住居址　　（東より）



3号住居址　　（北より）

図版16

3号住居址　　（北より）

4号・5号住居址　　（東より）

4号住居址　　（東より）

5号住居址　　（北より）

図版18

6号住居址　　（北より）

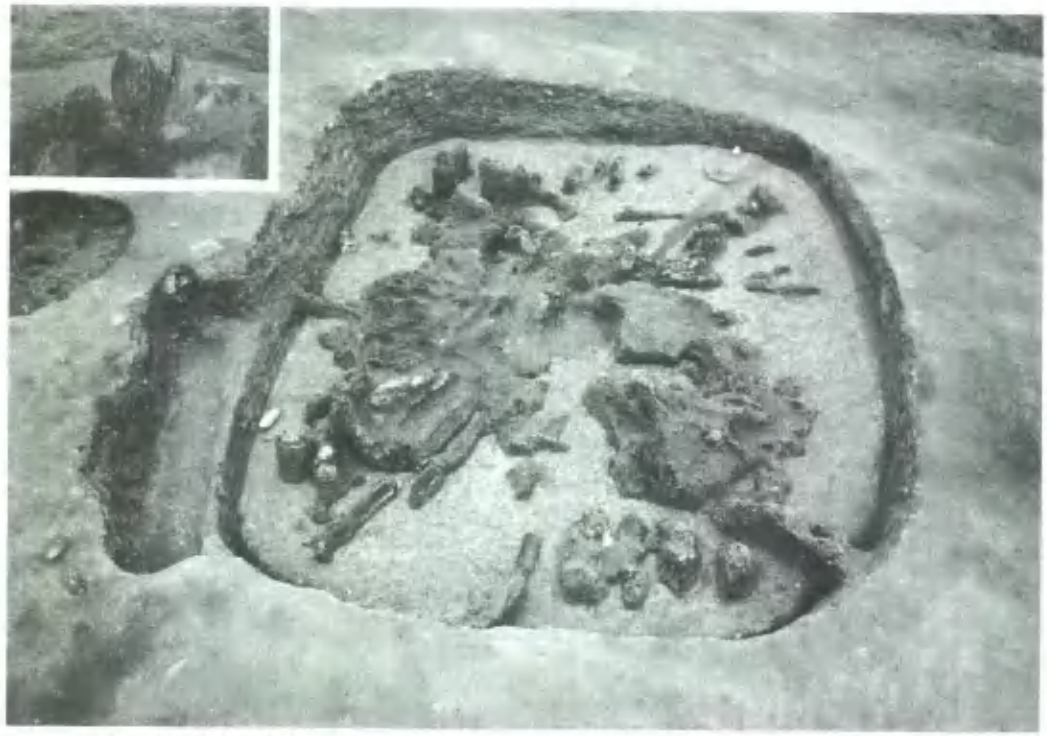
7号住居址　　（北より）

8号住居址　　（西より）

9号住居址　　（南より）

10号住居址　　（西より）

11号住居址　　（西より）



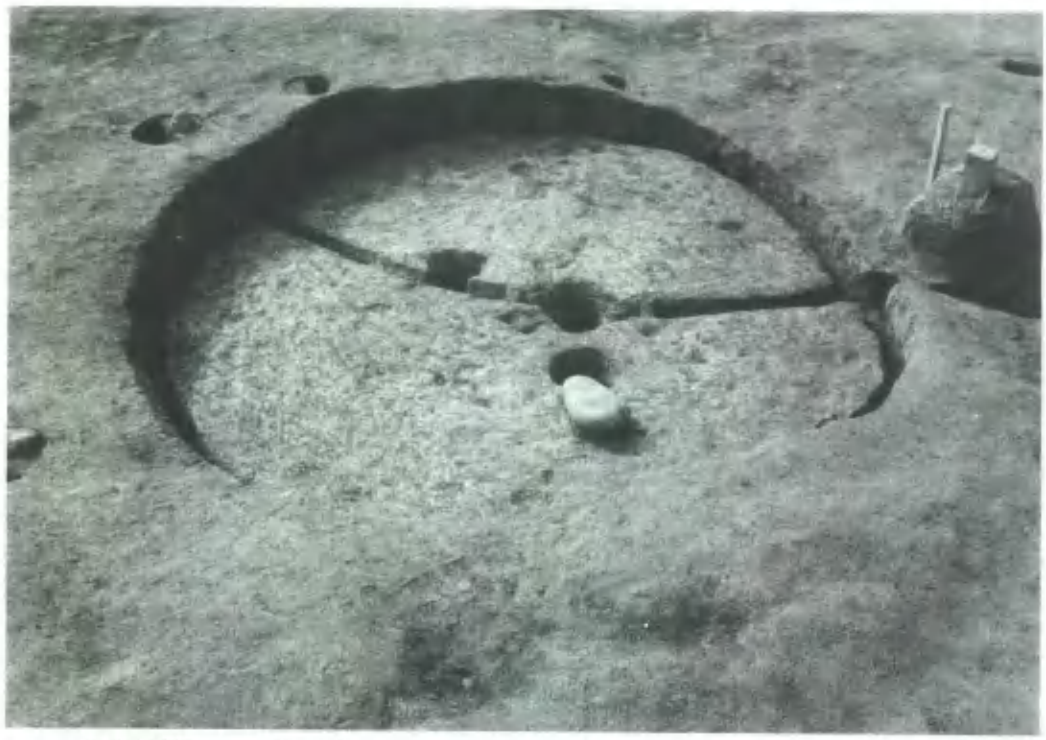
12号住居址炭化材検出状況　（北より）

12号住居址

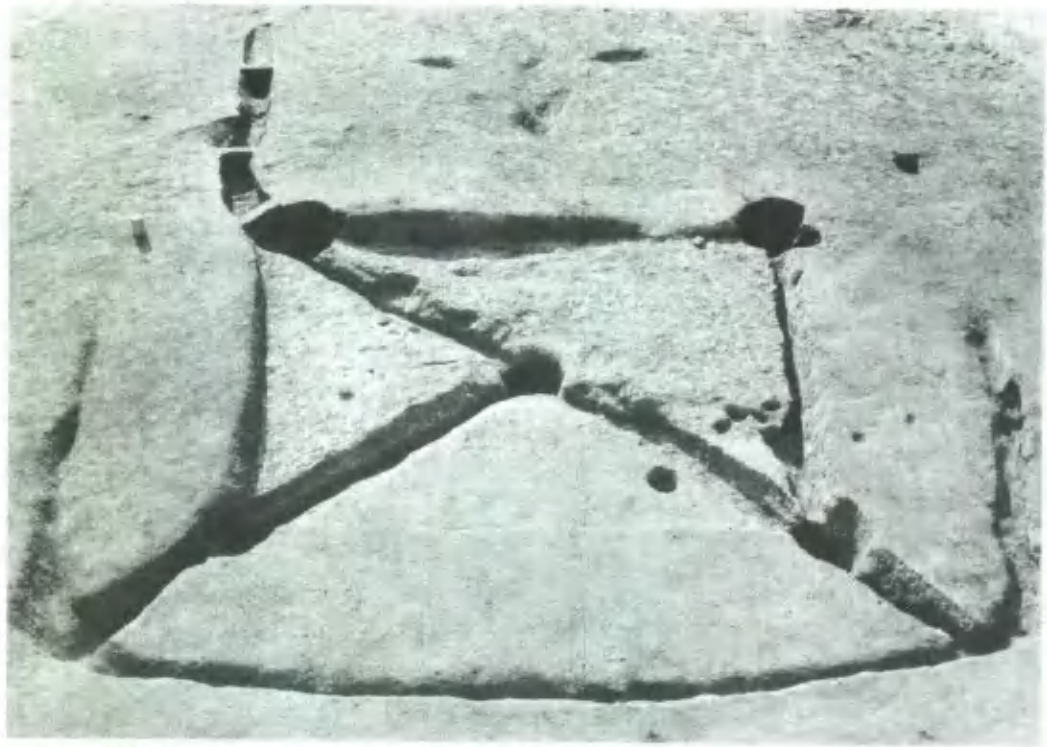
図版22

13号住居址　　（北より）

14号住居址　　（北より）



14号住居址　　（北より）



15号住居址　　（東より）

図版24

15号住居址高杯出土状況

15号住居址土器出土状況

ピット　　16号住居址　　（南より）

17号住居址炭化材出土状況　　（北より）

図版26

19号住居址　　（南より）

19号住居址　　（南より）

18号住居址　　（東より）

22号住居址　　（西より）

図版28

20号(右)21号(左)住居址　　(南より)

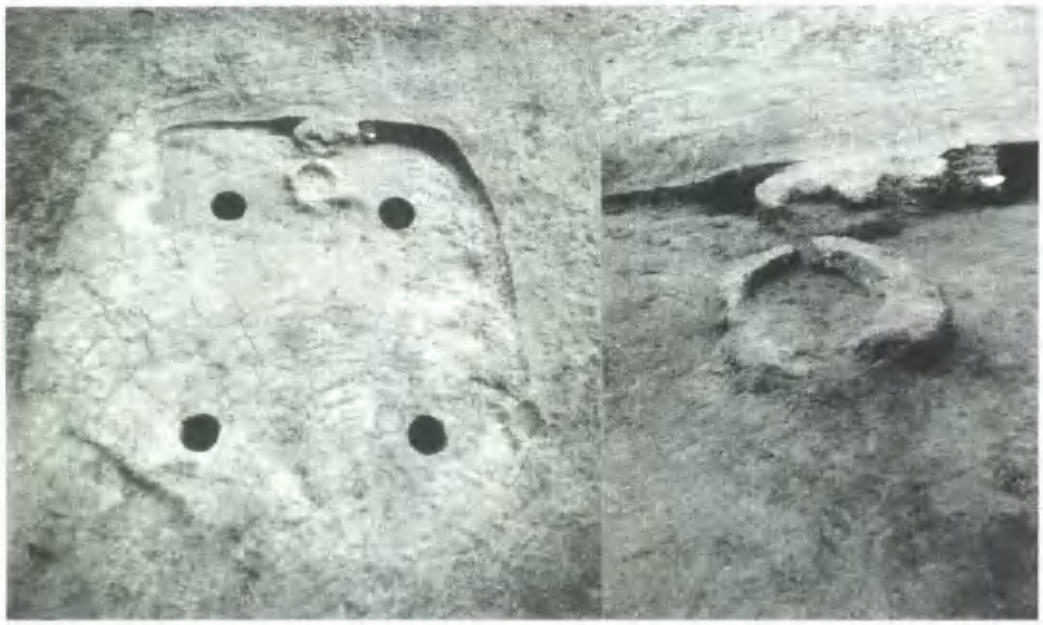
20号住居址　鍛冶炉

23号住居址　　（西より）

24号住居址　　（西より）

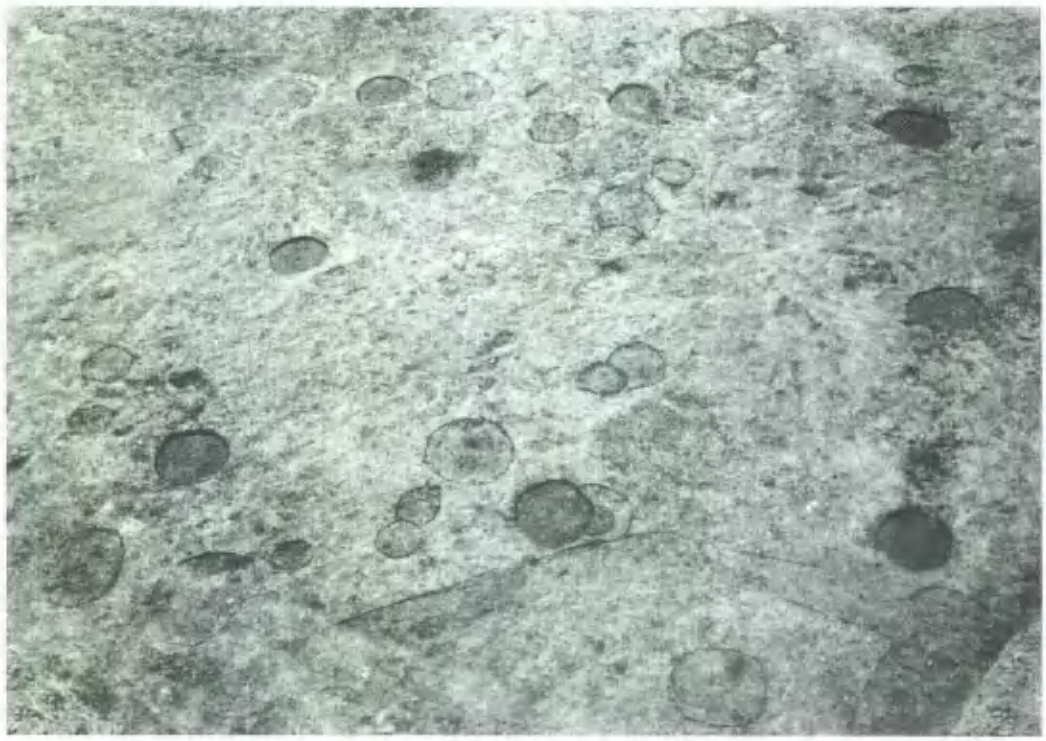
図版30

25号住居址　　（西より）



26号住居址　　（南より）　　鍛冶炉

27号住居址　　（北より）



建物1　　（東より）

図版32

建物2　　建物3　　（東より）

建物4　　（北より）

A地点溝　　（北より）

図版34

溝土器溜り　No. 5

溝土器溜り　No. 1

溝土層断面　No. 1

溝土層断面　No. 4

図版36

溝北部分　　（北より）

溝土層断面

土坑墓1
(2001)
検出状況
(南より)

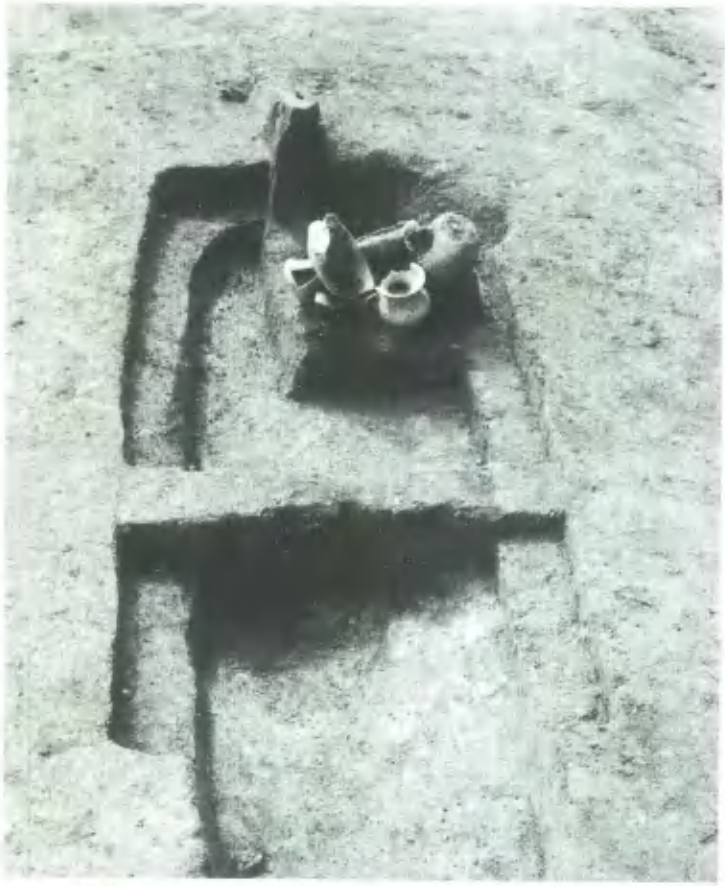
2001
(北より)

2001

図版38

2002　　（南より）

2009　円形周溝遺構　　（西より）

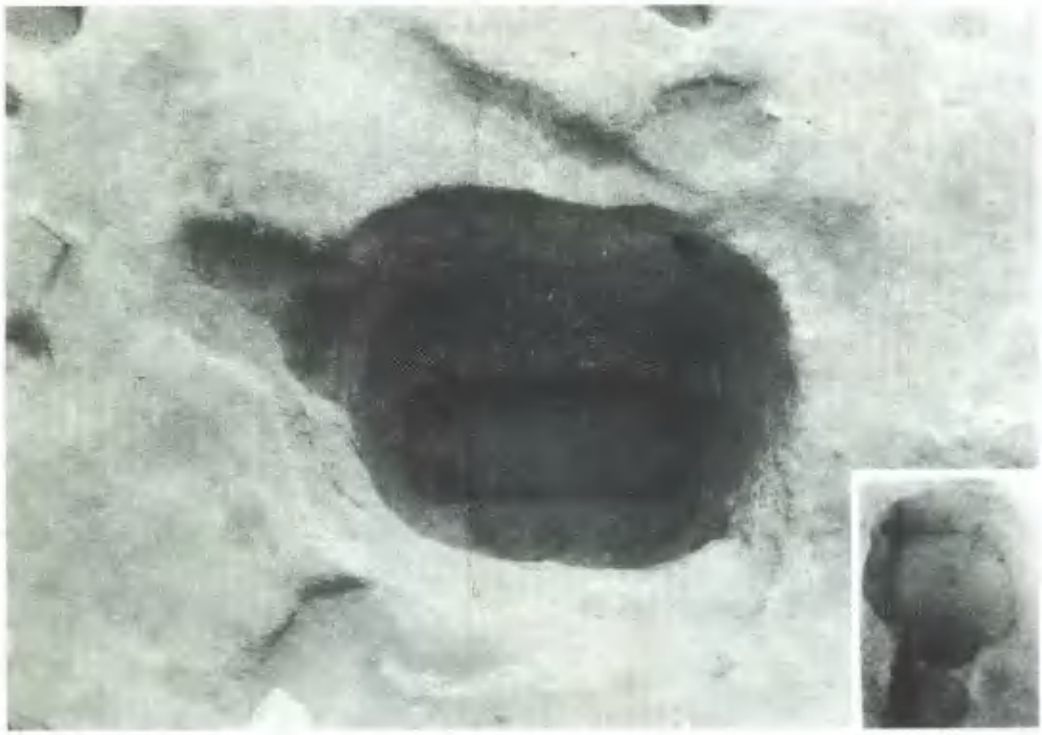


2008　（東より）

2008　遺物

図版40

土坑墓 2　2010　検出状況



2010　掘りあげ

石・土器除
去後の状況

土壙墓3　2018　検出状況

2018　掘りあげ

図版42

2016　弥生前期甕出土状況

2019　検出状況　（南より）

E地点 101－106　　（北より）

103・104　　（南より）

図版44

2020　検出状況　　（東より）

B地点　300i　　（南より）

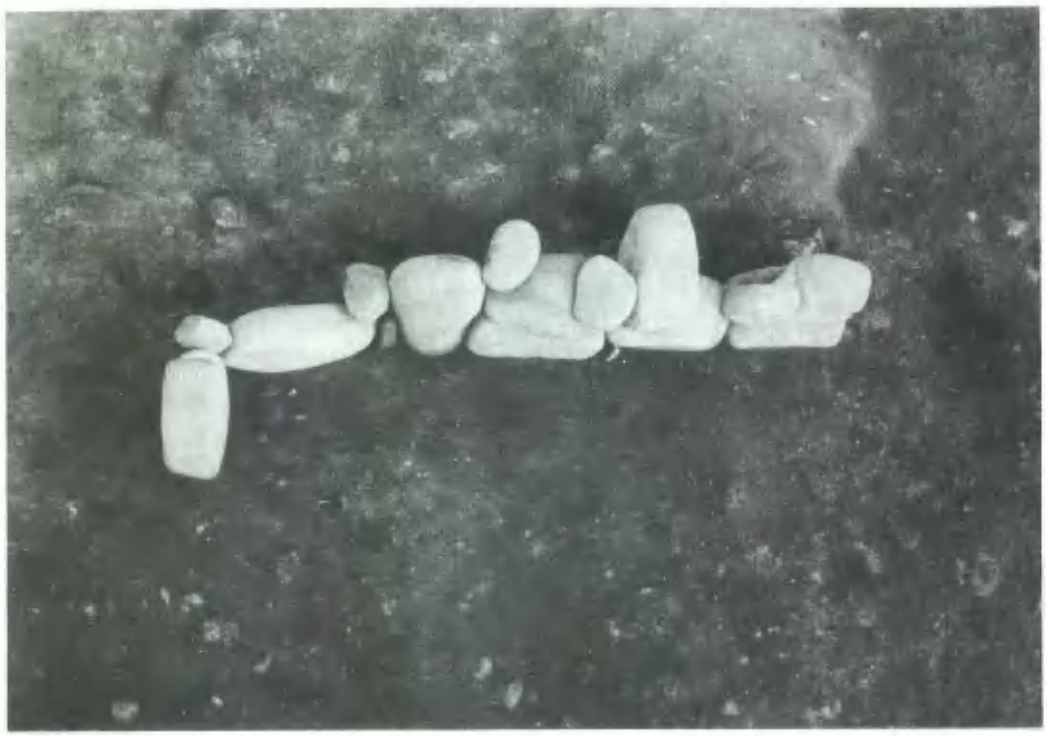
C地点　4301　　（西より）

C地点　4404　　（東より）

図版46

9号墳　（南より）

11号墳　　（西より）



11号墳

図版48

C地点
発掘風景

A地点
発掘風景

C地点
発掘風景

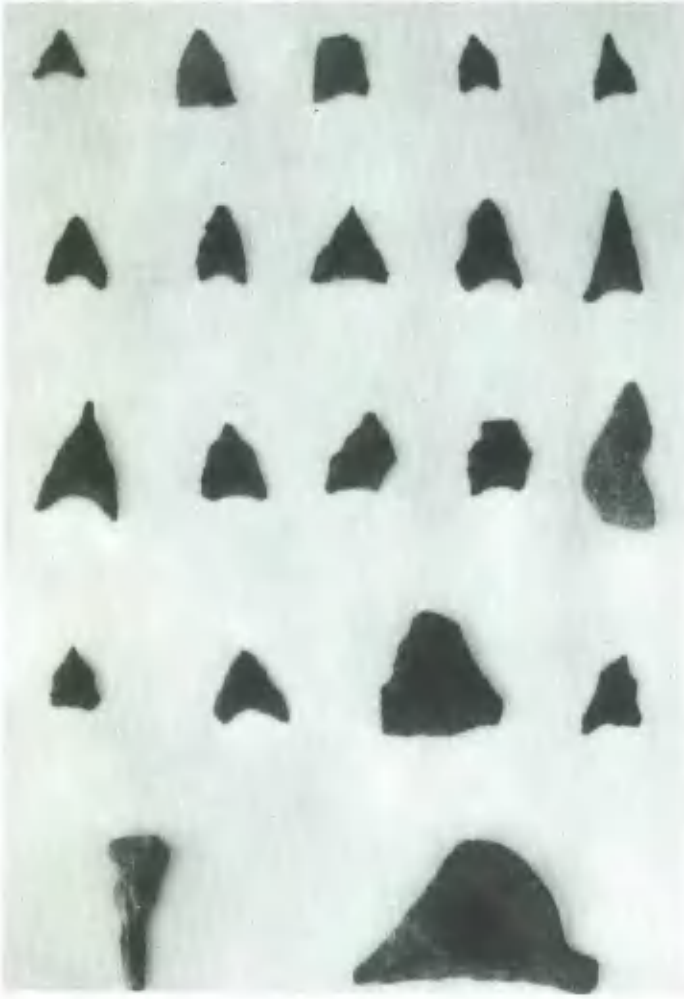
図版49

天神原付近の中国縦貫道　（昭和49年5月）

図版50

4号墳出土　変形文格規矩文鏡
直径9㎝

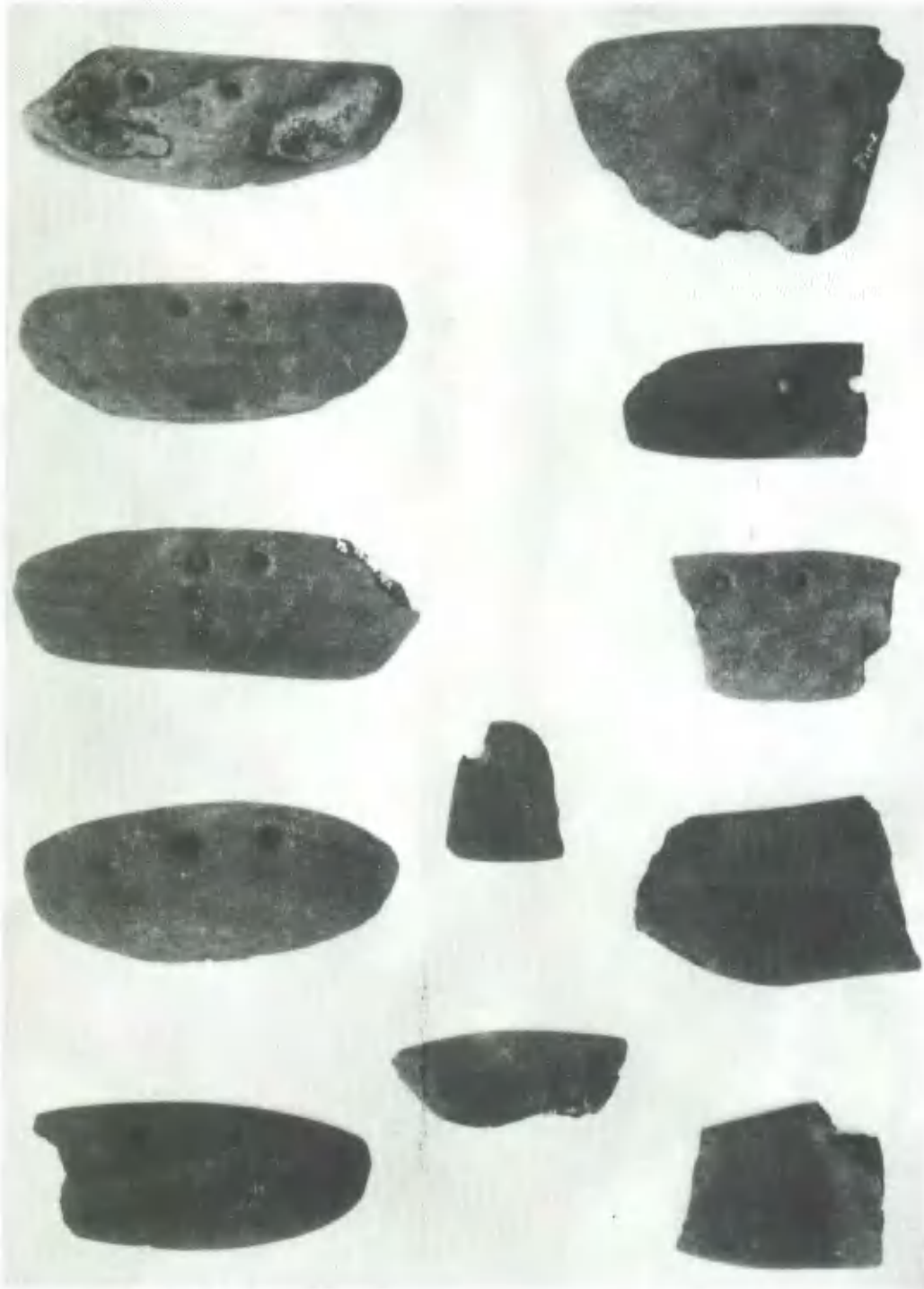
3号墳　周溝出土遺物
出土遺物1



4101

出土遺物2

図版52

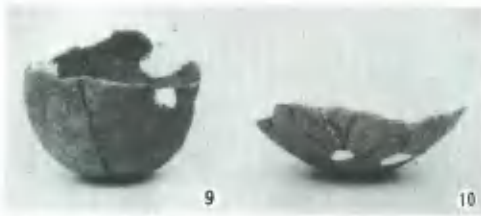


出土遺物3　石包丁

出土遺物 4　弥生前期　土器

図版54

出土遺物５　弥生時代前期土器片



出土遺物6　1－1号住居址　2－2号住居址　3・4－3号住居址
5－8号住居址　6－10－10号住居址

図版56

出土遺物７　１・２・３－12号住居址　４・５－13号住居址　６－９－14号住居址

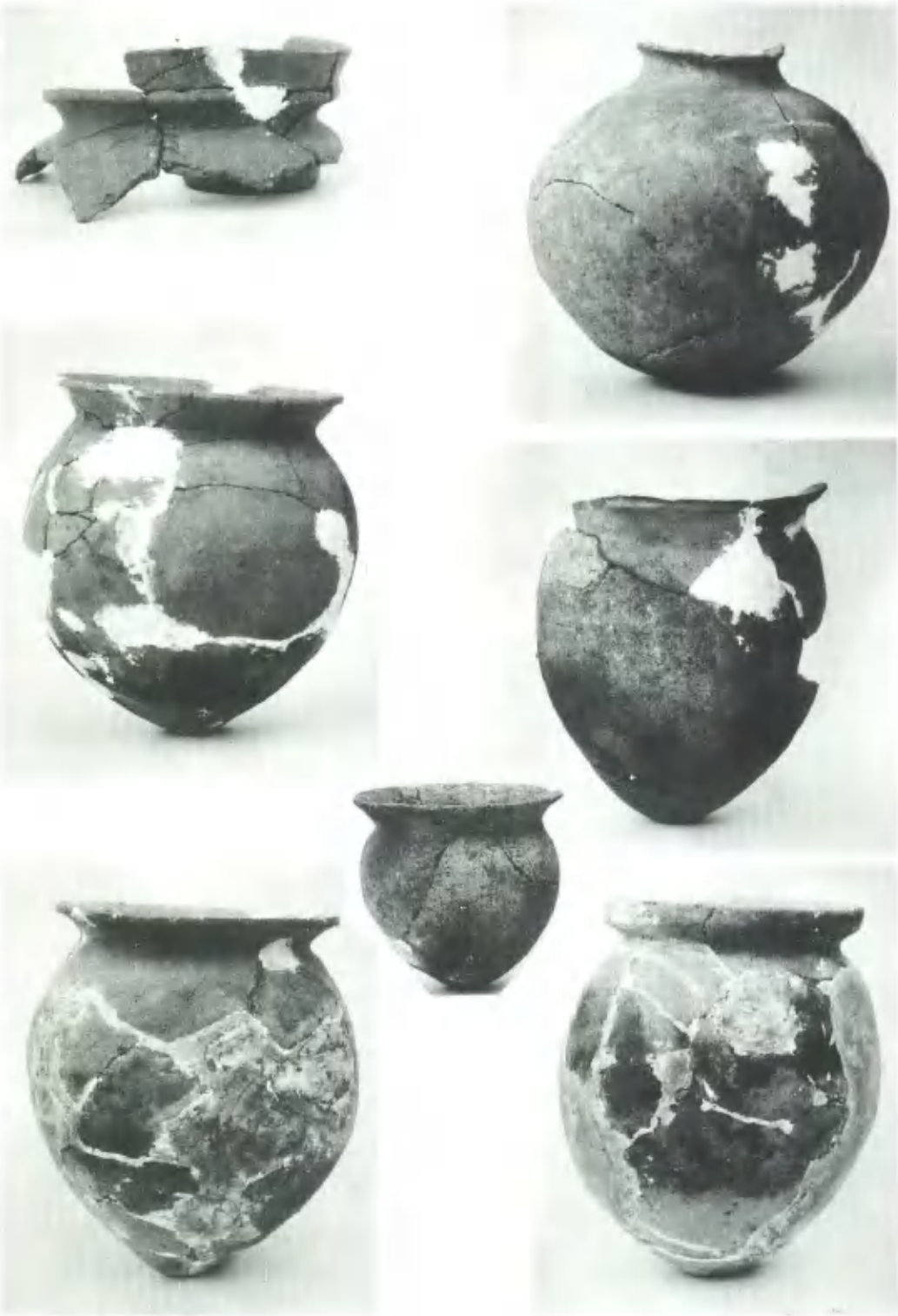
出土遺物8　1・2－15号住居址　3・4－17号住居址　6・7－21住居址　8－15－24号住居址　5－19号住居址

図版58

出土遺物 9

出土遺物10　溝

図版60



出土遺物11　溝

出土遺物12　溝

図版62

出土遺物13　溝

2010（土坑墓２）

2020

2001（土坑墓１）

2018（土坑墓3）

図版64

出土遺物15　1・2－2008　3・4－2015（10号墳）　5－2009
6－11号墳　7－B地点3001

出土遺物16　1～4－4401　5～7－4301

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(7)

中国縦貫自動車道
建設に伴う発掘調査 4

昭和50年3月　印　刷
昭和50年3月　発　行
発行　岡山県教育委員会

印刷　岡山県津山市椿高下38
作州日報印刷